

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

一括ダウンロード

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008433

国立民族学博物館

研究年報

National Museum of Ethnology

2015

目次

あいさつ	3	文献図書資料の収集・整理・利用状況	286
1 組織		民族学資料共同利用窓口	287
組織構成図	4	民族学研究アーカイブズの構築	288
運営組織	5	データベースの作成・利用状況	288
館内運営組織	5	[2-7 みんぱく施設の利用]	293
現員	6	博物館施設の利用状況	293
歴代館長・名誉教授	6	施設の整備状況	294
研究部教員の紹介	7	[2-8 受賞・特許]	294
・館長	8	受賞	294
・副館長	10	知的財産形成・特許出願など	294
・民族社会研究部	16	3 展示	
・民族文化研究部	44	入館者数	296
・先端人類科学研究部	74	本館展示	296
・研究戦略センター	94	特別展示・企画展示など	300
・文化資源研究センター	118	展示関連出版物およびプログラム	302
・国際学術交流室	145	4 国際連携と国際協力	
・梅棹資料室	145	海外研究機関との研究協力協定	306
・機関研究員	145	MINPAKU Anthropology Newsletter	310
・プロジェクト研究員	158	みんぱくフェローズ	311
・拠点研究員（人間文化研究機構地域研究推進センター・		国際研修博物館学コース	312
「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点）	162	国内研究機関等との研究連携、協力の推進	313
・客員教員（先端人類科学研究部・文化動態研究部門）	167	5 広報・社会連携	
・客員教員（先端人類科学研究部・応用民族学研究部門）	168	概観	316
・特別客員教員（先端人類科学研究部・社会環境研究部門）	170	国立民族学博物館要覧2015	318
・特別客員教員（先端人類科学研究部・文化動態研究部門）	172	ホームページ	318
・特別客員教員（先端人類科学研究部・応用民族学研究部門）	175	報道	318
・特別客員教員（文化資源研究センター・民族学応用教育研究部門）	187	月刊みんぱく	319
・外国人研究員客員（研究戦略センター・超領域研究部門）	189	みんぱくゼミナール	320
2 研究および共同利用		みんぱくウィークエンド・サロン	322
概観	200	研究公演	328
[2-1 みんぱくの研究]	201	みんぱく映画会	328
機関研究	201	博学連携	331
人類の文化資源に関するフォーラム型情報		その他の事業	332
ミュージアムの構築	205	ボランティア活動	333
共同研究	214	一般財団法人千里文化財団の事業	333
人間文化研究総合推進事業	247	6 研究戦略センター	
人間文化研究機構地域研究推進事業		研究戦略センターの設立の趣旨と経緯	340
「現代インド地域研究」	248	2015年度の活動概要	340
日本関連在外資料調査研究	253	7 文化資源研究センター	
研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、		文化資源研究センターの設置目的	342
研究フォーラム、国際研究集会への派遣	253	文化資源研究センターの研究事業	342
館長リーダーシップ経費による事業・調査	259	文化資源関連事業	342
民博研究懇談会	262	8 国際学術交流室	
[2-2 外部資金による研究]	263	設置目的	352
科学研究費補助金による研究プロジェクト	263	機能	352
受託事業	266	2015年度活動内容	352
民間などの研究助成金などによる研究活動	272	9 人間文化研究機構	
[2-3 研究成果の公開]	272	組織構成図	354
刊行物	272	運営組織	355
国立民族学博物館学術情報リポジトリ	275	10 総合研究大学院大学	356
学術講演会	276	彙報	360
[2-4 学会開催]	277	研究部の人事異動	360
学会開催	277	来館者抄	360
[2-5 研究員制度]	277	索引	364
外来研究員	277	利用案内	366
特別共同利用研究員	284		
[2-6 データの利用]	285		
標本資料および映像音響資料に関するデータ	285		

国立民族学博物館（みんぱく）は創設43年をむかえ、調査研究、博物館事業、大学共同利用機関の役割、大学院教育、そして広報・社会連携など、さまざまな活動を展開しております。2004年4月からは大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員となり、機構内の5機関と連携して人間と文化についての総合的研究を推進しています。

みんぱくは、世界の民族、社会や文化とこれらの変化などを研究対象とし、フィールドワークにもとづいて、文化人類学およびその関連研究分野の基礎的かつ理論的研究をおこなってきました。グローバル化によって、人類は生活や社会のしくみだけでなく価値観にいたるあらゆる面で未曾有の変化に直面しています。この動きの実際とプロセス、そして将来の方向性を現地での参与観察にもとづいて明らかにすることが文化人類学の今日的課題といえましょう。

文化人類学とその関連分野の国内外の研究拠点であるみんぱくは、調査研究の成果を国内外に発信するとともに現地の人びとや社会と共有し、ともに議論し、考える「フォーラム型」研究をめざしています。また、異文化をより深く理解するために、物質文化、生活様式、芸能・音楽などの資料や種々の情報取積も積極的に進め「博情館」としての役割をはたしています。現在、34万点の民族資料、7万点の映像・音響資料、そして66万点の文献図書資料を収蔵し、学界や一般の人びとにも公開しています。

2014年度からは、文化資源のデータベースをもとに、多言語化して世界に発信する情報ミュージアムをオンライン上に構築する「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを文科省の特別経費でスタートさせました。また、2008年度からの本館展示の新構築は、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、朝鮮半島、中国地域、日本の文化、音楽、言語、そしてインフォメーション・ゾーンを終え、2016年度に中央・北アジアとアイヌの文化展示替えて完成しました。

『研究年報』は、みんぱくの研究者の多方面にわたる研究調査から、国際研究集会、国際学術交流、大学院教育、社会貢献にいたる種々の活動とその成果について知っていただくために編集されました。本誌は大学共同利用機関としての活動の集大成といえます。一方、みんぱくのウェブサイトには、本誌の情報にくわえ、教員の研究活動、研究集会や展示を含め、種々の行事予定についての最新の情報を掲載し、『研究年報』の内容を補足しています。

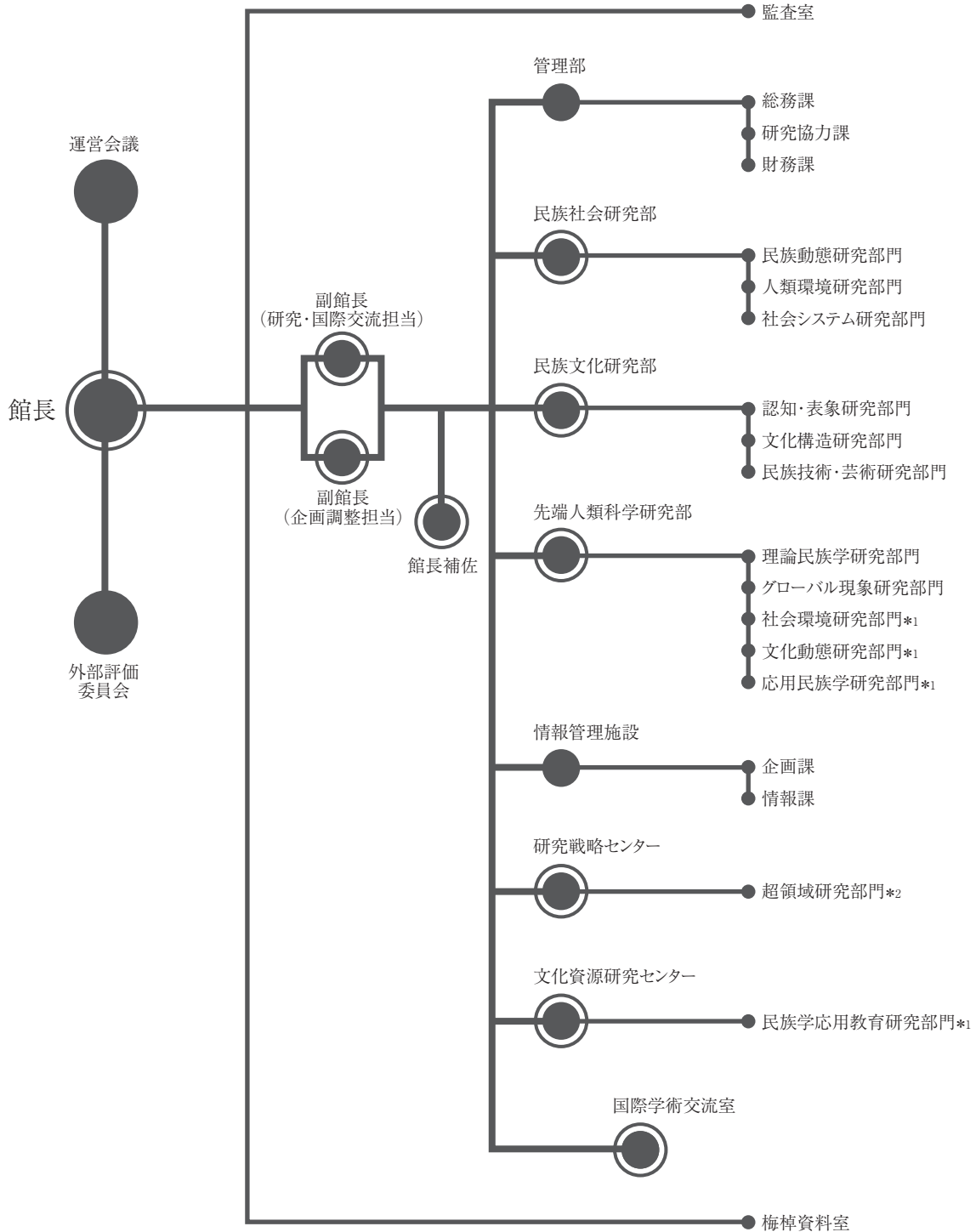
本誌によって、博物館機能をもった文化人類学とその関連分野の研究所および大学共同利用機関としての研究センターであるみんぱくの活動をご理解いただき、今後も本館にたいしてみなさまからのご助言とご支援をお願いする次第です。

2017年2月
国立民族学博物館長
須藤健一



1 組織

組織構成図 (2016年3月31日現在)



注) *1 客員研究部門
*2 外国人客員研究部門

運営組織 (2016年3月31日現在)

●運営会議

植野弘子	東洋大学社会学部教授*1
栗田博之	東京外国語大学総合情報 コラボレーションセンター長*2
栗本英世	大阪大学大学院人間科学研究科教授*1
富沢寿勇	静岡県立大学国際関係学部教授*3
松田 凡	京都文教大学総合社会学部教授*3
松田素二	京都大学大学院文学研究科教授*2
山梨俊夫	国立国際美術館長
吉岡政徳	神戸大学大学院国際文化学研究科教授*1
渡邊欣雄 (館内)	國學院大學文学部教授*2
池谷和信	民族文化研究部長*1*2*3
岸上伸啓	副館長 (研究・国際交流担当)*1*2
笹原亮二	総合研究大学院大学文化科学研究科 比較文化学専攻長 民族文化研究部教授*1
鈴木七美	研究戦略センター長*1*2*3
寺田吉孝	先端人類科学研究部長*1*2*3
西尾哲夫	民族社会研究部長*1*2*3
野林厚志	文化資源研究センター長*1*2*3
吉田憲司	副館長 (企画調整担当)*1*2 注) *1 人事委員会委員 *2 共同利用委員会委員 *3 研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達 淳	国立情報学研究所副所長
黒柳俊之	独立行政法人国際協力機構理事
小泉潤二	大阪大学特任教授
八村廣三郎	立命館大学情報理工学部特任教授
廣富靖以	公益財団法人りそなアジア・オセアニア 財団理事長
堀井良殷	公益財団法人関西・大阪21世紀協会 理事長
宮田亮平	東京藝術大学長
三輪嘉六	特定非営利活動法人文化財保存支援 機構理事長
山本真鳥	法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2016年3月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会	大学院委員会
福利厚生委員会	図書委員会
安全衛生委員会	学術情報リポジトリ委員会
ハラスメント防止委員会	情報システム委員会 (休止)
広報企画会議	情報システム整備委員会
機関研究運営会議	文化資源運営会議
刊行物審査委員会	国際研修博物館学コース運営委員会
研究出版委員会	施設マネジメント委員会
知的財産委員会	危機管理委員会
科学研究費補助金管理体制検討委員会	大規模災害復興支援委員会
「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点運営 委員会	フォーラム型情報ミュージアム委員会

現員 (2016年3月31日現在)

区 分	館長	教授	准教授	助教	事務職員・技術職員	計
館長	1					1
管理部					27	27
情報管理施設					20	20
研究部		16	13	3		32
研究戦略センター		5	4	2		11
文化資源研究センター		4	5	2		11
客員 (国内)		10	6			16
客員 (国外)*		4	5			9
計	1	39	33	7	47	127

注) 客員 (国外)*は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2016年3月31日現在)

●歴代館長

初 代/梅棹忠夫 (故人)	1974年 6月~1993年 3月
第2代/佐々木高明 (故人)	1993年 4月~1997年 3月
第3代/石毛直道	1997年 4月~2003年 3月
第4代/松園萬亀雄	2003年 4月~2009年 3月
第5代/須藤健一	2009年 4月~

●名誉教授

祖父江孝男 (故人)	1984年 4月 1日	石毛直道	2003年 4月 1日
岩田慶治 (故人)	1985年 4月 1日	栗田靖之	2003年 4月 1日
加藤九祚	1986年 4月 1日	杉田繁治	2003年 4月 1日
伊藤幹治 (故人)	1988年 4月 1日	熊倉功夫	2004年 4月 1日
中村俊亀智 (故人)	1988年 4月 1日	立川武藏	2004年 4月 1日
君島久子	1989年 4月 1日	田邊繁治	2004年 4月 1日
和田祐一 (故人)	1990年 4月 1日	藤井龍彦	2004年 4月 1日
垂水 稔 (故人)	1991年 4月 1日	山田陸男 (故人)	2004年 4月 1日
杉本尚次	1992年 4月 1日	江口一久 (故人)	2005年 4月 1日
梅棹忠夫 (故人)	1993年 4月 1日	大塚和義	2005年 4月 1日
大給近達 (故人)	1993年 4月 1日	松原正毅	2005年 4月 1日
片倉素子 (故人)	1993年 4月 1日	石森秀三	2006年 4月 1日
竹村卓二 (故人)	1994年 4月 1日	野村雅一	2006年 4月 1日
周 達生 (故人)	1995年 4月 1日	大森康宏	2007年 4月 1日
松澤員子	1995年 4月 1日	山本紀夫	2007年 4月 1日
大丸 弘	1996年 4月 1日	松園萬亀雄	2009年 4月 1日
友枝啓泰 (故人)	1996年 4月 1日	松山利夫	2010年 4月 1日
藤井知昭	1996年 4月 1日	長野泰彦	2011年 4月 1日
佐々木高明 (故人)	1997年 4月 1日	秋道智彌	2012年 4月 1日
杉村 棟	1997年 4月 1日	中牧弘允	2012年 4月 1日
和田正平	1998年 4月 1日	小林繁樹	2014年 4月 1日
清水昭俊	2000年 4月 1日	田村克己	2014年 4月 1日
黒田悦子	2001年 4月 1日	吉本 忍	2014年 4月 1日
崎山 理	2001年 4月 1日	久保正敏	2015年 4月 1日
端 信行	2001年 4月 1日	庄司博司	2015年 4月 1日
小山修三	2002年 4月 1日	八杉佳穂	2015年 4月 1日
森田恒之	2002年 4月 1日		

研究部教員の紹介 (2016年3月31日現在)

組織図に基づく現員一覧

館長		須藤健一		
副館長 (企画調整担当)		吉田憲司		
副館長 (研究・国際交流担当)		岸上伸啓		
研究部	職名・研究部門	教授	准教授	助教
民族社会研究部	研究部長	西尾哲夫		
	民族動態	關 雄二 朝倉敏夫 横山廣子 小長谷有紀 (併)	三島禎子	
	人類環境	印東道子 MATTHEWS, Peter J.		
	社会システム	韓 敏	佐藤浩司 宇田川妙子 太田心平	吉岡 乾
民族文化研究部	研究部長	池谷和信		
	認知・表象	森 明子	山中由里子	齋藤玲子
	文化構造	杉本良男 笹原亮二	新免光比呂 廣瀬浩二郎	藤本透子
	民族技術・芸術	竹沢尚一郎 出口正之	鈴木 紀	
先端人類科学研究部	研究部長	寺田吉孝		
	理論民族学	佐々木史郎 齋藤 晃	菊澤律子 飯田 卓	
	グローバル現象		丸川雄三 松尾瑞穂 卯田宗平	
研究戦略センター		鈴木七美 (センター長) 岸上伸啓 (副館長) 塚田誠之 平井京之介 樫永真佐夫	三尾 稔 丹羽典生 南 真木人 伊藤敦規	菅瀬晶子 河合洋尚
文化資源研究センター		野林厚志 (センター長) 吉田憲司 (副館長) 園田直子 信田敏宏	福岡正太 山本泰則 林 勲男 日高真吾 上羽陽子	川瀬 慈 寺村裕史
国際学術交流室		岸上伸啓 (室長) (併) 印東道子 (兼務) 韓 敏 (兼務) 齋藤 晃 (兼務) MATTHEWS, Peter J. (兼務)	菊澤律子 (兼務) 山中由里子 (兼務)	

1946年生。【学歴】埼玉大学教養学部卒（1969）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）修士課程修了（1972）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）博士課程単位取得満期退学（1975）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1975）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1986）、神戸大学国際文化学部教授（1993）、神戸大学国際文化学部長（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科長（2002）、神戸大学附属図書館長（2005）、神戸大学大学院国際文化学研究科教授（2007）、国立民族学博物館館長（2009）【学位】文学博士（東京都立大学 1986）、文学修士（東京都立大学 1972）【専攻・専門】社会人類学、オセアニアの社会と文化、海外移住、伝統政治と民主主義【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、南島史学会、生態人類学会、ニュージーランド学会

【主要業績】

[単著]

須藤健一

2008 『オセアニアの人類学——海外移住、民主化、伝統の政治』東京：風響社。

1989 『母系社会の構造——サンゴ礁の島々の民族誌』東京：紀伊国屋書店。

[編著]

須藤健一編

2012 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第2回石川榮吉賞

1985 第16回澁澤賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

伝統的航海術における呪術的力に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

星と波と風をたよりの伝統的航海術とカヌーを駆使して島間を行き来する人びとが今でもミクロネシアのサタワル島とその周辺の島じまに暮らしている。星の出没位置を利用するスターコンパスと西流する海流や北東からの貿易風など自然現象に規則性を見抜いて航海を实践する。乗り物は10m足らずのシングルアウトリガー・カヌー。科学的には不正確な方位と洋上の位置の割り出し技術、そして脆弱な舟による航海は常に危険を伴う。この危険性を除去する主要な方法が呪文と儀礼からなる呪術の力である。サタワルの航海者が航海において依拠してきた呪術的世界を明らかにすることが本年度の研究目的である。

・成果

呪文と儀礼の分析と解釈を中心に航海者のふるまいについての記述について研究を進めており、研究成果として『国立民族学博物館研究報告』にて公開する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

須藤健一

2015 「情報と地位の贈与・交換論——大工集団の贈答の分析」伊藤幹治・栗田靖之編『(ミネルヴァ・アーカイブズ)日本人の贈答』pp.203-233, 京都：ミネルヴァ書房（初版：1984年）。

[その他]

須藤健一

2015 「閉会の挨拶」『人間文化』22：43, 東京：人間文化研究機構。

2015 「初航海のふがいなさ」『月刊みんぱく』39(5)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年4月18日 招待講演「Cultural Anthropology Research and Museology at the National Museum of

- Ethnology, Japan] The First Global Creative Industries Conference, School of Modern Language and Cultures, Faculty of Arts, The University of Hong Kong, Hong Kong
- 2015年6月27日 招待講演「The Museum Activities in Recovery From Disaster: National Museum of Ethnology, Japan」第6回東北アジア民族文化フォーラム『無形文化遺産の保護、民族文化の変化と異文化交流』中央民族大学民族学社会学学院、北京
- 2015年10月15日 招待講演「21世紀の民族学博物館と博情館——文化資源研究の新展開」国際学術ワークショップ『民族學與歷史學的交會（民族学と歴史学の交錯）』台湾国立台湾歴史博物館、台北
- 2015年10月22日 招待講演「文化資源に関するForum型情報博物館の構築——民博の研究展開」浙江大学『東方論壇』第178回講演会、浙江大学、杭州
- ・研究講演
- 2015年4月27日 「博物館の多面的活動のすすめ——民博ミッション」「堺市博物館活性化戦略会議」堺市博物館、大阪
- 2015年8月1日 記念講演「柳田國男と民族学」「柳田國男生誕140年記念／柳田國男・松岡家記念館開館40周年記念 第36回山桃忌」福崎町エルデホール、兵庫
- 2015年12月6日 「“ふれあい”と文化創生の場としての博物館」文化講演会、佐渡国小木民俗博物館活性化実行委員会、佐渡中央会館、新潟
- ・広報・社会連携活動
- 2015年4月4日 「バラオの今——日本統治から70年」佐渡高校関西地区同窓会、国立民族学博物館
- 2015年5月13日 「星と風と波と——オセアニアの偉大な航海者」カレッジシアター「地球探検紀行」、あべのハルカス近鉄本店
- 2015年7月9日 「21世紀のみんぱく」第2回京都素交会、京都東山高台寺月真院
- 2015年10月6日 「21世紀を挑戦するみんぱく」神戸シルバーカレッジ、国立民族学博物館
- ・みんぱくウィークエンド・サロン
- 2015年11月1日 「オセアニアの食文化——タロイモとパンノキの果の料理」第403回みんぱくウィークエンド・サロン研究者と話そう
- ・館内研修
- 2015年4月15日 「みんぱく今昔物語」2015年度民博新任職員等研修
- 2016年1月22日 「“みんぱくのこれから”とわたしたち——プロパー職員との語らい」第2回みんぱくミーティング
- ◎調査活動
- ・海外調査
- 2015年6月26日～6月29日—中華人民共和国（中央民族大学民族学社会学学院、東北アジア民族文化研究所主催シンポジウムに参加及び招待講演）
- 2015年10月15日～10月18日—台湾（国立台湾歴史博物館との協定調印式及びワークショップに参加）
- 2015年10月21日～10月24日—中華人民共和国（浙江大学でのシンポジウムにおいて招待講演及び浙江大学「民博文庫」開室セレモニー参加）
- 2015年12月7日～12月9日—大韓民国（韓国国立民俗博物館特別展「韓日食博」開幕式典へ参加）
- 2016年1月27日～2月6日—オーストラリア、ニュージーランド（オーストラリア、ニュージーランドの大学訪問及び博物館視察）
- ◎社会活動・館外活動
- ・他の機関から委嘱された委員など
- 公益財団法人大阪府文化財センター評議員、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、金沢大学大学院人間社会環境研究科文化資源マネージャー養成プログラムアドバイザー、関西サイエンス・フォーラム理事、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員、独立行政法人国立美術館 国際美術館評議員、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、太平洋諸島学会理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、日本ニュージーランドセンター理事、公益財団法人日本博物館協会参与、NPO法人 パシフィカ・ルネサンス顧問、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員、第25回山片蟠桃賞審査委員、公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団助成事業選考委員長

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ]——— 副館長(研究・国際交流担当)、研究戦略センター教授

1958年生。【学歴】早稲田大学第一文学部社会学科卒(1981)、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了(1983)、マッギル大学人類学部博士課程中退(1989)【職歴】早稲田大学文学部助手(1989)、北海道教育大学教育学部函館校専任講師(1990)、北海道教育大学助教授(1992)、国立民族学博物館第1研究部助教授(1996)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1997)、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授(1998)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授(2004)、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授(2005)、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長(2006)、国立民族学博物館館長補佐(2008)、国立民族学博物館先端人類科学研究部長(2009)、国立民族学博物館研究戦略センター長(2012)、国立民族学博物館副館長(2013)【学位】博士(文学)(総合研究大学院大学文化科学研究科 2006)、文学修士(早稲田大学大学院文学研究科 1983)【専攻・専門】文化人類学 1) カナダ・イヌイットの社会変化、2) 都市在住のイヌイットの民族誌的研究、3) 先住民による海洋資源の利用と管理、4) 北アメリカ先住民【所属学会】日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族芸術学会

【主要業績】

[単著]

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。

[編著]

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

2007 第18回カナダ首相出版賞

1998 第9回カナダ首相出版賞(審査員特別賞)

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カナダ西部地域および中部地域における諸先住民文化の変化と現状に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、カナダ西部地域および中部地域における諸先住民文化の歴史的变化と現状について比較研究するとともに、同地域における先住民の文化資源資料に関する情報を吟味し、フォーラム型情報ミュージアムのコンテンツを作成することである。具体的には、下記のことを行う。

(1) カナダ西部地域および中部地域における諸先住民文化の変化と現状について、既存の民族誌や学術論文などの渉猟および現地調査の成果に基づき、比較研究を行う。

(2) プリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館やウミスタ文化センター、北海道立北方民族博物館ほかと連携しながら、国立民族学博物館や国内の他機関が収蔵している同地域の先住民の文化資源資料に関する情報を吟味し、その高度化を図る。

(3) (1)と(2)の研究成果を統合し、フォーラム型情報ミュージアムのコンテンツを作成するとともに、成果の一部を論文で発表する。

なお、本研究は、国立民族学博物館の「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトおよび2015年度科学研究費助成事業(基盤研究(A)・一般)「ネットワーク型博物館学の創成」(研究代表者：須藤健一)の一部として実施する。

・成果

本年度は、カナダ西部地域および中部地域における諸先住民文化の変化と現状についての研究を行った。既存の文献を渉猟するとともに、本館が収蔵する同地域の先住民文化に関連する標本資料の調査を実施した。その結果、カナダ極北地域の標本資料と比べると、カナダ西部地域および中部地域の標本資料は質量ともに見劣りがするが、1979年に本館が入手したルオンゴ・コレクションの中には、仮面や木箱など貴重な北西海岸先住民資料があることが明らかになった。これらの資料情報をフォーラム型情報ミュージアムから発信するための準備を行った。また、カナダのプリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館のReciprocal Research Networkに本館の標本資料情報を提供するための準備を、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトおよび2015年度科学研究費助成事業（基盤研究(A)・一般)「ネットワーク型博物館学の創成」(研究代表者：須藤健一)と連動させながら実施した。

研究成果の一部は、北海道立北方民族博物館主催の第30回北方民族文化シンポジウムで口頭報告するとともに、同シンポジウムの報告書(2016)や『国立民族学博物館調査報告(SER)』131号(2015)および132号(2015)において論文として出版した。また、本研究の成果を、2017年度秋季企画展「カナダにおける先住民文化の過去、現在、未来」(仮称)として公開するための準備を行った。

◎出版物による業績

[編著]

岸上伸啓編

2015 『環北太平洋地域の先住民文化』(国立民族学博物館調査報告 132) 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

[論文]

岸上伸啓

2015 「カナダにおける先住民アートの展開について」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』(国立民族学博物館調査報告 131) pp.23-44, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

2015 「環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する人類学研究の歴史と現状——日本人による文化人類学的研究を中心に」岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』(国立民族学博物館調査報告 132) pp.7-77, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

2016 「北アメリカ北方地域の先住民文化に関する文化人類学研究の動向——日本人人類学者および日本の博物館による貢献」北海道立北方民族学博物館編『第30回北方民族文化シンポジウム 網走——北方民族研究30年 成果・課題・博物館の役割』pp.31-38, 網走：北方文化振興協会。

2016 「北アメリカの現代先住民捕鯨に関する比較研究——アラスカのイヌピアットとカナダ・イヌイットのホッキョククジラ鯨の比較」『人文論究』85：63-75。[査読有]

Kishigami, N.

2016 Revival of Inuit Bowhead Hunts in Arctic Canada. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 16: 43-58. [査読有]

[その他]

岸上伸啓

2015 『極北の大地・グリーンランドの夜明け——The First Steps』(ヌカ・K・ゴッツフレッセン作・画, 沢広あや訳, 岸上伸啓監修) 東京：清水弘文堂書房。

2015 「みんなく食の民族誌 考える舌② 北極海の『クジラ料理』」『京都新聞』5月20日。

2015 「アラスカ・イヌピアット社会における使者祭りの変化と現状について」日本文化人類学会第49回研究大会準備委員会編『日本文化人類学会 第49回研究大会発表要旨集』pp.105, 大阪：日本文化人類学会第49回研究大会準備委員会(国立民族学博物館)。[査読有]

2015 「極北の祝宴——クジラを分かち合い、食べる喜び」『Vesta』100：22-24。

2015 「北アメリカの北太平洋沿岸地域と極北・亜極北地域の先住民文化に関する文化人類学研究の動向——日本人人類学者および日本の博物館・大学による貢献」『第30回北方民族文化シンポジウム(網走)発表要旨集(第30回記念大会 北方民族研究30年——成果・課題・博物館の役割)』pp.5, 網走：(財)北方文化振興協会・北海道立北方民族博物館。

2015 「みんなく食の民族誌 考える舌② イヌイットのアザラシ鯨」『京都新聞』10月21日。

2015 「カナダ研究と私」『日本カナダ学会関西地区便り』100：11。

- 2015 「北アメリカ北西海岸先住民のポトラッチ儀礼のダンス」国枝たか子編『世界のダンスII 百カ国を結ぶ舞踏文化』pp.80-81, 東京:不昧堂出版。
- 2015 「アラスカ先住民のドラム・ダンス」国枝たか子編『世界のダンスII 百カ国を結ぶ舞踏文化』pp.82-83, 東京:不昧堂出版。
- 2015 「国立民族学博物館における1990年代以降の北アメリカ先住民資料の収集について——イヌイット版画と北西海岸先住民版画を中心に」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』(国立民族学博物館調査報告 131) pp.17-20, 大阪:国立民族学博物館。[査読有]
- 2015 「はじめに」岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』(国立民族学博物館調査報告 132) pp.1-4, 大阪:国立民族学博物館。
- 2015 「おわりに」岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』(国立民族学博物館調査報告 132) pp.259, 大阪:国立民族学博物館。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 現代に生きる伝統① ホッキョククジラ猟」『毎日新聞』2月4日夕刊。
- 2016 「寒い地域に生きる人々 アラスカでの生活」『中学社会地理的分野』(文部科学省検定済教科書中学校社会科用) pp.20-21, 大阪:日本文教出版。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 現代に生きる伝統② クジラを解体するハンターたち」『毎日新聞』2月18日夕刊。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 現代に生きる伝統③ ナルカタックの様子」『毎日新聞』2月25日夕刊。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 現代に生きる伝統④ ドラムダンス」『毎日新聞』3月3日夕刊。
- 2016 「グリーンランドとアイスランドの捕鯨」小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』pp.233-238, 東京:明石書店。
- 2016 「アイスランドとグリーンランドの現代芸術——音楽・映画・文学」小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』pp.249-253, 東京:明石書店。
- 2016 「グリーンランドの音楽(コラム⑥)」小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』pp.270-272, 東京:明石書店。
- 2016 「日本におけるグリーンランド展示——北海道立北方民族博物館と国立民族学博物館」(山田祥子との共著)小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』pp.375-379, 東京:明石書店。
- 2016 「息子に「おばあちゃん」(カナダ, イヌイット)」岩波書店辞典編集部編『世界の名前』(岩波新書) pp.142-144, 東京:岩波書店。

Kishigami, N.

- 2015 A Comparative Study of Contemporary Indigenous Whale Hunts in North America. Abstract of Session 42, CHAGS 11. (September 9, 2015) http://chags.univie.ac.at/fileadmin/user_upload/DOEVL_events/Kongressservice/Chags_Final/ChagsPDF/Session42.pdf
- 2015 'Inuit in Urban Centers: A Case Study from Montreal, PQ, Canada' In The Japan Studies Association of Canada (ed.), Programme/Abstract of 2015 Integrated International Conference of the Japan Studies Association of Canada (JSAC), Japanese Association for Canadian Studies (JACS), and Japan-Canada Interdisciplinary Research Network (JCIRN), pp.34. Vancouver: The Japan Studies Association of Canada.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2016年2月11日 「民博のフォーラム型情報ミュージアム構想」国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年4月11日 「「氷の島」に生きる人びと——グリーンランド・イヌイットの歴史と文化」[第111回国立民族学博物館友の会東京講演会] モンベル渋谷ビル5F サロン
- 2015年4月30日 「The Impact of Climate Change on Aboriginal Subsistence Whaling in Northwest Alaska: Inupiat Whalers, Bowhead Whales and Oil/Gas Development.' Session B8: From Human Security to Geopolitical Dynamics in the Global Arctic: The Global Implications of Rapid

Environmental, Economic, and Societal Change. The Fourth International Symposium on the Arctic Research (ASSW 2015), Toyama International Conference Center, Toyama, Japan

2015年5月21日 'Inuit in Urban Centers: A Case Study from Montreal, PQ, Canada.' 2015 Integrated International Conference of the Japan Studies Association of Canada (JSAC), Japanese Association for Canadian Studies (JACS), and Japan-Canada Interdisciplinary Research Network (JCIRN) at Embassy of Canada in Tokyo

2015年5月31日 「アラスカ・イヌピアット社会における使者祭りの変化と現状について」日本文化人類学会第49回研究大会、大阪国際交流センター

2015年9月9日 'A Comparative Study of Contemporary Indigenous Whale Hunts in North America.' Session 42 "Aboriginal Whaling and Identity in the Twenty-First Century" of CHAGS 11, University of Vienna, Austria

2015年10月24日 「北アメリカの北太平洋沿岸地域と極北・亜極北地域の先住民文化に関する文化人類学研究の動向：日本人類学者および日本の博物館・大学による貢献」第30回北方民族文化シンポジウム網走「第30回記念大会 北方民族研究30年——成果・課題・博物館の役割」、オホーツク・文化交流センター、網走

・その他

2015年7月31日 「グリーンランドの人びとの暮らし」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」

2016年1月15日 「地球温暖化とイヌイット」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」

2016年2月26日 「カナダ先住民のアート——イヌイットと北西海岸先住民の版画と彫刻」園田・みんぱく連携講座「世界の造形・芸能にみる“美”の文化」園田女子学園大学生

◎調査活動

・海外調査等

2015年8月3日～8月22日—カナダ（カナダ・イヌイットの捕鯨に関する調査）

2015年9月5日～9月13日—オーストリア（ウィーン大学で開催された第11回狩猟採集社会国際会議（CHAGS 11）への出席と研究発表）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

比較社会研究特論Ⅱ（前期）、比較社会研究演習Ⅱ（後期）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

第23期日本学術会議連携会員（地域研究）、第23期日本学術会議地域研究多文化共生部会幹事、第26期日本文化人類学会理事、日本カナダ学会理事、民族芸術学会理事、2015年度濫澤賞選考委員長、京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）共同研究課題選考委員、北極域研究推進プロジェクト推進評議会委員、北海道立北方民族博物館研究協力員、Japanese Review of Cultural Anthropology 編集委員、Journal of Anthropological Research of the Associate Editor。

◎学会の開催（民博が開催校）

日本文化人類学会大49回研究大会、副実行委員長、5月30日～31日、大阪国際交流センター

吉田憲司 [よしだ けんじ] ————— 副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

1955年生。【学歴】京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）【職歴】ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター長（2006）、放送大学客員教授（2010）国立民族学博物館副館長（2015）【学位】学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族芸術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、

【主要業績】

[単著]

吉田憲司

- 2014 『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。
1999 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。
1992 『仮面の森——アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

- 2004 第1回木村重信民族藝術学会賞
2000 第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）
1993 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。本研究は、文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を実践的に考究することを目的としている。

・成果

本年度は、過去30年間調査を継続してきた南部アフリカ、チェワ社会における文化の伝統とその創造的継承の実態について、1月から2月にかけて現地調査を実施するとともに、その一連の成果を取りまとめ、『仮面の世界をさぐる——アフリカとミュージアムの往還』（臨川書房、2016）を刊行した。

また、文化遺産の表象の新たな手法に関する研究成果を反映して実現した展示、「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」を郡山市立美術館【会期：2015年6月27日～8月23日】にて、「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」展を東京藝術大学大学美術館【会期：2015年10月17日～11月23日】にて巡回開催し、文化の表象の問題と可能性を展示の実践を通じて考究した。

◎出版物による業績

[単著]

吉田憲司

- 2016 『仮面の世界をさぐる——アフリカとミュージアムの往還』（フィールドワーク選書19）京都：臨川書店。

[編著]

吉田憲司編著

- 2016 『武器をアートに——モザンビークにおける平和構築（増補版）』京都：中西印刷。

[論文]

吉田憲司

- 2015 「人類学の視点から見る仮面——仮面という装置が明かす人類の普遍性」神戸女子大学古典芸能研究センター編『能面を科学する——世界の仮面と演劇』pp.151-171, 東京：勉誠出版。
2015 「人類学からみた『イメージ人類学』」『言語文化研究』27(4)：11-20, 京都：立命館大学国際言語文化研究所。

[その他]

吉田憲司

- 2015 「博物館建設競争」『毎日新聞』8月13日夕刊。
2016 「旅・いろいろ地球人 文化の創造と継承① 伝統の祭りの創成競争」『毎日新聞』3月10日夕刊。
2016 「旅・いろいろ地球人 文化の創造と継承② 父の遺産の返還運動」『毎日新聞』3月17日夕刊。

2016 「旅・いろいろ地球人 文化の創造と継承③ 生活に根ざす黒川能」『毎日新聞』3月24日夕刊。

2016 「旅・いろいろ地球人 文化の創造と継承④ 新たな伝統の誕生」『毎日新聞』3月31日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2015年9月9日～12日 招待講演「生活文化と博物館」国立台北藝術大学博物館研究所、台北

・展示

2015年6月27日～2015年8月23日 「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」郡山市立美術館、郡山

2015年10月17日～2015年11月23日 「武器をアートに」東京藝術大学、東京

・広報・社会連携活動

2015年5月27日 「シリーズのねらい」（連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル——世界の『民芸』開催にあたって）、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1F

2015年7月22日 「武器をアートに——アフリカ・モザンビークにおける平和構築の営み」カレッジシアター『地球探検紀行』あべのハルカス近鉄本店

2015年8月8日 「イメージの力——みんぱくのコレクションが語るもの」郡山市立美術館、郡山

◎調査活動

・国内調査

2015年4月19日～4月20日—東京都美術館（博物館資料を通じた歴史表象の動向に関する調査）

2015年4月23日～4月26日—新潟日報メディアシップ、小俣集落、村上市町屋地区（民族藝術学会理事会、第31回大会に参加したのち、出羽街道・村上地区における文化遺産の継承の動向調査）

2015年5月20日—東京国立博物館（文化遺産についての研究動向調査）

2015年5月23日～5月24日—犬山国際観光センター“フロイデ”（日本アフリカ学会第52回学術大会参加によるアフリカ研究動向の調査）

2015年6月20日～6月22日—郡山市立美術館（巡回展「イメージの力」の設営及び展示表象の実践的研究）

2015年6月25日～6月28日—郡山市立美術館、野口英世記念館（日本国内におけるアフリカの文化遺産の表象に関する調査）

2015年7月31日～8月1日—九州国立博物館、福岡市美術館（国内におけるアフリカの文化遺産の表象に関する調査）

2015年8月7日～8月9日—郡山市立博物館（巡回展「イメージの力」に関する展示表象の実践的研究）

2015年10月13日～10月16日—東京藝術大学（「武器をアートに」展にあわせ、国内におけるアフリカ文化遺産の表象と受容に関する調査）

・海外調査

2015年9月9日～9月12日—台湾（「生活文化と博物館」の研究に向けての学術協力）

2015年11月25日～12月9日—イギリス（スイスにおいて開催される日本古美術展にみる日本観に関する基礎的研究及びイギリスにおける拠点博物館との学術ネットワーク構築と関連資料調査）

2016年1月7日～1月24日—ザンビア（ザンビアにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成についての調査）

◎大学院教育

主任指導教員（5人）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

文化遺産国際コンソーシアム アフリカ分科会会長、UCLA *African Arts* Consulting Editor、ICOM 大会招致準備委員

・非常勤講師

沖縄県立芸術大学「民族芸術学特論」（集中講義）

民族社会研究部

西尾哲夫 [にしお てつお] 部長 (併) 教授

1958年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒 (1981)、京都大学大学院文学研究科修士課程言語学専攻修了 (1984)、京都大学大学院文学研究科博士後期課程言語学専攻満期退学 (1987) 【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手 (1989)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授 (1994)、国立民族学博物館第2研究部助教授 (1996)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授 (1998)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (1998)、国立民族学博物館研究戦略センター助教授 (2004)、国立民族学博物館民族社会研究部教授 (2006)、国立民族学博物館民族文化研究部長 (2008)、国立民族学博物館研究戦略センター長 (2011)、国立民族学博物館副館長 (2012) 民族社会研究部長 (2015) 【学位】文学博士 (京都大学大学院文学研究科 2005)、言語学修士 (京都大学大学院文学研究科 1984) 【専攻・専門】言語学・アラブ研究 1) アラブ遊牧民の言語人類学的研究、2) アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究 【所属学会】日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

西尾哲夫

- 2013 『ヴェニス商人の異人論——人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。
- 2011 『世界史の中のアラビアンナイト』(NHK ブックス) 東京：NHK 出版。
- 2007 『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

- 2011 第28回田邊尚雄賞 (東洋音楽学会)
- 1992 オリエンツ学会奨励賞
- 1992 新村出記念財団研究助成賞
- 1992 流沙海西奨学会賞

【2015年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

アラブ世界の言語社会的位相と文学伝統の変容

・研究の目的、内容

2010年、エジプト検察当局は、イスラーム系弁護士団体による「アラビアンナイト発禁処分申し立て」を「古くから読まれており芸術家にも影響を与えてきた」という理由で却下した。近世エジプトでは、都市部中流層の台頭などによる中間アラビア語の誕生にともない、中世シリアの伝承物語集に民間説話が付加されて現在のアラビアンナイトが成立した。この過程ではキリスト教徒も関与しており、挿絵入りエジプト系写本が新たに発見された。近世エジプト系写本の物語および言語分析を通し、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また、中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられるアラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

・成果

- ①著書として、『言葉から文化を読む——アラビアンナイトの言語世界』(フィールドワーク選書、臨川書店、2015)を刊行した。
- ②研究発表として、「アラブ世界の言語社会的位相と個人空間の再世界化」国立民族学博物館共同研究(代表者・斎藤剛・神戸大学准教授)(於・国立民族学博物館、2015年10月18日)をおこなった。また、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究推進事業」キックオフ・国際シンポジウム「中東における「民衆文化」の編成と「民衆」概念の再検討」において、「アラビアンナイトは民衆文学か?——アラブ世界の言語社会的位相からみた「民衆」概念」(主催・人間文化研究機構、於・国立民族学博物館、2016年2月27日)の発表をおこなった。

- ③一般向けの研究広報として、「なぜ『イスラムの語源は平和』という誤解が流布するのか?——マスコミと御用学者の功罪」(みんぱくウィークエンド・サロン、2015年5月31日)を講義した。また、毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」に「アラビアンナイト断章」と題して4回にわたって連載した。
- ④研究成果の社会還元として、劇団四季によるブロードウェイミュージカル「アラジン」の日本公演に協力した。
- ⑤科学研究費助成事業(基盤研究(A))「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」(代表・西尾哲夫)による国内調査ならびに文献調査をおこなった。
- ◎出版物による業績
- [単著]
- 西尾哲夫
2105 『言葉から文化を読む——アラビアンナイトの言語世界』212p。(フィールドワーク選書15) 京都:臨川書店。[書評有:朝日新聞(2015年9月14日夕刊)]
- [その他]
- 西尾哲夫
2015 「アラジン、世界を駆ける」劇団四季『ディズニー・アラジン (Broadway's New Musical Comedy)』公演パンフレット, pp.32-35, 5月24日。
2015 「旅・いろいろ地球人 アラブの美德」『毎日新聞』7月16日夕刊。
2015 「みんぱく 食の民族誌 考える舌②③ 砂漠のバター」『京都新聞』11月18日。
2016 「『砂漠の船』の乗り心地」『月刊みんぱく』40(1):10-11。
2016 「旅・いろいろ地球人 アラビアンナイト断章① 写本をめぐる旅」『毎日新聞』1月7日夕刊。
2016 「旅・いろいろ地球人 アラビアンナイト断章② 戦火のシンドバッド」『毎日新聞』1月14日夕刊。
2016 「旅・いろいろ地球人 アラビアンナイト断章③ 幻の木馬」『毎日新聞』1月21日夕刊。
2016 「旅・いろいろ地球人 アラビアンナイト断章④ 墓がとりもつ縁」『毎日新聞』1月28日夕刊。
2016 「クレオパトラの眼 エジプト美女列伝第1回」『ベリーダンス・ジャパン』35:100-101, 2月29日。
2016 展示図録解説「文字ハンター中西亮が遺したもの」『文字の博覧会——旅して集めた“みんぱく”中西コレクション』(LIXIL ギャラリー) pp.2-3, 3月15日。
- ◎口頭発表・展示・その他の業績
- ・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告
2016年2月27日 「アラビアンナイトは民衆文学か?——アラブ世界の言語社会的位相からみた「民衆」概念」人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究推進事業」キックオフ・国際シンポジウム「中東における「民衆文化」の編成と「民衆」概念の再検討」(主催:人間文化研究機構, 国立民族学博物館)
- ・共同研究会での報告
2015年10月18日 「アラブ世界の言語社会的位相と個人空間の再世界化」『個—世界論:中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム』国立民族学博物館
- ・みんぱくウィークエンド・サロン
2015年5月31日 「なぜ『イスラムの語源は平和』という誤解が流布するのか?——マスコミと御用学者の功罪」第385回みんぱくウィークエンド・サロン研究者と話そう
- ◎大学院教育(館内専任教員のみ)
特別共同利用研究員の研究指導教員(1名)
- ◎上記以外の研究活動
科学研究費助成事業(基盤研究(A))「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」研究代表者、科学研究費助成事業(基盤研究(B))「中東・北アフリカ地域における音文化の越境と変容に関する民族音楽学的研究」(研究代表者:水野信男・兵庫教育大学・名誉教授)・研究分担者
- ◎社会活動・館外活動等
- ・他の機関から委嘱された委員など
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員、日本学術振興会科学研究費審査委員
- ・非常勤講師
京都大学文学部「アラブ語」

朝倉敏夫 [あさくら としお] ————— 教授

1950年生。【学歴】武蔵大学人文学部社会学科卒（1974）、明治大学大学院政治経済学研究科修士課程修了（1977）、明治大学大学院政治経済学研究科博士後期課程満期退学（1985）【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手（1988）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2006）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2008）国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2010）【学位】政治学修士（明治大学大学院政治経済学研究科 1977）【専攻・専門】社会人類学、韓国社会論【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、韓国文化人類学会

【主要業績】

[単著]

朝倉敏夫

2005 『世界の食文化1 韓国』東京：社団法人農山漁村文化協会。

[編著]

朝倉敏夫編

2003 『「もの」から見た朝鮮民俗文化』東京：新幹社。

[共編]

朝倉敏夫・嶋 陸奥彦編

1998 『変貌する韓国社会——1970～80年代の人類学調査の現場から』東京：第一書房。

【受賞歴】

2013 大韓民国玉冠文化勲章

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「食」の文化人類学——日韓比較

・研究の目的、内容

韓国の食文化について、日本の食文化との比較を通して考察する。

この50年間の日韓における食文化の変化を概観し、日韓における食の世界について、食器、台所といった物質文化とともに、食の思想、食と人生儀礼、食と歳時風俗など、食の背景にある精神文化について考察した。

・成果

2015年度に開催した特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」において、その研究成果を展示するとともに、図録として『韓国食文化読本』を刊行した。

展示および図録の作成にあたって、韓国国際文化財団、日韓文化交流基金からの助成を受けた。

◎出版物による業績

[論文]

朝倉敏夫

2015 『コリアン社会の変貌と越境』228p, (フィールドワーク選書17) 京都：臨川書店。

朝倉敏夫・林史樹・守屋亜記子

2015 『韓国食文化読本』224p, 大阪：国立民族学博物館。

[その他]

朝倉敏夫

2015 「みんぱく 食の民族誌 考える舌⑧ 韓国の『トンカス』」『京都新聞』7月8日。

2015 「『韓日食博』のいきさつとねらい」『月刊みんぱく』3(9)：2-3。

2015 「朝鮮半島の文化」ビデオテーク作品の制作と焼酎のアルコール度数『みんぱく e-news』171号, 9月1日。

2015 「『食』の文化遺産——和食とキムジャン」『月刊みんぱく』39(10)：16-17。

2015 「食がつなぐ日本と韓国の50年」『栄養と料理』81(10)：156-157。

- 2015 「旅・いろいろ地球人 韓国の食① 赤だけでない料理いろいろ」『毎日新聞』10月1日。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 韓国の食② オノマトペ」『毎日新聞』10月8日。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 韓国の食③ 混ぜて分かちあう」『毎日新聞』10月15日。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 韓国の食④ ハングル」『毎日新聞』10月22日。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 韓国の食⑤ キムチとキムウチ」『毎日新聞』10月29日。
- 2015 「みんなく世界の旅 韓国① 似ているからこそちがいがわかる」『毎日小学生新聞』11月14日。
- 2015 「みんなく世界の旅 韓国② 今年もそろそろ『キムジャン前線』」『毎日小学生新聞』11月21日。
- 2015 「みんなく世界の旅 韓国③ 心身共にきたえられる韓国の格闘技」『毎日小学生新聞』11月28日。
- 2015 「みんなく世界の旅 韓国④ 給食でいろいろな試み」『毎日小学生新聞』12月5日。
- 2015 Minpaku's Joint Research Projects on Korean Society: History and Accomplishments, *MINPAKU Anthropology Newsletter* 41: 1-2.
- 2015 Food Culture in Korea and Japan: The Tastes of NANUM and OMOTENASHI, *MINPAKU Anthropology Newsletter* 41: 13.
- 2015 「『韓日食博』におけるカリグラフィー・ワークショップ」『日韓文化交流基金NEWS』76:7。
- 2016 「『ケンカ』のすすめ」『月刊みんなく』40(3):10-11。
- ◎映像音響メディアによる業績
- ・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修
[ビデオテーク]
 - 2015 江原大学校チーム番組番号 2813, 8031 『江原道のソバ料理』
 - 2015 安東大学校チーム番組番号 2814, 8032 『自動車告祀：交通安全を願う韓国人』
 - 2015 梨花大学校チーム番組番号 2815, 8033 『韓国の初誕生祝い』
- ◎口頭発表・展示・その他の業績
- ・みんなくゼミナール
 - 2015年9月19日 朝倉敏夫・大野木啓人・佐野睦夫・金晃均「博物館は食をどう展示するか」第448回みんなくゼミナール
 - ・みんなくウィークエンド・サロン
 - 2015年8月30日 「日本の焼肉文化考」第396回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう
 - 2015年11月8日 「石毛さんに聞く——日韓の食文化研究」第404回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう
 - ・研究講演
 - 2015年4月10日 「韓国人にとってご飯とは何か」フロンティア3000研究会
 - 2015年5月8日 「食文化って何？——その研究について」兵庫県立伊丹高校スーパーグローバルハイスクール事業
 - 2015年5月14日 「韓国の食文化——モノの見方」京都学園高校
 - 2015年5月20日 「食文化領域における体系的な高等教育の可能性と必要性——管見的展望」立命館大学
 - 2015年6月9日 「和食と食文化研究」神戸シルバーカレッジ
 - 2015年7月31日 「食文化を通して見る韓日比較——ご飯の食べ方」韓国文化院、東京
 - 2015年9月4日 「民博夜話 韓国のごはん」吹田歴史文化まちづくりセンター浜屋敷、吹田
 - 2015年9月13日 みんなく×MBSラジオ presents「『韓日食博』を極める！」国立民族学博物館
 - 2015年9月19日 ワークショップ「食のオノマトペとカリグラフィー」国立民族学博物館エントランスホール
 - 2015年9月28日 「『韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち』への思い」全日本博物館学会2015年度第3回研究会・JMMA 近畿支部第3回研究会
 - 2015年10月20日 「“薬食同源”の韓国料理」産経新聞ウェブサイト
 - 2015年10月27日 「コメント『医食同源——東洋と西洋の視点』」ル・コルドンブルー×国立民族学博物館×立命館大学 シンポジウム「食の未来」立命館大学
 - 2015年11月26日 「日韓の食文化比較」総研大－UST 共同セミナー
 - 2015年12月2日 「韓国のお菓子事情」千里文化財団佐賀研修旅行
- ◎調査活動
- ・海外調査
 - 2015年4月20日～4月22日 大韓民国（特別展「韓日食博」の事前協議）

2015年7月9日～7月12日一大韓民国（「朝鮮半島の文化」に関する映像作品の作成についての研修会に参加）
2015年7月26日～7月28日一大韓民国（特別展「韓日食博」資料点検・搬送）
2015年10月15日～10月17日一中華人民共和国（第5回亞洲食学論壇に参加及び第6回開催にかかる事前協議）
2015年11月19日～11月21日一大韓民国（特別展「韓日食博」資料の返却及び点検）
2015年12月7日～12月12日一大韓民国（韓国国立民俗博物館特別展開幕式典へ参加及びフォーラム型ミュージアムにかかる協議）
2016年2月4日～2月6日一大韓民国（韓国国立民俗博物館における展示方法等に関する調査研究）
2016年2月15日～2月17日一大韓民国（「食の展示」にかかる会議に参加）
2016年2月20日～2月23日一大韓民国（韓国国立民俗博物館においてフォーラム型情報ミュージアムにかかる調査研究）
2016年3月10日～3月12日一大韓民国（韓国国立民俗博物館からの特別展貸し出し資料の返却作業）

◎大学院教育

・主任指導教員

2人

・特別共同利用研究員の研究指導教員

1人

・論文審査

博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員

高麗美術館理事

・非常勤講師

神戸女子大学「衣・食・住Ⅰ」、「世界の食文化」

印東道子 [いんとう みちこ] ————— 教授

【学歴】東京女子大学文理学部史学科卒（1976）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部修士課程修了（1982）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部大学院博士課程修了（1988）【職歴】東京女子大学文理学部史学科研究助手（1976）、北海道東海大学国際文化学部助教授（1988）、北海道東海大学国際文化学部教授（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2004）、放送大学客員教授（2006）【学位】Ph.D.（オタゴ大学人類学部大学院博士課程 1989）、M.A.（オタゴ大学人類学部大学院修士課程 1982）【専攻・専門】オセアニア先史学・民族学 1) オセアニアの土器文化、2) 島嶼環境における人間居住【所属学会】日本オセアニア学会、日本人類学会、日本考古学協会、New Zealand Archaeological Society、Indo-Pacific Prehistory Association

【主要業績】

[単著]

印東道子

2014 『南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き』（フィールドワーク選書4）京都：臨川書店。

2002 『オセアニア 暮らしの考古学』（朝日選書715）東京：朝日新聞社。

[編著]

印東道子編著

2013 『人類の移動誌』京都：臨川書店。

【受賞歴】

2006 大同生命地域研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

島嶼環境への人類の移動と適応

・研究の目的、内容

- 1) ファイス島で行ってきた発掘調査と出土遺物の化学分析、骨類分析などの結果がほぼ出そろったので、総合報告書の作成を継続して行っている。
- 2) 科学研究費助成事業（基盤研究(B)(海外)）「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表者：小野林太郎）の研究分担者として、主としてインドネシア多島海地域とオセアニアの物質文化の比較研究を行った。
- 3) 共同研究会「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究：資源利用と物質文化の時空間比較」（研究代表者：小野林太郎）において、海域世界を特徴とするオセアニアへ拡散した初期の人々の物質文化がどのように変化したかを海洋適応との関連で研究した。

・成果

- 1) オセアニアへの人類の移動を多角的に検討する国際研究集会 “Integrating inferences about our past: New findings and current issues in the peopling of the Pacific and South East Asia.”が、ドイツのマックスプランク研究所で開催され、‘Cultural roll of prehistoric coral islanders in Micronesia.’と題した招待発表を行った（於 Jena 2015年6月22日-23日）。
- 2) 科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表者：松村博文）の研究成果を Colonization and/or cultural contacts: A discussion of the western Micronesian case. (In P. Piper, H. Matsumura and D. Bulbeck (eds.), *New Perspectives in Southeast Asian and Oceanian Prehistory*) としてまとめ、オーストラリア国立大学から本年中に出版予定である。
- 3) 日本オセアニア学会第33回研究大会において「フェイス島からみたカロリン諸島の先史文化」と題する発表を行った。
- 4) その他、民博が共催しているカレッジシアターやナレッジキャピタルでオセアニアにおける調査研究に関する発表を行い、京都新聞紙上で連載されている民博「考える舌」シリーズ、および『毎日小学生新聞』で連載されている「みんなく世界の旅」シリーズに寄稿した。

◎出版物による業績

[その他]

印東道子

- 2015 「みんなく世界の旅 オセアニア① 特殊なカヌーで大航海」『毎日小学生新聞』4月4日。
 2015 「みんなく世界の旅 オセアニア② 島の生活とココヤシ」『毎日小学生新聞』4月11日。
 2015 「みんなく世界の旅 オセアニア③ 石で蒸し焼きウム料理」『毎日小学生新聞』4月18日。
 2015 「みんなく世界の旅 オセアニア④ ちょっと変わった魚つり」『毎日小学生新聞』4月25日。
 2015 「世界のうちわ」『月刊みんなく』39(8)：10-11。
 2016 「みんなく食の民族誌 考える舌⑦ 変容するオセアニアの食卓」『京都新聞』1月13日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年6月22日～6月23日 ‘Cultural roll of prehistoric coral islanders in Micronesia.’ International Symposium “Integrating inferences about our past: New findings and current issues in the peopling of the Pacific and SouthEast Asia.” Presented at an Max Planck Institute for the Science of Human History. Jena, Germany
- 2015年7月1日 「メイド イン オセアニア——素材を生かした機能美」連携講座「みんなく × ナレッジキャピタル——世界の民芸」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1F
- 2016年2月24日 「南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店
- 2016年3月18日 「フェイス島からみたカロリン諸島の先史文化」日本オセアニア学会第33回研究大会発表、マホバ・マインズ三浦

・広報・社会連携活動

- 2015年6月26日 「オセアニアの島々に渡った人々」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年7月3日 「巨石像モアイとイースター島の人びと」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（3人）

特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表者：松村博文）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)（海外））「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表者：小野林太郎）研究分担者

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

日本学術会議第23期連携会員、日本オセアニア学会評議員、日本人類学会評議員、大同生命地域研究賞審査委員、りそなアジア・オセアニア財団環境事業選考委員

韓 敏 [ハン ミン] ————— 教授

【学歴】中国吉林大学外国語学部日本語科卒（1983）、中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科日本文学専攻修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1989）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了（1993）【職歴】武蔵大学人文学部非常勤講師（1992）、東京大学教養学部客員研究員（1994）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）【学位】学術博士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1993）、学術修士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科1989）、文学修士（中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科 1986）【専攻・専門】文化人類学、現代中国の漢族研究【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

韓 敏

2015 『大地の民に学ぶ 激動する故郷、中国』225p.（フィールドワーク選書18）京都：臨川書店

Han, M.

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology. 313p.

2007 『回心革命と改革——皖北李村の社会変遷と延續』311p.（陸益龍・徐新玉訳）南京：江蘇人民出版社。

[編著]

韓 敏編

2009 『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』540p. 東京：風響社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国の社会と文化の再構築に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、聖地作りと英雄崇拜に焦点を当てることにより、国家と社会の多様な関係性を考察し、文化の連続性と非連続性のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

1) 引き続き共同研究「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」（代表者：杉本良男）の分担者として、ユーラシアという枠組みの中で、近代中国の聖地作りのプロセスとメカニズムを明らかにする。

- 2) 科研「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（代表者：塚田誠之）の分担者として、漢族の英雄崇拜の変遷と現状を調査し、歴史を資源化する行為の諸主体間のせめぎあいとアイデンティティの再構築の関連性を調べる。
- 3) 中国の社会と文化の再構築について、終了した機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の成果を執筆し、代表者として論文集を編集する。

・成果

- 1) アジア歴史研究助成（JFE財団）により、「中国東北地区の民族雑居地域における民族関係をめぐる社会史的考察」（代表者：李海燕）の分担者として、8月12日～17日シボ族の集中している瀋陽市瀋北新区で調査を行い、シボ家廟というシボ族の民族聖地の実態を考察した。
- 2) 8月3日～9日に科学研究費助成事業「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（基盤研究A 代表者：塚田誠之）の分担者として浙江省杭州市で、南宋の英雄、岳飛の遺骨が埋葬されているとされる岳廟、当廟の運営にあたる行政部門、浙江大学岳飛研究会、道教の大資福寺などを訪ね、英雄崇拜の変遷と現状を調べた。
- 3) 終了した機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の成果について、代表者として論文集、『Continuity and Change of Chinese Culture: Family, Ethnicity and State under Globalization』（HAN Min & KAWAI Hironao）を編集して、アメリカのBridge21 Publications, LLC 出版社に提出した。同機関研究の日本語版の編集も行った。

また、国家・社会の多様な関係性や文化の連続性・非連続性について、以下の著書と論文も刊行した。

韓 敏著『大地の民に学ぶ 激動する故郷、中国』フィールドワーク選書18 225p. 京都：臨川書店（2015.11.30）

韓 敏 「項羽の歴史記憶の資源化と観光開発」塚田誠之（編）『民族文化資源とポリテクス——中国南部地域の分析から』pp.353-374 東京：風響社（2016.03.30）[査読有]

日本の文化人類学とグローバル化について論文を執筆した。

2015 Using Multiple Languages to Make Japanese Anthropology More Relevant to the World. The 2nd JASCA International Symposium, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 16: 121-130, Tokyo: Japanese Society of Cultural Anthropology.

◎出版物による業績

[単書]

韓 敏

2015 『大地の民に学ぶ——激動する故郷、中国』（フィールドワーク選書18）225p. 京都：臨川書店。[書評有]

[論文]

韓 敏

2016 「項羽の歴史記憶の資源化と観光開発」塚田誠之編『民族文化資源とポリテクス——中国南部地域の分析から』pp.353-374, 東京：風響社。[査読有、共同研究の成果]

Han, M

2015 Using Multiple Languages to Make Japanese Anthropology More Relevant to the World. The 2nd JASCA International Symposium, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 16: 121-130, Tokyo: Japanese Society of Cultural Anthropology.

[その他]

韓 敏

2015 「旅・いろいろ地球人 ミュージアム④ 月によせる中国人の思い」『毎日新聞』7月30日夕刊。

2015 「中国の農民画——漁家楽（漁師の喜び）」『みんぱく e-news』170号, 8月1日。

2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑩ 中国のシュウマイ考える舌」『京都新聞』10月14日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年12月12日 ‘Using Multi-languages to Make Japanese Anthropology More Relevant to the World’
シンポジウム：国際化／グローバル化する文化人類学と日本（The Internationalization/Globalization of Cultural Anthropology and Japan）日本文化人類学会主催、首都大学東京国際交流会館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年6月28日 「伝承される伝統中国の冠婚葬祭」第388回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2015年9月4日 「漢字文化の担い手——日本と中国の創意と交流」大阪高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年9月11日 「『今年の漢字』からみた中国の社会変化」大阪高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎調査活動

・海外調査

2015年8月3日～8月9日—中華人民共和国（民族英雄・岳飛の祭祀についての調査）

2015年8月12日～8月17日—中華人民共和国（瀋陽における錫伯家廟からみる文化伝承及びシボ（錫伯）族・満族・漢族の交流についての調査）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

主任指導教員（2人）、副指導教員（2人）

特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

アジア歴史研究助成（JFE 財団）「中国東北地区の民族雑居地域における民族関係をめぐる社会史的考察——漢・満・モンゴル・朝鮮族雑居地域でのフィールドワークを通じて」（代表者：李海燕）研究分担者（8月12日～17日シボ族の集中している瀋陽市瀋北新区で調査を行い、シボ家廟というシボ族の民族聖地の実態を考察した。）

小長谷有紀 [こながや ゆき]————— 教授(併)

1957年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第1研究部助手（1987）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009-2011）、人間文化研究機構理事（2014）【学位】文学修士（京都大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】人文学【所属学会】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

小長谷有紀

2014 『人類学者は草原に育つ——変貌するモンゴルとともに』（フィールドワーク選書9）224p. 京都：臨川書店。[書評有]

[編著]

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか?』京都：昭和堂。[書評有]

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人びとの証言』（中公叢書）東京：中央公論新社。[書評有]

【受賞歴】

2015 モンゴル国科学アカデミー 名誉博士

2013 紫綬褒章

2013 教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章（モンゴル国教育文化科学省）

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイルムダルメダル（友好勲章）

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴルにおける社会主義的近代化

・研究の目的、内容

<目的>これまで、「モンゴルにとって20世紀とはなんであったか?」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化」とはなんであったか?という問いへと問題を鋭角に転換して、各個研究ではモンゴルおよび中国内モンゴル自治区についての事例研究を目的とする。

<内容>社会主義的近代化を体現した当事者たちによるナラティブ(語り)を収集し、それらを多声的に構成して近代化という時空間に関するモノグラフ(民族誌的歴史)を描くことによって、正当な歴史記述とは異なるテキストをナラティブから構成する。

・成果

- 1) すでに実施した口述史資料について、モンゴル語、邦訳、英訳を整備し、刊行を準備した。
- 2) 諸地域との比較研究の成果を、中央アジア・北アジア展示の新構築に反映させた。
- 3) 科研で収集したポスター資料について整理し、刊行を準備した。
- 4) 2014年に実施した国際シンポジウムの成果を英語論文集として刊行した。

◎出版物による業績

[共編著]

Konagaya, Y. and O. Shaglanova (eds.)

2016 *Northeast Asian Borders: History, Politics, and Local Societies* (Senri Ethnology Studies 92).
Osaka: National Museum of Ethnology.

[共著]

鈴木康平・上條隆生・JAMSRAN Undarmaa・小長谷有紀・田村憲司

2015 「モンゴルの森林ステップと典型ステップにおける耕作放棄地の植生回復」植生学会誌 *Vegetation Science* 32: 37-48, 植生学会。[植生学会論文賞受賞]

[その他]

小長谷有紀

- 2015 「梅棹忠夫探訪記⑬ 進化し続けるアーカイブズ」『ミネルヴァ通信「究」』49: 12-15。
 2015 「みんなく、こぼれ話⑨ アジア生まれの博物館をつくろう」『TOYRO BUSINESS』168: 30。
 2015 「北京の青空」総合地球環境学研究所 中国環境問題研究拠点『天地人』26: 2-3。
 2015 「梅棹忠夫探訪記⑭ 幻のベストセラー「人類の未来」」『ミネルヴァ通信「究」』50: 12-15。
 2015 「山にはじまり、山におわる山をたのしむ」pp.432-439, 東京: 山と溪谷社。
 2015 「家畜化と搾乳、起源を追う」(京都大学公開シンポで活発議論)『京都新聞』6月5日。
 2015 「梅棹忠夫探訪記⑮ 生涯の兄貴分——吉良竜夫」『ミネルヴァ通信「究」』51: 12-15。
 2015 「梅棹忠夫探訪記⑯ ヒマラヤへの執念」『ミネルヴァ通信「究」』52: 12-15。
 2015 「みんなく、こぼれ話⑩ 『みんなくの全国巡回いたします!』」『TOYRO BUSINESS』169: 30。
 2015 「梅棹忠夫探訪記⑰ 山に始まり、山に終わる」『ミネルヴァ通信「究」』53: 12-15。
 2015 「梅棹忠夫探訪記⑱ 未来を語る人びと」『ミネルヴァ通信「究」』54: 12-15。
 2015 「みんなく、こぼれ話⑪ 「研究倫理を学ぶはずのビデオで、この世の不条理を学ぶ」」『TOYRO BUSINESS』170: 30。
 2015 「梅棹忠夫探訪記⑲ 『日本の成功体験「万博」からみんなくへ』」『ミネルヴァ通信「究」』55: 12-15。
 2015 書評「北川秀樹・窪田順平編著『流域ガバナンスと中国の環境政策』「中国における水環境問題との奮闘を知る」」東方 416: 22-25, 大阪: 東方書店, 10月5日。
 2015 書評「クロード・レヴィ=ストロース著『野生の思考』」vesta No100 公益財団法人 味の素の文化センター p.9, 11月1日。
 2015 「梅棹忠夫探訪記⑳ エスペラントの夢」『ミネルヴァ通信「究」』56: 12-15。
 2015 「梅棹忠夫探訪記㉑ 『文明の生態史観』の誕生」『ミネルヴァ通信第「究」』57: 12-15。
 2015 「梅棹忠夫アーカイブスにおけるエスペラント関連資料」『エスペラント』一般財団法人日本エスペラント協会83-12: 12-13, 12月1日。

- 2016 「みんぱく、こぼれ話⑫ 『みんぱくを国際交流の拠点に！』『TOYRO BUSINESS』171：30。
- 2016 「梅棹忠夫探訪記⑫ 梅棹忠夫の女問題」『ミネルヴァ通信「究」』58：12-15。
- 2016 「梅棹忠夫探訪記⑬ 『日本探検』『ミネルヴァ通信「究」』59：12-15。
- 2016 「梅棹忠夫探訪記(最終回) 最期のデザイン」『ミネルヴァ通信「究」』60：12-15。
- 2016 「みんぱく、こぼれ話⑬ 『中央・北アジア展示場リニューアル・オープン』『TOYRO BUSINESS』172：30。

[映像]

小長谷有紀監修

2016 『南シベリアに住むトゥバの人々 みんぱく映像民俗誌 第20集』国立民族学博物館

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

- 2015年9月15日 「日本国立民族学博物館におけるモンゴル研究蓄積」モンゴル科学アカデミー、ウランバートル
- 2015年11月14日 「チベットから学ぶ——モンゴル学界の新しい動きから」第63回日本チベット学会大会、四天王寺大学
- 2015年12月11日 「食のコミュニケーション」比叡会議、比叡ホテル

◎上記以外の研究活動

- 2015年4月10日、24日、5月15日、29日、6月5日、9日 講師 第35期 KEIBUN 文化講座「モンゴル遊牧文化いまむかし」旧大津公会堂
- 2015年7月23日 講師「世界で活躍する女性たち」ソロプチミスト ユースホーラム2015 国立民族学博物館
- 2015年11月21日 コメンテーター 日本モンゴル学会2015（平成27）年度秋季大会、国立民族学博物館

◎社会活動・館外活動等

日本モンゴル学会理事、生き物文化誌学会理事、NPO 法人モンゴルパートナーシップ研究所理事長、日本学会会議第一部連携会員、文化審議会委員、中央環境審議会自然環境部会臨時委員、国立大学法人京都大学経営協議会委員、東瀬戸内海文化圏「世界遺産化」有識者会議委員、JRA 馬事文化賞選考委員等

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒業（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1983）【職歴】東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1982）【専攻・専門】アンデス考古学、文化人類学 1) 古代アンデス文明の形成過程、2) 現代ペルーの文化行政、3) 考古学と国民国家形成、4) 世界遺産と国別の文化遺産との相互関係【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

【主要業績】

[単著]

関 雄二

2010 『アンデスの考古学 改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス——権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

[共編]

大貫良夫・加藤泰建・関 雄二編

2010 『古代アンデス——神殿から始まる文明』（朝日選書863）東京：朝日新聞出版。

【受賞歴】

2015 ペルー共和国文化功労者表彰

2008 濱田青陵賞

2008 科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008 クントウル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈を行う。具体的には、ペルー北部山中パコバンバ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C. 2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費助成事業基盤研究（S）をあてた。

・成果

2011年度から科学研究費助成事業（基盤研究（S））を取得し、フィールドワークを含め、計画通りに研究を推進した。とくに、発掘調査においては、金製品を副葬した「ヘビ・ジャガー神官の墓」を発見し、文明初期における権力者の存在を確認することができた。成果としては、『古代文明アンデスと西アジア 神殿と権力の生成』（朝日新聞出版）を編集し出版したほか、論文を3本出版した。このほか内外の国際学会、研究集会、シンポジウムにおいて8本の研究発表をおこない、55° Congreso Internacional de Americanistas（第55回国際アメリカニスト会議 2015.7.12-17）では Richard Burger とともに シンポジウム Tradiciones tempranas de arquitectura pública de los Andes Centrales（中央アンデスにおける公共建造物の初期伝統）を、II Congreso Nacional de Arqueología（第2回ペルー考古学会議）では Simposio “Conmemorativo por el centenario del nacimiento de Seiichi Izumi”（泉靖一生誕100周年記念シンポジウム）を組織した。

◎出版物による業績

[編著]

関 雄二

2015 『古代文明アンデスと西アジア 神殿と権力の生成』東京：朝日新聞出版。[書評有]

[論文]

関 雄二

2015 「古代アンデスにおける神殿の登場と権力の発生」関 雄二編『古代文明アンデスと西アジア 神殿と権力の生成』pp.125-166, 東京：朝日新聞出版。

2015 「アンデスと西アジア 揺れ動く古代文明への眼差し」関 雄二編『古代文明アンデスと西アジア 神殿と権力の生成』pp.3-39, 東京：朝日新聞出版。

Seki, Y.

2016 Participation of the Local Community in Archaeological Heritage Management in the North Highlands of Peru. In Anne P. Underhill and Lucy C. Salazar (eds.), *Finding Solutions for Protecting and Sharing Archaeological Heritage Resources*, pp.103-119. Cham; Heidelberg; New York; Dordrecht; London: Springer. [査読有]

[その他]

関 雄二

2015 「わが友ウーゴ津田」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』51：3, 東京：アムプロモーション。

2015 「泉靖一生誕100年 ① 生い立ちとアンデス調査前夜」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』51：14-15, 東京：アムプロモーション。

2015 「帰納的アプローチと演繹的アプローチの統合 アンデス考古学からの視点」『民博通信』150：4-9, 大阪：国立民族学博物館。

2015 「20年の意味」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』52：4, 東京：アムプロモーション。

2015 「ヘビ・ジャガー神官の墓」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』52：5-9, 東京：アムプロモーション。

2016 「みんなく世界の旅 ペルー① 葦舟を使う伝統の漁法」『毎日小学生新聞』1月16日。

2016 「みんなく世界の旅 ペルー② お祭りにかせないチチャ・デ・ホーラ」『毎日小学生新聞』1月23日。

- 2016 「みんなく世界の旅 ベルー③ 1週間続くパコパンバ村の祭り」『毎日小学生新聞』1月30日。
- 2016 「みんなく食の民族誌 考える舌⑳ 古代文明と移民の食が融合 ベルーのクレオール料理」『京都新聞』2月3日。
- 2016 「みんなく世界の旅 ベルー④ アルパカ・リヤマ・モルモット……さまざまな家畜」『毎日小学生新聞』2月6日。
- 2016 「雲上の民チャチャボヤの足跡」『季刊民族学』155:49-64。
- 2016 「王の名の使い道 インカ帝国」岩波書店辞典編集部編『世界の名前』pp.108-110、東京：岩波書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年7月14日 ‘Arquitectura pública y el establecimiento del poder en la sociedad formativa de Pacopampa en la sierra norte del Perú.’ (Yuji Seki y Daniel Morales Chocano) 55° Congreso Internacional de Americanistas “Conflicto, paz y construcción de identidades en las Américas”, Universidad Francisco Gavidia, San Salvador, El Salvador
- 2015年8月4日 ‘Aparición de la arquitectura ceremonial: Desde una perspectiva de las excavaciones en Kotosh.’ (Yuji Seki) II Congreso Nacional de Arqueología, Biblioteca Nacional, Lima, Perú
- 2015年8月6日 ‘El porceso de sello de la Plaza Cuadrangular Hundida ubicada en la Tercera Plataforma de Pacopampa, sitio arqueológico del Periodo Formativo en Cajamarca.’ (Diana Alemán Paredes, Santiago Andia Roldán, Juan Pablo Villanueva, Megumi Arata, Nagisa Nakagawa, Yuji Seki y Daniel Morales Chocano) II Congreso Nacional de Arqueología, Biblioteca Nacional, Lima, Perú
- 2015年12月6日 「同位体分析によるラクダ科動物飼育の検証：ペルー北部高地パコパンバ遺跡の事例」（瀧上舞、鶴澤和宏、関 雄二、ダニエル・モラーレス、米田 穰）古代アメリカ学会第20回研究大会、東京大学理学部
- 2015年12月6日 「ペルー北高地パコパンバ遺跡における『ヘビ・ジャガー神官の墓』の発見」（関 雄二、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、ダニエル・モラーレス）古代アメリカ学会第20回研究大会、東京大学理学部
- 2015年12月6日 「パコパンバ遺跡の儀礼的コンテキストから出土した動物骨資料：饗宴行為の動物考古学的復元」（鶴澤和宏、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、長岡朋人、関 雄二）古代アメリカ学会第20回研究大会、東京大学理学部
- 2015年12月6日 「アンデス形成期パコパンバにおける饗宴」（中川 渚、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、関 雄二、ダニエル・モラーレス）古代アメリカ学会第20回研究大会、東京大学理学部
- 2015年12月6日 「ペルー、パコパンバ遺跡から出土した人骨の生老病死の復元」（長岡朋人、森田 航、関 雄二、鶴澤和宏、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、マウロ・オルドーニェス、ディアナ・アレマン、ダニエル・モラーレス）古代アメリカ学会第20回研究大会、東京大学理学部
- 2016年1月30日 「パコパンバ遺跡における建築の変遷からみた権力形成」（関 雄二）公開シンポジウム「アンデス文明初期の神殿と権力生成」キャンパス・イノベーションセンター東京

・広報・社会連携活動

- 2015年4月18日 「アンデスで神殿はどのように生まれたのか？」アンデス文明研究会
- 2015年11月11日 「インカ帝国と首都クスコ、マチュ・ピチュ遺跡」公民館講座 テーマ「南米、アンデス文明の世界遺産を訪ねる」川西市清和台公民館
- 2015年11月13日 「マチュ・ピチュ遺跡の発見——文化遺産と政治」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
- 2015年11月14日 「古代文明と権力」（古代文明にみる権力の誕生 第1回）朝日カルチャーセンター新宿
- 2015年11月24日 「アンデスの文化遺産の保存と活用」阪神シニアカレッジ
- 2015年11月25日 「ペルー、ナスカの地上絵の謎に迫る」公民館講座 テーマ『南米、アンデス文明の世界遺産を訪ねる』川西市清和台公民館
- 2015年12月2日 「南米アンデス文明における金の利用」連続講座『みんなく × ナレッジキャピタル——世界

- の天然素材」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1F
- 2016年1月22日 「アンデスの古代遺跡と暮らす——文化遺産と現代社会」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
- 2016年3月3日 「コンソーシアムの意義と協力活動の課題」第18回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会『文化遺産保護の国際動向』、主催：文化遺産国際協力コンソーシアム、東京文化財研究所
- ・番組監修

2016年3月20日 TBS「世界遺産 マチュピチュ歴史保護区(ペルー)」監修(2016.3.20 18:00~18:30放送)
 - ・海外調査

2015年4月4日~4月13日—ペルー(ペルー国文化省主催国際会議「先スペイン期ペルーの研究最前線」に出席)

2015年6月24日~10月11日—ペルー、エルサルバドル(中央アンデス地帯における発掘調査および国際会議・研究集会に出席し研究発表をおこなう)

2016年2月5日~2月26日—ペルー、スペイン(パコバンバ発掘調査出土遺物の分析および保存遺構のモニタリング、バルセロナ自治大学研究者と国際シンポジウムの成果報告の打ち合わせ)
- ◎大学院教育
- ・指導教員

主任指導教員(3人)
- ◎上記以外の研究活動
- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業(基盤研究(S))「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」研究代表者
- ◎社会活動・館外活動
- ・他機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、ペルー全国学長会議編集局理事、ペルー国クントゥル・ワシ文化協会(NPO)クントゥル・ワシ博物館監査役、アンデス文明研究会顧問、金沢大学国際文化資源学研究中心アドバイザー
 - ・非常勤講師

熊本大学 集中講義「歴史資料学特殊講義B」

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]————— 教授

1959年生。【学歴】オークランド大学卒(1981)、オークランド大学大学院修士課程修了(1984)、オーストラリア国立大学大学院博士課程修了(1990)【職歴】科学技術庁特別研究員(農水省野菜茶業試験場)(1990)、日本学術振興会特別研究員(京都大学理学部)(1993)、国立民族学博物館第4研究部助手(1995)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手(1998)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授(1999)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2002)、国立民族学博物館研究戦略センター助教授(2004)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授(2008)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2015)【学位】Ph. D.(オーストラリア国立大学1990)、M. Sc.(オークランド大学1984)【専攻・専門】先史学、民族植物学【所属学会】Society for Economic Botany, Indo-Pacific Prehistory Association, Society of Writers, Editors and Translators, International Aroid Society, European Association of Science Editors, World Archaeology Congress, Royal Society of New Zealand

【主要業績】

[単著]

Matthews, P. J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History* (Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

Spriggs, M., D. Addison and P. J. Matthews (eds.)

2012 *Irrigated Taro (Colocasia esculenta) in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Ahmed, I., P. J. Matthews, P. J. Biggs, M. Naeem, P. A. McLenachan, and P. J. Lockhart.

2013 Identification of chloroplast genome loci suitable for high-resolution phylogeographic studies of *Colocasia esculenta* (L.) Schott (Araceae) and closely related taxa. *Molecular Ecology Resources* 13 (5), 929–937.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1. Wild Taro Research Project (Matthews project)
2. Conservation of Traditional Plant Knowledge Among Ethnic Minorities in Marginal Areas, and Assessment of the Impacts of Local and Global Development. Collaborative research project led by Kazuo Watanabe, Tsukuba University.
3. Natural and Cultural History of the Paper Mulberry (*Broussonetia papyrifera*) in Asia and the Pacific (Matthews project).
4. George Brown Collection Info-Forum Project (2014–15). Project leader: Isao Hayashi, National Museum of Ethnology.

・研究の目的、内容

The main focus points for 2015 were (a) further studies of taro and its relatives (Araceae) in Southeast Asia, (b) research related to the George Brown Collection held at the National Museum of Ethnology, and (c) preparation for the 8th World Archaeology Congress, Kyoto (FY 2016). For the Congress, I was appointed co-organiser for the Art and Archaeology theme, and began preparation with the theme co-organisers of an exhibition to be held in Kyoto during the Congress (“Garden of Fragments”).

・成果

1. Wild Taro Research Project

(a) Samples of *C. formosana* from Taiwan have been preserved at the Field Sciences Laboratory, Minpaku, for future analysis together with colleagues in Taiwan.

(b) In 2013, new DNA sequence data was obtained for chloroplast genome loci using samples of *Colocasia esculenta* and *Alocasia macrorrhizos* (central-southern Philippines). In 2014, new field samples of *C. formosana* were obtained in Taiwan. Discussion of these field surveys and planning for analysis continued.

2. Conservation of Traditional Plant Knowledge.

My focus here is on ethnobotanical field studies of edible aroids and their wild relatives in Northeast India and elsewhere in Southeast Asia. In addition to conducting fieldwork supported by the Project, Dr. Matthews gave lectures on various occasions while supported by the Project and the National Museum of Ethnology.

In July 2015, I gave a presentation at the 15th Int. Conf. of the European Association of Southeast Asian Archaeologists, Paris. In Oct 2015, I visited the office of Bioersity International in New Delhi, and the Central Tuber Crops Research Institute (CTCRI) in Trivandrum, Kerala, in order to discuss possible future research collaborations. I also carried out further field surveys in Assam, and spoke at a G. L. Choudhury College in Barpeta, Assam. (Travel supported by Watanabe Project). In Dec. 2015, I visited the United Kingdom, and gave research lectures at Oxford University and Kew Gardens. In Jan. 2016, I visited China, and gave a research lecture at Xishuangbanna Tropical Botanical Garden, Menglun.

List of lectures:

- (a) 9th July, 2015 “Sympatry of taro (*Colocasia esculenta*) and its wild relatives in northern Vietnam.” (coauthors Ibrar Ahmed and Van Dzu Nguyen). Paper presented for the session “Interdisciplinary

- approaches to the early history of plants and animals in Southeast Asia”, 15th Int. Conf. of the European Association of Southeast Asian Archaeologists, 6. - 10. July 2015, Université Paris Ouest Nanterre la Défense, Paris.
- (b) 29th October, 2015 “Recent Research on the Origins and Dispersals of Taro (*Colocasia esculenta*).” Talk for Central Tuber Crops Research Institute (CTCRI) in Trivandrum, Kerala, India.
- (c) 3rd November, 2015 “Environment & Heritage: Following the Trail of Paper Mulberry to Easter Island, Polynesia.” Talk for the Environment & Heritage Seminar, G. L. Choudhury College, Barpeta, Assam, India.
- (d) 9th Dec. 2015 “Testing models for the domestication of taro (*Colocasia esculenta*) in Asia and the Pacific.” Institute of Archaeology, Oxford University, United Kingdom.
- (e) 10th Dec. 2015 “Phylogeography of Taro in Asia and the Pacific: Walking Blind in a Very Large Jungle.” (coauthor Ibrar Ahmed) Jodrell Laboratory, Royal Botanic Gardens, Kew, United Kingdom.
- (f) 19th Dec. “Taro in Japan: morphological, genetic, and functional diversity”. Sokendai Project: Origins of Japonesians, Mini-Symposium, 19th Dec. 2015.
- (g) 26th Feb. 2015 “On the Trail of Taro (*Colocasia esculenta*, Araceae): unexpected encounters in Asia, Pacific, and Mediterranean” (coauthor Ibrar Ahmed). Xishuangbanna Tropical Botanical Garden, Menglun, China.

3. Natural and Cultural History of Paper Mulberry.

Collaboration continued with counterparts in Taiwan and Chile (see list above) to study the phylogeography of this culturally important plant.

4. George Brown Collection Info-Forum Project

In Osaka, I helped to host research visits by Rhys Richards (Parematta Press, Wellington, New Zealand) and Roderick Ewins (University of Tasmania, Australia).

During a first visit to the United Kingdom, I visited the British Museum, London, the Sainsbury Institute, Norwich, Pitt Rivers Museum Oxford, and Discovery Museum, Newcastle upon Tyne. At these locations, I examined documents and objects related to the George Brown Collection, and discussed procedures for information exchange with the corresponding institutions. (Dec. 2015).

During a second visit to the United Kingdom, I visited the Anthropology Library, British Museum in London, and the Hancock Museum in Newcastle upon Tyne, and prepared a digital record of historical documents related to the George Brown Collection during the period of its location in the United Kingdom (Feb. 2016).

◎出版物による業績

[論文]

Matthews, P. J., V. D. Nguyen, D. Tandang, E. M. Agoo, and D. A. Madulid

2015 Taxonomy and ethnobotany of *Colocasia esculenta* and *C. formosana* (Araceae): implications for evolution, natural range, and domestication of taro. *Aroideana Supplement* 38E (1): 153-176.

[その他]

2015 「世界をスケッチする」『月刊みんぱく』39(9) : 10-11

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年7月9日 “Sympatry of taro (*Colocasia esculenta*) and its wild relatives in northern Vietnam” (co-authors Ibrar Ahmed and Van Du Nguyen). Paper presented for the session “Interdisciplinary approaches to the early history of plants and animals in Southeast Asia”, 15th Int. Conf. of the European Association of Southeast Asian Archaeologists, 6.-10. July 2015, Université Paris Ouest Nanterre la Défense, Paris, France.

2015年10月29日 “Recent Research on the Origins and Dispersals of Taro (*Colocasia esculenta*).” Talk for Central Tuber Crops Research Institute (CTCRI) in Trivandrum, Kerala, India.

2015年11月3日 “Environment & Heritage: Following the Trail of Paper Mulberry to Easter Island, Polynesia.” Talk for the Environment & Heritage Seminar, G. L. Choudhury College, Barpeta, Assam, India.

- 2015年12月9日 “Testing models for the domestication of taro (*Colocasia esculenta*) in Asia and the Pacific.” Institute of Archaeology, Oxford University, United Kingdom.
- 2015年12月10日 “Phylogeography of Taro in Asia and the Pacific: Walking Blind in a Very Large Jungle.” (coauthor Ibrar Ahmed) Jodrell Laboratory, Royal Botanic Gardens, Kew, United Kingdom.
- 2015年12月19日 “Taro in Japan: morphological, genetic, and functional diversity”. Sokendai Project: Origins of Japonians, Mini-Symposium, Japan.
- 2016年2月26日 “On the Trail of Taro (*Colocasia esculenta*, Araceae): unexpected encounters in Asia, Pacific, and Mediterranean” (coauthor Ibrar Ahmed). Xishuangbanna Tropical Botanical Garden, Menglun, China.

・ 広報・社会連携活動

- 2015年7月18日～9月23日 Provided support for the Exhibition: ‘Captain Cook’s Voyage and Bank’s Florilegium’, Onomichi City Museum of Art, Hiroshima (a collaboration with Tokyo Bunkamura Museum of Art, Onomichi City Museum of Art, and National Museum of Ethnology).

[Website Administration]

The Research Cooperative (<http://researchcooperative.org>). This is an international, open-access social network and meeting place for researchers, students, editors, translators, illustrators and educational publishers.

◎調査活動

・ 海外調査

- 2015年7月4日～7月13日—フランス（東南アジア考古学ヨーロッパ会合第15回国際会議「東南アジアにおける動植物の初期の歴史への学際的アプローチ」に参加及び発表）
- 2015年10月24日～11月14日—インド（「辺境少数民族地帯での植物利用及び伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価」にかかる調査研究）
- 2015年12月1日～12月12日—イギリス（ジョージ・ブラウン・コレクションにかかる調査研究）
- 2016年2月24日～2月29日—中華人民共和国（中国科学院西双版纳熱帯植物園において雲南におけるサトイモ科植物にかかる調査研究）
- 2016年3月5日～3月16日—イギリス（ネットワーク型博物館学の創成にかかる調査研究）

◎大学院教育

・ 指導教員

指導教員（1人）

・ 大学院ゼミでの活動

論文ゼミ「比較技術研究演習Ⅰ」

◎上記以外の研究活動

- ・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「辺境少数民族地帯での植物利用および伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価」（研究代表者：渡邊和男）研究分担者

横山廣子 [よこやま ひろこ] ————— 教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1977）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1981）
 【職歴】 東京大学教養学部助手（1981）、東洋英和女学院短期大学国際教養科専任講師（1986）、東洋英和女学院大学人文学部社会科学科助教授（1989）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2015）
 【学位】 社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1981）
 【専攻・専門】 文化人類学 1) 雲南省大理ペー族社会の研究、2) 中国における国家とエスニシティに関する研究、3) 中国西南部から東南アジア大陸部における民族集団の移動と包摂に関する研究
 【所属学会】 日本文化人類学会、American Anthropological Association

【主要業績】

〔編著〕

横山廣子編

- 2004 『少数民族の文化と社会の動態——東アジアからの視点』（国立民族学博物館調査報告 50）大阪：国立民族学博物館。
- 2001 『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告 20）大阪：国立民族学博物館。

〔共編〕

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

- 2001 『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社。

【2015年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

東アジアにおける文化と社会の動態に関する人類学的研究

Anthropological Study on the Dynamics of Culture and Society in East Asia

・研究の目的、内容

中国や日本など東アジアにおいては近年、政治・経済・科学技術・環境の変化などにもない、人々の生活のあり方が大きく変化してきている。現地調査や民族誌的データに基づき文化や社会がどのように変化し、どのような社会的課題が生じているのかを実証的に明らかにし、それらを比較考察することにより、東アジアの文化と社会の動態を分析・解明する視座を提供する。

・成果

社会経済の変化によって変化が生じている伝統的文化とその保存・継承について、従来から調査をしてきた、大阪府の富田林市の町並み保存の事例に関して、文化を継承する主体側の要因を考察し、中国の社会人類学者、費孝通が提示した「文化自觉」の概念の具体化について検討した。その成果は、2015年10月18日～10月19日に北京市で開催された「民族学・人類学理論と方法論の創新と発展国際フォーラム」において「从日本传统建筑物群保护政策来看费孝通的“文化自觉”——以富田林寺内町为例（日本の伝統建築物群保護政策から見た費孝通の『文化自觉』——富田林寺内町を例として）」と題した研究報告において発表した。

雲南省の少数民族であるペー族の伝統文化と近年の状況に関する民族誌的研究の一端として、民博ビデオテーク番組、「安龍謝土——雲南省ペー族の家屋完成後の儀礼」（22分4秒）、「雲南省ペー族の上棟式の今」（19分59秒）、「周城村の本主節——雲南省ペー族の祭り」（19分29秒）」の3本を編集し、完成させた。

◎出版物による業績

〔その他〕

横山廣子

- 2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑥ 中国雲南の梅仕事」『京都新聞』6月17日。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

ビデオテーク番組

- 2016 『安龍謝土——雲南省ペー族の家屋完成後の儀礼』国立民族学博物館海外映像音響資料（22分04秒、2010年撮影、2016年製作）
- 2016 『雲南省ペー族の上棟式の今』国立民族学博物館海外映像音響資料（19分59秒、2012年撮影、2016年製作）
- 2016 『周城村の本主節——雲南省ペー族の祭り』国立民族学博物館海外映像音響資料（19分29秒、2012年撮影、2016年製作）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年10月18日 「从日本传统建筑物群保护政策来看费孝通的“文化自觉”（日本の伝統建築物群保護政策から見た費孝通の『文化自觉』——富田林寺内町を例として）」中国社会科学院民族学・人類学研究所主催国際学術シンポジウム「社会学・人類学の理論・方法論と新たな発展」中国：北京

・研究講演

2016年2月16日 「中国西南部の少数民族の装い」、「中国西南部の少数民族の手仕事」園田・みんぱく連携講座
「世界の造形・芸能にみる“美”の文化」園田学園女子大学

・広報・社会連携活動

◎調査活動

・海外調査

2015年10月17日～10月31日—中華人民共和国（中国社会科学院民族学・人類学研究所主催国際学術シンポジウム「社会学・人類学の理論・方法論と新たな発展」での研究成果報告及び中国雲南省大理市においてペー族の文化と社会の変化に関する現地調査）

◎大学院教育

地域文化学専攻長

・指導教員

主任指導教員（2人）

博士論文審査委員（3件）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会「学会賞検討委員会」委員、総合研究大学院大学教育研究評議会評議員、総合研究大学院大学教育研究委員会委員、総合研究大学院大学学長選考会議委員、総合研究大学院大学国際連携推進委員会委員

宇田川妙子 [うだがわ たえこ] ————— 准教授

1960年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1984）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退（1990）【職歴】東京大学教養学部助手（1990）、中部大学国際関係学部講師（1992）、中部大学国際関係学部助教授（1995）、国立民族学博物館第3研究部併任助教（1997）、金沢大学文学部助教授（1998）、国立民族学博物館先端民族学研究部併任助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2010）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科1984）【専攻・専門】文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究・ジェンダーとセクシャリティ研究・ヨーロッパ近代をめぐる問題群【所属学会】日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

[単著]

宇田川妙子

2015年 『城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す』京都：臨川書店。

[共編]

宇田川妙子・中谷文美編

2007年 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レビュー』京都：世界思想社。

2016年 『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、本年度、公共性と親密性（私性）という概念を、近年さらに注目を浴びているローカリティとむすびつけながら再検討していくことを目的とした。具体的には、長年調査を続けているイタリアの町（ローマ近郊）で再度フィールドワークを行うとともに、ここ30年の変遷について分析を行ない、とくに公共性のあり方の変化と観点から考察を行った。

・成果

ローカリティ性の問題については、すでに科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「現代イタリア社会におけるロ

ーカリティに関する文化人類学的研究」(2014-2017)を取得し、本年度はその2年目として、9月半ばから約4週間ローマ近郊での現地調査を行い、地域性をめぐる人々の意識の変容にかんして具体的な資料収集をおこなった。

また、その成果の一端として、本年9月に『城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す』(臨川書店)を出版した。

◎出版物による業績

[単著]

宇田川妙子

2015 『城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す』(フィールドワーク選書16) 京都：臨川書店。

[共編]

宇田川妙子・中谷文美編

2016 『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』 京都：世界思想社。[査読有、共同研究成果]

[論文]

中谷文美・宇田川妙子

2016 「仕事への人類学的アプローチ」中谷文美・宇田川妙子編『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』 pp.1-21, 京都：世界思想社。[査読有、共同研究成果]

石原 理・宇田川妙子

2016 「生殖医療の法的規制のあり方——イタリアとフィンランドに注目して」『(2015年度厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業) 諸外国の生殖補助医療における補規制の時代的変遷に関する研究』 pp.3-15。

宇田川妙子

2016 「労働に埋め込まれた社会関係、社会関係に埋め込まれた労働——「仕事嫌い」なイタリア人の働き方」中谷文美・宇田川妙子共著『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』 pp.204-231, 京都：世界思想社。[査読有、共同研究成果]

2016 「イタリアの生殖医療の変遷——40号法とその後」日比野由利編 『(2015年度厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業) 諸外国の生殖補助医療における補規制の時代的変遷に関する研究』 pp.16-37。

[その他]

宇田川妙子

2015 「世界のシングル・シリーズ 家族・友人と助け合い イタリア」『読売新聞』 4月9日夕刊。

2015 「みんぱく世界の旅 イタリア① 国家よりも長い町の歴史」『毎日小学生新聞』 8月22日。

2015 「みんぱく世界の旅 イタリア② 伝統的な農業や食材を大事に」『毎日小学生新聞』 8月29日。

2015 「みんぱく世界の旅 イタリア③ 日曜日の食卓」『毎日小学生新聞』 9月5日。

2015 「みんぱく世界の旅 イタリア④ 広場でのコミュニケーション」『毎日小学生新聞』 9月12日。

2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑩ イタリアのパスタ」『京都新聞』 9月16日。

2015 「イタリアの食と社会関係」『TASC Monthly』 480:3。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2015年12月12日 「イタリアでの生活用品試行調査(予備調査)」『生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究』 国立民族学博物館

・その他

2016年1月9日 「生殖医療と親族・家族関係——イタリアの事例とともに」ジェトロ・アジア研究所研究会 「中東イスラーム諸国における生殖医療と家族」 東京大学東京文化研究所

・第441回 国立民族学博物館友の会講演会

2015年4月4日 「つくられる地域の食——スローフード発祥の地、イタリアから考える」

・みんぱくトークイベント

2015年11月28日 「みんなで食べる——イタリアの食」産経新聞主催『イタリアの食と社会』 国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2015年9月21日～10月22日—イタリア（「現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究」にかかる現地調査及び文献調査）

2016年2月1日～2月14日—イタリア（イタリアの家族にかかわる現状及び現代イタリアにおけるローカリティに関する調査研究）

◎大学院教育

副指導 1名

◎上記以外の研究活動

2015年度厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業（研究代表者：金沢大学 日比野由利）

◎社会活動・館外活動等

Journal of Ethnic Foods (Korea Food Research Institute) の編集委員

太田心平 [おおた しんぺい] ————— 准教授

1975年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、アメリカ自然史博物館上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻併任准教授（2014）【学位】博士（人間科学）（大阪大学 2007）、修士（人間科学）（大阪大学2000）【専攻・専門】社会文化人類学、北東アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、Association for Asian Studies（米国）、韓国・朝鮮文化研究会

【主要業績】

[論文]

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304-336, 京都：昭和堂。

2008 「センセーショナルリズムへの冷笑——移行の言説としての韓国『民主化』と元労働運動家たちの懐古」石塚道子・田沼幸子・富山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』pp.161-186, 京都：人文書院。

Ota, S.

2006 Ryohan: Anthropology of Knowledge and the Japanese Representation of Korean Yangban under Colonialization. *Korean Cultural Anthropology* 39(2) : 85-128 (韓国語)。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に2つの柱を立て、それらを中心として研究を推進した。

第1の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ-ミクロ双対性をもっていたのかを明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとした。援用したのは、イデオロギーへの着目の反面で

軽視されてきたユートピアという概念であり、対象化したのは、民衆に寄り添うあまり蔑ろにされてきた知識人社会である。

第2の柱は、現在進行形の事象を研究対象とするものであり、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、科学研究費助成事業（若手研究(B)）（課題番号：25871066、2013～2016年度）を研究代表者として受諾した。また、研究者はアメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業しているが、この兼業の研究課題はこの分野とする。日米韓の3ヶ国においてフィールドワークをはじめたが、並行して文献研究を進め、欧州諸国における比較調査も進めることで、研究の効率化をはかった。

・成果

第1の柱、韓国・朝鮮の社会文化の「民主化」前後のマクロ・ミクロ双対性の研究に関しては、これまでの成果の一部を、『SES (Senri Ethnology Studies)』誌上にて英文公刊した。また、それとは別の成果の一部を、東洋大学アジア文化研究所で招待講演し、その内容を『国境をまたぐ生活スタイル——アジアにおける広域調査と事例調査に向けて』（同研究所編／刊）に、和文論文「移住への渴望——21世紀の韓国人外国移住者のユートピア性」を寄稿した。また、別の内容を米国シアトル市でおこなわれたアジア学会（Association for Asian Studies）の年次大会でパネルを組織して採択され、学術発表した。

第2の柱、韓国・朝鮮の社会文化の現在進行形の編成メカニズムに関しても、一昨年度と昨年度に国際ワークショップでおこなった2本の学術発表の内容をとりまとめ、英文の論文を作成し、刊行を目指している。また、我が国のなかでの社会的貢献を考え、『日本はどのように語られたか——海外の文化人類学的・民俗学的日本研究』（桑山敬己編・昭和堂刊）に、「韓国における日本文化論の再生産——韓国の大学の学科目と研究者育成の分析から」を寄稿した。

◎出版物による業績

[論文]

Ota, S. C.

- 2015 Collection or Plunder: The Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement, *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91), pp.179-193. Osaka: National Museum of Ethnology.

太田心平

- 2016 「韓国における日本文化論の再生産——韓国の大学の学科目と研究者育成の分析から」, 桑山敬己編『日本はどのように語られたか——海外の文化人類学的・民俗学的日本研究』pp.407-434, 京都：昭和堂。
- 2016 「移住への渴望——21世紀の韓国人外国移住者のユートピア性」東洋大学アジア文化研究所編『国境をまたぐ生活スタイル——アジアにおける広域調査と事例調査に向けて』pp.36-44, 東京：東洋大学アジア文化研究所。

[その他]

太田心平

- 2015 「飲み物の首都——移入、混交、錯綜するニューヨーク」『Vesta (食の文化誌ヴェスタ)』99：4-12, 東京：味の素食の文化センター。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 ミュージアム⑨ 負の歴史を現場で見る」『毎日新聞』9月3日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

太田心平監修（韓国語）

- 2015 『オセアニア』『アメリカ』『ヨーロッパ』『アフリカ』『西アジア』『南アジア』『東南アジア』『中央・北アジア』『東アジア（朝鮮半島の文化、中国地域の文化、アイヌの文化、日本の文化）』

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2016年1月24日 ‘Goryeo Celadon Porcelain Restoration Projects in Colonial Korea and the Outflow to Other Countries’, Kick-off Symposium of NIHU Area Studies Program for Northeast Asia “Rediscovery of Northeast Asia.” National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年6月23日 ‘The Utopist Genealogy of South Korean Immigrants in New York in 21st Century,’

- SIEF2015 (12th Congress of Société Internationale d’Ethnologie et de Folklore) “Utopias, Realities, Heritages: Ethnographies for the 21st Century,” University of Zagreb, Zagreb
- 2015年7月25日 招待発表「移住への渴望——21世紀の韓国人海外居住者のユートピア性」, 2015年度東洋大学アジア文化研究所研究集会／2015年度白山社会学会大会『国境をまたぐ生活スタイル——東アジア・東南アジア・南アジアの事例を通じて』東洋大学、東京
- 2016年3月31日 ‘The 386 Literature and 386 Sentiments: A Case Study of a Book Club in Seoul,’ Association for Asian Studies Annual Conference 2016, Washington State Convention Center, Seattle

・展示

常設展示「朝鮮半島の文化」部分改修担当者

・広報・社会連携活動

2015年11月13日 「似て非なる国・韓国の過去」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年11月27日 「似て非なる国・韓国の現在」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎調査活動

・海外調査

2015年4月14日～5月24日—アメリカ合衆国（標本管理者のエージェンシーに関する調査研究）

2015年6月20日～7月5日—クロアチア（国際民族学・民俗学会（SIEF）2015年研究大会において論文発表及び成果公刊にかかる調査）

2015年7月29日～10月29日—アメリカ合衆国（博物館展示担当者のエージェンシーに関する調査研究）

2015年12月15日～1月11日—アメリカ合衆国（博物館における展示構築担当者をめぐるエージェンシーの調査研究）

2016年3月4日～3月24日—大韓民国、アメリカ合衆国（北東アジア地域研究プログラムにかかる調査研究）

2016年3月28日～4月11日—アメリカ合衆国、カナダ（アジア学会年次大会において発表及び博物館展示の調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

リサーチプロポーザルの指導（1名）

・指導教員

主任指導教員（1人）

・総研大の開講科目

博物館研究演習Ⅰ（前期）、文化人類学基礎講読（後期）

・審査委員

博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（若手研究(B)）「博物館展示の再編過程の国際比較による『真正な文化』の生成メカニズムの解明」研究代表者、機関研究「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（研究代表者：飯田 卓）研究分担者、人間文化研究機構地域研究ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア」ワーキングメンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

アメリカ自然史博物館人類学部門（アメリカ合衆国）上級研究員、味の素の文化研究所責任編集委員

・非常勤講師

大阪大学大学院人間文化研究科「人類学原書講読／人類学原書講読特別演習」、宮崎公立大学「韓国文化論」（集中講義）

佐藤浩司 [さとう こうじ] ————— 准教授

【学歴】 東京大学工学部卒（1977）、東京大学大学院修士課程修了（1983）、東京大学大学院博士課程単位取得（1989）
 【職歴】 国立民族学博物館助手（1989）、国立民族学博物館助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）
 【学位】 工学修士（東京大学工学部 1989）【専攻・専門】 建築史学、民族建築学【所属学会】 建築史学会、民俗建築学会、家具道具室内史学会

【主要業績】

[編著]

佐藤浩司編

1998～1999 『シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1～4』 京都：学芸出版社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア木造建築史の再構築

・研究の目的、内容

東南アジアの木造建築史を概観するための資料の作成、東南アジア史の再構築。

・成果

・調査研究成果は web 上で随時公開。http://www.sumai.org

・文資プロジェクト「三次元CGを利用した民族建築デジタルアーカイブの構築」完成部分については随時公開 http://www.sumai.org/3dcgproj/

最終的な一般公開のためのデータを準備中。

・基調講演 “Introduction to the manifestation of Indonesian wooden Architecture” in International Conference : Manifestation of Architecture in Indonesia, Institut Teknologi Sepuluh Nopember (スラバヤ工科大学) + Lembaga Sejarah Arsitektur Indonesia (インドネシア建築史学会), Surabaya 2015.8.1-8.2

◎出版物による業績

・広報・社会連携活動

2015 「旅・いろいろ地球人 ミュージアム⑩島民の心のよりどころ」『毎日新聞』9月17日夕刊。

◎口頭発表、展示、その他の業績

・研究講演

2015年8月1日～8月2日 基調講演 ‘Introduction to the manifestation of Indonesian wooden Architecture’ in International Conference: Manifestation of Architecture in Indonesia, Institut Teknologi Sepuluh Nopember (スラバヤ工科大学) + Lembaga Sejarah Arsitektur Indonesia (インドネシア建築史学会), Surabaya

◎調査活動

・海外調査

2015年8月18日～8月25日—インドネシア（インドネシア、ニース島における伝統的木造建造物の保存に関する調査研究）

2015年8月31日～9月9日—インドネシア（国際シンポジウム「インドネシア建築の出現」に参加及びバリ島、ロンボック島の伝統的木造建築物の保存に関する調査）

2016年3月18日～3月27日—インドネシア（災害展示に関する調査研究）

三島禎子 [みしま ていこ] ————— 准教授

1963年生。【学歴】 セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、津田塾大学大学院国際関係学研究科博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究所第2課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究所第3課程修了（1993）【職歴】 国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）【学位】 D.E.A. Sci. Soc（パリ第

5 大学大学院社会科学部 1993)、M. Soc. (パリ第 5 大学大学院社会科学部 1992)、国際関係学修士 (津田塾大学大学院国際関係学部 1992) 【専攻・専門】文化人類学 (西アフリカ研究) 【所属学会】アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

Charbit, Y. et T. Mishima (éds.)

2014 *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

[論文]

Mishima, T.

2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké: Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima (éds.), *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

三島禎子

2011 「民族の離散と回帰——ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井 洋監修・編, 小川充夫編『グローバル・ディアスポラ』pp.105-130, 東京: 明石書店。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカ商業民の財の形成と継承に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

アフリカ商業民によるアジア・アフリカ間貿易は、中国経済の拡大とともに今日のアフリカ経済の主要な現象のひとつになっている。西アフリカに故地をもつソニンケ民族は、地球規模の民族ネットワークでつながり、他の集団に先駆けてこの新しい経済機会をとらえた。その経済倫理には民族文化の伝統が受け継がれている。

10世紀以上前から商業民として知られるソニンケ民族は、民族文化とともにある種の「財」を継承してきたと考えられる。この有形・無形の「財」の本質と、継承の形態について調査し、移動と商業を生業とするソニンケの民族文化について考察を深めるのが本研究の目的である。

以下の科研において現地調査をおこなうとともに、文献調査では歴史的背景を把握する。

科学研究費助成事業 (基盤研究 (B)) 『日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア-アフリカ関係の都市人類学的研究』(2014~2016年: 代表・和崎春日)

・成果

下記の科学研究費助成事業において、セネガルで現地調査をおこなった。中部大学での研究会においては、「民族の離散と回帰——都市空間における集住のあり方への疑問提示」と題して、個別の研究と科学研究費助成事業の課題をつなぐ問題を提起した。第一に、移民の集住できる条件を地域の経済規模、宗教ネットワーク、移民政策から検討する視点、第二に同じ地域に進出する他のムスリム商人や商業民族との比較の視点、第三に故地での動向に注目する視点の重要性を指摘した。

科学研究費助成事業 (基盤研究 (B)) 『日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア-アフリカ関係の都市人類学的研究』(2014~2016年: 代表・和崎春日)

最終年度の下記科学研究費助成事業においては、成果報告として論文を執筆し、栗田和明編『流動する移民社会——環太平洋地域を巡る人びと』昭和堂が出版された。

科学研究費助成事業 (基盤研究 (B)) 『環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究——近年の変遷に注目して』(2013年~2015年: 代表・栗田和明)

◎出版物による業績

[論文]

三島禎子

2016 「アフリカ系商人の富裕化への奇跡——ソニンケ人商人の移動と生活の営み」栗田和明編『流動する移民社会——環太平洋地域を巡る人びと』pp.87-110, 京都: 昭和堂。

[その他]

三島禎子

2015 「遅れてきた手紙」『毎日新聞』4月9日夕刊。

2015 「砂漠を越え陸海を渡る商人」『産経新聞』6月9日。

2015 「はるかかなたへ」『清高同窓会報』27:13, 9月5日。

2015 「市に集う」『月刊みんぱく』459:2-3, 12月1日。

2016 「みんぱく世界の旅 セネガル① 米を食べるようになった訳とは」『毎日小学生新聞』2月13日。

2016 「みんぱく世界の旅 セネガル② 好きな布で服を仕立てる」『毎日小学生新聞』2月20日。

2016 「みんぱく世界の旅 セネガル③ プリント布が生まれた歴史的背景」『毎日小学生新聞』2月27日。

2016 「みんぱく世界の旅 セネガル④ アフリカにある商品、その流れをたどると……」『毎日小学生新聞』3月5日。

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CDなどの制作・監修

三島禎子監修

2016 「セネガルの生活と文化」『みんぱく映像民族誌』第21集（撮影・制作 国立民族学博物館）日本語、65分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2015年6月5日 「商人と布の移動からみる西アフリカ経済の変遷」カレッジシアター『地球探検紀行』あべのハルカス近鉄本店

2015年7月13日 「移民について考える——アフリカから世界へ広がる商人たち」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年10月18日 「作られたアフリカのなもの」第401回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・その他

2015年5月22日 「民族の離散と回帰——都市空間における集住のあり方への疑問提示」科学研究費助成事業（基盤研究(A)）『日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア——アフリカ関係の都市人類学的研究』研究会、中部大学

◎調査活動

・海外調査

2015年6月12日～6月24日——セネガル（セネガル都市部におけるソニンケ商人と中国人商人の競合についての調査）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ（テーマシリーズ）「問題設定に向けて」

「アフリカ文化研究」担当

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業（基盤研究(A)）『Frequent travelerがつくるコミュニティの研究——環太平洋地域と日本』（代表・立教大学・栗田和明）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）『日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア——アフリカ関係の都市人類学的研究』（代表・中部大学・和崎春日）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

『Revue Européenne des Migrations Internationales』編集委員（アジア担当）、『アフリカ研究』編集委員

吉岡 乾 [よしおか のぼる]————— 助教

1979年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部ウルトゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程（アジア第三専攻）修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了（2012）【職歴】国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員PD（2013）、東京外国語大学世界教養プログラム非常勤講師（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）【学位】博士（学術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）【専攻・専門】言語学、記述言語学、ブルシ

ヤスキー語、ドマーキ語、シナー語、南アジア（パキスタン）研究【所属学会】日本言語学会、関西言語学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[博士論文]

Yoshioka, N.

2012 A Reference Grammar of Eastern Burushaski. 東京外国語大学大学院地域文化研究科.

[論文]

吉岡 乾

2014 「格配列パターンを決める動詞的要素と名詞的要素——パキスタンの言語を対照して」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』10：159-202.

Yoshioka, N.

2010 The Interrogative Element in Burushaski. *Language, Area and Cultural Studies* 16: 383-391.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、北パキスタンのギルギット・バルティスタン自治州フンザ・ナゲル県モミナバード村などで話されている、消滅の危機にある言語であるドマーキ語を中心にしつつ、ブルシャスキー語、シナー語といった周辺言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。この研究は主に、科学研究費助成事業（若手研究(A)）「北パキスタン諸言語の記述言語学的研究」により進める。

・成果

2015年度は夏に現地調査へ行って、ドマーキ語、ブルシャスキー語、シナー語について調べた。年度初めの予定よりも調査期間を短くしたため、昨年度までと同じ地域のみでの現地調査となった。ブルシャスキー語については参照文法執筆のための十分なデータが得られた。ドマーキ語については、新たに物語が1篇、文字起こしを終えられた。

研究の成果は、単行本収録論文、国際学会、国際ワークショップ、国内学会での発表という形で公表した。

◎出版物による業績

[編著書]

Nakayama, T., N. Yoshioka and K. Otsuka (eds.)

2015 *Grammatical Sketches from the Field 2*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

[論文]

吉岡 乾

2015 「北パキスタン諸言語のコピュラ」大西正幸・千田俊太郎・伊藤遊馬編『地球研言語記述論集』7. pp.207-223. [査読有]

2015 「ブルシャスキー語の動詞語幹と他動性」パルデシ プラシャント・桐生和幸・ナロック ハイコ編『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』pp.321-334, 東京：くろしお出版. [査読有]

Yoshioka, N.

2015 Hunza Burushaski. In T. Nakayama, N. Yoshioka and K. Otsuka (eds.) *Grammatical Sketches from the Field 2*, pp.143-178. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. [査読有]

[その他]

吉岡 乾

2015 「旅・いろいろ地球人 驚く③ あの日見た花の名前は」『毎日新聞』4月2日夕刊.

2015 「滋味深い、ことばの寄せ鍋」『月刊みんぱく』39(6)：9.

2015 「文化遺産 おもて・うら 危機言語を救わない」『月刊みんぱく』39(8)：16-17.

- 2015 「評論・展望 世界の屋根の言語事情・研究事情——系統を越えた言語接触の現場」『民博通信』151：4-9.
- 2016 「みんなく世界の旅 パキスタン① ファンザ谷 季節ごとの表情」『毎日小学生新聞』3月12日.
- 2016 「みんなく世界の旅 パキスタン② 大きな谷ごとに異なる言語」『毎日小学生新聞』3月19日.
- 2016 「みんなく世界の旅 パキスタン③ 独自の宗教を信仰」『毎日小学生新聞』3月26日.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2015年10月3日 「ブルシャスキー語：連辞性」『アルタイ型言語に関する類型的研究』2015年度第2回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 2015年10月4日 “Sun” in Language Families of SA -Indo-Aryan, Iranian, Dravidian, &c.-. 『アジア地理言語学研究』2015年度第1回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 2015年12月6日 「ブルシャスキー語の長短差のある自由変異に踏み込む算段」. 『複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性』2015年度第1回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 2016年3月1日 “Riceplant” and “Milk” in SA -Aryan, Iranian, Dravidian, &c.-. 『アジア地理言語学研究』2015年度第3回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年5月5日 ‘On the Copulae of Languages in Northern Pakistan.’ 2nd Kashmir International Conference on Linguistics. The University of Azad Jammu and Kashmir, Muzaffarabad (Pakistan)
- 2015年6月20日 「ブルシャスキー語の空間参照枠」日本言語学会第150回大会、大東文化大学、東京
- 2015年9月27日 「ドマーキ語の言語状況について——消滅の危機に瀕した北パキスタンの印欧語」日本南アジア学会第28回大会、東京大学、東京
- 2015年11月29日 「パキスタンの山奥で言語を調べる」大学共同利用機関シンポジウム2015 研究者に会いに行こう！、秋葉原UDX アキバ・スクエア、東京
- 2015年12月22日 ‘Noun Modifying Expressions in Eastern Burushaski.’ International workshop on Noun Modifying Expressions in South Asian Languages. Deccan College, Pune (India)
- 2015年12月26日 「International workshop on Noun Modifying Expressions in South Asian Languages の報告」記述言語学研究会第68回例会、京都大学、京都

・みんなくゼミナール

- 2015年7月18日 「大陸中央の末端へ——パキスタンの山奥で言語を探す」第446回みんなくゼミナール

・研究講演

- 2015年4月25日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第1回 言語学とは何か」『みんなく発 手話言語学講義 みんなくで言語学を学ぼう』国立民族学博物館第5セミナー室
- 2015年5月17日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第2回 音のつくり（音声・音韻）」『みんなく発 手話言語学講義 みんなくで言語学を学ぼう』国立民族学博物館第7セミナー室
- 2015年6月6日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第3回 語のつくり（形態）」『みんなく発 手話言語学講義 みんなくで言語学を学ぼう』国立民族学博物館第7セミナー室
- 2015年6月27日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第4回 文のつくり（統語）」『みんなく発 手話言語学講義 みんなくで言語学を学ぼう』国立民族学博物館第3セミナー室
- 2015年7月11日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第5回 言語で伝えるもの（意味・語用）」『みんなく発 手話言語学講義 みんなくで言語学を学ぼう』国立民族学博物館第3セミナー室
- 2015年8月8日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第6回 色々な言語学」『みんなく発 手話言語学講義 みんなくで言語学を学ぼう』国立民族学博物館第3セミナー室

・広報・社会連携活動

- 2016年2月3日 「パキスタンの山奥でことばを調べる——大陸中央の『末端』へ」カレッジ・シアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・みんなくウィークエンド・サロン

- 2015年7月26日 「言語から歴史を読み解く——南アジアを例にして」第392回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年8月14日～9月18日—パキスタン（ドマーク語・ブルシヤスキー語・シナー語に関する調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（代表者：三尾 稔）拠点構成員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性」（代表者：中山俊秀）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「[アルタイ型]言語に関する類型的研究」（代表者：山越康裕）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」（代表者：遠藤光暁）研究協力者

民族文化研究部

池谷和信 [いけや かずのぶ] 部長(併)教授

1958年生。【学歴】東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手（1990）、国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2009～2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2014）【学位】理学博士（東北大学大学院理学研究科 2003）【専攻・専門】環境人類学・人文地理学・地球学・生き物文化誌学 1)世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、2)植民地時代における民族社会の変容に関する研究、3)地球環境問題および地球環境史に関する研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合（IUAES）、アメリカ人類学会（American Anthropological Association）、日本生態学会、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会、日本タイ学会、国際考古学会議（World Archaeology Congress）

【主要業績】

[単著]

池谷和信

2003 『山菜採りの社会誌——資源利用とテリトリー』宮城：東北大学出版会。

2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書4）大阪：国立民族学博物館。

[編著]

池谷和信編

2009 『地球環境史からの問い——ヒトと自然の共生とは何か』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2007 日本地理学会優秀賞

1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンsoonアジアにおける家畜化に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

モンスーンアジアの大陸部は、世界の家畜化センターの一つであるといわれる。野鶏、イノシシ、野生の水牛などが、この地で家畜化や家禽化された。しかしながら、アンデスや西アジアなどの他のセンターに比べて、動物の骨があまり見つかっていないために考古学的研究は進んでいない。そこで、本研究では、現存する民族の暮らしのなかで、野生動物の飼い慣らしの行動を体系的に記述・分析することを目的とする。飼い慣らしは、野生から家畜への過程の中で、半家畜ともいわれており、注目すべき段階である。この研究では、どのようにして住民は飼い慣らしに成功したり失敗してきたのか、その技術の違いを見い出すことをねらいとした。

・成果

上述の研究成果は、以下のような2つの論文を刊行することで結実した。まず、イノシシからブタへの課程については、「人類による動物利用の諸相——モンスーンアジアのブタ・人関係の事例」という、本のなかの分担執筆の論文になった。これは、バングラデシュのブタ飼いについての民族誌となっており、ブタ群の群れ管理や移動の範囲については、基礎データを提示している。また、ファルーク氏ほかの連名であるが、ウシ科のガヤルについての行動、生態、社会（人々とのかかわり）などの全体像を示した。この家畜は、半家畜とみなされおり家畜化の際のプロトタイプを考えるうえでも貴重な素材となっている。“Present status of gayal (*Bos frontalis*) in the home tract of Bangladesh”が、その論文名である。

◎出版物による業績

[論文]

池谷和信

- 2015 「供犠される動物、供養される生き物——多様な動物観の共存を求めて」『ビオストーリー』23:16-23, 生き物文化誌学会。
- 2015 「国立民族学博物館における食文化の展示」『社会システム研究』特集号, pp.71-83, 立命館大学社会システム研究所。
- 2015 「人類による動物利用の諸相——モンスーンアジアのブタ・人関係の事例」松井章編『食の文化フォーラム33 生から家畜へ』pp.88-111, 東京:ドメス出版。
- 2016 「民族文化の展示——国立民族学博物館の舞台裏」稲村哲也編『新訂 博物館展示論』pp.107-124, 放送大学教育振興会。
- 2016 「世界の様々な気候帯における人間活動と微地形——狩猟, 採集, 農耕, 家畜飼育からみた枠組み」藤本潔・宮城豊彦・西城潔・竹内裕希子編『微地形学——人と自然をつなぐ鍵』pp.276-299, 東京:古今書院。
- Faruque, M. O., M. F. Rahaman, M. A. Hoque, K. Ikeya, T. Amano, J. L. Han, T. Torji, and A. I. Omar
2015 Present status of gayal (*Bos frontalis*) in the home tract of Bangladesh, *Bangladesh Journal of Animal Science* 44(1): 75-84.
- Ikeya, K.
2016 From Subsistence to Commercial Hunting: Changes of Hunting Activities among the San in Botswana, *African Study Monographs Supplementary Issue* 52: 41-59. Kyoto: The Center for African Area Studies, Kyoto University.

[その他]

池谷和信

- 2015 「人と家畜のエピソード37 冬のモンゴルでみた野生動物の毛皮」JVM 獣医畜産新報68(4):245, 東京:文永堂出版, 4月1日。
- 2015 「人と家畜のエピソード38 アッサムで出会った野鶏」JVM 獣医畜産新報68(5):325, 東京:文永堂出版, 5月1日。
- 2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌① アマゾンの『ピラルク』」『京都新聞』5月13日。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 踊る② 病気治しのダンス」『毎日新聞』5月21日夕刊。
- 2015 「生き物の死へのまなざし——生き物文化誌からの視点」『ビオストーリー』23:6-7, 生き物文化誌学会, 6月1日。
- 2015 「人と家畜のエピソード39 アッサムで出会った水牛」JVM 獣医畜産新報68(6):405, 東京:文永堂出版, 6月1日。
- 2015 「人と家畜のエピソード40 家畜化できない動物エランド」JVM 獣医畜産新報68(7):485, 東京:文永堂出版, 7月1日。

- 2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑨ 魅惑の果実『カムカム』」『京都新聞』7月15日。
- 2015 「人と家畜のエピソード41 馬と人とのかわり」JVM 獣医畜産新報68(8)：565, 東京：文永堂出版, 8月1日。
- 2015 「アフリカのスイカ」『産経新聞』8月3日夕刊。
- 2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑩ カラハリ砂漠のスイカ」『京都新聞』8月19日。
- 2015 「人と家畜のエピソード42 クマと人とのかわり」JVM 獣医畜産新報68(9)：696, 東京：文永堂出版, 9月1日。
- 2015 「関西シンポジウム2015/野生動物から家畜への道——趣旨説明」『ヒトと動物の関係学会誌』41(9)：10-12, ヒトと動物の関係学会。
- 2015 「関西シンポジウム2015/野生動物から家畜への道 家畜になったイノシシ, ならなかったベッコリ——：熱帯」『ヒトと動物の関係学会誌』41(9)：22-26, ヒトと動物の関係学会, 9月1日。
- 2015 「関西シンポジウム2015/野生動物から家畜への道 野生動物から家畜への道 総合自由討論」『ヒトと動物の関係学会誌』41(9)：33-42, ヒトと動物の関係学会, 9月1日。
- 2015 「自然災害と民俗」市川秀之・中野紀和・篠原徹・常光徹・福田アジオ編『はじめて学ぶ民俗学』pp.193-194, 京都：ミネルヴァ書房。
- 2015 「人と家畜のエピソード43 モンゴルのヤク」JVM 獣医畜産新報68(10)：791, 東京：文永堂出版, 10月1日。
- 2015 「人と家畜のエピソード44 北上山地の移牧」JVM 獣医畜産新報68(11)：805, 東京：文永堂出版, 11月1日。
- 2015 「アフリカのスイカ」『切抜き速報 食と生活版』2015年11号。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 世界の都市化① アフリカの通勤列車」『毎日新聞』11月5日夕刊。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 世界の都市化② 中国の夜行列車の風景」『毎日新聞』11月12日夕刊。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 世界の都市化③ エキスポシティの誕生」『毎日新聞』11月19日夕刊。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 世界の都市化④ アマゾンの港町の風景」『毎日新聞』11月26日夕刊。
- 2015 「人と家畜のエピソード45 ミラノ万博と家畜文化」JVM 獣医畜産新報68(12)：885, 東京：文永堂出版, 12月1日。
- 2016 「サルと人の絆」『月刊みんぱく』40(1)：2-3, 国立民族学博物館。
- 2016 「人と家畜のエピソード46 世界のサル類と人」JVM 獣医畜産新報69(1)：5, 東京：文永堂出版, 1月1日。
- 2016 「東日本大震災以降の三陸漁村でのアワビ採取」『小規模経済プロジェクト NEWSLETTER』pp.3-8。
- 2016 「松井章さんと HCMR (日本・タイ鶏プロジェクト)」家畜資源研究会報15：34-37, 家畜資源研究会。
- 2016 「人と家畜のエピソード47 闘う牛と人とのかわり」JVM 獣医畜産新報69(2)：146, 東京：文永堂出版, 2月1日。
- 2016 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑪ サルの肉」『京都新聞』2月17日。
- 2016 「人と家畜のエピソード48 カンボジアの牛車 その1」JVM 獣医畜産新報69(3)：165, 東京：文永堂出版, 3月1日。

Ikeya, K.

2015 “Rock Art in the Namibian Wilderness” (Photo text) Newton, April (for iPad)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年1月10日 「熱帯アジアにおける狩猟採集民の環境文化史」総研大・学融合推進センター・戦略的共同研究・学内公開セミナー「料理の環境文化史：生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト」国立民族学博物館（代表：野林厚志）

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月17日 「考古学の4研究報告へのコメント——ヤギと人、ブタと人」公開シンポジウム『家畜化と乳利用 その地域的特性をふまえて——搾乳の開始をめぐる谷仮説を手がかりにして』京都大学

2015年6月20日 「モンスーンアジアにおける狩猟活動について——野鶏の事例」日本熱帯生態学会25周年記

- 念大会（ポスター発表）京都大学
- 2015年7月4日 「野鷄から家鷄への道——飼い慣らし技術の比較研究」日本動物考古学会、奈良文化財研究所
- 2015年7月15日 ‘How have local people shaped spaces in the Kalahari Desert?: place names, mobility, territoriality’ IUAES, Thammasat University, Bangkok, Thailand
- 2015年7月29日 ‘Peccary hunting among Local People and animal management in the Peruvian Amazon.’ Vth International Wildlife Management Congress, Sapporo, Japan
- 2015年9月8日 ‘Sedentarization among nomadic San hunter-gatherers in Central Botswana.’ CHAGS11 (11th Conference on Hunting and Gathering Societies) University of Vienna, Vienna, Austria
- 2015年9月26日 Humanity group in HCMR, Tokyo HCMR (Human-Chicken Multi-Relationships Research Project) Seminar, Toshi Center Hotel, Tokyo, Japan
- 2015年10月9日 (池谷和信・黒澤弥悦の連名) 「「イノシシ型在来ブタ」の放牧管理について——バングラデシュとインドの比較」第103回日本養豚学会、岐阜市じゅうろくプラザ
- 2015年10月9日 (黒澤弥悦・渡辺和之・池谷和信の連名) 「ネパールとインドで観察した「イノシシ型在来ブタ」——特にその無人移動放牧の群れについて」第103回日本養豚学会、岐阜市じゅうろくプラザ
- 2015年12月13日 「アフリカ狩猟採集民を対象にした狩猟研究の動向：カラハリ砂漠の事例」第14回教育・学習の人類学セミナー セントラル・カラハリ・サン（ブッシュマン）におけるコミュニケーションの自然誌、京都大学
- 2016年1月9日 「考古・民族・実践班の統合へ向けて：岩手県の漁村の事例」地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性プロジェクト研究会、総合地球環境学研究所。
- 2016年1月24日 Comment, Kick-off Symposium of NIHU Area Studies Program for Northeast Asia “Rediscovery of Northeast Asia,” National Museum of Ethnology
- 2016年3月13日 「コメント：食と農のアフリカ史——現代の基層に迫る」東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所
- 2016年3月22日 池谷和信・渡辺和之「富士山麓における茅場利用と財産区」2016年日本地理学会春季学術大会・シンポジウム『山岳地域における資源利用と観光化——ヒマラヤ・ヨーロッパ・日本』早稲田大学
- 2016年3月29日 「バングラデシュ及びインド・アッサム州の豚飼育研究の最新動向」第16回熱帯家畜利用研究会、国立民族学博物館
- ・研究講演
- 2015年10月28日 基調講演「私たちと家畜とのかかわりの原点を求めて——世界をフィールドワークする」九州（産業動物）連絡会・畜産技術協会・第2回合同シンポジウム（アニマルウェルフェアシンポジウム「産業動物のアニマルウェルフェア：身近な所在事例を考える」）熊本市男女共同参画センターはあもにい
- 2015年12月5日 基調講演「狩猟採集民からみた人類の社会進化——移動、分配、人・動物関係」日本人間行動進化学会、総合研究大学院大学
- 2016年2月21日 基調報告「狩猟採集、漁撈、農耕からみた環境と文化」第44回 近畿民俗学会・年次研究大会、大阪市立歴史博物館
- ・広報・社会連携活動
- 2015年4月17日 「総論、アフリカにおける動物と人」NPO 法人大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
- 2015年4月24日 「アフリカの都市化と地域社会」NPO 法人大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
- 2015年5月19日 「ラクダの文化誌」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター
- 2015年5月22日 「ブタの文化誌——ブタと人との絆」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター
- 2015年10月20日 「クジラ、イルカの文化誌：異文化を理解する」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター
- 2015年10月22日 「世界の鳥と人とかかわり——羽の美しさを求めて」連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——世界の天然素材」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1F
- 2015年11月20日 「拡大する文明、継承される伝統文化」NPO 法人大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
- 2015年11月28日 「拡大する文明と継承される伝統文化」無印・民博ウールツアー 館内ツアー「みんぱくって？ ウールって？」国立民族学博物館

- 2016年 1月11日 「世界の諸文化からみた生き物と人——地球をフィールドワークする」トークイベント「みんなく×ニフレル——人と生き物をつなぐ」国立民族学博物館
- 2016年 1月29日 「狩猟採集民文化と岩絵」園田・みんなく連携講座「世界の造形・芸能にみる“美”の文化」園田女子学園大学総合生涯学習センター
- 2016年 1月29日 「美しさを求めて——ビーズをめぐる人類の旅」園田・みんなく連携講座「世界の造形・芸能にみる“美”の文化」園田女子学園大学総合生涯学習センター
- 2016年 2月 6日 「世界の食文化——みんなくの展示から」第451回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・みんなくウィークエンド・サロン

- 2015年 8月23日 「みんなくで世界一周！——世界のいきものたちに会いに行こう」第395回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・ラジオ・テレビ

[ラジオ番組]

2015年 5月13日 『人間にとってスイカとは何か』TOKYO FM「中西哲生のクロノス」

[TV番組]

2015年 9月14日 おちゃのこSaiSai「いらっさい」J:COMチャンネル

◎調査活動

・国内調査

- 2015年 8月 9日～8月12日—岩手県山田町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）
- 2015年10月14日—山形県鶴岡市（アマゾンの文化に関する資料収集）
- 2016年 1月30日～2月 2日—岩手県山田町・大槌町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）
- 2016年 3月18日～3月19日—熊本県五木村（九州山地の資源利用に関する研究）

・海外調査

- 2015年 7月14日～7月22日—タイ（国際人類学・民族学会議参加。研究報告及び鬮鶏に関する資料収集）
- 2015年 9月 5日～9月13日—オーストリア（第11回国際狩猟採集社会会議に参加及び研究報告）
- 2015年10月16日～10月19日—中華人民共和国（第5回アジア食文化会議へ参加）
- 2015年10月28日～11月 4日—イタリア（高地における環境開発に関する資料収集）
- 2015年12月 6日～12月12日—ラオス（狩猟採集民の食文化に関する資料収集）
- 2016年 1月15日～1月21日—カンボジア（熱帯における家畜資源に関する資料収）
- 2016年 2月 7日～2月15日—エクアドル（熱帯における森林生態資源の利用に関する資料収集）
- 2016年 3月23日～3月28日—バングラディッシュ、タイ（熱帯の豚飼育に関する資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）副指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——『高地文明』の発見に向けて」（研究代表者：山本紀夫）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「森林生態資源の地域固有性とグローバルドメスティケーションに関する研究」（研究代表者：小林繁男）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「乳文化の視座からの牧畜論考——全地球の地域間比較による新しい牧畜論の創生」（研究代表者：平田昌弘）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「多起源の家畜化モデルの構築と学融合型資料収蔵システムの確立」（研究代表者：遠藤秀紀）研究分担者、総合研究大学院大学学融合推進センター研究事業「戦略的共同研究Ⅰ」（代表者：野林厚志）研究分担者、総合地球環境学研究所研究プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性——歴史生態学からのアプローチ」（代表者：羽生淳子）研究分担者、家畜資源研究会（HCMR）研究分担者、牛車研究会（代表者：池内克史）研究分担者、味の素食の文化センター食のフォーラムメンバー

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

Nomadic Peoples 編集委員、Museum Anthropology (USA) 編集委員、Tribes and Tribals (India) 編集委員、日本アフリカ学会評議員、人文地理学会理事、生き物文化誌学会副会長、静岡県文化・観光部世界遺産センター選考委員、ヒトと動物の関係学会評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所運営委員、ピオストーリー編集委員

・非常勤講師

広島大学大学院国際協力研究科「途上国農村地域研究」(集中講義)
名古屋大学文学部および大学院文学研究科「生き物文化の研究」(集中講義)

笹原亮二 [ささはら りょうじ] ————— 教授

1959年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒(1982)、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程前期修了(1995)、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程後期退学(1995)【職歴】相模原市立博物館学芸員(1982)、国立民族学博物館第1研究部助手(1996)、国立民族学博物館民族文化研究部助手(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(2001)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2004)【学位】博士(歴史民俗資料学)(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 2001)、修士(歴史民俗資料学)(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 1995)【専攻・専門】民俗学、民俗芸能研究 1) 日本の獅子舞の民俗学的研究、2) 日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、3) 民俗学における資料論【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

[単著]

笹原亮二
2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

[編著]

笹原亮二編
2009 『口頭伝承と文字文化——文字の民俗学 声の歴史学』京都：思文閣出版。

[論文]

笹原亮二
2005 「用と美——柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司共編『柳宗悦と民藝運動』pp.273-294, 京都：思文閣出版。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の祭と民俗芸能における装飾性の諸相

・研究の目的、内容

我々の生活の場には、衣類や食器や家具など様々なモノが存在し、我々はそれらを所有し、用いて生活を営んできた。そうしたモノに対し、我々は道具としての利便性や実用性に関心を向けがちである。しかし、現実の生活の場には、道具としての利便性や実用性が必ずしも問題とされないモノも存在する。それは、祭や民俗芸能において見られる御幣・仮面・笠・曳山などの品々である。それらは、形態や色彩などに殊更に趣向が凝らされ、日々の生活の場のモノとは大いに趣を異にする。また、こうしたモノを使用して行う儀礼や芸能といった身体行為も、家庭内の日々の労働や生産業の際に実用的な道具類を用いて行う身体行為とは、大いに趣を異にしている。そうしたモノや身体行為の最たるものが、祭や年中行事の際に、人々が趣向を凝らして作り、見物の観覧に供する造形物、「造り物」であり、非日常的な身体技術を駆使して見物を魅了する芸能、「軽業」や「曲芸」である。こうした各地の祭や民俗芸能における、モノと身体技術の両面で見られる装飾性に富んだ多種多様な趣向を、人々の願いや喜びや晴れがましさとといったハレの機会における闊達な精神活動の所産として捉えて実態の把握を試みる。そして、それらを通じ、各地で様々な祭や民俗芸能を脈々と営んできた人々の心性や感覚、即ち「ハレのこころ」のありようや歴史を考える。

本研究の実施にあたっては、申請者が研究代表者の科学研究費助成事業(基盤研究(C))「本州とその周辺の

島々及び多島海海域における民俗芸能の研究」も活用するほか、申請者が来年度開催を予定している特別展「見世物大博覧会」の準備のための準備調査と連携して進める。

・成果

祭や民俗芸能に関わるモノの装飾性については、鳥取県南部町法勝寺の春祭の一式飾、島根県出雲市平田町の平田天満宮祭の平田一式飾など、陶磁器・金属食器・竹細工・餅搗き道具などの同類・同種の器物を用いて様々な造形を作り上げる一式造り物、東京都荒川区南千住の素戔雄神社の天王祭の山車人形「稲田姫」、群馬県桐生市の祇園祭の山車人形「須佐之男命」、香川県高松市愛宕神社祭の山車人形「源為朝鬼退治」、岡山県倉敷市の祭礼人形飾り由来の化物人形、大阪府大阪市西区阿波座通りの陶器神社夏祭の瀬戸物人形などの各種の人形造り物、三重県伊勢市園部町上條の大念仏の仕掛花火と手筒花火、同市同町小林の大念仏の手筒花火といった花火の風流、三重県大紀町錦の八幡祭の山車、愛知県蒲郡市三谷町の三谷祭の「ヤマ」、島根県隠岐の島町五箇の水若酢神社祭礼風流の「ヤマ」、宮城県石巻市雄勝町の「おめつき」祭の山車など、祭に登場する山・山車・鉾・屋台などの大型の構造物について、全体で蓬莱山などの縁起物を模した形状を作ったり、魚や団子といった海山の収穫物を見物人に誇示するように内部に飾り付けたりする構造物自体の造形や、それらに付加する造花・常緑樹・鶴亀などの縁起物を象った造形物などの装飾、三重県伊勢市園部町上條の大念仏のかんこ踊りや同市同町小林の大念仏のかんこ踊りにおける太鼓や桴の五色の紙の飾り、三重県志摩市大王町波切の大念仏における故人の遺品や所縁の品が吊り下げられた「カサブク」、島根県隠岐の島町中村の武良祭の軍配や鉾や流鏝馬の射手の笠や弓矢、同県同町五箇の祭の流鏝馬の射手の笠や弓矢、新潟県佐渡市小比叡の田遊びの餅製の農具といった、祭や民俗芸能において用いられる様々な趣向を凝らした祭具や用具類などについて、現地調査・記録作成・資料化を行った。

祭や民俗芸能に関わる身体技術の装飾性については、直立した柱に舞手が登り、天辺で逆立ちをしたり、柱から地面に張り渡した綱を様々な姿勢をとりながら滑り降りたりする、茨城県龍ヶ崎市上町の八坂神社の祇園祭の撞舞、舞手が3～4段に肩車を組んで獅子舞を演じる愛媛県今治市の継ぎ獅子、柱の上部に取り付けた横木にぶら下がって舞う、千葉県多古町多古の八坂神社祭のしいかご舞、米俵や木箱を投げ上げたり、頭上で組み上げたり、腹上で白と杵を用いて餅搗きをしたりする、神奈川県川崎市中原区の新城神社秋祭の囃子曲持、舞手が逆立ちしたり反り返ったまま動き回る一人芸や2人で組み合っの連続回転や肩車などの二人芸を演じる、新潟県新潟市南区月潟の白山神社祭（地藏祭）の角兵衛獅子、獅子頭を遣う舞手と後ろ足を受け持つ舞手が幌の中で肩車をしたり組み合っで回転したり碁盤の上で逆立ちをしたりして獅子舞を行う、京都府京都市上京区の小山郷の六歳念仏、獅子頭を遣う舞手と後ろ足を受け持つ舞手が幌の中で組み合っで逆立ちをする「逆抱き」や肩車をして背高になる（「あぶになる」）演技を行う「曲獅子」を演じる、岐阜県飛騨市古川町数河の白山神社祭の数河獅子舞、直立した梯子に虎（獅子）が登って先端で舞う岩手県大船渡市神坂の熊野神社式年大祭の梯子虎舞、八郎潟に浮かべた船上に4本柱を立てて櫓を組み、そこに張り渡した綱の上で舞手が回転する、秋田県湯上市天王町・男鹿市船越の八坂神社祭の蜘蛛舞について、現地調査・記録作成・資料化を行った。

各地の祭や民俗芸能で見られた祭具や用具類や身体技術の装飾性は、それぞれの祭や民俗芸能ごとに独特な趣向や意匠や形象が認められ、具体的な様相は様々であるが、そうした多様性の一方で、それらの装飾性全体に関わる問題の所在も明らかになった。

そうした問題の1つとして、それらの装飾性を巡る専門家の関与と一般の人々の関係が挙げられる。祭具や用具類などのモノの装飾性を巡っては、それぞれの祭や民俗芸能の執行の当事者である地域の一般の人々が、一式造り物や人形造り物などの趣向を凝らした造形物を製作したり、山車や太鼓や桴などの祭具や用具類に装飾を施したり、基本的には自ら装飾製作の実施主体となっていたが、人形造り物の頭部や山車人形は専門の人形師が製作していたり、祭具や用具類の装飾に用いる紙の意匠が元々は陰陽道の五行説に由来するなど専門の宗教者である陰陽師が管理していた知識に基づいていたり、様々なかたちで専門家の関与が認められた。また、一式造り物や人形造り物では、地域で非専門的に製作に従事していた一般の人々が、後に専門の人形師として活動するようになった場合もあった。これらは、モノの装飾性を巡っては、専門家の関与と一般の人々の実践とは厳密に区別されるわけではなく、実際は一定程度の共通性や連続性が存在していたことを示している。

祭や民俗芸能の身体技術の装飾性を巡っても同様の傾向を見て取ることができる。各地の芸能で見られた装飾性の高い身体技術が駆使された芸態は、軽業や曲芸を専らとしていた専門芸能者の技芸に由来すると考えられるものが少なくない。撞舞、しいかご舞、蜘蛛舞と類似の芸態は、江戸時代に見世物小屋で専門芸能者による軽業として興行されて人気を博していたことが知られる。新潟市南区月潟の角兵衛獅子は、江戸時代から明治・大正にかけて全国各地を巡って軽業や曲芸を演じていた専門芸能者による芸態が、地域の人々が演じるかたちで民俗芸能化したものである。曲芸や軽業的な芸態を有する各地の獅子舞は、江戸時代以降、全国各地を

巡って曲芸や軽業的な芸能を演じて人気を博した大神楽や角兵衛獅子といった専門芸能者の芸能を真似たり習得したりして始まったと考えられ、実際に大神楽や角兵衛獅子に由来する創始伝承を有するところも見られる。

こうしたことは、各地で様々な祭や民俗芸能を演じ、伝えてきた人々の心性や意識や感覚、即ち「ハレのころ」の形成に、芸能や宗教などに通じた専門者の知識や技術が深く関わっていることを示している。

また、こうした専門者の知識や技術が最も効果的に発揮された場の1つが、江戸時代後期から明治・大正にかけて都市部の盛り場を中心に盛行し、人々を魅了した細工物や身体技芸などの見世物興行であり、それらが都市部に止まらず、それ以外の地域においても、一般の人々によって祭や年中行事などのハレの場を通じて受容され、定着を見たことを考えると、見世物の文化としての広範な伝播が、各地の人々のハレの心性や感覚や美意識の形成にいかなる影響を与えたかといった問題が、改めて浮かび上がってくる。

本研究の実施にあたっては、特に、三重県伊勢志摩地方、新潟県佐渡島、宮城県牡鹿半島における現地調査は、申請者が研究代表者の科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究」の一環として行った。また、各地の一式造り物や人形造り物、軽業系民俗芸能の現地調査は、申請者が2016年に開催を予定している特別展「見世物大博覧会」の準備のための準備調査の一環として行った。本調査の成果は、同特別展の開催、カタログなどの関連出版物の刊行、講演会などの関連催し物の実施などを通して公表を図る予定である。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2016年3月23日 「ダンジリの系譜」カレッジシアター「地球探検紀行」、あべのハルカス近鉄本店

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

高根県古代文化センター資料評価委員・同客員研究員、鳥取県文化財保護審議会専門委員

・非常勤講師

関西学院大学文学部「地理学地域文化学特殊講義」

杉本良男 [すぎもと よしお] 教授

1950年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科卒（1974）、東京都立大学大学院社会科学研究所社会人類学専攻修士課程修了（1977）、東京都立大学大学院社会科学研究所社会人類学専攻博士課程単位取得退学（1980）【職歴】国際基督教大学教養学部社会科学科非常勤助手（1979）、南山大学文学部講師（1981）、南山大学人類学研究所第一種研究所員兼任（1984）、南山大学文学部助教授（1986）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1999）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 1995）、文学修士（東京都立大学 1977）【専攻・専門】社会人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[単著]

杉本良男

2015 『スリランカで運命論者になる——仏教とカースト制が生きる島』（フィールドワーク選書14）京都：臨川書店。

[編著]

杉本良男編

2014 『世界民族百科事典』（国立民族学博物館編、編集委員長）東京：丸善出版

2014 『キリスト教文明とナショナリズム——人類学的比較研究』（国立民族学博物館論集2）東京：風響社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

キリスト教文明と南アジア・ナショナリズム

・研究の目的、内容

本研究は、主としてフランス革命期以後の「キリスト教文明」の展開が、南アジア地域においてどのような影響を与え、またそれがどのような問題を引き起こしているのかについて、文献研究と現地調査によって系譜論的に明らかにしようとするものである。

本年度は、グローバル化と急速な経済発展が進む南インドにおいて、都市・村落社会にどのような構造変動及んでいるかを実証的に明らかにしようとする系譜学的研究の総まとめの段階にあたる。

本年度は、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（代表者・杉本良男）および科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環：生活文化の視点から」（代表者・杉本大三）によって実施した都市・農村部における共同調査資料のとりまとめと執筆作業を進める。さらに、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究——東西融和と民族主義の相克」（代表者・安藤礼二）により、神智(学)協会と南アジア・ナショナリズムとの関連についての系譜学的研究を実施し、現在の過激化するナショナリズムの淵源を明らかにしつつ、その現代的意義についての研究を進める。

・成果

本年度は、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（代表者・杉本良男）および科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環：生活文化の視点から」（代表者・杉本大三）によって実施した都市・農村部における共同調査資料のとりまとめと執筆作業を進め、日本南アジア学会年次大会（東大）において共同で中間報告を行い、さらに共同研究者とともに研究成果とりまとめの作業を行った。また、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究——東西融和と民族主義の相克」（代表者・安藤礼二）により、神智(学)協会と南アジア・ナショナリズムとの関連についての系譜学的研究を実施し、『国立民族学博物館研究報告』40巻2号に特集「マダム・ブラヴァツキーとチベット」を組み、3名の若手研究とともに研究成果を公開した。

◎出版物による業績

[単著]

杉本良男

2015 『スリランカで運命論者になる——仏教とカースト制が生きる島』（フィールドワーク選書14）京都：臨川書店。

[共編]

杉本良男・三尾稔編

2015 『現代インド6 環流する文化と宗教』東京：東京大学出版会。

[論文]

杉本良男

2015 「『インド』をめぐる知の変容」三尾稔・杉本良男編『現代インド6 環流する文化と宗教』pp.219-241, 東京：東京大学出版会。

2015 「映画の21世紀」三尾稔・杉本良男編『現代インド6 環流する文化と宗教』pp.153-157, 東京：東京大学出版会。

2015 「特集：マダム・ブラヴァツキーのチベット——序論」『国立民族学博物館研究報告』40(2)：199-213, 大阪：国立民族学博物館。

2015 「闇戦争と隠秘主義——マダム・ブラヴァツキーと不可視の聖地チベット」『国立民族学博物館研究報告』40(2)：267-309, 大阪：国立民族学博物館。

[その他]

杉本良男

2015 「聖・聖性、場所・空間」『民博通信』150：24-25。

2015 「インド映画の新潮流——多言語での製作充実」『産経新聞』（大阪）7月14日夕刊。

2015 「みんぱく世界の旅 インド① 民族衣装サリール」『毎日小学生新聞』10月17日。

2015 「みんぱく世界の旅 インド② 映画が娯楽の王様」『毎日小学生新聞』10月24日。

2015 「みんぱく世界の旅 インド③ 経済の発展によりさまざまな変化」『毎日小学生新聞』10月31日。

2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌② 聖人ガンディーの誤算」『京都新聞』11月4日。

2015 「みんぱく世界の旅 インド④ 教育の水準 大きく変化」『毎日小学生新聞』11月7日。

2015 「<特集市に集う>インドのショッピング・モール」『月刊みんぱく』39(12)：7-8。

2015 Twenty Years of Indian Films at Minpaku, *MINPAKU Anthropology Newsletter* 41: 7-8.

2016 「<味の根っこ>サンバル」『月刊みんぱく』40(3)：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年9月27日 「南インド農村における宗教の消費」セッション「現代インドの消費行動と社会システム」(代表者・杉本大三) 日本南アジア学会第28回全国大会、東京大学

・研究公演

2015年7月20日 『ファンドリー』みんぱく映画会/インド映画特集

2015年7月25日 『カンーチワラム サリーを織る人』みんぱく映画会/インド映画特集

2015年8月2日 『Mr & Mrs アイヤル』みんぱく映画会/インド映画特集

2015年8月8日 『DDLJ 勇者は花嫁を奪う』みんぱく映画会/インド映画特集

◎調査活動

・海外調査

2015年10月1日～10月6日—韓国(韓国におけるインド文化受容に関する調査研究)

2016年1月12日～1月24日—インド(南インド社会の構造変動についての調査研究)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業(基盤研究(B))「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」研究代表者、科学研究費助成事業(基盤研究(B))「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環：生活文化の視点から」(研究代表者：杉本大三) 研究分担者、科学研究費助成事業(基盤研究(B))「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究——東西融和と民主主義の相克」(研究代表者：安藤礼二) 研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

公益信託「澁澤民族学振興基金」運営委員、日本学術会議連携会員、神戸大学附属中等教育学校文部科学省指定研究開発に係る運営指導委員

竹沢尚一郎 [たけざわ しょういちろう] ————— 教授

1951年生。【学歴】東京大学文学部宗教学専攻卒(1976)、東京大学大学院人文科学研究科宗教学専攻修士課程修了(1978)、フランス社会科学高等研究院社会人類学専攻博士課程修了(1985)【職歴】日本学術振興会特別研究員(1985)、九州大学文学部助教授(1988)、国立民族学博物館併任助教授(1996)、九州大学大学院人間環境学研究院教授(1998)、国立民族学博物館民族学研究部教授(2001)、九州大学大学院併任教授(2001)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2002)、国立民族学博物館民族文化研究部教授(2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長(2007)【学位】民族学博士(フランス社会科学高等研究院 1985)、文学修士(東京大学 1978)【専攻・専門】宗教人類学、アフリカ史、人類学学説史【所属学会】日本宗教学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会

【主要業績】

[単著]

竹沢尚一郎

2013 『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』東京：中央公論社。

2010 『社会とは何か——システムからプロセスへ』(中公新書)東京：中央公論社。

2007 『人類学的思考の歴史』京都：世界思想社。

【受賞歴】

1988 日本宗教学会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 西アフリカ史研究
- 2) 被災のコミュニティ研究

・研究の目的、内容

- 1) 2012～2015年度の日本学術振興会の科学研究費助成事業を得て、アフリカ史研究を遂行する。具体的には、西アフリカ・マリ国で考古学発掘調査を実施し、その成果を素に西アフリカ史記述をおこなう。また、他のアフリカ史研究者と共同研究を推進する。
- 2) 岩手県大槌町をテーマとして、被災前の三陸の沿岸文化と、被災後の人びとの行動を中心に、企画展示「人類学者の見た東日本大震災」を実施する予定である。そのために、総合研究大学院大学の学融合プロジェクトに応募するなどして、準備を進める。

・成果

- 1) 日本学術振興会の科学研究費を得て、西アフリカで考古学発掘とこれまでの研究成果の精査を行った。その成果を仏語の論文集のかたちで、マリの研究機関人文科学研究所の機関誌『Etudes maliennes』誌の特別号として出版する予定であった。ところが、マリの出版社側の事情により出版することができなかった。校正作業はすべて完了しているので、日本で2016年5月までに出版する予定である。そのほか、論文「世界の中のアフリカ史」を山川出版社の『歴史と地理』に寄稿したほか、『マリを知るための58章』を編著の形で明石書店より出版した。
- 2) 国立民族学博物館で2016年1月より4月まで企画展を実施する予定であり、それに向けて、民俗資料の選び出しや、展示予定の写真の選び出しなどの準備を進めた。そのほか、編著『ミュージアムと負の記憶』を東信堂より出版した。

◎出版物による業績

[編著]

竹沢尚一郎編

- 2015 『ミュージアムと負の記憶——戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』東京：東信堂。[査読有、民博機関研究「モノの崇拜」の成果]
- 2015 『マリを知るための58章』東京：明石書店。

[論文]

竹沢尚一郎

- 2015 「世界のなかのアフリカ史」『歴史と地理』689：1-14，東京：山川出版社。

[その他]

竹沢尚一郎

- 2015 「震災遺構とコミュニティ」『聖教新聞』4月2日。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 ミュージアム⑩ 負の記憶を伝えること」『毎日新聞』9月24日。
- 2015 「東日本大震災の避難所が教えてくれるもの」『月刊みんぱく』39(10)：8-9。
- 2016 「ミュージアムと負の記憶」『民博通信』152：26。
- 2016 「展示でつくる被災地の未来」『京都新聞』3月25日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

- 2015年4月18日 「10世紀の西アフリカに伝わった中国製磁器——アフリカから世界史を考える」第443回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

- 2015年10月23日 「アフリカの歴史を考える」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
- 2015年10月30日 「西アフリカ、マリの現在」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2015年9月27日 「アフリカ史の謎を解く」第398回みんぱくウィークエンド・サロン研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

- 2015年9月13～9月18日一岩手県大槌町（企画展「東日本大震災の展示（仮）」の準備のための調査）

2015年10月31～11月6日一岩手県大槌町（企画展「東日本大震災の展示（仮）」の準備のための調査）
2016年3月7～3月12日一岩手県大槌町（企画展「東日本大震災の展示（仮）」の準備のための調査）

・海外調査

2015年8月15日～9月2日一フランス、マリ（出版打ち合わせ及び資料収集）
2015年11月27日～1月17日一フランス、マリ（考古学の発掘作業と資料収集）
2016年3月18日～3月27日一インドネシア（災害展示に関する調査研究）

◎大学院教育

・論文審査

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

出口正之 [でぐち まさゆき] 教授

1955年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）【職歴】ジョンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教授（1995）、総合研究大学院大学学長補佐（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）【専攻・専門】NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学【所属学会】国際NPO・NGO学会（ISTR = International Society for Third Sector Research）、米国NPO学会（ARNOVA = The Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action）、非営利法人研究学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[著書]

出口正之

1993 『フィランソロピー』東京：丸善出版

[共編著]

Vinken, H., Y. Nishimura, B. L. J. White, and M. Deguchi (eds.)

2010 *Civic Engagement in Contemporary Japan Civic Engagement in Contemporary Japan*. New York/Dordrecht/Heidelberg/London: Springer.

本間正明・出口正之編著

1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

[分担執筆]

Deguchi, M.

2001 The Distortion between Institutionalized and Noninstitutionalized NPO: New Policy Initiative and the Nonprofit Organizations in Japan. In H. K. Anheier and J. Kendall (eds.) *Third Sector Policy at the Crossroads: An International Nonprofit Analysis*, pp.277-301. London and New York: Routledge.

【受賞歴】

1988 東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

1988 日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞

1995 ESP 大来佐武郎賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公益法人その他の民間非営利公益団体の総合的研究

・研究の目的、内容

科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究「法・会計・文化融合型の公共政策国際比較研究 チャリティ制度を事例に」に基づき、公益認定等委員会制度及び公益法人その他の民間非営利公益団体（＝チャリティ）の国際比較研究を行った。家元組織、スポーツ団体、学会等独自の組織文化を持つチャリティ組織の研究を実施した。

また、ニュージーランド、イギリスや中国の制度を国際比較的に研究を行った。

・成果

招待講演

「第三回中国公益慈善プロジェクト交流展示会」(THE FORTH CHINA CHARITY FAIR)における「公益慈善に関する国際シンポジウム」において招待講演「日本の公益慈善に関する法律と政策」

発表論文

- 2015 「公益法人制度の昭和改革と平成改革における組織転換の研究」『非営利法人研究学会誌17：49-60』非営利法人研究学会。[査読有]
- 2015 「寄附は心の投票 インパクトのある公益活動こそ寄附の源（特集 いま、知っておきたい公益・一般法人の「寄附）」『公益・一般法人』890：46-49。
- 2015 「特定費用準備資金について」『公益・一般法人』894：30-36。
- 2015 「収支相償と「適正な費用」の範囲」『公益・一般法人』896：34-42。
- 2015 「定款の目的、経理的基礎、技術的能力」『公益・一般法人』898：24-30。
- 2015 「特別の利益の3つの留意点」『公益・一般法人』900：34-40。
- 2015 「投機的取引・公序良俗及び収益事業等」『公益・一般法人』902：34-40。
- 2015 「公益目的事業比率について」『公益・一般法人』904：80-86。
- 2015 「遊休財産保有制限について」『公益・一般法人』906：70-79。
- 2016 Policy change making the biggest Corporate Philanthropy in Japan: Yamato Welfare Foundation and “the service-related philanthropy”『政策科学』23(3)：67-80 立命館大学政策科学会。
- 2016 「不可欠特定財産の考え方」『公益・一般法人』908：60-64。
- 2016 「3分の1規制と会計監査人設置原則」『公益・一般法人』910：60-66。
- 2016 「役員等の報酬等の支給基準と社員資格の得喪条件」『公益・一般法人』912：54-58。

学会口頭発表

- ・ European Research Network On Philanthropy での口頭論文発表（バリ）。
- ・ International Society for Third Sector Research Asia Pacific regional conference（東京）での論文口頭発表。
- ・ 非営利法人研究学会での口頭論文発表。

上記研究は科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究「法・会計・文化融合型の公共政策国際比較研究」（研究代表者出口正之）の一環として実施した。

◎出版物による業績

[論文]

出口正之

- 2015 「寄附は心の投票 インパクトのある公益活動こそ寄附の源」『公益・一般法人』890：46-49。
- 2015 「編集員が訊く」出口正之 & 島村真佐利（対談）『公益・一般法人』892：14-21。
- 2015 「特定費用準備資金について」『公益・一般法人』894：30-36。
- 2015 「収支相償と「適正な費用」の範囲」『公益・一般法人』896：34-42。
- 2015 「定款の目的、経理的基礎、技術的能力」『公益・一般法人』898：24-30。
- 2015 「特別の利益の3つの留意点」『公益・一般法人』900：34-40。
- 2015 「投機的取引・公序良俗及び収益事業等」『公益・一般法人』902：34-40。
- 2015 「公益目的事業比率について」『公益・一般法人』904：80-86。
- 2015 「遊休財産保有制限について」『公益・一般法人』906：70-79。
- 2015 「公益法人制度の昭和改革と平成改革における組織転換の研究」『非営利法人研究学会誌』17：49-60。[査読有]
- 2016 「不可欠特定財産の考え方」『公益・一般法人』908：60-64。
- 2016 「3分の1規制と会計監査人設置原則」『公益・一般法人』910：60-66。
- 2016 「役員等の報酬等の支給基準と社員資格の得喪条件」『公益・一般法人』912：54-58。

[その他]

出口正之

- 2015 「旅・いろいろ地球人 ミュージアム⑤ 海外展開の意味すること」『毎日新聞』8月6日。
- 2016 「フィランソロピー首都とディアスポラ・フィランソロピー」『みんなく e-news』176号，2月1日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年7月9日～7月10日 ‘Policy change making the biggest Corporate Philanthropy in Japan, The 7th International Conference of the European Research Network On Philanthropy’, ESSEC Business School, Cergy Campus, Paris, France

2015年8月27日～8月28日 ‘Paternalism and Compliance Creep: Before and After the Public Interest Corporation Reforms in Japan’, 9th ISTR Asian Pacific regional conference/Nihon Univ., Tokyo

2015年9月16日～9月17日 「“クリーブ現象”としての収支相償論」非営利法人研究会第19回大会

2015年9月18日～9月20日 招待講演「日本公益慈善に関する法律と政策」第四届中国公益慈善展专题论坛深圳大学社会管理创新研究所他深圳, 中国

2016年1月22日 「フィールドから拾う現代の『日本語』とその特質」総合研究大学院大学学術シンポジウム「学術とことば」

・広報・社会連携活動

2015年9月16日 「政府をフィールドワークする!?——明治以来の110年ぶりの大改革と日本の官僚文化」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・みんなくウィークエンド・サロン

2015年6月14日 「次週開催! 「音楽の祭日」を10倍楽しむ法」第387回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年7月8日～7月12日—フランス（第7回フィランソロピーに関する欧州研究ネットワーク国際会議に参加及び発表）

2015年9月18日～9月20日—中華人民共和国（中国政府主催第4回中国慈善展示交流会において招待講演）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人助成財団センター評議員、茨木市文化振興施策推進委員会委員長

・非常勤講師

放送大学（面接授業担当）「ボランティアと社会」

森 明子 [もり あきこ] ————— 教授

【学歴】筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学（1989）【職歴】筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1997）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2009）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）【学位】文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）【専攻・専門】文化人類学 1) ヨーロッパ人類学、2) ドイツ、オーストリアの民族誌研究、3) 民族学・民俗学の歴史的展開【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族——オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

[編著]

森 明子編

2014 『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』京都：世界思想社。

2004 『ヨーロッパ人類学——近代再編の現場（フィールド）から』東京：新曜社。

2002 『歴史叙述の現在——歴史学と人類学の対話』京都：人文書院。

Mori, A.(ed.)

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学的比較の再考

・研究の目的、内容

比較は、文化人類学研究を、基底的に性格づけている。ポストモダン人類学は、比較のための単位を実体的・硬直的にとらえる文化の理解を批判したが、これに対して最近、超越的な比較ではない水平的な比較という議論が起こってきた。全体を見通すのではない部分的なヴィジョンに着目して、人類学的な比較を説明しようとするものである。本研究は、こうした議論を参照しながら、ヨーロッパ人類学の実践において、民族誌記述と人類学的比較が、いかに照射しあっているのか、検討するものである。

研究は、ケアをめぐる民族誌的研究と、ディシプリンのあり方に焦点をあてるものの二方向から展開し、それを複数のプロジェクトのもとにすすめる。第一のケアをめぐる民族誌研究については、昨年度後期から開始した本館の共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」（研究代表者 森）において推進する。さらに、本年から開始する科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」（研究代表者 森）の初年度として、海外学術調査に基づく共同研究を推進する。第二の、ディシプリンのあり方に焦点をあてる研究については、10月に来日するドイツの民族学研究者を迎えて、文化人類学・民族学・民俗学に関わるコロキウムを開催する計画である。また、研究分担者として参加する科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて：日中韓と独との研究協業網の形成」（研究代表者 岩本-東京大学）において、ドイツと日中韓の民俗学・民族学の比較という見地から人類学的比較を再考する。

・成果

- 1) ケアをめぐる民族誌研究として、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」（研究代表者・森明子）の資金によって、ベルリンおよびウィーンにおいて調査研究を行った。保育園やベビーシッターなど保育をめぐるケアのあり方、歴史的展開、現在の実態について、関連する資料を収集し、インタビュー調査と参与観察を行った。また、ベルリン、ウィーンを拠点に、研究者ネットワークの構築・強化・拡大をはかった。
- 2) ケアをめぐる民族誌研究の一環として、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」（研究代表者・森明子）の資金により、学術研究企画 ラウンド・テーブル・ディスカッション「東アジアにおける家族の境界とケア実践——社会政策のもとでの家族」を開催（2015年10月12日、於国立民族学博物館）した。
- 3) 研究分担者として参加する科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて：日中韓と独との研究協業網の形成」（研究代表者 岩本-東京大学）、日本民俗学会第67回年会、国立民族学博物館機関研究「文化遺産の人類学」の資金によって、国際フォーラム“Thinking about Cultural Heritage Regimes. A Discussion with Prof. Regina Bendix”を企画・開催し（2015年10月13日、於国立民族学博物館）、ディシプリンのあり方に焦点をあてた議論を展開するとともに、国内外の研究ネットワークを構築・進展させた。
- 4) ケアをめぐる民族誌研究の一環として、大阪市立大学2015年度国際学術シンポジウム「EU 諸地域における環境・生活圏・都市 文化接触のコンテクストとコンフリクト」に、企画段階から参加協力し、基調講演とセッション講演を行った。

◎出版物による業績

【報告】

森 明子

2015 「パースペクティヴを展示する——ベルリン、ヨーロッパ諸文化博物館の試み」『民博通信』151：24

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国際フォーラムでの報告

2015年10月13日 ‘Introduction to Thinking about Cultural Heritage Regimes,’ The International Forum

-Thinking about Cultural Heritage Regimes. A Discussion with Prof. Regina Bendix.
National Museum of Ethnology, Osaka.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年12月4日 基調講演「街区はいかにつくられたか——開発・再開発と保育園」大阪市立大学2015年度国際学術シンポジウム「EU諸地域における環境・生活圏・都市文化接触のコンテキストとコンフリクト」、大阪歴史博物館講堂

2015年12月6日 「移民が語る都市空間」大阪市立大学2015年度国際学術シンポジウム「EU諸地域における環境・生活圏・都市文化接触のコンテキストとコンフリクト」、大阪市立大学田中記念館

◎調査活動

・海外調査

2015年11月2日～11月30日—ドイツ（「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」に関わる調査研究）

2016年1月29日～2月26日—オーストリア（「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」に関わる調査研究）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ委員として論文指導

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「東アジア＜日常学としての民俗学＞の構築に向けて——日中韓と独との研究協業網の形成」（研究代表者：岩本通弥）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

独立行政法人大学評価・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員、京都大学人文科学研究所 共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員、日本民俗学会国際交流特別委員会委員、人間文化研究機構男女共同参画委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von Historische anthropologie: Kultur-Gesellschaft-Alltag (Köln, Weimar, Wien)（ドイツ・オーストリアで刊行されている学術雑誌の研究顧問）

新免光比呂 [しんめん みつひろ] ————— 准教授

1959年生。【学歴】早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（1992）【職歴】東方研究会専任研究員（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、帝京大学非常勤講師（1992）、国立民族学博物館第3研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2004）【学位】文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）【専攻・専門】宗教学・東欧研究【所属学会】東方研究会

【主要業績】

[単著]

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国——ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

[共著]

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途3 人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

[論文]

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教——民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1-42。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

バルカン地域における大衆音楽に関する比較社会的研究

・研究の目的、内容

バルカン地域において、ひとびとがオスマン帝国時代からの文化的影響と現代のワールドミュージックの影響をどのように受容してきたのかをテーマに大衆音楽の比較社会的研究を行うことであった。

・成果

本年度は、バルカン地域における大衆音楽の比較社会的研究の基礎的作業として、西欧音楽の史的理解と構造的な理解に努めた。一方、研究の成果発表としては、大阪府高齢者大学において、「バルカン地域とルーマニア——共通する歴史と文化」(2015年12月4日)「バルカン地域とルーマニア——共通する現代の音楽」(2015年12月11日)と題して、オスマン帝国時代からの文化的影響と現代のワールドミュージックの影響について講演を行った。

◎出版物による業績

[その他]

新免光比呂

2015 「みんぱく世界の旅 ルーマニア① 年間の節目の行事」『毎日小学生新聞』5月30日

2015 「みんぱく世界の旅 ルーマニア② 村ごとにデザインちがう民族衣装」『毎日小学生新聞』6月6日

2015 「みんぱく世界の旅 ルーマニア③ 日常にとけ込む神への信仰心」『毎日小学生新聞』6月13日

2015 「みんぱく世界の旅 ルーマニア④ 村人は皆 働き者 そして歌が大好き」『毎日小学生新聞』6月20日。

2015 「旅・いろいろ地球人 ミュージアム① 昼下がりの憩いは博物館で」『毎日新聞』7月9日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2015年12月4日 「バルカン地域とルーマニア——共通する歴史と文化」『世界の文化に親しむ科』大阪府高齢者大学

2015年12月11日 「バルカン地域とルーマニア——共通する現代の音楽」『世界の文化に親しむ科』大阪府高齢者大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年2月7日 「一神教の宗教、多神教の宗教」第413回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2015年5月23日～5月24日—国学院大学(科学研究費助成事業「ファシズム期の古代理解に関する総合的研究」研究会に参加)

2015年7月14日～7月15日—蒜山郷土博物館・真庭ふるさとセンター(ルーマニアと日本の山村文化比較研究のための資料収集)

2015年9月28日～9月28日—TYP赤坂駅カンファレンスセンター(文化科学研究科教授会に出席)

2015年11月6日～11月6日—津和野カトリック教会、萩カトリック教会(カクレキリシタンに関する資料収集)

2015年11月11日～11月13日—鳥取県立博物館(伝統芸能の音声を中心とした資料収集) わらべ館(世界の玩具に関する資料を収集、鳥取県における代表的な音楽家の資料収集)

2015年12月1日～12月2日—美星吉備高原神楽民俗伝承館(中国地方南部における伝承文化に関する調査と資料収集)

2015年12月11日～12月12日—やかげ町家交流館(伝統芸能「備中神楽」の実演の鑑賞と聞き取り)。美星吉備高原神楽民俗伝承館(伝統芸能「備中神楽」に関する資料収集)

2016年1月8日～1月9日—津山郷土博物館(中国地方美作の音文化と社会的背景に関する調査と資料収集)

2016年1月12日～1月14日—三原市立歴史民俗資料館、芸北民俗芸能保存伝承館(中国地方の音文化と社会背景に関する調査と資料収集)

2016年2月9日～2月11日—久賀歴史民俗資料館、しらかべ学遊館、光ふるさと郷土館(中国地方の民俗文化の調査と資料収集)

2016年2月26日～2月26日—メルパルク京都（文化科学研究科教授会に出席）

2016年2月17日～2月19日—相生市立歴史民俗資料館、赤穂市立海洋科学館（瀬戸内海沿岸地方の民俗文化の調査と資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

博士論文審査委員（件数 1）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「ファシズム期の古代理解に関する総合的研究」（研究代表者：平藤喜久子）連携研究者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「旧東欧地域における「演歌型」大衆音楽の比較研究」（研究代表者：伊東信宏）研究分担者

鈴木 紀^[すずき もと]——— 准教授

1959年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）【職歴】ニューヨーク州立大学ビンガムトン校人類学科教務助手（1992）、千葉大学文学部助教授（1996）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1985）【専攻・専門】開発人類学・ラテンアメリカ文化論 1) 開発援助プロジェクト評価、2) フェアトレード、3) マヤ・ユカテコ民族の社会変化、4) 先住民族文化の比較展示学【所属学会】日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for Applied Anthropology、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ8）東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84, 東京：東京大学出版会。

2011 「開発人類学の展開」佐藤 寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学：冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp.45-66, 東京：明石書店。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国際開発のための実践人類学

・研究の目的、内容

本研究の目的は、社会問題の解決に寄与するための文化人類学である実践人類学を、国際開発活動の分野で推進することにある。とくに開発プロジェクトが、その対象社会で持続、発展していくための条件を、プロジェクトのインパクト（事前に予期された影響および予期されていなかった影響）に関する民族誌的調査を通じて明らかにしていく。

今年度は、メキシコの農村開発に関する研究成果の取りまとめ、およびフェアトレード研究を行う。後者では、フェアトレードのインパクトを調査するため、中央アメリカのカカオ栽培を事例に、カカオ栽培に起因する地域振興としての観光業の展開について現地調査をおこなう。この調査には、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の資金を充当する。

・成果

国際協力機構がメキシコで実施した農村開発プロジェクトの地域住民へのインパクトに関する研究を発表した。

鈴木 紀

2015 「オーナーシップ論再考——農村開発における妬みと嫉妬」関根久雄編『実践と感情——開発人類学の
新展開』pp.117-142、横浜：春風社。

フェアトレードに関する海外調査は、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の資金を用いて2016年2月8日から2月19日まで、ベリーズおよびアメリカ合衆国で実施した。ベリーズ国南部のマヤ系先住民族のカカオ栽培およびそれに関する文化が、フェアトレードを端緒とするグローバル経済によってどのように変化しているかを調査した。

またフェアトレードに関して国立民族学博物館で実施した2つの国際シンポジウム（「フェアトレード・コミュニケーション：商品が運ぶ物語」（2010年3月2日）および「グローバルな倫理的消費：フェアトレードの新展開」（2012年3月24日～25日））の成果をとりまとめ、フェアトレードに関する近年の動向を付加して以下の形で出版した。

- 1) 鈴木 紀（編）『フェアトレードによる支援 第1巻 フェアトレード・コミュニケーション：商品が運ぶ物語』国立民族学博物館・鈴木 紀研究室、2016。
- 2) 鈴木 紀（編）『フェアトレードによる支援 第2巻 グローバルな倫理的消費：フェアトレードの新展開』国立民族学博物館・鈴木 紀研究室、2016。

◎出版物による業績

[編著]

鈴木 紀編

- 2016 『フェアトレードによる支援 第1巻 フェアトレード・コミュニケーション——商品が運ぶ物語』大阪：国立民族学博物館・鈴木 紀研究室（機関研究プロジェクト「支援の人類学——グローバルな互恵性の構築に向けて」（2009年～2012年度）の成果）
- 2016 『フェアトレードによる支援 第2巻 グローバルな倫理的消費——フェアトレードの新展開』大阪：国立民族学博物館・鈴木 紀研究室（機関研究プロジェクト「支援の人類学——グローバルな互恵性の構築に向けて」（2009年～2012年度）の成果）

[論文]

鈴木 紀

- 2015 「オーナーシップ論再考——農村開発における妬みと嫉妬」関根久雄編『実践と感情——開発人類学の
新展開』pp.117-142、横浜：春風社。
- 2015 「資源化される古代文明——遺跡の調査と活用に関わるアクター分析 序論」『古代アメリカ』18：95-102、古代アメリカ学会。[査読有]
- 2016 「序 フェアトレード・コミュニケーション：商品が運ぶ物語」鈴木 紀編『フェアトレードによる支援 第1巻 フェアトレード・コミュニケーション：商品が運ぶ物語』pp.1-3、大阪：国立民族学博物館・鈴木 紀研究室。（機関研究プロジェクト「支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて」（2009年～2012年度）の成果）
- 2016 「序 グローバルな倫理的消費：フェアトレードの新展開」鈴木 紀編『フェアトレードによる支援 第2巻 グローバルな倫理的消費：フェアトレードの新展開』pp.1-6、大阪：国立民族学博物館・鈴木 紀研究室。（機関研究プロジェクト「支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて」（2009年～2012年度）の成果）
- 2016 「UCIRI とフランシスコ・ヴァンデルホフ氏の関わり」鈴木 紀編『フェアトレードによる支援 第1巻 フェアトレード・コミュニケーション：商品が運ぶ物語』pp.63-66、大阪：国立民族学博物館・鈴木 紀研究室。（機関研究プロジェクト「支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて」（2009年～2012年度）の成果）

[その他]

鈴木 紀

- 2015 「旅・いろいろ地球人 驚く⑦ マヤ文明を活用する」『毎日新聞』4月30日夕刊。
- 2015 「自然の恵みを凝縮「元祖チョコラテ」」『産経新聞』7月7日夕刊。
- 2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑩ コスタリカのチョコレート」『京都新聞』7月22日。

2015 「旅・いろいろ地球人 ミュージアム⑦ 三つの太陽の石」『毎日新聞』8月20日夕刊。

2016 「移民／難民について考えるための映画案内」『社会科NAVI』12：18-19。

2016 「ミュージアムの中の古代アメリカ文明」『民博通信』152：4-9。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

伊藤敦規・鈴木 紀監修

2016 『みんなく映像民族誌第18集 米国南西部の先住民の宝飾品』（日本語、51分）国立民族学博物館製作

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年4月18日 「展示の中のマヤ文明とマヤ民族—メキシコ、グアテマラの博物館比較」日本ラテンアメリカ学会西日本部会研究会、京都大学

2015年6月2日 公開フォーラム「タイムマシンとしてのアステカのモニュメント：考古学的石碑の新しい解釈」国立民族学博物館

2015年6月6日 公開講演会「博物館の中の古代アメリカ文明」科学研究費助成事業新学術領域研究（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」国立民族学博物館

2015年11月20日 ‘Representing pre-Columbian Heritage: a Comparative Study of Museum Exhibitions on Maya Civilization,’ The 114th Annual Meeting of the American Anthropological Association, Denver, Colorado.

2015年12月17日 「フェアトレード・チョコレートのカカオ産地へのインパクト：中米ベリーズの事例から」東北人類学談話会、東北大学

2016年1月28日 「博物館展示にみる中米古代文明」文化遺産国際協力コンソーシアム第6回中南米分科会、東京文化財研究所

・広報・社会連携活動

2015年7月8日 「チョコレートの故郷：メキシコと中央アメリカ」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

2015年10月12日 『長江哀歌』みんなく映画会／みんなくワールドシネマ

2016年1月30日 『あの日の声を探して』みんなく映画会／みんなくワールドシネマ

2016年3月20日 『サンドラの週末』みんなく映画会／みんなくワールドシネマ

・みんなくウィークエンド・サロン

2016年1月31日 「チョコレート博物館」第412回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年11月17日～11月26日—アメリカ合衆国（アメリカ人類学会における研究発表及びマヤ文明に関する博物館展示研究）

2016年1月10日～1月21日—ペルー（アメリカ大陸先住民文化に関する博物館展示方法の研究）

2016年2月8日～2月19日—ベリーズ、アメリカ合衆国（マヤ民族のカカオ栽培に関する民族誌的調査）

2016年3月2日～3月15日—エクアドル、アメリカ合衆国（アンデス文明の博物館展示に関する研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

比較社会演習Ⅲ「社会と経済に関する人類学的アプローチ」担当

比較文化学基礎演習Ⅰ（1年生ゼミ）担当

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（新学術領域（研究領域提案型））「古代アメリカの比較文明論」A04計画研究「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」研究代表者、科学研究費助成事業（新学術領域（研究領域提案型））「古代アメリカの比較文明論」（代表：茨城大学 青山和夫）総括班研究分担者、科学研究費助成事業（国際共同研究

加速基金（国際活動支援班）「古代アメリカの比較文明論」（代表：茨城大学 青山和夫）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究B）「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（代表：近畿大学 池上甲一）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・委嘱された委員

文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員

・他大学の客員、非常勤講師

神戸大学大学院国際協力研究科「開発人類学」（集中講義）、神戸大学国際文化学部「開発文化論」（集中講義）、大阪大学「ボランティア論」（10月29日「開発援助とボランティア」担当）、東北大学文学部「開発人類学」（集中講義）

廣瀬浩二郎 [ひろせ こうじろう] ————— 准教授

【学歴】 京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校留学（1995）、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学（1997）【職歴】 京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）【学位】 文学博士（京都大学大学院文学研究科 2000）、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）【専攻・専門】 日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）【所属学会】 日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすゝめ』 京都：世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論——出口王仁三郎と近代日本』 大阪：解放出版社。

[学位論文]

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」 京都大学大学院文学研究科。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

今年度採用の小学4年生の国語教科書（学校図書）に拙文「さわっておどろく」が掲載されている。その関係で小学校での講演、子ども向けワークショップの依頼が増えることが予想される。拙文は民博における10年余の活動を総括する内容となっており、「研究成果の社会還元」と位置づけることができる。「ユニバーサル＝誰もが楽しめる」という観点で、初等・中等教育の現場とも連携しつつ、自身の研究の新展開をめざしたい。

2012～2014年度に行なった共同研究「触文化に関する人類学的研究」は2015年3月に終了したが、プロジェクトの議論を発展させる形で2015年秋に「観光・まちづくりのユニバーサルデザイン」をテーマとして、民博で公開シンポジウムを開催する。これまで積み上げてきたユニバーサル・ミュージアムの実践的研究を継承し、触文化理論を学校教育、観光・まちづくりなどの他分野に応用することが今年度の大きな課題である。

・成果

2015年11月に行なった公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開」には、全国から150名余の参加者が集まった。私が2006年の企画展「さわる文字、さわる世界」で“触文化”“ユニバーサル・ミュージアム”の概念を提唱してから10年が経過し、「さわる展示」の実践を試みる博物館が着実に増えているのは間違いない。博物館関係者のみならず、観光・まちづくり分野の専門家の出席が多かったのも本シンポジウムの特徴だった。シンポの報告書『ひとが優しい博物館』（青弓社）は、2016年6月に刊行される予定である。

言語政策学会（6月）、画像電子学会（9月）など、文化人類学以外の研究団体から講演依頼を受けた事実

は、触文化論に対する関心が各方面で高まっていることを示すものだろう。拙文「さわっておどろく」の国語教科書掲載がきっかけとなり、小学校での特別授業、子ども向けワークショップも各地で実施した。これらの取り組みは新聞・テレビでもしばしば紹介されたので、民博の存在を社会にアピールする上でも有意義だった。

◎出版物による業績

[論文]

廣瀬浩二郎

- 2015 「盲人文化と視覚障害者支援」『視覚障害教育ブックレット』28：4-9, ジアース教育新社。
- 2015 「『音にさわる』読書法——盲人文化と視覚障害者支援」『日本言語政策学会第17回大会予稿集』pp.78-81。
- 2015 「さわる展示の原点を求めて」『視覚障害教育ブックレット』29：4-12, ジアース教育新社。
- 2015 「触る感動、動く触感」『環境と健康』28(4)：386-406, 公益財団法人体質研究会。[査読有]
- 2016 「体力と気力を養う——ある当事者団体の挑戦」『視覚障害教育ブックレット』30：4-13, ジアース教育新社。

Hirose, K.

- 2016 The Concept of “Universal Museum”: The Significance and Possibility of Exhibiting Tactile Culture. *Astronomy Museums and Related Activities*, pp.83-89. National Astronomical Observatory of Japan.

[その他]

廣瀬浩二郎

- 2015 「さわっておどろく」『みんなと学ぶ小学校国語4年下』学校図書, pp.10-19。
- 2015 「絵にさわる——“頭”で味わうBF 絵画の世界」『吹田市立博物館館報』15：53-54。
- 2015 「マジョリティが失った認識」『毎日新聞』7月25日。
- 2015 「唄に込められた心波を味わおう」『産経新聞』9月8日夕刊。
- 2015 「研究成果の公開——シンポジウム『ユニバーサル・ミュージアム論の新展開』」『民博通信』151：2-6。
- 2016 「触ることで発見」『山陽新聞』1月19日夕刊。
- 2016 「みんぱく食の民族誌 考える舌^⑩ 舌は『第三の手』なり」『京都新聞』2月10日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2015年11月29日 「全盲者の耳、ろう者の目」公開シンポジウム『ユニバーサル・ミュージアム論の新展開』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年4月25日 「触文化研究の最前線」ニコニコ学会 βシンポジウム『第8回 研究100連発』幕張メッセ
- 2015年6月7日 「『音にさわる』読書法」日本言語政策学会大会シンポジウム『マルチリテラシーと言語政策』椋山女学園大学
- 2015年9月28日 「The Concept of “Universal Museum”」国立天文台主催『国立天文台ミュージアム国際シンポジウム』国立天文台
- 2015年10月17日 「障害者アートの呼称をめぐって」東海大学主催公開シンポジウム『ミュージアムのトリセツ(取扱説明書)』東海大学課程資格教育センター
- 2016年2月11日 「『見えない世界をみる』身体知の探究」京都大学アフリカ地域研究資料センター主催『教育・学習の人類学セミナー』京都大学

・研究講演

- 2015年4月15日 「見えない世界をみる身体知」岡山大学文学部主催講演会、岡山大学
- 2015年4月16日 「さわる美術鑑賞の可能性」岡山県立美術館主催講演会、岡山県立美術館
- 2015年4月23日 「さわる文化への招待」大阪保健福祉専門学校主催特別授業、大阪保健福祉専門学校
- 2015年5月26日 「ユニバーサル・ミュージアムとは何か」兵庫県立大学主催特別講義、国立民族学博物館
- 2015年6月18日 特別講義「世界をさわる」京都大学ポケットゼミ「障害とは何か」国立民族学博物館
- 2015年7月18日 「障害から生まれる新たな風土論」滋賀県立陶芸の森主催講演会、滋賀県立陶芸の森
- 2015年7月24日 「見えない世界をみる」日本キリスト教団玉出教会主催ワークショップ、玉出教会
- 2015年8月1日 「警女文化と視覚障害教育」日本視覚障害社会科教育研究会主催講演会、直江津学びの交流館

- 2015年 8月 7日 「触る感動、動く触感」京都大学総合博物館主催ワークショップ、京都大学総合博物館
- 2015年 8月21日 「博物館における触覚情報」近畿視覚障害者情報提供施設協議会主催講演会、国立民族学博物館
- 2015年 8月23日 「身体でみる異文化」東海大学主催講演会、東海大学松前記念館
- 2015年 9月 9日 「さわる文化の可能性」品川区教育委員会主催講演会、品川区立第二延山小学校
- 2015年 9月12日 「見えない世界をみる」豊中市主催人権講演会、豊中市立野畑図書館
- 2015年 9月26日 「触る感動、動く触感」画像電子学会主催「視覚・聴覚支援システム研究会」国立民族学博物館
- 2015年 9月30日 「点字と視覚障害者の文化」大阪女学院中学部主催特別授業、大阪女学院
- 2015年10月 6日 「情報保障から情報変換へ」生駒市図書館主催講演会、生駒市図書館
- 2015年10月16日 「さわって感じる世界」品川区立第二延山小学校主催特別授業、第二延山小学校
- 2015年10月24日 「さわって楽しむ考古学」ひたちなか市主催「ふるさと考古学講座」、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
- 2015年10月31日 「さわって感じる世界」豊中市立少路小学校主催ワークショップ、豊中市・緑丘会館
- 2015年11月 3日 「深めて、伸ばして、新しくなるカラダのふしぎ」視聴覚二重障害者福祉センター・すまいる主催講演会、天王寺区民センター
- 2015年11月 5日 「『見えない世界をみる』感性を育むために」点訳ボランティアグループ連絡会主催講演会、神戸アイライト協会
- 2015年11月 6日 「さわる世界と視覚障害者の文化」鳥取盲学校主催講演会、鳥取盲学校
- 2015年11月 7日 「触る感動、動く触感」わらべ館主催ワークショップ、鳥取市・わらべ館
- 2015年11月 9日 「博物館とバリアフリー」2015年度博物館学集中コース、国立民族学博物館
- 2015年11月19日 「触文化とは何か」大阪府立大手前高校主催講演会、大手前高校
- 2015年11月26日 「さわって感じる世界」京都新聞社主催特別授業、京都市立第四錦林小学校
- 2015年12月11日 「視覚障害者と博物館」高槻市視覚障害者福祉協会主催講演会、国立民族学博物館
- 2016年 1月10日 「さわってつくる、つくってさわる」岡山県立美術館主催ワークショップ、岡山県立美術館
- 2016年 1月20日 「ユニバーサル・ミュージアムの六原則」九州産業大学主催「九州地区学芸員技術研修会」、佐賀県立美術館
- 2016年 2月26日 「触る文化への正体」宇治市主催講演会、宇治市生涯学習センター
- 2016年 2月29日 「さわって感じる世界」豊中市立豊島西小学校主催特別授業、豊島西小学校
- 2016年 3月 5日 「さわって楽しむ博物館」株式会社ダスキン主催講演会、ダスキンサーブ近畿
- 2016年 3月12日 「世界をさわる」豊中市主催人権講演会、豊中市・少路地区公民分館
- 2016年 3月13日 「ガタゴト電車『音の旅』」キッズプラザ大阪主催ワークショップ「くらやみ探検」、キッズプラザ大阪
- 2016年 3月19日 「触る感動、動く触感」つくば市民大学主催講演会、筑波学院大学
- 2016年 3月27日 「さわる文化とユニバーサル・ミュージアム」点字民報社主催講演会、点字民報社
- ・ 広報・社会連携活動
- 2015年 7月 6日 「さわっておどろく」ラジオ大阪「話の目薬ミュージックソン」出演
- 2015年 9月16日 「『聴き語り』の芸能」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店
- 2015年 9月23日 「触文化教育の実践」関西テレビ「みんなのニュース・ワンダー」出演
- 2015年11月11日 「見えない世界をみる身体知」2015年度みんぱく若手研究者奨励セミナー、国立民族学博物館
- 2016年 1月18日 「アクセス可能な博物館」放送大学「博物館教育論」ラジオ番組収録
- 2016年 2月20日 「点字の力」NHK テレビ「あほやねん!すきやねん!」出演
- ・ みんぱくウィークエンド・サロン
- 2015年 4月26日 「身体でみる異文化」第380回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう
- ◎調査活動
- ・ 国内調査
- 2015年 8月18日～19日—東京都・株式会社アクーブ・ラボ（3Dサウンドを活用したアトラクション開発の現状と課題）
- 2016年 1月29日～30日—さいたま市・鉄道博物館（音と振動を利用した体感型プログラムの最新動向）

・海外調査

2015年8月29日～9月8日—イタリア（美術館における「さわる鑑賞法」の調査研究）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

吹田市立博物館協議会委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西学院大学・非常勤講師「障害と人権」、筑波大学理療科教員養成施設・非常勤講師（集中）「視覚障害教育」、東海大学・非常勤講師（集中）「博物館実習」

山中由里子 [やまなか ゆりこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】カラマズー大学フランス語／美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退（1993）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1992）、東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）【学位】学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）【専攻・専門】比較文学比較文化 西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究、「驚異」の文化史【所属学会】日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会、International Society for Iranian Studies

【主要業績】

[単著]

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

山中由里子編

2015 『<驚異>の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Yamanaka, Y. and T. Nishio (eds.)

2006 *The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*. London: I. B. Tauris.

【受賞歴】

2011 第7回日本学士院学術奨励賞

2011 第7回日本学術振興会賞

2010 第15回日本比較文学会賞

2010 島田謹二記念学藝賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

・研究の目的、内容

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で *mirabilia*、アラビア語・ペルシア語で *'ajā'ib* と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。本研究で明らかにしようとする問題点は、次の三つの主要な軸にまとめることができる

- 1) ジャンルの枠組とモチーフの分類
- 2) 知識の伝播と世界観の変遷
- 3) 宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性

・成果

報告者が代表を務めた科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」（2010-2014）と、共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」（2010.10-2014.3）を連携させて行った調査・報告・討論の成果を、『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』（名古屋大学出版会、2015年）として編集し刊行した。比較文学、比較文明学、東西文化交流史、妖怪・怪異学など、様々な分野の研究者から注目を浴びている。12月18日付『週刊読書人』の2015年回顧欄、さらに12月27日付の朝日新聞の「今年の3点」の欄でとりあげられ、社会的にもインパクトを与えている。

「〈驚異〉を媒介する旅人」を『怪異を媒介するもの』（アジア遊学187、勉誠社 2015.8）に刊行。

また、以下の研究発表を行った：

- ・「比較怪物命名学——驚異と怪異の名づけと形象化」国際研究集会「東の妖怪・西のモンスター」学習院女子大学、2015.11.1
- ・「海賊商品としての人魚のミイラ」シンポジウム「海賊・山賊・馬賊・愚連隊：無法者 outlaw の社会史にむけて」国際日本文化研究センター、2016.2.13

◎出版物による業績

[編著]

山中由里子編

2015 『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。[査読有、共同研究成果]

[論文]

山中由里子

- 2015 「驚異を媒介する旅人」東アジア怪異学会編『怪異を媒介するもの』（アジア遊学187）pp.287-292, 東京：勉誠出版。
- 2015 「驚異考」山中由里子編『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』pp.1-24, 名古屋：名古屋大学出版会。[査読有]
- 2015 「想像の地理と周縁の民族——女人族伝承の東西伝播」山中由里子編『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』pp.256-273, 名古屋：名古屋大学出版会。[査読有]

[その他]

山中由里子

- 2015 対談 小説に生まれ変わるモノ（いしいしんじ×山中由里子）『月刊みんぱく』39(5)：3-9。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 驚く⑧ からくりにはびっくり」『毎日新聞』5月7日夕刊。
- 2015 「こうしてわたしはFos信奉者となった…」Fos Alumni Message No.9 日本学術振興会。(http://www.jsps.go.jp/j-bilat/fos/messages/09.html)
- 2016 「既知の世界の彼方へ」『民博通信』152：20-21。[共同研究成果]
- 2015-2016 「編集後記」『月刊みんぱく』39(5)~40(3)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2016年1月11日 「趣旨説明」『驚異と怪異——想像界の比較研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年9月15日 ‘Alexander and the Wonders of the World in Tūsi’s ‘Ajā’ib al-makhlūqāt’、ヨーロッパイラン学会、エルミタージュ美術館、サンクト・ペテルブルグ
- 2015年11月1日 「比較怪物命名学——驚異と怪異の名づけと形象化」国際シンポジウム「東の妖怪・西のモンスター」、学習院女子大学
- 2016年1月24日 「〈驚異〉としての古代——アジャীব文学におけるアレクサンドロス」ワークショップ「中世イスラーム世界から見た古代」筑波大学東京キャンパス
- 2016年2月13日 「海賊商品としての人魚のミイラ」シンポジウム「海賊・山賊・馬賊・愚連隊：無法者 outlaw の社会史にむけて」国際日本文化研究センター
- 2016年3月17日 「物質文化を翻訳する——国立民族学博物館における展示解説の多言語化」、シンポジウム「翻訳・翻案と日本文化——テキストの世界展開をめぐる」タシュケント国立東洋学大学、ウズベキスタン共和国

- ・展示
 - 特別展「見世物大博覧会」実行委員
 - 常設展示新構築総括班
 - 巡回展「イメージの力」郡山市立美術館
- ・広報・社会連携活動
 - 2015年5月29日 「＜驚異＞の比較文学」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
 - 2015年6月19日 「博物学と驚異の部屋」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
 - 2015年7月11日 MMP 新規メンバー養成研修、国立民族学博物館第5セミナー室
 - 2015年9月27日 MMP 第三回ステップアップ講座、国立民族学博物館第5セミナー室
 - 2015年11月25日 「みんなくコレクションにみる世界のイスラーム」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本館
- ・みんなくウィークエンド・サロン
 - 2016年2月28日 「人魚のミイラ——驚異と怪異の接点」第416回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう
- ◎調査活動
 - ・海外調査
 - 2015年7月29日～8月30日—フランス・ドイツ（博物誌資料調査及び国際学術協定に関する調査研究）
 - 2015年10月5日～10月30日—ドイツ（ドイツの博物館におけるイスラーム表象の調査）
- ◎大学院教育
 - ・指導教員
 - 主任指導教員（1人）
 - ・大学院ゼミでの活動
 - 「西アジア文化研究特論」担当
 - 論文ゼミ
 - ・論文審査
 - 博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）
- ◎上記以外の研究活動
 - ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 - 人間文化研究機構連携研究代表者「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」代表者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「日本現代文学・文化の世界展開の比較文学的研究——＜ポップ＞なテキストを中心に」（研究代表者：平石典子）研究分担者、国際日本文化研究センター共同研究「21世紀10年代日本文化の軌道修正——過去の検証と将来への提言」（代表：稲賀繁美）共同研究員
- ◎社会活動・館外活動
 - ・他機関から委嘱された委員など
 - 日本比較文学会国際活動委員会、日本文化人類学会第49回研究大会準備委員会
 - ・他大学の客員、非常勤講師
 - 大阪府高齢者大学、「世界の文化に親しむ科」

齋藤玲子 [さいとう れいこ]————— 助教

1966年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1989）【職歴】北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）【専攻・専門】文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

齋藤玲子編

2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイトおよび北西海岸先

住民の版画コレクションをとおして』(国立民族学博物館調査報告 131)
齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイットと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

[論文]

齋藤玲子

2012 「アイヌ工芸の200年——その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート (先住民アート・プロジェクト報告書)』pp.45-60, 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化の継承と社会的背景の研究

・研究の目的、内容

アイヌ民族は、江戸時代中ごろから徐々に和人の支配下におかれ、明治・大正・昭和と時代を経るにつれて独自の文化の継承は次第に困難になり、アイヌ文化は途絶えた、とまで言われるような状態になった。しかし、実際は形を変えながらも多くの文化要素が受け継がれている。

引き続き、こうしたアイヌ文化の継承と当時の社会状況との関係について、物質文化と芸能に注目し、研究をおこなう。最終的に、物質文化や芸能が、記録の多く残る江戸時代後期からどう変化してきたかを明らかにし、現代のアイヌ文化の位置づけを示すことを目指す。

具体的には、2012年にスタートした「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」の共同研究において、各時代・各地域での生活用具や儀礼具などの製作・使用の状況と、それらを収集者に譲った経緯等を明らかにすることにより、アイヌの物質文化の変化を示す。また、科学研究費助成事業(基盤研究(B))「北方寒冷地における織布技術と布の機能」(代表：佐々木史郎 2014~2016)の連携研究者として、アイヌの織物の継承についても引き続き調査をすすめる。

・成果

アイヌの物質文化の継承については、2つの共同研究会のメンバーとしてそれぞれで発表した。1つはおもに男性の手になる木彫に関して「匿名か実名か アイヌ工芸品の銘/記名をめぐる」、もう1つは女性の手になる「アイヌの織りと縫い——その担い手と継承のあり方について」である。

また、自身が代表の共同研究については、『民博通信』150号で前年度のおもな成果として「坪井正五郎によるアイヌ民族資料の収集」を報告した。さらに、(公財)アイヌ文化振興・研究推進機構のアイヌ工芸品展の出品資料選定に協力し、同展図録に「博物館に残された『木の文化』」を寄稿した。その共同研究は、報告書となる論集の内容を検討して各自執筆中であり、2016年に出版助成に申請し、2017年度に刊行予定である。

科学研究費助成事業(基盤研究(B))「北方寒冷地における織布技術と布の機能」(代表：佐々木史郎)では、ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵のアイヌの着物をはじめとする資料調査に参加し、報告の準備中である。

◎出版物による業績

[編著]

齋藤玲子編

2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』(国立民族学博物館調査報告 131)。[査読有、共同研究成果]

[論文]

齋藤玲子

2015 「博物館に残された『木の文化』」(財)アイヌ文化振興・研究推進機構編『木と生きる——アイヌのくらしと木の造形』pp.174-179, 札幌：(公財)アイヌ文化振興・研究推進機構。

2015 「北西海岸先住民アートの歴史と現在」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』(国立民族学博物館調査報告 131) pp.187-194。[査読有、共同研究成果]

Сайто Рейко и Накада Ацуси (齋藤玲子・中田篤共著)

2016 Предметы коренных народов Сибири и Дальнего Востока в собрании Хоккайдского музея народов

Севера: опыт сбора и экспозиции. Шагланова Ольга А., Сааки Сиро (Ред.) *Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях*. (Culture of the peoples of Siberia and the Russian Far East in museum collections.) (Senri Ethnological Reports 136). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有、機関研究成果]

[その他]

齋藤玲子

- 2015 「みんなく食の民族誌 考える舌⑤ アイヌの『ポッチェイモ』」『京都新聞』6月10日。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 踊る⑤ 交流の場」『毎日新聞』6月11日夕刊。
- 2015 「お茶であり、薬であり——アイヌの飲み物」『Vesta』99: 44-45。
- 2015 「第20回武四郎まつりに参加して」武四郎まつり実行委員会編（宇野文男責任編集）『武四郎まつり20年の歩み』pp.42-44 松阪：武四郎まつり実行委員会。
- 2015 「坪井正五郎によるアイヌ民族資料の収集」『民博通信』150: 18-19。
- 2015 「北海道アイヌの魚の汁物 チェブオハウ」『月刊みんなく』39(11): 14-15。
- 2015 「緒言」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイトおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告 131）pp.3-10。[査読有、共同研究成果]
- 2015 「国立民族学博物館における1980年代までの北アメリカ先住民資料の収集について——イヌイト版画と北西海岸先住民版画を中心に」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイトおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告 131）pp.13-16。[査読有、共同研究成果]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2015年4月25日 「アイヌの織りと縫い——その担い手と継承のあり方について」『現代「手芸」文化に関する研究』国立民族学博物館
- 2016年2月11日 「匿名か実名か——アイヌ工芸品の銘／記名をめぐる」『表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に』国立民族学博物館

・展示

「アイヌの文化」展示新構築プロジェクトリーダー

・広報・社会連携活動

- 2015年7月9日 「アイヌ民族の歴史と文化」プール学院中学校2年生、国立民族学博物館
- 2015年10月8日 「日本の先住民族アイヌ」JICA 博物館学コース、国立民族学博物館
- 2015年11月12日 「ミンパク オッタ カムイノミ」司会・解説

◎調査活動

・国内調査

- 2015年9月18日～24日—釧路市阿寒町、札幌市、平取町、新ひだか町（アイヌ工芸および「アイヌの文化」展示に関する聞き取り調査）
- 2016年3月24日—東京都・宮本記念財団（宮本馨太郎氏旧蔵の日本民族学会附属民族学博物館の資料カードならびに北海道・樺太関係写真についての聞き取り調査）

・海外調査

2015年8月30日～9月5日—ロシア連邦（「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」に係る資料調査）

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）
連携研究者、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）
連携研究者

◎社会活動・館外活動等

北海道立北方民族博物館研究協力員

1975年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1998）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修了（2002）、京都大学大学院人間・環境学研究科環境相関研究専攻博士課程研究指導認定退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（2006）、京都大学大学院人間・環境学研究科研修員（2008）、国立民族学博物館機関研究員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2012）立命館大学国際関係学部「ロシア・ユーラシア研究Ⅱ」非常勤講師（2015）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2010）修士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2002）【専攻・専門】文化人類学、中央アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、日本イスラム協会

【主要業績】

[単著]

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』東京：風響社。

[編著]

藤本透子編

2015 『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』横浜：春風社。

[論文]

Fujimoto, T.

2011 Kazakh Memorial Services in the Post-Soviet Period: A Case Study of Northern Kazakhstan Villages. In T. Yamada and T. Irimoto (eds.), *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*, pp.117-132. Sapporo: Hokkaido University Press.

[受賞]

2013 人間文化研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中央アジアにおけるイスラームと社会再編に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

中央アジア諸国では、ソ連解体から今日に至るまでイスラームが多様な形で地域社会の再編に深く関わってきた。本研究では、これまで長期の現地調査を行ってきたカザフスタンの事例を、他の中央アジア諸国の事例と幅広く精緻に比較検討することで、イスラームと社会再編の関係を読み解くことを目的とする。特に、宗教に対する国家の関与、宗教政策に対する地域社会の対応、日常生活における宗教実践の展開、国境を越えた移動と宗教動態に着目して研究を行う。また、中央・北アジア展示のリニューアルが予定されており、中央アジア研究の成果を反映した展示に取り組む。

・成果

1) 中央アジアおよび社会主義を経験した諸地域における宗教動態の比較研究

共同研究（若手）の成果として、『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』（藤本透子編著）を、2015年5月末日に春風社より刊行した。本書では、体制移行と国境を越える移動に着目しながら、日常生活を中心とした宗教実践の（再）活性化が地域社会の再編／分断と緊密に関わっていることを、具体的な事例をもとに実証的に論じた。また、カザフスタンの宗教動態に関して、拙論「イスラームと民族的伝統の布置——社会主義を経たカザフスタンの事例から」が、佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のラプ・ユーラシア世界——比較民族誌的研究』の一章として2016年3月に刊行された。

2) 共同性の再構築に関する研究

国際ワークショップの成果として、Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness というタイトルでSESを編集して申請した（客員教授・山田孝子と共編）。本書では、現代において地域社会がどのように再編され共同性が再構築されるのかという問題を、アジアを中心に先住民、少数民族、移民の事例から幅広く考察している。特に拙論では、Migration to the “Historical Homeland”: Remaking Connectedness in Kazakh Society beyond National Bordersと題して、在外カザフ人のカザフスタンへの「帰還」を取り上

げ、帰還後の共同性の再構築に宗教実践と祝祭が果たした役割について分析した。

3) 中央・北アジア展示

33年ぶりとなる中央・北アジア展示のリニューアルに従事した。中央・北アジア新展示は「自然との共生」「社会主義の時代」という2つの共通テーマに基づくセクションと、「中央アジア」「モンゴル」「シベリア・極北」の3つの地域セクションからなる。中央・北アジア展示チームのリーダーとして展示全体に関わったが、特に「中央アジア」セクションの展示を担当した。「カザフ草原の暮らし」「オアシス都市の暮らし」「職人の世界」「イスラームと人生儀礼」という4つのサブセクションを構成し、解説パネル、写真パネル、資料キャプションも含めて、展示をほぼ完成させた（2016年6月に公開予定）。また、「地域社会における博物館展示の可能性」と題して、琉球大学におけるワークショップ「地域社会の再生／活性化に向けたフィールド・サイエンスの可能性」で2月12日に発表、「国立民族学博物館における中央アジア展示リニューアル——現地社会との関わりを中心に」と題して、日本中央アジア学会で3月27日に発表した。

◎出版物による業績

[編著]

藤本透子編

2015 『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』 横浜：春風社。[査読有、共同研究成果]

[論文]

藤本透子

2016 「イスラームと民族的伝統の布置——社会主義を経たカザフスタンの事例から」 佐々木史郎・渡邊日編 『ポスト社会主義以後のスラブ・ユーラシア世界——比較民族誌的研究』 pp.127-150, 東京：風響社。[査読有]

2016 「書評 滝澤克彦『越境する宗教——ポスト社会主義モンゴルにおける宗教復興と福音派キリスト教の台頭』 東京：新泉社、2015年」 『北東アジア地域研究』 20：185-192。

[その他]

藤本透子

2015 「みんなく世界の旅 カザフスタン① 牧畜に適した風土」 『毎日小学生新聞』 9月19日。

2015 「みんなく食の民族誌 考える舌⑱ カザフスタンの馬肉食」 『京都新聞』 9月23日。

2015 「みんなく世界の旅 カザフスタン② 赤ちゃんぐつすり 伝統的なゆりかご」 『毎日小学生新聞』 9月26日。

2015 「みんなく世界の旅 カザフスタン③ 村にも普及する携帯電話」 『毎日小学生新聞』 10月3日。

2015 「みんなく世界の旅 カザフスタン④ マイナス40度の長く厳しい冬」 『毎日小学生新聞』 10月10日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年2月12日 「地域社会における博物館展示の可能性」 ワークショップ「地域社会の再生／活性化に向けたフィールド・サイエンスの可能性」 琉球大学

2016年3月27日 「国立民族学博物館の中央アジア展示リニューアル——現地社会との関わりを中心に」 日本中央アジア学会年次大会、藤沢市

・展示

中央・北アジア展示新構築（中央・北アジア展示チームリーダー、「中央アジア」セクション担当）

・広報・社会連携活動

2015年6月30日 「イスラーム入門」 阪神シニアカレッジ「国際理解学科」、尼崎市中小企業センター

2015年6月30日 「イスラーム社会の文化人類学」 阪神シニアカレッジ「国際理解学科」、尼崎市中小企業センター

2015年7月10日 「カザフ草原に生きる——女性たちの視点から」 大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年9月25日 「民博の中央アジア展示——現地での資料収集から」 大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年10月6日 「中央アジアの社会再編とイスラーム」、人間文化研究機構メディア懇談会、人間文化研究機構本部

2015年11月27日 「中央アジアの暮らしとイスラーム」、立花市民大学、尼崎市立中央公民館

2015年12月9日 「カザフの食文化」 カレッジシアター「地球探求紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年10月4日 「中央アジアの30年——展示リニューアルへ向けて」第399回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2016年2月14～15日—沖縄県那覇市および座間味村（ライフヒストリーに関する聞き取り調査）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

立命館大学国際関係学部「ロシア・ユーラシア研究Ⅱ」非常勤講師（2015年10月～2016年3月）。

名古屋大学大学院PhD博士課程教育リーディングプログラム「プロフェッショナル登龍門」の「イスラム文化論」（“Islam in Asia: An Anthropological Perspective”）を担当（2016年1月18日）。

先端人類科学研究部

寺田吉孝 [てらだ よしたか] ————— 部長（併）教授

【学歴】 ワシントン大学総合学部学士課程修了（1979）、ワシントン大学音楽部修士課程修了（1983）、ワシントン大学音楽部博士課程修了（1992）**【職歴】** ワシントン大学音楽部講師（1994）、ピッツバーグ大学船上大学プログラム講師（1995）、国立民族学博物館第2研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2008）**【学位】** Ph. D.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1992）、M. A.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1983）**【専攻・専門】** 民族音楽学**【所属学会】** 東洋音楽学会、Society for Ethnomusicology、International Council for Traditional Music、British Forum for Ethnomusicology

【主要業績】

[編著]

Terada, Y. (ed.)

2008 *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.

2001 *Transcending Boundaries: Asian Musics in North America* (Senri Ethnological Reports 22). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Terada, Y.

2000 T. N. Rajarattinam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460-490.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

音楽・芸能関連映像音響番組の制作と活用の再検討

・研究の目的、内容

民博が映像音響メディアを用いて蓄積してきた音楽・芸能の情報は膨大な量に達しており、その資料的価値は高い。しかし、活発な収集・制作活動に比べ、映像音響資料の活用に関する議論はこれまで十分に行われておらず、館外での利用、特に取材対象国・地域における利用は極めて限定的である。本研究は、これまでの番組作成と活用のプロセス（事前調査、取材、編集、上映など）を見直し、音楽・芸能の伝承に寄与することができる映像音響番組の制作方法を検討することを目的とする。特に今年度は、国際的な研究グループ（映像音響民族音楽学 Audiovisual Ethnomusicology）の設立に参加し、研究者のネットワーク構築に努力したい。

・成果

映像音響メディアが音楽・芸能の伝承や活性化に貢献しうる条件について考察を深めるために、複数のプロジ

エクトを並行して進めた。

1. 映像取材：国内取材では、在日コリアンの音楽に関する映像取材を計7回行い、東京・大阪在住の音楽家、音楽家集団3組の演奏およびインタビューを記録した。取材は文化資源プロジェクトとして2016年度も継続することが認められている。国外取材では、ネパール・カトマンドゥ市において楽器製作に関する映像を収集しただけでなく、同ボカラ市近郊にある楽師の村において民博が1980年代に制作した番組を上映し、番組の内容に関する追加情報を得るとともに観衆の反応を記録した。

2. 映像番組の編集：2014年度に取材を行った大阪市浪速区の太鼓づくりに関する番組の編集作業を行った。また、福岡正太准教授、サムアン・サム教授（外国人研究員）と共同で、カンボジアの影絵芝居スバエク・トムの英語字幕版を編集した。

3. 上映会：イギリス（音楽祭）、カザフスタン（音楽学会）、ネパール（映画祭）で、民博制作番組を上映し、参加者と内容や編集方法などに関する議論を行った。特に、イギリスにおける上映は、映画の対象となった太鼓集団の公演の一部として行われた。

◎出版物による業績

[単著]

寺田吉孝

2016 『音楽からインド社会を知る——弟子と調査者のはざま』（フィールドワーク選書11）京都：臨川書店。

[編書]

Terada Y. (ed.)

2016 *An Audiovisual Exploration of Philippine Music: The Historical Contribution of Robert Garfias* (Senri Ethnological Reports 133). Osaka: National Museum of Ethnology. 124pp. [査読有]

[論文]

Terada Y.

2015 Fusion music in South India. In V. L. Levine and P. V. Bohlman (eds.), *This Thing Called Music: Essays in Honor of Bruno Nettl*, pp.433-446. Lanham: Rowman & Littlefield.

[その他]

寺田吉孝

2015 「みんぱく世界の旅 民族音楽① 入手困難な和太鼓の材料」『毎日小学生新聞』7月25日。

2015 「みんぱく世界の旅 民族音楽② 西アジアから広がるチャルメラ」『毎日小学生新聞』8月1日。

2015 「みんぱく世界の旅 民族音楽③ 世界で人気 インドのおどり」『毎日小学生新聞』8月8日。

2015 「みんぱく世界の旅 民族音楽④ 受けつがれる「クリンタン」」『毎日小学生新聞』8月15日。

2016 「ジェンダーを超える踊り——ナルタキ・ナタラージ」『月刊みんぱく』40(1)：18-19。

2016 「リズム」増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.19-21, 東京：音楽之友社。

2016 「マイノリティ」増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.102-112, 東京：音楽之友社。

2016 「映像音響メディアと民族音楽学」『民博通信』152：28。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[ビデオテープ]

南 真木人・寺田吉孝制作監修

2016 『ネパールの伝統音楽 パンチャイ・バージャ』（日本語、16分）。

Sam, Sam-Ang, Terada, Y., Fukuoka S.制作監修

2016 Sbaek Thomm Episode 1: Preah Ream Constructing the Causeway (英語、142分)

2016 Sbaek Thomm Episode 2: The Floating Maiden (英語、107分)

2016 Sbaek Thomm Episode 3: Magically Produced Naga-Arrows (英語、136分)

2016 Sbaek Thomm Episode 4: Battle of Kampann and Hanuman (英語、100分)

2016 Sbaek Thomm Episode 5: Powerful Brahman Arrows (英語、143分)

2016 Sbaek Thomm Episode 6: Will of Sukkachar (英語、160分)

2016 Sbaek Thomm Episode 7: Will of Inthochitt (英語、167分)

[マルチメディア番組]

高 正子・寺田吉孝制作監修

2016 『アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今』（日本語・英語）

[電子ガイド]

寺田吉孝

2015 『南インドの婚礼』（日本語・英語）

2015 『婚礼と音楽（パンチャイ・バージャ）』（日本語・英語）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年11月1日 パネル『伝統音楽研究における定量的アプローチの可能性と課題——インド音楽世界の動向を事例として』（座長：田森雅一）東洋音楽学会 第66回大会、東京芸術大学

2016年1月7日 “‘Indian culture does not exclusively emanate from India’: ‘Circular Flow’ and Indian Diasporic Culture” 国際シンポジウム Absences, Silences and the Margin: Restructuring Indian Diaspora Studies マノンマニアム・スندگانル大学社会学部（インド、カンニヤークマリ）

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年5月17日 「南インドの結婚式と音楽」第383回みんぱくウィークエンドサロン 研究者と話そう

・研究公演

2015年11月22日 「時を超える南インドの踊り」国立民族学博物館講堂

・広報・社会連携活動

[映像番組上映]

2015年7月4日 *Angry Drummers: A Taiko Group from Osaka, Japan*（英語、2011年制作）第11回UK太鼓フェスティバル（エクセター、イギリス）

2015年7月21日 *Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalingas Wedding in the Northern Philippines*（英語、2014年制作）および *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines*（英語、2014年制作）国際伝統音楽学会第43回世界大会（アスタナ、カザフスタン）

2015年11月27日 *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines*（英語、2014年制作）第5回国際民俗音楽映画祭（カトマンズ、ネパール）

◎調査活動

・国内調査

2015年6月8日一堺市（在日コリアン音楽の映像取材）

2015年6月21日一大阪市生野区（在日コリアン音楽の映像取材）

2015年11月8日一大阪市生野区（在日コリアン音楽の映像取材）

2016年1月31日一大阪市生野区（在日コリアン音楽の映像取材）

2015年12月25日～12月26日一東京都豊島区（在日コリアン音楽の映像取材）

2016年3月18日～3月20日一川崎市川崎区、東京都港区（在日コリアン関連資料収集）

2016年3月24日～3月25日一東京都小平市（在日コリアン音楽の映像取材）

・海外調査

2015年7月2日～7月7日一イギリス（イギリス・エクセター市にて開催された第11回イギリス太鼓祭における民博制作映像番組の上映）

2015年7月12日～7月24日一カザフスタン（国際伝統音楽評議会第43回世界大会における民博制作映画上映と研究発表）

2016年1月4日～1月21日一インド、ネパール（国際シンポジウムへの参加及びネパール関連ビデオテーク番組制作のための海外映像音響資料収集）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

副指導教員（1人）

特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

齋藤 晃 [さいとう あきら] 教授

【学歴】 京都大学文学部文学科フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）【職歴】 国立民族学博物館第4研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2014）【学位】 学術修士（東京大学大学院総合文化研究科 1991）【専攻・専門】 文化人類学、ラテンアメリカ研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[共著]

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

齋藤 晃編

2009 『テキストと人文学——知の土台を解剖する』京都：人文書院。

[共編]

Saito, A. et Y. Nakamura (dir.)

2010 *Les outils de la pensée: étude historique et comparative des «textes»*. Paris: Éditions de la Maison des sciences de l'homme.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究

・研究の目的、内容

1570年代、スペイン統治下のアンデスにおいて、世界史上希有な社会工学実験が実施された。第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの命令により、かつてのインカ帝国の中核地域で約150万の先住民が基盤目状に整然と区画された1千以上の町に強制移住させられた。総集住化と呼ばれるこの政策は、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれているが、その内実には不明な点が多い。本研究では、地理情報システムを活用して、副王トレドの総集住化の全体像の解明を目指す。

・成果

民博の機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」(2011～2013年度、代表者：齋藤 晃)の成果の一部を『MINPAKU Anthropology Newsletter』40号特集にまとめ、英語で発信した。また、同研究の最終成果として、スペイン語の論文集の刊行準備を進めた。

科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」(2015～2019年度、代表者：齋藤 晃)の一環として、11月6～8日、米国ヴァンダービルト大学で国際シンポジウム「Rethinking Forced Resettlement in the Colonial Andes」を開催した。また、同シンポジウムの冒頭で研究プロジェクトの趣旨説明を行った。

◎出版物による業績

[論文]

Saito, A.

2015 Guerra y evangelización en las misiones jesuíticas de Moxos. *Boletín Americanista* 70: 35-56. [査読有、研究成果公開プログラム成果]

[その他]

Saito, A. (ed.)

2015 Special Theme: Core Research Project 'State, Community and Identity in the Modern Hispanic World: A Study of Resettlement Policy in Spanish America'. *MINPAKU Anthropology*

Newsletter 40: 1-10 [機関研究成果]

Saito, A.

2015 Resettlement Policy: A Success or Failure? *MINPAKU Anthropology Newsletter* 40: 1-3 [機関研究成果]

齋藤 晃

2015 「文化」以前の「文化相対主義」? 『民博通信』149: 18-19 [共同研究成果]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年11月6日～8日 International Symposium “Rethinking Forced Resettlement in the Colonial Andes.” (国際シンポジウムの実行委員長: Steven A. Wernkeと共同) Vanderbilt University, Nashville, TN, USA

2015年11月6日 ‘Colonial Modernity in the Andes: A Comparative Study of Viceroy Toledo’s General Resettlement.’ (趣旨説明) International Symposium “Rethinking Forced Resettlement in the Colonial Andes.” Vanderbilt University, Nashville, TN, USA

・共同研究会での報告

2015年12月23日 「Jesús López Gay 著『*La liturgia en la misión del Japón del siglo XVI*』について」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』国立民族学博物館

2016年2月24日 「合評会の総括」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月28日 ‘Balance de resultados del proyecto “La política de concentración poblacional y sus efectos sobre la sociedad indígena en los dominios españoles de Sudamérica”.’ (講演) Seminario extracurricular del Programa de Estudios Andinos. Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima, Perú [機関研究成果]

・広報・社会連携活動

2015年12月16日 「ユートピアの遺跡を訪ねて——ボリビア・パラグアイ・アルゼンチン」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・海外調査

2015年5月20日～5月31日—アメリカ合衆国、ペルー（ヴァンダービルト大学との学術協定締結協議及び副王トレドの総集住化に関する調査研究）

2015年8月1日～8月17日—ペルー（副王トレドの総集住化に関する調査研究）

2015年11月5日～11月10日—アメリカ合衆国（国際シンポジウム「植民地期アンデスの強制移住を再考する」への参加）

2016年3月7日～3月19日—アメリカ合衆国（スペイン領アメリカの集住政策に関する調査研究）

佐々木史郎 [ささき しろう] ————— 教授

1957年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒（1981）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1983）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1985）【職歴】国立民族学博物館第1研究部助手（1985）、大阪大学言語文化部助教授（1991）、国立民族学博物館第4研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター長併任（2004-2007）、国立民族学博物館副館長併任（2010-2012）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長併任（2013-2015）【学位】学術博士（東京大学大学院総合文化研究科 1989）、社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 1) シベリア、ロシア極東先住民の狩猟文化、トナカイ飼育文化の研究、2) ロシア極東先住民の近世史、近代史の研究【所属学会】日本文化人類学会、言語文化学会

【主要業績】

[単著]

佐々木史郎

2015 『シベリアで生命の暖かさを感じる』（フィールドワーク選書13）京都：臨川書店。

1996 『北方から来た交易民——絹と毛皮とサンタン人』（NHK ブックス772）東京：日本放送出版協会。

[編著]

Sasaki, S. (ed.)

2009 *Human-Nature Relation and Historical-Cultural Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests: Russian Far East and Northeast Japan* (Senri Ethnological Studies 72). Osaka: National Museum of Ethnology.

【受賞歴】

1997 第25回澁澤賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

極東ロシア、日本列島北部における近世から近代への転換

・研究の目的、内容

本研究は、これまで継続してきたアムール川下流域の歴史に関する研究をさらに発展させ、地域、対象民族の幅を広げる。すなわち、アムール川流域だけでなく、樺太（サハリン）、千島列島（クリル列島）、北海道まで対象地域を広げ、そこに暮らしてきた現在の先住民族の祖先たちが近代という時代を迎えて、それにどのように対応したのかという点を検討する。ただし従来のように、受動的な社会や文化の変化（多数派民族文化への同化、あるいは伝統文化、民族文化の衰退、消滅）に着目するのではなく、彼らの変化していく政治経済情勢に対する積極的な対応、適応の過程に着目する。

・成果

まず、2008年度から2011年度まで実施した共同研究「ポスト社会主義以後の社会変容——比較民族誌的研究」の成果の1つとして、『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界 比較民族誌的研究』（国立民族学博物館論集4）東京：風響社、2016年を渡邊日日との共編著で出版した。そこに「年金と自然に生きる村ウリカ・ナツィオナーリノエ——ポスト社会主義以後の時代の極東ロシアの先住民族社会」pp.211-243という論文を執筆し、アムール川流域の先住民族の人々が、社会主義体制時代から1990年代のポスト社会主義の時代を経て、21世紀のポスト・ポスト社会主義時代までの暮らしの実態を追いながら、彼らが近現代の政治経済情勢の変化にどのように対応したのかを明らかにした。

また、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地における織布技術と布の機能」というプロジェクトを立て、日本と海外の博物館に所蔵されている北海道、樺太、千島の先住民族であるアイヌ民族の織物と着物の詳しい調査を行い、彼らが自分たちの固有の織物の中に外来の織物をどのように取り入れて、その衣文化を構成してきたのか、そしてその構成が近世から近代へと時代が変わる時にどのように変化したのか明らかにした。その成果の一部は口頭発表で公開した。

◎出版物による業績

[共編著]

Shaglanova O. A., Sasaki S. (eds.) (Шагланова О. А. и Сасаки С. (ред.))

2016 *Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях: методы сбора, учета, хранения и экспозиции* (Senri Ethnological Reports 135). Osaka: Национальный музей этнологии (редакторы).

佐々木史郎・渡邊日日編

2016 『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界——比較民族誌的研究』（国立民族学博物館論集4）東京：風響社。

[論文]

佐々木史郎

2015 「北東アジアの中のアイヌ」夷西列像展実行委員会編『夷西列像』pp.122-127, 札幌：北海道博物

館。

2016 「年金と自然に生きる村ウリカ・ナツィオナーリノエ——ポスト社会主義以後の時代の極東ロシアの先住民族社会」佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界——比較民族誌的研究』(国立民族学博物館論集4) pp.211-243, 東京:風響社。

2016 「あしがき」佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界——比較民族誌的研究』(国立民族学博物館論集4) pp.267-274, 東京:風響社。

佐々木史郎・渡邊明

2016 「序論 ポスト社会主義以後という状況と人類学的視座」佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界——比較民族誌的研究』(国立民族学博物館論集4) pp.9-43, 東京:風響社。

Sasaki, S. (ササキ C.)

2016 Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях. Шагланова, О. А. и Сасаки С. (ред.) *Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях: методы сбора, учета, хранения и экспозиции* (Senri Ethnological Reports 135), стр.1-10. Осака: Национальный музей этнологии (написана с О. А. Шаглановой).

2016 Экспонаты культуры народов Сибири и Дальнего Востока в Национальном музее этнологии в Японии. Шагланова, Ольга А. и Сасаки С. (ред.) *Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях: методы сбора, учета, хранения и экспозиции* (Senri Ethnological Reports 135), стр.21-39. Осака: Национальный музей этнологии.

[その他]

2015 「コラム シカチ・アリヤン村とナナイの歴史」, 「おわりに」『岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン』図録 pp.61-65, pp.113, 東京:NPO ユーラシアンクラブ。

2015 「聖なる遺跡は物語る——アムール河の少数民族ナナイの神話をさぐる」国立民族学博物館「友の会ニュース」No.228 第443回友の会講演実施報告。

2015 「旅・いろいろ地球人 ミュージアム⑩ ロシア最古の博物館」『毎日新聞』9月10日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年6月27日～6月28日 ‘The Oak Forest Culture: Examination of K Sasaki’s Hypothesis.’ “The 6th Northeast Asia Ethnic Culture International Forum.” 中央民族大学民族学与社会学学院, 北京, 中華人民共和国

2015年8月10日 ‘A comparative study of the trap names and their distribution among the Tungus-speaking peoples.’ “The 3rd International Conference on Tungus (Altaic) Languages and Culture.” 中国社会科学院民族文学研究所, 海拉爾, 内モンゴル自治区, 中華人民共和国

2015年9月9日 ‘Limiting line of farming on the Lower Amur River basins: from historical records on the ancestors of the present indigenous hunter-gatherers.’ Session 12 “Historical ecology of indigenous people in Amur region” 11th International Conference on Hunting and Gathering Societies (CHAGS XI), in the University of Vienna, Vienna, Austria

2015年10月24日～10月25日 「シベリア・極東ロシア調査の30年」第30回北方民族文化シンポジウム網走『第30回記念大会 北方民族研究30年——成果・課題・博物館の役割』オホーツク・文化交流センター、網走

・みんぱくゼミナール

2015年5月16日 「先住民が守る古代遺跡——アムール川流域シカチ・アリヤン村の岩面画」第444回みんぱくゼミナール

2016年3月19日 「『夷酋列像』の首長たちがまとう衣装」第454回みんぱくゼミナール 国立民族学博物館講堂

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年5月24日 「シカチ・アリヤンの岩面画とナナイの神話」第384回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

2015年7月5日 「シカチ・アリヤンの岩画面の成立年代と日本の縄文時代」第389回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- ・研究講演

- 2015年5月27日 「アムール河の古代岩画と神話——少数民族の聖地シカチ・アリヤン」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店
- 2015年6月6日 「聖なる遺跡は物語る——アムール河の少数民族ナナイの神話をさぐる」第443回国立民族学博物館友の会講演、国立民族学博物館
- 2015年6月19日 「アムール河の古代美術——岩面画と神話」民博夜話、吹田歴史文化まちづくりセンター「浜屋敷」
- 2015年10月4日 「アムール河の古代遺跡と先住民の神話・世界観」国立民族学博物館巡回展『岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン』講演会、新潟県立歴史博物館
- 2015年12月13日 「古代美術と生きる人々——アムール河の先住民ナナイの神話とアート」国立民族学博物館巡回展『岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン』講演会、横浜情報文化センター
- 2016年3月16日 「北方の織布技術」国立民族学博物館定年退職教員記念講演
- 2016年3月25日 「アイヌの衣服の素材と文様」みんなく公開講演会『ワールドアートの最前線——アイヌの文様とエチオピアの響き』毎日新聞大阪本社オーバルホール

- ・展示

- 2015年5月21日～7月21日 企画展「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」実行委員長
- 2016年2月25日～5月10日 特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる 人・物・世界」実行委員
- 2015年4月1日～2016年3月31日 中央・北アジア展示場新構築実行委員、アイヌ展示場新構築実行委員

- ◎調査活動

- ・国内調査

- 2015年4月20日～4月23日—北海道白老町（アイヌ民族博物館）、旭川市（旭川市博物館）、苫小牧（苫小牧市立美術博物館）にて、アイヌの木綿衣と刀掛け帯を中心とした布製品の調査を行う。科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による。
- 2015年7月15日～7月17日—北海道札幌市（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園、北海道博物館）にてアイヌの木綿衣と刀掛け帯を中心とした布製品の調査を行う。科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による。
- 2015年7月28日～7月29日—東京（東京国立博物館、早稲田大学會津八一記念館）にてアイヌの樹皮衣、木綿衣と刀掛け帯を中心とした布製品の調査を行う。科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による。

- ・海外調査

- 2015年8月30日～9月4日—ロシア、サンクトペテルブルク（ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館、ロシア民族学博物館）にてハンティとアイヌの伝統的な衣服と装身具の調査を行う。科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による。
- 2015年12月21日～22日—ロシア、ウラジオストーク（ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学博物館、沿海地方郷土博物館）にて、アイヌの草皮衣（テタラペ）と先史時代の繊維製品の遺物、そして織機の部品の調査を行う。科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による。

- ◎大学院教育

- ・指導教員

主任指導教員（3人）、副指導教員（1人）

- ◎上記以外の研究活動

- ・科学研究費助成事業による研究プロジェクト

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（2014年度～2016年度）研

究代表者

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構『日本関連在外資料の調査研究』『シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究』ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究班共同研究員、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「野生動物の生息域拡大期における都市防衛システムの開発に関する環境学研究」（代表者：田口洋美）研究分担者

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構評議員、国立のアイヌ文化博物館（仮称）展示検討委員会座長、島根県古代歴史文化賞推薦委員

飯田 卓 [いいだ たく] ————— 准教授

1969年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2000）、修士（人間・環境学）（京都大学 1994）【専攻・専門】生態人類学、視覚メディアの人類学、文化遺産の人類学【所属学会】生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

飯田 卓

2014 『身をもって知る技法——マダガスカルに学ぶ』京都：臨川書店。

[編著書]

飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編

2013 『マダガスカルを知るための62章』東京：明石書店。

[論文]

飯田 卓

2010 「ブリコラージュ実践の共同体——マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用」『文化人類学』75(1)：60-80。

【受賞歴】

2010 日本アフリカ学会学術研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

文化遺産についての人類学的研究

- ・研究の目的、内容

機関研究「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」が最終年度を迎えるにさいしての総括として、人類学の視点から文化遺産を論じるさいの要点をまとめ、文化遺産についてのこれまでの人類学的研究の見取り図を示す。また、そのことをふまえて、機関研究に参加したメンバーを中心とした継続研究の資金申請も検討する。

- ・成果

最初の研究成果として、『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』（SER136）を、河合洋尚との共編で刊行した。また、『Heritage Practices in Africa』（SES）および『文化遺産の人類学』（2冊本、外部出版）も原稿が集まって編集作業を開始しており、2016年度中に刊行する予定である。

また、年度末の3月11日～13日に締めくくりとなるシンポジウム“Authentic Change in the Transmission in of Intangible Cultural Heritage”を開催し、盛況を博した。このシンポジウムをもとにした成果刊行にむけても準備が進んでおり、現時点ではイギリスの学術出版社から刊行する予定である。

◎出版物による業績

[編著]

河合洋尚・飯田 卓編

2016 『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』（国立民族学博物館研究報告 136）大阪：国立民族学博物館。

[共著]

飯田 卓・河合洋尚

2016 「序」河合洋尚・飯田 卓編『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』（国立民族学博物館研究報告 136）pp.1-17, 大阪：国立民族学博物館。

[論文]

飯田 卓

2015 「和食は誰のものか？——公開フォーラムが投げかけた問い」『民博通信』149：10-11.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年3月12日 ‘Regenerative Medicine of Culture: A Perspective Based on the Woodcrafting Knowledge of the Zafimaniry, Madagascar.’ International Symposium “Authentic Change in the Transmission of Intangible Cultural Heritage,” National Museum of Ethnology, Suita, Japan

・共同研究会での報告

2015年10月26日 「マダガスカル島の対大陸ネットワークと沿岸ネットワーク」『アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較』国立民族学博物館

2016年1月10日 「マダガスカル南西部の邪術と祖霊、憑依霊をめぐるエージェンシーの定立」『エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年8月24日 「地域文化のとらえかた——マダガスカル山間部での調査から考えたこと」追手門学院大学・国立民族学博物館学術交流協定研究会『地域文化の創造と継承』第2回研究会、追手門学院大学、大阪

2015年9月5日 「戦後期南西諸島の漁業における爆薬の流用」日本島嶼学会2015年次大会、奥尻町海洋研修センター、奥尻

2015年12月17日 「漁民のサンゴ礁保全——NGOとの知識交換にみるコミュニケーションとディスコミュニケーション」第215回アフリカ地域研究会、京都大学稲盛財団記念館、京都

2015年12月19日 「マダガスカルの海に生きる」琉球大学国際沖縄研究所シネマトーク「海に生きる」カフェmofgmona、宜野湾

2015年12月20日 「マダガスカルの木彫り技術の展示と映像記録」琉球大学国際沖縄研究所 民族誌的映像製作のための実践的ワークショップ『自然利用の技と知恵を記録する』琉球大学50周年記念館、西原

・研究講演

2015年4月25日 「マダガスカルの子どもたち」FNSチャリティキャンペーン『ユニセフ春のチャリティコンサート——マダガスカルについて知り、アートと音楽を楽しむ1日』カンテレ扇町スクエア、大阪

2015年6月25日 「日高昆布づくりの現場から」国立民族学博物館友の会 第70回体験セミナー「日本の食文化：昆布に親しむ」阪口楼、大阪

2015年6月27日 「研究成果公開としての民博展示」MMP（みんなくミュージアムパートナーズ）新規メンバー養成研修、国立民族学博物館

2016年1月16日 「マダガスカルの音楽——舞台と儀礼、プロとアマチュア」rondokreanto『ギターマダガスカ

ル』上映会 同時講演、rondokreanto、京都

2016年2月26日 「『わざ』から見る。ふたつの無形文化遺産——マダガスカル、ザフィマニリの木彫り知識を中心に」第13回無形文化遺産セミナー、堺市博物館、大阪

・広報・社会連携活動

2015年6月26日 「手仕事のマダガスカル——アマチュア・ナチュラリストの達成」連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——世界の『民芸』」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1F

2015年12月23日 「貝の魅力——その使用価値、装飾的価値、象徴的価値」連続講座「みんぱくナレッジキャピタル「世界の天然素材」第7回、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年10月25日 「博物館の中の文化遺産、博物館の外の文化遺産」第402回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2015年10月1日～3日—鹿児島県伊仙町、天城町、徳之島町（戦後漁業における爆薬の使用に関する調査）

2015年12月21日～22日—沖縄県竹富町（戦後漁業における爆薬の使用に関する調査）

・海外調査

2015年10月29日～12月13日—マダガスカル、ケニア（マダガスカルの外資系企業と環境保護団体の活動に関する調査及びマダガスカルとケニアの漁民の民俗知に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（C））「バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容」（研究代表者：飯田 卓）研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「インド洋西域島嶼世界における民話・伝承の比較研究」（研究代表者：小田淳一）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「「在来知」と「近代知」の比較研究——知識と技術の共有プロセスの民族誌的分析」（研究代表者：大村敬一）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「近代都市形成における多文化混住状況と出身地域社会への影響に関する研究」（研究代表者：岡田浩樹）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「アフリカ漁民文化の比較研究——水域環境保全レジームの構築に向けて」（研究代表者：今井一郎）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」（研究代表者：吉田憲司）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス・コロキウム運営委員、日本アフリカ学会評議員、文化遺産国際協力コンソーシアム委員、マダガスカル研究懇談会世話役代表

・非常勤講師

神戸大学大学院国際文化科学研究科「文化情報リテラシー特殊講義」（集中講義）

卯田宗平 [うだ しゅうへい] ————— 准教授

1975年生。【学歴】立命館大学産業社会学部卒（1998）、立命館大学大学院 理工学研究科修士課程修了（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了（2003）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1・2000）、日本学術振興会海外特別研究員（海外PD・2005）、中央民族大学民族学社会学学院訪問学者（2005-2010）、日本学術振興会特別研究員（PD・2008）、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク機構／東洋文化研究所汎アジア研究部門特任講師（2011）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2015）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2016）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学、2003）【専攻・専門】環境民俗学・東アジア地域研究【所属学会】日本民俗学会、文化人類学会、生態人類学会、The Society for Human Ecology (SHE)、生き物文

化誌学会、日本現代中国学会

【主要業績】

[論文]

卯田宗平

2015 「ポスト「北方の三位一体」時代の中国エヴェンキ族の生業適応——大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性——フィールドからのサステナビリティ論』616：73-108, 千葉：アジア経済研究所研究双書。

[単著]

卯田宗平

2014 『鶴飼いと現代中国——人と動物、国家のエスノグラフィ』東京：東京大学出版会。

[編著]

卯田宗平編

2014 『アジアの環境研究入門——東京大学で学ぶ15講』（古田元夫監修）東京：東京大学出版会。

【受賞歴】

2010年 第5回日本文化人類学会奨励賞

1998年 学部長コース賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国大興安嶺における生業環境の変化とトナカイ飼養民の適応形態

・研究の目的、内容

本研究は、中国東北部の大興安嶺森林地帯でトナカイ飼養を続ける少数民族を対象に、新中国成立前から集団化の時代を経て現在に至る生業環境の変化と生計維持のメカニズムを明らかにする。

・成果

中国大興安嶺のエヴェンキ族らは、かつて狩猟、漁撈、交通手段としてのトナカイの飼養という、いわゆる「北方の三位一体」の生業活動をおこなっていた。それが、2003年以降、トナカイの角を採取し、それを販売するトナカイ飼養に特化した生業活動に従事するようになった。つまり、エヴェンキ族らにとってのトナカイは「生業の手段」から「生業の対象」に変化したのである。こうした変化のなか、彼らは新たな技術を導入したり、飼養技術を革新したりすることはなく、むしろ既往の技術を援用することで引き続きトナカイを飼育していることが分かった。彼らが既往技術の援用で新たな環境に適応できたのは、角の商品化を積極的におこなう郷政府からの技術的な支援があったからであり、その背景には郷政府がトナカイ飼養をめぐる観光開発を推し進めていることに要因を求めることができる。なお、本研究は科学研究費助成事業（若手研究(B)）「中国大興安嶺における生業環境の変化とトナカイ飼養民の適応形態：1940-2010」（代表・卯田宗平）に基づいておこなった。

◎出版物による業績

[論文]

卯田宗平

2015 「手段としての動物と人間とのかかわり——中国と日本の鶴飼い漁の事例から」『生態人類学会ニュースレター』21：30-33。

[その他]

卯田宗平

2015 「みんなく食の民族誌 考える舌⑤ 琵琶湖のオオクチバス——駆除事業支える外来魚の食文化」『京都新聞』12月9日。

2015 「宇治川鶴飼の鶴匠とウミウの『はじめの一步』」『Ocean Newsletter』357：6-7, 東京：海洋政策研究所。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年9月17日 「概念を規定して、現象を読みとく——ウ類と人間とのかかわりの事例から」東京大学東洋文化研究所離任研究会、東京大学東洋文化研究所大会議室

2015年11月18日 「鵜飼——人間と動物の関係論再考」第269回民博研究懇談会、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2016年3月9日 「中国鵜飼い探訪記——消えゆく前にみてみよう」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・海外調査

2015年12月3日～12月18日—マケドニア共和国（鵜飼研究のための交渉、事前調査及び資料収集）

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業・若手研究(B)「中国大興安嶺における生業環境の変化とトナカイ飼養民の適応形態：1940-2010」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

岐阜市長良川鵜飼習俗総合調査専門委員会（岐阜市教育委員会）、関市小瀬鵜飼習俗総合調査委員会委員（関市教育委員会）

菊澤律子 [きくさわ りつこ]————— 准教授

1967年生。【学歴】東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程言語学専攻修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退（1995）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）【学位】Ph. D. (Linguistics)（ハワイ大学 2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）【専攻・専門】言語学、比較（歴史）言語学、オーストロネシア諸語、記述言語学、オセアニア先史研究【所属学会】日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society (UK)、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics、日本手話学会、関西言語学会

【主要業績】

[単著]

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*. Canberra: Pacific Linguistics.

[編著]

Kikusawa, R. and L. A. Reid (eds.)

2013 *Historical Linguistics, 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011* (Current Issues in Linguistic Theory 326). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

[論文]

Kikusawa, R. and K. A. Adelaar

2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480-516.

【受賞歴】

2015 2014年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2014 2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀奨学生賞

2008 第4回日本学術振興会賞

2005 第4回日本オセアニア学会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

オーストロネシア諸語の比較形態統語論的研究——動詞の形態法の発達史を探る

・研究の目的、内容

2014年度に引き続き、オーストロネシア諸語の発達史における①「名詞化接辞の動詞接辞化」の具体的なメカニズムと、その発達史の解明を目標に研究をすすめる。加えて、②「格構造の変化に伴う主語のプロパティの分布の変化」に関するプロジェクト始動のための準備をすすめる。

オーストロネシア諸語においては、早い時期に分岐した言語ほど動詞の形態法が複雑であり、オーストロネシア祖語の動詞のシステムは、これをほぼ直接反映させて再建される傾向にある。これに対し菊澤は、昨年度の研究において、形態統語論的な特徴の変遷はシステムの変遷として捉えるべきであり、音韻や語彙の再建におけるものとは異なる視点および手法が必要であることを示した。さらに昨年度は、システムの具体的な変遷過程については、各文法的特徴が独立して変化するという認識を受けて、個別の変化を解明した上で、総合的にどのような相互関連があるのかを検討する必要があること、また、これまで drift と称されてきた変化が祖語における変種の存在に基づく現象であることを指摘する Reid (2015) らの指摘をうけ、同様の視点が統語構造の比較再建にどのように生かされるのか、検討する必要があることを具体例を示しつつ指摘した。

2015年度はこの内容をさらに発展させるとともに、その成果のデータへの応用にむけて研究をすすめる。①の研究の継続に加え、②の開始準備として、オーストロネシア語族全体にわたる大規模分析と、そのデータの一部となる太平洋言語に関するヨーロッパ時代の言語記述のデジタル資料化を見据えたチームを編成する。チームには大学院生およびPD研究者を意識的に加え、ベルギーのヘント大学からの招聘により、欧州研究会議(ERC)の研究プロジェクト「印欧語の項構造の史的変遷解明のためのプロジェクト」(代表者 ヨハンナ・バースダル)および、「コンゴ王国の歴史解明のための学際的研究」(代表者 クーン・ボストゥン)と一緒に二国間交流共同研究に申請する予定である。

・成果

2016年度は、日本財団助成手話言語学研究部門関連の申請および設置準備に関するリサーチ・アドミニストレーターとしての業務がメインとなり、各個研究課題で計画していた大規模分析のためのプロジェクトの準備は2016年度以降に持ち超えとなった。各個研究として予定していた研究に関する成果は、以下の通り。(いずれも出版もしくは採択済み。)

- ・Kikusawa, Ritsuko. Conducting syntactic reconstruction of languages with no written records. *Syntactic Reconstruction: Applying the Comparative Method* ed. by Eugenio Luján, Jóhanna Barðdal and Spike Guildea. Amsterdam: Brill. To appear.
- ・Kikusawa, Ritsuko. Ergativity and language change. *An Oxford Handbook of Ergativity* ed. by Jessica Coon, Diane Massam, and Lisa Travis. Oxford: Oxford University Press. To appear.
- ・Kikusawa, Ritsuko A diachronic typology of applicative verbs in western Austronesian languages: Toward a comparison and reconstruction (synopsis). *Diachronic Typology of Voice and Valency-Changing Categories* ed. by L. Kulikov and S. Kittila. To appear.

◎出版物による業績

[論文]

Kikusawa, R.

2015 Typological Generalisations and Diachronic Analyses: Actancy Systems in Austronesian Languages. *Historical Linguistics in Japan*, 4: 3-32.

[その他]

菊澤律子

2015 「みんなく食の民族誌 考える舌② フィジーの熱帯魚」『京都新聞』12月2日。

2015 「ことばを調べれば歴史がわかる【前編】——「歴史言語学」が明らかにすることとは」*Academist Journal* 12月7日。(https://academist-cf.com/journal/?p=462)

2015 「ことばを調べれば歴史がわかる【後編】——「歴史言語学」が明らかにすることとは」*Academist Journal* 12月9日。(https://academist-cf.com/journal/?p=472)

2015 「手話の変化をたどる——比較方法の手話語彙への応用にむけて」『民博通信』138: 10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

Kikusawa, R and S. Fischer

2015年9月21日 ‘Form, Function, and Grammar: Signed and Spoken Languages.’ “Signed and Spoken Language Symposium 2016.” National Museum of Ethnology

Kikusawa, R and K. Sagara

2015年9月20日 ‘Towards Historical Sign Linguistics: A Preliminary Analysis Based on Number Expressions.’ “Signed and Spoken Language Symposium 2016.” National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年4月23日 ‘The Gradual and Discrete Nature of *Syntactic Change* in Some Western Austronesian Languages.’ “EVALISA-African Studies Joint Workshop,” University of Ghent

・みんぱくゼミナール

2015年10月17日 「言語の遺伝子をたどる——ことばの変化と人の移動」第449回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

2015年10月14日 「南太平洋の島へことばの調査に行く——言語学者 at フィールドワーク」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・その他

2015年10月6日 「手話ってなに？ 言語学ってなに？」東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」第1回講義

2015年12月14日 「いろいろなひとがいるということ——ことばと文化の多様性と私達」春日丘高等学校1年生人権学習講演、国立民族学博物館

2016年1月26日 「ディスカッション（半年間のまとめ）」東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」第15回講義

◎調査活動

・海外調査

2015年10月7日～10月11日スウェーデン（国際ワークショップ「構文文法における文法化現象の分析方法」に参加）

2015年12月1日～12月6日フランス（「音声言語コーパスにおける情報構造2」に関する会議に参加）

2016年1月1日～1月8日オーストラリア（第12回手話言語の理論的研究に関する国際会議に参加）

2016年2月23日～3月23日フィジー（南太平洋大学におけるフィジー語諸方言に関する調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館機関研究プロジェクト「マテリアリティの人間学「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」研究代表者、日本財団助成金「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催」研究代表者、筑波技術大学科研費研究分担者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

菊澤律子研究奨学資金

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

博士論文学外審査委員（大阪大学）、日本歴史言語学会事務局担当理事、日本言語学会広報委員、Association for Linguistic Typology 評議員、国際オーストロネシア言語学会運営委員、*Journal of Historical Syntax* 編集顧問委員、*Brill's Studies in Historical Linguistics* 編集顧問委員、*Journal of Historical Linguistics* 編集顧問委員、2015年度東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」コーディネーター、2015年度手話言語学講師派遣事業コーディネーター、2015年度国立民族学博物館学術手話通訳研究事業コーディネーター

◎学会の開催

2015年9月19日～9月21日 「《機関研究成果公開》国際シンポジウム「みんぱく手話言語学フェスタ2015」国立民族学博物館

2016年1月9日 「みんぱくセミナー「通訳学☆最前線」」国立民族学博物館

松尾瑞穂 [まつお みずほ] 准教授

【学歴】 南山大学文学部人類学科卒業（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2007）【職歴】 日本学術振興会特別研究員（PD）（2007）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科講師（2010）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科准教授（2013）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2014）【学位】 文学博士（総合研究大学院大学文化科学研究科 2008）学術修士（名古屋大学大学院国際開発研究科 2002）、【専攻・専門】 文化人類学、ジェンダー医療人類学、南アジア研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本宗教学会、宗教と社会学会

【主要業績】

[単著]

松尾瑞穂

2013 『ジェンダーとリプロダクションの人類学——インド農村社会の不妊を生きる女性たち』京都：昭和堂。

2013 『インドにおける代理出産の文化論——出産の商品化のゆくえ』東京：風響社。

[論文]

松尾瑞穂

2009 「『回復』を希求する——インド農村社会における不妊と『流産』経験」『文化人類学』74(3)：423-440。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インドにおけるリプロダクションとサブスタンスに関する研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、インド社会において、グローバル化、医療化、生殖医療技術によってリプロダクション（性と生殖）の実践はいかに変化しているのかを検討することを通して、ヒト、家族、親族、カーストといった自他のカテゴリーの生成や、親子や他者との関係性（relatedness）の様態の変容について、明らかにすることである。

リプロダクションの変容を、とくに生殖医療との関わりにおいて考察するうえで、南アジア地域におけるサブスタンスの概念は重要な出発点となる。ヒトの形成に関しては、南アジアの文脈でいえば、子どもの形成における種と大地という象徴的な民俗生殖理論がよく知られている。また、血液や体液のような身体部品や、食、環境の共有を通して身体が構成され、つながりが生み出されるということも議論されてきた。生殖医療がもたらす遺伝子のつながりと、身体サブスタンスを介したつながりはどのように接合、あるいは断絶しているのだろうか。これらの問いを念頭に置きながら、本年度の研究は、以下の3点から進められる予定である。

1) サブスタンス論の動向調査：サブスタンスの多面的性質の解明を具体化するため、サブスタンスの中でも人類学的蓄積の多い血液や母乳、精液に関する先行研究を分析し、そうした良く知られたサブスタンスと、臓器や配偶子（卵子、精子）、遺伝子という新たなサブスタンスとの差異について分析する。そのうえで、サブスタンスの特徴と射程を見定める。

2) 現地調査：体外受精や代理出産に関わる生殖医療の場、出産、授乳、マッサージ、新生児儀礼などの産後ケアの実践に関わるリプロダクションの場、さらにはヒンドゥー聖地において遂行される、子どもの誕生を目的とする祖先祭祀儀礼のような儀礼の場において、いかに個人と家族・親族、さらにはカースト集団などの紐帯が作り出され、顕在化するのかを、現地調査により明らかにする。

3) 共同研究会の組織化：サブスタンスの地域横断的な比較研究により、総合的な現象の把握を推進するため、民博の共同研究会に「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」というタイトルのもと、共同研究を申請済みである。採択された場合は12名の研究者が参加する共同研究会を三年半にわたり組織

する。不採択となった場合でも、科学研究補助金の基盤研究をはじめとする外部資金への申請を行い、共同研究に向けて計画を進めていく。

・成果

上記のテーマに関し、文献収集と文献読解、インドにおける2度のフィールド調査、イギリスにおける資料収集とセミナー出席、南アジア研究者との研究交流、国際学会 9th International Convention of Asian Scholars (ICAS) での分科会組織と研究発表を行った。

1) に関しては、成果の一部を『民博通信』149号に掲載された「新たなサブスタンスとつながりの再配置——インドの生殖医療のフィールドから」としてまとめたほか、共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置」第一回研究会において、「サブスタンス研究の動向」と題する研究発表を行った。

2) に関しては、8月と2月～3月にかけてインドにおける現地調査と、1月にイギリスでの資料収集調査を行った。インドでは、民俗生殖理論、妊婦の儀礼、新生児の名づけ儀礼など、新生児をめぐる家族・親族のつながり (relatedness) に関する調査を重点的に実施した。また、チットパーヴァン・バラモンの高齢女性への生活史の聞き取り、複数のヒンドゥー教聖地での祖先祭祀儀礼の調査も並行して行い、多様な次元で個人と家族・親族の紐帯の生成についてデータを収集した。

3) に関しては、4月に申請した共同研究会が採択され、10月より「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」を計画通り開始することが出来た。今年度は2度研究会を開催し、オセアニア、ヨーロッパ、アジア、日本を調査地とする研究者とともに、研究会の方向性や概念の検討・共有を行った。今後、三年半にわたり計12回開催する予定である。研究代表を務めるこの共同研究会以外にも、館内の3つの共同研究会のメンバーとして共同研究会に参画した。さらに、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」(民博拠点)の拠点構成員として、年間を通じた研究会の運営と参加、国際シンポジウムへの参加を行った。

また、科学研究費助成事業(基盤研究(B))「インド高齢女性のライフヒストリー」(代表:押川文字子)、科学研究費助成事業(基盤研究(B))「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」(代表:杉本良男)、および科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)「インド・マハーラーシュトラにおける集団意識とカースト・ダイナミクスの学際的研究」(代表者:足立享佑)の分担者・連携協力者として、研究会への参加、発表や海外調査を実施した。海外出張はすべて、これら科学研究費助成事業および人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド研究」(民博拠点)の予算によって実施した。

研究成果の公開としては、Routledge社から刊行された論集 *Cities in South Asia* にヒンドゥー聖地における祖先祭祀儀礼の隆盛と家族関係の変容について分析した論文を執筆したほか、2本の評論、小論を刊行した。また、インドの人工妊娠中絶にみる被傷性と暴力に関する論文、インドにおける体外受精という新技術をめぐる神話的、社会的言説と文化的認識を検討した論文を執筆し、来年度の刊行を目指している。その他、エッセイや事典項目を執筆し公表した。発表による成果公開としては、国際シンポジウムや国内研究会等での研究発表を4回、一般向け講演会を5回実施した。

◎出版物による業績

[単著]

Matsuo, M.

2015 Solving family problems: The role of religious practices for the Indian middle class. In C. Bates and M. Mio (eds.), *Cities in South Asia*, pp.228-242. Oxon and New York: Routledge.

松尾瑞穂

2015 「メディカル・ツーリズム」三尾稔・杉本良男編『現代インド6 環流する文化と宗教』pp.180-184, 東京大学出版会

[論文]

松尾瑞穂

2015 「新たなサブスタンスとつながりの再配置——インドの生殖医療のフィールドから」『民博通信』149: 4-9。

[その他]

松尾瑞穂

2015 「ライフスタイルの変化——ワインとビーフ」『月刊みんぱく』39(6): 8。

2015 「旅・いろいろ地球人 踊る⑥ 女たちの夜更かし」『毎日新聞』6月18日夕刊。

2015 「生殖と家族」「生殖革命」「ベビーM事件」『現代家族ペディア』東京: 弘文堂。

2016 「優生学」『月刊みんぱく』40(2)：20。

2016 書評「嶺崎寛子著『イスラーム復興とジェンダー——現代エジプト社会を生きる女性たち』昭和堂」『イスラーム世界研究』9：359-361, 京都大学イスラーム地域研究センター。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2015年11月7日 「サブスタンス研究の動向」共同研究会『グローバル化時代のサブスタンスの社会的配置に関する比較研究』（研究代表：松尾瑞穂）、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年7月8日 “At lease we’ve done a Good thing”: Commercialisation of funeral rites in Contemporary India” (ICAS9), Adelaide, Australia

2015年10月15日 「インドにおける生殖医療の研究動向」アジア経済研究所『中東イスラーム諸国における生殖医療と家族』（研究代表：村上 薫）、東京外国語大学サテライト

2015年11月5～6日 ‘Searching for a Meaningful Life: Experiences of Education and Society work of Senior Chitpāvan Women’, Workshop on Hearing Women’s Voices: Senior Women’s Recollection of Every-day Life in South Asia, Kyoto University, Kyoto

・みんぱくウィークエンドサロン

2015年7月19日 「インドのお手伝いさん」第391回みんぱくウィークエンドサロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2015年7月20日 みんぱく映画会 インド映画特集「ファンドリー」解説、国立民族学博物館

2015年10月2日 「インドのジェンダーと社会変化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年10月9日 「インドの生殖の医療化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2016年1月13日 「インドの家族とそのかたち、いま・むかし」カレッジシアター「地球探求紀行」、あべのハルカス近鉄本店

2016年1月23日 TUFPS シネマ インド映画特集「ファンドリー」解説、東京外国語大学

2016年2月11日 基調講演「多様な家族——文化人類学の視点から」みらいのかぞくプロジェクト『“みらいのかぞく”を考える——人の心・制度・科学技術』日本科学未来館

◎調査活動

・海外調査

2015年7月2日～7月10日—オーストラリア（国際会議（ICAS9）での研究発表および資料収集）

2015年8月9日～8月26日—インド（インド高齢女性のライフヒストリーに関する調査）

2016年1月14日～1月21日—イギリス（現代インド地域研究に係る資料収集）

2016年2月20日～3月12日—インド（西インドにおける構造変動に関する現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「インド高齢女性のライフヒストリー」（代表：押川文子）研究分担者、科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「インド・マハーラーシュトラにおける集団意識とカースト・ダイナミクスの学際的研究」（代表者：足立享佑）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（代表：杉本良男）連携協力者、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド研究」（国立民族博物館拠点 MINDAS）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

南山大学「地域の文化と歴史（南アジア）」（集中講義）、新潟国際情報大学「現代南アジア論」（集中講義）

丸川雄三 [まるかわ ゆうぞう] ————— 准教授

【学歴】東京工業大学理学部応用物理学科卒（1996）、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了（1998）、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学（2001）【職歴】東京工業大学精密工学研究所助手（2001）、科学技術振興機構 CREST 研究員（国立情報学研究所高野明彦研究室）（2003）、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手（2004）、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員（2006）、国立情報

学研究所連想情報学開発センター特任助手（2006）、国立情報学研究所連想情報学開発センター特任准教授（2007）、国際日本文化研究センター文化資料情報企画室准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）【学位】博士（工学）（東京工業大学大学院 2003）、修士（理学）（東京工業大学大学院 1998）【専攻・専門】1) 連想情報学、2) 文化財情報発信【所属学会】アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

〔論文〕

丸川雄三

2008 「文化財情報発信の実際——文化遺産オンラインの取り組みについて」『画像ラボ』19(4)：26-29.

水谷長志・川口雅子・丸川雄三

2014 「アジアからの美術書誌情報の発信——東京国立近代美術館・国立西洋美術館 OPAC の artlibraries.net における公開の経緯とその意義」『東京国立近代美術館研究紀要』18：6-31.

丸川雄三・阿辺川 武

2010 「横断的連想検索サービス『想 - IMAGINE』——データベース連携が拓く新たな可能性」『情報管理』53(4)：198-204.

【受賞歴】

2011 文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムを、データと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。

2015年度は、近代日本の身装（身体と装い）関係資料を対象とする情報サービスの研究開発を実施する。この研究は、これまでJSPS科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」（代表：高橋晴子、2012年度～2014年度）の助成を受け実施されてきたものであるが、研究成果をふまえ今年度も継続して研究を進める。さらに美術情報分野を中心とする制作者典拠データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は、JSPS科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（代表：丸川雄三、2014年度～2016年度）の助成を受けて実施するものである。

・成果

画像アーカイブズの活用研究として、近代日本の身装（身体と装い）を発信するウェブサイトの研究開発を実施した。明治から昭和期（1868～1945年）における身装に関する画像（身装画像デジタルアーカイブ）のデータベースの試験運用を行い、連想検索技術によって検索・閲覧が可能なウェブサイト「近代日本の身装文化」の一般公開に向けた準備を進めた。これまでの研究成果を2015年12月に「人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2015」」で発表した。この研究は、JSPS科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」（代表：高橋晴子、2012年度～2014年度）の研究成果をふまえ実施されたものである。また、文化財情報の活用基盤の研究として、制作者典拠データベースの研究開発を実施した。2015年度は、東京文化財研究所および国立美術館と協働で作家データの調査と収集を行うとともに、他の機関が所蔵する作品情報との連携および公開活用を前提とした制作者データベースを試作した。この研究は、JSPS科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（代表：丸川雄三、2014年度～2016年度）の助成を受けて実施されたものである。

◎出版物による業績

〔論文〕

丸川雄三

2015 「身装画像データベース「近代日本の身装文化」の公開と運用——公開用ウェブインタフェースと研

研究者の参加を促す編集環境の実現」『じんもんこん2015論文集』pp.233-238. [査読有]

[その他]

丸川雄三

2015 「あかり」『月刊みんぱく』39(2) : 10-11.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年6月7日 「文化遺産オンライン APIによる収蔵品情報の活用」2015年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会、国立西洋美術館、東京

2015年7月23日 「制作者データベースの試作と公開に向けた課題」「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」第3回研究会、東京文化財研究所、東京

2015年10月2日 「国立民族学博物館における文化資源情報公開の取り組み——フォーラム型情報ミュージアムについて」コアプロジェクトFS第1回研究会「オープンサイエンス時代の社会協働に基づく地球環境研究を支援する情報サービスの実現」、総合地球環境学研究所、京都

2015年11月14日 「美術分野における制作者情報の統合——制作者データベースの実現を目指して」2015年度アート・ドキュメンテーション学会第8回秋季研究発表会、根津美術館、東京

2015年12月12日 「身装画像データベース「近代日本の身装文化」の公開と運用——公開用ウェブインタフェースと研究者の参加を促す編集環境の実現」人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2015」、同志社大学京田辺校地、京都

2016年2月6日 「近代日本の身装文化——研究資源データベースの発信と展開」第11回人間文化研究情報資源共有化研究会「人間文化研究機構のもつ画像データ共有化の前進に向けて」、TKP ガーデンシティ京都、京都

2016年2月11日 “Test Program of Info-Forum Museum” Yuzo Marukawa, Hirofumi Teramura, 《International Workshop》 System Development for the Info-Forum Museum: Philosophy and Technique, National Museum of Ethnology

2016年3月30日 「フォーラム型情報ミュージアムにおける情報システムの開発」2015年度人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築「個別プロジェクト等成果報告会」、国立民族学博物館

・展示

2015年8月27日～11月10日 国立民族学博物館特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」実行委員

2015年7月18日～10月4日 東京都美術館「キュッパのびじゅつかん——みつめて、あつめて、しらべて、ならべて」参加型展示スペースにおいてデジタルビューアを担当

・広報・社会連携活動

2016年3月4日 「データベースからみる世界の民族文化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年1月17日 「画像データベースで見る・学ぶ「近代日本の身装文化」」第410回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2016年2月20日～2月22日—大韓民国（韓国国立民俗博物館においてフォーラム型情報ミュージアムにかかる調査研究）

◎大学院教育

総合研究大学院大学・論文ゼミ担当

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

国立情報学研究所客員准教授、東京国立近代美術館客員研究員、東京文化財研究所「近現代美術資料の収集、

整理、公開に関する調査研究」客員研究員、奈良国立博物館「仏教美術に関する共同調査研究」調査員、立命館大学アート・リサーチセンター「歌舞伎・浄瑠璃データベースの活用に関する研究」客員協力研究員

研究戦略センター

鈴木七美 [すずき ななみ] センター長(併)教授

【学歴】 東北大学薬学部薬学科卒(1981)、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了(1992)、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了(1996) **【職歴】** 財団法人仙台複素環化学研究所研究員(1981)、中外製薬株式会社国際開発部(1982)、財団法人相模中央化学研究所第4研究班研究員(1983)、京都文教大学人間学部文化人類学科専任講師(1997)、京都文教大学人間学部助教授(2000)、京都文教大学大学院文化人類学研究科助教授(2002)、マギル大学人類学部客員助教授(2003)、放送大学文化人類学'04分担任協力講師(2004)、京都文教大学人間学部文化人類学科専任教授(2005)、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授(2005)、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授(2007)、放送大学客員教授(2007)、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任(2009)、国立民族学博物館研究戦略センター教授(2014) **【学位】** 博士(学術)(お茶の水女子大学 1996)、修士(人文科学)(お茶の水女子大学 1992)、学士(薬学)(東北大学 1981) **【専攻・専門】** 文化人類学、エイジング研究、医療社会史 **【所属学会】** 日本文化人類学会、アメリカ学会、Association for Anthropology and Gerontology (AAGE)、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)

【主要業績】

[単著]

鈴木七美

2002 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』 京都：世界思想社。

1997 『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』 東京：新曜社。

[編著]

Suzuki, N. (ed.)

2013 *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

【受賞歴】

1998 第13回女性史青山なを賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

高齢化時代のエイジ・フレンドリー社会構想と実践における人類学的想像力

・研究の目的、内容

エイジング研究と社会的包摂に関連し、高齢者のニーズに応える環境形成はすべての世代の人々が暮らしやすい環境に繋がるという「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想の動向に関する情報を収集・整理し、この視点に関わる調査研究を進め成果を公開する(外部資金 科学研究費助成事業(基盤研究(B)) 特設分野研究「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」研究代表者：鈴木七美)。

また、エイジングに関する比較文化研究として、「オルタナティブ・メディスン」の高齢社会における適用に関し現地調査を進める(外部資金：科学研究費助成事業(基盤研究(C))「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」研究代表者：鈴木七美)。

・成果

I 外部資金：科学研究費助成事業(基盤研究(B)) 特設分野研究「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」(研究代表者：鈴木七美)に基づく成果公開として、以下を実施した。

- 1) 高齢化社会に関する実践的研究において注目されている「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」というタームについて、日本文化人類学会第49回研究大会（大阪国際交流センター 2015年5月31日）において検討した：「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の課題」。
 - 2) アメリカ老年学会第68回年次大会（米国・オーランド、2015年11月20日）において、東日本震災後の高齢者の生活支援に関し、5年間継続してきた実践者との共同研究成果を発信した：“The New Role of Care Manager Toward Promoting Aging-In-Place of Elderly Experienced the Great East Japan Earthquake”。
 - 3) 応用人類学会第76回年次大会（SfAA2016）（カナダ・バンクーバー、2016年3月31日）のシンポジウム The Value of Applied Anthropology in Gerontology (SMA: Society of Medical Anthropology) において、高齢者研究における現場実践者と文化人類学研究者の協働の意義について検討した：“The Meaning of Collaborative Practices Conducted by Care Workers and Anthropologists after the Great East Japan Earthquake toward Aging-in-Place of Migrant Older Adults”。
 - 4) 文化人類学の現代的な効用を学生や一般市民に発信する日本文化人類学会主催公開シンポジウム「人類学的想像力の効用」（金沢市いのき迎賓館 11月8日）において、高齢者の生活支援と想像力に関わる発表を行った：（招待講演）「医療現場での想像力——エイジング・イン・プレイスと養生」。
 - 5) 高齢者の生活に関する文化人類学、社会学、福祉政策学の学際的研究成果の公開として、2014年に企画開催した高齢者の住環境開発に関する人間文化研究機構シンポジウム「高齢期の多様な住まい方とウェルビーイング」（イイノホール（東京） 2014年3月8日）の成果をまとめ、人間文化研究機構のウェブサイトで広く一般に発信した：「高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方——変わりゆく人の生（ライフスタイル）から考える」人間文化研究機構『人間文化』22：2-12 (<http://www.nihu.jp/sougou/jouhou/publication/ningen.html#22>)。
 - 6) 科学研究費助成事業の成果を、国立民族学博物館において来館者と共有する目的で、国際セミナーを2回、公開セミナーを1回開催した。（①“Happiness and “Governance” 2015年7月8日 ②“Integration of Older Adults in Social, Educational, & Religious Settings” 2015年8月6日 ③「高齢者たちと共に考えるウェルビーイング——宮城県の在宅高齢者生活支援の現場から」 2016年2月12日）。
- II 外部資金：科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」（研究代表者：鈴木七美）に基づく研究成果を、学会誌とウェブサイトを通して、広く医療従事者・研究者および一般に向けて発信した。
- 1) 論文「未病から考える高齢社会の養生とレジリエンス」日本未病システム学会『日本未病システム学会雑誌』20-2：31-35。
 - 2) 「スイスにおける養生文化とエイジ・フレンドリー・コミュニティ」（公益社団法人日本薬学会 <http://www.pharm.or.jp/highlight/index.shtml>)。

◎出版物による業績

[論文]

鈴木七美

- 2015 「高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方——変わりゆく人の生（ライフスタイル）から考える」『人間文化』2013(22)：2-12, 東京：人間文化研究機構。（Internet 2016年4月28日 <http://www.nihu.jp/ja/publication/ningen/22>）[科学研究費助成事業（基盤研究(B) 特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー）成果]
- 2016 「スイスにおける養生文化とエイジ・フレンドリー・コミュニティ」公益社団法人日本薬学会。（Internet 2016年4月28日 <http://www.pharm.or.jp/highlight/index.shtml>）[科学研究費助成事業（基盤研究(C)）成果]。

[その他]

- 2016 「ワーク・ライフ・バランスを要請する北欧福祉社会の課題」中谷文美・宇田川妙子編著『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』pp.242-245, 京都：世界思想社。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年5月31日 「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の課題——変動のなかのエイジング・イン・プレイス」日本文化人類学会第49回研究大会、大阪国際交流センター [査読有]

- 2015年7月9日 「趣旨説明」公開国際セミナー「幸福とガバナンス」科学研究費助成事業「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（基盤研究B）〔特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー〕（代表者：鈴木七美）成果公開、国立民族学博物館4階大演習室
- 2015年8月6日 「趣旨説明」公開国際セミナー「『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践」科学研究費助成事業「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（基盤研究B）〔特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー〕（代表者：鈴木七美）成果公開、国立民族学博物館4階大演習室
- 2015年11月20日 “The New Role of Care Manager Toward Promoting Aging-In-Place of Elderly Experienced The Great East Japan Earthquake,” 68th Annual Scientific Meeting, The Gerontological Society of America, Walt Disney World Swan and Dolphin, Orlando, U.S.A. [査読有]
- 2016年2月12日 「趣旨説明 高齢化社会におけるウェルビーイングとエイジング・イン・プレースの共同研究」公開研究セミナー『高齢者たちと共に考えるウェルビーイング——宮城県の在宅高齢者生活支援の現場から』科学研究費助成事業「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（基盤研究B）〔特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー〕（代表者：鈴木七美）成果公開、国立民族学博物館4階大演習室
- 2016年3月31日 “The Meaning of Collaborative Practices Conducted by Care Workers and Anthropologists after the Great East Japan Earthquake toward Aging-in-Place of Migrant Older Adults,” Symposium: The Value of Applied Anthropology in Gerontology: Imaging Career Paths at the Intersection of Anthropology, Health, and Aging (SMA: Society of Medical Anthropology) SfAA 2016: Society for Applied Anthropology 76th Annual Meeting, The Westin Bayshore, Vancouver, Canada [査読有]

・研究講演

- 2015年11月8日 招待講演「医療現場での想像力——エイジング・イン・プレースと養生」日本文化人類学会研究成果公開発表シンポジウム「人類学的想像力の効用」金沢市しいのき迎賓館3階セミナールームB

・広報・社会連携活動

- 2015年7月8日 「アメリカン・キルトの世界：キルトのある生活、キルティングする人びと」ナレッジキャピタル「超」学校シリーズ「みんなく×ナレッジキャピタル——世界の『民芸』」、CAFE Lab, グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1F
- 2015年11月13日 「コメント」みんなく公開講演会「育児の人類学、介護の民俗学」（主催：国立民族学博物館・日本経済新聞社）日経ホール

◎調査活動

・国内調査

- 2015年7月20日～7月23日—バイタルケア名取（科学研究費助成事業（基盤研究B）特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（研究代表者：鈴木七美）に関わる資料収集及び調査）
- 2016年2月29日～3月3日—バイタルケア秋田（北）・バイタルケア秋田（南）（科学研究費助成事業（基盤研究B）特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（研究代表者：鈴木七美）に関わる資料収集及び調査）

・海外調査

- 2015年6月14日～7月5日—スイス、ドイツ（「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」に関わる資料収集及び調査）
- 2015年11月17日～12月3日—アメリカ合衆国（「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の調査）
- 2016年3月26日～4月5日—カナダ（「多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究」にかかる調査研究）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

- 博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

Editorial Advisory Board for Anthropology & Aging (A&A: The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology (AAGE)、American Society on Aging (ASA) 2016 Aging in America Conference 発表の査読者 (peer reviewer)、日本文化人類学会学会誌『文化人類学』編集委員会委員、地域研究コンソーシアム理事

・他大学の客員、非常勤講師

京都ノートルダム女子大学「ウェルビーイング研究特論」(集中講義)

樫永真佐夫 [かしなが まさお] ————— 教授

1971年生。【学歴】早稲田大学第一文学部日本文学専修卒(1994)、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了(1997)、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻(文化人類学コース)博士課程単位取得退学(2001)【職歴】日本学術振興会特別研究員(1997)、国立民族学博物館民族社会研究部助手(2001)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授(2008)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授(2010)、総合研究大学院大学准教授併任(2012)、国立民族学博物館研究戦略センター教授(2016)、総合研究大学院大学教授併任(2016)【学位】学術博士(東京大学 2006)、学術修士(東京大学 1997)【専攻・専門】文化人類学(東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究)【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」——村のくらしと恋』東京：雄山閣。

2011 『黒タイ年代記——「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀——家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第6回日本学術振興会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムにおける黒タイ文字と文書／東南アジアにおけるボクシングの文化人類学

・研究の目的、内容

フランスによるインドシナの植民地化が進んだ19世紀後半、当時のベトナム西北部の黒タイ首領たちが、外部の諸国家や首領たちに対するどのような政治的外交的戦略から黒タイ文字を創成したのかを歴史的に考察した論文の編集作業を、出版に向けて編著者らと進める。

黒タイ詩人による歌謡テキストの翻訳と注釈を付す作業を継続して行い、来年度刊行を目指す。

・成果

ベトナムの黒タイ歌謡テキスト研究の副産物として、黒タイと白タイによる民族文化の資源化に基づく観光開発の現状を比較検討した論文「ベトナムにおける民族文化の資源化と観光開発——マイチャウとソンラーにおけるターイの事例から」が、塚田誠之編『民族文化資源とポリティクスー中国南部地域の分析から』(風響社)の1章として刊行された。

そのほか、ベトナム社会文化研究の一環として、「台所のカミさまがいる展示場」「ベトナム・黒タイ族の山椒」等の小論を発表した。

フランスによるインドシナの植民地化が進んだ19世紀後半、当時のベトナム西北部の黒タイ首領たちが、外部の諸国家や首領たちに対するどのような政治的外交的戦略から黒タイ文字を創成したのかを歴史的に考察した論文を執筆した。現在、編著者とともに編集作業を継続して進めるとともに、出版助成金の獲得を検討している。

◎出版物による業績

[論文]

樫永真佐夫

2016 「ベトナムにおける民族文化の資源化と観光開発——マイチャウとソンラーにおけるターイの事例から」塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』pp.295-322, 東京：風響社。

[その他]

樫永真佐夫

2015 「台所のカミさまがいる展示場」『月刊みんぱく』39(7)：5。

2015 「みんぱく 食の民族誌 考える舌⑦ ベトナム・黒タイ族の山椒」『京都新聞』7月1日。

2016 「ゾクン峠の野火——ベトナム、タイ族の囲炉裏収集のこぼれ話」『みんぱく e-news』175号, 1月1日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2015年12月19日 「ベトナム、黒タイの台所」第451回みんぱくゼミナール

・研究講演

2015年6月10日 「ベトナム、黒タイの『竹の文化』」連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——世界の『民芸』、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1F

2015年8月23日 「食の歳時記—ベトナム、黒タイの村から」第113回国立民族学博物館友の会東京講演会、JICA地球ひろば、東京

2015年10月27日 「ベトナムにおけるガストロノミック・ツーリズムの可能性」ル・コルドン・ブルー創立120周年記念シンポジウム『食の未来—ガストロノミック・サイエンス&イノベーション』、立命館大学びわこ・くさつキャンパス、滋賀

2015年11月28日 「トレーニングの楽しさをめぐる文化学」日本ハイインテンシティトレーニング協会 (JHITA) 主催『STRONG DEPOT セミナー』、STRONG DEPOT、大阪

・広報・社会連携活動

2015年11月11日～11月12日 2015年度みんぱく若手研究者奨励セミナー「伝承と身体をめぐる文化人類学」コーディネーター

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年12月13日 「ベトナム、ターイの台所」第407回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年11月30日～12月11日—ベトナム（黒タイの歌にかかる調査研究）

◎大学院教育

・博士論文審査委員

博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ]————— 副館長（研究・国際交流担当）

塚田誠之 [つかだ しげゆき]————— 教授

1952年生。【学歴】北海道大学文学部史学科東洋史学専攻卒（1978）、北海道大学大学院文学研究科修士課程東洋史学専攻修了（1980）、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程東洋史学専攻単位取得（1987）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1988）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長（2011）国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）、総合研究大学院大学学長特別補佐（2013）【学位】文学博士（北海道大学 2001）、文学修士（北海道大学大学院文学研究科 1980）【専攻・専門】

歴史学 中国南部地域（広西・貴州等）のチワン（壮）族をはじめとする諸民族の歴史民族学的研究【所属学会】日本文化人類学会、史学会、宋代史研究会、北海道大学東洋史談話会、北大史学会、漢民族研究学会（中国）、壮学会（中国）

【主要業績】

[単著]

塚田誠之

2000 『壮族文化史研究——明代以降を中心として』東京：第一書房。

[編著]

塚田誠之編

2016 『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』東京：風響社。

[論文]

塚田誠之

2016 「壮族の「民族英雄」儂智高に関する研究の動向と問題点」『国立民族学博物館研究報告』40(3)：411-453。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国南部・広西におけるチワン族の歴史の資源化に関する研究

・研究の目的、内容

中国の急速な経済発展にともない、歴史が政府や知識人などによって資源化されている。とくに中国南部・広西におけるチワン族の歴史の資源化を対象として調査研究を進める。チワン族の「民族英雄」として扱われている儂智高の歴史的解釈の変遷、土着の権力者「土司」に関する史跡の資源化について、調査研究を行う。

・成果

儂智高の歴史的解釈の変遷について、「国立民族学博物館研究報告」40巻3号に論文「壮族の「民族英雄」儂智高に関する研究の動向と問題点」を掲載した。そして、人民共和国成立以降、時代の変化に応じて、その時代の思潮を映し出すような異なった解釈がなされ続けてきたこと、儂智高をめぐるこれまで分析されてこなかった経済基盤や宋朝との制度史的な関係などを考察した。

また、ふるい土司建築が残る広西忻城県の土司博物館について、歴史の資源化に関する調査を行い、さらに、漢族の地方集団「六甲人」の歴史と現状について調査を行った。くわえて、儂智高に関して、ベトナム・カオバン省で複数の廟と祭祀に関する調査を行い、儂智高の資源化の現状を考察した。

この他、民博共同研究「中国における民族文化の資源化とポリティクス——南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究」（2010年9月～2013年3月）の成果として論文集「民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から」（塚田誠之編、東京：風響社）を刊行した。そして、その中の論文で中越国境の「徳天跨国瀑布」観光におけるチワン族とベトナム民族との関わりの実態を明らかにした。

さらに、チワン族とベトナム側民族との中越国境を越えて交流してきた歴史について、4月に愛知大学国際問題研究所で開催された国際シンポジウム「「戦後」の意味——アジアにおける1945年とその後」で研究発表を行い、論文「論中越国境広西壮族与高平儂族岱族70年的民族交往」（謝政論・松岡正子・廖炳惠・黄英哲編『何謂「戦後」——亞洲的「1945」年及其之後』（台北：允晨文化実業股份有限公司）を公表した。

◎出版物による業績

[編著]

塚田誠之編

2016 『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』東京：風響社。[査読有、共同研究「中国における民族文化の資源化とポリティクス——南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究」2010年9月～2013年3月の成果]

[論文]

塚田誠之

2015 「論中越国境広西壮族与高平儂族岱族間70年的民族交往」謝政論・松岡正子・廖炳惠・黄英哲主編『何謂「戦後」——亞洲的「1945」年及其之後』pp.411-435, 台北：允晨文化公司。

2016 「壮族の「民族英雄」儂智高に関する研究の動向と問題点」『国立民族学博物館研究報告』40(3) : 411-453。[査読有]

2016 「国境地域における観光の現状と問題——徳天跨国瀑布観光の事例から」塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』pp.273-294, 東京：風響社。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年4月12日 「中国広西の壮族とベトナム民族の交流の70年」、国際シンポジウム『「戦後」の意味——アジアにおける1945年とその後』（主催：愛知大学国際問題研究所、台湾・東呉大学人文社会学院、アメリカ・カリフォルニア大学サンディエゴ校文学系）、愛知大学車道校舎コンベンションホール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年6月7日 「中国チワン族の棚田観光の現状」第386回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年8月1日～8月15日—中華人民共和国（広西におけるチワン族を中心とした歴史・文化の資源化の調査）

2016年3月6日～3月17日—ベトナム（ベトナム・カオバンにおける儂智高廟とその祭祀に関する調査）

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]————— 教授

【学歴】 東北大学文学部社会学科社会学専攻卒（1988）、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了（1992）、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了（1998）【職歴】 花王株式会社本社チェーンストア部（1988）、国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）【学位】 Ph. D.（ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998）、M. Sc.（ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992）【専攻・専門】 社会人類学 1) アジア産業労働者の人類学的研究、2) ラオス仏教の人類学的研究、3) コミュニティの政治人類学的研究【所属学会】 日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute、組織学会

【主要業績】

[単著]

平井京之介

2011 『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT出版。

[編著]

平井京之介編

2012 『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』京都：京都大学学術出版会。

[論文]

Hirai, K.

2008 The Romantic Ethic and the Notion of Modern Society: Imagining Communities among Northern Thai Factory Women. In S. Tanabe (ed.) *Imagining Communities in Thailand: Ethnographic Approaches*, pp.135-160. Chiang Mai: Silkworm Books.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

水俣病被害者支援運動の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人びとが水俣病被害者を支援する運動を通じて新たにコミュニティを形成し、国家や社会との関係をつくりかえようとする過程を、人類学的アプローチを用いて明らかにする試みである。本研究では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援NPOをコミュニティという観点から調査研究することによって、1970年代半ばから現在までのあいだに、この運動の活動や組織、関係性、資源と、そこに参加する人びとの志向する社会のイ

メージがいかに変化してきたか、またその過程において、国家統治や資本主義との関係をどのように変化させてきたかを解明することを目的とする。

・成果

本年度は、2013年度から3年間の予定で実施している科学研究費助成事業プロジェクト（基盤研究C）「水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究」の研究活動の一部として、熊本県水俣市のNPOにおいて約6ヵ月間の集約的な現地調査を実施した。特に、NPOの歴史の変容過程を明らかにするための補足的な調査と、過去40年間の元メンバーらから、運動の歴史についての聞き取り調査を実施し、データを収集した。また、一昨年度に実施した国際シンポジウム“Social movements and the production of knowledge: politics, identity and social change in East Asia”の成果を、SESとして刊行した。

◎出版物による業績

[編著]

Hirai, K. (ed.)

2015 *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91). Osaka: National Museum of Ethnology [査読有、機関研究の成果]

[論文]

平井京之介

2015 「「公害」をどう展示すべきか——水俣の対抗する二つのミュージアム」竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶——戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』pp.148-177, 東京：東信堂。[査読有、機関研究の成果]

2015 「心で感じるミュージアム——日本軍「慰安婦」歴史観」竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶——戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』pp.258-264, 東京：東信堂。[査読有、機関研究の成果]

2015 Social movements and the production of knowledge: body, practice, and society in East Asia. In K. Hirai (ed.) *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91), pp.1-22. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有、機関研究の成果]

2015 Storytelling as political practice: habitus and social change in the Minamata disease movement. In *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91), pp.81-99. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有、機関研究の成果]

[その他]

平井京之介

2015 「靴を脱いでお上がりください」『月刊みんぱく』39(7)：4。

2015 「たんぼ道、女工と僧のすれ違い」『月刊みんぱく』39(7)：9。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

平井京之介監修

2015 マルチメディアコンテンツ『寺院の歩き方』（日本語）

2015 『森の僧院』（日本語、2分18秒）

・電子ガイドの制作・監修

平井京之介監修

2015 『女工』（日本語・英語）

2015 『寺院』（日本語・英語）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2016年2月20日 「みんぱくにタイ寺院ができるまで」第453回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

2016年3月18日 「タイ・ラオス仏教寺院の歩き方」2016年春の公民館講座『民族学への招待——躍動する東南・南アジア』芦屋市立公民館

2015年8月26日 「タイ・ラオスの仏教寺院——その伝統と文化」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべの
ハルカス近鉄本店

・ **みんなくウィークエンド・サロン**

2015年12月20日 「タイ・ラオス仏教寺院の歩き方」第408回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎ **調査活動**

・ **国内調査**

2015年9月2日～11月13日一熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2015年11月21日～12月19日一熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2016年1月5日～2月19日一熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2016年2月26日～2月29日一熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2016年3月9日～3月12日一岩手県大槌町、奥州市（社会と研究のインターフェースとしての展示に関する総合的研究）

◎ **上記以外の研究活動**

- ・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究（2013-2015）研究代表者

伊藤敦規 [いとう あつのり] ————— **准教授**

1976年生。【**学歴**】東京都立大学人文学部卒（社会学学士）（2000）、東京都立大学大学院社会科学部研究科修士課程修了（社会人類学修士）（2003）、国立民族学博物館平成19年度特別共同利用研究員修了（2008）、国立民族学博物館平成20年度特別共同利用研究員修了（2009）、東京都立大学大学院社会科学部研究科博士課程単位取得満期退学（2009）【**職歴**】三重大学人文学部非常勤講師（2008）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員（2008）、A:shiwi A:wam Museum and Heritage Center Visiting Researcher（2009）、日本学術振興会特別研究員 PD（2009）、立教大学兼任講師（2009）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員（2010）、国立民族学博物館平成22年度文化資源プロジェクト共同研究員（2010）、東北大学東北アジア研究センター共同研究員（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2012）、Museum of Northern Arizona Research Associate（2015）、国立民族学博物館 研究戦略センター准教授（2016）【**学位**】博士（社会人類学）（東京都立大学 2011）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）【**専攻・専門**】社会人類学・米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学【**所属学会**】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association

【**主要業績**】

[編著]

山崎幸治・伊藤敦規編著

2012 『世界のなかのアイヌ・アート』北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

[論文]

伊藤敦規

2015 「国立民族学博物館における研究公演の再定義——『ホピの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察」『国立民族学博物館研究報告』39(3)：397-458。

2013 「民族誌資料の制作者名廻り調査——『ホピ製』木彫人形資料を事例として」『国立民族学博物館研究報告』37(4)：495-33。

2011 「博物館標本資料の情報と知識の協働管理に向けて——米国南西部先住民ズニによる国立民族学博物館所蔵標本資料へのアプローチ」『国立民族学博物館研究報告』35(3)：471-526。

【**2015年度の活動報告**】

◎ **各個研究**

・ **研究課題**

日本国内博物館等所蔵アメリカ南西部先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的、内容

本研究は五年計画（2011～2015年度）で実施される。その目的は、第一に日本国内の博物館等が所蔵するアメリカ南西部先住民資料（物質文化）の来歴、情報管理、保存状況を総合的に把握することである。第二の目的は日本国内での調査結果をソースコミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第三の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映されるだろう協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。調査対象機関は、野外民族博物館リトルワールド（愛知）、天理大学附属天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）、松永はきもの資料館（旧 日本郷土玩具博物館、広島）とする。また、資料調査対象とする民族集団は、ホピとヤキとズニを中心とした。

2015年度の計画として、2014年度に採択された科学研究費助成事業プロジェクト（若手研究（A））および民博のフォーラム型情報ミュージアムの開発型プロジェクトと連動させながら、ホピの人びとを招聘し、資料熟覧を継続して行う。また、米国南西部先住民の保留地に赴き、トライブ政府の文化行政担当者やコミュニティ会員などと調査成果の共有を図り、今後に向けた資料管理の要望などに関する聞き取り調査を実施する。また、10月以降に予定している三度目のホピ招聘では、天理参考館とリトルワールドでの熟覧と記録化を行う。その準備もかねて4月の二度目の招聘時に、それら機関の学芸員と共に人類学的ドキュメンテーションに関する国際ワークショップを民博で開催する。

・成果

学術協定に基づく国際共同研究を実施しながら、3度の国際ワークショップでの発表（その内二度は実行委員長として主宰）、2カ国4機関での熟覧調査、13度の研究発表・招待講演・ソースコミュニティにおける現地報告会を行った。さらに、本研究で得られたデータを、デジタルビューアとしてまとめるために、システムデザインの監修を行った。

なお、本研究の実施に当たり、科学研究費助成事業（若手研究（A）「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（研究課題番号：26704012）、研究代表者」と、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」（研究代表者）の一部を充てた。

◎出版物による業績

[論文]

伊藤敦規

2015 「再会ツールとしての著作権——国立民族学博物館所蔵カナダ先住民版画資料の著作権処理を事例として」 齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイトおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告131）pp.211-227, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

[その他]

伊藤敦規

2015 「民族学博物館とソースコミュニティとの再会」『民博通信』150：10-11。

2015 「米国先住民ミュージシャン エド・カボーティ」『月刊みんぱく』39(11)：18-19。

2015 「アメリカ合衆国南西部先住民ホピのソーシャルダンス」 国枝たか子編『世界のダンスⅡ——百カ国を結ぶ舞踊文化』pp.78-79, 東京：不昧堂出版。

◎映像音響メディアによる業績

伊藤敦規、鈴木紀監修

2016 『みんぱく映像民族誌 第18集 米南国南西部先住民の宝飾品』、大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年4月16日 「趣旨説明——国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・大型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」および科学研究費助成事業（若手研究（A））「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」の目的と視座」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』、国立民族学博物館

2015年4月16日 「映像記録『Demonstration of the Collection Review（話者：シンシア・チャベス＝ラマー

(国立アメリカン・インディアン博物館、資料管理副部长)、ジム・イノテ (ズニ博物館、館長))』の視聴」の解説」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』、国立民族学博物館

2015年4月16日 「映像記録『Host Museum and Source Community Responsibilities in Collection Reviews (話者：シンシア・チャベス＝ラマー (国立アメリカン・インディアン博物館、資料管理副部长)、ジム・イノテ (ズニ博物館、館長))』の視聴」の解説」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』、国立民族学博物館

2015年4月17日 「資料熟覧に関する人類学的ドキュメンテーションについて」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』、国立民族学博物館

2015年4月17日 「まとめ」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』、国立民族学博物館

2016年1月20日 「民族学博物館資料の高度情報化とオンライン協働環境整備に向けた取り組み——フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの中間報告として」第271回民博研究懇談会

2016年2月12日 Kathy Dougherty and Atsunori Ito “Hopi Collection Review Project in the US and Japan” in the Minpaku International Workshop “System Development for the Info-Forum Museum: Philosophy and Technique”, National Museum of Ethnology

2016年3月26日 「ソースコミュニティと共に行う博物館資料調査——国立民族学博物館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの意義と内容の紹介」国立民族学博物館・金沢大学 研究フォーラム『文化遺産の保存と活用：ミュージアムの視点から』、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2015年10月25日 「ソースコミュニティとの協働資料熟覧——民博と北アリゾナ博物館の事例紹介」『米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』、国立民族学博物館

2015年11月14日 伊藤敦規、ジェロ・ロマベンティマ、マール・ナモキ「ソースコミュニティとの協働資料熟覧」『米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』、国立民族学博物館

2015年11月14日 「米国先住民ホビによる民博所蔵民族誌資料熟覧の紹介」『米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』、国立民族学博物館

2016年2月28日 「共同研究の中間段階における総括」『米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』、南山大学人類学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年7月4日 Kelley Hays-Gilpin, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema “Hopi Overlay Program”, Museum of Northern Arizona 85th Hopi Festival, Easton Collections Center

2015年10月16日 「民族学博物館と資源社群的再相會——意義と方法論」国立臺灣歴史博物館與日本國立民族學博物館交流工作坊『民族學與歷史學的交會』國立臺灣歴史博物館

2015年12月11日 “Collaborative Reviewing Efforts of Hopi items in museum collections both domestic and international” Shungopavi Community Building, Arizona, USA

2016年3月12日 「カチーナ人形資料の熟覧調査——ホビの人びとを松永に招聘してコメントをしてもらう計画について」伊藤敦規代表フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト研究会、松永はきもの資料館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年3月27日 「ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査」第418回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・映像作品上映

2015年7月4日 Kelley Hays-Gilpin, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema “Hopi Overlay Program”『アメリカ先住民ホビの銀細工づくり——銀板に重ね合わせる伝統』(国立民族学博物館ビデオテーク(番組番号1705)) 上映、Museum of Northern Arizona 85th Hopi Festival, Easton Collec-

tions Center

◎調査活動

・海外調査

- 2015年6月9日～8月5日—アメリカ合衆国（フォーラム型情報ミュージアム構築に向けた北アリゾナ博物館等との資料調査）
- 2015年9月7日～9月16日—アメリカ合衆国（国際研究大会（Association of Tribal Archives, Libraries, and Museums）に参加）
- 2015年10月14日～10月18日—台湾（国立台湾歴史博物館との協定調印式及びワークショップに参加）
- 2015年12月7日～12月31日—アメリカ合衆国（フォーラム型情報ミュージアム構築に向けた北アリゾナ博物館等での資料調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究会「米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト『北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有』研究代表者、科学研究費助成事業（若手研究（A））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：26704012）研究代表者、科学研究費助成事業（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：15KK0069）研究代表者、北海道大学アイヌ・先住民研究センター共同研究「先住民アートプロジェクト」研究代表者：山崎幸治 共同研究者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など
地域研究コンソーシアム運営委員

◎学会・シンポジウム等の開催

- 2015年4月16日～4月17日 国立民族学博物館国際ワークショップ「資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討」、国立民族学博物館。
- 2016年2月11日～2月12日 国立民族学博物館国際ワークショップ『フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討』、国立民族学博物館。

丹羽典生 [にわ のりお] ————— 准教授

【学歴】 慶應義塾大学文学部卒（1996）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（1999）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位修得満期退学（2005）**【職歴】** 日本学術振興会特別研究員PD・法政大学（2005）、法政大学社会学部兼任教員（2005）、首都大学東京非常勤講師（2006）、筑波大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2008）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2013）**【学位】** 博士（社会人類学）（東京都立大学 2006）、修士（社会人類学）（東京都立大学 1999）**【専攻・専門】** 社会人類学、オセアニア地域研究**【所属学会】** 日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【主要業績】

[単著]

丹羽典生

2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。

[編著]

丹羽典生編

2016 『＜紛争＞の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』神奈川：

春風社。

[共編著]

丹羽典生・石森大知編

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。

【受賞歴】

2010 第9回オセアニア学会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

応援の人類学：政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の諸相

・研究の目的、内容

本研究は、〈応援〉という視角から人類の諸文化を通文化的に比較することを通じて、利他性という人間性の根源について文化人類学的に考察することを目的とする。〈応援〉の下位項目として、政治、スポーツ、ファン文化をさしあたり設定し、世界の事例を取り上げ検討する。日本の事例では、大学を中心とする応援団の諸活動を具体的な民族誌的研究の対象とする。調査の遂行に当たっては、科学研究費助成事業への応募も計画している。

・成果

東京、大阪にて聞き取り調査を行った。各種大学図書館に収蔵されている応援団関係資料や新聞資料の収集閲覧とデータベースの作成を行った。成果公開としては、本館の共同研究「応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」を開始し、応援文化に関する通文化比較研究を始めた。また、上記の研究会にて研究発表を二回行ったほか、『月刊みんぱく』にて「応援文化論序説」、『民博通信』にて「応援の人類学の挑戦」を掲載した。

◎出版物による業績

[編著]

丹羽典生編

2016 『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』神奈川：春風社。

[論文]

丹羽典生

2016 「イノセンスの終焉にて——オセアニアにおける〈紛争〉の比較民族誌的研究にむけて」丹羽典生編『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』神奈川：春風社。

2016 「分裂と統合のはざままで——フィジーにおける2000年クーデタと西部政体の樹立運動」丹羽典生編『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』神奈川：春風社。

[その他]

丹羽典生

2015 「応援文化論序説」『月刊みんぱく』39(4)：2-3。

2015 「まくら」『月刊みんぱく』39(10)：10-1。

2016 「応援の人類学の挑戦」『民博通信』151：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2015年11月13日 総司会『みんぱく公開講演会 育児の人類学、介護の民族学——フィールドワークによる再発見』日経ホール、東京

2016年3月25日 討論進行『みんぱく公開講演会 ワールドアートの最前線——アイヌの文様とエチオピアの響き』オーバルホール、大阪

・機構の連携研究会での報告

2015年10月24日 「野次・喝采から応援へ——応援の人類学的研究に向けた試論」『応援の人類学——政治・ス

ポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌』国立民族学博物館

2016年1月30日 「応援文化という領域と特性——日本の大学応援団の変化から考える」『応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌』国立民族学博物館

・ **みんなくゼミナール**

2015年8月15日 「オセアニアの戦争の文化」第447回みんなくゼミナール

・ **広報・社会連携活動**

2015年10月28日 「応援をめぐる旅 ニュージーランドのハカから日本の大学応援団まで」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・ **みんなくウィークエンド・サロン**

2015年8月16日 「南太平洋のハカ（民族舞踏）の広がり」第394回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・ **海外調査**

2015年9月8日～9月18日—フィジー（トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学に関する調査研究）

2015年11月17日～12月9日—オーストラリア（トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学に関する調査研究）

◎大学院教育

・ **大学院ゼミでの活動**

1年生ゼミ担当

◎上記以外の研究活動

・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（C））「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」研究代表者

三尾 稔 [みお みのる] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1986）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学（1992）【職歴】東京大学教養学部助手（1992）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1999）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2008）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1988）【専攻・専門】社会人類学・インドの宗教と社会【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[共編]

Mio, M. and C. Bates (eds.)

2015 *Cities in South Asia*. London: Routledge.

三尾 稔・杉本良男編

2015 『現代インド6 環流する文化と宗教』東京：東京大学出版会。

三尾 稔・出口 顕編

2010 『人類学的比較再考』（国立民族学博物館調査報告 90）大阪：国立民族学博物館。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・ **研究課題**

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

・ **研究の目的、内容**

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や

宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が20年あまりにわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。本年度は昨年度に引き続き、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践をどのように変容させているかという点に注目し、フィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。

人間文化研究機構地域研究推進事業の一環である「現代インド地域研究」は、第2期目に入る。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。各個研究のテーマは、この地域研究プロジェクトの内容に密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマのもとでの1つの実証的研究として各個研究を遂行する。

また、文化資源プロジェクト予算を獲得した、『「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、上記「現代インド地域研究」プロジェクト経費も活用しつつ、20世紀後半のインドの文化変容を写真によって跡づけられるデータベース資料とすべく、スライド写真のデジタル化およびデータベース化に向けた資料詳細目録の作成を、昨年度に引き続いて実施する。

一方、文化資源プロジェクト『「ラージャスターン州の生活・信仰・儀礼」に関する映像資料の編集と現地語版の作成』では、今年度中に現地語版の映像音響番組を作成し、プロジェクトを完成させる。

・成果

上記テーマに関して、「現代インド地域研究」推進経費に基づき2015年8月にインドに赴き民衆的で地域限定的なヒンドゥー教の信仰実践のサイバー空間利用に関して現地調査を行った。

「現代インド地域研究」推進事業に関しては、国立民族学博物館拠点の代表として、研究会やシンポジウムの開催、研究資料の受け入れなど拠点事業の推進を主導した。拠点の研究はグループ1「現代インドの宗教：運動と変容」及びグループ2「環流する現代インド文化」から組織される。今年度は両グループ合同の研究会を3回開催した。また、「現代インド地域研究」プロジェクト全体事業として2015年12月に国立民族学博物館において本プロジェクトの第2期目のキックオフ・シンポジウムを開催した。報告者はこれらの国内研究会および国際シンポジウムの企画立案に関与し、研究会を主宰、国際シンポジウムにおいても総括司会を担当した。拠点プロジェクトの研究成果は、「現代インド地域研究」ネットワーク全体として企画した全6巻の研究叢書のうちの第6巻として編集し、2015年5月に出版された。この巻において、報告者自身は編者として関与するだけでなく、序論および第12章を執筆している。

「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点は、研究ネットワークの国際化の推進にも積極的に取り組んでいる。2010年度に研究交流に関する覚書を交わしたエジンバラ大学南アジア研究センターとの間では日本の南アジア研究の成果の英文叢書としての刊行事業を進めている。報告者は、この英文叢書のうちの3冊の編集執筆を行っており、このうち2冊が2015年5月及び10月に出版された。また、本プロジェクトの国際化の一環として、世界各地の南アジア研究センターの連携による「国際南アジア研究センターコンソーシアム」の設立が構想されている。今年度はこの準備のため、世界各地の南アジア研究センターを訪問し、その実際の研究内容を視察するとともに、コンソーシアム設立に向けた意見交換を行った。報告者自身は、このためオランダ・スウェーデン・韓国を訪問した。

『「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、文化資源プロジェクト経費と「現代インド地域研究」プロジェクト経費を活用し、受け入れた全てのスライド写真のデジタル化を終え、データベースを構築して2016年3月に館内公開を行った。

文化資源プロジェクト『「ラージャスターン州の生活・信仰・儀礼」に関する映像資料の編集と現地語版の作成』では、本館に特別客員准教授として受け入れたShyam S. Kumawat博士との共同作業により、計7本の映像音響番組の現地語版を作成し、当初の予定通りプロジェクトを完成させた。

2015年4月25日にネパールで発生した大地震後、科学研究費による緊急調査プロジェクト「2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査」（代表：矢田部龍一・愛媛大学教授）が立ち上げられた。報告者はこのプロジェクトに研究協力者として参加し、2015年8月、11月、2016年1月の3回にわたってインドおよびネパールで、震災後の復旧・復興に取り組むインド系のNGO団体の活動に関する調査を行った。その成果は、上記科研の報告書に発表した。

◎出版物による業績

[編著]

- Mio, M. and C. Bates (eds.)
2015 *Cities in South Asia*. London: Routledge.
- Mio, M., C. Bates and A. Tanabe (eds.)
2015 *Human and International Security in India*. London: Routledge.
- 三尾 稔・杉本良男編
2015 「現代インド6 環流する文化と宗教」東京：東京大学出版会。

[論文]

- Mio, M.
2015 Community of retrospect: spirit cults and locality in an old city of Rajasthan. In M. Mio and C. Bates (eds.) 2015 *Cities in South Asia*. pp.210-227. London: Routledge.
- Mio, M. and A. Tanabe
2015 Epilogue: human and international security in an age of new risks and opportunities. In M. Mio, C. Bates, and A. Tanabe (eds.) *Human and International Security in India*, pp.175-184. London: Routledge.
- 三尾 稔
2015 「序章 『環流』するインド」三尾 稔・杉本良男編 『現代インド6 環流する文化と宗教』 pp.3-24, 東京：東京大学出版会。
2015 「宗教のポリトローピー」『現代インド6 環流する文化と宗教』 pp.327-348, 東京：東京大学出版会。
2016 「2015年ネパール震災後のインド系 NGO 団体による活動に関する民族誌的調査報告」矢田部龍一編 『科学研究費報告書2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査』 pp.97-110, 松山：愛媛大学。

[その他]

- 三尾 稔
2015 「躍動する南アジア」『月刊みんぱく』39(6) 特集の編集。
2015 「躍動する南アジアへ」『月刊みんぱく』39(6)：2-3。
2015 「交錯する豊かな宗教伝統」『月刊みんぱく』39(6)：4。
2015 「カバディのプロスポーツ化」『みんぱく e-news』172号、10月1日。
2015 「みんぱく 食の民族誌 考える舌¹⁸ インドの『ピジャ』」『京都新聞』10月7日。
2016 「文化のグローバル化がもたらすこと」『現代インド・フォーラム』2016年冬季号：10-16。
2016 「ハヌマーン——神になったサル」『月刊みんぱく』40(1)：6。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

三尾 稔監修

- 2016 マルチメディア番組「ラージャスターン州メーワール地方の暮らしと信仰」（追加編集）日本語、マルチメディア番組のため時間は不定

Minoru Mio, Shyam S. Kumawat 監修（ヒンディー語版）

- 2015 『バスニ・カラン村の領主の暮らし』（15分）、『ウダイプルの婚礼』（33分）、『ラージャスターンの結婚式』（106分）、『バスニ・カラン村の女神祭礼』（26分）、『ウダイプルのホーリー祭』（20分）、『ウダイプルの女神祭礼』（74分）、『ラージャスターンの戦士の霊 サガスバウジー』（32分）

・電子ガイドの制作・監修

三尾 稔監修（日本語、英語）

- 2015 『ホーム儀礼』『ヒンドゥーの神々』『憑依』『ゾロアスター教徒の儀礼』『ナヴァラートリー』『北インドの婚礼』『食文化』『インドの雑踏』

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年2月26日 “Professor Srinivas and the development of social anthropological village study of India in Japan5.” *The International Workshop on M. N. Srinivas and Sociology of India*. Delhi School of Economics, University of Delhi

・研究講演

- 2015年4月18日 「社会が育む宗教——カースト、共同体、個人」朝日カルチャーセンター中之島教室
2015年5月16日 「神との合一をめざして——神を愛する技法」朝日カルチャーセンター中之島教室
2015年6月20日 「異なる宗教を乗り越える——くらしに根ざす宗教の強さともろさ」朝日カルチャーセンター中之島教室
2015年7月18日 「躍動するインドに息づく宗教——多様な伝統の競合と共存」国立民族学博物館（朝日カルチャーセンター現地講座）

・広報・社会連携活動

- 2015年4月5日 「映画『聖者たちの食卓』解説」、聖者たちの食卓& Market 実行委員会、萬福寺
2015年4月15日 「南アジア大躍動。その『からくり』とこれから」カレッジシアター「地球探求紀行」、あべのハルカス近鉄本店
2015年5月2日 「躍動する南アジアの背景に迫る」千里文化財団（友の会講演会）、国立民族学博物館
2015年6月28日 「忠実再現！インド西部の刺繍布——展示資料の模写に挑戦」講師（ワークショップ インド刺繍とインドのくらし）、国立民族学博物館
2015年8月8日 「映画『勇者は花嫁を奪う』解説」（みんぱく映画会「インド映画特集」）国立民族学博物館
2015年10月30日 「映画『聖者たちの食卓』解説」、箕面市立萱野中央人権文化センター、箕面市芝楽広場

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2015年5月3日 「くらしに息づく豊かな宗教伝統——南アジアの新展示から」第381回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・データベースの作成

三尾 稔作成・監修

『沖守弘インド写真データベース』（国立民族学博物館データベース。館内公開用）

◎調査活動

・海外調査

- 2015年8月16日～8月31日—インド（現代インド地域研究推進経費による調査）
2015年10月18日～10月25日—オランダ、デンマーク、スウェーデン（地域研究プロジェクトの国際化に係る関係機関の調査研究）
2015年11月24日～11月29日—インド（2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査）
2016年1月17日～1月24日—ネパール（ネパールの地震災害に対するインドを本部とする援助活動に関する現地調査）
2016年2月14日～2月19日—アメリカ合衆国（カリフォルニア大学バークレー校において国際シンポジウムに参加）
2016年2月23日～2月28日—インド（デリー大学においてインド社会にかかるワークショップに参加及び現代インド地域研究プロジェクトの国際化に関する調査研究）
2016年3月9日～3月12日—大韓民国（地域研究プロジェクトの国際化に係る調査研究）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ担当

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点拠点代表

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

京都大学地域研究統合情報センター運営委員、日本南アジア学会理事、日本文化人類学会評議員

◎学会の開催

- 2015年5月30日～31日 国立民族学博物館主催：日本文化人類学会第49回研究大会、大阪国際交流センター（大会実行委員会・事務局長）

南 真木人 [みなみ まきと] 准教授

1961年生。【学歴】弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院修士課程環境科学研究科修了（1989）、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退（1991）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、文化資源研究センター准教授（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2015）【学位】学術修士（筑波大学大学院修士課程環境科学研究科 1989）【専攻・専門】人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

[共編]

南 真木人・石井 溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）東京：明石書店。

Yamashita, S., M. Minami, D. W. Haines and J. S. Eades (eds.)

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Minami, M.

2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D. N. Gellner and K. Nawa (eds.) *Social Dynamics in Northern South Asia Vol.1: Nepalis Inside and Outside Nepal*, pp.443-466. New Delhi: Manohar.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ネパール社会の30年間の変化に関する研究——みんなく映像資料の再資源化

・研究の目的、内容

本研究の目的は、1982年にネパールにおいて民博が映像取材した家族やコミュニティを再訪し、約30年間に景観や人々の生業、生活、社会がいかに変化したのかを明らかにすることである。文化資源プロジェクト「ネパール関連のビデオテーク番組の制作」により、現在の暮らしを再び映像に収め新旧が比較できる番組を制作するとともに、聞き取り調査によって必ずしも映像だけでは見えてこない、社会の変化を把握する。

・成果

2015年4月25日に発生したマグニチュード7.8のネパール地震の影響で、9月に予定していた映像取材を2016年1月に延期し実施した。藤井友昭本館名誉教授が調査し撮影も行った楽師カースト・ガンダルバのカスキ郡ポカラ近郊のバトゥレチョール村を再訪し、当該コミュニティの人々に1982年撮影のビデオテーク番組を上映後、そのDVDを提供した。併せて集落の景観、戸数及び生業、生活、社会の34年間の変化を聞き取り調査し、撮影クルーが映像も撮った。他方、民博の「ネパール写真データベース」を見て、1958年に撮影したポカラのバイラヴ仮面舞踊の写真に亡くなった祖父等コミュニティの人々が映っている、とメールで照会してきたネワールのタムラカール（ウダス）・カーストの人々を訪ね、撮影者である高山龍三先生の許可を得て写真をCDで提供した。また、本年は6年に一度行われているバイラヴ仮面舞踊と重なったので、祭礼の準備段階と初日の奉納舞踊を参与観察し、聞き取り調査と映像取材を行った。56年間で祭礼の何が変化し、何が変化していないかを把握することができた。以上の成果は取りまとめ中である。

◎出版物による業績

[論文]

南 真木人

2016 「ネパール地震の社会的影響——社会再編かコミュニティの高揚か」『2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査報告書』文部科学省科学研究費助成事業（特別研究促進費）pp.135-140, 愛媛：愛媛大学。

2015 「移民大国ネパール」三尾 稔・杉本良男編『現代インド6 環流する文化と宗教』pp.122-126, 東京：東京大学出版会。

[その他]

南 真木人

2015 「ネパールの仮面作り三〇年」『月刊みんぱく』39(6)：5, 千里文化財団。

2015 「ネパール地震の被災地を訪ねて」『月刊みんぱく』39(11)：10-11, 千里文化財団。

2015 「公開講演会『育児の人類学、介護の民俗学』の趣旨」『育児の人類学、介護の民俗学——フィールドワークによる再発見』（国立民族学博物館公開講演会抄録）p.3, 大阪：国立民族学博物館。

2015 「出版物『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）南 真木人・石井 溥編, 明石書店, 2015年」『民博通信』151：22。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[ビデオテーク]

南 真木人・寺田吉孝制作監修、井ノ本清和・安藤葉月制作、国立民族学博物館製作

2015 『ネパールの伝統音楽——パンチャイ・バージャ』（日本語・16分）

南 真木人・寺田吉孝制作監修、井ノ本清和・岡部 望・安藤葉月制作、国立民族学博物館製作

2015 『ネパールの婚礼』（研究用映像）（日本語・58分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究

2016年1月10日 「カースト社会の職人——手工芸、美術と手芸的なもの」『現代「手芸」文化に関する研究』東京国立近代美術館、東京

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年3月7日 「ネパール地震の社会的影響——社会再編かコミュニティの高揚か」文部科学省科学研究費助成事業（特別研究促進費）「2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査」最終報告会、東京大学本郷キャンパス・情報学環・福武ホール、東京

・研究講演

2015年11月13日 討論進行 みんぱく公開講演会『育児の人類学、介護の民俗学——フィールドワークによる再発見』日経ホール、東京

2016年3月25日 総合司会 みんぱく公開講演会『ワールドアートの最前線——アイヌの文様とエチオピアの響き』オーバルホール、大阪

・研究公演

2015年4月18日 司会・解説『関連ワークショップ ネワール仏教舞踊チャルヤーへのいざない』国立民族学博物館第5セミナー室

2015年4月19日 司会・解説「ネパールとネワール人」『研究公演 ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤー』国立民族学博物館第5セミナー室

・広報・社会連携活動

2015年6月14日 「インナータイにネパール近代化の縮図をみる——チトワン国立公園の開発を例に」第112回国立民族学博物館友の会東京講演会、モンベル渋谷店5Fサロン、東京

2015年7月25日 「Away ↔ Home —— 移り・住む、ということ」大阪大学文学研究科主催『劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業<声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声>芸術祭Ⅲ——AIR』国立民族学博物館第3セミナー室

2015年11月28日 「2015年ネパール地震の概要」及び「激甚被災5郡の広域予備調査から見えてきたこと」青年海外協力隊ネパール会／同会ネパール震災復興支援チーム主催『ネパール地震現地報告——元青年海外協力隊員の視点から』関西大学千里山キャンパス・第2学舎2号館C301号室、大阪

2015年11月29日 民博ブースでの解説、大学共同利用機関協議会／大学共同利用機関法人機構長会議主催「大学共同利用機関シンポジウム2015」アキバ・スクエア、東京

2016年3月25日 「激動のネパール」『春の公民館講座 民族学への招待——躍動する東南・南アジア』芦屋市立公民館、兵庫

- ・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年8月9日 「温故知新——ネパールの1982年と2013年の映像から」 第393回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

[その他]

2015年4月28日～「ネパール地震2015ポータルサイト」現代インド地域研究 国立民族学博物館拠点ウェブサイト内

- ◎調査活動

- ・海外調査

2015年6月20日～6月27日—ネパール（ナワルパラシ郡ダーダジェリ行政村の地震被災状況調査）

2015年7月6日～7月17日—ネパール（ネパール地震広域被災状況調査）

2016年1月12日～1月25日—ネパール（ネパール関連ビデオテーク番組制作のための海外映像音響資料収集）

- ◎大学院教育

- ・指導教員

指導教員（1人）、副指導教員（2人）

- ・大学院ゼミでの活動

テーマシリーズ講義「国際移民と移民の送り出しシステム」

- ◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（研究代表者：三尾 稔）研究分担者、科学研究費助成事業（特別研究促進費）「2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査」（研究代表者：矢田部龍一（愛媛大））研究分担者

河合洋尚 [かわい ひろなお] ————— 助教

1977年生。【学歴】 関西学院大学社会学部卒業（2001）、東京都立大学大学院社会科学部研究科（修士課程）修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学部研究科（博士課程）修了（2009）【職歴】 嘉応大学客家研究院講師（2008）、中山大学社会学・人類学学院助理研究員（講師）（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）【学位】 博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）【専攻・専門】 都市人類学、景観人類学、漢族研究【所属学会】 日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、中国広東民族学会

【主要業績】

[単著]

河合洋尚

2013 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』 東京：風響社。

[編著]

河合洋尚編

2016 『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』 東京：時潮社。

2013 『日本客家研究的視角与方法——百年的軌跡』 北京：社会科学文献出版社。

【受賞歴】

2001 安田三郎賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

- 1) 中国漢族地域の都市景観形成にまつわる人類学的研究
- 2) 環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
- 3) 景観人類学にまつわる先行研究の整理

・研究の目的、内容

- 1) 景観人類学を理論的に整理するとともに、その視点と手法をもって中国華南地方の漢族社会における景観形成を解説する。
- 2) 漢族のサブ・エスニック集団である客家に特に着目し、その国境を超えた文化的ネットワークを明らかにする。華南地方の客家に対する理解を深めるとともに、中国南方——東南アジア——台湾——日本の華人社会における客家とのつながりを考察する。
- 3) 景観人類学、及びそれと関連する人工環境 (built environment) の人類学的研究について検討をおこなう。

・成果

今年度は主に以下の5つの研究成果を提示した。

- 1) 本館の共同研究「ランドスケープの人類学」の成果として、編著『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』（時潮社、2016年）を刊行した。本書では、景観人類学を理論的に整理するとともに、新たなアプローチを提示した。
- 2) 中国の文化遺産にまつわる研究会の成果をまとめ、編著『中国地域の文化遺産——人類学の視点』（国立民族学博物館調査報告、2016年）として刊行した。本書は、有形と無形の文化遺産を扱ったが、そのうち有形文化遺産にまつわるアプローチには景観人類学の視点と方法を援用した。
- 3) 世界の客家地域におけるネットワーク、およびそれに伴う文化変容、景観創造について比較検討した。その成果として、編著『全球化背景下的客家文化景観の創造——環南中国海の個案』（訳：グローバル時代における客家文化景観の創出——環南シナ海の事例）（暨南大学出版社、2015年）を出版した。序文では景観人類学の視点を紹介し、そこから中国南部、ベトナム、日本の客家における景観創出のメカニズムを考察した。
- 4) 科学研究費助成事業（若手研究(B)）「漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編——中・越隣接エリアの調査研究」の成果の一つとして、中国南部とベトナムにおいて客家文化を資源として景観を建設する動きを調査した。その成果の一部を、「越南客家的移居与文化景観建設」（ベトナム客家の移住と文化的景観の建設）として、プーアル大学で開催された国際シンポジウムにて中国語で発表した。
- 5) 中華民国（台湾）政府の資金援助により、台湾観光計画を実施した。具体的には、3度の講演会、映画『一八九五』の放映・解説、台湾客家の工芸・音楽をめぐるイベントを通して、台湾および日本の客家をめぐる研究成果を一般にむけて公開した。なお、イベントの入場者数は延べ1000人以上であった。

◎出版物による業績

[編著]

夏遠鳴・河合洋尚編

2015 『全球化背景下客家文化景観的創造——環南中国海の個案』 広州：暨南大学出版社。

河合洋尚・飯田卓編

2016 『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』（国立民族学博物館調査報告 136）大阪：国立民族学博物館。

河合洋尚編

2016 『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』 東京：時潮社。[民博共同研究]

[論文]

河合洋尚

2015 「景観人類学的動向と視野」（周星訳）『広西民族大学学報（哲学社会科学版）』CSSCI 期刊, 37(4)：44-59。[査読有]

2015 「広西客家的認同感与文化景観——改革開放後の空間政策以及族群變動」夏遠鳴・河合洋尚編『全球化背景下客家文化景観的創造——環南中国海の個案』 pp.104-121, 広州：暨南大学出版社。

2016 「都市景観をめぐるポリティクス——中国における漢族文化の類型学と〈場所〉の再構築」河合洋尚編『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』 pp.195-224, 東京：時潮社。

2016 「『世界遺産』と景観再生——円形土楼と困龍屋の比較研究」河合洋尚・飯田卓編『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』（国立民族学博物館調査報告 136） pp.123-139。[査読有]

河合洋尚・呉雲霞

2015 「越南客家的神佛信仰与宗族宗教景観的創造」夏遠鳴・河合洋尚編『全球化背景下客家文化景観的創造——環南中国海の個案』 pp.166-186, 広州：暨南大学出版社。

河合洋尚・阿部朋恒

- 2016 「中国雲南省における〈僑郷空間〉の創出——紅河県を事例として」川口幸大・稲澤努編『僑郷——華僑のふるさとの表象と実像』pp.287-310, 滋賀：行路社。

[その他]

河合洋尚

- 2015 「囲籠屋での混住生活」『月刊みんぱく』39(10)：7-8。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

- 2016年2月13日 「趣旨説明」学術潮流サロン「公共人類学 × 公共社会学」国立民族学博物館

・共同研究会

- 2016年1月9日 「客家地域における歴史の資源化と景観形成——寧化石壁を中心として」『資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム

- 2015年6月27日 「客家空間的拡張——中国南部客家認同感、文化、景観的建構」国際シンポジウム『激活客庄研討会』台湾・交通大学客家研究院

- 2015年10月21日 「越南客家的移居与文化景観建設」国際シンポジウム『湄公河紅河流域生態与文化多样性国際学術論壇』プーアル大学

- 2015年12月5日 「ベトナム北部「華人」の移動・アイデンティティ・文化表象——ディアスポリック空間の一考察」東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題研究会『インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間』東京外国語大学

- 2015年12月20日 「四川成都郊区客家認同感的興起和文化景観創造（四川省成都市における客家アイデンティティの覚醒と文化的景観の創造）」愛知大学国際問題研究所プロジェクト公開研究会『中国農村における都市化の現状と課題』愛知大学名古屋キャンパス

- 2016年2月21日 「『中国研究』と公共人類学——新たな可能性を考える」日本文化人類学会東アジア公共人類学懇談会シンポジウム『成果報告会——回顧と展望』国立民族学博物館

・研究講演

- 2015年4月22日 「日本客家的社会組織与文化活動——初歩報告」中央研究院民族学研究所特別連続講演、台北

- 2015年4月23日 「越南客家的移居、認同感、景観創造——多地点考察」中央研究院民族学研究所特別連続講演、台北

- 2015年11月7日 「移住がつくる客家の食」第448回友の会講演会、国立民族学博物館

- 2016年1月27日 「中国の世界遺産建築——円形土楼と囲籠屋」カレッジシアター「地球探求紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・広報・社会連携活動

- 2015年9月23日 『一八九五』台湾文化光点計画、国立民族学博物館

- 2015年10月12日 『長江哀歌』みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2015年4月12日 「台湾客家——日本、アメリカへの移住」第379回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

- 2015年4月21日～4月26日—台湾（台湾客家研究者との学術交流及び客家芸術団体にかかる調査・情報収集）

- 2015年6月2日～6月7日—中華人民共和国（成都市、重慶市において漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編にかかる現地調査）

- 2015年6月26日～6月28日—台湾（光点計画開催にかかる調査研究）

- 2015年8月6日～8月23日—中華人民共和国（科研に基づく中国東南部における調査）

- 2015年9月30日～10月9日—中華人民共和国、ベトナム（「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」にかかる中国東南部とベトナムにおける調査）

- 2015年10月15日～10月19日—台湾（世界客家大会への参加及び客家団体の調査研究）

- 2015年10月21日～10月30日—中華人民共和国（中国雲南省における会議参加及び深圳大学における資料収集）

◎大学院教育

- ・特別共同利用研究員の研究指導教員
(対象学生数1)

◎上記以外の研究活動

台湾文化光点計画「台湾客家」代表者、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所共同研究員

◎社会活動・館外活動等

- ・非常勤講師
流通科学大学総合政策学部「民族文化誌」
- ・学会活動・委員
日本文化人類学会課題研究懇談会 代表・世話人、中国人類学民族学研究会客家専門委員会 副秘書長、『全球客家研究』(台湾) 顧問、『華僑華人研究』編集委員、東アジア人類学研究会幹事
- ・社会活動
市民団体「みのお中国文化に親しむ会」(大阪府箕面市、代表:市村晃)への活動参与
華僑団体「関東崇正会(日本客家団体)」参事

菅瀬晶子 [すがせ あきこ] ————— 助教

【学歴】 東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒(1995)、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程(アジア第三専攻)修了(1999)、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程(地域文化学専攻)修了(2006)
【職歴】 日本女子大学文学部史学科非常勤講師(2006)、総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員(2006)、日本女子大学文学部史学科非常勤講師(2008)、日本女子大学文学部史学科非常勤講師(2009)、神奈川大学経営学部非常勤講師(2010)、日本女子大学文学部史学科非常勤講師(2010)、共立女子大学国際学部非常勤講師(2010)、大阪大学外国語学部非常勤講師(2010)、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員(2010)、国立民族学博物館民族社会研究部助教(2011)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2013)
【学位】 博士(文学)(総合研究大学院大学 2006)、修士(学術)(東京外国語大学大学院 1999)
【専攻・専門】 文化人類学・中東地域研究(パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏)
【所属学会】 日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

[単著]

菅瀬晶子

- 2012 『豊穡と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』(民族紛争の背景に関する地政学的研究19) 大阪:大阪大学世界言語研究センター。
- 2010 『イスラームを知る6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』東京:山川出版社。
- 2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』広島:溪水社。

【受賞歴】

2006 長倉研究奨励賞、総研大研究賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

前年度に引き続き、東地中海アラブ諸国のうち、パレスチナ・イスラエルとレバノンにおける宗教的アイデンティティの表象にかかわる研究をおこなう。今年から数年間は、科学研究費助成事業(基盤研究(C))の「ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考」を中心に研究を進めるため、前年度で予備調査をおこなったアラブ・ナショナリスト二名、具体的にはナジブ・ナッサールとグレゴリオス・ハッジャールの著作収集とデータベース作成、さらにはその精読と分析をおこなう。ことに、宗教的マイノリティであるキリスト教徒であるがゆえに彼らがなした功績と、逆にキリスト教徒であるがゆえになしえな

った限界、パレスチナとレバノン間の越境性に注目する。

・成果

イスラエルおよび占領地パレスチナでおこなった調査によって、ナジーブ・ナッサーの著作を網羅したコレクションは存在せず、ハイファ大学やベツレヘム大学で断片的に保管されていることが判明した。このうち、ベツレヘム大学にはナッサーが主筆をつとめたカルメル誌の全号が保管されているが、機材の老朽化により閲覧が事実上不可能となっている。また、ハイファ大学のカルメル誌コレクションは不完全であり、マイクロフィルムの状態も良好ではない。これらの現地調査をとおして、データベース作成は急務であることを確認した。

ベツレヘム大学のコスタンディ・ショウマリー教授、アル・クドゥス大学のハーレド・イヤーン氏など、アラブ・ナショナリズム研究をおこなっている現地の研究者と意見交換をおこない、データベースの構想を練った。ショウマリー教授からは、これまでの研究データをデータベースに取り込む許可も得ることができた。また、カルメル誌全号が大英博物館に保存されており、コピーを購入することが可能であることもあきらかになった。ベルリン自由大学にもコレクションが存在し、ドイツに移住したキリスト教徒のアラブ・ナショナリストが、文壇や演劇界で高い評価を得ていたことも判明した。

現在イスラエル国内のアラブ人キリスト教徒に対する徴兵の是非が問われており、これにともないキリスト教徒の間では、パレスチナ人アイデンティティへの回帰の動きがみられる。これについての論文を二本執筆し、『ユダヤ・イスラエル研究』第29号と『現代宗教2016』に寄稿した。ほかに、イスラエルの対アラブ人市民政策の影響を受けて変化した、キリスト教徒の豚肉食の様態についてまとめた論考が、『国立民族学博物館研究報告』40巻4号に掲載された。

◎出版物による業績

[論文]

菅瀬晶子

- 2015 「第6章 歴史的パレスチナにおける奇跡譚の今——聖者ハディル崇敬の事例」山中由里子編『<驚異>の文化史——中東とヨーロッパを中心に』pp.433-455, 名古屋：名古屋大学出版会。[共同研究会「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に（代表：山中由里子）の成果」]
- 2015 「イスラエルのアラブ人市民の政治参加——キリスト教徒を中心に」『ユダヤ・イスラエル研究』29：23-34, 東京：日本ユダヤ学会。
- 2015 「パレスチナ・アラブ人アイデンティティの回復——イスラエルのキリスト教徒徴兵問題」『現代宗教2016』pp.77-98, 東京：(公財)国際宗教研究所。
- 2015 「パレスチナ自治区・ヨルダン川西岸地区とイスラエル・ガリラヤ地方における豚肉食の現在」『国立民族学博物館研究報告』40(4)：619-652, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

[その他]

菅瀬晶子

- 2015 「旅・いろいろ地球人 驚く⑥ 色ガラスの家」『毎日新聞』4月23日夕刊。
- 2015 「みんぱく世界の旅 アラブ世界① 国や地域ごとに多様性」『毎日小学生新聞』5月2日。
- 2015 「みんぱく世界の旅 アラブ世界② 共存する二つの宗教」『毎日小学生新聞』5月9日。
- 2015 「みんぱく世界の旅 アラブ世界③ 宗教による食文化の違い」『毎日小学生新聞』5月16日。
- 2015 「みんぱく世界の旅 アラブ世界④ 三つの宗教の聖所『マカーム』」『毎日小学生新聞』5月23日。
- 2015 「鬼の博物館とその背景」『月刊みんぱく』39(8)：9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2016年3月17日 「中東のキリスト教徒からみたイスラーム世界」宝塚国際理解ゼミナール、宝塚市立南口会館、兵庫

・広報・社会連携活動

2015年12月12日 映画で知る東南アジア『イロイロ ぬくもりの記憶』みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ 新展示関連

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年11月29日 「聖者崇敬からみたシリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナ」第405回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年9月28日～10月5日—イタリア（立命館大学との学術協定による「食サービス分野における高度マネジメント人材育成」プログラム開発のための調査研究）

2016年2月15日～3月4日—イスラエル（アラブ・ナショナリズム文献の調査）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

滋賀県立大学「国際関係論」、神戸女子大学「多文化共生論」

文化資源研究センター

野林厚志 [のばやし あつし] ————— センター長(併) 教授

1967年生。【学歴】東京大学理学部生物学科卒（1992）、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了（1994）、東京大学大学院理学系研究科博士課程中退（1996）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2000）、総合研究大学院大学先導科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）【学位】博士（学術）（総合研究大学院大学 2003）、修士（理学）（東京大学大学院理学系研究科 1994）【専攻・専門】人類学、民族考古学 1) フォルモサ研究、2) 人間と動物との関係史、3) 物質文化論【所属学会】日本台湾学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

[編著]

日本順益台湾原住民研究会編（野林厚志主編）

2014 『台湾原住民研究の射程』台北：順益台湾原住民博物館。

[論文]

野林厚志

2010 「文化資源としての博物館資料——日本統治時代に収集された台湾原住民族の資料が有する現地社会での意義」『国立民族学博物館研究報告』34(4)：623-679。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

台湾原住民族の工芸生産とエスニシティとの関係に関わる人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、台湾のオーストロネシア系先住諸民族（「原住民族」）の現在のエスニシティの動態を工芸生産という営みをもって分析し、個人の民族への帰属意識と民族集団のエスニシティとの関係に関する人類学的モデルを引き出すことである。具体的には原住民族の人たちの工芸生産の目的、過程、それらがおよぼす社会的な影響を、現地調査を中心にして明らかにする。そのうえで、工芸生産がエスニシティの形成やそれを利用した諸行動とどのような関係にあるのかについて探究する。調査対象としては原住民族（タイヤル、パイワン、サキザヤ）、平埔族（クヴァラン、シラヤ）を予定している。

なお、本研究は科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」に連動して実施するものである。

・成果

本年度は、当初の研究計画にしたがい、特にパイワン族の工芸生産に焦点をあてながら、現地で制作、流通している盛装用の衣装をめぐる集団内、集団間関係、ならびに盛装用の衣装に不可欠な刺繍の基本的な技法に

についてフィールド調査を行うとともに、現地での調査で得られた盛装に関わる歴史的な背景と博物館に収蔵されてきた資料とを連結させる考察を行った。パイワン族の社会は首長および貴族の階層と平民の階層とに大別される階層社会を構成しており、盛装は首長・貴族層に与えられた特権的行為である。これは階層の存在を社会の中で顕在化させる秩序安定の文化的装置としても機能してきた。一方で、博物館に収蔵されてきた初期（19世紀末から20世紀初頭）の衣類資料や古写真にはこうした盛装においてもっとも象徴的に付加される文様が欠落している。これにはいくつかの理由が考えられるが、フィールド調査にもとづく解釈の一つには、首長・貴族層の権威は当時の資料収集にも影響をあたえたというものである。文様も含めた象徴財の外部への移出は避けられ、逆に新規性、希少性をもつ外部からの物質の流入は促進されていたという、権威性と物質性に関わる新たな解釈を引き出すことにつながった。これについてはヨーロッパ台湾学会での口頭発表（審査有）で成果の公開を行っている。なお、本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」による外部資金によって実施した。

◎出版物による業績

[論文]

Nobayashi, A.

- 2015 The Significance of Museum Materials in the Name Correction Movement of the Pingpu Peoples of Taiwan. In K. Hirai (ed.), *Social Movements and the Production of Knowledge* (Senri Ethnological Studies 91), pp.101-119. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

野林厚志

- 2015 「祖先と自らを結びつける家畜：台湾客家の神猪」『BIOSTORY』23：84-89。
 2015 「日本に潜在する台湾資料——内田勲コレクションを事例に」『第8回台日原住民族研究論壇』台北：国立政治大学原住民族研究中心，13p.（電子媒体）。[査読有]
 2015 「(旅の読書室68) 東北を聴く」『まほら』83：50-51，東京：旅の文化研究所。
 2015 「台湾原住民族の工芸品に付された名前——創る主体と所有の主体」『月刊みんぱく』40(5)：16-17。
 2015 「狩猟活動から遺されるもの」『FIELD PLUS』14：16-17，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
 2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌④ 台湾の愛玉子」『京都新聞』6月3日。
 2015 「旅・いろいろ地球人 ミュージアム③ 知の空間」『毎日新聞』7月23日夕刊。
 2015 「カレッジシニアター地球探究紀行 台湾のイノシシ猟にみるアジア文化」『産経新聞』9月29日夕刊。
 2015 「アジアの隣人・交流の深め方は 爆買いに見る文化」『朝日新聞』10月1日夕刊。
 2015 「旅の読書室⑩ 帰り道のない旅」『まほら』85：50-51，東京：旅の文化研究所。
 2015 「旅・いろいろ地球人 肉食紀行① 先史時代の舌鼓」『毎日新聞』12月3日夕刊。
 2015 「旅・いろいろ地球人 肉食紀行② ハモンの肩代わり」『毎日新聞』12月10日夕刊。
 2015 「旅・いろいろ地球人 肉食紀行③ 台湾素食で肉を味わう」『毎日新聞』12月17日夕刊。
 2015 「旅・いろいろ地球人 肉食紀行④ クリスマスの正餐」『毎日新聞』12月24日夕刊。
 2015 「「情報遺産」を博物館が構築する意義——「核としての周縁」からの発信」『民博通信』151：12-13。
 2016 「みんぱく食の民族誌 考える舌③ 火による調理」『京都新聞』3月9日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

【機関研究】「文化遺産の人類学——クローナル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」

- 2015年10月13日 ‘Cultural Property and Bureaucracy: A case of the local governance in Japan.’ (Discusant) Minpaku International Forum “Thinking about Cultural Heritage Regimes: A Discussion with Prof. Regina Bendix.” (「文化財と官僚制——日本の地域ガバナンスの事例より」(討論参加者) みんぱく国際フォーラム「文化遺産レジームを考える——レギーナ・ベンディクス教授を迎えて」)

- 2016年3月13日 ‘Copy or acquiresments: authenticity within craft in the different domains of the intellectual property for indigenous crafts in Taiwan.’ International Symposium “Authentic Change in the Transmission of Intangible Cultural Heritage.” (「複製か倣いか——知的財産の異なる領域における台湾原住民族工芸の真正性」国際シンポジウム「無形文化遺産の

継承における『オーセンティックな変更・変容』)

【基幹研究プロジェクト】フォーラム型情報ミュージアム「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

2016年1月24日 「プロジェクトの概要と博物館資料のデータベース化の国際的状況」国際ワークショップ「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」・フォーラム型情報ミュージアム「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

・機構の連携研究会での報告

2016年2月12日 「文明における食文化の布置 (Constellation of food and foodways in the civilization)」国際ワークショップ「アジアの食と健康」人間文化研究機構・広領域連携型基幹研究「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」コープ・イン京都

・共同研究会での報告

2015年12月2日 「エスニシティを可視化する：台湾における民族認定と衣装の意匠」「表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年4月9日 ‘Ethnicity of Indigenous Peoples Visualized in Material Culture.’ The 12th Annual Conference of the European Association of Taiwan Studies. Jagiellon University, Krakow, Poland. [査読有]

2015年9月6日 「日本の客家——歴史と現在」台湾文化光点計画講演会、国立民族学博物館

2015年10月16日 「台湾族群性興動物観」博物館交流ワークショップ「民族学興歴史学的の交会」(「台湾のエスニシティと動物観」博物館交流ワークショップ「民族学と歴史学の交わり」) 国立台湾歴史博物館、台南、台湾

2015年10月17日 「内田先生資料和日本学者的収集活動的意義」博物館交流ワークショップ「民族学興歴史学的の交会」(「内田コレクションと日本人研究者の収集活動的意義」博物館交流ワークショップ「民族学と歴史学の交わり」) 国立台湾歴史博物館、台南、台湾

2015年10月30日 「日本に潜在する台湾資料——内田勲コレクションを事例に」『第8回台日原住民族研究論壇』国立政治大学原住民族研究中心、台北、台湾

2015年12月2日 「ミドルレンジ・リサーチ——遺物と行動とをつなげる試み」NINS/IURIC Colloquium 2015「学術研究の将来」大学共同利用機関4法人、ヤマハリゾート「つま恋」、静岡

2015年12月12日 「台湾ヤミ族の名制と社会関係」ワークショップ「台湾原住民の姓名と身分登録——過去と現在をつなぐ文化・社会・制度」早稲田大学台湾研究所、東京

2015年12月26日 「エスノアーケロジ（スト）の可能性と限界」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド・サイエンス・コロキウム・ワークショップ、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

・広報・社会連携活動

2015年6月28日 「民族のモザイク：台湾」愛知県立旭丘高校講義、国立民族学博物館

2015年7月23日 「民博の展示」国際ソロプチミストアメリカ日本中央リジョンユースフォーラム2015 in 大阪、国立民族学博物館

2016年9月23日 「一八九五」『台湾映画鑑賞会 映画から台湾を知る』みんなく映画会

2015年9月30日 「台湾のイノシシ猟——日本のイノシシ猟と比較しながら」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

2015年11月26日 「台湾の『食べる』フィールドワーク」獨協大学講義、獨協大学、東京

2015年12月19日 「民博の展示」追手門学院大学講義、国立民族学博物館

2016年1月8日 「フィールドワークをはじめよう」兵庫県立伊丹高校講義、兵庫県立伊丹高校、兵庫

2016年2月2日 「人種、民族、先住民族」大阪聖母女学院高校講義、国立民族学博物館

2016年2月6日 「波伝谷に生きる人びと」みんなく映画会

2016年3月8日 「知恵泉 太陽の塔で日本を元気に！「岡本太郎 万博への道」」NHK・Eテレ

◎調査活動

・海外調査

2015年6月17日～6月20日—台湾（フォーラム型情報ミュージアム構築のための準備会）

2015年7月30日～8月13日—台湾（工芸生産とエスニシティの再構築との関係についての調査）

- 2015年10月3日～10月5日—台湾（映像におけるエスニシティ表象に関する調査）
 2015年10月15日～10月18日—台湾（国立台湾歴史博物館との協定調印式及びワークショップに参加）
 2015年10月24日～10月27日—ベトナム（世界博物館会議 民族博物館分科会に参加及び研究成果の報告）
 2015年10月29日～11月3日—台湾（フォーラム型情報ミュージアム構築に関する民博收藏の台湾資料についての情報収集ならびに研究発表）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

問題解決志向型基幹研究プロジェクト形成に係る準備調査「文明社会における食の布置」（研究代表者）、総合研究大学院大学学融合推進センター戦略的共同研究「『料理』の環境文化史：生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト」（研究代表者）

- ・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

順益台湾原住民博物館研究賛助金「台湾原住民族の文化、社会、歴史に関する総合的研究」（研究責任者）

◎社会活動・館外活動等

- ・他機関から委嘱された委員など

奈良県文化財保存・活用会議委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド・サイエンス・コロキウム運営委員

◎学会・シンポジウム等の開催

2016年1月24日 国立民族学博物館国際ワークショップ「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」（フォーラム型情報ミュージアム「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」、国立民族学博物館）。

園田直子 [そのだ なおこ] ————— 教授

【学歴】 パリ第1大学文学部卒（1980）、パリ第1大学科学技術修士課程修了（1982）、エコール・ド・ルーブル卒（1983）、パリ第1大学博士課程修了（1987）**【職歴】** フランス博物館科学研究所研究員（1987）、国立美術館絵画修復研究所（フランス）研究員（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第5研究部助手（1993）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館情報管理施設長（2009）、館長補佐（2010）**【学位】** Doctorat de 3^{ème} cycle (Histoire de l'art) 博士（美術史）（Université de Paris I, 1987）、Maîtrise des Sciences et Techniques (Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques) 科学技術修士（Université de Paris I, 1982）**【専攻・専門】** 保存科学**【所属学会】** ICOM（国際博物館会議）、IIC（国際文化財保存学会）、文化財保存修復学会、IIC-Japan（国際文化財保存学会日本支部）

【主要業績】

[編著]

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学（第2版）』東京：岩田書院。

日高真吾・園田直子編

2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』千葉：三好企画。

[学位論文]

Sonoda, N.

1987 Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3^{ème} cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

大型民族資料を対象とした環境に「やさしい」殺虫処理法の使い分け

・研究の目的、内容

国立民族学博物館では、民族資料の防虫・殺虫処理法を選択するにあたっては、ひと、資料、環境に配慮してきた。2004年度以降は、海外からの新着資料には化学薬剤を用いた殺虫・殺カビ処理を行い、国内で加害された資料に関しては化学薬剤を用いない手法として二酸化炭素処理を中心に、高温処理や低温処理、あるいは低酸素濃度処理を必要に応じて併用している。この方針に沿いながら、今年度も2014年度に引き続き、船資料に代表される大型民族資料を対象に、いかに適切かつ効率的に殺虫処理法の使い分けができるかの検討を続ける。

・成果

多機能保管庫（2014年新設）に併設した処理室の大型密封バッグに収納できない大きさの資料、そして材質的に虫に加害されやすい資料を対象に、二酸化炭素処理以外の殺虫手法と、予防保存の見地にたった保管方法、これらの研究開発を進めた。

二酸化炭素処理法以外の殺虫手法の研究開発として、2014年度に引き続き太陽熱を利用した高温処理の実験をおこなった。結果、コンテナの養生等で保温効果を上げることで、先行研究から導き出した目標とする温度を、必要時間維持できる見通しがたった。ここまでの成果は、2016年度の文化財保存修復学会で報告する。

虫害にあいやすい材質の資料の保管法として、低酸素濃度環境下での保管システムの開発に着手した。具体的には窒素を、低流量で流しても高流量で流しても適切に調湿できるよう条件を検討し、2016年度の基礎実験に向けての準備を整えた。

◎出版物による業績

[論文]

園田直子・日高真吾・末森 薫・奥村泰之・河村友佳子・橋本沙知・和高智美

2016 「博物館におけるLED照明の現状——2015年夏 国立民族学博物館での実験データから」『国立民族学博物館研究報告』40(4)：513-545, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

Okayama, T., C. Kadoya, R. Kose, M. Seki, and N. Sonoda

2015 “A new technique for strengthening degraded paper – Application of cellulose nanofiber coating on a paper surface”, IADA (International Association of Book and Paper Conservators) XIII Congress, p.74. [査読有]

Tonoyama, M., M. Seki, N. Sonoda, and T. Okayama

2015 “Cellulose derivative nano-fibers –Applicability as strengthening agent for paper materials”, IADA (International Association of Book and Paper Conservators) XIII Congress, p.110. [査読有]

[その他]

園田直子

2015 「III. 人間文化資源の保存環境研究」久保正敏編『人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の須郷の研究報告書』pp.609-875, 大阪：遊文舎。

2015 「旅・いろいろ地球人 ミュージアム⑧ 博物館学の国際研修」『毎日新聞』8月27日。

2015 「絵画をかたちづくるもの——絵具の科学」関西大学国際文化財・文化研究センター文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業『平成26年度文化財保存修復セミナー講義録』pp.269-284, 大阪：関西大学国際文化財・文化研究センター。

2015 博物館環境データ（生物生息調査、温度・湿度モニタリング）分析システム・スモールパッケージの開発『IPMフォーラム「臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在」報告書』pp.38-47, 東京：独立行政法人文化財機構東京文化財研究所。

Sonoda, N.

2015 New Horizons for Asian Museums and Museology — International Symposium February 21-22, 2015, *MINPAKU Anthropology Newsletter* 40: 14-15, June 2015.

- 園田直子・日高真吾・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明・和高智美・河村友佳子・橋本沙知
2015 「国立民族学博物館に新設した多機能保管庫の運用事例——大型民族資料の保管を目指して」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』 pp.94-95。[査読有]
- 日高真吾・園田直子・末森 薫・和高智美・幡野寛治・川越和四・多田隈卓司・佐治木悠子・小谷竜介・福田尚・河村友佳子・橋本沙知
2015 「東日本大震災の被災文化財一時保管場所の環境改善——気仙沼市旧月立中学校の事例から」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』 pp.32-33。[査読有]
- 日高真吾・園田直子・末森 薫・玉置春佳・西澤昌樹・飯島善明・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・川越和四
2015 「国立民族学博物館における大規模な殺虫処理」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』 pp.96-97。[査読有]
- 末森 薫・園田直子・日高真吾・高鳥浩介・吉田直人・川越和四・和高智美・河村友佳子・橋本沙知
2015 「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法——カビに由来する蛍光反応の可視化を事例として」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』 pp.104-105。[査読有]
- 殿山真央・関 正純・園田直子・築地球太・岡山隆之
2015 「カルボキシメチルセルロースを用いたエレクトロスピンニング法による紙資料の劣化抑制処理」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』 pp.180-181。[査読有]
- 門屋智恵美・岡山隆之・小瀬亮太・関 正純・園田直子
2015 「劣化紙へのセルロースナノファイバー・コーティング」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』 pp.184-185。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年 6月27日 「東日本大震災の被災文化財一時保管場所の環境改善——気仙沼市旧月立中学校の事例から」(日高真吾・園田直子・末森 薫・和高智美・幡野寛治・川越和四・多田隈卓司・佐治木悠子・小谷竜介・福田 尚・河村友佳子・橋本沙知、発表は日高真吾) 文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都
- 2015年 6月27日 (ポスター発表)「国立民族学博物館に新設した多機能保管庫の運用事例——大型民族資料の保管を目指して」(園田直子・日高真吾・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明・和高智美・河村友佳子・橋本沙知) 文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都
- 2015年 6月27日 (ポスター発表)「国立民族学博物館における大規模な殺虫処理」(日高真吾・園田直子・末森 薫・玉置春佳・西澤昌樹・飯島善明・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・川越和四) 文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都
- 2015年 6月27日 (ポスター発表)「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法——カビに由来する蛍光反応の可視化を事例として」(末森 薫・園田直子・日高真吾・高鳥浩介・吉田直人・川越和四・和高智美・河村友佳子・橋本沙知) 文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都
- 2015年 6月27日 (ポスター発表)「カルボキシメチルセルロースを用いたエレクトロスピンニング法による紙資料の劣化抑制処理」(殿山真央・関 正純・園田直子・築地球太・岡山隆之) 文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都
- 2015年 6月27日 (ポスター発表)「劣化紙へのセルロースナノファイバー・コーティング」(門屋智恵美・岡山隆之・小瀬亮太・関 正純・園田直子) 文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都
- 2015年 7月13日 「国立民族学博物館と滋賀県立琵琶湖博物館のJICA 博物館学コース——コース概要とコースに参加した東・中央アジアの博物館事情」文化遺産国際協力コンソーシアム 東・中央アジア分科会、東京国立博物館、東京
- 2015年 7月16日 「博物館環境データ(生物生息調査、温度・湿度モニタリング)分析システム・スモールパッケージの開発」、東京文化財研究所フォーラム「臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在」、東京文化財研究所、東京
- 2015年10月13日 (ポスター発表)“Cellulose derivative nano-fibers -Applicability as Strengthening agent for paper materials” (Tonoyama, M., Seki, M., Sonoda, N., and Okayama, T.), IADA (International Association of Book and Paper Conservators) XIII Congress, Staatsbibliothek zu

Berlin, Germany.

2015年10月15日 “A new technique for strengthening degraded paper – Application of cellulose nanofiber coating on a paper surface” (Okayama, T., Kadoya, C., Kose, R., Seki, M., and Sonoda, N. 発表はOkayama, T.), IADA (International Association of Book and Paper Conservators) XIII Congress, Staatsbibliothek zu Berlin, Germany.

・研究講演

2015年7月4日 「特別講演：美術館・博物館の裏側」日本ジョンソン協会第48回大会、同志社大学今出川キャンパス、京都

・広報・社会連携活動

2015年7月25日 「資料の保存・取り扱いについて」MMP 2015年度新規メンバー養成研修、みんなくミュージアムパートナーズMMP、国立民族学博物館

2015年12月9日 「資料の保存と活用」文化資源プロジェクト2015年度年末年始展示イベント「さる」、国立民族学博物館

・みんなくウィークエンド・サロン

2016年2月14日 「窓から「見ることができる」収蔵庫」、第414回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

・大学院ゼミでの活動

2015年10月26日～28日 総合研究大学院大学 文化資源研究特講、国立民族学博物館。

2015年10月29日 一年生ゼミナール テーマシリーズ「民族資料の保存と活用を考える」、国立民族学博物館。

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(B)(一般)(2015-2017)）「セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究(A)(一般)(2015-2019)）「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)(一般)(2015-2017)）「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（研究代表者：日高真吾）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)(一般)(2015-2017)）「文化人類学における映像制作とアーカイブズ実践——活用と保存の新展開」（研究代表者：大森康宏）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、文化財IPMコーディネータ委員会、舞鶴市ユネスコ世界記憶遺産有識者会議委員、知覧特攻平和会館保存討委員会委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学国際文化財・文化研究センター2015年度文化財保存修復セミナー「文化財各論・美術工芸品(I)絵画」

信田敏宏 [のぶた としひろ]————— 教授

1968年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1995）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）【職歴】東京都立大学人文学部社会学科助手（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2014）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授兼任（2014）【学位】社会人類学博士（東京都立大学 2002）【専攻・専門】社会人類学、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

[単著]

信田敏宏

2013 『ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書1）京都：臨川書店。

- 2004 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。
Nobuta, T.
2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia*.
SubangJaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006 第4回東南アジア史学会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

協力行動に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、助け合い、分かち合い、支援といった人間の協力行動について、人類史的観点からアプローチすることを目的とする。具体的には、マレーシアの先住民オラン・アスリに対する支援活動や、障がい者に対する支援活動等の具体的事例に注目しながら、文明化と人間、社会とマイノリティの関係性について考察を進める。

・成果

本年度は、東南アジア展示新構築の広報に関連した口頭発表・講演を行なったが、そのうち、オラン・アスリに関する口頭発表および講演を9回実施した。展示新構築に関連したテーマの発表であったが、内容的には、近年の動向、とりわけ、オラン・アスリに対する支援活動の状況について細かく紹介することができた。来年度以降、論文等にまとめる予定である。

障がい者に対する支援活動についての成果としては、本年度は、みんぱく公開講演会、市民向けの講演会、大学での講演会にて講演を行なった。いずれも昨年度に出版した著作に関連した内容で、主に障がい児の子育てに関連する内容であったが、反響が大きく、新たな執筆依頼もあり、来年度には、論文等にまとめる予定である。

いずれも、マイノリティの立場にある人びとへの支援に関するものであるが、ポジティブな面だけでなく、現実的に厳しい面も多々あることを、様々な反響やいただいた意見から学ぶことができたので、今後の研究に生かしていきたい。

◎出版物による業績

[その他]

信田敏宏

2015 「Ninja～マレーシア～」『みんぱく e-news』166号、4月1日。

2015 「表紙のことば みんなの心をつなぐ『ホーホー』の詩」『日本ダウン症協会会報』（6月号）508：10-11。

2015 「乗り物編」『月刊みんぱく』39(6)：10-11。

2015 「東南アジアの1日」『月刊みんぱく』39(7)：2-3。

2015 「先住民の店」『月刊みんぱく』39(7)：9。

2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑩ マレーシアのハラールフード」『京都新聞』8月5日。

2016 「暑い地域に生きる人々——マレーシアの生活」『中学社会 地理的分野』pp.14-15, 東京・大阪：日本文教出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2015年10月11日 「ハラールフードの研究——予備調査報告」人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」研究ユニット「文明社会における食の布置」準備全体会合、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年4月25日 「イスラーム化と先住民——みんぱく東南アジア展示新構築から考える」日本マレーシア学会 関西地区例会、国立民族学博物館

・研究講演

- 2015年11月13日 「心に寄り添う子育てとは？——遊びと学びのすごろくワールド」 みんなく公開講演会『育児の人類学、介護の民俗学——フィールドワークによる再発見』、日経ホール、東京
- 2015年11月26日 特別講義「毎日がフィールドワーク——心に寄り添う我が家の子育て」奈良大学大学院社会学研究科（奈良大学）、奈良
- 2016年1月9日 「イスラーム化と向き合う先住民——新東南アジア展示から読みとく」第450回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館
- 2016年3月4日 「マレーシアのイスラームと先住民」公民館講座『民族学への招待——躍動する東南・南アジア』、芦屋市立公民館、兵庫

・広報・社会連携活動

- 2015年4月22日 「異種混濁の世界・東南アジア——インド文明と中国文明のはざままで」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店
- 2015年5月1日 「多民族国家マレーシアと先住民」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
- 2015年5月15日 「マレーシア先住民のイスラーム化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
- 2015年6月17日 「多様性を認める社会へ——マイノリティの視点から」2015年度社明研修会及び富田林地区保護委員会と富田林地区更生保護女性会との交流会、富田林市消防本部、大阪
- 2015年11月18日 「『東南アジア』展示の新構築について」第4回来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座、国立民族学博物館

・みんなくウィークエンド・サロン

- 2015年12月6日 「東南アジアの1日」第389回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

- 2015年9月7日～9月14日—マレーシア、シンガポール（マレーシアおよびシンガポールの食文化についての現地調査）

◎大学院教育

・指導教員

- 主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

・特別共同利用研究員の研究指導教員

- （1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」研究ユニット「文明社会における食の布置」準備プロジェクト分担者、（科学研究費助成事業（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」）（研究代表者：須藤健一）連携研究者

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

- 大阪大学「政治経済の人類学」

吉田憲司 [よしだ けんじ]—————副館長(企画調整担当)、文化資源研究センター教授

上羽陽子 [うえば ようこ]—————准教授

1974年生。【学歴】大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程前期修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程後期修了（2002）【職歴】大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）、総合研究大学院大学准教授併任（2014）【学位】博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）【専攻・専門】民族芸術学、染織研究、手工芸研究【所属学会】民族藝術

学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

上羽陽子

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』 京都：昭和堂。

[監修]

上羽陽子監修

2010 「NGO 商品を作らないという選択——インド西部ラバーリー社会における開発と社会変化」『地域研究』10(2)：204-223, 京都：昭和堂。

2008 「インドの手工芸と振興活動——ラバーリー社会を事例に」デザイン史フォーラム編, 藤田治彦責任編集『近代工芸運動とデザイン史』 pp.292-299, 京都：思文閣出版。

【受賞歴】

2010 意匠学会作品賞

2007 第4回木村重信民族藝術学会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的、内容

急激に進む経済成長やグローバル化をうけ、現代インドの手仕事は急速に姿を変えている。本研究の目的は、現代インドにおける手工芸品のつくり手たちが、急速に変化する自然環境や社会環境にどのように対応しながら、伝統的な手工芸技術の生産形態を保持あるいは変容させつつ、現代的な要素をいかに選択しているかを明らかにすることである。

同時に、文化資源である現地の人びとのものづくりに関する知識を、どのように活用することができるか、さらに共同利用や社会還元への可能性を展示やワークショップなど実践的研究を通じて探る。

なお、本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」、2014～2017年度）および科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究（代表：中谷文美）」、2014～2017年度）の課題として実施する予定である。また、現在代表を務めている共同研究「現代『手芸』文化に関する研究」とも連動し、世界の手工芸文化における現代インドの特性についても考察を行う。

・成果

本年度は、科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」の研究活動の一部として、デリーおよびグジャラート州カッチ県において、女神儀礼に関する染織品の市場および製作現場の現状調査を実施した。カッチ県は2001年の大地震によって被災した地域であり、その影響によって衣装や家屋など多くの物質文化が変容した。本調査において、女神儀礼における物質文化の変容に焦点をあてた結果、それまで奉納されていた女神儀礼用布がタイル装飾に置き換えられ、対象社会において刺繍布を女神に奉納するといった既存の意味づけや価値づけが変容していることが明らかとなり、これに伴って他の刺繍布の役割や女神儀礼自体にも変容がおきているかといった新たな検討課題が浮かび上がった。

また、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究（代表：中谷文美）」の研究活動の一部として、アッサムにおける野蚕飼養の現状に関する調査を実施した。近年、インド国内外で野蚕織布がファッション素材として高額で流通している。調査の結果、特に製織において、多くの織り手がローカルな伝統的織技術を活用して、都市部および外向けの野蚕糸織布の生産に従事していることが明らかとなった。また、そのような状況を生みだしている背景には、個人経営者（デザイナー兼仲買人）やNGOなどの影響が大きいことが明らかとなり、かれらから今後、聞き取り調査等の協力をおこなう同意を得ることができた。現在、得られた資料を整理しており、できるかぎり早期に論文として刊行する予定である。

◎出版物による業績

[単著]

上羽陽子

2015 『インド染織の現場——つくり手たちに学ぶ』 京都：臨川書店。

[論文]

上羽陽子

2015 「伝統染織」三尾 稔・杉本良男編『(現代インド6) 還流する文化と宗教』 pp.214-217, 東京：東京大学出版会。

[その他]

上羽陽子

2015 「ブルターニュの春風 (世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.15)」『フラワーデザインライフ』 567：10。

2015 「豊穡を描きだす (世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.16)」『フラワーデザインライフ』 568：10。

2015 「染織文化の今」『月刊みんぱく』 39(6)：6-7。

2015 「技術から知る南アジア」『月刊みんぱく』 39(6)：6-7。

2015 「旅・いろいろ地球人 踊る④ 流行を身にまとう」『毎日新聞』 6月4日夕刊。

2015 「色で楽しむ (世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.17)」『フラワーデザインライフ』 569：10。

2015 「省略の美 (世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.18)」『フラワーデザインライフ』 570：10。

2015 「調和がうみだす彩り (世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.19)」『フラワーデザインライフ』 572：10。

2015 「輝きとともに (世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.20)」『フラワーデザインライフ』 573：10。

2015 「生命の樹 (世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.21)」『フラワーデザインライフ』 574：10。

2015 「アンデスを織りなす (世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.22)」『フラワーデザインライフ』 575：10。

2016 「みんぱく食の民族誌 考える舌②⑧ ラクダの『ミルク』」『京都新聞』 1月20日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2016年1月30日 「他者表象に便乗しないという選択——インド西部のラバーリーを事例に」『表象のポリテクス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に』 国立民族学博物館

2015年7月18日 「刺繍は手芸か工芸か? ——手仕事をめぐる他者の視点」『現代「手芸」文化に関する研究』 『第4回共同研究会』 国立民族学博物館

2015年11月22日 「染織文化を伝える——その技術と造形的特徴 (セッションB 布 (とその作り手) を伝える) (コメント) 『2015年度アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究 科学研究費助成事業 (基盤(A))』 ワークショップ (代表：中谷文美)』 倉敷物語館

2016年11月22日 「工芸資源の消失と内在的手仕事の喪失による『場』の変化」 (コメント) 公開シンポジウム 『手しごとと復興』 (主催：南山大学人類学研究所) 南山大学人類学研究所1階会議室

・講演

2015年6月17日 「インドの衣装と染織文化」 神戸大学発達科学部ファッション文化論(2) 神戸大学

2015年6月20日 「インド刺繍布がうみだす世界」 第445回みんぱくゼミナール

2015年7月4日 「色と光が放つイメージ」 企画展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」 関連イベント (主催：郡山市立美術館、共催：国立民族学博物館友の会) 郡山市立美術館多目的スタジオ

2016年2月27日 「インド刺繍布の造形力」、「南アジアがうみだす装飾美」 園田・みんぱく連続講座——「世界の造形に見る“美”の文化」 園田学園女子大学

- ・ 広報・社会連携活動

- 2015年6月3日 「インドの縫い目から——作り手たちの知恵と工夫」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル——世界の『民芸』」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館1F
- 2015年6月14日 「みんぱく本館展示ツアー 南アジアの染織文化」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル——世界の『民芸』」、CAFE Lab. 国立民族学博物館本館展示場
- 2015年11月11日 「インド染織文化の今」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店
- 2015年12月16日 「インドの野蚕——その特徴と魅力」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル——世界の天然素材」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館1F

- ・ みんぱくウィークエンド・サロン

- 2015年5月10日 「染織の伝統と現代——新しくなった南アジア展示場」第382回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- ・ ワークショップ・単独企画

上羽陽子

- 2015年6月2日、9日、23日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる」(主催：川島テキスタイルスクール) 川島テキスタイルスクール [依頼有]
- 2015年6月24日 「手織り絨毯の織技術について」(主催：株式会社絨毯ギャラリー) クロス・ウェーブ梅田 [依頼有]
- 2015年7月11日 「インドのキターブチャルカで糸紡ぎ」(主催：川島テキスタイルスクール) 川島テキスタイルスクール [依頼有]

- ・ ワークショップ・共同企画

上羽陽子

- 2015年6月～8月 毎週木、土曜日 「はじめの一步 やってみようミラー刺繍」躍動する南アジア——春から秋のみんぱくフォーラム2015関連ワークショップ、(講師：チーム・ブラカーシュ (MMP)、企画：企画課) 国立民族学博物館本館展示場、エントランスホール、
- 2015年8月1日 夏休みこどもワークショップ「キラキラ カラフル インド布——フィールドワークに挑戦！」躍動する南アジア——春から秋のみんぱくフォーラム2015関連ワークショップ (ファシリテーター：喜多川真由美・国立民族学博物館技術補佐員) 国立民族学博物館本館展示場、ナビひろば

上羽陽子、三尾 稔

- 2015年5月24日、6月7日、6月28日 「忠実再現！インド西部の刺繍布——展示資料の模写に挑戦」躍動する南アジア——春から秋のみんぱくフォーラム2015関連ワークショップ (主催：国立民族学博物館、企画担当：企画課) 国立民族学博物館本館展示場、ナビひろば

- ・ 展示活動

- 2016 年未年始展示イベント「さる」プロジェクトチーム・リーダー

- ◎調査活動

- ・ 海外調査

- 2015年12月18日～2016年1月5日—インド (現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究)
- 2016年2月15日～2月17日—インド (現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究)
- 2016年2月18日～2月26日—インド (アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究)
- 2016年3月3日～3月15日—ロンドン (現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究)

- ◎社会活動・館外活動

- ・ 他の機関から委嘱された委員など

民族芸術学会理事 (研究例会担当)、意匠学会国際交流委員会委員

- ・ 非常勤講師

京都精華大学「文様史1」、「クラフト1」、大阪芸術大学「織実習I-2 (パイル織)」

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 科学研究費助成事業（基盤研究（C））「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」（研究代表者：中谷文美）研究分担者

林 勲男 [はやし いさお] ————— 准教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒（1980）、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了（1983）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学（1992）**【職歴】**シドニー大学人類学科客員研究員（1992）、国立民族学博物館第4研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2001）**【学位】**文学修士（立教大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**社会人類学 1) パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究、2) オセアニア近代史の人類学的研究、3) 自然災害への対応に関する人類学的研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会、The International Union of Anthropology and Ethnological Sciences (IUAES)、Japan Anthropology Workshop (JAWS)

【主要業績】

[編著]

林 勲男編

- 2015 『アジア太平洋諸国の災害復興——人道支援／集落移転・防災と文化』東京：明石書店。
- 2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

[共編著]

林 勲男・橋本裕之編

- 2016 『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害と記憶

・研究の目的、内容

人文社会科学の分野において、「記憶」を取り上げた論考が多くなっている。日本では、とりわけ東日本大震災と福島第1原発事故によって、それまでの生活が一変した被災者・被害者の言説を扱う際に、当事者の主観性にアプローチする研究者のスタンスを同時に開示するものとして、「記憶」をキーワードとして前面に押し出した議論が少なからず見受けられる。しかしそれは、この概念の拡大の有効性への疑問も投げかけている。

本年度は、遺族にとっての死の「場」と記憶を扱った昨年度の成果を踏まえて、ダークツーリズムや死のツーリズム（thanatourism）に関するこれまでの研究も視野に入れながら、災害遺構の保存・解体を巡って被災地で発生している問題を対象とする。

・成果

東日本大震災に関わる災害遺構のデータベースに新たなデータを追加した。委員を務めた内閣府「災害遺構の収集及び活用に関する検討委員会」にて、研究成果の一部を提供した（報告書刊行済み）。また、これまでのダークツーリズム研究のレビューを踏まえ、2016年2月10日に兵庫県民会館で開催された「復興まちづくり・災害遺構研究会」にて、日本におけるダークツーリズム研究の牽引力となっている井出明氏（追手門学院大学）とフंक・カロリン氏（広島大学）の発表へのコメントを務めた。コメントのポイントは次のとおりである。ダークツーリズムには、慰霊や学習を目的としたツーリズムの一つの在り方があるとしても、ツーリズム自体が現地を訪れるゲストとそれを迎えるホストの双方から成立するとの前提に立ったとき、災害遺構で亡くなった人の遺族等の当事者性を考慮すると、アカデミズムにおいては共通語として使われる「ダークツーリズム」という言葉をそのまま現地の人々をも含めた一般向けに使うことに疑問を抱く。また、観光資源としての経済効果を考慮することは必要だが、過去の事例に関して、保存・解体・利活用等についての詳細な検証も重要となってくる。コメントの要旨は、神戸まちづくり研究所ホームページに掲載。また成果の一部は、橋本・

林編『災害文化の継承と創造』所収の論文「災害にかかわる在来の知と文化」でも言及している。

◎出版物による業績

[編著]

林 勲男編

2015 『アジア太平洋諸国の災害復興——人道支援・集落移転・防災と文化』東京：明石書店。

[共編著]

林 勲男・橋本裕之編著

2016 『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店。

[論文]

林 勲男

2015 「集落移転と土地権——1998年アイタベ津波災害被災地の課題」林編著『アジア太平洋諸国の災害復興——人道支援・集落移転・防災と文化』pp.84-116, 東京：明石書店。

2016 「災害にかかわる在来の知と文化」林 勲男・橋本裕之編著『災害文化の継承と創造』pp.14-28, 京都：臨川書店。

[その他]

林 勲男

2015 「みんなく世界の旅 パプアニューギニア① 上級生がこぐカヌーで通学」『毎日小学生新聞』6月27日。

2015 「みんなく世界の旅 パプアニューギニア② 火山と共存するラバウルの人々」『毎日小学生新聞』7月4日。

2015 「みんなく世界の旅 パプアニューギニア③ 噴煙上げ続けるタブルブル山」『毎日小学生新聞』7月11日。

2015 「みんなく世界の旅 パプアニューギニア④ ベダムニ族男子の成人儀礼」『毎日小学生新聞』7月18日。

2015 「宣教師による南太平洋コレクションの情報を集める」『民博通信』150：12-13。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2016年1月29日 「オセアニアの都市」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2016年2月5日 「パプアニューギニアの地方集落での暮らし」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎調査活動

・国内調査

2015年4月24日～4月26日一三重県津市（昭和東南海地震・津波に関する調査）

2015年5月3日～5月7日一岩手県大船渡市・南三陸町（科学研究費助成事業（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」に係わる調査）

2015年8月13日～8月16日一岩手県大船渡市・釜石市（科学研究費助成事業（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」に係わる調査）

2015年8月28日～8月30日一宮城県石巻市・仙台市（科学研究費助成事業（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」に係わる調査）

2015年9月～12月一宮城県南三陸町・大崎市・仙台市（害遺構・モニュメントに関する調査）

2015年12月15日～12月16日一新潟県南魚沼市（パプアニューギニア民族資料に関する調査）

2015年12月26日一宮城県仙台市（科学研究費助成事業（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」に係わる調査）

2016年2月13日～2月15日一岩手県宮古市（黒森神楽の巡業に関する調査）

2016年3月5日～3月7日一福島県いわき市（じゃんがら念仏踊りに関する調査）

2016年3月23日～3月25日一宮城県石巻市・仙台市（震災復興に係わる市民活動等に関する調査）

・海外調査

2016年12月1日～12月13日一イギリス（ジョージ・ブラウン・コレクションにかかる調査研究）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表：京都大学・林春男）
研究分担者、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業「効果的・持続的な災害伝承を目的にした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」（研究代表者：東北大学・佐藤翔輔）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など
内閣府「災害遺構の収集及び活用に関する検討委員会」委員

日高真吾 [ひだか しんご] ————— 准教授

1971年生。【学歴】東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1994）【職歴】財団法人元興寺文化財研究所研究員（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】文学博士（東海大学 2005）【専攻・専門】保存科学、保存修復【所属学会】文化財保存修復学会、文化財科学会、日本民具学会、近畿民具学会

【主要業績】

[単著]

日高真吾

- 2015 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』大阪：千里文化財団。
- 2008 『女乗物——その発生経緯と装飾性』神奈川：東海大学出版会。

[編著]

日高真吾編

- 2012 『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

園田直子・日高真吾共編

- 2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』東京：三好企画。

【受賞歴】

- 2009 日本文化財科学会第4回ポスター賞
- 2008 文化財保存修復学会第2回奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築

・研究の目的、内容

本研究では、グローバル化や災害を原因として大きな変貌を遂げている地域社会において、どのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかについて調査・研究をおこなう。さらに、地域社会の動向に対して人間文化研究がいかに貢献しうるかを考察することを研究の主眼とする。

以上の研究からは、①豊かな地域社会の創生に向けた、災害時における地域文化の重要性の提示、②博物館を積極的に活用した、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを節目で感じられるようなプログラムの策定、③地域の基層文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築、④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指していく。

・成果

2015年度は、研究を推進していくうえで必要となる地方の共同研究拠点の形成を目指すこととし、2016年度からの本格研究にむけて研究体制の構築を主眼とした。ここでは、災害発生を契機としておこなわれた文化財レスキュー支援をした地方の団体と意見交換をおこなうこととし、能登半島地震で被災した穴水町教育委員会や中越地震で関係を構築した十日町情報館と今後の可能性について協議を重ねた。また、地域拠点の形成のた

めの調査及び意見交換をおこなうこととして、金沢美術工芸大学や京都造形芸術大学、北海道の地域博物館、台北芸術大学、国立台湾歴史博物館を始めとする各機関との協力関係の推進や実質的な協力者となる研究者との意見交換をおこない、2016年度以降の本格的に実施する本プロジェクトの基盤を整えることができた

なお、本研究を進めるにあたっては、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる事前調査」（代表：日高真吾）および、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（代表：日高真吾 15H02954）の研究プロジェクトと関連付けながら実施した。

◎出版物による業績

[論文]

日高真吾

- 2015 「生活の記憶を取り戻す——文化財レスキューの現場から」木部暢子編『災害に学ぶ——文化資源保全と再生』pp.175-199, 東京：勉誠出版。
- 2015 「大規模災害における文化財レスキュー事業に関する一考察——東日本大震災の活動から振り返る」『国立民族学博物館研究報告』40(1)：1-52, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]
- 2015 「中越地震から10年——公開シンポジウム「災害と文化財レスキュー」に参加して」日高真吾・中村信也米村祥央・加藤和歳・田井東浩平・間瀬創・内田俊秀『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.336-337。
- 2015 「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法——カビに由来する蛍光反応可視化を事例として」末森 薫・園田直子・日高真吾・高鳥浩介（カビ相談センター）・吉田直人（東京文化財研究所）・川越和四（環境文化創造研究所）・和高智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.104-105。
- 2015 「国立民族学博物館における大規模な殺虫処理」日高真吾・園田直子・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明（国立民族学博物館）・和高智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）・川越和四（環境文化創造研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.96-97。
- 2015 「国立民族学博物館に新設した多機能保管庫の運用事例——大型民俗資料の保管を目指して」園田直子・日高真吾・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明（国立民族学博物館）・和高智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.94-95。
- 2015 「東日本大震災の被災文化財の一時保管場所の環境改善——気仙沼市旧月立中学校の事例から」日高真吾・園田直子・末森 薫（国立民族学博物館）・和高智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）・多田隈卓司・左治木悠子（金剛）・川越和四（環境文化創造研究所）・福田尚（イカリ消毒）・小谷竜介（東北歴史博物館）・幡野寛治（気仙沼市教育委員会）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.32-33。
- 2015 「北斗遺跡出土の織物・繊維遺物に関する一考察」日高真吾・吉本 忍・佐々木史郎（国立民族学博物館）・右代啓視（北海道博物館）・石川 朗（釧路市埋蔵文化財調査センター）・和高智美（合同会社文化創造巧芸）『日本文化財科学会』pp.160-161。
- 2015 「東日本大震災で被災した民俗文化財の脱塩処理に関する一考察」『民具研究』152：99-114、日本民具学会 [査読有]
- 2015 「IPM 実現のための予算獲得について——国立民族学博物館の事例から」『臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在』報告書 pp.48-54, 東京文化財研究所。
- 2016 「文化財等レスキュー事業の意義を考える——被災文化財から文化財へ」橋本裕之・林 勲男編『災害文化の継承と創造』pp.238-250, 京都：臨川書店。
- 2016 「民博の資料管理技術をエジプトで活用する」『文化財保存修復学会誌』59：48-54, 文化財保存修復学会。

[その他]

日高真吾

- 2015 「『ライオンキング』と人形浄瑠璃」『ライオンキングプログラム』pp.30-31。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2015年4月17日 「東日本大震災における文化財レスキュー」国際学術大会『災難及び産業安全に関する東アジア安全共同体摸索』高麗大学、ソウル特別市、大韓民国
- 2015年6月24日 「漆を使う——漆工技術の継承」カレッジシアター「地球探究紀行」アベノハルカス近鉄本店
- 2015年6月27日～6月28日 中越地震から10年——公開シンポジウム「災害と文化財レスキュー」に参加して」日高真吾・中村信也・米村祥央・加藤和歳・田井東浩平・間 潤創・内田俊秀『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』京都工芸繊維大学、京都
- 2015年6月27日 「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法——カビに由来する蛍光反応可視化を事例として」末森 薫・園田直子・日高真吾・高鳥浩介（カビ相談センター）・吉田直人（東京文化財研究所）・川越和四（環境文化創造研究所）・和高智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』京都工芸繊維大学、京都
- 2015年6月27日 「国立民族学博物館における大規模な殺虫処理」日高真吾・園田直子・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明（国立民族学博物館）・和高智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）・川越和四（環境文化創造研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』京都工芸繊維大学、京都
- 2015年6月27日 「国立民族学博物館に新設した多機能保管庫の運用事例——大型民俗資料の保管を目指して」園田直子・日高真吾・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明（国立民族学博物館）・和高智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』京都工芸繊維大学、京都
- 2015年6月27日 「東日本大震災の被災文化財の一時保管場所の環境改善——気仙沼市旧月立中学校の事例から」日高真吾・園田直子・末森 薫（国立民族学博物館）・和高智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）・多田隈卓司・左治木悠子（金剛）・川越和四（環境文化創造研究所）・福田 尚（イカリ消毒）・小谷竜介（東北歴史博物館）・幡野寛治（気仙沼市教育委員会）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』京都工芸繊維大学、京都
- 2015年7月11日～7月12日 「北斗遺跡出土の織物・繊維遺物に関する一考察」日高真吾・吉本 忍・佐々木史郎（国立民族学博物館）・右代啓視（北海道博物館）・石川 朗（釧路市埋蔵文化財調査センター）・和高智美（合同会社文化創造巧芸）『日本文化財科学会』東京学芸大学、東京
- 2015年7月16日 「IPM 実現のための予算獲得について——国立民族学博物館の事例から」フォーラム『臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在』東京文化財研究所、東京
- 2015年9月10日 「如何展示日本の民俗生活：国立民族学博物館的実践」公開ワークショップ『生活的展示——生活物件と生活スタイル』台湾国立博物館
- 2015年11月18日 「国立民族学博物館の資料管理活動について」文化財等防災ネットワーク研修、奈良文化財研究所、奈良
- 2015年11月18日 「文化財等レスキュー——後の支援活動について：国立民族学博物館の活動を中心に」文化財等防災ネットワーク研修、奈良文化財研究所、奈良
- 2015年11月18日 「文化財等レスキュー事業について：国立民族学博物館の活動を中心に」文化財等防災ネットワーク研修 奈良文化財研究所
- 2016年1月30日 「アンデス文明形成期の金属製品の製作に関する一考察——蛍光X線分析の結果から」日高真吾・橋本沙知 公開シンポジウム『アンデス文明初期の神殿と権力生成』キャンパス・イノベーションセンター東京、東京
- 2016年3月5日 「一時保管場所の現状——気仙沼市旧月立中学校の事例」文化財防災ネットワーク推進事業・文化財保存修復学会例会『大規模災害時における被災資料の一時保管施設について考える』フクラシア東京、東京
- 2016年3月27日 「民具の保存処理と災害時における応急措置について」第66回日本木材学会企画講演、名古屋、愛知

・広報・社会連携活動

- 2015年6月24日 「漆をつかう——漆工技術の継承」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのアルカス近鉄本店

2015年10月28日 「日本の漆器、世界の漆器」連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——世界の天然素材」、
CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1F

2016年2月6日 「波伝谷に生きる人びと」みんぱく映画会

・研究会・シンポジウム・学会など

2015年2月21日～2月22日 国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」

◎調査活動

・海外調査

2015年4月16日～4月18日 大韓民国（国際学術大会『災害を通じてみる「東アジア安全共同体」の模索』参加及び、発表）

2015年8月30日～9月7日 ロシア（ロシアにおけるアイヌ等北方民族関連の衣類資料の調査）

2015年9月9日～9月14日 台湾（「生活文化と博物館」の研究に向けての学術協力）

2015年10月15日～10月19日 台湾（台湾における地域文化に関する調査研究）

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「彩色塗装のある歴史的木造文化財建造物の加湿温風処理による虫害処理方法の検討」（代表：木川りか 15H01778）研究分担者、基幹研究「地域における歴史文化研究拠点の構築」（代表：小池淳一）研究メンバー、国立歴史民俗博物館共同研究「東日本大震災被災地域における生活文化研究の復興と博物館型研究統合」（代表：川村清志）共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化財保存修復学会理事、文化財保存修復学会第37回大会実行委員、文化財保存修復学会第37回大会プログラム作成委員長、文化財虫菌害研究所総合的防除対策検討委員、九州国立博物館「みんなでももる文化財みんなを守るミュージアム」事業協力委員、文化遺産防災ネットワーク有識者委員、展示学事典編集委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西学院大学非常勤講師（集中講義）

福岡正太 [ふくおか しょうた] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京藝術大学音楽学部楽理科卒（1986）、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了（1991）、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）【学位】芸術学修士（東京藝術大学大学院 1991）【専攻・専門】民族音楽学、東南アジアとくにインドネシア西ジャワのスダ伝統音楽についての研究【所属学会】東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

[論文]

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」端 信行編『民族の二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9）pp.144-160, 東京：ドメス出版。

2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究——民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28(2)：257-295。

Fukuoka, S.

2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J. S. Eades (eds.), *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp.95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究

・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、学術的な記録および分析の手段として、音楽芸能研究において一定の役割を果たしてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの影響を抜きにして論じることはできない。一方、20世紀を通じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、手軽なビデオ撮影機器の普及により、音楽芸能の伝承や創造、研究の過程において、関係者が自ら映像を作成して発表するようになり、映像は音楽芸能にかかわる活動に不可欠なものとして組み込まれつつある。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、①20世紀前半から半ばの日本とインドネシアにおいて、レコードやラジオなどのメディアの登場が音楽にもたらした変化を明らかにする研究に取り組む。②鹿児島県硫黄島および徳之島の芸能を例として、映像による芸能の民族誌的記録の作成および活用のあり方を探る。特に、映像を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像による民族誌の作成が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。③東南アジアの音楽芸能、特にゴングにかかわる文化に焦点をあて、映像を用いて地域間の比較研究を進める。また、①～③を通じて、映像音響資料のアーカイブ化と公開における諸課題についても検討したい。

・成果

①1930年代半ばインドネシアにおいて本格化したラジオ放送における西ジャワのスダ音楽について、ラジオ雑誌等の記述に基づき検討し、共同研究会「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」（代表者：福岡まどか）にて発表した。従来、録音産業の登場により非西洋世界の音楽において、スター音楽家の誕生、娯楽への傾斜、レコードの時間制限によるより短い作曲されたジャンルの増大すること等が指摘されてきたが、ほぼ同様の現象が西ジャワにおいても見られた。②徳之島の芸能の映像記録を主なデータとするフォーラム型情報ミュージアムの構築を試みた。本格的な稼働に向けて、民博撮影、他の研究者による撮影、そして住民撮影のビデオの比較視聴の会、学校におけるシステムの利用への調整等を進めた。撮影年代の異なるビデオは芸能や集落の変化を反映しており、歴史の記録としても重要であることが住民にも実感された。また、集落の芸能の伝承における学校の役割が高くなっており、集落の年長者からの手ほどきに加えて、映像記録資料等への期待も高まっていることが明らかになった。③科学研究費助成事業による研究「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」の成果に基づき、東洋音楽学会大会においてパネルディスカッション「東南アジア諸地域のゴング文化の相互関連」を開催した。島嶼部におけるガムランの需要の高まりは鉄ゴング製造の広がりをもたらした。恐らくそれに起因してジャワ島中部において製造される青銅ゴングの流通にも変化が起り、バリ島への移出の減少がみられるようになってきていることなどが明らかになった。

◎出版物による業績

[論文]

福岡正太

- 2016 「無形文化遺産としての音楽」徳丸吉彦監修、増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.74-84、東京：音楽之友社。
- 2016 「資料としての楽器」徳丸吉彦監修、増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.85-87、東京：音楽之友社。
- 2016 Audiovisual Ethnography of Performing Arts as Human Cultural Resources. In Y. Terada (ed.) *An Audiovisual Exploration of Philippine Music: The Historical Contribution of Robert Garfias* (Senri Ethnological Reports 133), pp.99-104. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

福岡正太

- 2015 「太鼓編」『月刊みんぱく』39(4)：10-11。
- 2015 「ヒジャブがあらわす女性の夢」『月刊みんぱく』39(7)：6-7。
- 2015 「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」『民博通信』149：12-13。
- 2015 「『ライオンキング』とインドネシアの人形芝居」劇団四季編集部編『ライオンキング公演プログラム』pp.32-33。
- 2015 「盗まれた仮面——インドネシア」『みんぱく e-news』173号、11月1日。(http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/173)。

2016 「第266回定例研究会報告」『(一社)東洋音楽学会西日本支部だより』82:2-5。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

[東南アジア]

福岡正太監修

2015 「木彫り人形」日本語、英語、韓国語、中国語

2015 「影絵人形」(スバエク・トム)日本語、英語、韓国語、中国語

2015 「影絵人形」(ワヤン・クリット・シナム)日本語、英語、韓国語、中国語

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年10月13日 「コメント」国際フォーラム「文化遺産レジームを考える——レギーナ・ベンディクス教授を迎えて」、国立民族学博物館第4セミナー室

2016年3月13日 「コメント」国際シンポジウム「無形文化遺産の継承における『オーセンティックな変更・変容』」、国立民族学博物館第4セミナー室

・共同研究会での報告

2015年7月11日 「ファッション・デザイナー——インドネシア女性の生き方のモデルとして」『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化』国立民族学博物館大演習室

2016年1月8日 「スダ音楽の『モダン』の始まり——ラジオと伝統音楽」『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化』国立民族学博物館第3演習室

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年8月16日 「フォーラム型情報ミュージアムによる映像記録の公開——徳之島の芸能を例に」、シンポジウム『民間芸文のデジタル・アーカイブ化と活用——歌や語りの継承に向けて』奄美沖縄民間芸文学会鹿児島大会、鹿児島県歴史資料センター黎明館講堂、鹿児島

2015年11月1日 「趣旨説明」、パネルディスカッション『東南アジア諸地域のゴング文化の相互関連』東洋音楽学会第66回大会、東京芸術大学、東京

2015年11月28日 「フォーラム型情報ミュージアム『徳之島の歌と踊り』」アーカイブ研究会、沖縄県立芸術大学附属研究所

・みんぱくゼミナール

2016年1月16日 「東南アジアの人形芝居」第452回みんぱくゼミナール

・研究講演

2015年11月11日 「越境する身体知——ガムランの伝承を例に」、若手研究者奨励セミナー「伝承と身体をめぐる文化人類学」、国立民族学博物館第6セミナー室

2016年2月15日 「ジャワ島のガムラン——おしりでも合わせるリズム」、文化サロン話題探訪、伊丹アイフォニックホール、兵庫

・研究公演

2015年12月6日 「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」企画・司会

・広報・社会連携活動

2015年6月21日 「音楽の祭日2015 in みんぱく」国立民族学博物館。

2015年12月5日 研究公演関連ワークショップ「仮面を生かす踊り」企画、国立民族学博物館講堂

2016年1月10日 みんぱく映画会新展示関連「映画で知る東南アジア『虹の兵士たち』」企画・司会

2016年1月24日 みんぱく映画会新展示関連「映画で知る東南アジア『消えた画——クメール・ルージュの真実』」企画・司会

2016年2月13日～2月28日 みんぱくワークショップ「東南アジアの仮面と人形」全6回、企画・司会、国立民族学博物館第5セミナー室

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年1月24日 「東南アジアの人形芝居——撮影裏話」第411回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話しそう

◎調査活動

・国内調査

2015年9月26日～9月28日—徳之島（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」の一環として映像取材および映像公開打ち合わせ）

2016年2月22日～2月24日—徳之島（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」の一環として映像取材および映像公開打ち合わせ）

・海外調査

2016年1月26日～2月4日—インドネシア（ゴング文化にかかる調査研究）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

副指導教員（1名）

・大学院ゼミでの活動

2015年10月15日 「おしりで合わせるリズム——ガムランにおける時間の組織化」 テーマシリーズ

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」代表者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

アジア太平洋無形文化遺産研究センター助言組織委員

・非常勤講師

大谷大学「民族誌講義」「社会学研究」、広島市立大学「音楽人類学Ⅰ」「音楽人類学Ⅱ」（集中講義）

山本泰則 [やまもと やすのり] ————— 准教授

【**学歴**】大阪大学基礎工学部生物工学科卒（1978）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了（1980）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程退学（1983）【**職歴**】国立民族学博物館第5研究部助手（1983）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）【**学位**】工学修士（大阪大学大学院基礎工学研究科 1980）【**専攻・専門**】博物館情報学【**所属学会**】情報処理学会、電子情報通信学会、情報知識学会

【**主要業績**】

[論文]

山本泰則

2011 「国立国会図書館PORTAと人間文化研究機構統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』2：53-68。

Yamamoto, Y., F. Adachi and K. Hachimura

2013 Common Metadata to Search for Non-digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases. *Proceedings of the International Conference on Culture and Computing 2013*, pp.225-224, IEEE Computer Society. (CD-ROM) [査読有]

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-266。[査読有]

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

機械学習をもちいた民族学情報の検索

・研究の目的、内容

国立民族学博物館では、所蔵するさまざまな民族資料情報のデータベースを作成して公開しているが、必ずしも十分な情報が付与されているわけではない。特に標本資料に関するものは、同種の資料が多数ある、同じ資料に異なる名称が与えられているなど、文字列の単純な照合による従来の検索方法で求める情報を得るには限界がある。

本研究は、最近情報科学の分野で進展がめざましい機械学習の技術を応用して、データベースから民族学研究に有用な情報を抽出しようとするものである。多量のデータの統計処理やクラスタリングなどの手法により、データの構造を概観して全容を把握したり、不完全な情報から有用な情報を抽出、あるいは誤入力された情報を発見する可能性について研究をおこなう。

・成果

今年度も機械学習研究の現状のサーベイを進めるとともに、民博のもつ情報への応用の可能性について検討をおこなった。またこれと関連して、民博のデータベースのデータに対して、以下を実施した。

原則として命名が担当者に任されている民博の標本資料名を形態素解析することにより、命名の特性を分析した。この結果は、現在民博で進めようとしている標本資料データベースの標本資料名の英語化にも貢献できると考える。

また、「バッドデータハンドブック」などの文献により、規格外のデータが生じる原因やそのパターンに関する知見を得て、2016年3月に更新した図書システムから、人間文化研究機構の「統合検索システム」のために抽出したデータを変換処理するプログラムに反映させた。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2015年6月30日 『民博通信』 no.149、国立民族学博物館 [編集委員]

2015年9月30日 『民博通信』 no.150、国立民族学博物館 [編集委員]

2015年12月24日 『民博通信』 no.151、国立民族学博物館 [編集委員]

2016年3月30日 『民博通信』 no.152、国立民族学博物館 [編集委員]

川瀬 慈 [かわせ いつし] ————— 助教

1977年生。【学歴】立命館大学文学部卒（2001）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）【職歴】日本学術振興会PD（2007）、マンチェスター大学グラナダ映像人類学センター研究員（2010）、ベルギーSoundImageCulture 客員講師（2011）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2012）、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所 Hiob Ludolf 客員教授（2013）、プレーメン大学人類学・文化調査学部客員教授（2014）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 2007）【専攻・専門】アフリカ研究、映像人類学、民族誌映画制作【所属学会】英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[共編]

鈴木裕之・川瀬 慈編

2015 『アフリカン・ポップス！——文化人類学からみる魅惑の音楽世界』東京：明石書店。

分藤大翼・川瀬 慈・村尾静二編

2015 『フィールド映像術』（FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ15）東京：古今書院。

[論文]

Kawase, I.

2014 The Amharic Oral Poetry by Lalibäločč. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 15: 185-198. [査読有]

【受賞歴】

2013 第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞

2008 最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovative イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、自身の映画制作や上映活動を事例に、コミュニケーションによって生成する人類学的な映像実践を示すことにある。報告者は、撮影者の存在や行動を前景化し、撮影の過程でかわされる撮影者・被写体間の議論を映像の中であえて開示し、撮影プロセスを明示する方法論を発展させてきた。民族誌映画においては、観察型、解説型の映画様式が重視され、制作中の撮影者・被写体間の相互作用や、映画を視聴する幅広いアクターの役割が軽視される傾向にあった。そのようななか本研究では、民族誌映画を固定的で完結した表象としてではなく、視聴する人々とのたえまない相互作用のなかに位置づける。さらにその相互作用が、研究の新たな展開を生成させる創発的な営みであることを自身の民族誌映画制作の実践や映画公開の活動を軸に検討する。

・調査

科学研究費助成事業（若手研究(B)）『アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用』の研究のため、10月から11月にかけて、エチオピア連邦民主共和国において調査を行った。本調査では、エチオピア北部の地域社会において音楽を担う職能集団の活動を対象に報告者が制作した民族誌映画を被写体や被写体の親族と視聴するなかで、当集団の社会集団としての特質の変容、技能の伝承、さらに他集団に対して映画を通してアピールしたい自集団の理想像について議論を交わすことができた。11月に大英図書館 World & Traditional Music 部門において、報告者が過去に制作した民族誌映画やフッテージ、約13点をアーカイブした「Itsushi Kawase Collection」の活用に関して調査を行った。民族誌映画のアーカイビングや活用をめぐる課題や今後の展望に関して、関係者と議論を行った。以上のエチオピアと英国における調査で得られたデータを整理し、今後論文としてまとめ、映像人類学の学術雑誌に投稿する予定である。

・映画上映

山東大学人類学部において開催された国際会議、韓国国立民俗博物館のセミナーにおいて、報告者が制作したエチオピアの憑依儀礼ザールに関する民族誌映画『When Spirits Ride Their Horses』や、民博特別展「マダガスカル 霧の森の暮らし」の展示映像を編集した、マダガスカルの無形文化遺産に関する『Zaffimaniry Style』を上映し、本研究課題についての講演を行った。中国や韓国の学生や映像人類学者と、無形文化を対象とした民族誌映画制作の方法論や、作品公開によって引き起こされる問題をテーマとした議論を行った。

・成果公開

日本文化人類学会機関誌『文化人類学』80巻1号の特集「人類学における映像実践の新たな時代に向けて」において、近年の民族誌映画の研究潮流を考察する論文（特集序文）、並びに本研究課題に関する論文、計2本を発表した。以上の2本の論文では、民族誌映画を視聴する側の人々の役割を映像人類学が軽視してきたことを指摘し、民族誌映画の制作と公開をめぐる議論を通して生まれる、研究者と調査対象の人々との関係性の変化、あるいは映画公開によって創出される社会との新たなつながり、について考察した。作品を、被写体や、それを視聴する人々との創発的な営みのプロセスにあると位置づけ、映像実践をともなう人類学研究の可能性について検討した。

◎出版物による業績

[論文]

Kawase, I.

2015 An Analysis of *Lawaḡi* Oral Poetry in Ethiopia. In J. Kawada (sous la direction de.) *Cultures sonores D'afrique* VI: 55-76. Yokohama: Universite Kanagawa. [査読有]

2016 Exploring the Old Town Lijiang or Re-visualizing Myself? *Visual Anthropology Forum* (影视人類学论坛) 11: 166-197.

川瀬 慈

2015 「序<特集>「人類学と映像実践の新たな時代に向けて」『文化人類学』80(1): 1-5. [査読有]

- 2015 「コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画——エチオピアの音楽職能集団と子供たちを対象とした映画制作と公開の事例より」『文化人類学』80(1)：6-19。[査読有]

[その他]

川瀬 慈

- 2015 書評 遠藤保子・相原進・高橋京子編著「無形文化財の伝承・記録・教育——アフリカの舞踊を事例として」『JANES ニュースレター』22：82。
- 2015 「現代のことば 約束の地」『京都新聞』5月14日夕刊。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 踊る① 精霊を誘う」『毎日新聞』5月14日夕刊。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 踊る③ 密なやりとり」『毎日新聞』5月28日夕刊。
- 2015 「現代のことば 永遠」『京都新聞』7月17日夕刊。
- 2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑫ エチオピアの生肉食」『京都新聞』8月12日。
- 2015 「現代のことば 高原のチャプリン」『京都新聞』9月14日夕刊。
- 2015 「現代のことば コロタマリ」『京都新聞』11月16日夕刊。
- 2015 「映像人類学の国際的な研究動向とのつながりのなかで」『民博通信』151：18-19。
- 2016 「恭平へ——アジスアベバ、岐阜、大阪、パリ、ロンドン」『ユリイカ——特集：坂口恭平』東京：青土社。
- 2016 「現代のことば 再会」『京都新聞』1月19日夕刊。
- 2016 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑫ エチオピアのインジェラ」『京都新聞』3月2日。
- 2016 「現代のことば 十字架」『京都新聞』3月15日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

- 2015年6月13日 「川瀬 慈「イメージへの亡命——声とサウンドによるパフォーマンスの試み」『映像民族誌のナラティブの革新』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年6月19日 ‘Towards a New Age of Anthropology with Visual Practice -Cases from Japan-’ International Conference on Anthropology of Northeast Asia “The Anthropology of Northeast Asia: Flows and Groundings” Shandong University, Jinan
- 2015年4月19日 「ゴンダール、ストリートの残響」『Pop Africa 2015』一橋大学、東京

・研究講演

- 2016年1月30日 「ゴンダール、ストリートの残響」『文化人類学者が語り演じるアフリカン・ポップス！～エチオピア、カメルーン、ギニア、ジンバブエから～』日本アフリカ学会関東支部 2015年度第2回例会、下北沢 Com. Cafe 音倉、東京
- 2016年3月16日 「Jammin’ ストリートの残響」『文化人類学者が語り演じるアフリカン・ポップス！～エチオピア、カメルーン、ギニア、ジンバブエから～』日本アフリカ学会関西支部 2015年度後援イベント、京都きんせ旅館、京都
- 2016年3月25日 「職能者からアーティストへ——世界に羽ばたくエチオピアの楽師たち」みんぱく公開講演会『ワールドアートの最前線——アイヌの文様とエチオピアの響き』、オーバルホール、大阪

・映像作品制作

撮影、編集、監督 川瀬 慈

『ジムナジウム /gymnasium』(17分, アムハラ語・英語字幕、2016年)

・映像上演

- 2015年5月14日 *Room11, Ethiopia Hotel* (Dir. Itsushi Kawase), 同志社大学国際教育インスティテュート
- 2015年6月20, 21日 *When Spirits Ride Their Horses* (Dir. Itsushi Kawase), *Zaffimaniry Style* (Dir. By Itsushi Kawase and Taku Iida) 映像人類学セミナー、山東大学、中国
- 2015年7月10日 *When Spirits Ride Their Horses* (Dir. Itsushi Kawase), *Zaffimaniry Style* (Dir. By Itsushi Kawase and Taku Iida)、韓国国立民俗博物館、韓国
- 2016年1月30日 *Gymnasium* (Dir. Itsushi Kawase) 一般社団法人エチオピア・アートクラブ設立記念 “Secret Art of ETHIOPIA”、HIS 旅と本と珈琲と Omotesando、東京
- 2016年2月27日 *Gymnasium* (Dir. Itsushi Kawase) 『文化人類学者が語り演じるアフリカン・ポップス！——エチオピア、カメルーン、ギニア、ジンバブエから』日本アフリカ学会中部支部20第2回例

会、下北沢Com. Cafe 音倉、東京

◎調査活動

・海外調査

2015年6月18日～6月23日—中華人民共和国（国際会議：The Anthropology of Northeast Asia: Flows and Groundings）での発表、映像人類学セミナーでの上映、講演、山東大学、済南）

2015年7月9日～7月13日—大韓民国（民博ビデオテーク制作プロジェクト、韓国国立民俗博物館、ソウル）

2015年10月1日～10月7日—台湾（台湾国際民族誌映画祭への参加と台湾の映像人類学研究動向調査、台北）

2015年10月13日～11月5日—エチオピア（科学研究費助成事業若手B・音楽職能集団に関する調査と映像記録、アジスアベバ）

2015年11月8日～11月11日—フランス（国際会議“Visual Ethnography: Tools, Archives and Research Methods”への参加、社会科学高等研究院、パリ）

2015年11月12日～11月16日—イギリス（大英図書館 world & traditional music アーカイブでの調査、ロンドン）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究『映像民族誌のナラティブの革新』代表、国立歴史民俗博物館共同研究『研究資源としての民俗研究映像の制作と活用に関する研究』（研究代表者：内田順子）共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

Scientific Committee, Last Focus Visual Studies Conference, “Visual Ethnography: Tools, Archives and Research Methods”への参加、社会科学高等研究院、パリ、日本ナイル・エチオピア学会第21回高島賞審査委員、一般社団法人 エチオピア・アートクラブ特別顧問

・非常勤講師

龍谷大学「多文化映像論B」（前期）

寺村裕史 [てらむら ひろふみ] ————— 助教

1977年生。【学歴】岡山大学文学部歴史文化学科（考古学履修コース）卒（2000）、岡山大学大学院文学研究科歴史文化学専攻修了（2002）、岡山大学大学院文化科学研究科人間社会文化学専攻修了（2005）【職歴】同志社大学文化情報学部実習助手（2005）、総合地球環境学研究所研究部プロジェクト研究員（2007）、国際日本文化研究センター研究部機関研究員（2011）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室特任准教授（2013）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2015）【学位】博士（文学）（岡山大学大学院 2005）、修士（文学）（岡山大学大学院 2002）【専攻・専門】情報考古学、文化情報学【所属学会】考古学研究会、地理情報システム学会、日本情報考古学会

【主要業績】

[単著]

寺村裕史

2014 『景観考古学の方法と実践』東京：同成社。

[論文]

寺村裕史

2009 「古墳のデジタル測量と空間データ処理——岡山市造山古墳のデジタル測量の成果から」『考古学研究』56(3)：92-101, 岡山：考古学研究会。

2006 「古墳築造場所の選択と眺望分析」宇野隆夫編著『実践 考古学 GIS ——先端技術で歴史空間を読む』pp.204-223, 東京：NTT出版。

【受賞歴】

2007年 日本情報考古学会優秀賞（日本情報考古学会）

【2015年度の活動報告】

・研究課題

墳墓からみたインダス文明期の社会景観

・研究の目的、内容

本研究は、インダス文明期の社会構造理解を深化するために、インダス文明期の墓に焦点を当て、その形状・立地場所や埋葬形態などを、GIS（地理情報システム）を分析に援用しながら当時の社会構造と関連付けて解明することを目的とする。2015年度は、主にインド・グジャラート州において、墓地遺跡であるダネッティ遺跡での地中レーダー（GPR）探査ならびに地形測量の実施や、昨年度に引き続いて、カーンメール遺跡での発掘調査も実施した。また、それらの調査と並行して、カッチ地方の周辺遺跡の踏査（GPSを用いた位置情報の取得）ならびに墓地遺跡に関連する資料収集も実施した。

・成果

ダネッティ遺跡では、乱掘により既に多数の墓が掘り返されている状況が確認された。地中レーダー（GPR）探査の結果については、現在分析途中ではあるが、直径約3メートルの円形の高まりの中央部分に異常応答がみられるなど、まだ掘り返されていない墓が存在する可能性が指摘できた。さらに、GPSを用いた地形測量によって、遺跡の全体的な地形および墓の分布状況を、詳細に記録することができた。

カーンメール遺跡の発掘調査においては、墓に関わるような遺構は検出できなかったが、城塞の南壁中央部において、城門（ゲート）と考えられる遺構が見つかった。従前の調査においてカーンメール遺跡の城門は見つかっておらず、今回の調査で城塞への出入り口と思われる遺構を検出できたことは、大きな成果である。

さらには、GPSを用いた遺跡踏査により、カッチ地方の遺跡分布図のデータに追加・修正を加え、より精緻な分布図を作成することが可能となった。また、墓地遺跡に関連する文献資料を収集するとともに、墓地遺跡データベースの作成にも着手することができた。

上記の成果は、次年度にEASAA2016で学会発表を予定しているほか、発掘調査概要報告書を作成し刊行する予定である。最終的には、この地域におけるインダス文明期の墓の立地、分布、埋葬形態の関係をGISを用いた分析によって明らかにし、当時の社会構造を解明理解するための、地域——埋葬統合モデルの構築につなげることを構想している。

なお、本研究は、科学研究費助成事業（一部基金）[基盤研究(B)・海外学術調査]、課題名：「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」（研究代表者：寺村裕史、2014-2016）の成果の一部である。

◎出版物による業績

[論文]

寺村裕史

2015 「古代シルクロード都市遺跡の比較研究——出土遺物のデジタルアーカイブ化を通して」『公益財団法人 三島海雲記念財団 研究報告書』2015(52)：127-130。

Watanabe, S. and H. Teramura

2016 3D Modelling of the Cuneiform Tablets and Bricks Possessed by the National Museum of Iran, In K. Maekawa (ed.) *Ancient Iran -New Perspectives from Archaeology and Cuneiform Studies, Ancient Text Studies in the National Museum of Iran. 2:* 173-179. Iran-Japan Project of Ancient Texts.

[その他]

寺村裕史

2015 「考古学ミステリーは情報工学で解けるか」『月刊みんぱく』39(11)：8-9。

2015 「世界遺産の街における文化財の保存と修復——ウズベキスタン・サマルカンド」『みんぱく e-news』167号。

2015 「みんぱく世界の旅 ウズベキスタン① 1000年以上前のパン焼きがま」『毎日小学生新聞』12月12日。

2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌②⑥ ウズベキスタンの『羊料理』」『京都新聞』12月16日。

2015 「みんぱく世界の旅 ウズベキスタン② 日本のうどんによく似た『ラグマン』」『毎日小学生新聞』12月19日。

2015 「みんぱく世界の旅 インド① インダス文明のめずらしい遺物」『毎日小学生新聞』12月26日。

2016 「みんぱく世界の旅 インド② デジタル化する発掘調査」『毎日小学生新聞』1月9日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年10月17日 「地理情報システム (GIS) を用いた時空間情報の統合の方法論とその意義」(情動的空間化 GIS 和 Database 的關係)、国立臺灣歴史博物館 国立民族学博物館「民族学與歴史學的交會」博物館交流工作坊、国立臺灣歴史博物館、台南、台湾

2016年2月12日 「What is “Information” in the field of Archaeology and the Scientific Study of Cultural Properties?」、国際ワークショップ『フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討』、国立民族学博物館

・民博研究懇談会

2015年6月17日 「考古学・文化財科学における“情報”とは何か」第266回民博研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年6月27日 「イラン国立博物館蔵の楔形粘土板文書およびブリックの3次元モデリング」第58回シュメール研究会、京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター、羽田記念館、京都

2015年10月3日 「フィールド調査データの公開・共有に際しての課題と展望」総合地球環境学研究所コアプロジェクトFS「オープンサイエンス時代の社会協働に基づく地球環境研究を支援する情報サービスの実現」第1回研究会、総合地球環境学研究所、京都

・みんぱくゼミナール

2015年11月21日 「シルクロードの古代都市遺跡と歴史空間」第450回みんぱくゼミナール

・展示

2015年 年末年始展示イベント「さる」、本館展示新構築「中央・北アジア」

・広報・社会連携活動

2015年10月15日 「焼けた壁と炭化物は何を語るのか?」10月度プレス懇談会・研究こぼれ話

2015年12月21日 地球研・知の跳躍インタビュー、総合地球環境学研究所

2016年3月18日 「3. プロジェクトメンバーにきく(2): 寺村裕史さん(プロジェクト研究員)」『大学共同利用機関法人人間文化研究機構機構長裁量経費「地球環境学のエビデンスに基づく具体的評価システム構築事業」「知の跳躍」プロジェクト報告書』pp.87-113、総合地球環境学研究所「知の跳躍」研究グループ

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年9月20日 「デジタル技術でモノ(文化資源)を測る」第397回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2015年9月25日～9月27日一宮城県柴田郡村田町(愛宕山古墳の三次元計測に関する調査)

・海外調査

2015年9月6日～9月17日一ウズベキスタン(シルクロード都市遺跡の発掘調査及び関連資料収集)

2015年10月16日～10月18日一台湾(国立台湾歴史博物館との協定調印式及びワークショップに参加)

2015年12月25日～12月31日一イラン(「イラン国立博物館所蔵粘土板文書の調査・研究」に関する現地資料調査)

2016年1月30日～2月8日一インド(「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」に関する現地調査及び資料収集)

2016年2月18日～2月29日一インド(「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」に関する現地調査及び資料収集)

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業(一部基金)(基盤研究(B)・海外学術調査)「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」研究代表者、科学研究費助成事業(基盤研究(A)・海外学術調査)「イラン国立博物館所蔵粘土板文書の調査・研究」(研究代表者:前川和也)研究分担者、科学研究費助成事業(基盤研究(B))「前方後円墳の三次元計測とそれにもとづく設計原理の検討」(研究代表者:新納泉)研究分担者、総合地球環境学研究所コアプロジェクトFS「オープンサイエンス時代の社会協働に基づく地球環境研究を支援する情報サービスの実現」(代表者:近藤康久)共同研究者

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

奈良大学文学部文化財学科「文化財情報学Ⅱ」

国際学術交流室

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ]————— 室長 兼：副館長(研究・国際交流担当)、研究戦略センター教授

印東道子 [いんとう みちこ]————— 兼：民族社会研究部教授

韓 敏 [ハン ミン]————— 兼：民族社会研究部教授

齋藤 晃 [さいとう あきら]————— 兼：先端人類学研究部教授

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]————— 兼：民族社会研究部教授

菊澤律子 [きくさわ りつこ]————— 兼：先端人類学研究部准教授

山中由里子 [やまなか ゆりこ]————— 兼：民族文化研究部准教授

梅棹資料室

吉田憲司 [よした けんじ]————— 室長 兼：副館長(企画調整担当)、文化資源研究センター教授

機関研究員

金田純平 [かねだ じゅんぺい]————— 研究員

1977年生。【学歴】関西学院大学総合政策学部総合政策学科卒業(2000)、神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション学専攻博士前期課程修了(2005)、神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション科学専攻博士後期課程修了(2008)【職歴】しんきん大阪システムサービス株式会社(2000-2003)、日本学術振興会特別研究員(DC2)(2006-2008)、神戸大学大学院国際文化学研究科特命助教(2008-2010)、株式会社国際電気通信基礎技術研究所専任研究員(2010-2011)、ATR Learning Technology 株式会社(2010-2011)、関西大学文学部特別任用准教授(2010-2012)、関西大学教育推進部特別任用准教授(2012-2013)、国立民族学博物館機関研究員(2013)【学位】博士(学術)(神戸大学大学院総合人間科学研究科 2008)、修士(学術)(神戸大学大学院総合人間科学研究科 2005)【専攻・専門】話し言葉における文法と音声および非言語行動の対照研究、人文研究および教育に関するコンピュータシステムのユーザーインタフェース研究【所属学会】情報処理学会、日本語教育学会、日本音声学会、日本語文法学会、ヨーロッパ日本語教師会

【主要業績】

[共著]

定延利之・森 篤嗣・茂木俊伸・金田純平

2012 『私たちの日本語』東京：朝倉書店。

[論文]

金田純平

- 2015 「文末の感動詞・間投詞——感動詞・間投詞の対照を視野に入れて」友定賢治編『感動詞の言語学』pp.28-59, 東京:ひつじ書房。
- 2014 「日本語教師によるビデオ教材の作成と共有のすすめ——企画・制作・公開・コミュニケーション」『日本語音声コミュニケーション』2:28-59, 日本語音声コミュニケーション研究会。

【受賞歴】

2013 日本音声学会学術研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 博物館展示情報システムのユーザビリティの研究
- 2) 笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較

・研究の目的、内容

- 1) 来館者が直接利用する博物館展示情報システムについて、その利用状況やログの解析による数理・統計的手法に加え、人文・社会科学的手法である参与観察・行動観察による定性分析を通じて、そのシステムのユーザビリティ（使いやすさ）における問題点を明らかにし、根拠に基づいた改善案を提示することでユーザビリティの向上につなげる。また、スマートフォンを使った電子ガイドの運用に向けた実験を実施し、今後の電子ガイドのあり方について調査と検証を行う。
- 2) 日本語における体験談（語り・ナラティブ）について、その展開においてどのような方法がとられているのか、また、どのような特徴がみられるのかについて、東北地方と関西地方を中心に比較を行う。

・成果

- 1) ビデオテークの利用ログからの利用状況を洗い出し、ユーザーインターフェースの改善策について検討を行った。また、他のビデオライブラリーを訪問して、利用方式や端末のユーザーインターフェース、什器類の形状について調査を行い、次世代のビデオテークに相応しい仕組みの検討を行った。
昨年度に続いて、次世代電子ガイドの開発にむけて、展示場の特定の位置にBluetoothの発信機（ビーコン）を設置し、展示物に接近するだけで電子ガイドの映像が取捨選択される仕組みを実験的に導入し、実用化に向けた試験を実施し、動作及び使い勝手について調査を行い、検証した。
- 2) 関西地方の話者について既存の会話データに基づいた調査を行い、会話の型として、直接引用の部分において声の高さや声質を変えることにより、その話者の真似を行おうとしていることが分かった。また、それは、その話者本人の真似をするのではなく、話者の人物像に基づいて声の高さや声質を変えていた。また、ナラティブの構造について、東北地方の話者は、出来事を語るときに、時系列に沿って何が起きたかどうかにあつてのみ話し、最後に感想を述べたりまとめたりするという流れで話すことが分かった。これに対し関西地方の話者は、出来事を語るときに、場面ごとに遭遇した出来事について小オチや感想をつけるように話していた。

◎出版物による業績

[論文]

金田純平

2015 「マルチメディアからみた日本語とキャラ」日本語文法学会第16回大会予稿集, pp.49-53。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年11月15日 「マルチメディアからみた日本語とキャラ」日本語文法学会第16回大会

・展示

文化資源プロジェクト2015年度年末年始展示イベント「さる」プロジェクトメンバー

◎調査活動

・国内調査

2015年10月24日～10月25日—青森県弘前市（日本語ナラティブの調査）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

神戸大学大学院国際文化学研究科「アカデミックライティング・日本語」「文化情報リテラシー専門演習」、関西大学大学院文学研究科「日本文献情報処理研究A・B」、関西大学文学部「日本語学1 A・B」、関西大学人間健康学部「スタディスキル・ゼミ」「導入演習」、兵庫医科大学「医学概論入門」

末森 薫 [すえもり かおる]————— 研究員

1980年生。【学歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒業（2004）、筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻修了（2006）、筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻単位取得満期退学（2009）【職歴】東京文化財研究所客員研究員（2009-2010）、国際協力機構専門家（2010-2014）【学位】修士（学術）（筑波大学大学院 2006）【専攻・専門】文化財保存科学、中国仏教美術史、文化遺産学【所属学会】文化財保存修復学会、日本中国考古学会、日本文化財科学科、東アジア文化遺産保存学会、国際文化財保存学会（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）

【主要業績】

[共著]

麦積山石窟芸術研究所・筑波大学世界遺産専攻編

2011 『麦積山石窟環境と保護調査報告書』北京：文物出版社。

[論文]

末森 薫

2009 「天水麦積山石窟の東崖面の復元的考察」『中国考古学』9：111-131。

2016 「大エジプト博物館保存修復センターへの技術支援プロジェクト」『文化財保存修復学会誌（古文化財之科学）』59：37-47。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国立民族学博物館における文化資源の保存・管理システムの構築に関わる実証的研究

・研究の目的、内容

本研究では、国立民族学博物館に展示・收藏される30万点以上の資料を安定的かつ長期的に保存・活用するための恒常的な管理システムを構築することを目的に、システム構築に係る基礎実験や各種の分析機器（ガスクロマトグラフ質量分析計（GC/MS）、フーリエ変換赤外分光光度計（FR-IR）、蛍光X線分析装置（XRF）、分光測定器等）を用いた分析調査により、資料の保存・管理に関する実証的な検証を行う。2015年度は、主に下記4点について、調査・研究を実施した。

- 1) 博物館照明としての発光ダイオード（LED）光源の光学特性に関する調査
- 2) 光学調査法を用いた資料点検システムの開発に係る検証実験
- 3) 各種分析機器を用いた博物館資料等の材質調査
- 4) カナダにおける博物館資料保存・管理に関する実践的研究活動の動向調査

・成果

- 1) 国立民族学博物館の展示場照明をハロゲン光源からLED光源に変更するにあたり、高演色性を備えるLED光源の情報を収集するとともに、2015年夏時点で入手可能な高演色性のLED光源について、光学特性の測定や照明下での「もの」の見え方の確認等の検証実験を行った。本研究の成果により、国立民族学博物館に導入するLED照明の仕様が策定されるとともに、『国立民族学博物館研究報告』40(4)に掲載された。
- 2) 近紫外・可視光・近赤外領域の狭域帯LED光源および各種の光学フィルターを用いた光学撮影法を用いて、博物館資料や絵画資料の調査を行った。本手法が、彩色を伴う資料のマルチスペクトルイメージングや油や微生物等付着物の発見に応用できることを確認した。本研究の成果の一部を、2015年6月の文化財保存修復学会第37回大会、同8月の2015東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良にて発表した。
- 3) 国立民族学博物館が所有する各分析機器を用いて、資料や資料收藏に用いる資材、資料に付着した未知物質等の材質分析を行い、物性の同定や推定を行った。本研究の成果の一部を、2015年7月に開催された日本文

化財科学会第32回大会にて発表した。

- 4) 文化資源研究センターの事業として、カナダのビクトリア、バンクーバー、オタワ、トロントにある博物館6館と Canadian Conservation Institute (CCI) にて、有害生物対策や環境管理、合成素材の使用など、博物館資料保存・管理に関する研究および実践的な活動について動向を調査した。本調査を通じて、収蔵・展示環境のコントロール、光源によるものへの影響実験、合成素材の劣化への対応、CD等記録媒体の保存、小中規模の博物館の収蔵庫改善など、日本の博物館と共通する資料保存の課題が提示された。本調査の成果を、文化財保存修復学会第38回大会（2016年6月）にて発表する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

園田直子・日高真吾・末森 薫・奥村泰之・河村友佳子・橋本沙知・和高智美

2016 「博物館におけるLED照明の現状——2015年夏 国立民族学博物館展示場での実験データから」『国立民族学博物館研究報告』40(4):513-545。[査読有]

末森 薫

2016 「大エジプト博物館保存修復センターへの技術支援プロジェクト」『文化財保存修復学会誌（古文化財之科学）』59:37-47。

[その他]

末森 薫

2015 「敦煌莫高窟北朝期窟の造営の展開に関する一考察——千仏図像の描写法の変遷を中心として」『日本中国考古学会2015年度大会・予稿集』。

2015 「十日町市古文書整理ボランティア活動記録誌刊行記念講演会 参加記」末森 薫『文化財保存修復学会通信』150:10-11。

2015 「敦煌莫高窟の日々」『月刊みんぱく』39(7):10-11

2015 「旅・いろいろ地球人 驚く⑤ にぎわいの仏国土」『毎日新聞』4月16日夕刊。

末森 薫・八木春生・松井敏也・馬千・董広強・岳永強

2015 「近紫外光・可視光線狭帯域光源を用いた天水麦積山石窟壁画片の調査」『2015東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良 研究発表要旨集』pp.128-129。

2015 「中国天水・麦積山石窟壁画片の彩色材料に関する非破壊分析調査」『日本文化財科学会第32回大会 研究発表要旨集』pp.200-201。

岳永強・王通玲・馬千・董広強・松井敏也・末森 薫

2015 「锚杆技術在天水麦積山石窟壁画保护修复中的应用（アンカー技術を応用した天水麦積山石窟壁画の保存修復）」『2015東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良 研究発表要旨集』pp.124-125。

末森 薫・園田直子・日高真吾・高鳥浩介・吉田直人・川越和四・和高智美・河村友佳子・橋本沙知

2015 「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法——カビに由来する蛍光反応可視化を事例として」『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.104-105。

園田直子・日高真吾・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明・和高智美・河村友佳子・橋本沙知

2015 「国立民族学博物館に新設した多機能保管庫の運用事例——大型民俗資料の保管を目指して」『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.94-95。

日高真吾・園田直子・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・川越和四

2015 「国立民族学博物館における大規模な殺虫処理」『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.96-97。

日高真吾・園田直子・末森 薫・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・多田隈卓司・左治木悠子・川越和四・福田 尚・小谷竜介・幡野寛治

2015 「東日本大震災の被災文化財の一時保管場所の環境改善——気仙沼市旧月立中学校の事例から」『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.32-33。

Hidaka, S., K. Suemori, Y. Masada, H. Tokuda, Z. Eissa, B. Mohamed, A. Shabaan

2015 'Collection Management of Egyptian Artifacts: Transferring means of collection care into Grand Egyptian Museum - the new house of Tutankhamun collection.' 1st International Tutankhamun GEM Conference: Moving and Displaying. Grand Egyptian Museum, Cairo, Egypt.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月11日 ‘Collection Management of Egyptian Artifacts: Transferring means of collection care into Grand Egyptian Museum - the new house of Tutankhamun collection.’ 1st International Tutankhamun GEM Conference: Moving and Displaying. National Museum of Egyptian Civilization, Cairo, Egypt

2015年6月28日～6月29日 「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法——カビに由来する蛍光反応可視化を事例として」文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都

2015年7月11日～7月12日 「中国天水・麦積山石窟壁画片の彩色材料に関する非破壊分析調査」日本文化財科学会第32回大会、東京学芸大学、東京

2015年8月27日～8月28日 「近紫外光・可視光線狭帯域光源を用いた天水麦積山石窟壁画片の調査」2015東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良、奈良県新公会堂、奈良

2015年8月31日 「敦煌莫高窟早期窟千仏図像の規則性および機能」中国仏教美術考古セミナー2015「敦煌莫高窟美術史研究の現在」成城大学、東京

2015年12月19日～12月20日 「敦煌莫高窟北朝期窟の造営の展開に関する一考察——千仏図像の描写法の変遷を中心として」日本中国考古学会2015年度大会、成城大学、東京

・展示

文化資源プロジェクト2015年度年末年始展示イベント「さる」プロジェクトメンバー

・広報・社会連携活動

2015年8月22日 「古代エジプト文明とイスラム社会～アラブの春が過ぎて」芦屋市公民館講座「世界はニュースだけではわからない」芦屋市民センター、兵庫

2015年10月16日 「エジプト博物館事情と技法・材料から見る古代エジプト」NHK 公開講演会「クレオパトラとエジプトの王妃展」芦屋市民センター芦屋ルナ・ホール、兵庫

2015年10月23日 「エジプト博物館事情と技法・材料から見る古代エジプト」NHK 公開講演会「クレオパトラとエジプトの王妃展」大東市立生涯学習センターアクロス、大阪

2015年10月27日 「エジプト博物館事情と技法・材料から見る古代エジプト」NHK 公開講演会「クレオパトラとエジプトの王妃展」千里公民館、大阪

2015年11月9日 「エジプト博物館事情と技法・材料から見る古代エジプト」NHK 公開講演会「クレオパトラとエジプトの王妃展」高槻市生涯学習センター、大阪

◎調査活動

・海外調査

2015年5月5日～5月15日—エジプト（大エジプト博物館主催「第一回ツタンカーメンカンファレンス」での発表）

2015年5月27日～6月8日—カナダ（カナダにおける博物館資料保存・管理に関する実践的研究活動の動向調査）

2015年10月28日～11月8日—中国（河西回廊沿い（敦煌、蘭州、天水、西安）の文化遺産に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）「中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考——麦積山石窟を事例として」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)(一般)）「セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への影響」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)(一般)）「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（研究代表者：日高真吾）研究分担者、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる事前調査」（研究代表者：日高真吾）研究メンバー、国立民族学博物館共同研究若手「高等教育機関を対象とした博物館資料の活用に関する研究」（研究代表者：呉屋淳子）研究メンバー

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

国際基督教大学「Introduction to Cultural Heritage」講師

- ・他の機関から委嘱された委員など

文化財保存修復学会第37回大会実行委員、国際協力機構大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト専門家

戸田美佳子 [とだ みかこ] ————— 研究員

1983年生。【学歴】神戸大学理学部物理学科卒（2006）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科五年一貫制博士課程満期認定退学（2011）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（2008）、京都大学アフリカ地域研究資料センター特任研究員（産官学連携）（2011）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2012）、成安造形大学非常勤講師（2014）、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員（2015）【学位】修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2013）【専攻・専門】生態人類学、アフリカ地域研究（中部アフリカ）【所属学会】日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際開発学会、障害学会

【主要業績】

[単著]

戸田美佳子

2015 『越境する障害者——アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』東京：明石書店。

[論文]

戸田美佳子

2016 「国境をまたぐ障害者——コンゴ川の障害者ビジネスと国家」森壯也編『アフリカの「障害と開発」——SDGsに向けて』（研究双書No.622）pp.153-193, 千葉：日本貿易振興機構アジア経済研究所。

2014 Peoples and Social Organizations in Gribé, Southeastern Cameroon. *African Study Monographs Supplementary Issue* 49: 139-168. Kyoto: Research Committee for African Area Studies.

【受賞歴】

2016 生存学奨励賞「審査員特別賞」

【2015年の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) アフリカにおける障害者の生活基盤に関する地域研究
- 2) アフリカ熱帯雨林における森林資源の利用と住民組織に関する実践的研究

・研究の目的、内容

1) 本研究の目的は、アフリカにおける障害者の生活基盤を明らかにすることである。アフリカに暮らす障害者の生活様式は、彼らが暮らす生態環境に加えて、イスラーム教とキリスト教が広がってきた歴史的プロセスを通じて変化している。そこで本研究では、アフリカの中部（カメルーンおよびコンゴ共和国、コンゴ民主共和国）と西部（セネガル）において（1）障害者の生計調査と（2）ライフヒストリー調査から、障害者の生業に関する資源マッピングを作成し、障害者のライフコースをとおした地域史を再編することに取り組む。これらの事例研究の積み重ねによって、アフリカの障害者の生活圏を浮き彫りにすることを目指す。調査は、科学研究費助成事業（若手研究（B））「アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究」（研究代表者：戸田美佳子）により実施する。

2) 果実や葉、樹皮、野生動物などの非木材森林産物（Non-Timber Forest Products, NTFPs）が近年、木材伐採に替わる森林資源の持続的利用法として森林保全の文脈で注目を集めている。とくに非木材森林産物は、カカオなどの商品作物を栽培していない狩猟採集民や農耕民女性にとって現金稼得の重要な機会となっており、地域住民の生活向上を目指す上でも期待が高まっている。本研究は、カメルーン熱帯雨林地域における非木材森林資源の利用に関する住民参加型の現地共同研究に参加しながら、住民の社会関係と在来の住民組織の働きから、森林資源の持続的利用を可能にする社会システムの構築を目指すことを目的としている。調査は、主に JST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力事業（SATREPS）プロジェクト「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」（研究代表

者：荒木茂）により実施する。

・成果

1) 今年度は9月7日から9月11日にかけてウィーン大学で開催された第11回国際狩猟採取民会議（CHAGS 11）に参加し、カメルーン共和国熱帯雨林地域に暮らすピグミー系狩猟採取民の身体障害者に関する研究成果を「People with Disabilities Crossing the Boundary between Hunter Gatherer and Agricultural Societies」という題で口頭発表をおこなった。そのほかに、9月26日に国立民族学博物館で開催した国際シンポジウムでの研究発表、京都大学や日本貿易振興機構（JETRO）での研究講演、さらには国内学会や研究集会での研究報告など、研究成果の発信に力を注いだ。また2016年2月17日から3月5日までの18日間、コンゴ共和国のブラザヴィル市において、コンゴ川をまたいだ障害者の国境ビジネスに関する現地調査をおこなった。本調査では特に、2014年にブラザヴィル市警察当局が実施した治安維持のためのオペレーションによって河港で引き起こった変化に着目し、国家の統制や規制の強化が障害者の生計活動や社会関係に与えた影響について、2014年11月に実施した現地調査や現地メディアなどの資料を比較しながら検討しなおしている。これらの成果の一部を、論文「国境をまたぐ障害者——コンゴ川の障害者ビジネスと国家」にまとめ、森壮也編『アフリカの『障害と開発』——SDGsに向けて』日本貿易振興機構アジア経済研究所（研究双書No.622）に上梓した。

2) 非木材森林産物（NTFPs）の持続的利用のためには、資源採取をめぐる過度な競争をさけるとともに、NTFPsから得られる収入が適正であることが肝要である。そのため、効率的な売買にむけた住民の組織化が求められてきた。今年度は2015年8月1日から9月3日までの34日間、カメルーン東部熱帯雨林地域において、森林資源の利用と住民組織に関する現地調査をおこなった。その結果、これまでのプロジェクトでは村内での保存法や加工法に着目し住民組織に働きかけをおこなうことが多かったが、森林内で採集活動を担う狩猟採取民には利益が行き渡らず、そうした取り組みだけでは住民間の対立関係が深まるリスクを回避できないことがわかった。売買にかかわるアクター間に生じている労働等のコスト差に配慮した適切な利益配分システムが必要であると考えられる。その点を踏まえ、2015年11月11、12日にカメルーン共和国・ヤウンデ市で開催された国際シンポジウム『森林地域および森林・サバンナ境界地域における森林と農地の統合マネジメント：保全と開発に向けた分野横断的アプローチ』（Integrating Forest and Farm Management at Forest and Forest/Savanna Margins: Cross-Sectorial Approach to Conservation and Development）に参加し、農耕民と狩猟採取民の関係に注目しながら非木材資源の持続的利用した住民組織の働きに関する研究成果を口頭発表した。国際シンポジウムではプロジェクトサイトに暮らす住民を招待し、当該国の共同研究者と現地住民、そして日本人研究者が今後の取り組みについて意見を交換した。

◎出版物による業績

[論文]

戸田美佳子

2016 「国境をまたぐ障害者——コンゴ川の障害者ビジネスと国家」森壮也編『アフリカの「障害と開発」——SDGsに向けて』（研究双書No.622）pp.153-193, 千葉：日本貿易振興機構アジア経済研究所。

[査読有]

Olivero, J., J. E. Fa, M. A. Farfán, J. Lewis, B. Hewlett, T. Breuer, G. M. Carpaneto, M. Fernandez, F. Germi, S. Hattori, A. Noss, D. O. Ekoumou, P. Paulin, R. Real, M. Riddell, E. G. J. Stevenson, M. Toda, J. M. Vargas, H. Yasuoka, R. Nasi.

2016 Distribution and Numbers of Pygmies in Central African Forests. *PLoS ONE 11 (1)*. [査読有]

[その他]

戸田美佳子

2015 「『商売の王さま』と呼ばれる障害者集団——コンゴ川の国境ビジネスの展開」『SYNODOS』。(http://synodos.jp/international/15684) 12月8日。

2015 「アフリカの障害者を研究すること」『アフリカ Now』104：6-9, 12月31日。

2016 「人間学のキーワード ケア」『月刊みんぱく』40(1)：20。

2016 「ムスリムとクリスチャンが集うカメルーンの名物屋台」『みんぱく e-news』177号、3月1日。(http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/177)

Toda, M.

2015 Systematization of NTFPs and Inter-ethnic Relationships among the Baka hunter-gathers and Bantu farmers. *ORAL PAPERS of FOSAS International Symposium*, pp.339-358.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年9月26日 「Disability and the Life Course among the Hunter-gatherers and Agriculturalists living in Cameroon.’ International Symposium “How Do Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape?” National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月24日 「国境をまたぐ障害者——コンゴ川における障害者の国境ビジネスの展開」日本アフリカ学会第52回学術大会、犬山国際観光センター・フロイデ、愛知

2015年6月7日 「アフリカにおける障害者とビジネス——コンゴ川の国境貿易を例に」セッション『アフリカの障害と開発』（代表：アジア経済研究所・森壮也）国際開発学会第16回春季大会、法政大学、東京

2015年9月8日 「People with Disabilities Crossing the Boundary between Hunter Gatherer and Agricultural Societies.’ 11th International Conference on Hunting and Gathering Societies (CHaGS 11), Session: “Hunter-gatherer Affluence: Social and Material Perspectives.” University of Vienna, Vienna

2015年10月16日 「障害者をととしてアフリカ社会を紐解く——カメルーン共和国を事例に」第9回アフリカ研究自主セミナー、関西大学千里山キャンパス、大阪

2015年11月12日 「Systematization of NTFPs and Inter-ethnic Relationships among the Baka hunter-gatherers and Bantu farmers.’ Forest-Savanna Sustainability Project Cameroon (FOSAS) International Symposium “Integrating Forest and Farm Management at Forest and Forest/Savanna Margins: Cross-Sectorial Approach to Conservation and Development.” Hotel MONT FÉBÉ, Yaoundé Cameroon

2016年1月15日 「アフリカ熱帯林に暮らす障害者の社会性」京都人類学研究会（2015年度1月例会）、京都大学、京都

・研究講演

2015年6月18日 「越境する障害者——アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌」第211回地域研究会・2014年度総長裁量経費（若手研究者に係る出版助成事業）・アフリカ研究出版助成記念講演、京都大学、京都

2015年7月23日 「コンゴ川における『障害と開発』」2015年アジア経済研究所夏期公開講座「アフリカにおける『障害と開発』、日本貿易振興機構（JETRO）本部、東京

2016年2月11日 「アフリカ熱帯林における身体と資源利用——障害者の生態人類学的理解に着目して」第16回教育・学習の人類学セミナー『『障害者』の立場から教育・学習の基盤を再考する——日本とアフリカの文化的・生態学的フィールドワークの実践から』、京都大学、京都

・展示

2015年度文化資源計画事業 年末年始展示イベント「さる」展示監修、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2015年6月21日 音楽の祭日 実行委員会メンバー、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2015年7月31日～9月13日—カメルーン、フランス、オーストリア（カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理に関する現地調査及び「第11回国際狩猟採集社会会議」に参加・発表）

2015年11月8日～11月16日—カメルーン共和国（国際シンポジウム『森林地域および森林・サバンナ境界地域における森林と農地の統合マネジメント：保全と開発に向けた分野横断的アプローチ』に参加・発表）

2016年2月15日～3月7日—コンゴ共和国（アフリカにおける障害者の人類学的研究に関する現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（若手研究(B)）「アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究」研究代表者、科学研究費

助成事業（挑戦的萌芽研究）「Participatory mapping を利用した熱帯雨林の持続的利用システム」（研究代表者：京都大学・市川光雄）研究協力者、JST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」（研究代表者：京都大学・荒木茂）研究協力者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

障害学会第7期理事、京都中部アフリカ研究会庶務、NPO 法人アフリックアフリカ事務局

・非常勤講師

成安造形大学「文化人類学」（集中講義）、九州大学大学院芸術工学研究院「インクルーシブデザイン」ゲスト講師（2016年1月21日）、放送大学学園テレビ科目「人類文化の現在：人類学研究（'16）」第7回「ケアという文化の生成」ゲスト講師

永田貴聖 [ながた あつまさ] ————— 研究員

1974年生。【学歴】京都学園大学法学部法学科卒業（1997）、立命館大学大学院文学研究科史学専攻地域文化領域博士前期課程修了（2004）、立命館大学大学院先端総合学術研究科先端総合学術専攻共生領域博士課程修了（2008）【職歴】立命館大学第一号助手（2005-2006）、日本学術振興会特別研究員DC・立命館大学（2007-2008）、日本学術振興会PD・京都大学（2008-2009）、立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー・GCOE 生存学担当（2009-2010）、立命館大学先端総合学術研究科研究指導助手（2010-2012）、立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員（2012-2015）、京都学園大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員（2015）【学位】博士（学術）（立命館大学大学院、2008）【専攻・専門】文化人類学・移民研究（日本・韓国におけるフィリピン人移民の社会関係とネットワークに関する研究）【所属学会】日本文化人類学会、日本移民学会、社会学研究会

【主要業績】

[著書]

永田貴聖

2011 『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』京都：ナカニシヤ出版

[論文]

永田貴聖

2016 「日本・韓国のフィリピン人たちによる複数の国家・国民とかかわる実践」黒木雅子・李恩子編『「国家」を超えるとは——民族・ジェンダー・宗教』pp.151-199, 東京：新幹社。

2016 「『韓国』を消費するだけではない日本人の存在——政治的な日韓関係を超える関係についての試論」『生存学』9：94-107, 東京：生活書院。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本・韓国におけるフィリピン人移民の社会関係とネットワークに関する研究

・研究目的・内容

本研究の目的は、世界有数の移民・移住労働者送り出し国であるフィリピンから移動してきた人びとが形成する社会関係、中でも結婚による女性の移住が多い東アジア（本研究では日本と韓国）に注目し、1) フィリピン人移住者がカトリック教会などを拠点として、自助・同国人グループを組織し、フィリピン人同士の関係を形成していること、2) フィリピン人同士の関係を媒介にして、日本人や他国出身の移住者たちとも強いつながりを構築すること、3) 「フィリピン」が共通項となる空間を一時的につくりだし、そこに集まるさまざまな人びとと関係することを明らかにすることである。

・成果

2015年度は、主に、2012年～2015年3月の期間、断続的にフィールド調査を実施してきた韓国首都圏ソウル特別市ならびにその周辺地域に居住するフィリピン人結婚移民、移住労働者たちが中心となり週末などに限定して、集まる場所について民族誌学的な分析を試みてきた。この場所が、フィリピン人だけの社会空間ではなく、「フィリピン」を共通項とする、多様な人びとが帰属意識を問わずに集まる「フィリピン」を強調する「ア

フィニティ空間 (Affinity Space)』として成立していることを解釈した。この検討に基づき、The European Association for Southeast Asian Studies (EuroSEAS) 8th conferenceにおいて研究報告を実施した。その成果の一部は、日本在住フィリピン人との活動比較として関西社会学会においても報告し、その内容をもとに論文「日本・韓国のフィリピン人たちによる複数の国家・国民とかかわる実践」を刊行した。

今後の課題は、日本におけるフィリピン人の最新の動きを把握し、日本と韓国の比較を試みることである。日本では、フィリピン人移住者は在日コリアンを中心としつつ、他国出身の移住者たちとつながりをつくろうとしている。

◎出版物による業績

[論文]

永田貴聖

2016 「日本・韓国のフィリピン人たちによる複数の国家・国民とかかわる実践」黒木雅子・李恩子編『「国家」を超えるとは——民族・ジェンダー・宗教』pp.151-199, 東京：新幹社。

2016 「『韓国』を消費するだけではない日本人の存在——政治的な日韓関係を超越する関係についての試論」『生存学』9：94-107, 東京：生活書院。

[その他]

永田貴聖

2015 「旅・いろいろ地球人 踊る⑦ フィリピンの曲？」『毎日新聞』6月25日夕刊。

2015 「アドボ〜フィリピンの歴史がつまった料理」『月刊みんぱく』39(10)：14-15。

2015 「イロイロ——ぬくもりの記憶」『社会科NAVI』2015(11)：16-17, 日本文教出版。

2016 書評 三浦綾希子著「ニューカマーの子どもと移民コミュニティ——第二世代のエスニックアイデンティティ」『移民研究年報』22：90-93。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月24日 「在日フィリピン人コミュニティを中心とする関係の広がり——京都市に注目して」関西社会学会第66回大会、立命館大学衣笠キャンパス、京都

2015年8月12日 ‘Spaces in Consociation of Filipino Migrants in Seoul of Korea.’ The European Association for Southeast Asian Studies (EuroSEAS) 8th conference, University of Vienna, Austria.

2016年1月23日 「フィリピン人移住者とは——京都のフィリピン人」京都YWCA 2016年研修、京都YWCA、京都

・広報・社会連携活動

2015年12月12日 「映画解説 イロイロ ぬくもりの記憶 (爸媽不在家 ILO ILO)」みんぱく映画会／第31回みんぱくワールドシネマ

◎調査活動

・海外調査

2015年8月10日～8月22日—オーストリア (ヨーロッパ東南アジア学会国際会議に参加、報告及びオーストリア・サイエンス・アカデミー、ヴィエナ大学において文化人類学、民族学海外研究動向調査)

2016年3月14日～3月24日—フィリピン共和国 (フィリピンにおける韓国地域研究と動向に関する海外研究動向調査)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

立命館大学生存学研究センター若手研究者研究協力型プロジェクト・現代社会エスノグラフィ研究会、課題「現代社会におけるエスノグラフィ方法論——『生の技法』記述への探求」(代表、小川さやか准教授) 客員協力研究員・実務担当、2015年日本移民学会ワークショップ「マイノリティ混住地域における『多文化社会』のいま」コーディネーター

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

京都学園大学「質的社会調査法」、立命館大学「プロジェクト・スタディ」、神戸市外国語大学「社会調査分析1」、龍谷大学「人権論」、京都外国語大学「現代アジア地域事情」

浜田明範 [はまだ あきのり] 研究員

1981年生。【学歴】千葉大学文学部行動科学科卒業（2003）、千葉大学大学院文学研究科人文科学専攻修士課程修了（2005）、一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻単位取得（2010）【職歴】産業能率大学兼任教員（2008）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2010）、江戸川大学非常勤講師（2011）、国立民族学博物館機関研究員（2013）、高知大学非常勤講師（2013）、立命館大学客員協力研究員（2013）【学位】博士（社会学）（一橋大学社会学研究科2012）、修士（文学）（千葉大学文学研究科2005）【専攻・専門】医療人類学・アフリカ地域研究（西アフリカにおける生物医療と生政治の展開に関する研究）【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences、American Anthropological Association

【主要業績】

[単著]

浜田明範

2015 『薬剤と健康保険の人類学——ガーナ南部における生物医療をめぐる』東京：風響社。

[論文]

浜田明範

2015 「書き換えの干渉——文脈作成としての政策、適応、ミステリ」『一橋社会科学』7（別冊）：125-150。

2010 「医療費の支払いにおける相互扶助——ガーナ南部における健康保険の受容をめぐる」『文化人類学』75(3)：371-394。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

西アフリカにおける生権力の複数性に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、ガーナ南部における生物医療の展開に注目することにより、生物医療が、(1)どのように異なる立場の人々の行為を統制しながら全体的な目標を達成しようとしているのか、(2)どのようなモノ・行為・制度の配置によって人々の自己統治を促しているのか、(3)どのように「生かすべき者」と「死ぬに任せる者」を結果的に選別しているのか、の三点について明らかにすることにある。

・成果

2015年度は、(1)アフリカの生物医療に関する国際シンポジウム“*How Do Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape?*”を本館准教授の松尾瑞穂とともに共催するとともに、(2)ガーナ南部の農村地帯におけるオンコセルカ対策プログラムに関する現地調査を実施した。

国際シンポでは、オスロ大学からウェンゼル・ガイスラー教授とルース・プリンス准教授を招聘したほか、国内から10名の研究者を招き、サハラ砂漠以南アフリカにおいて、生物医療が人々の生活、社会性、景観をどのように変容させているのかを各地からの事例に基づいて検討した。その結果、アフリカにおける生物医療について考える際に、複数の時間性や空間性について検討することの有効性が明らかになった。

現地調査とそれを通じた思索の具体的な成果としては、以下の諸点が明らかになった。(1)従来の薬剤の人類学では、薬剤の入手可能な地域の空間的な広がりには焦点が当たっていたが、とりわけ医療従事者による実践においては、むしろ薬剤摂取のタイミングを整理することに焦点が当たっている、(2)薬剤摂取のタイミングは、病気と薬剤、それに人間の身体の関係性の特性に由来しており、病気や薬剤の種類によって、摂取の間隔や許容されるタイミングのズレが大きく異なる（例えば、結核対策は一日毎に厳密に摂取することが求められるが、オンコセルカ対策では半年に一度の摂取でよく、ときに数か月のずれが許容される）、(3)オンコセルカ対策は、半年から一年に一度の摂取が求められるという例外的に長い周期性を持っており、また、摂取のタイミングは純粋に医学的な論理だけでなく、人々の生活に関する民族誌的な知識に基づいても決定されている、(4)人々の生活環境のリスク評価に応じて地域単位で実行されるオンコセルカ対策においては、個人単位ではなく特定の地域の全住民に薬剤を摂取することが求められる、(5)薬剤の集団投与の際には、薬剤の摂取者と拒否者のリストが作成されるが、そこでは症状や副作用についての記録も取られている。このことは、薬剤の人口に対する集団投与が、感染症の治療であると同時に予防であると同時に、調査研究ともなっていることを意味している。

これらの成果については、2016年度に研究論文として発表する予定である。

◎出版物による業績

[訳書]

大杉高司・浜田明範・田口陽子・丹羽 充・里見龍樹

2015 『部分的つながり』マリリン・ストラザーン著, 東京:水声社。

[その他]

浜田明範

2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑮ ガーナのネズミ」『京都新聞』9月9日。

2015 「再分配論の再始動:理論、制度、行為」『民博通信』150:20-21。

2015 「書評 顧みられない熱帯病と国際協力:ブルーリ潰瘍支援における小規模NGOのアプローチ」『アフリカ研究』88:53-55。

2015 「ソフィア・京都新聞文化会議 大村さんのノーベル賞の意味」『京都新聞』12月11日。

2016 「グローバルヘルス」『月刊みんぱく』40(3):20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国立民族学博物館主催のシンポジウムでの報告

2015年9月27日 ‘Interference in a Milieu: On Multiple Governments of Multiple Actors around Tuberculosis Treatment Projects in Southern Ghana.’ International Symposium “How Do Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape?” National Museum of Ethnology, Japan.

・共同研究会での報告

2015年5月9日 「アフリカでの生活用品試行調査」『生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究』国立民族学博物館

2015年6月6日 「なぜ世帯という単位は機能しなかったのか——家族を要請しない社会を考える」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化/脱制度化を中心に』国立民族学博物館

2015年10月18日 「妖術による媒介:ガーナ南部における王権闘争をめぐる」『呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に注目して』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月31日 「再分配研究の再始動:行為から集団の生成を考える」『日本文化人類学会第49回研究大会』大阪国際交流センター、大阪

2015年6月27日 「西アフリカのカカオ農村地帯における生物医療と感染症」『海外学術調査フォーラム』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京

2016年2月29日 ‘Restyling the Milieu: On Milieu Making Practices around Tuberculosis Treatment Projects in Southern Ghana.’ “Japanese Scholars Afternoon.” University of Amsterdam, Netherlands

◎調査活動

・海外調査

2015年9月6日～9月16日—イギリス (ヨーロッパにおけるグローバルヘルスの人類学的研究動向調査)

2015年12月17日～2016年2月16日—ガーナ共和国 (西アフリカにおける感染症対策と生権力の複数性に関する人類学的研究及びポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究に関わる現地調査)

2016年2月26日～3月7日—オランダ (オランダにおける医療人類学的研究動向調査)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

日本学術振興会科学研究費助成事業(若手研究(A))「西アフリカにおける感染症対策と生権力の複数性に関する人類学的研究」研究代表者、国立民族学博物館共同研究若手「再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して」研究代表者、立命館大学生存学研究センター若手研究者研究協力型プロジェクト「現代社会エスノグラフィ研究会」客員協力研究員、立命館大学国際言語文化研究所萌芽的プロジェクト研究「アフリカの社会と笑い研究会」客員協力研究員。

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

産業能率大学「文化を知る」、江戸川大学「福祉・医療人類学」、高知大学「医療人類学（集中講義）」

◎学会等の開催

2015年5月29日 日本文化人類学会課題研究懇談会「医療人類学教育の検討」第六回研究会、第4セミナー室

2015年9月25日～9月27日 How Do Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape?

2015年11月22日 日本文化人類学会第四回次世代育成セミナー、第3・第4セミナー室

八木百合子 [やぎ ゆりこ] ————— 研究員

1977年生。【学歴】天理大学国際文化学部イスパニア学科卒（2001）、三重大学大学院人文社会科学研究科修了（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科単位取得満期退学（2011）【職歴】在ペルー日本国大使館専門調査員（2012-2014）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2015）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2012）、修士（人文科学）（三重大学 2004）【専攻・専門】文化人類学、アンデス民族学、ラテンアメリカ地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

八木百合子

2015 『アンデスの聖人信仰——人の移動が織りなす文化のダイナミズム』京都：臨川書店。

[著書]

八木百合子

2012 「聖女に捧げられた大聖堂——近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト」染田秀藤・関雄二・網野徹哉編 『アンデス世界——交渉と創造の力学』 pp.243-267, 京都：世界思想社。

[論文]

八木百合子

2009 「サンタ・ロサ信仰の形成と発展——20世紀ペルー社会における展開を中心に」『総研大文化科学研究』5：5-28。

【2015年の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モノを通してみる現代ペルーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究

・研究の目的・内容

本研究は、宗教的なモノの生産と流通に焦点をあて、現代ペルーにおける聖人信仰の発展について人類学的に追究するものである。その際、聖像というモノを分析の中心に据え、モノと人々が作り出す多様な実践を捉えることで、教会や宣教師の活動に力点をおく従来の見方を越え、宗教現象の新たな理解をはかることを目的とする。より具体的には、(1)現代の聖像の生産がいかなる人々によりどのようにして行われ、(2)どのような人々の手を介して聖像が流通し、(3)それが各地の村落においてどのように受容され、聖性をもった存在となるかという点について明らかにしていく。なお、上記調査の遂行にあたっては科学研究費助成事業（研究スタート支援）をあてる。

・成果

本年度は、聖像の生産の実態と商品化プロセスを把握するために、ペルーの首都リマおよびクスコ市において調査を実施した。その結果、(1)現在聖像生産のさかんなリマでは首都の人口増大を背景にここ30年ほどで生産市場が拡大したこと、(2)市場拡大とともに、生産形態についても、従来の職人を中心とした個人型から工場型が増え商品化が進んでいること、(3)市場競争により聖像の材質やデザインに変化がみられることが明らかになった。特に(3)の点については、現在の聖像の生産市場に中国製の安価な商品が登場するなど、国内のみならず国際市場の影響を受けていることなども判明した。これらの成果については2016年度に公開する予定である。

◎出版物による業績

[単著]

八木百合子

2015 『アンデスの聖人信仰——人の移動が織りなす文化のダイナミズム』 京都：臨川書店。

[その他]

八木百合子

2015 「聖なるモノの商品化——ペルー」 みんなく e-news 168号、6月1日。

2015 「聖母への贈りもの——奉納品を通してみる世界」 『チャスキ（アンデス文明研究会）』 51：11-13。

2015 「ペルーの選挙制度」 『選挙時報』 64(10)：1-22。

2016 「都市が生み出す力——リマに暮らす農村出身者たち」 『ラテンアメリカ時報』 1413：46-48。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2015年10月17日 「アンデスの聖人崇拜——モノに映し出された信仰の世界を読む」 アンデス文明研究会定例講座、東京外国語大学本郷サテライト

2016年2月4日 ‘Migration and Cultural Change in Peru’. School’s Special Lecture Series on Latin America, Hankuk University of Foreign Studies, Seoul, Korea.

◎調査活動

・海外調査

2015年11月19日～12月3日—スペイン（スペインにおけるラテンアメリカ地域に関する人類学的研究の動向調査）

2015年12月11日～2016年1月25日—ペルー（現代ペルーにおける聖像の制作活動に関する調査）

2016年2月3日～2月5日—韓国（韓国外国語大学における特別講義）

2016年2月18日～3月22日—ペルー（クスコ市の教会堂における奉納品の調査）

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）「モノを通してみる現代ペルーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費助成事業（新学術領域研究）「古代アメリカの比較文明論」（研究代表：青山和夫）連携研究者

プロジェクト研究員

相良啓子 [さがら けいこ] ————— 研究員

【学歴】 筑波大学大学院修士課程教育研究科障害児教育専攻修了（1999）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所大学院 MPhil 課程修了（2014）【職歴】 株式会社 JTB 本社 IT 企画部（1999）、株式会社 JTB 首都圏新橋支店営業三課バリアフリーツアー推進担当（2002）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所研究員（2010）、国立民族学博物館プロジェクト研究員（2014）【学位】 修士（教育研究科障害児教育専攻）（筑波大学大学院 1999）、手話言語学修士（M. Phil.）（セントラルランカシャー大学国際手話言語学・ろう者学研究所（iSLanDS）2014）【専攻・専門】 手話言語学類型論・聴覚障害児教育【所属学会】 日本手話学会、日本語学会、日本歴史言語学会、社会言語科学会

【主要業績】

[編著書]

Zeshan, U. and K. Sagara (eds.)

2016 *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

[論文]

Sagara, K. and U. Zeshan

2016 A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara (eds.) *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*, pp.3-37. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen:

Ishara Press.

Nonaka, A. K. M., and K. Sagara

2015 Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses. *Sign Languages Studies* 16(1): 57-85.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話の歴史研究にむけて——数詞に基づく分析と試論

・研究の目的・内容

本研究の目的は、手話表現の歴史的変遷を解明するために、手話表現を客観的に比較し、共通点と相違点を記述するための方法を確立することである。ここでは特に、数のバリエーションを記述し、比較するためのノーテーションを考案し、それを利用して変化の一般化を試みる。対象とする言語は、系統関係が明らかであり、分岐してから時間があまりたっていないため、変化を追うことができる可能性が高い日本手話と関連手話（台湾手話・韓国手話）とする。神田（1986）の記述法を応用して、特に手形に着目し、手形を構成する要素、すなわち指の形、位置、動きについて記述を行い、先行研究や慣例などを参考にして書式化する。

・成果

手話表現をノーテーションで示すことにより、写真だけでは明らかにできない指の形や動きの有意な違いを、はっきりと示すことができた。今後、この方法を更に吟味し、もっと複雑な表現、例えば両手を使う手話、複雑な動きのある手話にも展開する。それにより、手話表現の史的変遷を一般化に応用できると考える。

具体的なノーテーションの適用例として、日本手話、台湾手話、韓国手話に見られる数詞「13」に関係性が見られること、また、変化の方向性について仮説をたてることができた。日本手話では「13」は、人差し指を曲げて表現する「10」と、人差し指、中指、薬指を立てて表現する「3」というふたつを組み合わせた表現を用いる。台湾手話では「13」を、「10」の人差し指を継続して上下に動かすのと同時に、中指と薬指を立てるという、日本手話の「10」と「3」が一つに融合した形で表現する。韓国手話では、人差し指を曲げた状態で静止させ、同時に中指と薬指を立てることで「13」を表す。この、起源を同じくすると考えられる3つの表現の変化の順序について考察した。Frishberg (1975) は、アメリカ手話の例で、「赤」と「切る」を示す二つの表現が融合して「トマト」と表すアメリカ手話の表現ができたことを述べているが、この「13」の例でも、もともとは二つの表現の組み合わせで表現されていた手話の語彙が、時間が経つにつれて融合したと考えられる。すなわち、変化の方向としては、日本手話の「13」から台湾手話の「13」あるいは韓国手話の「13」であったと考えられる。このように、二つの表現が一つに融合した例は、アメリカ手話の「家」の表現にも見られる。

さらに、ノーテーションを利用することにより、日本手話と台湾手話において、「60」、「70」、「80」、「90」を表す表現に、パラダイムとしての変化がみられることを記述した。ふたつの手話言語におけるこれらの表現は、指の組み合わせや形は同じであるが、すべての数の表現において、指先が向いている方向と手のひらの向きに違いがある。日本手話では、指先を横に向け、手のひらを話者側に向けて表現するが、台湾手話では指先を上に向け、手のひらを相手側に向けて表現するという違いがある。ふたつの手話における相違点と共通点を考えると、いずれかがいずれかから変化したと考えられる。指先を上に向けて表現する手話は、新潟の高齢ろう者の手話にも見られることから、以前は日本でも台湾手話と同じように指先を上に向け、手のひらを相手側に向けた表現がよく使用されていた可能性がある。この部分についてはさらなるデータに基づいた考察が必要である。パラダイムの変化については、構成要素のすべてが変化した例だけではなく、韓国手話の「11」～「19」のように、一部の要素のみが変化した例などもみられた。

◎出版物による業績

[編著]

Zeshan, U. and K. Sagara (eds.)

2016 *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

[論文]

Sagara, K. and U. Zeshan

2016 A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara (eds.) *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*, pp.3-37. Berlin: Mouton de Gruyter &

Nijmegen: Ishara Press.

Nonaka, A. K. M., and K. Sagara

2015 Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses. *Sign Languages Studies* 16(1): 57-85.

[その他]

相良啓子

2016 「世界ろう者会議と手話通訳者」『みんぱく e-news』第174号, 12月1日。

◎映像音響メディアによる業績

・民博言語チーム監修

相良啓子

2015年 『手話の世界へようこそ!!』マルチメディア番組(6054)12手話言語(オーストラリア手話、韓国手話、日本手話、イギリス手話、オーストリア手話、フィンランド手話、中国手話、インド手話、香港手話、インドネシア手話、アメリカ手話、モルディブ手話)に関する番組

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年9月21日 菊澤律子・相良啓子「手話言語の歴史言語学的研究に向けて」機関研究成果公開 みんぱく手話言語学フェスタ2015

2015年11月28日～11月29日 廣瀬浩二郎との対談「全盲者の耳、ろう者の目——『障害』から生まれる身体知」公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開——展示・教育から観光・まちづくりまで」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年7月28日～8月1日 ‘Numeral Systems in Sign Languages Across the World.’ The XVIIth World Congress of the World Federation of the Deaf, Istanbul, Turkey

2016年1月4日～1月7日 (With Nick Palfreyman) “Counting the difference: Variation in the number systems of Japanese, Taiwan and South Korean Sign Language.” The 12th International Conference on Theoretical Issues in Sign Language Research (TISLR12), Melbourne, Australia

2016年1月30日 「パネルディスカッション いまなせろう通訳なのか」特定非営利活動団体手話教師センター主催『ろう通訳シンポジウム』鹿児島県産業会館、鹿児島

2016年2月11日 「パネルディスカッション いまなせろう通訳なのか」特定非営利活動団体手話教師センター主催『ろう通訳シンポジウム』愛媛大学、愛媛

2016年2月21日 「世界の手話における数のしくみ、日本手話系言語における数表現の変化」公開講座『手話類型論』、東京外国語大学語学研究所、東京

・研究講演

2015年6月24日 「世界の手話～数のしくみを通して」関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス、兵庫

2015年6月25日 「世界のろう事情」関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス、兵庫

2015年11月17日 「世界の手話における数のしくみ、日本手話系言語における数表現の変化」東北大学川内北キャンパス、宮城

◎調査活動

・国内調査

2015年5月—鹿児島県(手話話者10名を対象に数詞表現の調査を実施)

2015年6月1日～6月17日—外来研究員アンジェラ野中と日本手話の敬語表現についての調査を実施

・海外調査

2015年12月29日～1月8日—オーストラリア(第12回手話言語の理論的研究に関する国際手話言語学学会において発表)

◎社会活動・館外活動等

2015年6月18日 山形県高島町立第三中学校 第57回創立記念式 記念講演「世界に広がる仲間・仕事・夢」高島第三中学校、山形

2016年3月3日 山形県聴覚障害者協会 第32回耳の日記念集会 記念講演「異文化体験を通して広がる夢～フィンランド・イギリスにおけるろう者の生活・仕事・通訳体験などから～」鮭川村農村

交流センター、山形

中野聡子 [なかの さとこ] 研究員

【学歴】筑波大学第二学群人間学類卒業（1994）ギャローデット大学特別研究生（1997.8-1998.8）筑波大学大学院博士課程心身障害学研究科心身障害学専攻修了（2001）【職歴】国立身体障害者リハビリテーションセンター学院・手話通訳学科非常勤講師（2000）、東京大学先端科学技術研究センター・科学技術振興特任研究員（2002）東京大学先端科学技術研究センター・科学技術振興特任助手（2002）、共愛学園前橋国際大学国際社会学部国際社会学科非常勤講師（2003）、群馬大学教育学部非常勤講師（2007）、東京大学先端科学技術研究センター特任助教（2007）、日本社会事業大学社会福祉学部非常勤講師（2008-現在）、広島大学アクセシビリティセンター・特任講師（2011）、国立民族学博物館先端人類科学研究部・外来研究員（2015）、国立民族学博物館先端人類科学研究部・プロジェクト研究員（2015.6-2016.3）【学位】修士（教育学）（筑波大学・1996）、博士（心身障害学）（筑波大学・2001）【専攻・専門】聴覚障害特別支援教育、障害児・者支援、手話通訳・翻訳論【所属学会】日本心理学会、日本発達心理学会、日本特殊教育学会、日本発達障害学会、日本社会福祉学会、障害科学会、日本手話学会、日本通訳・翻訳学会、学校心理士協会

【主要業績】

[著書]

中野聡子

2012 「聴覚障害者のアイデンティティ・トラブル——テクノロジーの利用によって生じるコンフリクト」福島智・中邑賢龍編著『バリアフリー・コンフリクト 争われる身体と共生のゆくえ』pp.197-211, 東京：東京大学出版会。

中野聡子

2002 『大人の手話・子どもの手話——手話にみる空間認知の発達』東京：明石書店。

[論文]

中野聡子・山田敏幸・上原景子・金澤貴之・フーゲンブーム レイモンド B・上田一貴・伊福部 達

2014 「聴覚障害者が読みやすい英語音声認識字幕呈示の改行条件に関する研究」日本特殊教育学会『特殊教育研究』52(4)：275-285。

【受賞歴】

2005 第6回(社)計測自動制御学会システムインテグレーション2005ベストセッション講演賞（井野秀一・黒木速人・中野聡子・堀耕太郎・伊福部達）

1994 国際ソロプチミストベンチャークラブアメリカ第10回日本リジョン賞受賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

学術手話通訳養成のための基礎的研究

・研究の目的、内容

日本における手話通訳者の大半は、日本手話とは対極的に位置し、音声から手指へのコード変換である手指日本語により近い、中間型手話であると言われている。しかし、手指英語を使用する聴覚障害大学生であっても、アメリカ手話の通訳のほうが内容に対する理解度が高かったという研究報告がある（Murphy and Fleischer 1976）。そこで、中間型手話を使用しているコミュニティ手話通訳者および聴覚特別支援学校の教員を対象に、手話通訳場面・授業場面で表出される手話の特徴について分析を行った。

・成果

(1) 複合語の訳出において、わかりにくいと評価された表現では、通訳の受け手にとって複合語がひとつの単語と認識される表現方法になっていなかった。手話表現の文法に則っていないことが主な理由であり、具体的には「空間の移動」「リズム」「うなずき」「手の動きの弱化・消失の非生起」が関与していた。

(2) 聴覚特別支援学校の教員の手話表現は日本語の意味やリズムに沿ったものであった。具体的には、CLの不使用や誤用、日本語の複合動詞や補助動詞における辞書形の動詞の手話の組み合わせ、形容詞や副詞にお

ける非手指マーカーの脱落、ロールシフトの不使用がみられた。

◎出版物による業績

[翻訳]

中野聡子

2015 「アメリカ手話と手指コード英語の発達」『オックスフォードハンドブック デフ・スタディーズ
ろう者の研究・言語・教育』pp.391-411, 四日市章・鄭仁豪・澤隆史監訳, 東京: 明石書店 (*Oxford
Handbook of Deaf Studies, Language, and Education*, edited by Marc Marschark and Patricia
Elizabeth Spencer)

[論文]

中野聡子

2015 「広島県の学術手話通訳養成に関する実践的研究」教育アクセシビリティ研究『広島大学アクセシビ
リティセンター研究報告書』1: 3-12。[査読有]

中野聡子・菊澤律子・市田泰弘・飯泉菜穂子・岡森裕子・金澤貴之・原 大介

2015 「手話通訳における複合語の訳出——通訳スキルの違いにおける比較」日本通訳翻訳学会『通訳翻訳
研究』15: 17-34。[査読有]

[その他]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年 7月12日 「学術手話通訳のための事前準備」国立民族学博物館学術手話通訳研究事業第2回ミーティ
ング、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究会などでの報告

2015年 8月27日 「PEPNet-Japan 遠隔情報保障事業について」FD/SD セミナー——遠隔情報保障のこれか
らを考える、早稲田大学早稲田キャンパス、東京

2015年 9月20日 「聴覚障害者による学術場面の手話通訳評価」日本特殊教育学会第53回大会、東北大学川内北
キャンパス、宮城

◎上記以外の研究活動

2015年 7月 国立民族学博物館学術手話通訳研究事業 第2回ミーティング「学術手話通訳のための事前準備」

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

日本聴覚障害者学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) 運営委員、遠隔情報保障事業代表

・非常勤講師

大阪教育大学非常勤講師

拠点研究員

■人間文化研究機構地域研究推進センター・「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点

竹村嘉晃 [たけむら よしあき] ————— 研究員

【学歴】 日本大学芸術学部演劇学科卒 (1995)、沖縄県立芸術大学大学院音楽芸術研究科音楽学専攻修士課程修了 (2001)、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了 (2003)、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了 (2012) 【職歴】 独立行政法人日本学術振興会特別研究員 (DC2) (2005)、大阪大学国際企画推進本部特任研究員 (2008)、和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師 (2009-2013)、国立民族学博物館外来研究員 (2010-2014)、奈良大学社会学部非常勤講師 (2011-2012)、国立民族学博物館共同研究員 (2011-2014)、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員 (2014) 【学位】 博士 (人間科学) (大阪大学大学院 2012)、修士 (人間科学) (大阪大学大学院 2003)、修士 (音楽学) (沖縄県立芸術大学大学院 2001) 【専攻・専門】 芸能人類学、南アジア地域研究 【所属学会】 日本文化人類学会、日本南アジア学会、舞踊学会、民族芸術学会、日本スポーツ人類学会、東洋音楽学会、The Congress on Research in Dance

【主要業績】

竹村嘉晃

2015 『神霊を生きること、その世界——南インド・ケーララ社会における「不可触民」の芸能民族誌』東京：風響社。

[論文]

竹村嘉晃

2015 「踊る現代インド——グローバル化の中で躍動するインドの舞踊文化」三尾 稔・杉本良男編『現代インド6 環流するインドの文化と宗教』pp.159-179, 東京：東京大学出版会。

2014 「インド・ケーララ州出身者たちの神霊を介した故地とのつながり」細田尚美編『湾岸アラブ諸国における移民労働者——「多外国人国家」の出現と生活実態』pp.229-250, 東京：明石書店。

【2015年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

南インド社会における身体文化とその担い手たちの社会的世界の変容に関する研究及びダンス・エスノグラフィーに関する理論的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、南インドのケーララ州北部に伝わるテイヤム祭儀を伝統的職業として担う不可触民の実践者たちを照射し、現代社会の動態や祭儀を取り巻く巨視的な位相と、彼らの生計活動や社会とのつながりといった微視的な要素がいかに実践レベルと関係し、影響を与えているのかを彼らの生活世界に足場をおく民族誌的記述から解明することにある。同時に人類学的視点と舞踊・芸能研究的観点を融合させた方法論のもとで、市場経済原理に対する実践者たちの適応戦略の実態を調査し、彼らが芸芸や社会的形態を維持しながらもその実践を創発・変容させていく過程を実践レベルから捉える芸能民族誌の新たな方法論を提示することも試みる。また、舞踊関連の科目を有する欧米の高等教育機関において一定の地位を確立しているダンス・エスノグラフィー（舞踊民族誌）という方法論を対象に、近年の研究動向を整理しながらその有益性を検討し、南アジアの芸能に関する人類学及び芸能研究への援用の可能性を探る

・成果

南インド・ケーララ州北部のローカルなヒンドゥー社会では、テイヤムと呼ばれる神霊祭祀を照射し、カーストの伝統的職業として神霊の役割を担う実践者集団に密着した長期のフィールドワークをもとに、現代ケーララ社会におけるテイヤム祭儀の受容動向を多角的に考察した。また、実践者たちの間で生じる軋轢や世代間の齟齬、かれらの社会的世界の変容について、祭儀を取り巻くマクロな動向と芸芸などのミクロな実践レベルと関連づけながら、神霊に生きる今日の「不可触民」の生の姿を民族誌として『神霊を生きること、その世界』（2015年5月刊行）を執筆した。

さらに、ダンス・エスノグラフィーの手法を援用する事例として、シンガポールにおけるインド人コミュニティの宗教・芸能実践に注目し、身体文化のグローバルな伝承とインド・欧米への環流、ホスト社会の文化政策、移民たちのアイデンティティ形成と芸芸との結びつきなどに関する現調査を実施し、収集したデータを分析している。

◎出版物による業績

[単著]

竹村嘉晃

2015 『神霊を生きること、その世界——南インド・ケーララ社会における「不可触民」の芸能民族誌』東京：風響社。

[共著]

竹村嘉晃

2015 「踊る現代インド——グローバル化の中で躍動するインドの舞踊文化」、三尾 稔・杉本良男編『現代インド6 環流するインドの文化と宗教』pp.159-179, 東京：東京大学出版会。

[論文]

竹村嘉晃

2016 「『伝統』を支える多元的位相——シンガポールにおけるインド舞踊の発展と国家」『舞踊学』38：121-138。

[その他]

竹村嘉晃

2015 「旅・いろいろ地球人 神霊を担い、受け継ぐ」『毎日新聞』7月2日夕刊。

2015 「シンガポールにインド芸能を伝えた男」『月刊みんぱく』39(8):18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年6月7日 「『伝統』を支える多元性——シンガポールにおけるインド舞踊の発展と移民・国家・多文化主義」、舞踊学会第20回定例研究会、若手研究者によるシンポジウム「アジアにおける伝統の再創造と再構築」、日本大学芸術学部、東京

2015年10月16日 ‘From Unintended Settlement to the (Re)construction of Tradition: A Case Study of Malayalee Migrant Dancer and the Development of Indian Performing Arts under the Umbrella of Multiculturalism in Singapore’. World Dance Alliance (Singapore), “Asia-Pacific Dance Bridge 2015: Connectivity through Dance, Nanyan Academy of Fine Arts”. Singapore.

2015年11月1日 「伝統音楽研究における定量的アプローチの可能性——インド音楽世界の動向を事例として」(田森雅一・小日向英俊・竹村嘉晃・田中多佳子・寺田吉孝) 東洋音楽学会パネルディスカッション、東京藝術大学音楽学部、東京

2016年2月16日 ‘Good Life and Traditional Occupation: Gulf Money, Social Mobility and Ritual Practices in Kerala, South India’. 2015 INDAS-UCB International Conference “Rethinking Religion, Ethics, and Political Economy in India and Sri Lanka: Critical perspectives from Japan”. Institute for South Asia Studies, University of California, Berkeley, U.S.A.

・研究講演

2015年4月27日 招聘講演「インド文化の伝播と伝承」第41期大津市民教養大学講座、大津市市民会館、滋賀

2015年7月4日 招聘公演「ヨーガの隆盛をさぐる——現代インドにおける『伝統』の再評価」、第444回国立民族学博物館友の会講演、国立民族学博物館

2015年11月23日 “Evolution of Bharatanatyam and multiculturalism in Singapore” 現代インド地域研究国立民族学博物館拠点2015年度第2回合同研究会、国立民族学博物館

2016年1月16日 「神霊と人をつなぐ『モノ』——インド・ケーララ州のテイヤム祭祀と実践者の生活世界」国立民族学博物館若手共同研究「演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」(代表者:吉田ゆか子) 国立民族学博物館

◎社会活動・館外活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業現代インド地域研究国立民族学博物館拠点拠点構成員、国立民族学博物館、若手共同研究「演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」(代表者:吉田ゆか子) 共同研究員、科学研究費助成事業(基盤研究(B))「インドにおける新しいメディア状況と芸能のグローバル化:文化の環流の人類学的研究」(研究代表者:松川恭子) 研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

立命館大学産業社会学部非常勤講師、「スポーツ人類学」「スポーツ方法実習」、関西大学文学部非常勤講師、「南アジア・内陸アジア論1・2」

豊山亜希 [とよやま あき]————— 研究員

1977年生。【学歴】近畿大学文芸学部文化学科卒(2000)、関西大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了(2002)、関西大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程後期課程修了(2008)【職歴】関西大学文学部総合情報学部非常勤講師(2007-2012)、関西大学大学院文学研究科「EU-日本学教育研究プログラム」ポストドクトラル・フェロー(2008)、日本学術振興会特別研究員(PD)(2009)、国立民族学博物館外来研究員(2012-2014)、宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所客員研究員(2013-現在)、現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員(人間文化研究機構地域研究推進センター研究員)(2014-2015)【学位】博士(文学)(関西大学 2008)【専攻・専門】インド美術史 1)

植民地インドにおける近代化概念の形成と美術の大衆化、2) 戦間期の南アジア・東南アジアにおける日本製タイルの受容実態、3) 古代インドにおける仏教石窟寺院の消長と社会変容 【所属学会】 美術史学会、美学会、日本南アジア学会、民族藝術学会、社会経済史学会

【主要業績】

[論文]

豊山亜希

2015 「インドのマジョリカ熱——イギリス統治下のインドにおける日本製タイルの消費について」『美術フォーラム21』32：83-88。

2012 「〈土着の伝統〉と〈複製の近代〉——ハヴェーリー壁画にみる英領インド期の大衆美術とマールワリー・アイデンティティ」『南アジア研究』24：56-80。

Toyoyama, A.

2012 Asian Orientalism: Perceptions of Buddhist Heritage in Japan. In P. Daly and T. Winter (eds.) *Routledge Handbook of Heritage in Asia*, pp.339-349. Oxon: Routledge.

【2015年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

植民地インドにおける視覚イメージの消費と日本製タイルの受容に関する美術史的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、両大戦間期のインドにおいて、日本製の装飾タイルが都市部の中産階級住宅を中心に愛好された事実に注目し、その実態を明らかにすることによって、消費文化とアイデンティティ表象の相関性を理解することにある。

経済史の領域においては近年、当該時期の日印貿易について詳細な研究が進んでいる。しかし、陶磁器の一品目であるタイルへの注目度は決して高くなかった。実際にはタイルは、綿製品・絹製品・マッチなど他の主要輸出品と比較すると、消費市場における現存率がきわめて高く、実証性の高い研究資料である。

本研究においては特に、1) 現存するタイル張建造物の来歴とタイルの施工状況、2) タイル表面に施されたデザイン、3) タイル裏面（解体された建造物からの収集例によって確認可能）に施された商標、の3点に視座を定め、日本製タイルの消費者層とその嗜好性、および戦前期日本のタイル業界におけるインド市場への販売戦略を分析する。これらの考察を通して、両大戦間期という国際情勢の転換期において、インド社会のアイデンティティはいかなる変容を遂げ、そこに日本がどのように介在したのかを、表象文化の観点から明らかにする。

・成果

研究目的に関連した資料調査を、科学研究費助成事業（若手研究(B)）「植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究」（研究代表者・豊山亜希）に基づき、2015年8月24日～9月15日にかけてイギリス・ロンドンにおいて、また2016年3月6日～15日にかけてシンガポールにおいてそれぞれ実施した。前者においては、大英図書館において植民地インドの戦間期の対日貿易統計を悉皆的に調査し、インドにおける日本製タイルの受容状況を実証するためのデータを収集した。一方、後者においてはシンガポール国立大学図書館において、英領マラヤおよびシンガポールの戦間期の貿易統計を悉皆的に調査するとともに、中国系住民の抗日運動に関する資料と当該時期のインド系商人の動向に関する資料を調査した。その結果、戦間期における日印貿易の緊密なネットワークの構築過程と、そこでタイルが近代的な都市空間の創出を可能にする商品として積極的に取引されたことが明らかとなった。また、取引のアクターであるインド系商人が誰かという点についても具体的に明らかにしうる手がかりを得た。

タイルの受容実態に関しては、インドで二度の調査を実施した。一度目は上述した科研費に基づき、2015年10月19日～24日にかけて、インドの西ベンガル州コルカタにおいて、イギリス統治期に造営された邸宅建築の調査を行ったものである。調査実施期間は現地で行われる祭礼「ドゥルガー・プージャー」が行われている時期にあたり、各邸宅の祭壇が装飾され一般に公開されていたことから、建築の内部を熟覧する貴重な機会を得た。その結果、イギリス統治期からコルカタ社会のマジョリティを構成してきたベンガル人富裕層が、その家屋建築において積極的に日本製タイルを受容していたことが明らかとなった。イギリス統治期にヒンドゥー祭礼がコミュニティ単位で活性化した時期と、家屋建築内の祭壇にタイル装飾が施された時期はおそらく近接していることが想定され、その相関性と意味を明らかにすることが今後の課題として浮かび上がった。

二度目は「現代インド地域研究」推進経費に基づいて、2016年2月15日～28日にインドのマハーラーシュトラ州ムンバイ、グジャラート州ワーンカーネールおよび同州モールビーにおいて調査を行ったものである。ムンバイにおいてはイギリス統治期の官庁街であるフォート地区の建造物を巡視し、戦間期における日本製タイルの受容実態を調査した。前述したコルカタでは植民地期の建造物が多く原状をとどめているのに対し、ムンバイでは歴史建造物のメンテナンスが積極的に行われてきたことで、むしろ植民地期に施工されたタイルの現存状況が思わしくないことが判明した。しかし一部の建造物では、ペンキ塗りされた壁面の下にタイルの痕跡が確認され、こうした事例を収集してマッピングすることで、タイルの受容層や流通経路が把握できると想定する。またグジャラート州ワーンカーネールとモールビーは、イギリス統治期にはそれぞれ藩王国だった地域で、日本製タイルを規範とした国産タイルの開発が1930年代後半には行われていたことが、昨年までの調査から明らかとなっている。そこで植民地期のタイル受容から国産化へ至る系譜を明らかにする長期的な視点を踏まえて、藩王国期の建造物と現在のタイル産業の状況を予備的に調査した。いずれの資料調査および現地調査においても、タイルを介した戦間期の日印関係の実態を把握する手がかりを得るとともに、次年度以降の調査課題を明確にできた点で大いに成果があった。

◎出版物による業績

[論文]

豊山亜希

2015 「インドのマジョリカ熱——イギリス統治下のインドにおける日本製タイルの消費について」『美術フォーラム21』32：83-88。

2016 「インドの近代化遺産とビジネス・コミュニティ」『現代インド・フォーラム』28：3-9。

2016 「インドのナショナリズムを「扇動」した日本のタイル」『民族芸術学会会報』88：5。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年8月1日 「インドを彩る日本のタイル：インド近代化遺産のもうひとつの物語」第445回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年7月5日 ‘Japanese Majolica Tiles and National Aestheticism in Late Colonial Asia.’ The 9th International Convention of Asia Scholars, Adelaide Convention Centre, Adelaide, Australia

2015年8月3日 ‘Japanese Majolica Tiles in Inter-War India: Modernization, Sanitization, and Beautification of the National Landscape.’ The 17th World Economic History Congress, Kyoto International Conference Center, Kyoto

2015年9月27日 「マールワリーの近代的アイデンティティとしての日本製マジョリカタイル」日本南アジア学会第28回全国大会、東京大学、東京

2015年10月31日 ‘The Tiling of Indian Modernity: Japanese Majolica Tiles in Marwari Architecture.’ International Workshop “Representing Marwaris in 1920s-30s India.” Otemon Gakuin Osaka-Umeda Sattelite, Osaka

2015年12月12日 ‘Modernity, Hybridity, and New Identities: Architectural Representations of the ‘Black Town’ in Late Colonial Calcutta.’ The 4th International Congress of Bengal Studies, Tokyo University of Foreign Languages, Tokyo

◎調査活動

・海外調査

2015年8月24日～9月15日—イギリス（植民地インドにおけるタイルの普及拡大に関する文献調査）

2015年10月19日～10月24日—インド（コルカタにおける植民地期のタイル建築調査）

2016年2月15日～2月28日—インド（ムンバイにおける植民地期のタイル建築調査およびタイル国産化に関する予備的調査）

2016年3月6日～3月15日—シンガポール（イギリス統治下のアジアにおけるタイルの普及と日本製タイルの受容実態に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（若手研究(B)）「植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究」研

究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「インド商業集団（マールワリー）の研究：実体と表象への学際的アプローチ」（研究代表者・中谷純江）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「インドにおける近代的宗教表現の展開とその影響」（研究代表者・冨澤かな）研究分担者、国立民族学博物館文化資源共同研究員、宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所客員研究員

客員教員

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

Narum, Paul [ネルム、ポール] ————— 准教授

【学歴】プリンストン大学卒（1982）、東京大学卒（1985）、【職歴】Newsweek Japan 編集顧問（1985）、横浜市立大学非常勤職員（1994）、東京工業大学非常勤職員（2009）、獨協大学非常勤職員（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員准教授（2015）【学位】M. A.（東京大学 1985）

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化における表現の差異の研究とその応用

・研究の目的、内容

My research will concentrate on minute variations between English and Japanese expressions through the medium of translations, exploring both the realm of nuance and modifications via alternative synonyms and paraphrasing. The ultimate objective is to explore and suggest systematic remedies to cultural misunderstanding brought about by the situation exemplified by the phrase “lost in translation.” At the National Museum of Ethnology, I will rewrite and/or retranslate documents produced thereof, and may produce an index for researchers needing to translate minute variations in nuances and phrasing (mainly from Japanese to English).

・成果

以下の2件の英文翻訳を行った。

- 1) 筒井清忠（編）2015『昭和史講義 最新研究で見る戦争への道』（後半）（外部資金）
- 2) 防衛省防衛研究所（編）『東アジア戦略概観 2016』2016「第1章 宇宙安全保障——世界の動向と日本の取り組み」pp.7-37、「第3章 朝鮮半島——北朝鮮の核・ミサイル能力向上と韓国の対応」pp.73-102（外部資金）また、その他複数のウェブサイトの翻訳、編集を行った。（外部資金）

During the previous year, my research efforts at the National Museum of Ethnology were primarily expended on the revision of various documents—mainly research proposals and journal submissions—written by researchers associated with the museum, as well as the translation of several official pieces of communication and pertinent regulations of the museum as requested by the publications staff. As for the index for researchers, the translations enumerated above are my main body of work but only tangentially related to the research at the Museum. I have started to collect data but not produced a comprehensive analysis or guide as of yet, and expect this effort to take several years before a sufficient amount of number of examples can be prepared to make it useful.

◎出版物による業績

[翻訳]

Narum, P.

2015 (和英) 筒井清忠編『昭和史講義 最新研究で見る戦争への道』東京：筑摩書房

2016 「第1章 宇宙安全保障——世界の動向と日本の取り組み」『東アジア戦略概観 2016』防衛省。(http://www.nids.go.jp/publication/east-asian/j2016.html)

2016 「第3章 朝鮮半島——北朝鮮の核・ミサイル能力向上と韓国の対応」『東アジア戦略概観 2016』防衛省。(http://www.nids.go.jp/publication/east-asian/j2016.html)

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

飯泉菜穂子 [いいずみ なおこ] 准教授

【学歴】早稲田大学法学部卒（1985）、お茶の水女子大学家政学研究科修士課程修了（1989）【職歴】日本アイビーエム株式会社入社（本社人事部）（1989）、NHK 手話ニュースキャスター（1990）、フリーランス手話通訳、手話講師（1993）、学校法人大東学園・世田谷福祉専門学校手話通訳学科および手話通訳専攻学科学科長（2002）【学位】家政学修士（お茶の水女子大学、1989）【専攻・専門】手話通訳養成、手話通訳評価、手話通訳論【所属学会】日本手話学会、日本手話通訳士協会

【主要業績】

[映像教材]

飯泉菜穂子

1995 『DVD で学ぶ手話入門講座』<http://www.hj.sanno.ac.jp/ps/course/4092>（構成、テキスト・スクリプト執筆、演出、ナビゲーターとしての出演）産業能率大学通信教育講座。

[共著]

小谷眞男・下城史江・飯泉菜穂子

2011 「新しいパラレルアーツとしての日本手話——お茶の水女子大学における『手話学入門』導入の経験から」『手話学研究』20：19-38。

[著書]

飯泉菜穂子

2013 「手話通訳士専門養成機関（世田谷福祉専門学校）における養成について」『手話通訳士試験の在り方等に関する検討会』pp.64-72。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

学術手話通訳者養成の実践とカリキュラムの検討および検証

・研究の目的、内容

本研究は学術手話通訳者の養成を目的とする。スクリーニングで選考した現役手話通訳者を対象に、民博の主催する国際手話言語フェスタでの日英同時通訳を介したりレー通訳体験を含む年7、8回の研修を実施。対象となる現役手話通訳者には、学術現場通訳OJTと検証の機会も提供する。研修実施のために民博外有識者（手話通訳養成専門家）を含む運営メンバー体制をとり、年10回程度のミーティングを開催する。

・成果

学術分野における、日本手話通訳による情報保障環境を構築するために、スクリーニングにより選考した現役手話通訳者数名を対象とした、学術分野に特化した手話通訳研究（研修）事業を通年で（計7回・11日間）行った。研修内容としては、運営メンバーおよび外部講師による通訳実技検証・通訳者の事前学習についてのレクチャーと課題実践・一線で活躍中の日英（音声）学術通訳者からのレクチャー・日英同時通訳を介してのりレー通訳体験・民博主催の国際手話言語学フェスタにおける日英同時通訳を介した日本手話通訳OJTおよびその振り返り（検証）などを実施した。

事業協力者である（研修を受けている）手話通訳者には、研修時のみならず自宅で取り組む様々な課題をも提示し、言語通訳者としての日常的な「ふるまい」「学びの姿勢」の部分もふくめ、徹底的にプロ意識を持って取り組んでもらった。また、研修2年目以降の協力者には、民博関連事業等での手話通訳OJTの機会を多数提供し、通訳終了後は運営メンバーからの検証を行った。

当研究によって、（主に）関西地域の手話通訳者の学術適性および通訳技術のブラッシュアップが実現し、大きな社会還元となった。当研究の協力者である（あった）手話通訳者の多くが、関西地域で学術分野の手話通訳を担いよう人材として活躍しており、当研究での学びを現場で活かしている。また、当研究は、日本財団受託研究「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催（2014年4月～2016年3月）の一環として実施されたものであり、研究の成果が2016年度より民博に日本財団受託研究事業として「手話言語学研究部門」が設立される動機のひとつになったものと考えている。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年11月26日 「盲ろう者と楽しむバリアフリー映画」NPO法人バリアフリー映画研究会主催シンポジウム、鹿児島県民交流センター、鹿児島
- 2016年1月30日 「non-Deaf interpreter (聴の手話通訳者) の立場から」NPO法人手話教師センター主催ろう通訳シンポジウム (鹿児島会場) 鹿児島県産業会館、鹿児島
- 2016年2月6日 「盲ろう者と楽しむバリアフリー映画——バリアフリー映画の可能性を探る」NPO法人バリアフリー映画研究会主催シンポジウム、大津プリンスホテル、滋賀
- 2016年2月11日 「non-Deaf interpreter (聴の手話通訳者) の立場から」NPO法人手話教師センター主催ろう通訳シンポジウム (愛媛会場) 愛媛大学南加記念ホール、愛媛
- 2016年2月28日 「non-Deaf interpreter (聴の手話通訳者) の立場から」NPO法人手話教師センター主催ろう通訳シンポジウム (宮城会場) 仙台シルバーセンター、宮城
- 2016年3月27日 「舞台・演劇の創作における手話通訳について考える」NPO法人シアターアクセシビリティネットワーク (TA-net) 第2回シンポジウム、森下スタジオ、東京

・研究講演

- 2015年9月8日 「手話通訳を目指すみなさまへ——よい手話通訳とは」東京都日野市手話講習会特別講演、日野市中央福祉センター、東京
- 2015年10月16日 (教員対象) 「手話の魅力」東京都立大塚ろう学校手話研修会、東京都立大塚ろう学校、東京
- 2015年11月14日 「つながり」埼玉県朝霞市手話通訳者等派遣事務所主催講演会、朝霞市総合福祉センターはあとびあ、埼玉

・広報・社会連携活動

- 2015年9月24日 (技術研修)：東京都日野市登録手話通訳者研修会、日野市中央福祉センター、東京
- 2015年9月27日 (技術研修)：埼玉県川越市登録手話通訳者研修会、川越市総合福祉センターオアシス、埼玉
- 2015年10月3日 (技術研修)：大阪府松原市登録手話通訳者研修会、松原市総合福祉会館、大阪
- 2015年10月13日 (技術研修)：東京都武蔵村山市登録手話通訳者研修会、武蔵村山市市民総合センター、東京
- 2015年10月19日 (技術研修)：東京都江戸川区登録手話通訳者特別研修会、グリーンパレス、東京
- 2015年11月14日 「通訳に対する評価方法」NPO法人手話教師センター主催『翻訳通訳講師養成講座／通訳理論講座』国立オリンピック記念青少年総合センター、東京
- 2016年3月12日 (技術研修)：栃木県登録通訳者現任研修 (ブラッシュアップ講座) 栃木県手話通訳士協会主催、とちぎ福祉プラザ、栃木

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

「わかりやすい字幕ガイドライン技術委員会」(国立研究開発法人・産業技術総合研究所標準基盤研究プロジェクト『映画等映像コンテンツのバリアフリー化に向けた補助字幕設計手法の標準化』) 委員、NPO法人シアターアクセシビリティネットワーク (TA-net) 「演劇・舞台における手話通訳養成カリキュラム研究会」委員 (公益財団法人セゾン文化財団助成事業)

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

名古屋市登録手話通訳者選考委員、社会福祉法人聴力障害者情報文化センター評議員、お茶の水女子大学リベラルアーツ科目「手話学入門」聴者ゲストスピーカー、NPO法人バリアフリー映画研究会理事、東京都登録手話通訳者、世田谷区登録手話通訳者

特別客員教員

■先端人類科学研究部・社会環境研究部門

末成道男 [すえなり みちお]——教授

1938年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1962）、東京大学大学院生物系研究修士課程修了（1964）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学（1970）【職歴】聖心女子大学文学部専任講師（1972）、聖心女子大学文学部助教授（1975）、聖心女子大学文学部教授（1983）、東京大学東洋文化研究所教授（1990）、東洋大学社会学部教授（1998）、東洋文庫研究員（1998）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2013）【学位】社会学博士（東京大学社会学系大学院 1975）、文学修士（東京大学人文系大学院 1964）【専攻・専門】社会人類学・東アジアの社会と祖先祭祀（とくに親族。地域集団の構造と宗教）【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

末成道男

1998 『ベトナムの祖先祭祀——潮曲の社会生活』東京：風響社。

1983 『台湾アミ族の社会組織と変化』東京：東京大学出版会。

[編著]

末成道男編

1995 『中国文化人類学文献解題』東京：東京大学出版会。

【受賞歴】

1975 第8回澁澤賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東アジアにおける祖先祭祀の変動に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

- 1) これまで台湾の原住民と客家、韓国、ベトナムの社会人類学的調査をふまえ、韓敏教授主宰の機関研究「中国における家族・民族・国家ディスコースの生成と実態」へ参加した。
- 2) 個人用ビデオカメラが発売された1987年以来、撮りためた800本余りのビデオフィルムの整理に着手し、それぞれ30分以内にまとめた本篇と3分以内にまとめた動画目次を公開用に制作した。
- 3) 2004年より始めたベトナム中部フエ近郊の清福村の訪問調査（外国人村内宿泊禁止のため）を行った。また、ベトナム南部のように隣接クメールの影響ではなく、中部のベトナム人が自ら直接採り入れたフエにおける南宗（上座仏教）七寺の調査を行った。

・成果

- 1) これまで東アジアにおける長期調査をもとに「家族と家」の比較論文として、“A Family and House of Han Chinese: Viewed from My Social Research” Family, Ethnicity and State in Chinese Culture under the Impact of Globalization HAN Min & KAWAI Hironao (eds.) Los Angeles: Bridge21 Publications にまとめた。
- 2) 湾及び華南の道教儀礼、沖縄の盆儀礼と聖地参り、ベトナム中部フエの南宗仏教7寺の僧衣寄進儀礼、佛誕儀礼など17篇を、東洋文庫ホームページよりインターネットで公開発信中である。これは、社会人類学調査と映像を組み合わせた記録であると同時に、現地の人々への還元ばかりでなく、一般へ人類学的アプローチを文字でなく映像の形で提示することになる。
- 3) フエにおける南宗（上座仏教）七寺の調査を民博榎永准教授主宰のベトナム研究会「百越の会」において口頭発表し、『東洋大学アリア文化研究所紀要』に論文として掲載の予定である。

◎出版物による業績

[論文]

未成道男

2016 「台湾プユマ族——半世紀前の多言語空間を闊達に生きる」『世界の名前』東京：岩波出版社。

2016 A Family and House of Han Chinese: Viewed from My Social Anthropological Research in East Asia. In Han M. and H. Kawai (eds.) *Family, Ethnicity and State in Chinese Culture under the Impact of Globalization*. Los Angeles: Bridge21 Publications

中生勝美 [なかお かつみ] 教授

【学歴】 中央大学法学部律学科卒 (1979)、明治大学法学研究科博士前期課程修了 (1981)、上智大学文学研究科博士後期課程満期退学 (1989) **【職歴】** 外務省嘱託専門調査員 (在香港日本国総領事館) (1987)、日本学術振興会特別研究員 (1989)、宮城学院女子大学・短期大学助教授 (1992)、和光大学人間関係学部助教授 (1995)、大阪市立大学文学研究科助教授 (2002)、東洋英和女学院大学教授 (2005)、桜美林大学教授 (2007)、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員 (2016) **【学位】** 論文博士 (京都大学人間・環境研究科 2014) **【専攻・専門】** 社会人類学、中国地域研究 **【所属学会】** 日本文化人類学会、日本民俗学会、アジア政経学会、現代中国学会、比較家族史学会

【主要業績】

[単著]

中生勝美

2016 『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』東京：風響社。

1990 『中国村落の権力構造と社会変化』東京：アジア政経学会。

[編著]

中生勝美編

2000 『植民地人類学の展望』東京：風響社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

梅棹忠夫資料及び「民族学研究アーカイブズ」に基づく日本人類学史の研究

・研究の目的、内容

人類学史の研究のため、長年、年配の研究者からヒヤリングをおこない、必要に応じて個人的な文書やフィールドノートなどを見せてもらっていた。特に、梅棹忠夫初代館長からは、何度も戦前の西北研究所や大興安嶺探検に関する思い出を聞かせてもらっていた。その過程で、モンゴルのファイルとフィールドノートを見せてもらったが、梅棹館長の没後、アーカイブに整理されて公開された。以前から、国立民族学博物館には、研究者の貴重な個人文書が未整理の状態であることを聞いており、整理されることを待っていたが、近年、その整備が進み、梅棹文書に限らず、「民族学研究アーカイブズ」として公開された。そこで、梅棹文書にかぎらず、幅広くこうしたアーカイブを活用しながら、日本の人類学史を研究したいと考えている。

・成果

研究期間が1月から3月と短かったので、今年度の成果は、梅棹資料ではなく、篠田統文庫と泉靖一アーカイブの資料を用いて、著作としてまとめた『近代日本の人類学史』に直接関係する資料のみを調べた。特に、篠田文庫には、梅棹忠夫が1945年6月に内蒙古草原の共同調査に関連する資料が含まれており、その基礎調査を行った。また、泉靖一アーカイブでは、1943年に岡正雄から泉靖一が民族研究所の研究員に招へいされた経緯から、民族研究所の所内資料が含まれており、これは今までにない貴重な史料であることが判明した。

◎出版物による業績

[単著]

中生勝美

2016 「近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶」東京：風響社。

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

山田孝子 [やまだ たかこ] ————— 教授

【学歴】 京都大学理学部数学科卒（1970）、京都大学大学院理学研究科動物学専攻博士課程単位修得退学（1977）【職歴】 京都大学総合人間学部助教授（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科教授（2003）、京都大学名誉教授（2012）金沢星稜大学教養教育部特任教授（2015）【学位】 博士（理学）（京都大学 1983）【専攻・専門】 文化人類学、認識人類学、シャマニズム研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本人類学会、American Anthropological Association、International Association for Academic Shamanistic Research

【主要業績】

[単著]

山田孝子

2012 『南島の自然誌——変わりゆく人—植物関係』 京都：昭和堂。

2009 『ラダック——西チベットにおける病いと治療の民族誌』 京都：京都大学学術出版会。

1993 『アイヌの世界観——「ことば」から読む自然と宇宙』（講談社選書メチエ） 東京：講談社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

多文化空間におけるミクロ・リージョナル共同性構築・維持

・研究の目的、内容

これまでの研究により、1990年代以降の社会状況は、文化的同質性をもたらすとされた近代化やグローバル化の予想に反し、ローカルな文化の価値の見直しと、それにもとづく共同性とコミュニティの再構築に特徴があるという知見を得てきた。これを踏まえ、本研究は、チベット難民をはじめとする越境した人々に焦点をあて、ホスト社会の多文化空間のなかで、どのように自分たちのコミュニティを作り出していくのか、共同性構築と維持の原理を解明することを目的とするものである。

今年度は、科学研究費助成事業（基盤研究（C）「在日チベット人におけるネットワーク形成と共同性の再構築・維持」、2015年度～2017年度、研究代表者：山田孝子）との連携により、在日チベット人における共同性の再構築も視野に入れながら比較の視点から調査を進め、ミクロ・リージョナルな共同性構築・維持の原理についての考察のさらなる深化をはかった。

・成果

JSPS 科学研究費助成事業 JP15K01874 との連携により、在日チベット人社会におけるネットワーク形成、様々なチベット関連イベントに関する実態調査とともに、2015年12月19日～12月31日には、南インド、バイラクツペにあるチベット難民キャンプにおけるダライ・ラマの法話を対象とする現地調査の実施、チベット人社会、日蔵関係におけるジャーナリズムやチベット仏教の役割などに関する情報収集を行った。また、トロント在住チベット人社会における共同性再構築と維持について自己再定置という観点から論考としてまとめるとともに、2014年12月に開催した国際ワークショップ「Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness」の成果を SES (Senri Ethnological Studies) としての出版に向けての編集作業を行った。

その結果、以下の知見を得ることができた。まず、ホスト社会で暮らすチベット人にとって、集いあう場の構築はコミュニティとしての連帯性を維持するために不可欠な要素といえる。トロント在住チベット人社会では、恒久的な集いあう場の構築が可能となっているが、彼らに比べ、数の上で圧倒的に少なく、各地に分散して暮らす現状にある在日チベット人は、インターネット環境という最新のメディアを駆使することによる情報発信、時折の集いあう場の設定などにより、コミュニティとしての連帯性を高めていることが明らかになった。また、日本社会、日本人において、政治的、宗教的など様々な形でチベットへの関心と支援が、ダライ・ラマの亡命以降継続されてきたことが明らかになった。最後に、国際ワークショップの成果としてまとめているが、多文化空間における共同性再構築・維持にあたっては、歴史性、ネットワーク構築、教育や「伝統」の問題、文脈化、宗教、そしてリーダーシップの存在などが重要なファクターとなりうるという知見を得ることができた。

◎出版物による業績

[論文]

Yamada, T.

- 2015 Continuity of Shamanism Among the Ladakhi and the Sakha. In D. Eigner and J. Kremer (ed.) *Transformation of Consciousness: Potentials for Our Future*, pp.163-182. Nepal: Vajra Books. [査読有]
- 2015 Ladakhi Shaman in the Multireligious Milieu: An Agent of Incorporation and Mediation. *Shaman Journal of the International Society for Shamanistic Research* 23 (1-2): 191-209. [査読有]
- 2015 “The Source of Good Forces is Located in the East….”: Yakut (Sakha) Shamans’ Concepts about the Universe and Spiritual Beings. (Translated into Russian by Ekaterina Chiglintseva and Elena Glavatskaya), *Quaestica Rossica* 2015(2): 224-248.

山田孝子

- 2015 「ホスト社会における難民の自己再定置と共同性再構築・維持——トロント・チベット人社会の事例から」(Self-Reorienting and the Remaking of Communal Connectedness among Refugees in a Host Society: A Case Study of Tibetans in Toronto, Canada) 『金沢星稜大学人間科学研究』9(1): 83-90。

◎口頭発表・展示・その他の業績・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2015年5月30日～5月31日 「難民社会にみるホスト社会との共生戦略——トロント・チベット人社会の事例より」分科会「多元的結合と下からの共生——アジアにおける移民・難民の視点から」大阪国際交流センター（国立民族学博物館）『日本文化人類学会第49回研究大会発表要旨集』p3 [査読有]
- 2015年10月9日～10月13日 ‘Shamanic Power as an Agent for Reconciling Communal Conflicts.’ ISARS (International Society for Academic Research on Shamanism) Conference, Delphi, Greece [Books of Abstracts, International Conference on “Sacred Landscapes and Conflict Transformation: History, Space, Place and Power in Shamanism”, Delphi, pp.80-81].

北原次郎太 [きたはら じろうた] ————— 准教授

【学歴】千葉大学ユーラシア言語文化論講座修士課程修了（2002）、千葉大学社会文化科学研究科博士課程修了（2007）【職歴】財団法人アイヌ民族博物館（2005）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授（2010）【学位】学術博士（千葉大学社会文化科学研究科 2007）【専攻・専門】アイヌ民族の宗教文化、物質文化、口承文学【所属学会】文化人類学会、口承文芸学会

【主要業績】

[単著]

北原次郎太

- 2014 『アイヌの祭具 イナウの研究』北海道：北海道大学出版会。
- 2015 『花とイナウ——世界の中のアイヌ文化』北海道：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

[論文]

北原次郎太

- 2015 「〈覚書〉 ikupasuy の口舌型式再検討」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』 pp.103-134。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化と日本およびその周辺諸文化の比較研究

・研究の目的、内容

アイヌ民族の文化と、日本国および周辺諸国の文化、とくに宗教文化と音楽文化について比較研究を行う。民博に蓄積された資料を元に、これらの文化における祭具類・楽器類の製作技法および使用法の比較を通じ、ア

ジアにおけるアイヌ文化の位置付けを検討し、当該文化の形成過程や周囲との類似性・独自性について考察する。

・成果

東アジアの撥弦楽器、擦弦楽器とアイヌの弦楽器の奏法、各部の形状と機能を比較した。それらの結果の一部を（一財）アイヌ民族博物館が刊行する Web マガジン『月刊シロロ』で公開した。

◎出版物による業績

[その他]

北原次郎太

2015 「《シンリウレシバ（祖先の暮らし）7》北方の楽器たち④」『月刊シロロ9月号』 (<http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201509.html>)

2015 「《シンリウレシバ（祖先の暮らし）8》北方の楽器たち⑤」『月刊シロロ11月号』 (<http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201511.html#07>)

陳 天璽 [チェン ティエンシ] ————— 准教授

1971年生。【学歴】筑波大学第三学群国際関係学類卒（1994）、香港中文大学国際交流計画学部修了（1995）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士前期課程修了（1996）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士後期課程修了（2000）【職歴】ハーバード大学フェアバンクセンター東アジア研究所客員研究員（1997）、筑波大学社会科学系日本学術振興会特別研究員（1999）、ハーバード大学法学部東アジア法律研究所客員研究員（1999）、東京大学総合文化研究科日本学術振興会特別研究員（2001）、杏林大学社会科学部非常勤講師（2001）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究員（2002-）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科嘱託講師（2009-）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2010）、早稲田大学国際学術院准教授（2013）、早稲田大学国際学術院教授（2016.4-）【学位】国際政治経済学博士（筑波大学大学院博士課程国際政治経済学研究科 2000）【専攻・専門】文化人類学、移民・移動者研究【所属学会】移民政策学会、日本華僑華人学会、American Anthropology Association、日本文化人類学会、アジア政経学会

【主要業績】

[単著]

陳 天璽

2011 『無国籍』（新潮文庫）東京：新潮文庫。

[編著]

陳 天璽・近藤 敦・小森宏美・佐々木てる編

2012 『越境とアイデンティフィケーション——国籍・パスポート・IDカード』東京：新曜社。

陳 天璽編

2010 『忘れられた人々——日本の「無国籍」者』東京：明石書店。

【受賞歴】

2002 第1回井植記念「アジア太平洋研究奨励賞」

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アジアにおける移民と文化

・研究の目的、内容

本研究は主に、アジアにおける移民とディアスポラ、そして彼らの文化とアイデンティティに注目する。なかでも特に、華僑華人、そして日本におけるインドシナ難民やビルマ難民の2世に注目している。彼らの国籍、そして身分証明のあり方、アイデンティフィケーションとアイデンティティの齟齬について情報収集、インタビュー調査を行う。また、アジアにおける移民の子どもたちの国籍の推移、教育環境、アイデンティティについても情報収集、研究調査を行う。

・成果

民博共同研究「人の移動と身分証明の人類学」の研究成果を論集にまとめ、北海道大学出版会より刊行すべく編集作業を進めた。2016年中に『パスポート学』（案）として出版する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

Chen, T.(Lara)

2016 Born to Be Stateless, Being Stateless: Translational Marriage, Migration and the Registration of Stateless People in Japan, In Sari K. Ishii (ed.), *Marriage Migration in Asia: Emerging Minorities at the Frontiers of Nation States*, pp.187-201. Singapore: National Singapore Press.

[その他]

陳 天璽

2015 「中華街は食べ放題・食べ歩き天国？」『月刊東亜』576(6)：82-83。

2015 「人のつながりが拠り所になる」『We——くらしと教育をつなぐ』197(8)：16-25。

2015 「日中のはざままで育ち、育て、育つ」『月刊東亜』579(9)：88-89。

2015 「孫文と横浜」『月刊東亜』582(12)：80-81。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

共同研究会「人の移動と身分証明の人類学」代表

- ・社会活動・館外活動等

移民／難民のシティズンシップ——国家からの包摂と排除をめぐる制度と実践——（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究科）、NPO 法人無国籍ネットワーク代表、APPRN（アジア太平洋難民権利ネットワーク）無国籍ワーキンググループ代表、日本華僑華人学会理事、移民政策学会理事

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

市田泰弘 [いちだ やすひろ]————— 教授

1962年生。【学歴】立教大学文学部教育学科卒（1986）、立教大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了（1989）

【職歴】名古屋文化学園言語訓練専門職員養成学校専任教員（1989）、国立身体障害者リハビリテーションセンター更生訓練所生活訓練専門職（1991）、国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官（1996）、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科主任教官（2010）【学位】文学修士（立教大学 1989）【専攻・専門】手話言語学【所属学会】日本言語学会、日本手話学会、日本認知言語学会、日本通訳翻訳学会

【主要業績】

[共著]

木村晴美・市田泰弘

2014 『改訂新版・はじめての手話』東京：生活書院。

[論文]

Ichida, Y.

2010 Introduction to Japanese Sign Language: Iconicity in Language. *Studies in Language Sciences* 9: 9-32.

Sakai, K., Y. Tatsuno, K. Suzuki, H. Kimura, and Y. Ichida

2005 Sign and Speech: Amodal Commonality in Left Hemisphere Dominance for Comprehension of Sentences. *Brain* 128(6): 1407-1417.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

日本手話の特徴をふまえた手話言語学教授法に関する研究

・研究の目的、内容

現在、大学および大学院レベルで手話言語学の講義を行うための日本語による教科書は存在しない。また、国内の大学において手話言語学を導入するにあたっては、日本手話の言語事実を取り込むのが適当であると考えるが、その教授法はまだ確立していない。近年の手話言語学に対する関心の高まりなどから、各単年度の講義の教授法を踏まえたシラバスの内容の検討が急務となっている。本研究では、複数の大学において実施する手話言語学の講義を通して、シラバス案の策定とその実効性の検証を行い、その結果を長期的には、日本語による手話言語学講義のための教科書執筆という形に反映させることを目的とする。具体的な内容としては、シラバスの検討においては受講学生の一般言語学の基礎知識の程度に合わせた内容および用例の選択を中心に、実効性の検証については主として受講学生の評価の集計によって行う。

・成果

東京大学にて「日本手話：文法と意味」の講義を担当、シラバス案を策定し実践した。従来と同様、社会言語学的背景について扱う導入と、ヴォイス⇒アスペクト⇒モダリティという文法カテゴリーを基盤とした配列による本編からなるシラバス案を採用した。昨年度の反省にもとづき、日本手話の言語事実から出発し、その解釈にあたって文法カテゴリーとの関連にふれる、という形態をとった。おおむね好評であったが、手話言語特有の言語事実を音声言語のそれと比較するという、より大きな観点への拡張が不十分であるという指摘があった。手話言語のもつ「身体」と「手指」と「空間」という媒体が、文法的システムにどのように影響しているのか、という観点を、もっと強調すべきであると感じた。来年度のシラバス策定に役立てたい。

そのほか、東北大学のリレー講義にて手話言語の文法に関する概論を担当した。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・手話言語学出張講義

2015年通年講義 Sセメスター（15日間）「日本手話：文法と意味」（学部）／「言語学特殊講義」（大学院）、東京大学

2015年10月20日 「手話言語学入門：音声言語と手話言語、日本語と日本手話」、東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」、東北大学

清水郁郎 [しみず いくろう] ————— 教授

1966年生。【学歴】芝浦工業大学工学部（1990）、芝浦工業大学大学院建設工学専攻修了（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了（2001）【職歴】大同工業大学工学部建築学科助教授（2005）、芝浦工業大学工学部建築工学科准教授（2009）、芝浦工業大学工学部建築工学科教授（2013）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2001）【専攻・専門】建築学（計画）、東南アジア研究、物質文化研究【所属学会】日本文化人類学会、日本建築学会

【主要業績】

[単著]

清水郁郎

2005 『家屋とひとの民族誌——北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌』東京：風響社。

[編著]

日本建築学会編

2012 『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』東京：風響社。

[論文]

清水郁郎

2014 「映画をめぐる生の交差——時間と空間の共有がもたらすもの」村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学——人類学の新たな実践へ』pp.158-174, 東京：せりか書房。

【受賞歴】

1992 第3回日本建築学会優秀修士論文賞

【201年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジアにおける木造建築の建設にかかわる比較研究

・研究の目的、内容

本研究は、東南アジア大陸部のタイ系を中心とする民族集団の木造住居や寺院について、建設にかかわる比較研究を行うことを目的とする。研究においては、現地調査を実施し、そこで得られた資料を中心に使う。また、国立民族学博物館所蔵の資料を適宜利用し、かつ文献資料とあわせて、当該地域の建築生産の現在の様態を明らかにする。そのさいには、建築物自体の物理的特徴に加え、建設にかかわる道具の伝播や材料の加工方法に留意し、それらによって産み出される建築構法にも着目する。さらに、建築生産にかかわる職能や社会組織の把握も行う。これらを統合して、当該地域における木造建築生産の整理・分類と理解の一助としたい。

現地調査については、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）『東南アジア諸国の建築生産システムの実態および現代化プロセスに関する研究』（代表：蟹澤宏剛）、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）『伝統的生産システムによる保存手法の研究——熱帯地域木造建造物保存の国際共同研究』（代表：上北恭史）の分担者配分金を使って実現する予定である。

・成果

2015年9月に、タイ王国プレー県ムワン郡のルー人の村、チェンマイ県サンパトーン郡のクーン人の村で、それぞれ1週間程度の現地調査をおこなった。現地調査では、実測による住居の各種図面と村落全図の作成を行い、また、建設道具の把握、建築生産の様態について調べ、住居の形式、構法、間取り、職能などを明らかにした。さらに、ルーについては、東南アジアに広く分布していることが知られており、そのために故地である中華人民共和国雲南省西双版纳とラオス人民民主共和国ルアンパバーン県の事例を文献と過去の研究成果から参照し、タイに居住するルーの居住との比較研究を行った。このほかに、人体寸法が実際にどのように住居建設に使われているのか、また、社会経済的な変化が著しいタイにおいて、住民の生活がどのように変わったのかを、生活財の調査などから明らかにした。

2016年2、3月には、タイの首都バンコクとその近隣諸県で、タイ系集団の伝統的住居や村落空間がどのように維持、保存されているのかを調査した。また、同時期に、ラオスのルアンパバーン郊外のルーの村で、伝統的住居の変容と保存、維持の様態について調査を行った。

◎出版物による業績

[論文]

清水郁郎

2016 「暗闇の住まいが語りかけたこと これからの建築に向けて」『物質文化』

Shimizu, I.

2016 Vernacular architecture of Lao P.D.R.: Case of the house of Lue in Luang Prabang. In T. Kubota, H. B. Rijal and H. Takaguchi (eds.), *Sustainable Houses and Living in Hot-Humid Climates of Asian Cities*. Tokyo: Springer Japan.

2016 Vernacular architecture of Thailand: Case of Chiang Mai rural area. In T. Kubota, H. B. Rijal and H. Takaguchi (eds.), *Sustainable Houses and Living in Hot-Humid Climates of Asian Cities*. Tokyo: Springer Japan.

[その他]

清水郁郎

2015 「村落の空間組織の特徴——タイ北部低地社会の居住空間に関する研究 その1」『日本建築学会学術講演梗概集（関東）』pp.1197-1198。

2015 「ジェンダーから見た空間の使い方に関する研究——タイ北部低地社会の居住空間に関する研究 その2」『日本建築学会学術講演梗概集（関東）』pp.1199-1200。

2015 「ルーの住居における儀礼過程の象徴分析——東南アジア大陸部諸社会の住居の民族誌的建築研究 その1」『日本建築学会学術講演梗概集（関東）』pp.1205-1206。

2015 「住まいにおける宗教的空間に関する研究——東南アジア大陸部諸社会の住居の民族誌的建築研究 その2」『日本建築学会学術講演梗概集（関東）』pp.1207-1208。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年9月19日 ‘Spatial analysis on house and village, especially focusing on religious practice and gender relationship.’ Special Lecture on The Research Project 2014 at THN Village, Department of Architecture and Environmental Design, Maejo University, Chiang Mai, Thailand

2015年7月4日 「北タイの山地社会における暗闇の住まい」『南山大学人類学研究所公開シンポジウム 建築人類学の行方』南山大学人類学研究所、愛知

◎調査活動

・国内調査

2015年8月5日～8月10日一沖縄県宮古島市（伊良部島における住宅と村落空間に関する調査）

2015年8月18日～8月26日一宮崎県東臼杵郡椎葉村（椎葉村の住宅と村落空間に関する調査）

2015年12月4日～12月6日一宮崎県東臼杵郡椎葉村（神楽の調査）

・海外調査

2015年9月7日～9月21日一タイ王国チェンマイ県とプレー県（タイ系集団の住宅と村落空間に関する調査）

2016年2月27日～3月13日一タイ王国バンコク特別市（サムット・ソクラム県、アユタヤー県、ウタイタニー県における水上居民の住宅調査、ラオス人民民主共和国ルアンパバーン県における世界遺産の調査、近郊農村におけるタイ系集団の住宅と村落空間に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））（海外学術調査）／研究課題名：伝統的生産システムによる保存手法の研究—熱帯地域木造建造物保存の国際共同研究（研究課題番号15H02636）・分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））（一般）／研究課題名：東南アジア諸国の建築生産システムの実態および現代化プロセスに関する研究（研究課題番号：26289216）・分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本建築学会・住宅計画運営委員会・幹事、日本建築学会・建築計画委員会・幹事、日本建築学会建築計画委員会・比較居住文化小委員会・委員

関本照夫 [せきもと てるお]————— 教授

1947年生。【学歴】東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1976）【職歴】国立民族学博物館第五研究部助手（1976）、一橋大学社会学部講師（1981）、同学部助教授（1983）、東京大学東洋文化研究所助教授（1987）、同研究所教授（1991）、同研究所長（2006-2009）、東京大学を定年退職（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任教授（2010-2013）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2013）【学位】社会学修士（東京大学 1974）【専攻・専門】仕事の人類学、布、工芸、物質文化、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、Association for Asian Studies

【主要業績】

[編著]

Sekimoto, T. (ed.)

2000 *Handicrafts and Industrial Development in Southeast Asia* (Toyota Foundation Research Grant Report). Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.

[共編著]

関本照夫・船曳建夫編

1994 『国民文化が生れる時——アジア・太平洋の現代とその伝統』東京：リプロポート。

Sekimoto, T., Semiarto Aji Purwanto and Hanantiwi Adityasari (eds.)

2003 *Handicrafts in the Age of Global Economy: Indonesia and Japan*. Depok: Center for Japanese Studies, University of Indonesia.

【受賞歴】

1983 第14回澁澤賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

布と人間の人類学的研究

・研究の目的、内容

- 1) 2011年1月～2013年3月の間に実施した機関研究・マテリアリティの人間学のプロジェクト「布と人間の人類学的研究」の成果刊行のため、編集作業を進める。
- 2) インドネシアのバティック染物業の研究を基軸に、物質性の人類学、布と人間の人類学について、執筆作業を行う。

・成果

学術雑誌に論文として発表するため、準備を進めている。『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定。

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

財団法人東洋文庫研究員、国立大学法人教育研究評価委員会委員

高野明彦 [たかの あきひこ] ————— 教授

1956年生。【学歴】東京大学理学部数学科卒（1980）【職歴】(株)日立製作所（1980）、東京大学大学院理学系研究科非常勤講師（1996）、国立情報学研究所ソフトウェア研究系教授（2001）、東京大学大学院情報理工学系研究科教授（2002-）、国立情報学研究所情報学資源研究センター長（2005）、特定非営利活動法人連想出版理事長（2005-）、国立情報学研究所コンテンツ科学研究系教授（2006年-）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター長（2006）、立命館大学アトリサーチセンター客員教授（2012）、(株)出版デジタル機構最高技術顧問（2012）【学位】博士（理学）（東京大学大学院理学系研究科2000）【専攻・専門】連想情報学、関数プログラミング、プログラム変換【所属学会】ACM、日本ソフトウェア科学会、情報処理学会、言語処理学会

【主要業績】

[監修・共著]

高野明彦

2015 『検索の新地平』（角川インターネット講座第8巻）（監修・共著）東京：角川学芸出版。

高野明彦・吉見俊哉・三浦伸也

2012 『311情報学——メディアは何をどう伝えたか』東京：岩波書店。

高野明彦・太田 光・田中裕二

2008 『検索エンジンは脳の夢を見る——連想情報学』東京：講談社。

【受賞歴】

2013 岩瀬弥助記念書物文化賞「デジタル技術による書物文化の開発」

2011 科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）「連想情報技術による自発的学びのための情報理解増進」

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

フォーラム型情報ミュージアムにおける情報の統合と発信に関する研究

・研究の目的、内容

フォーラム型情報ミュージアムの実現へ向けて、収蔵資料に関する情報を研究者からだけでなく、他のミュージアムやソースコミュニティからも収集して、多様な視点からの分析を可能にする情報システムが備えるべき基本機能について検討する。

・成果

国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて」に参加して、北米や欧州における民族学博物館とソースコミュニティの熟覧による情報の獲得と得られた知識のオンライン発信の現状について調査した。画像資料や映像資料を蓄積する研究プラットフォーム構築が地域研究の進展に大きく寄与できるとの知見を得て、それに基づき「地域研究画像デジタルライブラリ」事業の提案を行った。

◎出版物による業績

[単著]

高野明彦監修・共著

2015 『検索の新地平』(角川インターネット講座第8巻) 東京:角川学芸出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2016年2月9日 「我が国のデジタル・アーカイブの諸状況——海外と対比して」東京大学大学院情報学環DNP 学術電子コンテンツ研究寄附講座開設記念シンポジウム『これからの学術デジタル・アーカイブ』東京大学福武ホール、東京

◎社会活動・館外活動等

内閣官房知的財産戦略本部、デジタルアーカイブの連携に関する実務者協議会、委員(座長)、観光庁・文化庁、文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議、委員(座長)、内閣府、大規模災害情報の収集・保存・活用方策に関する検討会(座長:御厨貴)、委員、MANGAマンガ・アニメ・ゲームに関する議員連盟(幹事長:馳浩)、MANGA ナショナルセンター構想に関する有識者会議、委員、日本動画協会、日本のアニメーション100周年プロジェクト推進会議、アドバイザー、東京文化資源会議、文化資源連携ビジョン策定委員会、委員

林 史樹 [はやし ふみき]—————教授

1968年生。【学歴】同志社大学文学部社会学科卒業(1992)、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了(1997)、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程修了(2001)【職歴】神田外語大学外国語学部専任講師(2003)、神田外語大学外国語学部准教授(2007)、神田外語大学外国語学部教授(2013)【学位】博士(文学)(総合研究大学院大学2001)【専攻・専門】文化人類学、韓国研究、移動研究【所属学会】日本文化人類学会、韓国・朝鮮文化研究会、社会学研究会

【主要業績】

[単著]

林 史樹

2007 『韓国サーカスの生活誌——移動の人類学への招待』東京:風響社。

2004 『韓国のある薬草商人のライフヒストリー——「移動」に生きる人々からみた社会変化』東京:御茶の水書房。

[共著]

朝倉敏夫・林 史樹・守屋亜記子

2015 『韓国食文化読本』大阪:国立民族学博物館。

【受賞歴】

2006 旅の文化研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国食文化の人類学的研究

・研究の目的、内容

韓国で負の遺産としてばかり捉えがちで、すべてのことが収奪の歴史と結びつけて語られる植民地期であるが、この時代には大きく動き、さまざまな文物が伝播していった側面も無視できない。とくに韓国では、その後も朝鮮戦争が勃発することで国土が荒廃し、食糧難が1960年代まで続いていく。食うに困った時期が続いたことは、一方で、否応なしに食のスタイルを変えたし、食の伝播も盛んに起こった。そこで本研究では、朝鮮

半島を中心に、戦中・戦後期に人々が大移動することで、どのように食が伝播していったのかを明らかにしようとした。とくに東アジア全体を視野に入れる上で、中華料理として分類されやすい小麦粉食の波及・定着について研究調査を行った。

・成果

今年度は、2015年8月から開催された特別展「韓国と日本の食文化と博物館」に合わせて刊行した解説本『韓国食文化読本』（国立民族学博物館、朝倉敏夫・守屋亜記子との共著）の執筆を中心に成果を公表した。また、展示企画に対してもそこで得た知見を反映させ、運営の末端に加わった。また2013年度から続く、植野弘子教授（東洋大学）を研究代表者とする「帝国日本下における人と物の移動」の研究プロジェクトとも引き続き連動させ、資料収集と国内外の調査を行っている。調査などを通じてわかってきたのは、粒食中心の食生活圏では、粉食はあくまでも補完的、二次的な地位にとどまってきたのが、徐々に郷土食、人気食へと変貌を遂げたことである。とくに日本の場合、救荒食が日常食、そして郷土食（あるいはB級グルメ）へと変わる過程で料理が洗練化されるなどの段階があった。これについてはまだ検証が必要であるが、全国的な「ふるさと創成」が大きく関わっているかもしれない。韓国の状況ではそこに日本による統治、アメリカからの小麦粉援助が外的要因として大きく関わったことである。課題として残るのは、帝国日本下において中華料理を中心とする小麦粉食が各地に普及していく際、たとえば日本と韓国・朝鮮において小麦粉食が定着していく過程とどのように違いがみられ、その違いどこからくるのかといった問題である。また、中華料理との比較し、当時の朝鮮半島において洋食というカテゴリがどのように定着していったのかも視野に入れていく必要性を感じた。

◎出版物による業績

[共著]

朝倉敏夫・林 史樹・守屋亜記子

2015 『韓国食文化読本』 p.223, 大阪：国立民族学博物館。

[論文]

林 史樹

2016 「戦争期にともなう食の伝播に関する一考察：韓国における粉食を中心に」『神田外語大学紀要』28：311-325。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・展示

2015年8月27日-11月10日 特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2015年7月10日～7月12日—長野県上田市丸子地区（専売品の栽培技術の普及について）、長野県下伊那郡阿智村満蒙開拓平和記念館（引き揚げ経験者に対する共同インタビュー及びシンポジウム）

2016年1月30日～1月31日—山口県下関市（コリアタウンで食の伝播に関する調査、山口大学で研究会）

2016年2月22日～2月24日—岩手県盛岡市（麵文化の普及に関するインタビュー調査と資料収集）

・海外調査

2015年12月24日～12月29日—台湾：台北・台南（科研共同調査及び国際シンポジウムへの参加）

2016年2月9日～2月13日—大韓民国：仁川・ソウル（中華料理の伝播に関するインタビュー及び民博との共同企画展「飯床之交（飯膳の交わり）」見学・意見交換）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「帝国日本のモノと人の移動に関する人類学的研究——台湾・朝鮮・沖縄の他者像とその現在」（研究代表者：植野弘子）研究協力者

◎社会活動・館外活動等

日本文化人類学会編集委員、韓国朝鮮文化研究会運営委員

1974年生。【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1998）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学（2008）【職歴】神奈川県立平塚看護専門学校非常勤講師（2005-2008）、専修大学法学部兼任講師（2007-2008）、日本学術振興会特別研究員PD（筑波大学）（2008-2011）、ハワイ大学マノア校訪問研究員（2010）、高知県立大学文化学部講師（2011-2016）、首都大学東京非常勤講師（2011）、国立民族学博物館特別客員教員（2014-）高知県立大学文化学部准教授（2016）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2001）【専攻・専門】社会人類学、オセアニア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania

【主要業績】

[論文]

飯高伸五

2011 「南洋庁下の民族学的研究の展開——囑託研究と南洋群島文化協会を中心に」山路勝彦編『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』pp.175-208, 兵庫：関西学院大学出版会。

Iitaka, S.

2011 Conflicting Discourses on Colonial Assimilation: A Palauan Cultural Tour to Japan, 1915. *Pacific Asia Inquiry* 2(1): 85-102.

2015 Remembering *Nan'yō* from Okinawa: Deconstructing the Former Empire of Japan through Memorial Practices. *History and Memory* 27(2): 126-151.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録に関する歴史人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、研究従事者が旧南洋群島（ミクロネシア）のパラオで収集してきた日本統治経験の民族誌的データとともに、国立民族学博物館の民族学アーカイブズを精査することによって、日本統治経験の記録と記憶を歴史人類学的に検討していくことである。具体的には（1）日本の民族学者がパラオ社会に対して向けたまなざしを検討しつつ、かれらが記録した当該社会の変動を検討すること、（2）ポスト植民地期のパラオ社会における植民地期の史資料の活用可能性を検討することである。事例の検討によって、アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録の比較研究に向けた視座を提供する。

・成果

科学研究費助成事業（基盤研究(C)）ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究（2015年4月1日～2018年3月31日（予定）、課題番号15K03049）の研究代表者として、パラオ共和国および米領グアムで、太平洋戦争の遺構や慰霊碑の実態、観光産業におけるそれらの位置づけに関する現地調査を実施した。また、慶應義塾大学東アジア研究所の学術プロジェクト「歴史生態学と歴史人類学の節合による景観史研究の拡張-アジア太平洋のフィールドワークから発想する」（代表=山口徹）の分担者として、歴史人類学的視点からパラオの景観史を検討している。本年度発表した研究は以下の通りである。

沖縄およびパラオ共和国で実施してきた、旧移住者によるミクロネシア現地慰霊に関する研究の成果を査読付きの英文誌 *History and Memory* (Indiana University Press) の特集号 *Traveling War* (Edited by Geoffrey M. White and Eveline Buchheim) に寄稿し、論文 Remembering *Nan'yō* from Okinawa: Deconstructing the Former Empire of Japan through Memorial Practice. (*History and Memory* Vol.27 No.2, pp.126-151) を発表した。パラオにおける日本統治経験に関しては論文「セイネンダンのユーショーキ——日本統治下パラオにおける現地人若年層「動員」の記憶」（『高知県立大学文化論叢』4：71-84）を発表した。

日本文化人類学会課題研究懇談会「応答の人類学」で口頭発表「旧植民地からの「応答」と人類学的「説明責任」——ミクロネシア・パラオでのフィールドワークの経験から」（2015年5月29日、応答の人類学第19回研究会、新大阪丸ビル本館にて）、早稲田大学文化人類学会のシンポジウムで口頭発表「帝国後の混血のゆくえ——ミクロネシア「日系人」の越境実践と再生産される親日言説」（2016年1月30日、早稲田大学文化人類学会

第17回総会・シンポジウム、早稲田大学戸山キャンパスにて)を行った。

◎出版物による業績

[論文]

Itaka, S.

2015 Remembering Nan'yō from Okinawa: Deconstructing the Former Empire of Japan through Memorial Practices. *History and Memory* 27(2): 126-151. [査読有]

飯高伸五

2016 「セイネンダンのユーショーキ——日本統治下パラオにおける現地人若年層「動員」の記憶」『高知県立大学 文化論叢』4: 71-84. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

2015年5月29日 「旧植民地からの「応答」と人類学的「説明責任」——マイクロネシア・パラオでのフィールドワークの経験から」日本文化人類学会課題研究懇談会応答の人類学第19回研究会、新大阪丸ビル本館

2016年1月30日 「帝国後の混血のゆくえ——マイクロネシア「日系人」の越境実践と再生産される親日言説」早稲田大学文化人類学会第17回総会・シンポジウム、早稲田大学戸山キャンパス、東京

2016年3月5日 「林鉄遺構を活用したフィールドワーク教育」高知人文社会科学会公開シンポジウム「魚梁瀬森林鉄道」を通じた地域再考と地域振興」、集落活動センターなかやま、高知

◎調査活動

・海外調査

2016年2月9日～2月13日—パラオ共和国（太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する調査および資料収集を実施。）

2016年3月18日～3月22日—米領グアム（太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する調査および資料収集を実施。）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(C)「マイクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究」(2015年4月1日～2018年3月31日(予定))研究代表者、慶應義塾大学東アジア研究所2015年度プロジェクト「歴史生態学と歴史人類学の節合による景観史研究の拡張——アジア太平洋のフィールドワークから発想する」(研究代表者：山口 徹)研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事・評議員、NPO 法人地域文化資源ネットワーク理事、高知県土佐郡大川村村史編纂アドバイザー

・他大学の客員、非常勤講師

土佐リハビリテーションカレッジ「人間科学概論」

大杉 豊 [おおすぎ ゆたか]————— 准教授

【学歴】 University of Rochester (米国ロチェスター大学) 大学院言語研究科博士課程修了(1997) 【職歴】 人形劇団「デフパペットシアターひとみ」団員(1983)、学校法人名古屋文化学園言語訓練専門職員養成学校教員(1989)、米国ロチェスター大学アメリカ手話学科客員教員(1997)、財団法人全日本ろうあ連盟本部事務所長(2000)、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者基礎教育研究部准教授(2007)、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者基礎教育研究部教授(2015) 【学位】 Ph. D (ロチェスター大学 1997) 【専攻・専門】 手話言語学、ろう者学 【所属学会】 日本特殊教育学会、日本手話学会、日本聾史学会

【主要業績】

[単著]

大杉 豊

2005 『聾に生きる——海を渡ったろう者山地彪の生活史』東京：財団法人全日本ろうあ連盟出版局。

[共編]

大杉 豊・関 宣正編

2010 『わたしたちの手話学習辞典』東京：財団法人全日本ろうあ連盟出版局。

[論文]

大杉 豊

2012 「日本の手話における語彙の共通化の現象」『手話学研究』21：15-24。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語学に関する研究ネットワーク拠点の形成にむけての現状調査

・研究の目的、内容

学術的により堅固な基盤をもって手話言語学研究を推進するための研究ネットワーク拠点を形成することを長期的な目標とし、今年度は昨年度に引き続き、国内外の手話言語学研究の現状及び課題、その背景的要因の整理を継続することを目的とする。方法としては、人間文化研究機構連携研究として「第四回手話言語と音声言語に関するシンポジウム」を9月20・21日に実施する準備過程等で民族学博物館プロジェクト研究員を始めとする研究者との情報・意見交換を行う。筑波技術大学で継続している「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業では、学部講義・大学院講義・学術発表の動画及び言語学情報を付与した通訳動画で構成する手話通訳研修ウェブサイトを構築する。

・成果

人間文化研究機構連携研究として「言語の記述・記録・保存と通言語種類論」をテーマとする「第四回手話言語と音声言語のシンポジウム」に関わる中で、国内外の手話言語学研究の現状および課題、その背景的要因について情報・意見交換を行ったが、この成果を出版物にまとめるにはいたらなかった。

一方、筑波技術大学の「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業では、国立民族学博物館の「関西地域学術手話通訳研究事業」を部分的（人材派遣・情報保障等）に支援する中で得た知見を活かし、学部講義・大学院講義・学術発表の動画及び言語学情報を付与した通訳動画で構成する手話通訳研修ウェブサイトの試行版を構築することができた。

◎出版物による業績

[共著]

青柳美子・浅野順一・浅利義弘・池上芳夫・石川 渉・石倉義則・伊藤芳子・植野圭哉・江原こう平・大内祥一・大瀧浩司・大杉 豊・奥田しのぶ・加藤 薫・亀田明美・小畑修一・金原輝幸・黒崎信幸・小出真一郎・斎藤千英・鈴村博司・高田英一・高塚千春・高塚 稔・高橋幸子・竹島春美・田中保明・長野秀樹・中山真理・那須英彰・西滝憲彦・浜野秀子・早瀬久美・曲 真理子・前田真紀・本村順子・柳 喜代子・山口健二・山本直樹・吉岡真人・吉田正雄・吉野木の実・若杉義光・若浜ひろ子

2015 『わたしたちの手話 新しい手話2016』東京：一般財団法人全日本ろうあ連盟。

[共編]

大杉 豊・関 宣正編

2015 『私たちの手話学習辞典I改訂版』東京：一般財団法人全日本ろうあ連盟。

[その他]

大杉 豊・坊農真弓

2015 「手話人文学の構築に向けて(2)——手話言語コーパスプロジェクト」『手話・言語・コミュニケーション』2：99-136, 京都：文理閣。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年11月3日 Gender difference in socioeconomic and health status among Japanese deaf adults: Results from the national level survey in Japan (邦題：聴覚障害者の社会経済的状態と健康状態におけるジェンダーの違い：全国レベルの調査の結果から) (小林洋子, 田宮菜奈子との合同発表) 2015 American Public Health Association Annual Meeting and Expo、シカゴ、アメリカ

・研究講演

- 2015年7月4日 「手話言語条例を考える」 浜松市聴覚障害者協会、静岡県浜松市
 2015年7月16日 「手話言語法案について」 茨城県身体障害者協会、茨城県水戸市
 2015年8月8日 「Japanese Sign Language Corpus Project」 Institute on Disability and Public Policy for the ASEAN Region、クアラルンプール、マレーシア
 2015年8月22日 「情報通信技術の発展と『ろう者学』」 情報処理学会アクセシビリティ研究会第1回研究会、国立情報学研究所、東京
 2015年9月5日 「昔の手話、今の手話、そして新しい手話」 九州聴覚障害者団体連合会、宮崎県宮崎市
 2015年11月3日 「手話とろうあ者の生活について」「日本の手話創作について」 福岡県聴覚障害者協会、福岡県春日市
 2015年12月16日 「ろう者の言語として発展し続ける手話」 三重県議会、三重県津市
 2016年3月6日 「手話の方言——地域と年齢によって違う手話表現」 沖縄県聴覚障害者協会、沖縄県那覇市
 2016年3月21日 「移民の生活記録に学ぶ」 長崎県手話通訳士協会、長崎県東彼杵町

◎調査活動

・国内調査

- 2015年7月10～7月12日—石川地域の手話言語データ収集
 2015年10月29～10月31日—富山地域の手話言語データ収集

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「ろう者コミュニティの視点による日本手話語彙体系の記録・保存・分析」研究代表者、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター「東日本大震災における聴覚障害学生への支援経験をベースとした大学間コラボレーションスキームの構築」事業「情報保障に関する研究基盤構築：日本語——手話コーパスの作成」研究代表者、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター「聴覚・視覚障害学生のイコールアクセスを保障する教育支援ハブの構築——情報保障と障害特性に基づく教育方法の協調的開発と資源共有に向けて」事業「ろう者学教育コンテンツ開発」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

社会福祉法人全国手話研修センター日本手話研究所事務局長、NPO 法人日本 ASL 協会会長、財団法人現代人形劇センター理事、Executive committee member, Institute on Disability and Public Policy for the ASEAN Region、鳥取県手話パフォーマンス甲子園実行委員会委員

- ・非常勤講師

「聴覚障害児指導法概論」国立大学法人群馬大学教育学部（集中講義）、「ろう者文化と教育」国立特別支援教育総合研究所特別支援教育専門研修（単発講義）

高城 玲 [たかぎ りょう] ————— 准教授

1969年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部卒（1992）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位取得退学（2000）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2000）、国立民族学博物館機関研究員（2006）、神奈川大学経営学部助教（2007）、神奈川大学経営学部准教授（2009）、神奈川大学日本常民文化研究所所員（2009）、神奈川大学アジア研究センター所員（2013）神奈川大学経営学部教授（2016）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（国際学）（東京外国語大学 1994）【専攻・専門】文化人類学、東南アジア（タイ）研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会

【主要業績】

[単著]

高城 玲

2014 『秩序のミクロロジー——タイ農村における相互行為の民族誌』 横浜：神奈川大学出版会。

[共編著]

宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城 玲共編

2016 『DVDブック 甦る民俗映像——渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』東京：岩波書店。

[論文]

高城 玲

2012 「国家統治の過程とコミュニティ——タイの国王誕生日と村民スカウト研修の相互行為」平井京之介編『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』pp.187-217, 京都：京都大学学術出版会。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

タイにおける社会運動の相互行為に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、現在変動中にあるタイ社会の動態を、主に社会運動に着目し、鳥瞰図的なマクロな視点のみではなく、人々が不断に繰りひろげる相互行為の過程というミクロな視点から人類学的に記述し探求することを目的とする。特に、タイ北部チェンマイ県や中部ナコンサワン県、バンコクなどにおいて、都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査と資料収集を行い、分析を進める。

・成果

本年度は、タイ北部チェンマイ県やバンコクなどにおいて、都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査、資料収集を計2回にわたって行った。タイでは2014年のクーデター以降、軍部主導の政権運営によって、政治・社会運動が統制されるという大きな変化を強いられている。本研究では、クーデター以後、政治・社会運動が統制下におかれていく現状を現地調査によって把握するとともに、クーデター以前の政治的対立状況下における政治・社会運動が如何に展開されていたのかに関して、人々の相互行為というミクロな視点に着目した現地調査と資料収集を行い、その分析を進めた。

◎出版物による業績

[共編著]

宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城 玲編著

2016 『DVDブック 甦る民俗映像——渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』東京：岩波書店。

[論文]

高城 玲

2016 「方法としての現地上映会——現代に生きる映像資料」宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城 玲共編『DVDブック 甦る民俗映像——渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』pp.99-114, 東京：岩波書店。

[その他]

高城 玲

2016 「書評：辛島理人著『帝国日本のアジア研究——総力戦体制・経済リアリズム・民主社会主義』」『神奈川大学アジア・レビュー』3：164-166。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年10月13日 「現代タイにおける政治的対立の歴史的背景——政治・社会運動と地方農村部」神奈川大学アジア研究センター公開研究会、神奈川大学

2015年12月4日 「台湾『パイワン族の探訪記録』（1937）の現地上映会——現代に生きるアチックフィルム・写真」国際シンポジウム「帝国日本と台湾の眼差し——非文字資料の利用」国立台湾大学

◎調査活動

・海外調査

2015年8月19日～8月26日—タイ王国チェンマイ県およびバンコク（タイ農村部および都市部における社会運動に関わる現地調査）

2016年2月13日～2月24日—タイ王国チェンマイ県およびバンコク、ミャンマー ヤンゴン（タイ農村部と都

市部、およびミャンマーにおける社会運動に関わる現地調査)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

神奈川大学共同研究「帝国とナショナリズムの言説空間——国際比較と相互連携の総合的研究」共同研究者

■文化資源研究センター・民族学応用教育研究部門

前川啓治 [まえがわ けいじ] ————— 教授

【学歴】大阪大学文学部卒（1980）、大阪大学人間科学研究科博士前期課程修了（1983）、大阪大学人間科学研究科博士後期課程単位取得退学（1989）【職歴】筑波大学歴史・人類学系講師（1992）、静岡大学人文学部助教授（1996）、筑波大学人文社会科学研究科准教授（2000）、筑波大学人文社会科学研究科教授（2004）【学位】博士（文学）（筑波大学 1993）【専攻・専門】文化人類学・民族学【所属学会】日本オセアニア学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

前川啓治

2004 『グローカリゼーションの人類学——国際文化・開発・移民』東京：新曜社。

[編著]

前川啓治編

2012 「はじめに——文化の構築とインターフェースの再帰性」『カルチュラル・インターフェースの人類学——「読み換え」から「書き換え」の実践へ』東京：新曜社。

[論文]

Maegawa, K.

2015 Dynamics of Culture in Interface: Theoretical Consideration. In H. W. Wong and K. Maegawa (eds.) *Revisiting Colonial and Post-colonial: Anthropological Studies of the Cultural Interface*, pp.73-87. Los Angeles: Bridge21 Publications. [査読有]

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

グローバリゼーションから視る組織文化の比較研究

- ・研究の目的、内容

本研究では、人と自然、伝統などのエージェンシーに目を向けながら、開発という観点からそれらの資源をどのように結びつけるかを、具体的に「農村民泊」と「フットパス」という方策を取り上げて探つてゆく。とくに、ドイツやフランスにおける「農泊」の展開の過程、イギリスにおける「フットパス」の展開の過程と、日本におけるそれらの展開の過程を比較し、いかに日本におけるそれらの導入がグローカル化してきたかを明らかにする。また、日本国内における各地域ごとの展開の経緯を、比較対照してみる。

- ・成果

日本の組織的な農泊は大分県安心院がその発祥地であるが、モデルとしたのはドイツ南西部のアッカレンである。アッカレンでは、有機ブドウ栽培の実態調査からヴァカンスのあり方と農村民泊の関連についてインタビュー調査を行った。

連邦休暇法により一か月弱の休暇をとる義務があるドイツでは、農泊の意味が異なり、長期のためホストとの交流が趣旨とはなっていない。それに対し、安心院はホスト家族のもてなし、ホストとの交流がその趣旨であり、農泊の形態も意味も大きく異なっている点で、日本でのグローカル化が著しい現象であることがわかった。

イギリスでは、コッツウォルズにおける四つの地域のウォーカーズ・アー・ウェルカム協会を訪れ、協会員のみならず、フットパス・ウォーキングを地域づくりの主要な手法として重視している市長および、地主、環境保護組織などの関係者にもグループ・インタビューし、またロス・オン・ワイおよびウェールズのチェブ

ストウにおいてコンフェランスも開催した。また、コモンズの研究者とも意見を交換した。

イギリスにおいてフットパス・ウォークはレクリエーションとして長年の歴史があり、観光と地域づくりという観点から、各地でウォーカーズ・アー・ウェルカム協会を組織化してきたが、ネットワーク化を推進し始めたのはこの十年のことである。

日本におけるフットパス・ウォークの組織化は北海道や町田市をはじめとして、イギリスにならい十年の時を経て、ネットワーク化もイギリスの2年後には開始されている。イギリスそして日本におけるネットワーク化には各々独自のアクターの活動があり、またアクター間の交流もすすんでいる。

日本におけるフットパスの独自の展開は熊本県美里において開始され、美里方式と命名されているが、これは地域のひとびとによる「もてなし」を重視したガイドウォーキングであり、とくに資源の乏しい地域における活性化の手法として、九州全域で取り入れる地域が急増している。

安心院での農泊がそうであったように、美里方式の展開はグローカリゼーションのプロセスといえるが、それだけではない。実はイギリス・コッツウォルズ地域のウォーカーズ・アー・ウェルカム協会も昨今そうした密なホスピタリティの導入を検討していることから、美里型のフットパスは一方的なグローカリゼーションのプロセスというわけではなく、ある意味、同時進行的に相互に影響しあう事例となっている。

グローカリゼーションは、通常グローバル→ローカルというプロセスと考えられているが、このようにローカル⇄ローカルの直接的な関係性、しかも相互的な関係性を包含するプロセスとしてグローバルに展開するあり方を、新たなグローカリゼーションの形態として認知することができるであろう。

また、安心院において、フットパス・ウォークと農村民泊の両方を体験した学生による両者の統合に関するディベートを主催したが、地元の地域づくりの実践家との意見交換からも、「農村民泊」と「フットパス」という地域づくりの手法の接合が簡単ではないことが明らかになった。一つの大きな理由は、各々の組織が主とする価値観の違いがあり、各々の推進者が互いの手法をまだよく理解していないということがある。また、農村を背景としながらも各々のシステムが独立して構築されてきた経緯から、それらを統合する、より大きなシステムの形成に抵抗があるアクターの存在も看過できない点が明らかとなった。

以上のほか、研究教育の実践的成果として、つくば市とともに市民を対象とした筑波山麓地区の北条・小田・平沢地区のフットパス・マップを作成した。また、郷土史家による遺跡に関するガイドの動画を作成し、筑波山麓ネサンス資源ライブラリーに保存したが、そのショート・ヴァージョンを授業の一環として編集し、「つくばショートムービーコンペティション」つくば部門で佳作賞を受賞した。

本研究は、科学研究費助成事業の（基盤研究(B)）(2015年～2018年、代表：前川啓治)による資金に基づく研究の一部である。

◎出版物による業績

[論文]

Maegawa, K.

2015 Management in Interface: Glocal Displacement. In H. Nakamaki, K. Hioki, I. Mitsui and Y. Takeuchi (eds.) *Enterprise as an Instrument of Civilization* pp.73-87. Tokyo: Springer.

[論文]

Maegawa, K.

2015 Dynamics of Culture in Interface: Theoretical Consideration. In H. W. Wong and K. Maegawa (eds.) *Revisiting Colonial and Post-colonial: Anthropological Studies of the Cultural Interface*, pp.73-87. Los Angeles: Bridge21 Publications. [査読有]

◎調査活動

・国内調査

2015年8月14日～9月6日—イギリス、フランス、ドイツ（フットパスと農村民泊の調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「下からの地域開発の実践——フットパスと農村民泊による展開」研究代表者

外国人研究員 客員

■研究戦略センター・超領域研究部門

CHU Xuan Giao [チュ スワン ザオ] 准教授

任期：2014年7月1日～2015年6月29日

研究課題：ベトナムのヌン（Nung）族の社会変動と信仰に関する歴史人類学的研究

【学歴】 ハノイ総合大学文学部卒（1994）、ベトナム社会科学院民俗文化研究所大学院修士課程（民俗学専攻）修了（2000）、東京外国語大学大学院研究生（文化人類学専攻、文科省国費留学生）（2000-2001）、東京外国語大学大学院博士後期課程（文化人類学専攻、文科省国費留学生）単位取得退学（2007）【職歴】 ベトナム社会科学院民俗文化研究所契約研究員（1995）、ベトナム社会科学院民俗文化研究所研究員（1996-2011）、東洋大学社会学部外来研究員（1999）、東洋大学社会学部特別講師（2004）、ベトナム社会科学院民俗文化研究所上席研究員（2011）【学位】 修士（民俗学）（ベトナム社会科学院 2000）【専攻・専門】 文化人類学

【主要業績】

[単著]

Chu Xuan Giao

2013 *Đời sống, vai trò và đặc trưng của thầy Tào người Nùng An qua trường hợp bản Phia Chang, Nxb Từ điển Bách khoa* (『ヌン族ヌン・アン集団の宗教職能者タオに関する研究』). ハノイ：ベトナム百科辞典出版社（ベトナム語）。

[共編著]

Chu Xuan Giao and Phan Lan Hương (eds.)

2011 *Nghiên cứu cơ bản về Phủ Tây Hồ: Di tích và lễ hội*, Hà Nội: Nxb Từ điển Bách khoa. (『ハノイの聖母信仰の聖地「西湖府」に関する基本研究』ハノイ：ベトナム百科辞典出版社（ベトナム語）。

Chu Xuan Giao and Nguyễn Thị Lương (eds.)

2010 *Thăng Long thế kỉ 17 đến thế kỉ 19 qua tư liệu người nước ngoài*, Hà Nội: Nxb Quân đội nhân dân. (『外国人の文献資料から見た17世紀—19世紀のハノイ』ハノイ：人民軍隊出版社（ベトナム語）。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

2014年7月1日から2015年6月29日まで国立民族学博物館に滞在した一年間、以下の研究活動を行った。

- (1) ベトナムの東北地方のヌン族ヌン・アン集団の村落で1995年以来の20年間に渡ったフィールド調査から資料を整理し、約400頁の論文「ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成——東北地方のヌン・アン集団の事例から」を日本語で執筆した。
- (2) ベトナム研究者の研究会「百越の会」（国立民族学博物館）でベトナムのヌン族をテーマとして4回連続で発表した。そのテーマ、期日は次の如くである。第29回（2014年9月6日）「民族学的観点から見たヌン・アン」、第30回（2014年11月8日）「ドイモイの進展とヌン・アン社会」、第31回（2015年1月17日）「ドイモイ政策下のヌン・アン文化」、第32回（2015年3月14日）「フクセン社ヌン・アンにとっての『ドイモイ』」。
- (3) 国立民族学博物館・第265回研究懇談会（2015年5月20日）で発表した（題目：「ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成——東北地方のヌン・アン集団の事例から」）。
- (4) 2015年4月25日、奈良大学社会学部に赴き科学研究費助成事業「中越国境地域の市場から見た民族間交流とエスニシティの文化人類学的研究」（基盤研究(B)、研究代表者・芹澤知広教授）の研究会に参加し、コメントを行った。
- (5) 2015年6月20日～22日、東京でベトナム研究者との意見交換を行った。東京外国語大学外国語学部ベトナム語専攻（今井昭夫研究室、野平宗弘研究室）、慶應義塾大学文学部社会学専攻（三尾裕子研究室）、日本女子大学人間社会学部（中西裕二研究室）を訪問し、研究にかかる意見を交換した。

・成果

以下の3本の論文を執筆した。

日本語論文（博士学位請求論文として）：

「ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成——東北地方のヌン・アン集団の事例から」（約400頁）。

ベトナム語論文：

- (1) 「ヌン族ヌン・アン集団の研究史 (Lịch sử nghiên cứu nhóm Nùng An trong tộc người Nùng ở Việt Nam)」 (約100頁)
- (2) 「ベトナムの聖母・柳杏伝説におけるハノイの西湖府の位置づけの変遷プロセス (Phù Tây Hồ ở Hà Nội trong hệ thống truyền thuyết Mẫu Liễu)」 (約200頁)

CISSE Mamadou^[シセ ママドゥ]——教授

任期：2015年8月3日～2015年12月17日

研究課題：アジア地域の商取引におけるアフリカ系商人とアラブ系商人によるアラビア語使用に関する言語人類学的調査

【学歴】 モロッコ国立シディ・モハメド・ベン・アブラダ大学卒（1985）、モロッコ国立シディ・モハメド・ベン・アブラダ大学言語学修士課程終了（1987）、フランス国立東洋言語文化研究所言語学専攻言語学専門研究課程修了（1992）フランス国立東洋言語文化研究所フランス語専攻課程修了（1993）国際関係専攻課程修了（1993）、アラビア語専攻文学学士課程修了（1994）言語学専攻言語学博士課程修了（1995）**【職歴】** モハメド・ベン・アブラダ高校（モロッコ）英語教師（1986）フランス国立東洋言語文化研究所・アフリカ研究部門講師（1989）セネガル国立シェール・アンタ・ジョップ大学文学部教授（2003）**【学位】** 博士（言語学）（フランス国立東洋言語文化研究所 1995）、D. E. A.（言語学）（フランス国立東洋言語文化研究所 1992）、修士（言語学）（モロッコ国立シディ・モハメド・ベン・アブラダ大学 1987）**【専攻・専門】** 言語学

【主要業績】

CISSE M.

2014 *Bouquets de Sagesse Wolof, Recueil de Proverbes Bilingues Wolof-Français*. Paris: Présence Africaine.

2007 *Dictionnaire Français-Wolof*. Paris: Edition Revue et Augmentée.

1994 *Contes Wolof Modernes*. Paris: L'Harmattan.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アジア地域の商取引におけるアフリカ系商人とアラブ系商人によるアラビア語使用に関する言語人類学的調査

・研究の目的、内容

滞在期間中は、民博の豊富な文献資料を十分かつ有効に利用することができた。

研究課題については、学際的なアプローチから総合的な見地に立ち、数々の興味深い現象について考察の道筋を引き出すにいった。

またよい機会に巡り合えたことによって、大阪の地、しかも民博からほど近い豊川にできたモスクにおいて、詳細な調査をおこなうことができた。モスクでインタビューした人びとの多様性は、研究課題についてのわれわれの仮定であった「アラビア語が人びとのコミュニケーション手段の中心」であることを確認することにつながった。

さらに熊本でも、日本人研究者との議論を行い、アラビア語を共通の社会言語的背景にもつ共同体が強固な連帯感を作り上げていることを確認した。

研究課題以外には、過去40年のあいだに民博が西アフリカで収集したすべてのモノについて、データベースの点検をおこない、必要な情報を補い、また現地語の綴りの訂正をおこなった。

・成果

日本での滞在は、多くの新しい経験と、研究上の重要な発見につながった。アフリカ地域とアラブ圏出身の商人によるアラビア語の使用は、イスラームという宗教的側面以外にも、商取引における透明性をとおして共

通のノウハウを作り上げる実践的な役割を担っていることが判明した。

このような点において、商取引についての文化人類学的アプローチと言語学的アプローチの重要性が認識できる。商業と言語は密接な関係にある。言語は商業的意図において、言語的な相互関係における触媒なのである。

滞在中は、私自身の専門である記述言語学の研究についても研究を進めることができ、言語学の主要な雑誌（Sudlangue snやAcademia edu.comなどセネガルをはじめ、アルジェリアやコートジボアールの雑誌）に論文を投稿した。

◎出版物による業績

[論文]

CISSE, M.

2015 Les Constructions Applicatives en Seereer Singadam. *Cahier Ivoirien de Recherches linguistiques* 37: 21-39.

2015 Controverse Autour de la Conjugaison du Wolof: le Cas de l'Emphatique du Sujet. *Sud Langues*.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2015年10月28日 「記述の意味——西アフリカにおけるアジャミ書法」

FISCHER, Susan Donna [フィッシャー、スーザン ドonna]————— 教授

任期：2015年9月15日～2015年10月30日

研究課題：手話言語学研究のとりまとめと今後の長期計画に関する検討

【学歴】ハーバード大学ラドクリフ・カレッジ卒（1967）、マサチューセッツ工科大学博士課程修了（1972）【職歴】ソーク研究所研究員（1971）、ハワイ大学 第二言語としての英語学部客員助教（1974）、サンディエゴ州立大学言語学科講師（1977）、ロチェスター工科大学国立聾工科大学コミュニケーション研究科准教授、研究員（1978）、ロチェスター工科大学国立聾工科大学研究科教授、研究員（1993）、カリフォルニア大学サンディエゴ校客員研究員（2006-）、ニューヨーク市立大学大学院客員研究員（2013-）【学位】Ph.D（言語学、心理学）（マサチューセッツ工科大学 1972）【専攻・専門】言語学

【主要業績】

[論文]

Fischer, S. D.

2011 Nominal Markers in ASL (with foreword, afterword, and commentary). *Sign Language & Linguistics* 15(2): 243-250.

2011 Marked Hand Shapes in Asian Sign Languages. In R. Channon and H. van der Hulst (eds.) *Formational Units in Sign Language*, pp.19-41. Boston: DeGruyter.

2011 Numeral Incorporation in Taiwan Sign Language. In Jung-hsing Chang (ed.) *Language and Cognition: Festschrift in Honor of James H.-Y. Tai on His 70th Birthday*, pp.147-169. Taipei: The Crane Press.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語学研究のとりまとめと今後の方向性に関する検討

・研究の目的、内容

1. みんなく手話言語フェスタにおいて、(菊澤律子准教授と共著の)手話言語・音声言語の形式と機能に関する論文を発表した。また、フェスタのテーマと構成についてアドバイスをを行った。
2. 手話言語の構造に関する専門課程の一環として東北大学で講義した。
3. 台湾の国立清華大学と公立中正大学で講演を行い、両大学の卒業生・大学院生と面談した。
4. 手話言語の比較統語論に関する文献を渉猟した。
5. 来年度のみんぱく手話言語フェスタの会議構成、発表要旨提出の管理、招待講演者の人選等について菊澤律

予准教授と時間をかけて話し合った。また、フェスタで開催された数々のワークショップや会議から得た研究成果の普及方法についても議論した。

・成果

招へいの目的上、一次的研究よりむしろ研究成果の議論と普及が中心であるが、約6週間の民博滞在中以下のような成果をあげた。

1. みんなく手話言語フェスタの成功に貢献した。
2. 初来日時から引き続き民博では音声言語学者と共に手話言語の研究に取り組んで来た。
3. 2017年に出版予定の手話言語の比較統語論に関する論文のため文献収集を始めた。
4. 菊澤准教授と共に民博における次年度の研究計画と将来的プロジェクトの計画案を完成させた。

◎調査活動

・海外調査

2015年10月19日～10月25日—台湾（国立中正大学において講演及び手話言語学にかかる調査研究）

KIM Chang-ho (金昌鎬) [キム チャンホ] ————— 准教授

任期：2014年7月1日～2015年6月29日

研究課題：Digital Signage 技法を活用した博物館所蔵標本の情報サービス及び Virtual Museum 改善方案の研究

【学歴】 韓神大学校宗教学科卒（1999）、漢陽大学校大学院文化人類学科修士課程修了（2002）、漢陽大学校大学院文化人類学科博士課程修了（2007）【職歴】 漢陽大学校 ERICA 付設民族学研究所研究助教（1999）、韓国国立民俗博物館民俗研究課研究員（2002）、韓国国立民俗博物館専門契約職Ⅱ級（2007. 2-8）、韓国国立民俗博物館遺物科学課民俗アーカイブ学芸研究士（2007）、韓国国立民俗博物館展示運営課学芸研究士（2010）、韓国国立民俗博物館民俗研究課学芸研究士（2013）【学位】 修士（漢陽大学校大学院 2002）【専攻・専門】 文化人類学

【主要業績】

[修士論文]

金昌鎬

2002 『韓国巫の他界観研究』 漢陽大学校。

[論文]

金昌鎬

2004 「韓国の符籙に関する小考」『生活文物研究』（韓国国立民俗博物館）12：53-73。

2002 「韓国巫俗の死（Death）と再生（Rebirth）」『韓国巫俗学』（韓国巫俗学会）5：31-56。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

Digital Signage 技法を活用した博物館所蔵標本の情報サービス及び Virtual Museum 改善方案の研究

・研究の目的、内容

1. 活動の概要

本研究は、博物館が所蔵する多様な資料について効果的な情報伝達の方法を考えることから始まった。研究の過程は、大きく二つに分かれる。一つめは、博物館資料についての多様な情報のサービス体系とその範囲を構築することであり、二つめは、構築された体系をデジタルサイネージ（Digital Signage）に基盤をおき、展示場内に具現化し、ウェブ（web）での仮想博物館にも連携して活用することである。

デジタルサイネージは、単なる DID (Digital Information Display) ではなく、イントラネット (Intranet) を基盤に選択型情報サービスと双方向型情報交流を可能にすることによって、博物館展示場内で観覧者の観覧環境を害さずに資料についての多様な情報を提供することに適している。ここで優先的に検討しなければならないことは、どのような情報をどのように構成し、いかに具現化するかという問題である。

本研究では、博物館所蔵資料と映像、音響、テキストなど多様な関連資料間の連携設定の方向性およびサービス資料の範囲などについて検討し、オントロジー (Ontology) 基盤の情報検索として博物館にもっともふさわしいと判断したトピックマップ (Topic Maps) 基盤によるサービスマップの具現化を主研究課題とした。

2. 研究活動の概要

本研究の遂行と関連し、まず次のように日本国内の博物館および展示館の情報サービス方法の事例調査と新しい技術についての把握を試みた。

- 物館情報サービスの情報範囲設定に係る事例調査（日本国内の博物館を対象）
- 具現化技術およびその方法についての事例調査（産業特別展、企業展示場などを対象）
- 資料分類体系の新しい動向の事例調査（国立情報学研究所および関連技術の特許化状況など）

また本研究の進行と連携し、国立民族学博物館の「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」事業に参加した。フォーラム型の双方向的情報交流は、世界の多くの博物館でも必要性を感じている事業である。これは、一つの社会的共同体文化の表象である資料についての個人的解釈をひきだし、主観的立場で文化を解釈し共有することを可能とする。これにより蓄積された情報は、資料についての追加情報として活用が可能である。フォーラム型情報ミュージアムの構築事業と関連して、次のような活動を行った。

- 国立民族学博物館所蔵韓国資料のメタデータ作成支援
- 韓国国立民俗博物館所蔵資料との連携サービスのための資料収集および整理
- フォーラム型情報ミュージアムのホームページのハングル UI 制作支援

トピックマップ基盤のオントロジーマップの試験制作のために対象とした基礎資料は、国立民族学博物館と韓国国立民俗博物館が所蔵する、韓国の食生活関連資料情報の一部である。研究は、次のように実施した。

- メタデータ基礎整理作業に Microsoft 社の Excel プログラムを活用
- メタデータシートのフィールド要素の点検および確定（サービス対象情報の範囲設定）
- 主題語の同義語と関連語についての連携性（Association）設定
- 主題語の説明に登場する主要用語と関連語についての連携性設定
- 作成されたメタデータシートをコンバータープログラムを活用してトピックマップ構造に変換

トピックマップ構造化作業とともに悩んだことは、情報の範囲をどこまでにするかということである。国立民族学博物館の場合、展示場のオーディオガイドを通して、展示資料の地域についての調査情報および収集地の関連情報を一部提供しており、とても重要な試みと評価できる。地域研究の結果として収集された資料とその情報は、このような収集地の現場情報を通して学術的真偽と価値を立証することができるからである。本作業では、メタデータ内に収集地の現場関連情報に関するフィールドを追加した。

• 成果

トピックマップ基盤のオントロジーマップの長所は、ディレクトリー（Directory）マップに構成された資料に比べ、連携検索に柔軟性があることである。ディレクトリーの場合、上位階層と下位階層との連携性は現れるが、資料の水平的連関性は、容易に知ることが難しい。試験的に構成したシステムの検証のため、段階別標準検索類型を三段階に分けて分類し、段階別にさまざまな検索質問を活用して導出された結果と、連関関係をもつ他のトピックとの有効性を確認した。

限定された資料であることを勘案し、試みた質問類型については大部分が三段階までの連関および対象検索が可能であった。実際には、デジタルサイネージあるいはウェブ UI の視覚的デザインをどのようにするかによって、結果 [Occurrence] により速いアクセスも可能であろう。もちろん情報蓄積量が多くなれば、類型は4段階（T-A-A-O）以上に増えることが予想される。

本研究には、次のような今後解決が必要な課題がある。

第一に、トピック主題および分野が偏り、多様な検索類型をテストすることの困難性である。基礎資料としたものが食生活という一つの主題についてのものであったこともあるが、資料についてのシソーラス（Thesaurus）研究および関連資料収集が不足していたためでもある。特に具現化に先立つ主題語シソーラスについての検討は、かならず実施しなければならないであろう。これに加えて外部の博物館イントラネットと標準化されたトピック間のリンクが可能になれば、今後博物館外の資料との連携も可能になるため、より多様な情報間の交差検索が可能になることが見込まれる。

第二に、初期に有用だと考えていたフォーラム型情報ミュージアムの既存情報との連携問題である。まだホームページが開設されていないが、より多くの検討を必要とする課題である。すなわち、構造化されたメタデータを有していないユーザーが、自由な文章入力で主題語検索を可能とする技術的方法の検討が必要である。Web 2.0で具現されるフリッカー（Flickr）やデリシャス（delicious）リンクなどを活用する方法も検討できであろうが、数多くの文章に対して適切性を点検することは容易ではないであろう。

トピックマップは、基本的な情報表現のための主題中心の連携モデルを提供することを可能とする。こうした機能は、シメンティックウェブをはじめ多様な方法でも具現化が可能だが、国際標準化機構（ISO）の標準案

として提案された以上、今後も長く使用されることになるだろう。

トピックマップの活用は、増加し続ける博物館の外的な文化情報の次元と、博物館内の情報とを容易に連携し、一つのサイネージデバイス (Signage Device) 内でも幅広いサービスを具現化することを可能にする。そのため、急速度で発達する情報技術と、すでに適応されている大衆に対する博物館の能動的対応策の一分野として、継続して検討していく必要があるであろう。

KUMAWAT, Shyam Sunder [クマワット、シャーム スンデル] ————— 准教授

任期：2015年6月8日～2015年7月15日

研究課題：インド・ラージャスターン州における社会変容と宗教

【学歴】 M. L. スカディア大学社会学部卒 (1990)、M. L. スカディア大学大学院修士課程修了 (1995) M. L. スカディア大学大学院博士課程修了 (1998) 【職歴】 ラージャスターン州立ラージサマン大学社会学部専任講師 (1995)、ラージャスターン州立ミラー女子大学社会学部専任講師 (1995)、ラージャスターン州立ドゥンガルプル大学社会学部・専任講師 (2003)、ラージャスターン州立ミラー女子大学社会学部専任講師 (2004-) 【学位】 博士 (社会学) (M. L. スカディア大学 1998) 【専攻・専門】 インド社会学 【所属学会】 Indian Sociological Society, Rajasthan Sociological Association, Samajshashtra Hindi Karya Samiti.

【主要業績】

[論文]

Kumawat, S. S.

- 2013 Hindu Vivaah Ke Badalte Pratimaan. (ヒンドゥー教徒の婚姻における変化), *International Journal of Scientific Research and Social Science*, 2(3): 380-381, ISSN: 2277-8179. (ヒンディー語)
- 2009 Rajasthan Me Lok Dharma Evam Lok Devata: Sanrachna Evam Parivartan (ラージャスターンにおける民間信仰と神々：伝統と変容) *Rajasthan Journal of Sociology* 1: 91-98. (ヒンディー語)
- 2001 *Udhmi Aur Udhmita* (企業家と企業家精神) New Delhi: Classical Publishing Company. (ヒンディー語)

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド・ラージャスターン州における社会変容と宗教

・研究の目的、内容

国立民族学博物館の三尾稔准教授と協力し、本人が現地協力者となってインド・ラージャスターン州で収集した映像音響資料を基に、ビデオテーク番組のヒンディー語版を製作した。これらの番組に関する現地調査に基づきヒンディー語の説明文を作成したほか、上述のビデオテーク番組のナレーションを担当した。この活動を通して、ソースコミュニティに対する学術研究成果の還元を目指した。

また、民博滞在中に広島を訪問し、インド (特に本人の出身地) を拠点とする新宗教の世界的影響をさらに研究するため、日本支部の信者を対象に新宗教運動の実践と彼らの見解について調査を行った。

・成果

国立民族学博物館において一般公開される7本のヒンディー語のビデオテーク番組を完成させた。すなわち、「バスニ・カラン村の領主のくらし」「バスニ・カラン村の女神祭礼」「ラージャスターンの戦士の霊 サガスバウジー」「ウダイプルの婚礼」「ウダイプルのホーリー祭り」「ウダイプルの女神祭礼」「ラージャスターンの結婚式」である。将来的にはこれらの作品をインドでも上映する予定である。

日本におけるインドの新宗教運動に関する研究成果は、帰国後にインド現地の研究成果も追加し、論文として発表する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

Kumawat, S. S.

- 2015 Indian Democracy and Freedom Movement in Rajasthan in Colonial Period (in hindi); In Arun Chaturvedi and Manoj Rajguru (eds.) *Indian Democracy and Public Movement*, pp.184-193.

New Delhi and Udaipur: Himanshu Publications.

2015 Human Rights of Women; A Sociological View, (in hindi) *Samajmiti, Journal of Social Sciences and Humanities* 4(1): 112-118.

◎映像音響メディアによる業績

[映像番組]

Shyam S. Kumawat, Minoru Mio 監修

2015 以下の番組のヒンディー語版の制作の監修

『バスニ・カラン村の領主のくらし』(15分)、『ウダイプルの婚礼』(33分)、『ラージャスターンの結婚式』(106分)、『バスニ・カラン村の女神祭礼』(26分)、『ウダイプルのホーリー祭』(20分)、『ウダイプルの女神祭礼』(74分)、『ラージャスターンの戦士の霊 サガスパウジー』(32分)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年10月17日 “Ecological Imbalance and Changing Social Behaviour, (Sustainable Planet Earth; Ecological Dimensions and Strategies).” 10 DGS International Geography Conference. Dept. of Geography, MLS University Udaipur, Rajasthan, India

2015年12月18日 “Issues of Communal Tensions in Indian Society.” 22 National Conference on Emerging Social Problems of Contemporary Indian Society. Rajasthan Sociological Association, Dept. of Sociology, MLV Government College, Bhilwara, Rajasthan, India.

2016年1月22日 “Technical Words; Hindi Terminology in Social Sciences.” Commission for Scientific and Technical Terminology. Ministry of Human Resource Development, New Delhi, India

ORBELYAN, Gevorg [オルベヤン、ゲヴォルグ]——— 准教授

任期：2015年12月8日～2016年11月24日

研究課題：博物館とコミュニティのあり方に関する博物館人類学的研究

【学歴】 エレヴァン国立教育大学卒・エレヴァン国立教育大学大学院修士課程一貫修了(2005) 【職歴】 エレヴァン歴史博物館古代中世部上級専門官(2005)、モスクワLUDING株式会社 ウェブサイト専任翻訳者兼通訳者(2006)、エレヴァン歴史博物館古代中世部上級専門官(2007)、エレヴァン歴史博物館展示デザイン部門長(2008)、エレヴァン市観光開発投資部門、観光促進プログラム(2011)、エレヴァン市立博物館副館長(2012-) 【学位】 修士(文化学)(大阪外国語大学大学院 2000) 【専攻・専門】 文化学

【主要業績】

[著書]

Orbelyan, G.

2011 *Welcome to Yerevan*. Yerevan: Yerevan History Museum.

[論文]

Orbelyan, G.

2011 Tourism Development Perspectives and Current Status. *Museum* 3: 266-70.

2011 Exhibition Making in Museums. *Museum* 2: 207-15.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館とコミュニティのあり方に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

日本における各種博物館の展示と公共空間の利用法及びコミュニティとの連携などの比較研究を行うことであった。具体的には、①本館の機関研究「文化遺産の人類学」、②機構本部基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる事前調査」、③追手門学院大学との協定に基づく共同研究「地域文化の継承と創造」の3つであり、いずれも共同して受入れを行う吉田憲司教授と連携して実施した。

・成果

滞在中、①本館の機関研究「文化遺産の人類学」、②機構本部基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる事前調査」、③追手門学院大学との協定に基づく共同研究「地域文化の継承と創造」などに参加して、国内の博物館と地域コミュニティについての現地調査を行った。また来日日期が今年の国際研修「博物館学コース」の期間に少し重なるため、その期間中に研修に積極的に関与すると同時に、研修後のコース改良についても助言を行う。

SAM, Sam-Ang^[サム サムアン]—————教授

任期：2015年8月10日～2016年7月29日

研究課題：無形文化遺産保護における学術的映像資料の活用についての研究

【学歴】カンボジア王立芸術大学ディプロム・エス・アール修了（1970）、カンボジア王立芸術大学バカロレア・エス・アール修了（1973）フィリピン大学音楽院作曲科卒（1977）コネチカット大学卒（1983）コネチカット大学修士課程修了（1985）ウェスリヤン大学博士課程修了（1988）【職歴】コネチカット大学講師（1980）、コーニッシュ芸術大学音楽部講師（1988）、ワシントン大学音楽部講師（1989）、カンボジア・ネットワーク評議会（アメリカ合衆国）ディレクター（1992）、カンボジア王立芸術大学教授（1992）、ザルツブルグ研究所（ドイツ）客員教授（1999）、国立民族学博物館外国人研究員（2001）、クメール文化協会（アメリカ合衆国）会長（2003）、パンニャシャストラ大学（カンボジア）教授・学部長（2004-）、パンニャシャストラ・インターナショナルスクール（カンボジア）校長（2005）、カンボジア共和国文化芸術省顧問（2008-）、国立民族学博物館外国人研究員（2009）【学位】博士（ウェスリヤン大学 1988）、修士（コネチカット大学 1985）【専攻・専門】民族音楽学

【主要業績】

[共編]

Pich Tum Kravel and Sam-Ang Sam (eds.)

2014 *History of Khmer Kings*. Phnom Penh: Pich Tum Kravel & Sam-Ang Sam.

[編著]

Sam, Sam-Ang (ed.)

2010 *Music in the Lives of the Indigenous Ethnic Groups in Northeast Cambodia*. Phnom Penh: PUC University Press.

2002 *Musical Instruments of Cambodia*. (国立民族学博物館調査報告 29) Osaka: National Museum of Ethnology.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

無形文化遺産保護における学術的映像資料の活用についての研究

・研究の目的、内容

ユネスコの無形文化遺産保護条約等により、各国の文化政策において無形文化遺産の保護が占める位置が大きくなってきている。サム教授は、長年、研究者および演奏家として、カンボジアの伝統芸能に携わる一方、近年は文化芸術省の顧問としてカンボジアの文化政策にも深くかかわっている。また、民博は、サム教授の協力により、1999年度にカンボジアの古典芸能の諸ジャンル、および、2005年度に北東部少数民族のゴング音楽を映像で記録した。特に、1999年度の映像取材においては、後にユネスコ無形文化遺産代表リストに記載された古典舞踊と影絵芝居スバエク・トムの映像記録もおこなっている。そこでこれらの映像を事例として取り上げ、無形文化遺産保護において民博製作の映像資料を活用する方法とその問題点について研究を進める。

・成果

1999年度に記録した映像の中で最も学術的に貴重なのは、約14時間に及ぶスバエク・トムの全レパートリーの上演記録である。2000年に物故した中心的伝承者の語りを含むパフォーマンスの記録であり、今後のスバエク・トムの継承においても重要な資料となる可能性をもっている。しかし、30分程度の紹介映像に比べ、詳細な学術的記録映像の目に見える活用が進まないのも事実である。これは、文字資料と異なり、任意の箇所をピンポイントで参照しにくい映像の特質を反映していると考えられる。この研究では、関連する文字資料等の充実を

はかり、相互に対照できる資料群を形成することが、長時間に及ぶ記録映像の参照性を高め、学術映像の活用において有効であることを検証する。具体的には、記録された語りのパートを、クメール語、英語が対照できる形で文字に移した上で、全パフォーマンスについて英語字幕を入れた映像作品を製作し（日本語字幕版は製作済み）、さらに文字資料を出版する準備も進めた。サム教授は、カンボジアの古典芸能を熟知している上、クメール語と英語の両言語に精通しており、文字資料の作成において中心的な役割を果たした。

また、カンボジアにおける学術映像資料の活用、特に、カンボジアの研究者および芸能伝承者による映像記録の活用を進めるための具体的な方策を、カンボジアの国内事情を勘案しながら検討した。文字資料に比べ映像資料の活用が進まない要因に、学術資料としての映像の所蔵が研究機関においても限られていること、また、目録および所蔵情報の流通システムが確立していないことが挙げられる。こうした状況を改善する方法を、民博製作の映像資料を例にして具体的に探った。なお、この研究は、2015年度文化資源プロジェクト「カンボジアの大型影絵芝居スバエク・トム全7夜の上演記録映像（英語字幕版）の制作」と密接に関連するものである。

◎出版物による業績

[論文]

Sam, Sam-Ang

- 2016 Folk Performing Arts of Cambodia. *The Folk Performing Arts in ASEAN*. Bangkok: Sirindhorn Anthropology Centre.
- 2016 Cambodia: Mobility, Exchange, Networking, and International Collaboration for Folk Performing Artists. *The Folk Performing Arts in ASEAN*. Bangkok: Sirindhorn Anthropology Centre.
- 2015 Teaching Traditional Music in Asia. *The Restoration of Asian Community Spirit: The Present State of Succession and Development of Asian Traditional Music*. Quezon City: Kunggi Hyang Je Jul Pung Ru, Inc. and University of the Philippines College of Music.

◎調査活動

・海外調査

- 2015年9月3日～9月8日—タイ（国際会議「アセアンの民俗芸能」において研究発表及び無形文化遺産保護における学術的映像資料の活用にかかる情報収集）
- 2015年10月16日～10月19日—中華人民共和国（アジア太平洋民族音楽学会国際会議へ参加及び無形文化遺産保護における学術的映像資料の活用にかかる情報収集）
- 2015年11月23日～11月27日—大韓民国（無形文化遺産としての音楽の保護における映像の活用にかかる情報収集）

WILDE, Guillermo [ウィルデ, ギジェルモ] ————— 准教授

任期：2015年1月16日～2016年1月14日

研究課題：ラテンアメリカとアジアにおけるキリスト教宣教と文化適応の比較研究

【学歴】 プエノスアイレス大学哲学文学部人類学専攻卒（1999）、プエノスアイレス大学哲学文学部人類学専攻博士課程修了（2003）**【職歴】** 国立科学技術研究会議（アルゼンチン）研究員（2005-）、ヌエストラセニョーラデアスンシオン・カトリカ大学大学院（パラグアイ）社会人類学専攻客員教授（2007）、国立サンマルティン大学（アルゼンチン）社会科学高等研究所准教授（2008-）、教皇庁立リオグランジドスウ・カトリカ大学大学院（ブラジル）歴史学専攻客員教授（2008）、リオデジャネイロ連邦大学大学院社会人類学専攻客員教授（2009）、社会科学高等研究所（フランス）宗教人類学センター客員教授（2010）、国立ミシオネス大学大学院（アルゼンチン）社会人類学専攻客員教授（2010）、パリ第3新ソルボンヌ大学ラテンアメリカ高等研究所パブロ・ネルーダ講座客員教授（2010-2011）**【学位】** Ph. D（プエノスアイレス大学 2003）**【専攻・専門】** 文化人類学

【主要業績】

[単著]

Wilde, G.

2009 *Religión y poder en las misiones de guaraníes*. Buenos Aires: Editorial SB.

[編著]

Wilde, G. (ed.)

2011 *Saberes de la conversión: jesuitas, indígenas e imperios coloniales en las fronteras de la cristiandad*.

Buenos Aires: Editorial SB.

[論文]

Wilde, G.

2014 Adaptaciones y apropiaciones en una cultura textual de frontera: impresos misionales del Paraguay jesuítico. *História Unisinos* 18(2): 270-286.

【受賞歴】

2010 Premio Iberoamericano of Latin American Studies Association

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ラテンアメリカとアジアにおけるキリスト教宣教と文化適応の比較研究

・研究の目的、内容

昨年度に引き続き、受入教員の齋藤晃氏とともに、研究課題に関連した学術活動を実施した。民博共同研究「近世カトリックの世界宣教と文化順応」（代表者：齋藤 晃）では、先行研究の再検討を目的として5回の研究会が開催されたが、そのうち9月の研究会で報告を行い、中国のキリスト教宣教に関する文献を批評した。他にも、民博共同研究「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」（代表者：吉江貴文）にも参加し、12月には植民地期パラグアイのイエズス会ミッション史料について報告を行った。

4月からスタートした齋藤氏の新規プロジェクト「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住の総合的研究」科学研究費助成事業（基盤研究（A））に参加し、11月には米国ヴァンダービルト大学で開催された国際シンポジウム「植民地期アンデスの強制移住を再考する」で報告を行った。

7月には民博研究懇談会で「接触領域の時空間——植民地期の知覚体制への比較論的アプローチ」と題した報告を行い、11月には早稲田大学で植民地期南米カトリック・ミッションにおける音楽・イメージ・力について講演した。両発表は、わたしの研究課題であるキリスト教宣教における文化適応と感覚的媒体の効果に関するものである。5月にはまた、専修大学で行われた日本ラテンアメリカ学会の定期大会で南米イエズス会ミッションの信徒会について報告した。

以上の活動を通して、日本各地の研究者と出会い、民博での研究課題を深め、将来、日本とアルゼンチンの学術機関が協同でプロジェクトを行うための意見交換ができた。また、民博の研究者・外国人研究員・外来研究員とも友好関係を築いた。

招聘期間の最終日には大阪大学の美術史を専門とする教授に招かれ、植民地期南米の宗教美術についてのスペイン人研究者の講演にコメントした。

このほかにも、齋藤氏と研究打合せを定期的に行い、また共著論文の執筆を進めた。

民博の図書室の蔵書はわたしの研究にたいへん役立ち、図書館相互間の貸出システムにも助けられた。

・成果

民博滞在中、以下のおもな目的をすべて達成できた。(1) ラテンアメリカとアジアにおけるキリスト教宣教、とりわけ文化適応についての比較研究の立ち上げと推進、(2) 同テーマに関する先行研究の再検討と理論的考察、(3) 齋藤氏ならびに他の研究者との定期的な交流・意見交換、(4) 日本における人脈の構築。

◎出版物による業績

[論文]

Wilde, G.

En prensa Cacicazgo, territorialidad y memoria en las reducciones jesuíticas del Paraguay. En Akira Saito y Claudia Rosas Lauro (eds.) *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el virreinato del Perú*. Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú.

Wilde, G.

In press Missionary Frontiers in Colonial South America: Impositions, Adaptations, and Appropriations. In Cynthia Radding and Danna Levin Rojo (eds.) *The Oxford Handbook of the Borderlands of the Iberian World*. New York: Oxford University Press.

Wilde, G.

In press Jesuit and Indigenous Subjects in the Global Culture of Letters: Production, Circulation and

Adaptation of Missionary Texts in the Seventeenth and Eighteenth Century. In Anna More, Rachel O'Toole and Ivonne del Valle (eds.) *Iberian Empires and the Roots of Globalization*. Nashville: Vanderbilt University Press

Wilde, G.

In press The Missions of Paraguay: Rise, Expansion and Fall. In Ronnie Po-chia Hsia (ed.), *Companion to Early Modern Catholic Global Missions*. Leiden: Brill

[その他]

Wilde, G.

2015 Indigenous Agency and Written Culture in the Jesuit Missions of Paraguay. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 40: 9-10.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年11月7日 ‘Transiciones entre los Andes y las Tierras Bajas: hacia una aproximación comparativa de los modelos reduccionales.’ International Symposium “Rethinking Forced Resettlement in the Colonial Andes.” Vanderbilt University, Nashville, TN, USA

・共同研究会での報告

2015年9月6日 「Nicolas Standaert 著『L'«autre» dans la mission: leçon à partir de la Chine』について」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』国立民族学博物館。

2015年12月5日 ‘Reglamentando la vida cotidiana en las misiones fronterizas: libros de preceptos en el Paraguay jesuítico’『近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開』国立民族学博物館

・民博研究懇談会

2015年7月8日 ‘Time and Space in Contact Zones: A Comparative Approach to Regimes of Perception in Colonial Past’, 国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月31日 ‘Identidad religiosa, memoria social y persona en las misiones jesuíticas de Sudamérica: congregaciones religiosas guaraníes y chiquitanias en los siglos XVII y XVIII’ (報告). 日本ラテンアメリカ学会第36回定期大会、専修大学

2015年11月14日 「植民地期南米の布教区（ミッション）における音楽、イメージ、権力——イエズス会の土着文化への適応と先住民のキリスト教文化への順応」（講演）。講演会『ラテンアメリカン・デイ——遙かなる南米、そこに誕生したミッション文化と先住民文化の今』早稲田大学小野記念講堂

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は2004年度の法人化以降、「機関研究」「共同研究」「各個研究」という3種類の研究を柱としている。「機関研究」は近年の研究動向や問題の所在を調査した上で、研究テーマを設定し、本館が全館規模で取り組む研究活動である。2010年4月より法人化第2期を迎えるにあたり、2009年10月から新たな研究領域「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」を設定し、研究プロジェクトを開始した。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の1つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。機関研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、選定される。また、2010年度から「若手研究者による共同研究」が制度化され、一般の共同研究と同様に公募している。さらに、2004年度以来、共同研究会のメンバーだけではなく、研究者、学生、一般への研究会の公開を推進している。

「各個研究」は、館員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

館の研究活動である「機関研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者では「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、機関研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、2件の機関研究プロジェクト、33件の共同研究、客員教員や外国人研究員、機関研究員などを含めると100を超える各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。さらに研究に客観性を担保していく上でも、科学研究費助成事業などの競争的資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体等による寄附金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

また、本館が属する人間文化研究機構が主催する研究として「連携研究」が2005年度から本格的に始動した。連携研究は、人間文化研究機構を構成する6機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）が連携してさらに高次の研究を目指すもので、「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」、「『人間文化資源』の総合的研究」、「大規模災害と人間文化研究」という3種類の大型プロジェクトが実施されている。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2015年度には『国立民族学博物館研究報告』40巻1号～4号が刊行されるとともに、SES (Senri Ethnological Studies)、SER (『国立民族学博物館調査報告』または Senri Ethnological Reports)、『国立民族学博物館論集』、『民博通信』、『研究年報2014』が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を、東京と大阪で開催している。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。本館では、それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有し、かつ後世に伝えるため、国際共同研究を組織し、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。この実現のため、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度となる2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する4件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。2015年度は、台湾原住民や北米北方先住民に関する2件のプロジェクトが加わり、合わせて6件のプロジェクトを実施するとともに、パイロット版のデータベースを作成した。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく4分類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は、新構築に係る資料を中心に、寄贈などにより新たに加わった資料がある。映像音響資料の収集も文化資源プロジェクトの一環としておこなわれている。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所 NACSISCAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2015年度はチベット語図書等4,030冊の他、マイクロ資料（UMI社収集による北米の大学の博士論文）約6,400点を登録した。遡及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internet を介して広く公開・利用されており、2015年度は本館所蔵図書資料の相互利用での貸出受付が788件、文献複写受付は1,686件と、大学間の共同利用に大きく貢献していることがわかる。また、館外者への貸出冊数も、延べ1,957冊と好評である。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2015年度は、梅棹忠夫アーカイブの権利処理に関する覚書を作成するとともに、泉靖一アーカイブの紙資料リストおよび岩本公夫アーカイブの写真資料リストを一般公開した。また、沖守弘・インド民族文化資料の「紙資料」は一覧リストを、「写真資料」はデータベースを作成した。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、利用に関する多様な問い合わせを1つの窓口で対応することにより、利用者に対するサービス向上を図っている。2015年度には290件の問い合わせに対応し、利用促進に寄与した。

また、蔵書点検5年計画の3年目として、書庫全体における不明資料の再調査に加えて、雑誌（1層）約6万冊に「カラーバーコード」を貼付し、総計6万2千冊の蔵書の点検をおこなった。

2-1 みんなの研究

機関研究

●機関研究の意義

本館では、現代世界が直面する学術的かつ社会的に重要な諸課題について探求するため、本館の組織をあげて重点的に取り組む大型で公開性の高い共同研究として、2004年度から機関研究を実施している。機関研究は、国内外の大学や研究機関との連携や学術協定に基づき研究者が参加する国際共同研究である。その研究プロジェクトの内容は、申請時に大学・研究機関などの外部評価者の意見を反映させるなど、大学共同利用機関として研究者コミュニティの意見が十分に反映されるような体制がとられている。また、機関研究ではプロジェクトに参加する海外の研究者をも国際共同研究員に任じており、本館と海外の研究者との連携を強化する機能も担っている。

2009年度にはそれまで4つに分かれていた研究領域の改組を行い、学術的かつ社会的な要請に基づいて、「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」という2つの研究領域を立ちあげた。前者は人と人の関係に、後者は人とモノの関係に研究の焦点をあわせつつ、新たな社会観や人間観の創出をめざして関連諸分野の研究者と協力しながら研究を実施している。

研究領域「包摂と自律の人間学」では、2015年度が第二期中期目標期間の最終年であるため、実施プロジェクトはなかった。一方、研究領域「マテリアリティの人間学」では、研究プロジェクト「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」（代表者：菊澤律子）および「文化遺産の人類学—グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（代表者：飯田 卓）の合計2件のプロジェクトを実施した。

「マテリアリティの人間学」では、国際シンポジウム「手話言語と音声言語に関するシンポジウム」（2015年9月、本館開催、国際シンポジウム「無形文化遺産の継承における「オーセンティックな変更・変容」」（2016年3月、本館開催）を含め合計4件の国際研究集会を開催するなど研究成果の公開を着実に進めている。

また、機関研究プロジェクトが当初の目的に沿って効果的かつ適切に達成されたかについて評価するとともに、将来における機関研究の水準の向上とさらなる発展に資する助言を受けるため、「機関研究プロジェクト評価要項」を2013年6月に策定した。2015年度には、要項に基づき3人の委員からなる機関研究プロジェクト評価委員会にて、2014年度末に終了した2件の機関研究プロジェクトについて評価を実施した。

2015年度機関研究一覧領域

領域	プロジェクト	代表者	研究年度
1 包摂と自律の人間学 (領域代表：鈴木七美)	※第二期中期目標期間最終年のため、2015年度の実施プロジェクトなし。		
2 マテリアリティの人間学 (領域代表：寺田吉孝)	手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生	菊澤律子	2013～2015
	文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ	飯田 卓	2013～2015

●機関研究の領域とプロジェクト

1 「包摂と自律の人間学」 領域代表：研究戦略センター長

グローバル化が進む状況において人と人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい社会の構築を展望する。現代社会においては、マイノリティの自律性を保つとともに、社会的公正をめざす思想や方策が求められている。具体的には、公共圏や市民運動、ネットワーク、トランスナショナル、無国籍・重国籍、福祉、支援などが主要な研究テーマとなる。

2 「マテリアリティの人間学」 領域代表：先端人類科学研究部長

グローバル化が進む状況においてモノと人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい人間観の構築をめざす。モノと人の関係を、産業化や都市化、越境化などの脈絡で問い直し、また長期的時間軸を視野にいれて歴史的にも究明する。物神化の問題、人によるモノの収集と所有の問題、人工知能や情報技術など先端的科学技術と人の関係などが主要な研究テーマとなる。

「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」

代表者：菊澤律子 2013～2015

研究目的

本プロジェクトは、言語と、言語を担うヒトとの関係を、手話言語と音声言語の比較を通じてとらえ直すことを目的とする。

言語は、客観的に観察可能であり記述の対象となるという点で、ヒトからは独立した存在であり、人間が用いるツールのひとつととらえることができる。人間の言語には、手話言語と音声言語というふたつの形態があり、コード化という面で共通性を持つ一方、伝達のために用いるのが音なのかビジュアル情報なのかという「モダリティ」の面で異なっている。言語学は、長く、音声言語を対象とした研究成果に依ってきており、手話言語の記述研究への関心が高まってきた当初は、その音声言語との共通性について論じられることが多かった。本プロジェクトでは、そこから一歩すすみ、モダリティの違いに起因する「違い」を論じることで、人間の言語をよりよく理解しようと試みる。

手話言語と音声言語の違いを見ることは、さまざまな面で、言語学における基本概念の見直しにつながる可能性がある。たとえば、時間軸に沿って一本の情報が流れ続けるとされる「言語の線条性」は、長く言語の基本的な特徴とされてきた。手話では、時間軸に沿う、という点では共通しているものの、同時に並行する複数の系統による表出が可能である。同時並行する情報を、手話話者はどのようにコードとして認識し、理解しているのだろうか？

モダリティの違いに焦点をあてることで、言語というツールを人間がどのように認識しつづけているのかを新たに認識し、これからヒトはどのように言語と付き合っていくのか、本研究により、単にその記述のための方法論にとどまるのではなく、言語教育や社会体制などといったより広い文脈においても考察することができるようになることが期待される。

実施状況

日本財団助成による事業（最終年度）と合わせて「みんぱく手話言語学フェスタ2015」を以下の内容で開催した。これまでの内容を受けたテーマ設定に加え、同じく日本財団助成を受けている香港中文大学との共催での研究発表の時間も設けた。

(1) 時期：2015年9月20-21日

- (2) 場 所：大阪・国立民族学博物館 講堂
- (3) 対 象 者：国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般公開）
- (4) 使用言語：英語、アメリカ手話、日本語、日本手話、香港手話（日英同時通訳、日本語－日本手話、英語－アメリカ手話、英語－香港手話通訳付き）
- (5) 内 容：
- ◆ 9月20日「手話言語学研究の現在」
 - 1) 香港中文大学における手話言語学への取り組みに関する報告と研究発表
 - 2) 昨年の内容を受けての音声言語と手話言語の比較による研究報告
 - ◆ 9月21日 国際シンポジウム「文法の強制・許容・制約と回避」
手話言語と音声言語の専門家から相互に関連するテーマで講演後、公開討論。

みんぱくセミナー「通訳学☆最前線：『通訳をする』とは、どういうことなのか」を以下の内容で開催した。

- (1) 時 期：2016年1月9日 13:00-17:50
- (2) 場 所：大阪・国立民族学博物館 第4セミナー室
- (3) 対 象 者：国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般公開）
- (4) 使用言語：日本語、日本手話（日本語－日本手話通訳付き）
- (5) 内 容：
- 講演：
- 「米国におけるろう通訳者（Deaf interpreter）をめぐる動向」
川上恵（ギャロデット大学通訳学科修士修了）
 - 「米国における手話通訳研究——社会言語学モデルを中心に」
白澤麻弓（筑波技術大学准教授）
 - 「音声言語の同時通訳における概念化のプロセス」
船山仲他（神戸市外国語大学学長）
- ディスカッション司会：武田珂代子（立教大学教授）

成果

昨年度に続いて、国際シンポジウムを開催した。とくに、手話言語研究と同じトピックでの音声言語研究を組み合わせた研究報告により、手話言語と音声言語の研究者との歩みよりがみられたが、一方で、例年にもれず、関心を持ってくれる音声言語の研究者に限られてしまっているのが残念だった。今後は、言語学会などの、音声言語の研究者がマジョリティである場に今回のような研究発表の内容を持ち出していくことで、より多くの音声言語の専門家にも手話言語の研究に関心を持ってもらえよう工夫する必要がある。今年度のシンポジウムでは、日本手話と日本語の対照研究（系統の異なる複数の言語の比較）の要素も入ってきたが、これについては、1月に民博セミナーとして、通訳学に関する小規模の公開講演会およびディスカッションを主催した。音声言語通訳の専門家と手話通訳関連との共同での講演の場は国内でも初めての試みとなったが、音声通訳学界における主要研究者を講演者および司会者として招待したところ、非常に大きな関心を持っていただくことができ、今後、通訳学会で積極的に手話通訳をつくるだけでなく、手話通訳関連の研究者に声をかけていきたいとの意向であった。

以上のように、アウトリーチかつ新研究領域に関する啓蒙については、目的を果たすと同時に具体的な成果をあげることができたが、一方で、音声言語研究と手話言語研究の学術的な融合については、三年間を通してまだ芽を出すきっかけになったばかりだというのが正直なところである。ただし、その「芽」は、音声学・音韻論、形態論、統語論、歴史言語学等、言語学におけるひろい分野に広がっている。また、ディスカッションの中では、音声言語と手話言語の多くの並行する特徴についてのコメントがあがってきた。その意味では、新領域開拓というプロジェクトの目的はある程度果たせたと考えているが、今後、これらの芽をどう伸ばしてゆくことができるのが、課題となってくると思われる。

機関研究に関連した公表実績

三年間のまとめとして、講演者、司会者および共同研究者から原稿を募り、出版物を準備中である。

研究目的

過去との結びつきを断とうとするモダニティの圧力が高まり、記憶が共同体のなかで無条件には存続しえなくなったいま、文化遺産を伝えようとする人びとがどのような物質的基盤をよりどころに過去との結びつきを保っているかを実証的かつ理論的に示す。また、過去との結びつきを模索する人たちの動きが合流し、文化遺産を支えるコミュニティがたち現われるプロセスを論ずる。

実施状況

2015年10月13日に国際フォーラム「文化遺産レジームを考える——レギーナ・ベンディクス教授を迎えて」を国立民族学博物館第4セミナー室で開催し（主催：国立民族学博物館、共催：日本民俗学会第67回年会実行委員会、科学研究費助成事業（基盤研究A）「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて」（代表：岩本通弥））、2016年3月11日～13日に国際シンポジウム「無形文化遺産の継承における「オーセンティックな変更・変容」」を国立民族学博物館第4セミナー室で開催した。後者はとりわけ、3年間にわたって継続した機関研究プロジェクト全体を総括することが開催目的のひとつだった。また、後者の国際シンポジウムに合わせて3月14日～16日に奈良での研究集会をおこない、シンポジウムの趣旨をより広い文脈において訴えかけるための議論をおこない、成果刊行にむけての準備を進めた。

成果

10月の国際フォーラムにおいては、ヨーロッパのヘリテイジ・スタディーズ（遺産研究）の第一人者を招いて議論をおこなった。文化遺産に関わる現象を、社会文化的ないし法的なマクロな文脈において調査研究することの重要性が確認されたのと同時に、本研究プロジェクトがめざすミクロな調査研究や、日本のローカルな文脈に即した調査研究の重要性も確認された。

翌年3月の国際シンポジウムは、上記の確認点をふまえてミクロな文脈およびローカルな文脈において各研究者が研究発表をおこない、なおかつ別個の研究としてでなく「文化遺産の人類学」というひとつの研究潮流としてまとめるよう試みた。こうした個別民族誌的研究の一般化は、機関研究全体をとおして開かれたフォーラム・シンポジウム・研究集会を一貫させる総括的な作業として、期間終了の直前にぜひともおこなう必要があった。結果は、当初意図した以上の成果を収めたといつてよい。

まずミクロないしローカルな視点をとることの重要性は、ユネスコが世界遺産・無形文化遺産に関わるプロジェクトにおいてある種のローカリズムを奨励していること、日本の文化財行政もそのことを意識して制度設計を見直す余地があることから、相対主義的アプローチとして文化人類学の分野から論じていく意義が大きい。現象の解釈においてはミクロかつローカルな文脈を無視できないものの、解釈することの意義はグローバルな背景をふまえてはじめて可能なのである。

また、さまざまな文化現象を「文化遺産」としてまとめあげる視点は、前年度までの議論で明らかになったとおり、19世紀から20世紀にかけてのナショナリズムの高揚によってはじめて生まれたものである。こうした事実は、「文化遺産」という視角がかなりの一般性を持つことを示しているが、文化遺産の担い手自身がそれを文化遺産とみなさない事例においては、有効性をもたないことが当初危惧されていた。しかし今回のシンポジウムでは、ほとんどすべての文化現象が外からのまなざしを受けつつ変貌していることをふまえ、むしろ積極的に文化遺産として考えるべきだという見かたが提示された。

機関研究の副題にある「コミュニティ」は、閉鎖的な担い手集団を想起させる危険があるものの、そうではなく外部に開かれたゆるやかな集団とみなすことにより、「伝承のレスポンスビリティ（応答性、責任）」という複雑な問題にむしろ解決の糸口を開くことが示唆された。これは、意匠のコピーライト（知的所有権）の問題にも連なっている。多くの事例においては、個人や会社が権利を有する著作物と同じように文化の知的所有権を厳密なかたちで主張することには、限界があるからだ。つまり、文化の担い手は、文化を広めようとするいっぽうで、政治的権威や大資本企業に悪用されることを警戒しなければならない。この二極のバランスをとるためには、文化を独占するのではなくシェア（共有）しながら運用していく態度が重要だと指摘された。シンポジウムで検討できた事例はかぎられているが、それ以外の多くの事例において文化遺産に関わるコミュニティが立ちあがる背景として、こうしたシェアしようとする意思が働いていると推測された。

シンポジウムのテーマとなっているチェンジ（変化または変更・変容）に関しては、とりわけ非アカデミックな

場において、文化遺産の継承にとっては否定的なものとなることが多かった。しかし無形文化遺産においては、同一とみなされることがらの反復によってものが伝承されており、毎回の実践が否応なく微妙な差異をはらむ。このため、さまざまな時代状況に応じて細部を変更していくことは別の点で同一性を保つためにむしろ重要であり、そうした変更にもかかわらず反復のすべてを同一とみなす担い手自身の視点を理解することが研究者や行政実務者にとっても重要だと指摘された。こうした視点の転換は、ミクロないしローカルな視点を謳いあげる相対主義的アプローチを構成するもうひとつの重要な主張である。

機関研究に関連した公表実績

河合洋尚・飯田卓（編）『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』国立民族学博物館調査報告、2016年3月。

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースの構築を行う、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。初年度は、プロジェクトに係る基盤構築として、フォーラム型情報ミュージアム委員会のもとにシステム開発WGを置き、資料データ整備やデータベース間の総合連携、公開方法等について検討を進めた。併せて、ウェブサイト公開のため、既存紙ベース『月刊みんぱく』378冊について、写真のデータ化及びPDF化を実施した。

また、「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、「『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築」、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」及び「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」の4つの研究プロジェクトを開始し、ソースコミュニティとの共同作業、北アリゾナ博物館（米国）、アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）及び国立民俗博物館（韓国）との国際学術協定に基づく国際共同研究等を通じて、情報の多層化、多言語化を推進した。

2015年度は、新たに「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」及び「北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に」の2つの研究プロジェクトを加え、合わせて6つのプロジェクトを実施した。また共同研究の実施のため、新たに国立台湾歴史博物館との間の学術研究交流に関する協定書を2015年10月に締結した。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
伊藤敦規	北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有	開発型	2014年6月～2018年3月
朝倉敏夫	「朝鮮半島の文化」に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築	強化型	2014年6月～2016年3月
福岡正太	徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	2014年6月～2016年3月
林 勲男	民博所蔵「ジョージ・ブラウン・コレクション」の総合的データベースの構築	強化型	2014年6月～2016年3月
野林厚志	台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	開発型	2015年4月～2019年3月
岸上伸啓	北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に	強化型	2016年1月～2017年12月

*2015年度実施分

**開発型は4年以内、強化型は2年以内

実施状況

4月に、米国アリゾナ州から3名のホビを招聘し、国立民族学博物館（以下民博）にて資料熟覧を行うと同時に、民博国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』（2015年4月16日～17日）を主宰した。このワークショップの目的は、民博による他機関へのソースコミュニティ熟覧者の派遣、もしくは他機関によるソースコミュニティの招聘を具体的に念頭に置きながら、熟覧実施とその記録に関する注意点や配慮すべき点をプロセスごとに確認することにあつた。また、従来の文化人類学者自身が移動するフィールド調査と、ソースコミュニティの人々自身を移動させる熟覧調査との相違点を検討することで、文化人類学的調査の手法やドキュメンテーションの展開を図った。ワークショップ参加機関は、ホビの宗教指導者や木彫人形作家に加え、北海道白老のアイヌ民族博物館（館長、学芸員）、天理大学附属天理参考館（学芸員）、野外民族博物館リトルワールド（主任学芸員）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター（准教授、博士研究員、技術補佐員）であつた。

6月から8月までの約2ヶ月間、米国アリゾナ州とニューメキシコ州に滞在し、学術協定を結んだ北アリゾナ博物館が所蔵するホビ製宝飾品資料の写真撮影、資料熟覧、ソースコミュニティでの現地報告会などを行った。

9月は、米国ワシントンDCで開催された Association of Tribal Archives, Libraries, and Museums の国際会議に出席し、最先端の議論を聴講すると共に、スミソニアン協会の国立アメリカン・インディアン博物館やコレクション・リサーチ・センターなどを訪問し、資料収蔵状況やドキュメンテーション化の実態を学んだ。さらにDCでは、北アリゾナ博物館やスミソニアン協会の国立アメリカン・インディアン博物館の資料管理スタッフと、本プロジェクトの進捗や今後の予定などを検討し、将来的に協力して実施することを確認した。

10月は、フォーラム型情報ミュージアムの別の開発型プロジェクト（野林厚志代表、「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」）に関連して台湾で開催された国際ワークショップに参加し、本プロジェクトの進捗と全体プロジェクトの意義を口頭発表した（「民族学博物館と資源社群の再相會——意義与方法論」国立臺灣歴史博物館と日本国立民族学博物館交流ワークショップ『民族学と歴史学的の交會』国立臺灣歴史博物館（2015年10月15日～10月17日））。

11月には、ホビから2名の熟覧者を招聘し、民博で資料熟覧を実施したばかりか、他館での熟覧に派遣した。愛知県犬山市の野外民族博物館リトルワールド（99点）、奈良県天理市の天理大学附属天理参考館（26点）で熟覧し、その様子を静止画と動画で撮影した。民博での熟覧も行い、昨年度から実施してきた約430点のホビ製とされる全資料の熟覧とその記録が終了した。この時には、4月に実施した国際ワークショップと同様、アイヌ民族のアーティストとホビのアーティストとの交流の機会も設けた。

12月に再度渡米し、夏季に実施したアリゾナ州の北アリゾナ博物館での資料写真撮影と熟覧調査を継続して行い、合計約500点の資料熟覧を終えた。全ての作業の様子を映像と静止画で撮影した。また、ホビ保留地での進捗報告会を開催し、博物館に招聘・派遣できなかった人びとも、資料熟覧調査の様子を共有した。

1月には、東京の国立情報学研究所でシステム構築に関する研究打合せを開催した他、民博館内の関係者に進捗を報告する機会を設けた（第271回民博研究懇談会、2016年1月20日）。

2月には、民博で国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」を開催・主宰した。スミソニアン協会国立アメリカン・インディアン博物館や極北研究センター、プリティッシュコロニア大学人類学博物館などから研究者を招聘し、フォーラム型情報ミュージアムのシステムデザインと、博物館とソースコミュニティとの間に顕在する協働の思想を同時に検討した。

また、北海道アイヌ協会と民博との間で行っているアイヌ伝統技術保持者の受入制度の機会を利用し、これまで行ってきた熟覧調査や事後報告会のやり方を相対化することが出来た。熟覧以前の情報提供や報告書の執筆と口頭発表といったアイヌ協会側のやり方が非常に参考になった。

3月は、来年度からの資料熟覧を予定している広島県福山市の松永はきもの資料館を訪問し、事務局長など関係者と今後の研究調査活動の方向性やスケジュールについて打合せを行った。この文化施設は2013年度までは私立だったが（旧称 日本郷土玩具博物館）、2015年7月に行政と地域ボランティアによる協働運営に運営形態が変わった（広島県、福山市、経済環境局、文化課）。このためこれまでに実施してきた私立博物館、宗教法人、大学共同利用機関法人とは異なる運営形態における協働プロジェクトが展開することとなる。また、国立民族学博物館・金沢大学とで実施した研究フォーラム「文化遺産の保存と活用：ミュージアムの視点から」において、本プロジェクトの

意義と進捗を講演した。

全期間にわたり、これまで実施した資料熟覧調査の映像・音声記録の文字起こし、内容確認、翻訳、映像字幕編集を行った。また、随時、日本国内外の研究者に本プロジェクトの概要や詳細を紹介した（ケニア国立博物館、パプアニューギニアの大学、国立オーストラリア大学、首都大学東京、関西大学、東京大学など）。なお、一部の熟覧者の招聘などについて、科学研究費助成事業（若手研究 A『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：26704012））の予算を用いて実施した。

成果

2年目となる2015年度は、学術協定に基づく国際共同研究を実施しながら、3度の国際ワークショップでの発表（その内2度は実行委員長として主宰）、2カ国4機関での熟覧調査、13度の研究発表・招待講演・ソースコミュニティにおける現地報告会を行った。また、4本の論文・報告書・エッセイの執筆を行った。さらに、フォーラム型情報ミュージアムの本プロジェクトに関するデータをビューアにまとめる予定であるため、そのシステムデザインに関する監修を行っている。

成果の公表実績

論文

伊藤敦規 「再会ツールとしての著作権——国立民族学博物館所蔵カナダ先住民版画資料の著作権処理を事例として」 齋藤玲子（編）『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをととして』（『SER 国立民族学博物館調査報告』131：211-227。[査読有り]

エッセイなど

伊藤敦規 「アメリカ合衆国南西部先住民ホピのソーシャルダンス」、国枝たか子編、『世界のダンスⅡ——百カ国を結ぶ舞踊文化』、pp.78-79、不味堂。
伊藤敦規 「米国先住民ミュージシャン エド・カポーティ」『月刊みんぱく』39(11)：18-19「音の居場所」国立民族学博物館。
伊藤敦規 「民族学博物館とソースコミュニティとの再会」『民博通信』150：10-11「Project」、国立民族学博物館。

シンポジウム・ワークショップなど

- ・「[映像記録『Host Museum and Source Community Responsibilities in Collection Reviews（話者：シンシア・チャベス＝ラマー（国立アメリカン・インディアン博物館、資料管理副部長）、ジム・イノーテ（ズニ博物館、館長）』の視聴]の解説」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』（2015年4月16日）
- ・「[映像記録『Demonstration of the Collection Review（話者：シンシア・チャベス＝ラマー（国立アメリカン・インディアン博物館、資料管理副部長）、ジム・イノーテ（ズニ博物館、館長）』の視聴]の解説」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』（2015年4月16日）
- ・「趣旨説明——国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」および科学研究費助成事業若手研究(A)「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」の目的と視座」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』2015年4月16日
- ・「資料熟覧に関する人類学的ドキュメンテーションについて」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』（2015年4月17日）
- ・「まとめ」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』（2015年4月17日）
- ・「民族学博物館與資源社群の再相會——意義與方法論」國立臺灣歷史博物館與日本國立民族學博物館交流工作坊『民族學與歷史學的交會』國立臺灣歷史博物館 [査読無し]（2015年10月16日）
- ・Kathy Dougherty and Atsunori Ito “Hopi Collection Review Project in the US and Japan” in the Minpaku International Workshop System Development for the Info-Forum Museum: Philosophy and Technique,

National Museum of Ethnology, Japan. (2016年2月12日)

その他の学会発表や招待講演など

- Kelley Hays-Gilpin, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema 2015 “Hopi Overlay Program”, Museum of Northern Arizona 85th Hopi Festival, Easton Collections Center. (2015年7月4日)
- 伊藤敦規、ジェロ・ロマベンティマ、マール・ナモキ 2015「ソースコミュニティとの協働資料熟覧」伊藤敦規代表、国立民族学博物館共同研究会『米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究、2015年度第2回研究会』、国立民族学博物館。(2015年11月14日)
- 「米国先住民ホピによる民博所蔵民族誌資料熟覧の紹介」伊藤敦規代表、国立民族学博物館共同研究会『米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究、2015年度第2回研究会』、国立民族学博物館。(2015年11月14日)
- Atsunori Ito 2015 “Collaborative Reviewing Efforts of Hopi items in museum collections both domestic and international” Shungopavi Community Building, Arizona, USA. (2015年12月11日)
- 「民族学博物館資料の高度情報化とオンライン協働環境整備に向けた取り組み——フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの中間報告として」第271回民博研究懇談会。(2016年1月20日)

映像作品上映会

- Kelley Hays-Gilpin, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema 2015 “Screening Hopi Jewelry: Hopi Culture Expressed on Silver” “Hopi Overlay Program” in Museum of Northern Arizona 85th Hopi Festival, Easton Collections Center. (2015年7月4日)

『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築

代表者：朝倉敏夫 2014年6月～2016年3月

実施状況

「朝鮮半島の文化」に関する本館資料の全体的データベースの基礎資料の整備

- 本館と韓国民博と「食」関連資料のデータベースの相互活用
- 本館と韓国民博を基盤としたデータベースの世界発信

成果

民博の資料：1988年以前に収集した資料 2726点

- ① 民博の既存のデータ
- ② ①を辛璋根によるデータ・チェック、韓国語での補足説明
- ③ ②を日本語に翻訳（高正子他）

このうち、「食」関連の資料 557点

- ④ 英語に翻訳（玄企画）
- ⑤ 書き込み：韓国語で3人（金セツピョル・金月徳・李徳雨）2016年3月に完成

韓国民博の資料：『韓民族歴史文化図鑑 食生活』387点

- ① 韓国語版の英訳（韓国民博）
- ② 韓国語版の日本語訳（権允義）

特別展「韓日食博」での公開（丸川雄三）

国立民族学博物館資料 459点

分類：甕、壺、籠、箱、膳、盆、食器、調理器、祭礼器、農具

韓国国立民俗博物館資料 384点

分類：食器、食膳、調理器、貯蔵・運搬具、加工具

成果の公表実績

- 「韓国食文化データベース」の公開
- 特別展「韓日食博」において展示公開した標本資料とその関連情報をウェブサイトで発信

- 2016年度の前半に館内及び関係者に公開し、内容等調整のうえ一般公開

「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」

代表者：福岡正太 2014年6月～2016年3月

実施状況

これまで現地での意見交換に基づき、伊仙町馬根集落の十五夜およびイッサンサン行事、天城町西阿木名集落の十五夜行事の調査撮影をおこない、データの充実をはかった。これまでのデータと合わせて、フォーラム型情報ミュージアムのシステムへのデータ登録を進めている。あわせて、現在の伝承における諸問題と映像記録活用の可能性について、徳之島町井之川集落、天城町西阿木名集落、天城町立西阿木名小学校、天城町教育委員会等でインタビュー撮影をおこなった。西阿木名小学校は、民謡保存会の協力により郷土の芸能の学習に力を入れており、授業の撮影もおこなった。また、徳之島町金見集落と天城町西阿木名集落において映像の上映と意見交換会を開催した。金見集落では、徳之島民謡を研究する酒井正子氏の協力を得て、氏が撮影した25年前の映像、住民が撮影した20年前の映像、民博が撮影した5年前の映像を比較上映し、様々な機関や個人が所蔵する記録をフォーラム型情報ミュージアム等のシステムに集積する可能性および今後も記録を重ねていくことの意義について議論をおこなった。なお、徳之島におけるフォーラム型情報ミュージアムの公開と活用について、天城町および伊仙町の関係者と協議した。

成果

徳之島の各集落は、少子高齢化等により、その伝統の継承に困難をかかえている。このプロジェクトの基となった芸能の映像撮影は、消滅が心配される集落の芸能の記録作成および映像を活用した伝承活動の活発化を期待する地元の関係者の要請を受けて開始された。このプロジェクトにおいては、2年間に7集落において芸能等の補充調査撮影をおこない、計28集落の芸能の映像記録を主なコンテンツとするフォーラム型情報ミュージアムの構築を日英2言語により続けてきた。並行して、徳之島各集落の公民館等で6回の上映および意見交換会を開催し、記録映像の活用の可能性について探った。

この研究により、次のことがわかってきた。映像記録は自分たちの芸能を再確認する機会となること、他の集落との比較の機会となること、芸能の習得や創造の参考となることである。さらに、映像は見る者の記憶を活性化し、芸能に関する経験や知識を引き出す大きなきっかけとなることも明らかになった。こうした映像の直接的な効用に加えて、私たちが調査や撮影のために訪問すること自体が、芸能を伝承する上でのある種の刺激となることも地元関係者からしばしば指摘された。また、このプロジェクトによる徳之島芸能の記録映像の集積により、研究者や研究機関等が記録した資料や住民が記録保存している資料についての情報が寄せられるなど、関係資料の集積にもつながる可能性が明らかになった。

このシステムの本格的な稼働後の利用については、次のような見通しを得ている。地元関係者と協力した小中学校における地域の文化の学習の機会は、子どもだけでなく、保護者の関心と参加を誘うことにもつながっており、集落の伝統文化伝承において学校への期待が高まっている。そこで学校におけるシステムの利用を進めるべく調整を進めている。また、島外に暮らす集落関係者が増えており、こうした人々がふるさとの芸能に触れ、学ぶ機会を提供することが期待されており、郷友会等、島外に暮らす集落関係者のあいだでの利用の機会を作る必要がある。

成果の公表実績

このプロジェクトで試作したデータベースについては、ウェブを通じた稼働、特に動画の配信について実験を重ねて、最終的な調整をおこない、2016年度の早い段階で徳之島での公開をおこなう。なお、最初の公開場所は、天城町ユイの館と伊仙町立歴史民俗資料館を想定している。また、天城町立西阿木名小学校の授業において試用の了承を得ている。研究機関以外の、島外での一般公開については、集落ごとに合意を形成することが望ましく、システムを利用してもらった上で同意を得る予定である。

「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」

代表者：林 勲男 2014年6月～2016年3月

実施状況

2014年4月に始まった本プロジェクトでは、海外からソロモン諸島資料に関してリース・リチャーズ氏、メラネ

シア資料の植物材料に関してロビン・ハイド氏（オーストラリア国立大学名誉教授）、フィジー諸島資料に関しては、ロデリック・エウイン氏（タスマニア大学名誉教授）を、またサモアとトンガの資料の熟覧調査のため、山本真鳥氏（法政大学教授）を招聘した。これによって新たに収集されたデータは、G. B. コレクション・データベースに反映させる作業を始めている。ブラウン自身による収集活動に関わるデータを、彼の著作や書簡から析出し、ウェブサイトに掲載するための作業を開始した。

海外調査としては、オーストラリア、ニュージーランド、連合王国で調査を実施し、コレクションのこれまでの変遷や関係記録の確認、および民博が購入した際に連合王国外への輸出が認められなかった標本資料の確認をおこなった。同時に、関係機関の研究者に対して本プロジェクトについて説明をおこない、協力を要請した。

成果

招聘した研究者たちのコレクション資料の熟覧によって、新たなデータが得られた。これらをG. B. コレクション・データベースにいかんにか反映させるか、データベースおよびウェブサイトのインターフェイスのデザインも含めた検討を開始している。

ジョージ・ブラウンの収集活動並びにコレクションの社会的・歴史的背景については、彼の著書および書簡の調査を通じて関係情報を収集し、フォーラム型情報ミュージアム上での見せ方について検討を開始している。

英国での調査によって、大英博物館、ディスクバリー博物館（ハンコック博物館が収蔵していた当時のG. B. コレクションに関するデータを所有）、ボウズ博物館（英国で最初にG. B. コレクションを所蔵し展示をおこなった博物館、ブラウンの生誕の地であるバーナード・キャスルにある）からコレクションの購入・売却、展示、他の博物館との間でおこなわれた資料の交換等に関するデータを入手した。その分析と公開に向けての手続きの検討、および紙媒体からデジタル化する作業を開始している。これらの研究機関の担当者に加えて、ジョージ・ブラウンの弟の直系筋にあたるマイケル・ブラウン氏（ニューキャスル近郊在住）や、2012年度に「G. B. コレクションの再文脈化に関する実践的研究」のため、AHRC IPSで民博の外来研究員として受け入れたクリストファー・マキュー氏らの協力により、情報収集のネットワークが徐々に拡大し、かつてコレクションを所蔵していた機関での管理や展示の様子についても、データが集まり始めている。

すでに、G. B. コレクションの日本語・英語のデータベースは一般公開していたが、G. B. コレクション及びそのデータベースに関する簡単な説明文を、日本語と英語に加えて、メラネシア・ピジン語、サモア語、トンガ語、フィジー語にし、インターフェイスを修正してそれぞれの言語でこの解説を読めるようにした。

成果の公表実績

館内向け公開は、2016年のゴールデンウィーク明け頃を目指している。データベース自体の一般公開は、2016年の初秋を目指しているが、コレクションの遍歴に関する海外の機関から提供されたデータに関しては、公開・非公開について精査していく必要がある。

また、このプロジェクトの経過とその成果について、英文の論文もしくは研究ノートを2016年度中に執筆する計画である。

データの収集活動を継続すると共に、データベースの利活用についてユーザー側の利便性を検討していく。2015年度に招聘したDivine Word大学（パプアニューギニア）のクレイグ・フォーカー教授は、ニューアイルランド島在住であり、G. B. コレクションのソース・コミュニティの住民や出身の大学生たちとともに、G. B. コレクション・データベースの利活用についての検討に参加してもらい、利用しやすいインターフェイルを共に開発していく計画である。

「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

代表者：野林厚志 2015年4月～2019年3月

実施状況

本年度は研究計画にしたがい、次の3点の内容に着手した。

1) 台湾資料、琉球列島資料に関する情報整理ならびに日本語、中国語による資料台帳の作成。2) 学術交流締結機関とのプロジェクト内容の協議、確認。3) 台湾資料に関する情報収集のための現地予備調査。

1) については、台湾、琉球列島諸島の資料に関連した文献情報の収集（琉球列島資料）、台湾および海外の学術機関のデータベース上で公開されている本館所属と関連した資料に関する情報の収集（台湾資料を中心）を行った。また、台湾資料の標本資名については、英語訳、中国語訳を作成した。

2)については、(1)順益台湾原住民博物館を訪問し、博物館長ならびに担当学芸員にプロジェクトの内容についての説明を行い、協力関係の発展的な継続について確認、(2)国立台湾大学考古人類学系および国立台湾大学情報センターを訪問し、当該部門で進めてきた海外資料データベースとの将来的なリンクも含めた研究計画について協議、(3)国立史前文化博物館を訪問し、次年度以降におけるビレッジミーティングの計画について協議、(4)国立台湾歴史博物館と学術協定を締結し、研究協力と成果の公開についての協議、ならびにキックオフとなるワークショップを開催、(5)琉球大学風樹館、琉球大学URAを訪問し、琉球関係資料の資料情報収集のネットワーク形成について協議を行った。

3)については、2)における活動時に並行して先方機関等での予備的調査を実施した。

これらの成果の公開の一環として、外部資金も活用しながら、国際ワークショップを実施した（1月24日）。

成果

当初の研究計画におおむねしたがった研究活動が実施できた。特に国立台湾歴史博物館において実施した国際ワークショップでは、外部資金を活用しながら、館内メンバー全員の参加を実現し、双方の将来構想も含めた情報、意見を担当者のみならず先方機関の所属職員と広く共有することができた。

資料台帳については、台湾資料については英語、中国語、日本語の3言語による目録情報の公開はデータコンテンツとしては可能な状況となっており、システム部分の構築を待つ状態となっている。

成果の公表実績

出版

野林厚志

2015年12月24日 「情報遺産」を博物館が構築する意義——「核としての周縁」からの発信』『民博通信』第151号：12-13

公開シンポジウム

(1) 国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム国際ワークショップ

「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

(中文題目「台湾及周邊島嶼的物質文化之生態學適應性」)

日時：2016年1月24日（日）

場所：国立民族学博物館第5セミナー室

【プログラム】

10：30～

野林厚志・日高真吾（国立民族学博物館）

「収蔵庫資料閲覧のイントロダクション」

11：00～11：40

「台湾および沖縄資料の閲覧」

公開ワークショップ（13：00開場）

13：15～13：45

野林厚志（国立民族学博物館）

「プロジェクトの概要と博物館資料のデータベース化の国際的状況」

13：45～14：45

佐々木健志（琉球大学風樹館）

「沖縄の祭祀に残る藁算と民博の藁算資料の概要」

15：00～16：10

陳俊男（国立臺灣史前文化博物館南科分館籌備處）

「台湾南科園區史前時代的生態資源利用」（逐語通訳有）

（「台湾南科園區における先史時代の資源利用」）

16：10～16：40

質疑応答・総括

16：40～18：00

プロジェクト・ミーティング

(2) 国際ワークショップ「国立臺灣歴史博物館 国立民族学博物館2015年「民族学と歴史学の交流」博物館交流

ワークショップ」

日時：2015年10月15日～16日

場所：国立台湾歴史博物館

本館参加者：須藤健一館長、伊藤敦規、寺村裕史、日高真吾、野林厚志

研究協力者：黄貞燕（国立台湾芸術大学）、范如苑（国立台南大学）、河村友佳子（元興寺文化財研究所）、和高智美（文化創造巧芸）

【プログラム】

時間	日期	10月15日（木）
展示與文化詮釋		
15：00～16：30		本館常設展ならびに「鉅變1895」、「舊邦維新」、「二戰下の臺灣人」見学と意見交換
16：40～17：40		座談会：(民族)の歴史記憶、戦争の記憶の展示と再現 ナビゲーター：呂理政（国立臺灣歴史博物館館長） 参加者：民博ならびに臺史博のメンバー

時間	日期	10月16日（金）
09：40～10：00		臺史博と民博の協定調印式
博物館價值與社會責任		
10：00～11：00		基調講演：友好と公正な博物館 呂理政（国立臺灣歴史博物館館長）
11：10～12：10		專題演講：「21世紀の民族学博物館と博情館」 須藤健一（国立民族學博物館館長）
12：10～13：10		昼食
民族學與博物館の新課題		
13：10～14：30		報告題目：「台湾におけるエスニシティと動物観——イノシシとブタの利用から考える」 報告人：野林厚志（国立民族學博物館教授）
14：40～16：00		報告題目：「民族学博物館とソースコミュニティの再会——意義と方法論」 報告人：伊藤敦規（国立民族學博物館助教）
16：00～		休憩と夕食
原住民の祭礼と文化復興		
20：00～02：00 夜祭開幕(23：00)		台南シラヤ族夜祭の見学

時間	日期	10月17日（土）
10：30～12：00		座談討論：臺灣平埔族祭礼文化の復興 ナビゲーター：呂理政（国立臺灣歴史博物館館長） 参加者：臺史博及民博研究メンバー
12：00～13：10		昼食
博物館資源と科学技術の応用の趨勢		
13：10～14：30		報告題目：「地理情報システム（GIS）を用いた時空間情報の統合の方法論とその意義」 報告人：寺村裕史（国立民族學博物館助教）
14：40～15：20		座談討論：臺史博と民博のクラウド技術応用と資料協力 ナビゲーター：謝仕淵（国立臺灣歴史博物館副研究員） 参加者：臺史博ならびに民博研究メンバー
臺史博と民博協力課題の對話：内田資料を主とした議論		
15：30～16：50		報告題目：内田先生資料と日本学者の収集活動の意義 報告人：野林厚志（国立民族學博物館教授）

17:00~17:40	座談討論：国立民族学博物館所蔵の内田資料にもとづく臺灣研究、臺南研究の一つの方向性 ナビゲーター：謝仕淵（国立臺灣歴史博物館副研究員） 参加者：臺史博と民博研究メンバー
-------------	--

「北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に」

代表者：岸上伸啓 2016年1月～2017年12月

実施状況

本年度は、下記の3点について調査・研究を実施した。

- (1) 民博が収蔵している北米北方先住民資料に関してすでにデータベース化されている約2,000点の標本資料の基本情報を整理し、検討した。この作業に基づいて、日本語の基本情報データベースをエクセルで整理した。
- (2) 標本資料を制作もしくは使用した諸民族を地域ごとに分類するために、文化領域の大枠を検討した。具体的には、アラスカ地域、北西海岸地域、台地地域、大平原地域、亜極北地域、五大湖・セント・ローレンス川地域、大西洋海岸地域、カナダ極北地域、グリーンランドの9地域に大別することの有効性を検討した。同時に北米北方先住諸民族の文化と社会、歴史に関する基本文献を渉猟し、各標本資料に関連する民族や文化、社会、歴史、地理環境、映像情報、研究文献情報について調査し、各標本資料に追加する画像やデータを準備した。
- (3) 2016年度に予定している現地情報の収集や基本情報の確認と現地語化するための現地調査の準備をカナダの博物館の研究者と連絡を取りながら行った。

成果

本年度の研究成果は、以下の3点である。

- (1) 本館が収蔵している北米北方先住民資料に関して約2,000点の標本資料の基本情報をエクセルで整理した。その結果、アラスカ・カナダ・グリーンランドのイヌイト関連資料と北米北西海岸資料が大半を占めているが、各文化領域を代表する標本資料も存在していることが判明した。ただし、極北地域と北西海岸地域を除く標本資料については現地語名などの情報が欠落していた。
- (2) 多数の関連研究文献の渉猟を通して、北米北方先住民文化を文化領域で分類する枠組みとして、アラスカ地域、北西海岸地域、台地地域、大平原地域、亜極北地域、五大湖・セント・ローレンス川地域、大西洋海岸地域、カナダ極北地域、グリーンランドの9地域に大別することがもっとも妥当であるという結論を得た。
- (3) 本プロジェクトを推進していくためには、バンクーバー市にあるUBCの人類学博物館、アルバータ州エドモントン市のロイヤル・アルバータ博物館、アルバータ州カルガリー市のグレンボー博物館、サスカチュワン州リジャイナ市のロイヤル・サスカチュワン博物館、マニトバ州ウィニペグ市のマニトバ博物館とウィニペグ美術館、オンタリオ州トロント市のロイヤル・オンタリオ博物館、ケベック州モントリオール市のマッコード博物館、ケベック州ガティノー市のカナダ歴史博物館、ノヴァスコシア州ハリファックス市のノヴァスコシア博物館を調査訪問し、標本資料情報を確認するとともに、現地語翻訳の協力についての話し合いを行う必要があることが分かった。

成果の公表実績

公開シンポジウム

岸上伸啓 「民博のフォーラム型情報ミュージアム構想」国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」国立民族学博物館・第4セミナー室（2016年2月11日）

共同研究

2015年度の応募・採択状況

課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分		2015年度				
研究代表者	課題区分	申請	採択	継続	計	
一般	館内	課題1	4	3	5	11
		課題2	1	1	2	
	客員	課題1	0	0	0	0
		課題2	0	0	0	
	公募	課題1	10	6	11	18
		課題2	2	0	1	
若手	課題1	1	0	3	4	
	課題2	1	1	0		
計		19	11	22	33	

共同研究課題一覧

○印は公募による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究年度
明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルト、ニヅフ資料の再検討	齋藤玲子	2	2012-2016
○ アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較	小野林太郎	1	2012-2016
○ 「統制」と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ	土佐桂子	1	2012-2016
映像民族誌のナラティブの革新	川瀬 慈	1	2013-2016
聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究	杉本良男	1	2013-2017
米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究	伊藤敦規	2	2013-2017
○ 表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に	窪田幸子	1	2013-2017
○ エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望	杉島敬志	1	2013-2017
○ 宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界	長谷千代子	1	2013-2017
○ 東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化	福岡まどか	1	2013-2017
○ 近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開	吉江貴文	1	2013-2017
● 宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究	石森大知	1	2013-2016
● 再分配を通じた集団の生成に関する比較民族史的研究——手続きと多層性に注目して	浜田明範	1	2013-2016
現代「手芸」文化に関する研究	上羽陽子	1	2014-2018
近世カトリックの世界宣教と文化順応	齋藤 晃	1	2014-2018

家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に	森 明子	1	2014-2018
○ 政治的分類——被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する	太田好信	1	2014-2018
○ 生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究	鏡味治也	1	2014-2017
○ 呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して	川田牧人	1	2014-2018
○ 資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から	長谷川 清	1	2014-2018
○ モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	是澤博昭	2	2014-2018
● 演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点	吉田ゆか子	1	2014-2017
チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	長野泰彦	2	2015-2019
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾瑞穂	1	2015-2019
驚異と怪異——想像界の比較研究	山中由里子	1	2015-2019
応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	丹羽典生	1	2015-2019
○ 考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	ERTL, John	1	2015-2019
○ 宇宙開発に関する文化人類学からの接近	岡田浩樹	1	2015-2019
○ 放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	中原聖乃	1	2015-2019
○ 医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働	飯田淳子	1	2015-2019
○ 個-世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	齋藤 剛	1	2015-2019
○ 確率的事象と不確実性の人類学——「リスク社会」化に抗する世界像の描出	市野澤潤平	1	2015-2019
● 高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究	呉屋淳子	2	2015-2018

「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動

——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の再検討」——

国立民族学博物館が所蔵する北海道、樺太、千島の民族資料のうち、第二次世界大戦終戦までに収集されたことが明らかなものは、アイヌが1000点以上、ウイльтаで280点以上、ニヴフで70点以上ある。これらは伝統的な特徴をよく残しており、素材や製作技法といった物質文化研究を進めるうえで重要であるとともに、現在では収集できない貴重なものが多数含まれている。ただ残念なことに、当時の調査・収集時の誤解・誤認や資料管理の限界、また、数度の管理替えによる情報の紛失、転記・入力時のミスなどにより、資料データの欠けているものや誤りが少なくない。しかし、これらの資料は収集者が明らかなものが大部分で、その足跡をたどることによって、情報を再検討し、修正・追加できる可能性が十分にある。本研究では、各民族の物質文化、言語等に関する専門家が共同研究を行うことによって、資料に適正な情報を付すとともに、あわせて明治から昭和前期までの人類学または民族学者と被調査者・資料提供者との関係など、資料が集められた当時の研究状況と社会的な背景を明らかにする。

研究代表者 齋藤玲子

班員（館内）佐々木史郎

（館外）大塚和義 小川正人 加藤 克 北原次郎太 木名瀬高嗣 小西雅徳 田村将人
丹菊逸治 津曲敏郎 手塚 薫

研究会

2015年11月7日

成果出版に関する打ち合わせ

齋藤玲子（国立民族学博物館）「出版物の概要と構成案について」

加藤 克（北海道大学）「東京大学人類学教室移管資料を対象とした『再検討』」

全 員 「論文・報告の概要について」

2015年11月8日

丹菊逸治（北海道大学）「ニヴフ関連資料の記載法と表記法をめぐるいくつかの問題」
津曲敏郎（北海道大学）「金田一編『日本国内書人種の言語』記載のウイльта語について」
全 員 「論文・報告の概要について」
討論および今後のスケジュール確認

成果

共同研究員各自がこれまでの成果を持ち寄り、成果刊行物に執筆予定の内容について報告し、討論をおこなった。とくに、2014年度におこなった東京大学所蔵の坪井正五郎関連資料から見えてきた1907年の樺太調査の経緯と収集された民族資料等の情報、および東京帝国大学理科大学時代の1884年に発行された“Catalogue of archaeological specimens with some of recent origin”に記載の資料のうち、民博に移管された資料と照合できたものが多数あったことは重要な成果であると確認された。

また、1938年に日本民族学会が派遣した北方文化調査隊として樺太で調査と資料収集にあたった宮本馨太郎が残した同学会附属民族学博物館の資料カードの情報が有用であることも再確認された。とくにウイльта語やニヴフ語で表された標本資料の現地名は言語学の視点からも興味深い情報であり、博物館資料の表記法について課題を提起するものとしても注目された。

「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較」——

アフリカ大陸で誕生した現生人類は、約5万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼海域に移住・拡散した。島嶼海域に進出した人類は、自然資源や加工生産物を交換するために海を渡る移動を繰り返し、その過程で広範囲に及ぶネットワークを形成してきた。アジア・オセアニアには、そうした海域ネットワークを生活基盤とする社会が各地にみられる。本研究の目的は、この海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を、物質文化と資源利用の様式ならびにその分布に関する時空間の双方の面からの比較を通じて、人類史的な視点で検討するところにある。このうち時間面では、5万年程度の幅の考古学的時間と約100年程度の幅の民族誌的時間を、空間面では、日本を含む東アジア、東南アジア、オセアニアの海域を、それぞれ比較の準拠枠と、主な検討事項としては資源利用と物質文化をテーマに検討を進め、海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を明らかにするのが狙いである。

研究代表者 小野林太郎

班員（館内）飯田 卓 印東道子
（館外）赤嶺 淳 秋道智彌 片桐千亜紀 島袋綾野 鈴木佑記 田中和彦 玉城 毅
長津一史 橋村 修 深田淳太郎 山形真理子 山極海嗣 山口 徹

研究会

2015年6月21日

小野林太郎（東海大学）・長津一史（東洋大学）「今年度研究会の方向性について」
秋道智彌（国立民族学博物館）「トビウオ漁から見た琉球の位置：アジア・太平洋の視点から」
赤嶺 淳（一橋大学）「ナマコ利用の多様化と可能性——マレーシアの事例から」

2015年10月15日

長沼さやか（静岡大学）「漁民の移動と定住：中国珠江デルタの水上居民からの考察」（特別講師）

2015年10月26日

小野林太郎（東海大学）・長津一史（東洋大学）「今回のテーマと課題」
飯田 卓（国立民族学博物館）「マダガスカル島の対大陸ネットワークと沿岸ネットワーク」
竹川大介（北九州市立大学）「メラネシアの海産資源をめぐるネットワークと資源利用」（特別講師）
山口 徹（慶應義塾大学）「プカプカ環礁の植民地期におけるネットワーク」

成果

本年度は計3回の研究会を開催し、研究メンバーおよび特別講師による発表に基づき、活発な議論・検討を行った。本年度における発表により、本研究メンバー全員が最低1回の研究発表を行い、各テーマに関する総合的な議論を深めた。これに対し特別講師による発表では、本研究メンバーだけでは検討に限界のある東アジア海域の大陸

沿岸域の事例（長沼）や、メラネシアのイルカ資源をめぐるネットワークの事例（竹川）に注目し、比較論的視点から活発な議論を行った。また最終年度のため、研究成果公表計画についても各研究会の際にメンバーでの検討を重ねた。

「『統制』と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ」

ミャンマー（ビルマ）は1962年ネーウィンの軍事クーデター以来、半世紀の間に3つの政治体制（社会主義、軍政、大統領制）と2つの経済体制（社会主義体制における統制経済、経済制裁下の市場経済）を経験したが、一貫して物の流れや人的移動、情報などを中心に厳しい統制が課せられてきた。本研究会で扱う「統制」とは比較的可視化されやすい国家政策に留まらず、宗教、ジェンダーといった多様な領域に及ぶ不可視のイデオロギーと支配装置、さらに、隣組的な相互監視システムや言論統制などを通じて身体化された統制をも含む。他方、それぞれのコミュニティ内で、例えばミャンマーであれば、僧院を核とする宗教ネットワークや在家組織、精霊信仰の霊媒や信者たち、各少数民族や国際・国内NGOなどの組織やその参加者、その他ジェンダーや「親しい（キン）」を媒介とする繋がりの中に、「統制」をすり抜け、オルタナティブなネットワークを作る戦略的实践が存在してきた。本研究会では、こうした実践に着目し、「統制」と公共性という二つの観点から、統制解除へと急激に移行しつつあるミャンマーを中心に、社会的再編成、コミュニティの公共性やその変容を明らかにすることを目指す。

研究代表者 土佐桂子

班員（館内） 信田敏宏

（館外） 飯國有佳子 生駒美樹 伊藤まり子 伊野憲治 岡本正明 藏本龍介 斎藤紋子
高谷紀夫 田村克己 田村慶子 テッテツヌティ 松井生子

研究会

2015年8月3日

箱田 徹（大阪市立大学）「導きと対抗導きの世界 フーコー統治論からの権力論・公共性論」
フィールドから見たパブリック・プライベート・パブリシティ（全員発表）
総合討論

2016年2月7日

全員の草稿発表
コミュニティ・危機管理に関する検討（全員）
宗教に関する検討（全員）
民族に関する検討（全員）
総合討論

成果

この研究会の開催期間中に、ミャンマーは劇的に変化し、半世紀ぶりに文民政権が誕生することとなった。厳しい検閲制度が課せられてきたメディアにも、ここ数年で一定の言論の自由が確保されるようになった。他方で、携帯電話の普及とともにSNSを通じた情報流通が格段に増加した。情報流通の変化、意見表明媒体の拡大とともに、いわゆる公共性のありようもかなり変わってきたといえる。本年度は共同研究の最終年にあたっており、変化の方向性を十分に見据えつつ成果報告に結びつけることを目指して、二回の研究会を行った。初回は自己統治や権力論に関するフーコー研究者の報告を聴き、再度それぞれのフィールド地における事例をもとに、統制、統治、権力等に関して考察を深めた。また、全員討論を経て、パブリック、プライベート、パブリシティについて、個々の地域や事例をもとにローカルな概念の共通点、ずれなどを確認した。二回目は成果報告に向けて、各自が原稿の草案を準備し、コミュニティ・危機管理、宗教、民族という3つのクラスターに分け、統制と公共性に係わる議論を行った。

「映像民族誌のナラティブの革新」

近年、民族誌映画祭を中心とした国際的な研究交流が、メディアアートや映画界をも包摂しつつ、世界各地で盛んに展開し、人類学における新たな理論潮流が生み出されている。本研究の目的は、これらの国際的な研究動向を

踏まえ、人類学、映画、アートの実践が交差する場から、文化の記録と表象における表現の地平を理論的・実践的に開拓することである。本研究では、映像人類学の各学派の研究潮流の分析、アートや映画界における人類学的に採用可能な方法論の考察を行う。そして、共同研究のメンバーが実践する民族誌映画制作、音や写真のインスタレーション等の報告、議論を経て、映像民族誌の新たなナラティブを創造し、人類学および隣接する学問へその可能性を提言する。

研究代表者 川瀬 慈

班員 (館内) 伊藤 悟 春日 聡 小林直明 佐藤剛裕 田沼幸子 丹羽朋子 分藤大翼
村橋 勲 森田良成 柳沢英輔

研究会

2015年6月13日

成果出版に関する打ち合わせ

矢野原佑史 (国立民族学博物館) 「実験的民族誌映画 Fieldnote の上映」

分藤大翼 (信州大学) 「作品の構想発表」

村橋 勲 (大阪大学) 「難民村の生活——映像制作の構想発表」

川瀬 慈 (国立民族学博物館) 「イメージへの亡命——声とサウンドによるパフォーマンスの試み」

総合討論

2015年11月21日

成果出版に関する打ち合わせ

森田良成 (大阪大学) 『言葉で伝えることと映像で伝えること』

田沼幸子 (首都大学東京) 『マンチェスターの理想、バルセロナの現実——学んだことと実際』

田坂博子 (東京都写真美術館) 『恵比寿映像祭について』

総合討論

2016年2月28日

出版に関する打ち合わせ

藤井 光 (美術家) 「映像の試み『帝国の教育制度』」

丹羽朋子 (人間文化研究機構) 「映像アーカイブを現代社会にひらく——『20世紀の映像百科事典エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを見る』連続上映会での実験から」

総合討論 (全員)

成果

メンバー各自がとりくむ映像民族誌やインスタレーションについて発表を積み重ね、各自の目的や問題意識に則した制作方法論について理論的・実践的な議論を行った。個別具体的な映像民族誌の制作と公開の実践を、それぞれの研究者の研究意義と照らし合わせて考察した。映像民族誌における議論は、視聴者の存在や役割を軽視する傾向にあった。そのような流れに対して、本共同研究では、映画の制作と公開をめぐる議論をとおして生まれる、研究者と調査対象の人々との関係性の変化、あるいは映画公開によって創出される社会との新たなつながり、について考察した。作品を、被写体や、それを視聴する人々との創発的な営みのプロセスにあると位置づけ、映像実践をともなう人類学研究の可能性について検討した。

日本文化人類学会機関誌『文化人類学』80巻1号に本共同研究メンバーを執筆陣とする特集「人類学と映像実践における新たな時代に向けて」を発表した。

「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」

本研究は、聖地の現代的意義について、その多様性と共通性を明らかにするための比較研究である。そのさい、聖性の定義に関しては基本的に社会学的・社会人類学的視点に立ち、比較の対象をインド、中国、ロシアに限定し、当該地域における聖地の現代的意義とその歴史的背景について比較検討しようとするものである。西欧近代世界において、宗教伝統は再定義され、それが自己意識化、実体化され、軌近のポスト・モダン状況のもとでさらに再々定義され、イデオロギーとして固定化、原理主義化される事態となっている。こうした現代的状況のなかで聖地は、実体化・イデオロギー化された「伝統宗教」の金城湯池であり、また遺産化・商品化された「消費宗教」の花園で

ある。本研究では、いわゆるユーラシア地域大国、ロシア、中国、インド、における聖地の政治経済学的研究を通じて、宗教の現代的意義を問い直すとともに、西欧主導の聖俗論、宗教論を根本的に再考することが主要な目的である。

研究代表者 杉本良男

班員（館内）河合洋尚 韓 敏 松尾瑞穂

（館外）川口幸大 後藤正憲 小林宏至 桜間 瑛 高橋沙奈美 前島訓子 望月哲男

研究会

2015年4月11日

杉本良男（国立民族学博物館）「廃墟の聖地化——南インド・タミルナードゥにおける宗教空間の再編」

全 員 「中間考察——聖／聖性・場所／空間・巡礼／観光」

全 員 今後の研究計画について

2015年6月13日

川口幸大（東北大学）「中華民族の聖地と我々の聖地——黄帝・炎帝陵から村開祖の墓まで」

柳沢 究（名城大学）「ヴァーラーナシー（インド）における融合寺院に関する研究」

八木祐子（宮城学院女子大学）コメント1（聖地ヴァーラーナシーについて）

高倉浩樹（東北大学）コメント2（総括的コメント）

全 員 「討論」

2015年11月29日

井上岳彦（北海道大学）「「仏教リバイバル」について考える：ポスト社会主義カルムイキアの事象から」

井田克征（金沢大学）「聖地と物語：現代インドにおけるマハーヌバーヴ派の事例から」

全 員 「来年度の活動計画について」

2016年2月29日

全 員 「これまでの研究の総括と、成果刊行にむけた今後の研究計画について」

成果

本年度は都合4回の研究会を実施した。第1回（4月）は、杉本の報告と、全員による中間考察として、これまでの報告と討論のなかで、整理しておくべき必要性があると指摘された基本概念について議論を行った。第2回（6月）は宮城学院女子大学キリスト教文化研究所「多民族社会における宗教と文化」研究グループ（代表・八木祐子教授）との共催による公開の研究会として実施した。同仙台の東北大学大学院生をふくめ25名ほどの参加者があり、公開、交流の実が上がったものと考えている。第3回（11月）は井上、井田両氏をを招いて、ロシアの仏教リバイバル、および現代インドの聖地についての報告と討論を実施した。第4回（2月）は悪天候により北大関係者が来られなかったため、当初の予定を変更し、残りの参加者全員により成果刊行にむけた総括と計画について議論した。本年度は、基本概念を整理して研究員相互の共通理解を深めるとともに、積極的にメンバー以外の若手研究者を招いて報告と討論を実施し、いっそう研究の幅を広げることができた。次年度は最終年度に当たるので、おもに成果公開に向けたそれぞれの経過報告と全体のとりまとめを行う予定である。

「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」

近年のITおよび交通網の整備により、世界の「秘境」は急激に消滅しつつある。現在ではかつての「秘境」に暮らす人々は、研究者に直接問い合わせをすることが可能で、民族学系の博物館にその民族集団に関連する資料情報の提供を求めたり、熟覧や適切な管理を依頼することもある。その意味で、現在、民族学系の博物館や研究者は、対象として設定するユーザー（来館者・資料等の利用者や研究成果の読者）を、来館圏居住者や学界だけではなく、資料を製作したソースコミュニティの人々にも拡大していく必要性に迫られており、それを実施するための協働のあり方を模索することが緊急の課題となっている。本研究の目的は、「調査者・被調査者（米国先住民）との関係」、「知的財産管理」、「所蔵先機関と研究者との協働」を柱として、博物館資料をきっかけとするソースコミュニティの人々と研究者や所蔵先機関との新たな関係性構築のあり方を模索することにある。そのために、米国本土先住民資料を所蔵する日本国内のいくつかの民族学系の博物館を事例として、資料情報のソースコミュニティの人々との共有のための協働に関する思想を、社会学、博物館学、歴史学、社会心理学、文化人類学などを専門とする研究者と

所蔵先機関とで検討・考察する。

研究代表者 伊藤敦規

班員（館内）岸上伸啓

（館外）阿部珠理 大野あずさ 川浦佐知子 佐藤 円 谷本和子 玉山ともよ 野口久美子
水谷裕佳 宮里孝生 山崎幸治 山本真鳥

研究会

2015年10月25日

玉山ともよ（国立民族学博物館）「現地社会運動への参画という関わり方（仮題）」

伊藤敦規（国立民族学博物館）「ソースコミュニティとの協働資料熟覧——民博と北アリゾナ博物館の事例紹介」
全 員「ディスカッション」

2015年11月14日

伊藤敦規（国立民族学博物館）「米国先住民ホビによる民博所蔵民族誌資料熟覧の紹介」

伊藤敦規（国立民族学博物館）、ジェロ・ロマベンティマ、マール・ナモキ 「ソースコミュニティとの協働資料
熟覧」
全 員「ディスカッション」

2016年2月11日

民族誌資料情報収集に向けた取り組みの総合的検討

2016年2月12日

民族誌資料情報の共有化（データベース構築）に向けた取り組みの総合的検討

2016年2月27日

南山大学人類学博物館、展示場と収蔵庫の実見

南山大学人類学博物館における資料の知的財産管理に関する検討

2016年2月28日

共同研究の中間段階における総括

成果出版に向けた今後の研究計画

成果

2015年度には4回の研究会を開催した。第1回研究会（通算、第8回）では玉山が現地社会における社会運動に参加する形での調査活動のあり方について、自身の経験に基づいて発表した。主客の不可分性などの課題が提示された。伊藤はこれまでに行ってきた先住民と博物館とでの協働資料熟覧調査について日本と米国の事例を例証した。

第2回研究会（通算、第9回）では実際に博物館資料を介在したソースコミュニティと博物館との協働関係構築に向けた熟覧調査の紹介を行った。これまでに行ってきた内容を紹介するだけでなく、実際の熟覧の様子を共同研究員に解放して実見させた。直前に別予算で実施した野外民族博物館リトルワールドと天理大学附属天理参考館での熟覧経験と比較させながら、民博での熟覧調査、熟覧者の招聘と派遣の手続き、招聘・派遣先の機関の施設などについても比較検討した。

第3回研究会（通算、第10回）では、民博の国際ワークショップと本研究会を連動させて実施した。国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」では、博物館とソースコミュニティとの協働を前提とした国際共同研究とデータベース構築の諸課題を検討する機会であったが、本研究会としては、民族誌資料情報収集に向けた取り組み、および民族誌資料情報の共有化（データベース構築）に向けた取り組みについて具体的に想定しながら議論に参加した。

第4回研究会（通算、第11回）では、南山大学人類学博物館の展示場と収蔵庫を実見する貴重な機会に恵まれた。ここは本研究会で取り上げているような米国本土先住民の民族誌資料はほとんど所蔵していないが、南米の先住民コミュニティのアーカイブ写真の取扱やニューギニアや二本といった地域の、来歴の異なる資料の取扱について知的財産権を含む具体的な方針を学んだ。また、共同研究の中間段階における総括と、成果出版に向けた今後の研究計画を確認した。

「表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に」

本研究では、先住民／少数者集団が、彼らを包摂する主流社会において様々に表象されている場面に注目する。彼らが絵画や工芸品、布、衣装などを製作し、それらが市場にのり、時には国際的な注目をあつめる。こうしたモノによって表象されることで、少数者には経済的恩恵がもたらされ、地位の向上につながることもある一方で、彼らを本質化する圧力ともなり、また商品化によって表象が希薄化される場面もある。このような表象のポリティックスの違いは、少数者集団に対する各主流社会の対応と国際社会を背景にしているとともに、グローバリゼーション、ネオリベラルの動きなど多層的な社会的状況の絡み合いの中でおきている。この共同研究では、このような動態の現場に注目することによって、先住民／少数者の生のリアリティに迫り、主流社会と少数者の関係の諸相を具体的な形で明らかにすることをめざす。

研究代表者 窪田幸子

班員 (館内) 上羽陽子 齋藤玲子 竹沢尚一郎 野林厚志 吉田ゆか子
 (館外) 青木恵理子 池本幸生 大村敬一 川崎和也 新本万里子 隅 杏奈 田村うらら
 中谷文美 中村香子 名和克郎 深井晃子 松井 健 丸山淳子 宮脇千絵
 渡辺 文

研究会

2015年5月10日

渡辺 文 (立命館大学) 「レッドウエーブアートにおける個と集合」
 深井晃子 (京都服飾文化研究財団) 「ファッションにおける日本の表象」
 窪田幸子 (神戸大学) 「表象とは何か？」

2015年12月6日

中村香子 (京都大学) 「身体を巡る表象のダイナミズム」
 名和克郎 (東京大学) 「ランにおける伝統服を巡る実践と語りの変容」
 野林厚志 (国立民族学博物館) 「エスニシティを可視化する——台湾における民族認定と衣装の意匠」
 深井晃子 (京都服飾文化研究財団) 「主流社会による少数者表象、からめ捕られる少数者要素」
 松井 健 (総合地球環境学研究所) 「なぜ、どのようにして、工芸はグローバルイメージを表象できるのか？」

2016年1月30日

吉田ゆか子 (国立民族学博物館) 「民族舞踊からインドネシア諸島舞踊へ」
 新本万里子 (広島大学) 「アベラムになるまで」
 川崎和也 (神戸学院大学) 「誰がアートを作るのか？」
 渡辺 文 (立命館大学) 「フィジー、土産物売り場におけるアートの居場所」
 上羽陽子 (国立民族学博物館) 「民族を商品化する」

2016年1月31日

池本幸生 (東京大学) 「コーヒーから見るカクサシャカイノヒョウショウノポリティックス」
 田村うらら (金沢大学) 「絨毯の価値の語られ方の多面性」
 丸山淳子 (津田塾大学) 「ブッシュマン観光ロッジを歩きかう人々」
 窪田幸子 (神戸大学) 「先住民の美術、工芸品と作り手の立場」

2016年2月11日

宮脇千絵 (南山大学) 「門意匠の伝統へのまなざしとファッション」
 齋藤玲子 (国立民族学博物館) 「匿名か実名か、アイヌ工芸品の銘／記名をめぐる」
 青木恵理子 (龍谷大学) 「明治日本産業革命——モノ語りにこころする小さな炭鉱モノ語り」
 中谷文美 (岡山大学) 「文化表象のエコノミー、商品としての文化遺産」

成果

第3年度にあたる今年、4回の研究会を行った。一回目は積み残しの各氏の発表をいただき、今年の計画について共有した。その後、4つのテーマを設定し、ワークショップのかたちでテーマごとにある程度のまとまりをもつ研究会を開催した。こうして、「衣装という表象」「アートと工芸」「観光と表象」「伝統、遺産とポリティックス」という4つのテーマごとのまとまりが生まれ、表象のポリティックスという問題を、研究員がそれぞれの立場から

議論した。これによって新たな論点がみえてきたとともに、来年度のとりまとめのそれぞれの山が出来上がった。各研究員は、議論を踏まえ、来年度夏ごろまでに論文執筆をおこなうこととした。

「エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望」

人間が営む生活の諸局面は、特定の具体的な権威者を中心とするコミュニケーションとして成立しており、ここでは、規範や信念への随順やその異端的解釈の抑制が図られるとともに、生々しい実在感をもち、対他的に作用する非——人間存在を含むエージェンシーが定立され、作用する。現代世界において、精霊は呪医を権威者とするコミュニケーションでは人に病気をもたらすエージェンシーとして働くかもしれないが、近代医療関係者はそうした病因を否定するだろう。同様に、米国の銃規制運動において銃は「人を殺す」エージェンシーとされるが、全米ライフル協会はそうしたエージェンシーの定立に強く異議をとる。

本共同研究では、こうしたエージェンシーとコミュニケーションとの等根源性に留意しながら民族誌研究をおこなうなかで、エージェンシーの定立と作用について適切に語るための一群の概念を開発する。そうすることで、個別におこなわれる傾向にあったモノ、技術、身体、動物に関する近年の研究と、親族、交換、儀礼、信仰、医療、土地制度などに関わるこれまでの研究を架橋する、通地域的・通研究对象的であると同時に、民族誌的データを豊かに内包しうる次世代人類学の理論基盤を整備する。

研究代表者 杉島敬志

班員（館内）飯田 卓

（館外）東賢太朗 小川さやか 片岡 樹 金子守恵 桑原牧子 里見龍樹 高田 明
津村文彦 中村 潔 馬場 淳 森田敦郎

研究会

2015年5月9日

杉島敬志（京都大学）「インドネシア・中部フローレスにおける妖術者の「心」の様態と妖術霊の定立と作用
総合討論

2015年11月29日

杉島敬志（京都大学）「インドネシア・中部フローレスにおける妖術者をめぐるエージェンシー及び遠隔コミュニケーションとエージェンシーの定立に関する考察」
共同研究成果報告論集の構成と、出版社の選定をふくむ出版計画の具体化に関する議論

2016年1月10日

中村 潔（新潟大学）「起源の土地と土地の主」
高田 明（京都大学）「養育者——子ども間相互行為にみる複ゲーム状況とエージェンシー」
飯田 卓（国立民族学博物館）「マダガスカル南西部の邪術と祖霊、憑依霊をめぐるエージェンシーの定立」
小川さやか（立命館大学）「研究成果報告：エージェンシーの定立と作用に関わるコミュニケーション」
総合討論

2016年1月30日

金子守恵（京都大学）「研究成果報告：エージェンシーの定立と作用に関わるコミュニケーション」
津村文彦（福井県立大学）「ピット・サムデーと食物アレルギー：東北タイの経産婦における食禁忌——」
馬場 淳（和光大学）「パプアニューギニアにおけるエージェンシーと人格」
里見龍樹（一橋大学）「『海に住まうこと』のアレンジメント：ソロモン諸島マライタ島の「海の民」におけるエージェンシーの境界」
片岡 樹（京都大学）「一神教徒の民族誌はいかにして可能か」
総合討論

成果

研究代表者が本務校からサバティカルを取得して海外出張をおこなったため、出張前の5月に1回、帰国後に3回の研究会を開催した。研究代表者は、共同研究が目的とする基本的考えにもとづき、具体的内容のある研究の成果を発表し、共同研究構成員間での議論を活発化することに努めた。また、本共同研究の成果報告書の出版について話し合い、大まかな方向性を策定した。そのうえで、2016年1月10日（日）と2016年1月30日（土）に共同研究構成

員の大半が参加して本年度の研究進捗状況を報告し、その報告内容について議論をおこなった。あわせて、来年度の研究計画について意見交換をおこなった。また、2016年1月30日開催の本年度の最終回の研究会には、本共同研究に関心をおもいただいた出版社の編集者にご参加いただき、本共同研究の大まかな方向性を把握していただくことにも努めた。

「宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界」

合理化を推進する近代主義の影響のもと、これまで多くの地域において、人々は「宗教」を政治・社会制度から排除しようとしてきた。しかし近年、宗教原理主義や公共宗教論の盛行、宗教伝統の復興や再評価などに見られるとおり、いったん隔離したはずの「宗教」がわれわれの社会へと滲み出し、新たな姿を見せつつある。その場合の「宗教」はかつての伝統的な姿のままとは限らず、環境思想のような新たな倫理・道徳の底流に見え隠れしたり、観光資源として人目を驚かせたりしている。

このように、伝統宗教のみならず、従来の「宗教」イメージとは異なりながらどこか宗教性を感じさせる新たな現象をも視野に取り込み、現代世界の「宗教」状況をよりよく理解することが、本研究の目的である。また、その研究実践を通じて、個々の宗教的世界観の研究に特化した感のある日本の「宗教人類学」を、上記のようなグローバルな潮流に対応したものへと鍛えなおしたい。

研究代表者 長谷千代子

班員（館内）藤本透子

（館外）岡本亮輔 加藤敦典 門田岳久 川口幸大 川田牧人 神原ゆうこ 國弘暁子
内藤順子 西村 明 藤野陽平 別所裕介 溝口大助 宮本万里 矢野秀武

研究会

2015年5月16日

藤野陽平（北海道大学）「戦後社会における台湾語教会の民主化運動——言語・族群・キリスト教」
成果報告に向けての論文内容の説明（長谷、門田、川田、國弘、矢野、岡本、西村、藤野）

2015年5月17日

成果報告に向けての論文内容の説明（藤本、川口、別所、神原、内藤）

2015年6月20日

神原ゆうこ（北九州市立大学）「Social Engagement and Morality in Secular Civil Society: Social activists in the post-socialist Slovak countryside」

加藤敦典（東京大学）「Alternative Dispute Resolution With and Without Religion」

國弘暁子（群馬県立女子大学）「The Etiquette of dāna, unreciprocal gift giving, at the temple of Hindu Goddess」

藏本龍介（南山大学）「Morality beyond Morality: A case study of Theravāda Buddhist monks in Myanmar」

岡部真由美（中京大学）「The “Development” led by a Buddhist Monk and the Reconstruction of Religious Practices in the Thai-Burma Border Area of Northern Thailand: A Preliminary Analysis of the Revival of the “Chula Kathin” Ceremony」

川口幸大（東北大学）「Can Confucianism be the Civil Religion in China?: an analysis of political, academic and commoner’s discourses」

長谷千代子（九州大学）「New Buddhism for Chinese Local City Dwellers」

別所裕介（広島大学）「From ‘Ethnic Culture’ to ‘Ecological Culture’: New-reformed concept of ‘Primitive Religion’ in Contemporary Tibet」

2015年9月26日

内藤順子（早稲田大学）「＜悪者たち＞の聖者について」

IUAES・IAHR 参加報告、科研応募・成果論集についての話し合い

2016年1月10日

門田岳久（立教大学）「観光の中の宗教性——沖縄南部の聖域巡礼者にみるパワー・俗信・スピリチュアリティ」

岡本亮輔（北海道大学）「観光の中の宗教性——写真の中の聖地観光」

成果

今年度は成果論集の具体的な構想を練りながら4回の研究会を開催した。その成果の一部は国際宗教学宗教史会議 (IAHR) や国際人類学・民族学科学連合 (IUAES) などの国際大会で発表することができた。これまでの話し合いを通して、成果論集の方向性が徐々に固まりつつある。具体的には、①日本に於ける宗教研究のあり方の再検討、②宗教／世俗に関する社会的制度がどう変わってもわれわれにとって大切な問題であり続ける霊・死・生命などを現代世界においてどう考えるかについての探究、③既成の宗教イメージから脱しようとする実践や運動と、逆に、④新たな宗教になろうとするかのような実践や運動についての研究、⑤既成の宗教組織や制度などがポスト世俗主義的な状況のなかでどう変容しつつあるかについての研究などが、各研究員によって進行中である。いずれも、宗教と世俗の社会・文化的境界の変化に着目し、宗教と世俗を分けようとする観念そのものを問い直す研究となりそうである。

「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」

この共同研究は、東南アジアのポピュラーカルチャーを対象とする。研究の目的は、グローバル化する現代社会における文化表現や身体表象の検討を通して、人々の複合的で流動的なアイデンティティのあり方を考察することである。対象地域の東南アジアは、その多くが20世紀の半ば以降に植民地支配からの独立を果たした国民国家であり、多様な民族文化を擁する国家としてのアイデンティティが常に模索されてきた。一方でポストコロニアル時代の国民国家は民族や宗教の違い、地域間の格差、社会階級やジェンダーの格差などの様々な差異を内包している。人やモノや情報が越境するグローバル化の状況において多くの文化的表現は既存の文化的境界を越えて流通し読み替えられている。この研究会では現代東南アジア社会における音楽、舞踊、映画、文学、ファッションなどの各分野におけるポピュラーカルチャー産業や、出版物、電子媒体などを含む各種メディアを研究対象として取り上げ、文化的表現の生産と消費の場における人々の実践を通して現代東南アジア社会におけるアイデンティティ形成の複合的で流動的なプロセスを考察する。

研究代表者 福岡まどか

班員 (館内) 寺田吉孝 福岡正太
(館外) 井上さゆり 小池 誠 竹下 愛 津村文彦 馬場雄司 平松秀樹 丸橋 基
山本博之 竹村嘉晃

研究会

2015年7月11日

福岡まどか (大阪大学) 「アイデンティティと身体表象を考える：インドネシアにおける異性装の事例から」
ウィンダ・プラティウィ (桃山学院大学) 「インドネシアの若者におけるコスプレ文化の誕生」
福岡正太 (国立民族学博物館) 「ファッションデザイナー——インドネシア女性の生き方のモデルとして」
総合討論

2015年10月24日

岡光信子 (中央大学) 「インド映画の変容と東南アジアにおけるインド映画の受容の一例」
山下博司 (東北大学) 「インドの文学世界と現代東南アジア——受容・継承・交流をめぐるいくつかの事例に寄せて」
総合討論

2016年1月9日

福岡正太 (国立民族学博物館) 「スダ音楽の「モダン」の始まり——ラジオと伝統音楽」
平松秀樹 (大阪大学) 「タイのポピュラーカルチャー再考」
総合討論

2016年2月6日

福岡まどか (大阪大学) 「成果発表に向けて 序論：東南アジアのポピュラーカルチャー 構想発表(1)」
鈴木 勉 (国際交流基金) 「シネマラヤの10年～映画を通じた自画像の再構築」
総合討論

2016年2月7日

各メンバーによる執筆論文の構想発表(1)

盛田 茂（立教大学）「映画をとしてみるシンガポールの現代社会——『シンガポールの光と影——この国の映画監督たち』紹介」

総合討論

成果

2015年は4回の研究会を開催し、東南アジアの各地域における事例の検討を通して議論を深め、成果発表についての検討を行った。研究会のメンバーに5人の特別講師を加えた延べ10名の発表者からは、インドネシア、タイ、フィリピン、シンガポール、インドの諸地域における多様な事例が提示された。対象とされた事例は映画、音楽、舞踊、ファッション、身体表象、各種メディアの流通などの多岐にわたった。これらの事例研究の検討と議論を通して、コスプレやイスラムファッションの流行と人々のライフスタイルとの関連、メディアを通じた文化の通時的変容、映画を通じた東南アジアの人々の自画像の提示、などの諸テーマが浮かび上がってきたと考えられる。一方で地域横断的テーマとしては東南アジアにおけるインド文化特にインド映画の影響について、東南アジアにおける日本イメージの変遷についても考察を行った。これらの事例と問題設定を通して今後の成果発表の方針についても議論を行った。成果論文集序論の内容検討と各メンバーの執筆論文の構想発表会を行った。

「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」

本研究は、15世紀末以降、スペインが世界規模で拡張した帝国統治のメカニズムについて、行政・司法・財政・宗教・軍事の諸分野を交差して領域横断的に張り巡らされた文書ネットワーク・システムの展開に焦点を当てながら解明を目指すものである。近代初期、アジアからアメリカに至る広大な領域を支配下に治めたスペインの統治原理は、文書主義の優越というイデオロギーに支えられており、帝国内の統治機構においては、マドリッド中枢から植民地最末端の先住民までをカバーする広域的な文書ネットワークが張り巡らされていた。その網の目に沿って、植民地経営の実務を支えるヒトやモノ、情報の流れが構造化され、領域の隅々にまで拡張されることで、近代ヨーロッパ史上、類をみない規模の世界帝国を支えた統治機構の礎が整備されていったのである。本研究では、スペインおよびラテンアメリカ、アジア各地の文書館における実地調査を通して史料分析の研鑽を積み、文化人類学、歴史人類学、識字・リテラシー研究、史料論、エスノヒストリー、文書管理論、アーカイブズ学などの方法論に精通したエキスパートたちの知見を結集することにより、スペイン帝国の礎となった文書ネットワークの成り立ちと植民地社会における展開について総合的に究明を試みるものである。

研究代表者 吉江貴文

班員（館内）齋藤 晃

（館外）足立 孝 網野徹哉 井上幸孝 小原 正 坂本 宏 清水有子 菅谷成子
武田和久 中村雄祐 伏見岳志 溝田のぞみ 安村直己 横山和加子

研究会

2015年5月16日

足立 孝（広島大学）「カルチュレールの生成・機能分化・時間——テンプル／聖ヨハネ騎士団エンコミエンダ・カルチュレールを中心に」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

坂本 宏（中央大学）「異端審問とスペイン帝国」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

共同研究員全員・今年度の研究活動について

2015年10月3日

伏見岳志（慶應義塾大学）「植民地期メキシコ商人の帳簿作成とその利用」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

井上幸孝（専修大学）「植民地時代メキシコ中央高原の先住民村落における権原証書の作成と使用」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

共同研究員全員・今年度後半の研究活動について

2015年12月5日

齋藤 晃（国立民族学博物館）「イエズス会ミッションにおける洗礼と洗礼簿——南米アマゾン低地モホス地方

の事例」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

武田和久（早稲田大学）「イエズス会の文書管理システムとグローバル・ネットワーク——スペイン語圏におけるアトランティック・インテレクチュアル・ヒストリーに向けての試論」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

Guillermo Wilde（国立民族学博物館）「REGLAMENTANDO LA VIDA COTIDIANA EN LAS MISIONES FRONTERIZAS — LIBROS DE PRECEPTOS EN EL PARAGUAY JESUITICO」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

共同研究員全員・次回研究会及び今後の研究活動について

2016年1月30日

清水有子（明治学院大学）「スペイン帝国の文書ネットワーク・システムとフェリペ2世の「東アジア」政策」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

菅谷成子（愛媛大学）「『マニラ公正証書原簿』からみる19世紀転換期前後のスペイン領マニラ社会の諸相」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

共同研究員全員・来年度の研究会について

成果

2015年度は4回の共同研究会を開催し、文書ネットワーク・システムの解明に向け、全体的な議論に深まりが見られたいっぽうで、いくつかの検討課題も浮かび上がった。具体的に、スペイン帝国の統一的支配原理と異端審問制度を支えた文書管理・運用との関係性を論じた坂本報告、イエズス会士のグローバル情報ネットワークの実相を分析した武田報告、フィリピン総督府とスペイン本国を結ぶ遠隔対話型ネットワークの機能を明らかにした清水報告をめぐる議論では、帝国内の文書流通メカニズムを包括的に把握する上で、本研究会の掲げる領域横断的な比較アプローチがどこまで有効性をもつかが俎上に載せられた。一方、エンコミエンダ・カルチュレールに対する機能分化論的な理解の可能性を提起した足立報告、イエズス会ミッション洗礼簿の分析をもとに地理空間と文書空間における集住化の二重プロセスを論じた齋藤報告、メキシコ商人の商業帳簿における現実と文書の乖離を浮き彫りにした伏見報告では、文書理解をめぐる認識論的な問題（表象と出来事、物質と抽象、文書主義 etc.）について改めて検討しなおす必要性も確認された。

「宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究」

20世紀後半以降、世界各地で宗教復興が顕在化すると同時に、公共領域における宗教の影響力が増大している。その背景には、新自由主義経済の浸透による国家財政の緊縮化とそれともなう社会・福祉サービスの低下がみられるなか、宗教（宗教者や宗教集団）が、独自のネットワークに基づき、そして多くの場合、地域社会・援助供与国・国際NGOなどと連携しながら、社会開発に積極的に参画するというグローバルな流れが指摘できる。

そこで本研究では、宗教の開発実践が顕著にみられるアジアとオセアニアをおもな舞台として、以下の2点を目的とする。第1に、宗教による経済開発、医療と公衆衛生、教育などの領域における活動を民族誌的な事例として収集し、そこに反映される宗教固有の理念や規範およびネットワークの性質を明らかにする。第2に、このような現象が社会全体にかかわる諸問題を主題化し、公共性およびその変容を喚起していることを明らかにする。この2点を明らかにすることで、本研究は、ポスト世俗化の宗教論を超える視点を提示することを目指す。

研究代表者 石森大知

班員（館内）丹羽典生

（館外）岡部真由美 岡本亮輔 小河久志 門田岳久 倉田 誠 藏本龍介 小西賢吾
白波瀬達也 野上恵美 舟橋健太

研究会

2015年5月23日

舟橋健太（龍谷大学）「インドの改宗信徒の実践にみる「社会性」

田中鉄也（国立民族学博物館）「現代インドの公益信託によるヒンドゥー寺院経営——ラーニー・サティール寺院を事例に」

全 員 「総合討論」

2015年7月25日

岡部真由美（中京大学）「出家者からみた世俗との境界面——現代タイ社会における上座仏教僧の『開発』の事例から」

藏本龍介（南山大学）「ミャンマーにおける社会参加仏教／社会不参加仏教——出家者の活動に注目して」

全 員 「総合討論」

2015年11月14日

野上恵美（神戸大学）「日本におけるベトナム系移住者とカトリック教会の役割」

門田岳久（立教大学）「地域開発と〈宗教的なもの〉の発見——沖縄本島南部エリアの聖域化をめぐる」

全 員 「研究成果とりまとめに向けて」

2016年1月23日

小河久志（常葉大学）「宗教団体の支援活動が生み出す新たな関係性——タイ南部インド洋津波被災地の事例から」

小西賢吾（金沢星稜大学）「僧侶の教育をめぐる「世俗」と「公共性」の位相——中国四川省のボン教徒を事例に」

全 員 「総合討論」

2016年1月24日

全 員 「研究成果とりまとめに関する打ち合わせ」

成果

2015年度は、本研究テーマに関する地域的特性の考察をおもな目的とし、4回の共同研究会を開催した。1回目の研究会では、南インドの事例から、社会性や公益性などの概念を足掛かりに、おもに宗教の社会参加について検討をおこなった。2回目の研究会では、東南アジアの上座仏教社会の事例をとおして、宗教者のカリスマ性、宗教と世俗の関係などについて考察した。続く3回目は、日本の事例を扱い、観光開発および多文化共存というテーマとの関連性を視野に入れ、そこにみられる宗教の扱われ方や公共性などについて考察をおこなった。4回目の研究会では、アジアの宗教的なマイノリティの事例から、国家・宗教・開発の関係性を踏まえた宗教の役割や公共性について検討した。以上の4回の研究会の終了後、各自のフィールドデータに基づき、政教関係と宗教の動向、宗教が関与する開発実践の特徴、西洋起源の言説の内面化などをめぐって総合的な討論をおこない、研究成果とりまとめに向けての方針を確認した。

「再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して」

本共同研究では、再分配が集団を生成している点に注目することで、集団と再分配の関係の多様性を明らかにしていく。ポランニーは、再分配を〈富や労働を中心に集めたうえで配り直す〉経済活動の様式として定式化し、その中に儀礼や祝祭、租税、家政が含まれるとした。そこでは、社会の存在が前提とされ、いかに再分配が社会統合に役立つかという構造機能主義的な枠組みが強調されている。それに対し本研究では、社会の存在を自明視するのではなく、他ならぬ再分配によって集団が立ち現われている点に注目する。思想史家のエヴァルドがフランスの社会保険を例に示したように再分配はそれに参加する者に連帯感を喚起することで集団意識を醸成しうるし、また、再分配への参加は集団の境界を引く際の重要な留意点にもなるからである。本共同研究では、この視点から世界各地の事例を比較し、再分配の具体的な手続きと集団の特性の関係について検討していく。

研究代表者 浜田明範

班員（館内）伊東未来 加賀谷真梨 河野正治 久保忠行 里見龍樹 高橋絵里香 高橋 慶介
田口陽子 友松夕香 西垣 有

研究会

2015年4月4日

今後の方向性と日程の確認

高橋絵里香（千葉大学）「在宅介護の施設化／施設介護の在宅化——フィンランドの高齢者福祉にみる再分配の

論理

西垣 有 (関西大学) 「ポランニー再考——ポスト社会主義の再分配論に向けて」

加賀谷真梨 (国立民族学博物館) 「日本型福祉制度の陥穽——沖縄の高齢者地域福祉を事例に」

2015年4月5日

久保忠行 (大妻女子大学) 「レイシズムとしての難民問題と「再分配の手続き」

高橋慶介 (敬愛大学) 「所得の再分配とスティグマ——ブラジルにおける「ボウサ・ファミリア」の受給をめぐる」

吉田ゆか子 (国立民族学博物館) 「奉仕を滑り込ませるつながり——バリ島慣習村における祭祀と労働」

2015年11月7日

成果公開に向けての打ち合わせ

2015年11月8日

成果公開に向けての打ち合わせ

成果

通算3年目となる2015年度は、2回の共同研究を実施し、1回の分科会を組織した。前年度に引き続き、共同研究全体の問題意識の深化と共有を測りながら、各メンバーが世界各地から持ち寄った事例を子細に検討し、再分配実践の多様性を確認するとともに、人類学的な再分配研究の可能性がどこにあるのかを探った。初回(通算第四回)となる4月4日～5日の研究会では、西垣、加賀谷、久保、高橋(絵)、高橋(慶)の5名のメンバーに特別講師の吉田ゆか子を合わせた6名による発表を行った。また、5月30日・31日に行われた日本文化人類学会第49回研究大会において分科会「再分配研究の再始動：行為から集団の生成を考える」を組織し、本研究会のメンバー6名(浜田、西垣、河野、友松、高橋(慶)、高橋(絵))による発表を行った。本年二回目(通算第五回)となる11月7日～8日の研究会では、メンバーが執筆した9本の原稿を持ち寄り、成果報告に向けての議論を行った他、出版予定の論文集のタイトルや構成について議論した。

「現代『手芸』文化に関する研究」

本研究は日本の手芸に相当する余暇的・趣味的仕事とその造形物の現代的展開を明らかにする。手芸とは、主に女性を担い手とする家庭内での商業化されていない趣味的な制作を意味する概念として明治期に形成された。そのため手芸の領域は、美的に評価された美術や利潤を生みだす工芸に比べて二重に周辺化されてきたといえる。しかし現在、世界各地で従来の日本の手芸概念ではとらえられない余暇的・趣味的仕事が多様な展開をみせている。それらは男性も担い手に含み。アート、フェアトレード商品、エスニック雑貨などとして美術や市場の領域にも進出している。また、趣味を通じた人的ネットワークの形成や、それらの災害後におけるケアとしての機能などが注目を集めている。こうした従来の手芸概念ではとらえきれない新たな領域を「手芸」として捉え返し、その現代的展開を民族誌的に分析し、新たな「手芸」概念の創出を目指すものである。

研究代表者 上羽陽子

班員 (館内) 齋藤玲子 南 真木人

(館外) 蘆田裕史 五十嵐理奈 金谷美和 木田拓也 坂田博美 新本万里子 杉本星子

中谷文美 野田涼美 平芳裕子 ひろいのおこ 宮脇千絵 村松美賀子 山崎明子

研究会

2015年4月25日

上羽陽子 (国立民族学博物館) 「前回までの研究会の論点の整理」

村松美賀子 (京都造形芸術大学) 「生活工芸と手芸のあいだ——手しごと、手づくりの今」

齋藤玲子 (国立民族学博物館) 「アイヌの織りと縫い——その担い手と継承のあり方について」

中谷文美 (岡山大学) 「<主婦>と<職人>の間——「手芸とは何か」をめぐる問い」

出席者全員 「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

2015年7月18日

上羽陽子 (国立民族学博物館) 「前回までの研究会の論点の整理」

ひろいのおこ (京都市立芸術大学) 「糸と布 その柔らかい造形教育の現状」

野田涼美（京都造形芸術大学）「立場が定まらない私の制作について」
上羽陽子（国立民族学博物館）「刺繍は手芸か工芸か？——手仕事をめぐる他者の視点」
出席者全員 「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

2015年12月5日

上羽陽子（国立民族学博物館）「前回までの研究会の論点の整理」
新本万里子（広島大学）「母から女へ—パプアニューギニア・アベラムにおける網袋の揚げ方の変化から」
宮脇千絵（南山大学）「中国雲南省モン女性が刺繍をすること」
平芳裕子（神戸大学）「二つの針仕事——刺繍か裁縫か女性か」
出席者全員 「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

2016年1月9日

東京国立近代美術館工芸館 「1920～2010年代所蔵工芸品に見る未来へつづく美生活展」解説および見学
木田拓也（東京国立近代美術館）「近代日本における「工芸」と工芸館」
蘆田裕史（京都精華大学）「近現代美術におけるファッションの意味」

2016年1月10日

東京国立近代美術館 「ようこそ日本へ：1920年-30年のツーリズムとデザイン」解説および見学
南 真木人（国立民族学博物館）「カースト社会の職人——手工芸、美術と手芸的なもの」
金谷美和（国立民族学博物館）「インドのhandicraft（手工芸）：ナショナリズム、制度、他者」

成果

これまでの具体的な事例をもとにした発表によって、狭い手芸概念の枠組みを超えた、現代の余暇的・趣味的仕事を捉える上での3つの重要な視点が導きだされた。1つ目は、手芸的なものが生まれる社会や空間というものがある存在すると同時に、それらが機能する空間や社会があるということである。2つ目は、つくり手が誰であるか、そしてそのつくり手のアイデンティティの問題である。手芸的手仕事への評価は、造形物自体への評価以上に、つくり手のジェンダーや社会的属性によって、評価が異なるということである。そしてこの問題の背景には、手芸に関する批評の不在や、家庭内から発信することのできるブログやインターネット販売といったメディアの変化も関係していることが明らかとなった。3つ目は、手芸的技術の問題である。手芸的技術の特徴は、技術教授が比較的容易であり、基礎的手作業によってつくりあげることができるものが多い。このような手作業が、造形教育においてどのようにとらえられてきたのか注目する必要がある。そして手芸的手仕事かどのような文脈の接合によって、現代アート作品へ転換するのかについても視点を広げて議論をする必要性がみえてきた。

今後は、このような論点を加味し、シンポジウム形式によるさらなる議論の深化を試み、既存の家政学的研究の分野を超えた、包括的なアプローチを可能にする基礎的概念の創出を目指したいと考えている。

「近世カトリックの世界宣教と文化順応」

本研究は、16～18世紀のアジアとアメリカにおけるカトリック教会の宣教、とりわけ「適応」と呼ばれる政策に焦点を当て、ローカルな事例の比較とヨーロッパの世界観・人間観の検討を通じて、その歴史的意義を明らかにする。適応とは、宣教師が現地の規範や慣習を学ぶことで地元社会に溶け込み、現地人の改宗を促す政策である。言語、衣食住、礼儀作法、法律、学問など、現地文化の幅広い側面が対象となる。事例としては、ヴァリニャーノの日本宣教方針やリッチの中国古典研究など、アジアのイエズス会の政策が有名である。特に中国での政策は「典礼論争」というカトリック教会を二分する論争を引き起こした。

近世カトリックの宣教師の適応はしばしば今日の文化相対主義の先駆けとみなされるが、この評価は正しいのだろうか。両者の共通点と相違点はなんだろうか。今日の相対主義的文化概念が近世カトリックの世界宣教に負うものがあるとするれば、それはなにか。これらの問いに答えるため、本研究は、宣教師の適応をローカルなコンテクストに位置づけ、通文化的実践としてのその特徴を探る。同時に、宣教師が適応に与えた理論的根拠を世界の諸文化の多様性についてのヨーロッパの思索の流れに位置づけ、その思想史的意義を解明する。

研究代表者 齋藤 晃

班員（館内） 網野徹哉 伊川健二 井川義次 王寺賢太 岡田裕成 折井善果 小谷訓子
鈴木広光 中砂明德 真下裕之 松森奈津子 Guillermo Wilde

研究会

2015年6月21日

鈴木広光 (奈良女子大学) 「Paul A. Rule 著『K'ung-tzu or Confucius?: The Jesuit Interpretation of Confucianism』について」

井川義次 (筑波大学) 「Ines G. Županov著「Le repli du religieux: les missionnaires jésuites du 17e siècle entre la théologie chrétienne et une éthique païene」について」

中砂明徳 (京都大学) 「Anthony Pagden 著『The Fall of Natural Man: The American Indian and the Origins of Comparative Ethnology』について」

2015年7月5日

新居洋子 (東京大学) 「在華イエズス会士における適応政策の変遷とその背景」

岡美穂子 (東京大学) 「外海地方出津の聖画からみるキリシタン信仰」

2015年9月6日

真下裕之 (神戸大学) 「Jacques Gernet 著『Chine et christianisme: la première confrontation』について」

Guillermo Wilde (国立民族学博物館) 「Nicolas Standaert 著『L' «autre » dans la mission: leçon à partir de la Chine』について」

岡田裕成 (大阪大学) 「Joan-Pau Rubiés 著「¿Diálogo religioso, mediación cultural o cálculo maquiavélico?: una nueva mirada al método jesuita en Oriente, 1580-1640」について」

2015年12月23日

齋藤 晃 (国立民族学博物館) 「Jesús López Gay 著『La liturgia en la misión del Japón del siglo XVI』について」

岡美穂子 (東京大学) 「高瀬弘一郎著「キリシタン布教における“適応”」について」

網野徹哉 (東京大学) 「浅見雅一著『キリシタン時代の偶像崇拜』について」

2016年2月24日

小谷訓子 (大阪芸術大学) 「Louise M. Burkhart 著『The Slippery Earth: Nahua-Christian Moral Dialogue in Sixteenth-Century Mexico』について」

王寺賢太 (京都大学) 「Gilles Havard 著「Le rire des jésuites: une archéologie du mimétisme dans la rencontre franco-amérindienne (XVIIe-XVIIIe siècle)」について」

齋藤 晃 (国立民族学博物館) 「合評会の総括」

成果

本年度は主として先行研究のレビューをおこなった。日本、中国、インド、アメリカの4つの地域を対象に、宣教師の異文化適応に関する重要な文献を選別し、メンバー全員で合評した。合評の主目的は先行研究の動向を把握し、その達成度を評価することだが、それと同時に、メンバーに専門以外の地域について学んでもらうことも重視した。メンバー各人がひとつの文献を担当し、研究会では全体討論に先だってその内容を紹介したが、担当者の専門地域が文献の対象地域と重ならないよう配慮がなされた。昨年度に合評した文献ひとつを含めて、合計12の文献をレビューしたが、期待どおりの成果を上げることができた。一連の合評会を通じて、それぞれの地域で展開された適応の特色、そして地域を越えた共通点が浮き彫りになった。また、先行研究が抱える問題も明確になり、それらを克服するための方向性もみえてきた。

本年度はまた、特別講師を招聘した研究会を1回、開催した。特別講師には、本研究のメンバーだけでは十分論じることができないテーマに詳しい研究者がふたり選ばれた。研究会ではたいへん有意義な議論ができたため、ふたりの講師には来年度から正式なメンバーとして本研究に参加してもらうことにした。

「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」

子供の保育や老人・病人の介護などのケアと呼ばれるサービスは、その一部を家族の外部で、家族外の担い手によって行なうことが可能であり、制度化もされている。このサービスを公的な支援として行うのが福祉であるが、今日、福祉国家制度の限界が明らかになっている。ケアはどのように実現されるのか、そのあり方があらためて問い直されている。こうした状況をふまえ、本研究は、保育や介護をめぐるケアの制度化／脱制度化の様相を、個別のローカルな状況のもとでとらえ、比較検討するものである。その分析を通して、人間社会は、社会と家族のインターフェースをどのように編成してきたのか、それは今後どうありうるのか展望する。これまでの人類学研究を批

判的に検討する視点から、人類学、社会学、歴史学の分野を横断する議論を展開し、西欧近代の福祉国家システムを、人類学研究として批判的に検討していく。

研究代表者 森 明子

班員 (館内) 浜田明範

(館外) 天田城介 岩佐光広 岡部真由美 加賀谷真梨 加藤敦典 木村周平 工藤由美
 沢山美果子 高田 実 高橋絵里香 土屋 敦 内藤直樹 中野智世 西 真如
 速水洋子 モハーチゲルゲイ

研究会

2015年6月6日

中野智世 (成城大学) 「ケアの制度化と宗教——ドイツ福祉国家におけるカリタスの思想と実践から」
 浜田明範 (国立民族学博物館) 「なぜ世帯という単位は機能しなかったのか——家族を要請しない社会を考える」
 討論 全員

2015年6月7日

高田 実 (甲南大学) 「『生の歴史学』を求めて——ケア論からの問いかけを考える」
 土屋 敦 (徳島大学) 「子どもの社会的養護と『社会的なもの』論の再考」
 研究打ち合わせ 全員

2015年10月3日

モハーチ ゲルゲイ (大阪大学) 「実験としてのケア——西ハンガリーの治験施設支援機関の事例から」
 岩佐光広 (高知大学) 「独居老人とケア——ラオス低地農村部の事例から」
 討論 全員

2015年10月4日

天田城介 (中央大学) 「現代日本における高齢者ケアをめぐる家族の変容」
 内藤直樹 (徳島大学) 「ケアされることからの自由：東アフリカの開発・援助対象社会における家族の再編」
 研究打ち合わせ 全員

2015年12月19日

廣瀬淳一 (高知大学) 「高知における男女共同参画の現状」
 全 員 「男女共同参画と地域社会」
 全 員 「家族と職場を媒介するモノ」

2015年12月20日

全 員 「共同研究の中間段階における総括」
 全 員 「今後の研究計画」

2016年1月9日

木村周平 (筑波大学) 「津波・家・国家——三陸漁村の「復興」について」
 加藤敦典 (東京大学) 「ベトナムの村落地域における高齢者ケアの制度化に向けた動き——家族・国家・市場・共同体」
 討論 全員

2016年1月10日

高橋絵里香 (千葉大学) 「ネオリベラルな辺境——フィンランドの地域福祉改革にみる親族介護の浮上」
 工藤由美 (亀田医療大学) 「先住民組織の二つの顔と民族医療」
 研究打ち合わせ 全員

成果

これまでの議論を通して、問題接近の三つの方向性が明らかになった。第一は、ケアから社会構造や社会システムの変化をとらえていく方向で、岩佐 (ラオス)、天田 (日本)、加藤 (ベトナム) らの議論が、高齢化のすすむ地方の研究において追及した。第二は、特定のケア・アクターに焦点をあてる方向で、国家や家族、先住民アソシエーション等が、何をなし、何をなしていないか問い直す。浜田 (ガーナの家族)、内藤 (アフリカの難民キャンプ)、工藤 (チリの都市先住民)、木村 (三陸津波の復興)、土屋 (子供の社会的擁護) らの議論が追及した。第三は、ケアという視点から、福祉国家システムの編成や再編成の過程を問い直そうとする方向で、中野 (ドイツ)、高田 (イ

ギリス)は近代福祉国家の形成期を、高橋(フィンランド)、モハーチ(ハンガリー)は現代の福祉のあり方をとりあげて議論した。高知大学における研究集会では、地方の保育・介護の現状と課題について、現地の研究者をまじえて議論した。

「政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する」

21世紀になり、エスニシティ(文化的実践による社会的分類)や人種(肌の色による社会的分類)が構造化された社会に住み不利益を受けている人々は、カラーブラインド主義や逆差別というリベラリズムの変奏が世界規模で支持を得ている中で、不利益の是正を求める根拠すら失われかねない状況に直面している。本共同研究は、歴史的・民族誌的資料に基づいて、被支配者側からの政治的抵抗の基礎となる分類の編成を解明し、リベラル民主主義の陥穽を批判的に乗り越える契機とする研究視座の確立を目指す。より具体的には、これまでコロニアリズムの歴史において不可視だった支配者側のエスニシティや人種(たとえば、アイヌ民族のいう「シャモ」、沖縄の人々が発する「ナイチャー(ヤマトンチュ)」、カナカ・マオリが用いる「ハオレ」、グアテマラ・マヤ人が口にする「カシュラン」)を可視化する視点として政治的分類という考え方を提示する。

研究代表者 太田好信

班員(館内) 関 雄二 竹沢尚一郎 寺田吉孝
(館外) 青木恵理子 池田光穂 石垣 直 川橋範子 慶田勝彦 辻 康夫 深山直子
細川弘明 松田素二 山崎幸治 山本真鳥 横田耕一

研究会

2015年4月25日

事務連絡

山崎幸治(北海道大学)「日本におけるアイヌによる自己・他者分類」

討論(質疑応答)

横田耕一(九州大学)「『集団(先住民・被差別集団など)』と法」

討論(質疑と応答)

2015年4月26日

総合討論(前日の発表に関する質疑と応答)

2015年6月20日

石垣 直(沖縄国際大学)「『交錯する『植民地経験』——台湾原住民・ブヌンと『日本』との衝突・接触・邂逅」

討論(質疑応答)

細川弘明(京都精華大学)「『真の所有者』の政治文化学——『表層の支配者』に対するアボリジニーのまなざし」

討論(質疑応答)

2015年6月21日

総合討論(前日の発表に関する質疑と応答)

2015年10月31日

事務連絡

池田光穂(大阪大学)「インディオ・メスティソ・ラサ:ラテンアメリカにおける人種的カテゴリー再考」

討論(質疑応答)

山本真鳥(法政大学)「パパラギをめぐる:サモア人にとっての白人とは?」

討論(質疑応答)

2015年11月1日

総合討論(前日の発表に関する質疑と応答)

2016年1月30日

事務連絡

川橋範子(名古屋工業大学)「白いフェミニズムに抗って——(外産の)『日本人』女性宗教研究者がフェミニスト民族誌を書く困難とは」

討論(質疑と応答)

慶田勝彦(熊本大学)「ムスング(白人)という分類——ケニアのTVドラマ作者アシナ・キビビと憑依霊とし

ての〈白人〉の視点から」

討論（質疑と応答）

2016年1月31日

総合討論（前日の発表に関する質疑と応答）

成果

本年度は、二つの異なった方向性をもった発表があった。まず、被支配者から見た支配者の表象についての研究発表として、サモア人から見た白人の表象、ケニアでの憑依霊儀礼に出現する白人、白人との法廷闘争におけるアポリジナルの視線、アイヌによる自己と他者との分類に関する発表群があげられる。また、客観的視点からラテンアメリカでのエスニシティに関する分類、植民地下台湾の先住民の分類についての発表もあった。次に、以上とは異なった方向性をもつものとして、先住民や被差別集団に関する法規定をテーマにした発表、フェミニズムにおいて白人女性が女性全般を代表することへの異議申し立てについての報告があった。これまでの発表における二つの方向性から、次年度では強調すべき点が明確になった。それは、被支配者側により支配する側が民族や人種として集団化され名指されるとき、現在、どのような理論的立場からそれらの名指しを評価し、考察するかという研究者自身の分析カテゴリーへの反省によって開かれる視点がいまだに存在することである。

「生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究」

本研究は、世界各地の衣食住にかかわる生活必需品の調査を通じて、その変化が伝統的生活様式から近代的生活様式への変化にいかに関連し、またその近代的生活様式が世界的な共通性を示しつつ、なお国ごとの差異をどのような面で保持しているかを検証し、近代化の一般性と国ごとの個性およびその要因を考察することを目的とする。国家制度や生業経済の近代化は、住民生活のレベルでは生活様式の変化として経験される。生活様式の近代化は、衣類や台所用品、また家具や部屋の間取りの刷新と連動している。そうした生活用品の変化という物質文化研究を切り口に、生活様式が近代化に伴っていかに変化したかをあぶりだそうとするのが本研究の狙いである。生活の近代化には世界規模での画一性が認められる一方、衣食住の伝統慣行に由来する国ごとの差異も予測され、近代化の過程に文化的差異が関与していることを示唆している。本研究ではそうした「近代化」の一般理論についても物質文化の観点から検討を加える。

研究代表者 鏡味治也

班員（館内）宇田川妙子 笹原亮二 関 雄二 野林厚志 浜田明範
（館外）阿良田麻里子 金子正徳 田村うらら 中谷純江 西本陽一 古谷嘉章 松村恵里

研究会

2015年5月9日

関 雄二（国立民族学博物館）「ペルーでの生活用品試行調査」
浜田明範（国立民族学博物館）「アフリカでの生活用品試行調査」
出席者全員：生活用品資料収集上の問題点の検討

2015年11月14日

カノックワン・ソムシリヴァランクール（金沢大学）「タイでの生活用品試行調査」
松村恵里（金沢大学）「インドでの生活用品試行調査」
田村うらら（金沢大学）「トルコでの生活用品試行調査」

2015年12月12日

宇田川妙子（国立民族学博物館）「イタリアでの生活用品試行調査」
中谷純江（鹿児島大学）「北インドでの生活用品試行調査」
出席者全員：生活用品資料収集上の問題点の検討

成果

本年度は参加各員のそれぞれの調査地での試行的なデータ収集の報告と、それを踏まえての生活用品リストや生活様態質問表の問題点指摘を行った。報告地域は南米、西アフリカ、東南アジア、インド、近東、南ヨーロッパにまたがり、それぞれの地域の特徴とともに汎世界的な共通性をうかがわせる生活用品の具体例が示された。とりわ

けそれぞれの地域の人びとのこだわりを示す用品が千差万別である点が興味深い。具体例の提示とともに、用品リストよりも生活様態問表の方が聞き取りの際により有効であり、期待する答えを引き出しやすいこと、またこうした用品調査はフィールドを知る第一歩としての手段としても有効であることを確認した。さらにヨーロッパの事例から、先行したインドネシアでの「伝統から近代への変化」という調査枠組みについて疑義が出され、用品の変化が示すものが何かについて問題提起され、今後の検討課題とすることにした。

「呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して」

現代世界を構成するさまざまな実践=知（本研究では、感覚を含む行為と知識・信念の双方にわたる概念として、便宜的に「実践=知」という語を用いる）のなかで、呪術的实践=知はいかなる位置をしめ、またそれ以外の諸実践=知といかなる関係性をもつのか。本研究では、呪術的实践=知とそれ以外の諸実践=知（すなわち科学、宗教、病院医療、学校教育、メディア表象など）との関係性を明らかにすることによって、現代世界における呪術の個性（特殊性）と普遍性（他の諸実践=知との共通性）をうきぼりにすることをめざす。

本研究は、先立つ民博共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」（2007～2009年度、代表：白川千尋）とその成果論集『呪術の人類学』（2012年、白川・川田編、人文書院）をふまえつつ、その基本的枠組みであった「言葉／行為」を、宗教・世界観や制度との関わり、また世界とのインターフェースとしての感覚などの観点を組み込むことによって、「信じる／知る／行なう／感じる」の各理論的次元へ継承的に発展させる。それを通じて呪術論の観点から、現代世界における実践論や知識論を刷新することをこころざす。

研究代表者 川田牧人

班員（館内） 飯田 卓 藤本透子 松尾瑞穂 浜田明範
（館外） 飯田淳子 梅屋 潔 片岡 樹 黒川正剛 近藤英俊 島蘭洋介 白川千尋
田中正隆 中川 敏 中村 潔

研究会

2015年6月28日

梅屋 潔（神戸大学）「『災因論』『物語論』そして『アブダクション』——ウガンダ・パドラ民族誌の予備的考察」
中川 敏（大阪大学）「引用と呪術」
全体討論、次回以降の研究計画

2015年10月18日

浜田明範（国立民族学博物館）「妖術による媒介——ガーナ南部における王権闘争をめぐる」
黒川正剛（太成学院大学）「西欧近世の魔女信仰における呪術的实践=知の諸相」
全体討論、次回以降の研究計画

2015年12月26日

関 一敏（九州大学）「呪術と日常」
川田牧人（成城大学）「中間地点での論点整理と、成果報告の構想」
全体討論：次年度計画ほか

成果

本年度は3回の研究会において、①現代世界の諸実践=知の環境における呪術的諸実践の位置づけ、②知識や観念に偏らない当事者性、という二つの眼目にせまる議論を重ねた。①に関しては、現代的環境における論理・認識としての呪術的諸実践=知の性格づけに関する検討がなされた。たとえば昨年度の「偶然性の必然化」という作用と対をなす形でのアブダクション的論理や、引用論として呪術を捉える議論などがそれにあたる。いっぽう②に関しては、呪術の社会的実践としての側面、ならびに感覚や感性の社会史と接合しうる方法論的整理などがなされ、「行なう」、ならびに「感じる」の側面が中心的に検討された。これらの議論は、近年の呪術論で論じられるような、合理／非合理の二分法を脱した地点にある直感力や創造性、幻視性、仮想性などをともなった人間の生活能力に対して光をあてることになる。と同時に、個性をおびた具体的存在としての「個」が、いかに呪術的实践=知にかかわるかという視座をひらくことによって、呪術世界そのものを描出する可能性についても検討が加えられた。

「資源化される『歴史』——中国南部諸民族の分析から」

「歴史」を表象、叙述、再編成し資源化する現象は人類社会では普遍的に見られる。近年、中国のインパクトが強まり、日本や世界に多大な影響を及ぼしており、中国に関する関心が高まり、その研究が緊急の課題になっている。また、中国では「中華民族」の一体性が政治的に強調される傾向が顕著である。さまざまな「歴史」の細片をハイブリッドな形で縫合して構築し、それを実利に結びつくものとして「資源化」しがちな傾向が見られる。「歴史」を「資源化」する主体は、各級政府、研究者、知識人、マスメディア、一般民等、複数あり、それらが互いに対立、交渉、妥協しあいながら、資源化の潮流を作り出している。同時に、「歴史」は「資源化」される際に、実用価値的な側面だけでなく、様々な認識主体が自分たちの正当性とアイデンティティの維持を担保しようとして構築される側面をも有する。本研究では、いかなる「歴史」が多様な主体によって、実利の獲得やアイデンティティの維持のため、どのように「資源化」されているのか、エスノ・ローカルな政治社会空間を舞台として批判的・分析的に明らかにする。

研究代表者 長谷川清

班員 (館内) 榎永真佐夫 河合洋尚 韓 敏 塚田誠之
(館外) 稲村 務 上野稔弘 兼重 努 瀬川昌久 曾 士才 孫 潔 高山陽子
長谷千代子 長沼さやか 野本 敬 松岡正子 吉野 晃

研究会

2015年度は3回の共同研究会を開催し、2014年度に引き続き、(1)記録・記憶、(2)神話・伝承、(3)史跡・景観、(4)アイデンティティの問題視角から、比較検討を行った。各回の研究報告は、以下のとおりである。

2015年7月4日

長谷千代子(九州大学)「歴史の資源化と利用目的：雲南省徳宏州の『果占壁(コーチャンピ)王国』論をめぐって」

曾 士 才(法政大学)「伝統儀礼の観光資源化と地元住民の意識——ミャオ族の鼓社節を事例に」

2015年10月31日

松岡正子(愛知大学)「蘇る？青蔵高原東部の古砦——再生産される記憶」

楊 海 英(静岡大学)「チンギス・ハーンは誰の英雄？——「中華民族の文化資源」と化するモンゴルの歴史と文化」

2016年1月9日

兼重 努(滋賀医科大学)「民族の歴史を書く——侗族簡史から侗族通史へ」

河合洋尚(国立民族学博物館)「客家地域における歴史の資源化と景観形成——寧化石壁を中心として」

成果

上述の6つの事例報告(タイ族、ミャオ族、チャン族、モンゴル族、トン族、客家)の比較検討を通じて、個別性をもつ諸集団の集成的、歴史的記憶が現在どのように表象され、活用/運用されているのか、属する文脈が変化する中でいかなる読み替えや再解釈が起きているのか、集団のアイデンティティの維持や主張とどのように接合されているか等について、比較研究に必要な枠組みと今後検討すべき課題が浮かび上がってきた。あわせて、エスノ・ローカルな文脈における「歴史」の資源化が市場経済化などの影響を受けて複雑な力関係を内包している点、「記憶」の媒体は非文字のテキストも含めて動的で可塑的である点が具体例によって示され、「歴史」の資源化が国家というナショナルな境界を有する特定の全体社会を基盤としつつも、その外部社会も含めた文脈や状況、関係性の中で進行していることが明らかになった。この共同研究の進展にとって有益な論点を共有することができたと言える。

「モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に」

国立民族学博物館に所蔵される多田コレクション(通称「時代玩具」)は、江戸時代から戦後にかけての玩具を中心とした子どもに関わる様々なモノから構成される、総数5万数千点に及ぶ膨大な資料群である。玩具を初めとした子どもに関する多種多様なモノの数々は、それぞれの時代の子どもの対する人々や社会の意識を克明に映し出している。しかし、近代以降、それらは消費を前提として商品化されたこともあって、遺存は少なく実態は明らかではない。多田コレクションは、そうした子どもに関する品々が網羅的に収集・保存されている希有な例として価値

が高い。

本研究は、児童学・美術史・玩具学・歴史学・民俗学・文化地理学・保存科学といった様々な専門分野の研究者が一堂に会し、コレクションの資料に対して多角的・総合的に検討し、分析を加えることで、コレクションの全体像を正確に把握することを試みる。それと共に、従来漠然としたイメージでしか理解されてこなかった近代日本の子どもの文化や社会の実態を、モノを資料として活用することで具体的かつ精緻に解明する。そして、その成果に基づき、近代以降の子ども観に代わる時代に即した新たな子ども観の見通しを提示し、展示会の開催を通じて広く社会に問うことを目的とする。

研究代表者 是澤博昭

班員 (館内) 笹原亮二 日高真吾
(館外) 稲葉千容 内田幸彦 香川雅信 亀川泰照 小山みずえ 是澤優子 神野由紀
滝口正哉 濱田琢司 森下みさ子 山田慎也

研究会

2015年5月16日

日高真吾(国立民族学博物館)「民博(子供生活文化に関連する所蔵資料)の現段階の整理作業の現状について」
目録の熟覧

2015年5月17日

目録の熟覧と内容等に関する質疑応答
研究会成果報告に関連する特別展の開催等に関する検討

2015年10月17日

濱田琢司(南山大学)「コレクションと創造——民芸運動周辺における収集から」
資料の熟覧と質疑応答

2015年10月18日

香川雅信(兵庫県立歴史博物館)「兵庫県立歴史博物館蔵『入江コレクション』について」
資料の熟覧と研究会成果報告に関連する検討

2015年11月28日

田中宏和(田中本家12代当主)「田中本家博物館の概要」
神野由紀(関東学院大学)「田中本家博物館の子供用品」
資料の熟覧と質疑応答

2015年11月29日

山田慎也(国立歴史民俗博物館)「節供行事の変容——雛祭りのイベント化を中心として」
細井雄次郎(長野市立博物館)「長野市内の小正月行事と子どものかかわり」

2016年2月10日

今年度の研究会の総括と今後の研究計画について
資料の熟覧と質疑応答

2016年2月11日

資料の熟覧と質疑応答

成果

民博資料の現段階における整理状況の共有化をはかり、収集行為そのものの歴史的な意味に関する研究会を開催した。さらに民博資料の目録の熟覧で全体像を把握し、各共同研究員の専門分野と研究テーマに従い実物資料の熟覧に入ること、調査に大きな進展がみられるとともに、本資料の意義と問題点を把握することができた。

その結果、近代日本の子どもの文化や社会の実態を展示に反映するための方向性が絞られてきたが、民博資料だけでは十分に補いきれないジャンルがあることも判明した。そこで長野県須坂市の田中本家博物館の実地調査および周辺地域の子どもの文化の把握、兵庫県立歴史博物館所蔵入江コレクションの概要報告等、各地の類似のコレクションとの比較検討と相互補完の可能性を模索した。

これによりいわゆるモノ(玩具・衣服・文具など)を中心に子どもの生活文化を概観する展示会の開催に向けた調査研究の基盤が形成された。

「演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」

1980年代以降の人類学は、モノが人間に使われたり、意味や価値を付与される側面だけでなく、モノの側からの人間への働きかけや、モノと人の相互作用によって出来事が生成されるプロセスに着目している。また、そこに物質性がいかに関わるのかという問いも重要性を帯びている。本研究は、こうした「マテリアリティの人類学」の関心を芸能研究に差し入れ、新たな芸能研究の視座を探求する。この芸能にはいわゆる「民俗芸能」からコンテンツポラリーまでを含む。また本研究の関心は、身体や上演を取り囲む環境にも向けられる。本研究の第一の目的は、芸能を人とモノの織りなす営みと捉え直し、表現や伝承にモノがどのように関与するのかを考察する事である。

芸能に特徴的な、人とモノ（例えば仮面や楽器や他者の身体）が「一つになる」相互浸透的な在り方や、モノに触発され想像力や創造性が刺激されるプロセスにも注目する。動きや音や物語の中で展開する人とモノの関係性の特性を考察し、人類学を進展させることが本研究の第二の目的である。

研究代表者 吉田ゆか子

班員（館内）八木百合子

（館外）佐本英規 大門 碧 田中みわ子 辻本香子 丹羽朋子 増野亜子 松嶋 健
柳沢英輔 山口未花子 竹村嘉晃

研究会

2015年10月10日

吉田ゆか子（国立民族学博物館） 前回のまとめ、事務連絡 前回欠席者の自己紹介など

佐本英規（筑波大学）「竹（アウ）から楽器（アウ）へ。楽器（アウ）から音（アウ）へ——ソロモン諸島アレアレの竹製パンパイプス・アウにおける物質性の諸相」

大門 碧（京都大学）「コントロールできないものが魅せる音楽エンターテイメント——ウガンダの首都カンパラの『カリオキ』から」

2016年1月16日

吉田ゆか子（国立民族学博物館） 前回のまとめ、事務連絡

増野亜子（東京藝術大学）「音声・身体・モノ バリの歌芝居アルジャと影絵芝居ワヤン・クリットの比較から」

飯田玲子（京都大学）「間身体的な性愛から都市的なエロスへ——メディアの発展とラーワニーの変化」

2016年1月17日

柳沢英輔（同志社大学）「フィールド録音の実践を通して考える人・モノ・自然の関係性」

竹村嘉晃（人間文化研究機構）「神霊と人をつなぐ『モノ』——インド・ケーララ州のテイヤム祭祀と実践者の生活世界」

全員 今後の予定など

成果

計3回の研究会を開催し、特別講師の飯田玲子さん（京都大学）を含む6人が研究発表を行った。初回の2人の発表は、いずれもモノの「制御できなさ」が芸能の表現に影響している点に着目するものであった。伸縮するために音律が一定でない竹パイプや、操作が煩雑なPCから出力される予測されなかった楽曲は、それぞれ独特のチューニング観や、即興的なパフォーマンスを生じている。

連続開催された2回目と3回目では、衣装や人形、上演の映像記録、録音作品、エオリアン・ハーブ、演者の写真やポスターなどのモノがかかわる芸能の諸現象について議論された。加えて、役柄の固定的なイメージ、録音物、音、音をつくる風、といった、モノではないが、ある種の「モノ的な様相を帯びた」存在に関心が集まるようになった。これらは、モノのすぐ傍にあって、モノと共に、芸能の表現、伝承、そして拡散に作用する。この点については来年度も引き続き議論を重ねてゆく予定である。

「チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究」

1979年に国立民族学博物館は「チベット仏画コレクション」を購入した。その内容は実は仏画ではなく、千点を超すチベット仏教古派及びボン教の護符とそれを刷るための版木である。チベット仏教とボン教は独自の教義・哲学・論理体系を作り上げ、東洋人の思惟方法を語る上で主要な柱の一つになっている一方で、民間信仰をも貪欲に

受け入れ、独特の「行」を発展させてきた。チベットの精神文化基層においては、超越的な原理と世俗的な経済原理とが絡み合っており、その二つを有機的に結びつけるための仕掛けとして「呪力観ないし呪物」が働いていると思われる。仏教やボン教の大蔵経論部の一定のポジションが「呪法」や「脱呪法」に割かれているのはそのことと密接な関連がある。護符はそこに機能する呪物の身近なモノの一つである。

我々は、チベットに広く行われている護符に注目し、一般の人々の目線に立って、それらの内容・意味・用途の記述、文献学的裏付け、護符の加持・聖化（パワーの付与）に関する儀礼、その経済的仕組み、チベット人でない人々を含む民衆の間での現代的意味などを様々の角度から調査研究し、護符というモノを通じてチベットの宗教実践の有り様と宗教文化基層の一端を明らかにすることを目標としているが、本共同研究ではその第一歩として民博が蔵する護符の図像とそこに書かれるマントラを含む文を記述・解析することを試みたい。

研究代表者 長野泰彦

班員（館内）立川武蔵 三尾 稔
（館外）大川謙作 大羽恵美 小西賢吾 小松和彦 武内紹人 津曲真一 那須真裕美
別所裕介 三宅伸一郎 村上大輔 森 雅秀 脇嶋孝彦

研究会

- ①2015年秋から2016年3月まで、本館の「チベット仏画コレクション」を図像学と機能の観点からカテゴリ別に整理し、N. Douglas: Tibetan Tantric charms and amuletsとの異同を検証した。
- ②このため、図像解析、文の解説、文献の裏付けの3班が、2015年10月、2016年1月及び2月に、会場はいずれも本館で、小人数で記述作業を行った。

2015年10月10日

護符の同定・記述作業

2015年10月11日

護符の同定・記述作業

2016年1月9日

護符の同定・記述作業

2016年1月10日

護符の同定・記述作業

2016年2月18日

護符・白描図像の記述作業

2016年2月19日

護符・白描図像の記述作業

成果

- ①護符及び白描による尊像図がチベット宗教のどの宗派に関わるものであるかを検討し、用途とともにカテゴリ化を図った。
- ②N. Douglas: Tibetan Tantric charms and amuletsとの異同を検証した。
- ③本館で既に公開されている標本資料情報カードの記述を検証し、記述の問題点を抽出した。

「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」

人類学においてサブスタンス（身体構成物質）に関する研究は、主に親族研究のなかで行われてきた。特に、生殖の観念の文化的多様性に関する民俗生殖理論や、生物学的生殖に限定されない人の関係性についての議論は、自然／文化、生物学的／社会的次元の二元論を前提とする親族（研究）を批判的に乗り越えようとするものである。ところが、今日、サブスタンスは、科学技術や医学の発展、グローバルな経済市場やトランスナショナルな移動の増加という現象の最前線で、資源として取引され、流通されるようになっており、従来の親族研究の射程を超えた新たな重要性を帯びるに至っている。遺伝子やゲノムといった新たなサブスタンスが、個や家族、集団のアイデンティティ形成や社会化のあり方に影響を及ぼすさまは、医療人類学を中心に生社会性（biosociality）という点から議論されている。

本研究の目的は、オセアニア、アジア、ヨーロッパにおけるサブスタンスの社会的布置に関する比較研究を通し

て、グローバル化時代のサブスタンスをめぐる社会動態の包括的な理解をはかるとともに、親族研究と医療人類学で二極化されているサブスタンス研究を架橋するアプローチを提示することである。

研究代表者 松尾瑞穂

班員 (館内) 宇田川妙子

(館外) 澤田佳世 島藺洋介 白川千尋 新ヶ江章友 田所聖志 深田淳太郎 洪 賢秀
松岡悦子 松嶋 健 山崎浩平

研究会

2015年11月7日

松尾瑞穂 (国立民族学博物館) 「研究会の目的と今後の研究計画」

松尾瑞穂 (国立民族学博物館) 「サブスタンス研究の動向」

全員「討論」

2016年1月30日

島藺洋介 (大阪大学) 「文献解説 D. Schneider (1968) American Kinship」

新ヶ江章友 (大阪市立大学) 「文献解説 A. Shimizu (1991) “On the Notion of Kinship”」

深田淳太郎 (三重大学) 「文献解説 清水昭俊 (1989) 「血」の神秘」

成果

初年度にあたる2015年度は、2回の研究会を開催し、サブスタンスに関する比較研究という本共同研究のテーマと課題について、メンバー全員の共通理解を深める作業を行った。研究代表者の松尾による研究動向のまとめの発表に続き、本テーマと関連する各メンバーの研究関心、本研究会における役割について意見交換を行った。第2回目の研究会では、親族研究におけるサブスタンスをキーワードとし、同分野の基本重要文献の解説を行った。研究会前に全員が事前に文献を読解したうえで、島藺、新ヶ江、深田の3名による文献解説発表を行った。2回の研究会を通して、サブスタンスという研究領域とその射程について、メンバー同士で活発かつ濃密な議論がなされ、2年目以降につながる大変有益な内容となった。

「驚異と怪異——想像界の比較研究」

ツヴェタン・トドロフが『幻想文学論序説』(1970)で定義したように、「驚異」marvelousや「怪異」uncannyは、自然界には存在しえない現象を描いた幻想文学、いわゆるファンタジーの部類に入るとみなされる。近代的な理性の発展とともに、科学的に証明のできない「超常現象」や「未確認生物」はオカルトの範疇に閉じ込められてきた。しかし近世以前、ヨーロッパや中東においては、犬頭人、一角獣といった不可思議ではあるがこの世のどこかに実際に存在するかもしれない「驚異」は、空想として否定されるべきではない自然誌の知識の一部として語られた。また、東アジアにおいては、実際に体験された奇怪な現象や異様な物体を説明しようとする心の動きが、「怪異」を生み出した。

本研究会では「驚異」と「怪異」をキーワードに、異境・異界をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係、心象地理の変遷などを比較検討する。その成果は、当館における特別展示のかたちで公開することを予定している。

研究代表者 山中由里子

班員 (館内) 菅瀬晶子 吉田憲司

(館外) 榎村寛之 大沼由布 香川雅信 金沢百枝 黒川正剛 小林一枝 小松和彦
小宮正安 佐々木聡 寺田鮎美 林 則仁 松浦史子 松田隆美 安井眞奈美

研究会

2016年1月11日

山中由里子 (国立民族学博物館) 趣旨説明

黒川正剛 (太成学院大学) 「驚異研究から見た怪異——『妖怪学の基礎知識』と『怪異学入門』に基づく問題提起」

全員・全体討論

2016年2月7日

榎村寛之（三重県立斎宮歴史博物館）「怪異学から見た驚異——『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』に基づく問題提起」

香川雅信（兵庫県立歴史博物館）「妖怪研究と驚異研究の接点を探る」

全員・全体討論

成果

初年度である2015年度は、驚異研究と怪異研究のそれぞれの分野における基礎文献といえる研究書を指定し、それらを事前にメンバー全員が読み、怪異については驚異側から、驚異に関しては怪異側の研究者から接点や疑問点を提示し、討論を行った。テーマ書籍としたのは、小松和彦著『妖怪学の基礎知識』（角川選書、2011年）と東アジア怪異学会編『怪異学入門』（岩田書院、2012年）、および山中由里子編『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』（名古屋大学出版会、2015年）である。

基礎的な語彙、頻出するモチーフ、歴史的な枠組み、研究史などを確認し、これから具体的なテーマについて議論してゆくための基盤を築いた。特定の文化特有の用語を、別の文化の現象を語る際に無批判に使うことや、鳥瞰的な比較研究が陥りやすい一般論化・単純化の危険性を十分に認識し、一次資料やフィールドデータの緻密な分析に基づいた研究報告を重視し、実証的な比較を行う必要性を全員で確認した。

「応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」

本研究は、応援という切り口から、人類学的研究領域の拡大を図り、人間文化の特質の一端を解き明かすことを目的としている。実践的な関心とも関係する開発援助から福祉やケアサービスなど「支援」に関する研究や、アニメなど現代風俗のファン文化に関する研究は、人類学のみならずさまざまな学問分野において近年数多くなされている。本共同研究会では、こうした個別研究を横断的に架橋して、政治やスポーツにおける応援まで含めたい。人間にとっての利他性の特質にも迫りたい。応援（support）という行為一般を対象とするが、さしあたり政治・スポーツ・ファン文化の下位領域に分けて焦点を当て、民族誌的データをもとに比較分析を行う。

研究代表者 丹羽典生

班員（館内） 笹原亮二 三尾 稔

（館外） 岩谷洋史 梅屋 潔 小河久志 風間計博 亀井好恵 木村裕樹 熊田陽子

瀬戸邦弘 高橋豪仁 高野宏康 立川陽仁 椿原敦子 難波功士 前川真裕子

山田 亨 吉田佳世

研究会

2015年10月24日

丹羽典生（国立民族学博物館）「野次・喝采から応援へ：応援の人類学的研究に向けた試論」

全 員 「各自の研究紹介及び今後の予定の検討」

2016年1月30日

丹羽典生（国立民族学博物館）「応援文化という領域と特性——日本の大学応援団の変化から考える」

岩谷洋史（神戸大学）「選択されるパフォーマンス——大学応援団における身体的動作を通じての考察」

成果

研究会を2回開催した。初回は研究代表者の丹羽典生が研究会の趣旨を説明した。また目指される研究枠組みについて、各参加メンバーと方向確認・意見交換を図った。「応援」という言葉で意図する研究対象の領域の幅を検討し、組織化、ジェンダーの偏り、文化表象とアイデンティティなど研究会全体として見ていきたい項目について、議論を行った。第2回目は、応援を比較文化として論じることの意義を、申請者が2014年にAnthropology of Japan in Japanで組織したパネルに基づいて、日本の大学応援団を事例に報告した。応援という現象を見るときに個人と組織という軸で見る必要があること、アイデンティティ表象と関わる側面に注目していきたいなど、以上の活動を通じて翌年以降の研究会の土台作りを行った。

「考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究」

考古学は一般に過去についての科学的な研究と捉えられている。しかし同時に、考古学的知識や出土品が、時に観光資源として利用され、国家・民族をめぐる政治と結びつくように、現代を形作る実践的な学問でもある。この「科学としての考古学」と「社会实践としての考古学」の間の緊張関係をめぐって、考古学者も、植民地主義やナショナリズムの歴史との関わり等、考古学の倫理について内省的な検討を始めているが、それらはまだ考古学内部にとどまっている。本共同研究では、考古学的知識が作られ、消費される、その多様なあり方を検証することによって、考古学がどのように社会関係や人々の世界観を形成し、変化させ、新たな景観をも作り出しているのかについての広範な理解を目指す。

そのために、次の3つの視点から複数フィールドにおける考古学的実践の民族誌・歴史的研究を行う。

(1) 考古学的知識・技術習得のプロセスは、どのように個人のもの見方、コミュニケーション、行為に影響を与えているのか。(2) 発掘現場やラボで、出土品などのモノはどのように考古学的データに変換されるのか。(3) 考古学は遺跡観光、国家・民族の歴史の修正、社会運動にどのような影響を与えているのか。

研究代表者 ジョン・アートル (ERTL, John)

班員 (館内) 関 雄二 寺村裕史 野林厚志 ピーター J. マシウス
(館外) 石村 智 市川 彰 岡村勝行 サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ 渋谷綾子
寺田鮎美 中村 大 松田 陽 溝口孝司 村野正景 山藤正敏 吉田泰幸
米田 穰

研究会

2015年10月17日

ジョン・アートル (金沢大学) 「共同研究の概要」

メンバー自己紹介

松田 陽 (東京大学) 「自著解題：『実験パブリックアーケオロジ（第1・2章）』」

2015年10月18日

吉田泰幸 (金沢大学) 「縄文と社会運動」

読書会 「Bruno Latour 科学論の实在——パンドラの希望 第2・3章」司会：石村 智・山藤正敏

今後の予定について打ち合わせ

2016年2月13日

ジョン・アートル (金沢大学)・石村 智 (東京文化財研究所)

浅川滋男 (公立鳥取環境大学) 「建築遺構の復元に関する諸問題」

安芸早穂子 (復元画家) 「復元絵画について」

石村 智 (東京文化財研究所) 「修復とオーセンティシティ：カンボジアの事例」

2016年2月14日

ジョン・アートル (金沢大学) Prehistoric Building Reconstructions in Japan.

寺田鮎美 (東京大学) 「博物館と複製メディア」

総合討論 (今後の予定について打ち合わせを含む)

成果

共同研究会第一回は、「考古学の民族誌」が目指すべき方向、方法論、立ち上げの背景について、メンバー間の共通理解を形成することが目的であった。代表者であるアートルの趣旨説明、松田による本共同研究に関連する自著の一部解題、吉田による「考古学の民族誌」ケーススタディの紹介、理論的基盤形成に欠かせない重要文献の石村・山藤による解題、以上4つの内容で構成され、それぞれの内容に関する議論も活発に行われた。

共同研究会第二回は、「考古学における復元と表象」と題し、2名のゲストスピーカー (浅川滋男・鳥取環境大学、安芸早穂子・復元画家) による発表と、3名 (石村・寺田・アートル) による研究発表、および復元とオーセンティシティに関する2本の文献の解題 (司会：石村) によって構成され、考古学の復元におけるオーセンティシティの問題や、それに係る社会的状況についての分析および議論をおこなった。

本研究の目的は、宇宙開発を対象にした人類学的研究の可能性を探り「先端科学技術」の人類学という新しいテーマに接近するための方法論的検討をおこなうことにある。20世紀後半から宇宙開発に関わる科学技術の進展、宇宙空間の利用が本格化し、宇宙は単に科学技術の研究対象に留まるだけでなく、国際的に展開する政治的かつ経済的な背景やローカルな社会文化的な基盤や生活文化とも密接に関わる問題領域となりつつある。本プロジェクトは、(1) 想定される宇宙に関する具体的なトピック（宇宙産業、ツーリズム、人間の身体的かつ認知的変容など）に対する従来の概念の有効性や方法論を検討する。(2) は、科研費によるJAXAとの共同調査プロジェクトと併行して行われ、宇宙開発技術者に対するインタビュー調査データの検討・解釈作業を進める。本研究は最終的に近代科学技術の検討を射程に入れた「宇宙人類学」という総合的な主題を設定した研究領域の確立を目指す。

研究代表者 岡田浩樹

班員（館内）上羽陽子 飯田 卓
（館外）磯部洋明 岩谷洋史 岩田陽子 大村敬一 川村清志 木村大治 佐藤知久
篠原正典

研究会

2015年12月26日

岡田浩樹（神戸大学）「宇宙開発の文化人類学的研究の可能性」

質疑応答

参加者全員 「各自の研究の紹介および今後の予定の検討」

2015年12月27日

佐藤知久（京都文教大学）「Japan space exploration oral history project (JSE project) について」

大関恭彦（JAXA）「日本の宇宙開発に関する専門的知識の提供」

全 員 「宇宙開発に関わる資料の検討」

2016年2月20日

研究成果物編集会議、および今後の活動の打ち合わせ（参加者全員）

2016年2月21日

岸本統久（JAXA）「衛星ナビゲーションについて」

後藤 明（南山大学）「人類学と天文学：スカイロア／スカイスケープ人類学の系譜と可能性」

全体討論

成果

第一回研究会では、宇宙開発に関する人類学的研究の可能性と課題について、共同研究会に先立つ日本文化人類学会研究課題懇談会「宇宙人類学研究会」の活動について報告、参加者による検討と議論を行った。議論を通し、今後の研究会については、1. 日本の有人宇宙開発に関わったスピーカーを招聘、参加者による議論を行う事、2. 宇宙開発の現在の状況と文化人類学の接点を探るために様々な分野の研究者を招聘することを決定した。翌日はJAXAの大関恭彦氏による日本の宇宙開発の歴史と現状についての発表、これに対する議論を行った。第二回研究会では、JAXAの岸本明氏による衛星ナビゲーションシステムの現状についての報告、後藤明氏の天文人類学についての報告について討議した。第一回、第二回の議論を通し、(1) 宇宙開発が人類学者の様々なフィールドに影響を与えつつあることの共通理解、(2) 宇宙開発が直面する諸課題あるいは今後の課題について、これまでの人類学的知識が寄与しうる可能性の確認、(3) 人類学の「伝統的手法」インタビュー調査（オーラルヒストリー）、フィールドワークの有効性と科学技術人類学への展開の可能性が明らかになった。

核実験や原発事故による放射線影響を受けた社会については、人体や自然環境への影響に関する自然科学分野の研究、加害責任を明らかにする歴史学研究、放射線影響の基準を決定する政策学的研究、社会的影響を明らかにする社会学および人類学的研究などが蓄積されてきた。

しかしながら実際には、遺伝的疾患や食料に対する不安を訴える当事者の発言は「感情論」として切り捨てられ

る傾向にある。これまでの放射線影響に関する研究により、その不確実性が科学的に明らかにされてきたにも関わらず、実社会における被害対応や予防では、放射線影響の不確実性を生きる「生活者の視点」からの被害の理解は十分ではない。

そこで、本共同研究では、被害者の「当事者」としての「生きること」や「生活」の視点からの被害観の解明を目的とする。これまで個別に研究してきた人類学を中心として、医学、政治学、歴史学の学問分野と連携し、米国、マーシャル諸島、日本、太平洋を調査対象としたこれまで個別に行われてきた研究を統合・深化させる。

研究代表者 中原聖乃

班員 (館内) 林 勲男

(館外) 市田真理 猪瀬浩平 岡村幸宣 越智郁乃 間間 元 桑原牧子 小杉 世
島 明美 関 礼子 西 佳代 三田 貴

研究会

2015年10月24日

全員 自己紹介および研究概要発表

林 勲男 (国立民族学博物館)・中原聖乃 (中京大学) 研究会内容および趣旨説明

全員 成果発表に関する意見交換

2016年2月6日

中原聖乃 (中京大学) 「文化人類学が放射能汚染問題に果たす役割は何か？」

市田真理 (東京都立第五福竜丸展示館) 「第五福竜丸展示館の活動を通じた交流」

間間 元 (生協きたはま診療所) 「ビキニ核実験被害の医学的考察——これまでの問題整理」

2016年2月7日

西 佳代 (広島大学) 「グアムにおける放射能被害の実態」

談話会打ち合わせ、準備

談話会 「放射能汚染に立ち向かう——測定と生活の場から」(文化人類学学会課題研究懇談会災害の人類学との共催)

話題提供1 中原聖乃 (中京大学) 「マーシャル諸島核実験被害地のいま」

話題提供2 島 明美 (ふくみラボ) 「福島の生活と市民測定」

講演 青山道夫 (福島大学) 「海洋の人工放射能汚染の歴史——核実験および原子力発電所事故」

成果

今年度は2回の研究会を開催できた。

1回目の研究会は、問題意識の共有、研究会の進め方、成果発信について議論した。当初は、「当事者」を、直接的に被害をうけ、かつ生活している人を、「被害者」と定義していたが、討論により、自身も気づかない被ばくや放射能汚染との間接的な関わりをも明らかにするという、広い意味での「当事者性」について明らかにすることを確認した。また成果発信については論文集を軸として若者向けの放射線影響を考える冊子なども考慮し、広く社会に成果を還元することを確認した。また、メンバーのそれぞれが初対面であったことから、自己紹介に多くの時間を割いた。メンバーそれぞれの放射線影響研究や活動について、メンバー相互に確認できた。

また2回目は1日目の研究会、2日目のシンポジウムとも公開で行った。とりわけ2日目は25名の一般参加者とともに活発な議論が展開され、問題意識を社会と共有することができた。

「医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働」

少子高齢化、医療の高度・専門分化、患者の権利意識の変化等に伴い、保健医療福祉の現場では、医療者とクライアントあるいは多職種の間でのコミュニケーション不全の問題等、医療福祉系の個別の学問では対応しきれない複雑な課題が生まれている。これらの課題に日々直面する保健医療福祉専門職(以下、「医療者」)にとって、事象をその社会的文化的文脈の中で理解する視点、他者理解や自己相対化の視点を提供する医療人類学の知見の有用性は高く、医療者教育の現場でもその潜在的需要がある。また、医学教育では国際的な教育の質保証のため、今後5年程度の間には全国80大学が認証評価を受審するという動きがあり、その評価基準のなかで医療人類学も言及されている。こうしたなか、現代の日本の医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討することは喫緊の課題であ

る。そこで本共同研究では、複数の職種の医療者との協働により、医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討し、その教材を開発することを目的とする。

研究代表者 飯田淳子

班員 (館内) 鈴木七美 浜田明範 松尾瑞穂
(館外) 伊藤泰信 梅田夕奈 大谷かがり 工藤由美 辻内琢也 照山絢子 錦織 宏
濱 雄亮 星野 晋 堀口佐知子 吉田尚史

研究会

2015年11月7日

飯田淳子 (川崎医療福祉大学) 「趣旨説明」

星野 晋 (山口大学) 「医学校で教えてくれなかったこと」

濱 雄亮 (慶應義塾大学) 「医療人類学教育の実践報告——単科大学医学部における事例を中心に」

参加者全員 総合討論

2015年11月8日

飯田淳子 (川崎医療福祉大学) 「家庭医の症例検討会への参加を通じた協働の試み」

参加者全員 今後に向けて

2016年1月24日

工藤由美 (亀田医療大学) 「類似性の向こう側——看護学部／学科における文化人類学教育の経験から」

大谷かがり (中部大学) 「看護学 (師) は人類学を通して何をみたいのか」

参加者全員・総合討論

成果

初年度は医学生・医師・看護学生に対する (医療) 人類学教育の現状を検討した。「暮らしの現場のケア」の領域が拡大しつつあるなか、医療者にとってますます重要性を増していく社会科学的アプローチを習得するには、高学年次から卒後に社会・文化的課題を含む事例やシナリオを用いた学習を繰り返す必要があることが指摘された。共同研究会ではメンバーが行っているそのための具体的な実践例が報告され、人類学の概念からではなく、医療現場の事例から出発し、それらを人類学的視点や思考と接続させることの重要性が強調された。他方、人類学と一見親和性の高い看護などの領域でも、類似の言葉を使いながら別のことを指すなど、人類学との接続点を見出しにくいことも多い。しかし人類学者は医療者の前提や目的、立場を十分に理解し、また、医療者に伝わる言葉で自らの営みや考え方について説明を行い、対話を通じて協働していくことが重要である。

「個—世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」

中東は、古来より多様な人々が民族、宗教、言語の違いを超えて離合集散と交渉を繰り返してきた巨大な交流圏の一つである。この圏域では人名、地名、出来事で満たされたりフラと呼ばれる旅行記が精力的に産出されてきたが、固有名への強い関心は日常生活・会話の中でも広く見受けられ、人々の生活を基礎づける重要な関心の持ち方であると想定される。このような関心の広がり、中東を基点として広がる世界において、生身の個人という存在と移動という経験、未知なる人・場・情報との遭遇こそが、世界を形成・構想するうえでの根幹と見なされてきたことを示唆する。

本研究は、中東を一つの基点として活躍する具体的個人に焦点を定めて、彼らの人・場・情報との出会い・交渉・関係の形成はいかにして実現されているのか、超地域的な人・物・知の交流とミクロな生活の場の形成とがどのように関連しているのかを探求することを通じて、個人が織りなす世界の特質を解明しようとするものである。

研究代表者 齋藤 剛

班員 (館内) 西尾哲夫
(館外) 宇野昌樹 大坪玲子 奥野克己 小田淳一 荻谷康太 佐藤健太郎 椿原敦子
鳥山純子 堀内正樹 水野信男 嶺崎寛子

研究会

2015年10月17日

齋藤 剛（神戸大学）「個－世界論——問題提起Ⅰ」

2015年10月18日

西尾哲夫（国立民族学博物館）「アラブ世界の言語社会的位相と個人空間の再世界化」

2016年1月23日

齋藤 剛（神戸大学）「個－世界論——問題提起Ⅱ」

大坪玲子（東京大学）「カートを通して見える世界」

2016年1月24日

椿原敦子（国立民族学博物館）「ふたつの「個人主義」？——テヘランとロサンゼルスから考える」

成果

共同研究の初年度（2015年10月～2016年3月）は、研究班で共有すべき問題意識、論点、方向性を確認することに務めるのと同時に（齋藤Ⅰ、西尾発表）、イスラーム世界、民衆イスラーム論、イスラーム経済論、個人主義などの既存の分析枠組み、理論、概念の問題点を具体的な事例報告を通じて明らかにした（西尾、齋藤Ⅱ）、大坪、椿原発表）。

西尾の議論は、日本における近年のイスラーム理解の問題点を手がかりとして、アラブ世界、イスラーム世界の捉え方が西洋諸社会、日本社会、当事者たるムスリムたちの間で曖昧であることを、言語社会的位相から多角的に照射するものであった。

イエメンにおけるカート研究を進めて来た大坪は、自身の研究を踏まえて、日本国内における「イスラーム経済論」の問題点を明らかにした。イスラーム経済論は、キリスト教、仏教をはじめとするイスラーム以外の宗教における商業、経済の捉え方を通覧し、商業に肯定的な宗教としてイスラームを捉える視点を打ち出したものである。大坪は、イスラーム経済論が依拠する文献、原典の再検討を通じて、イスラーム経済論が資料の恣意的な解釈に基づいて成り立っていることを明らかにした。

椿原は、イラン本国およびロサンゼルス在住イラン人のコミュニケーション、社会関係形成プロセスの検証などを通じて、ペルシャ語において個人主義を意味する「イェクターギャリー」という民俗語彙の意味内容と、個と組織（化）をめぐるイラン人の理解の特質を明らかにした。

この他にも、共同研究会における議論を踏まえて、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」のキックオフ・国際シンポジウムとして、「中東における「民衆文化」の編成と「民衆」概念の再検討」を2016年2月27日に、国立民族学博物館で開催した。同シンポジウムには、共同研究班から、齋藤、大坪、鳥山、椿原、西尾が発表者として参加したほか、嶺崎、水野がコメンテーターを、堀内、奥野、宇野が司会をそれぞれ担当し、共同研究の国際発信として基幹プロジェクトに全面協力した。

「確率的事象と不確実性の人類学——『リスク社会』化に抗する世界像の描出」

不確実な未来に人間がどう向き合うのかは、伝統社会を対象に、近代的・科学的な形式知では説明がつかない様々な生活実践を扱ってきた人類学において、重要な関心領域を形成してきた。一方で、社会学で台頭してきた「リスク社会」の議論は、学問分野の枠を超えて、人類学にも大きな影響力を与えている。近年の人類学では、「リスク社会」論をもとに、確率的事象を数量的に捉えて管理の対象とする「リスク」と、リスク計算による管理が困難な「不確実性」とを区別し、今日の社会・経済・政治的諸制度が後者の領域をも制御しようとする営為を、新たな考察対象としている。

しかし、上記の二分法的な不確実性の理解は、確率的事象の二面性を把握し切れていないと、本研究は考える。すなわち、集合的・統計的には計算可能で制御の対象とし得るが、一回限りの生起においては根源的な制御不可能性が露わになる。本研究はその両面に目を向けて、リスク管理の技術に依拠した諸制度の設計や人間の取扱いと、個人の認識や実践との間に生じる深刻なずれを、考察の主題にする。その上で、人類学的「不確実性」研究の考察視角を拡張することにより、既存の「リスク社会」論の俎上に載らない「リスク社会」の姿を描き出す。

研究代表者 市野澤潤平

班員（館内）飯田 卓

（館外）東賢太郎 阿由葉大生 碓 陽子 井口 暁 磯野真穂 牛山美穂 近藤英俊

土井清美 松田素二 吉直佳奈子 渡邊日日

研究会

2015年11月14日

市野澤潤平（宮城学院女子大学）「研究会の趣旨説明」
碓 陽子（金沢大学）「人類学におけるリスクと不確実性にかんする理論的サーベイ」
土井清美（青山学院女子短期大学）、吉直佳奈子（東京大学）「書評および理論的検討『リスクの人類学：不確実な世界を生きる』世界思想社、2014年」

2015年11月15日

全 員 「各自の研究紹介及び研究会の理論的方向性の検討」

2016年2月6日

近藤英俊（関西外国語大学）「偶然と必然のあいだを生きる：苦境に関する一考察」
市野澤潤平（宮城学院女子大学）「ワイルドライフ・ツーリズムの賭博性」

2016年2月7日

井口 暁（京都大学）「社会学におけるリスクと不確実性にかんする理論的サーベイ」
全 員 「各自の研究紹介及び研究会の理論的方向性の検討」

成果

2015年度は、2回の研究会を開催した。第1回目は、個々の研究者の関心領域を共有し、議論の共通基盤を作ることに費やした。具体的には、一人15分程度の個人発表と、申請代表者市野澤潤平と碓陽子による「リスクと不確実性の人類学」についての研究レビュー発表を行った。また、本研究会が過去の民博共同研究「リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究」（代表：東賢太郎）の土台のもとに企画されていることから、同共同研究の成果出版である『リスクの人類学：不確実な世界を生きる』（2014年、世界思想社）の批判的レビューを行い（土井清美および吉直佳奈子）、新たな課題と今後の見通しを整理した。

第2回目は、不確実性に向けた視野を出来るだけ拡大し、論点を模索するという意図のもと、異なる角度から「偶然」を論じる二つの事例発表を行った（市野澤潤平および近藤英俊）。同時に、社会学者の井口暁が、社会学における不確実性とリスク関連理論の議論を整理し、人類学と社会学における議論との違いや類似点、議論が足りない領域などを検討した。

「高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究」

近年、日本の高等教育機関では、大学教員の教育能力の向上が推進されており、個々の大学で大学教育の改革（Faculty Development、以下、FD）が行われている。特に、大学教員を対象としたワークショップでは、学生主体の学びの開発が重視されていることから、学習教材の一つとしてモノ資料が見直されつつある。しかしながら、大学教員による博物館の利用は、展示見学にとどまっており、モノ資料による思考のあり方を検討するまでには至っていない。

そこで、本共同研究では、大学教員が博物館という「場」に足を運ぶ機会を提供し、モノ資料に触れ、それを活用した教育実践を、博物館関係者を交えて議論し、高等教育機関と博物館の連携による、より創造的な教育の可能性について検討を試みる。このような取り組みを通して、モノ資料を用いたFDの発展的貢献を図るとともに、大学と博物館とのアクセス回路の構築および高等教育機関における博物館資料の積極的な活用を目的としている。

研究代表者 呉屋淳子

班員（館内）金田純平 河合洋尚 末森 薫 吉岡 乾
（館外）稲澤 努 黒田賢治 五月女賢司 坂本 昇 時任準平 如法寺慶大 横山佐紀
吉田早悠里

研究会

2015年11月21日

呉屋淳子（山形大学）「共同研究会の趣旨説明」
全員 研究員メンバー自己紹介

全員 各会の発表者の調整

2015年11月22日

呉屋淳子（山形大学）「高等教育機関における博物館資料の活用——みんぱっくの活用例」

稲澤 努（尚絅学院大学）「フィールドワーク演習の講義における博物館資料の活用——みんぱっくの使用方を学ぶ」

展示場の解説（中国・朝鮮半島・沖縄）河合洋尚、呉屋淳子（南アジア）吉岡乾（ビデオテーク）金田純平

成果

初年度は、1回の研究会を2日間に分けて開催した。まず、代表者である呉屋がプロジェクトの趣旨説明および問題提起を行い、メンバーのおおまかな役割と研究会の進め方について説明した。とくに、本研究会は「博物館と高等教育機関」の接合を議論の中心に据えていることから、専門分野が異なるメンバーで構成されている。そのため、各メンバーの興味関心を考慮したプロジェクトの進め方を示し、成果公開の方法についてメンバー間で意見交換を行った。次に、メンバー2名による博物館資料を活用した実践事例の報告を行った。報告もとに議論したあと、今後は、各自のプロジェクトの発展にむけた建設な議論を行うためにも、博物館と高等教育機関の連携の意義を明確に示し、よりインタラクティブな学びの可能性を探求する試みをメンバー間で連携して本研究を進めていくことを話し合った。

人間文化研究総合推進事業

「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」(Images of the marvelous and uncanny: a comparative study) ——

代表者：山中由里子

目的

本連携研究は、申請者が代表を務めた共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」と国際日本文化研究センターの小松和彦教授が率いてきた共同研究「怪異・妖怪文化の伝統と創造——研究のさらなる飛躍に向けて」の成果を対照させ、未知なるものをめぐる思考様式の地域性や時代性を浮かびあがらせ、伝承やイメージの東西伝播を明らかにしようとするものである。機構連携展示としての特別展の開催を成果の一つとすることを視野に入れつつ、特に驚異・怪異の表象物（挿絵・絵画、民族資料、珍品・からくり、博物標本など）に焦点をあてる。

中東とヨーロッパという一神教世界における驚異にある程度の共通性があるとしたら、中国の『山海経』あるいは『日本霊異記』のような「怪異譚」とは、またどう違うのか、といった問題に取り組む。

研究の成果

1) 研究成果の概要

報告者が代表を務めた科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」（2010-2014）と、共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」（2010.10-2014.3）を連携させて行った調査・報告・討論の成果を、『<驚異>の文化史——中東とヨーロッパを中心に』（名古屋大学出版会、2015年）として編集し刊行した。本書の序章や終章において、本連携研究の枠組みにおいて開催した研究フォーラムでの議論を反映させ、驚異と怪異の比較研究の可能性について考察した。

本書は、比較文学、比較文明学、東西文化交流史、妖怪・怪異学など、様々な分野の研究者から注目を浴び、横山泰子「小人島はどこにあるのか」『文学』（2015年11・12月号）など、怪異研究者の論文において引用されている。12月18日付『週刊読書人』の2015年回顧欄、さらに12月27日付の朝日新聞の「今年の3点」の欄でとりあげられ、社会的にもインパクトを与えている。

2) 著作物名

山中由里子（編）『<驚異>の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋大学出版会、2015、528頁

3) 論文名

山中由里子「驚異を媒介する旅人」東アジア怪異学会編『怪異を媒介するもの』（アジア遊学）勉誠出版、2015、pp.287-292

山中由里子 「想像の地理と周縁の民族——女人族伝承の東西伝播」山中由里子編、『《驚異》の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋大学出版会、2015、pp.256-273

4) 研究会・シンポジウム等

- 2015年9月15日 Yuriko Yamanaka, “Alexander and the Wonders of the World in Ṭūsī’s ‘Ajā’ib al-makhlūqāt,” エルミタージュ美術館、サンクト・ペテルブルグ
- 2015年11月1日 山中由里子「比較怪物命名学——驚異と怪異の名づけと形象化」国際シンポジウム「東の妖怪・西のモンスター」学習院女子大学
- 2016年1月24日 山中由里子「〈驚異〉としての古代——アジャーイブ文学におけるアレクサンドロス」ワークショップ「中世イスラーム世界から見た古代」筑波大学東京キャンパス
- 2016年2月13日 山中由里子「海賊商品としての人魚のミイラ」シンポジウム「海賊・山賊・馬賊・愚連隊：無法者 outlaw の社会史にむけて」国際日本文化研究センター

5) データベース等の公開

ウェブサイト「驚異怪異」をみんなく HP において公開する。

<https://www.r.minpaku.ac.jp/ajaba/index.html>

本機構連携研究開始以前からすでに日文研で立ち上げられているものとして、「怪異妖怪伝承データベース」が挙げられる。<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」

人間文化研究機構は、わが国にとって学術的、社会的に重要な意義を有する地域の文化、社会を総合的に理解、解明するため、関係大学・機関と協力して2006年度から「地域研究推進事業」を開始した。本事業は、機構が関係大学・機関と研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築して研究を推進する方式の研究事業である。2006年度から「イスラーム地域研究」事業、2007年度からは「現代中国地域研究」が始められているが、これに加え2010年度より「現代インド地域研究」事業が開始された。

「現代インド地域研究」事業においては、京都大学を中心拠点とし、これに東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学、および国立民族学博物館の5拠点が加わってネットワーク型の研究推進が図られている。

以下では「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点の2015年度の事業概要を記載する。

【拠点の整備】

① 拠点運営会議の実施

毎月1回の頻度で拠点運営会議を開催し、拠点の事業推進のための企画立案やその推進にあたった。

また、拠点の研究成果公開の一環として実施した国立民族学博物館南アジア展示場の新構築後の社会連携事業の企画や運営に関しても意見交換を行った。

② 国際的共同研究の基盤整備と推進

2010年度にエジンバラ大学南アジア研究センターと締結した研究交流のための覚書に基づき、同センターと協力してRoutledge社から刊行する予定の叢書の編集作業を行った。国立民族学博物館拠点はこの事業の交渉窓口としての役割を果たし、2015年度は英文論文集を2冊刊行した。

また、今後も国際的な共同研究を推進するため、上記研究センターとの研究交流の覚書を2015年5月に更に5年間を目途として更新した。さらに、新しい交流協定を締結するための交渉をデリー大学社会学部との間で進める一方、今期のプロジェクトで構想している国際南アジア研究センター・コンソーシアムの構築に関して研究者をオランダ、スウェーデン、タイ、ベトナム、韓国などに派遣して、各地の南アジア研究センターに関する情報収集を行い、派遣先の南アジア研究者と意見交換を行った。

③ 拠点ホームページの運用と整備

拠点独自のホームページを運用して拠点の研究活動に関する情報発信を継続した。特に2015年4月に発生したネパール大地震後には、このホームページをポータルサイトとして震災復旧・復興に関わる団体や震災後の社会状況に関するレポートや研究情報のリンクページを作り、情報提供を行った。

一方、英語ページの改善を行い、英語での情報発信にも努めた。

④ インド研究アーカイブ資料の整備

1970年代からインド各地の祭礼や民俗芸能、絵画等に関する写真撮影を行ってきた写真家沖守弘氏の写真資料と写真取材に関連する文書資料を一括して受け入れデジタル保存し、広く研究用に公開するためのデータベースを作成する作業を行った。この作業は2013年度より継続してきたが、今年度中にデジタル化と情報整理を終え、データベースの設計も行って、2016年3月にとりあえず国立民族学博物館の館内用データベースとして公開を行った。今後更に情報内容の点検を行い、2016年度中に一般公開し、さらに英語での検索や情報提供も行えるよう改良を加える計画である。

【拠点の活動と成果】

(1) 拠点全体としての活動

① 現代インド地域研究全体国際シンポジウム

日時：2015年12月19日(土) 9:00~19:50

2015年12月20日(日) 9:30~15:30

場所：国立民族学博物館 2階第5セミナー室

題目：第7回INDAS全体国際シンポジウム “Structural Transformation in Globalizing South Asia: Comprehensive Area Studies for Sustainable, Inclusive, and Peaceful Development”

プログラム：

DAY 1 - December 19 (Sat.)

9:30-10:00 Registration

10:00-10:15 Opening Addresses

Narifumi Tachimoto (President, National Institutes for the Humanities)

Koichi Fujita (Convener, INDAS)

Session 1 10:25- Sustainable Development

Chair: Koichi Fujita (Kyoto University)

10:30-10:50 K. Palanisami (International Water Management Institute, India)

“Climate Change and Rice Yields: Analysis of the Impact and Adaptation Strategies in 13 Major Rice Growing States of India”

10:50-11:10 Daizo Sugimoto (Meijo University)

“Impact of Groundwater Depletion on Punjab Agriculture”

11:10-11:30 Atsushi Fukumi (University of Hyogo)

“Power-Sector Reform in India: Current Status and Issues”

11:30-11:45 Tea Break

11:45-12:05 Takahiro Sato (Kyoto University)

“Livelihood Transformability in Villages with Poor Water Resources in India: The Case of Tamil Nadu”

12:05-12:25 Kazuya Wada (University of Nagasaki)

“Demographic Change and Women’s Status in India”

12:25-13:05 Comments

Ramesh Chand (National Institution for Transforming India, NITI Aayog, Government of India)

Kaoru Sugihara (National Graduate Institute for Policy Studies)

Kohei Wakimura (Osaka City University)

13:05-13:30 General Discussion

13:30-14:30 Lunch

Session 2 14:30- Inclusive Development

Chair: Hidenori Okahashi (Hiroshima University)

14:30-15:00 Kazuo Tomozawa (Hiroshima University)

“Has the Indian Automobile Industry Achieved ‘Inclusive Development’ of Employment?: Focusing on Contract-Based Workers in the State of Haryana”

- 15:00-15:30 R. B. Singh (University of Delhi, India)
 “Sustainable, Inclusive and Peaceful Urban Development through Smart Cities in India: Challenges and Vision”
- 15:30-15:45 Tea Break
- 15:45-16:15 Maya Suzuki (Tokyo University of Foreign Studies)
 “Exclusivity Rather than Inclusion: Dalit Assertion in Contemporary Urban India”
- 16:15-16:45 Janaki Nair (Jawaharlal Nehru University, India)
 “The Real ‘Brain Drain’: Schools and the Experience of Democracy in Contemporary India”
- 16:45-17:00 Tea Break
- 17:00-17:20 Comments
 Etsuro Ishigami (Fukuoka University)
 Toshie Awaya (Tokyo University of Foreign Studies)
- 17:20-18:00 General Discussion
- 18:20-19:50 Reception at the Minpaku Restaurant
- DAY 2 – December 20 (Sun.)
- 9:30-10:00 Registration
- Session 3 10:00- Peaceful Development
 Chair: Minoru Mio (National Museum of Ethnology)
- 10:00-10:30 Akihiko Akamatsu (Kyoto University)
 “Doxography and Perspectivism in Pre-Modern India: How is it possible to be neutral?”
- 10:30-11:00 Anna Bigelow (North Carolina State University, USA)
 “Pious Pluralism: The Culture of Multireligious Shrines in India”
- 11:00-11:15 Tea Break
- 11:15-11:45 Raheel Dhattiwala (University of South Australia, Australia)
 “Next-Door Strangers: Explaining ‘Neighbourliness’ between Hindus and Muslims in a Conflict Setting”
- 11:45-12:15 Takenori Horimoto (The Open University of Japan)
 “India’s Thucydides Trap?”
- 12:15-12:30 Tea Break
- 12:30-12:50 Comments
 Katsuyuki Ida (Kanazawa University)
 Kazuya Nakamizo (Kyoto University)
- 12:50-13:30 General Discussion
- 13:30-14:30 Lunch
- 14:30-15:30 Concluding Discussion
 Chair: Minoru Mio (National Museum of Ethnology)

概要：第2期の現代インド地域研究プロジェクトのキックオフ・シンポジウムを副中心拠点として主催した。第2期プロジェクトの冒頭にあたる本シンポジウムでは、プロジェクト全体のテーマをシンポジウムじたいのテーマとして掲げ、3つのサブテーマ、すなわち南アジアの持続的・包括的・平和的發展の3点を焦点としたパネルを設定した。パネルごとに国内・国外の研究者を招聘して（国外のうちK. Palanisami教授とAnna Bigelow教授はスカイプによる参加）、その現状と今後追究すべき課題について発表と討論を行い、最後の全体討論でプロジェクト全体として考えるべき問題点やプロジェクトの方向性に関して意見交換を行った。両日ともに70名を超える参加者があり、皮切りに相応しい討論が行われた。

この成果は2016年度中に英文論文集として出版する一方、今後サブテーマごとに毎年開催される国際シンポジウムの企画や討論にも生かしてゆく計画である。

② 研究公演「時を超える南インドの踊り」

日時：2015年11月22日 13:30～16:00

場所：国立民族学博物館講堂

出演：ナルタキ・ナタラージ、K. パールッタサーラティ、カクシク・チャンバケーサン、M. ダナムジャヤン、

シャクティ・バスカル

解説：寺田吉孝（国立民族学博物館先端人類科学研究部・教授）

概要：本研究公演は、南インドのヒンドゥー寺院で行われた奉納舞踊を起源とし、1930年代に舞台芸術として生まれ変わった舞踊ジャンルであるバラタナーティヤムに焦点をあてたものである。バラタナーティヤムの誕生には、カラクシェトラとよばれる音楽・舞踊学校が中心的な役割をはたしたことからこの学校で考案されたスタイルが舞踊界の主流となったが、この変化のなかで寺院舞踊の伝統を引き継ぐ舞踊家たちは活躍の場を失っていった。本公演では、現在でも寺院舞踊のスタイルを伝える舞踊家ナルタキ・ナタラージの演技を通じて、インド舞踊文化の多様性を紹介した。

(2) 研究グループの活動

拠点研究会を合計3回開催した。今年度は、国立民族学博物館拠点が独自に出版を計画している、拠点の成果報告論文集の出版をめざして拠点の構成員や拠点の研究分担者・協力者がこのプロジェクトにおいて行った各自の研究成果を発表した。

各回の研究会の発表者と題目は下記の通り。

① 国立民族学博物館拠点第1回合同研究会

日時：2015年7月11日（土）15：00～17：00

2015年7月12日（日）11：00～16：00

場所：国立民族学博物館2階第6セミナー室（11日）、同第5セミナー室（12日）

プログラム：

書評①：小西公大（東京学芸大学教育学部・准教授）

書評②：橋 健一（立命館大学産業社会学部・非常勤講師）

② 国立民族学博物館拠点第2回合同研究会

日時：2015年11月23日（月）10：00～13：00

場所：国立民族学博物館2階・第3セミナー室

プログラム：

報告1：大谷紀美子（相愛学園学園長）“Stylistic differences in Bharatanatyam, a classical dance form of India”

報告2：竹村嘉晃（人間文化研究機構・地域研究推進センター研究員）“Evolution of Bharatanatyam and multiculturalism in Singapore”

③ 国立民族学博物館拠点第3回合同研究会

日時：2016年2月13日（土）14：00～18：20

場所：国立民族学博物館2階第7セミナー室

報告：杉本良男（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点副代表、国立民族学博物館民族文化研究部・教授）

「南インドの農村の三十年」

コメンテーター：八木祐子（宮城学院女子大学・教授）

高桑史子（首都大学東京・名誉教授）

脇村孝平（大阪市立大学・教授）

【海外調査】

拠点の研究メンバーをのべ15回インド、ベトナム、タイ、インドネシア、シンガポール、ネパール、バングラデシュ、アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、オランダ、スウェーデン等に派遣し、海外現地調査や学会等での研究成果発表や意見交換にあたらせた。派遣先やテーマの詳細は下記の通り。

① インドネシアにおけるヒンドゥー教的実践の展開の調査

出張期間：2015年7月18日～2015年7月26日

出張先（インドネシア）：メダン、スラバヤ

出張者：山下博司（東北大学大学院国際文化研究科・教授）

② インドにおける大衆的ヒンドゥー教の動態に関する調査

出張期間：2015年8月18日～2015年8月27日

出張先（インド）：ウダイプル

- 出張者：三尾 稔（国立民族学博物館研究戦略センター・准教授）
- ③ インド音楽・舞踊のグローバリゼーションの調査
出張期間：2015年9月5日～2015年9月15日
出張先（オランダ、フランス）：アムステルダム、パリ
出張者：田森雅一（東京大学大学院総合文化研究科・学術研究員）
- ④ 研究発表及び意見交換
出張期間：2015年10月15日～2015年10月24日
出張先（シンガポール）：シンガポール
出張者：竹村嘉晃（人間文化研究機構地域研究推進センター・研究員）
- ⑤ 国際南アジア研究センター・コンソーシアム構築に向けた機関訪問
出張期間：2015年10月18日～2015年10月25日
出張先（オランダ、スウェーデン）：ライデン、ルンド
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館研究戦略センター・准教授）
- ⑥ 国際南アジア研究センター・コンソーシアム構築に向けた機関訪問
出張期間：2016年1月6日～2016年1月13日
出張先（ベトナム、タイ）：ハノイ、バンコク
出張者：井坂理穂（東京大学教養学部・准教授）
- ⑦ 出身地の異なる在米プロアスター教徒の比較調査
出張期間：2016年1月8日～2016年1月18日
出張先（アメリカ）：ロサンゼルス
出張者：香月法子（中央大学政策文化総合研究所・準研究員）
- ⑧ ヒンドゥー教聖地の歴史の変容に関する文献調査
出張期間：2016年1月14日～2016年1月21日
出張先（イギリス）：ロンドン
出張者：松尾瑞穂（国立民族学博物館先端人類科学研究部・准教授）
- ⑨ ネパールにおけるインド系宗教団体の宗教実践の展開に関する調査
出張期間：2016年1月22日～2016年1月24日
出張先（ネパール）：カトマンドゥ
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館研究戦略センター・准教授）
- ⑩ カナダにおけるバンジャープ系移民の調査
出張期間：2016年1月31日～2016年2月7日
出張先（カナダ）：トロント市郊外ミッシサウガ
出張者：東 聖子（早稲田大学人間科学学術院・助教）
- ⑪ タイにおけるバングラデシュ系移民の調査
出張期間：2016年2月14日～2016年2月29日
出張先（タイ、バングラデシュ）：バンコク、チッタゴン
出張者：高田峰夫（広島修道大学人文学部・教授）
- ⑫ インドにおける日本製タイルの受容のプロセスに関する調査
出張期間：2016年2月15日～2016年2月28日
出張先（インド）：デリー、ムンバイ、グジャラート州ワーンカーネールおよびモールビー
出張者：豊山亜希（人間文化研究機構地域研究推進センター・研究員）
- ⑬ 研究発表及び意見交換
出張期間：2016年2月23日～2016年2月28日
出張先（インド）：デリー
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館研究戦略センター・准教授）
- ⑭ インドにおける宗教と国家の関係の特徴と変遷に関する文献調査
出張期間：2016年3月7日～2016年3月22日
出張先（イギリス）：ロンドン
出張者：田中鉄也（日本学術振興会・特別研究員 PD）

- ⑮ 国際南アジア研究センター・コンソーシアム構築に向けた機関訪問
出張期間：2016年3月9日～2016年3月12日
出張先（韓国）：ソウル
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館研究戦略センター・准教授）

【研究資料の整備】

1970年代からインド各地の祭礼や民俗芸能、絵画等に関する写真撮影を行ってきた写真家沖守弘氏の写真資料と写真取材に関連する文書資料を一括して受け入れデジタル保存し、広く研究用に公開するためのデータベースを作成する作業を行った。この作業は2013年度より継続してきたが、今年度中にデジタル化と情報整理を終え、データベースの設計も行って、2016年3月にとりあえず国立民族学博物館の館内用データベースとして公開を行った。今後更に情報内容の点検を行い、2016年度中に一般公開し、さらに英語での検索や情報提供も行えるよう改良を加える計画である。

日本関連在外資料調査研究

「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」

代表者：佐々木史郎

目的

ロシアは18世紀から20世紀にかけて、領土拡大に伴い組織的に標本資料と情報を収集してきた。それらの資料は、きわめて良質で歴史的な価値を有する民族誌資料として、処分されずに保存されてきた。しかし、一部は展示公開されているものの、全容はまだ明らかではない。当時ロシアの影響下にあった北欧（バルト諸国を含む）各地にも、部分的な概要しか判明していない日本の美術工芸資料や、民族学・生物学関連の標本資料が種々存在している。

日本を含むシベリアから中国までの東アジア全域に関する各種の標本資料、映像記録、民族誌などについて、ロシアをはじめとする各国の関係諸機関と連携をはかり、資料の所在関係を明確化し、重要かつ貴重な資料については、各国の研究機関と連携した共同研究により、保存状況を含めて調査分析を進める。

コレクションを所蔵する関係諸機関と組織的に協定を締結し、国際的な協業により貴重資料を中心に所在関係を明らかにすることが目的である。その結果、世界的に有意義な研究インフラストラクチャーの整備が進む。このことは、日本研究のみならず、東アジア研究全体に対して日本が貢献し、イニシアティブを示すことに他ならない。

成果

- 1) ロシア、サンクトペテルブルクの人類学民族学博物館所蔵の長崎商館員オーベルメール・フィッセル収集資料に関する解説文と論文を英語とロシア語で作成した。
- 2) 人類学民族学博物館所蔵のオーベルメール・フィッセル資料の図録を完成させた。
- 3) フィンランド、エストニア、デンマークの民具類を中心とした日本資料を所蔵する博物館のリストを英訳することで、本館と各博物館との間でのデータの共有を促進し、双方が資料情報により容易にアクセスできるようになった。それにより、その情報には日本側が調査することで付加されたものも含まれており、博物館資料の情報の充実も図られている。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム

「How Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape in Africa.」

2015年9月25日～9月27日 国立民族学博物館

代表者：浜田明範、松尾瑞穂

本シンポジウムの開催によって期待される成果は、以下の2点である。

まず、アフリカ地域において、比較的新しく導入された生物医療が人びとの生活の前提の一部をどのように構成し、彼らの生活をどのように改変しているのかを問うことは、医療人類学の枠を超えて、グローバル化の進む現代におけるアフリカ地域の現状を理解するためのひとつの方法を打ち出すものとなりうる。

次に、グローバルヘルスは、本来的に脱領域的な分野であり、医学や疫学、看護学、生命科学といった理科系の分野に加え、医療人類学者が開発的・応用的な視野をもって参与している領域でもある。そのようなグローバルヘルスについての国際シンポジウムを開催することで、今後、日本において人類学と上記の諸科学との対話と連携を進めていくための一助とすることができる。

実施状況

近年、英語圏を中心にアフリカ地域の人びとの生活に生物医療がどのような影響を与えているのかを問う研究が増加している。特に2000年代後半以降は研究量が著しく増加しており、2008年から2015年までの間に少なくとも6冊の英語の論文集が出版されている。

本シンポジウムでは、この分野を世界的に主導しているオスロ大学のウェンゼル・ガイスラー教授とルース・プリンス准教授を招聘し、また、日本国内で活動する10名のアフリカ研究者と合わせて12本の研究発表を行った。本シンポジウムには、これに、6名の文化人類学者・医療人類学者をコメンテーターや司会として招聘することで、活発な議論を行った。

成果

日本で活動する多くの研究者にアフリカ地域を対象とする医療人類学の最先端の研究に直に触れる機会を提供するとともに、日本の医療人類学者による成果を世界的に発信する足がかりを築くことができた。また、シンポジウムの発表者8名のうち3名が30代であることや、当初予定していなかった大学院生向けのワークショップを25日に実施することによって、特に若手の研究者の育成に資するものとなった。

本シンポジウムの研究成果は、英語による論文集の出版（本館のSES）を予定している。また、本シンポジウムの内容は、日本文化人類学会課題研究懇談会「医療人類学教育の検討」のwebページに掲載する予定である。

公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開——展示・教育から観光・まちづくりまで」
2015年11月28日～11月29日 国立民族学博物館
代表者：廣瀬浩二郎

本シンポジウムの目的は、2012～2014年度に行なった共同研究「触文化に関する人類学的研究」の成果を一般に公開することである。共同研究プロジェクトでは、「ユニバーサル・ミュージアム＝視覚に依存する従来の博物館、さらには現代社会のあり方を問い直す壮大な実験装置」と定義している。そのようなユニバーサル・ミュージアムを具体化するために、「触文化」に注目してきた。

シンポジウム1日目は、各地の美術館・博物館で試みられている展示、教育プログラムの事例を報告する。これまで、触察による鑑賞は主に三次元の立体物を対象としてきたが、本シンポジウムでは視覚障害者が二次元の絵画作品を触学・触楽するさまざまな手法を提示し、ユニバーサル・ミュージアム論の深化を検証したい。

2日目は、博物館の枠にこだわらず、自由な発想で企画される触発型ワークショップの諸相、および五感を駆使して「誰もが楽しめる」観光・まちづくりをめざす先進的な取り組みを紹介する。ユニバーサル・ミュージアム研究により鍛えられた触文化概念を他分野に応用し、その普遍性を明らかにするのが2日目の課題である。

触文化理論の各方面への伸展は、「感覚の多様性」が尊重されるミュージアムの未来像、障害／健常という二分法を乗り越える新たな人間観の提案につながるだろう。

実施状況

本シンポジウムでは手話通訳を導入した。取り上げるテーマの学術的・社会的意義を踏まえ、質の高い手話通訳士の派遣に向けて、業者と交渉を重ねた。専門的な手話通訳を確保するためには、英語通訳などの場合と同様に、相応の費用を必要とした。なお、本シンポジウムには発表者・一般参加者として、複数の視覚障害者・聴覚障害者が来場した。

成果

本シンポジウムは、共同研究「触文化に関する人類学的研究」の成果を公開する事を目的として実施した。2日間に渡って研究者、学芸員、アーティストなどが集い、「深める」と「伸ばす」をキーワードとして、ユニバーサル・ミュージアム（誰もが楽しめる博物館）の可能性について、多角的に考えた。1日目は、各地の美術館・博物

館で試みられている展示、教育プログラムの事例を報告した。単なる視覚障害者支援にとどまらず、ミュージアムそのもの、ひいては社会を改変していく触文化の実践的研究を推進するのが、1日目の発表者を貫く基本スタンスといえる。これまで、触察による鑑賞は主に三次元の立体物を対象としてきたが、本シンポジウムでは視覚障害者が二次元の絵画作品を触学・触楽するさまざまな手法を提示し、ユニバーサル・ミュージアム論の深化を確認・検証した。2日目は、博物館の枠にこだわらず、自由な発想で企画される触発型ワークショップの諸相、および五感を駆使して「誰もが楽しめる」観光・まちづくりをめざす先進的な取り組みを紹介した。触文化・“手学問”概念を他分野に応用して、その普遍性を明らかにするのが2日目の狙いだった。本シンポジウムを通じて、触文化・“手学問”理論の各方面への伸展は、「感覚の多様性」が尊重されるミュージアムの未来像、障害／健常という二分法を乗り越える新たな人間観の提案につながることを確信した。その手応えを参加者が共有できたのは有意義だった。

●国際研究集会への派遣

「国際学会での研究発表：2nd Kashmir International Conference on Linguistics」

2015年5月1日～5月7日 Azad Jammu and Kashmir 大学（パキスタン）

吉岡 乾

2015年5月4日～5日にパキスタンの Azad Jammu and Kashmir 大学（Azad Jammu and Kashmir 州 Muzaffarabad）で開催される2nd Kashmir International Conference on Linguistics で研究発表をする。

今回で2回目のこの大会は、パキスタンで開催される数少ない言語学関係の学会であり、南アジアの、特にパキスタンの、言語を研究している者にとっては、人脈を広げる絶好の機会でもある。申請者の発表テーマは“On the Copulae of Languages in Northern Pakistan”。本発表は、申請者がこれまでに現地調査を行って来た8言語（カティ語、カラーシャ語、コワール語、シナー語、ドマーキ語、ブルシャスキー語フンザ方言、ナゲル方言、ヤスイン方言）を対照し、それぞれの言語でのコピュラ（be 動詞）の体系の特徴を調べ、地域特徴や系統特徴を明らかにすることを目的としている。

実施状況

パキスタンの Azad Jammu and Kashmir 大学（Azad Jammu and Kashmir 州 Muzaffarabad 市）で開催された The 2nd Kashmir International Conference on Linguistics で研究発表をした。発表テーマは“北パキスタン諸言語のコピュラについて（On the Copulae of Languages in Northern Pakistan）”。申請者がこれまでに現地調査を行って来た8言語（カティ語、カラーシャ語、コワール語、シナー語、ドマーキ語、ブルシャスキー語フンザ方言、ナゲル方言、ヤスイン方言）を対照し、それぞれの言語でのコピュラ（be 動詞）の体系の特徴を調べ、地域的な特徴や系統特徴を明らかにすることを目的とした発表である。

発表では結論として、次の2点を示唆した。i) カラーシャ語・コワール語に地域特徴として、日本語の「いる」／「ある」のような、有生性に関するコピュラ語幹の使い分けがある。ii) コワール語・シナー語・ドマーキ語に見られる否定形における文法範疇の中和は、基層言語、或いは傍層言語としてのブルシャスキー語からの影響によるものであろうと考えられる。

海外からの参加者が、査証の発行事情もあって多くはなかった大会であったが、申請者の発表に関しては、ほとんどの海外参加者が聴きにきていた。質疑応答では特に、カラコルムとヒンドークシとを結んだ地域の言語の共通特徴を研究しているスウェーデンの Henrik Liljgren 氏や、インド側カシミール人でカシミール語研究の大家である Omkar N. Koul 氏から貴重なコメントも得られた。氏らや、ウルドゥー語研究の大家である Tariq Rahman 氏といった研究者との親睦を深められたことも、大会への参加が非常に有意義であった点の1つである。

成果

成果は論文（日本語）の形にして公開する。

論文はPDF形式で出版される予定の記述言語学研究会（京都大学）の論集へと投稿し、採用が決定した。

国際民族学・民俗学会 (SIEF) 2015年研究大会

「Utopias, Realities, Heritages: Ethnographies for the 21st century」での論文発表

2015年6月20日～6月26日 ザグレブ大学 (クロアチア)

太田心平

SIEFは、欧州地域を中心とする民族学および民俗学の統合的で国際的な学会組織である。2年に1度開催されるその研究大会には、世界各国からこの分野の研究者が多数参加する。申請者が公刊しようとしている論文をその場で発表することで、この論文の質を高める有益なコメントがえられることと期待できる。

また、今回の研究大会は自身の研究全般に深く関わるテーマでおこなわれるため、申請者が参加すれば、今後の研究に役立つ多くの学術的知見と人的ネットワークをえることが出来ることも期待できる。

そして、発表の成果を公刊するための打ち合わせをおこなうことで、申請者の論文をよりスムーズに公刊するメディアが確保できるものと期待できる。

実施状況

ザグレブ大学で開催された国際民族学・民俗学会 (SIEF) の2015年研究大会「Utopias, Realities, Heritages: Ethnographies for the 21st century」に参加し、特にパネルセッション「Imagineries of migration: expectations and places」(Mig002)で、論文「The Utopist Genealogy of South Korean Immigrants in New York in 21st Century」を発表した。

この発表は、自身が2010年以降におこなってきた研究の成果報告であり、公刊しようとしている論文をその内容とする。研究大会では、発表に対して多くのコメントが寄せられた。これをもとに論文をリライトし、その結果をもって、同じパネルの参加者とともに、発表の成果を公刊するための打ち合わせをおこなうことが出来た。

また、このパネルの総合討論においても、申請者の発表がパネル全体を整理し、各論文を結びつける鍵としてあつかわれたため、パネル全体に対しても寄与できた。

成果

外部の英文国際学術誌に論文として投稿する予定である。

「東南アジア考古学ヨーロッパ学会第15回国際会議

「東南アジアにおける動植物の初期の歴史への学際的アプローチ」での研究発表

2015年7月4日～7月13日 Université Paris Ouest Nanterre la Défense (フランス)

ピーター・マシウス

東南アジア考古学ヨーロッパ学会 (EASAA) への提案において、パネルの主催者は、①東南アジアにおける動植物の初期の歴史に関するデータ集積及び②新しい地域統合を開発する必要性を強調した(データには家畜化・栽培化の中心地、拡散、農業システム、土地利用などが含まれる)。このパネルのため、サトイモに関する論文の寄稿を依頼されたことから、ベトナム北部で行った野外共同調査と標本の収集について『ベトナム北部における *Colocasia esculenta* (サトイモ) とその野生近縁種の同所性 (Sympatry of *Colocasia* (taro) and its wild relatives in northern Vietnam)』と題する論文を発表する。論文はすでにアクセプト済みである。この調査結果報告は、地域における考古学的調査とも密接に関係し、東南アジア本土におけるサトイモの栽培種の起源と拡散を理解するうえで重要な役割を果たすことが期待できる。第15回国際会議は、7月6日～7月10日に行われるため、7月5日に会場下見及び同じパネルの発表者と打合せを行う。なお、7月11日は関係研究者と研究打合せを行うため、研修とする。

実施状況

7月6日から10日、Université Paris Ouest, Nanterre la Defense (パリ) で開催された東南アジア考古学ヨーロッパ学会第15回国際会議に参加し、9日に『ベトナム北部における *Colocasia esculenta* (サトイモ) とその野生近縁種の同所性 (Sympatry of *Colocasia* (taro) and its wild relatives in northern Vietnam)』と題する論文を発表した。この論文は、かつて指導教員であった Ibrar Ahmad 博士 (Quaid-i-Azam University, パキスタン) と東南アジアの共同研究者との共著である。会議開催中には、インド、フランス、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスなどから参加していた多くの研究者と会い、東南アジアの先史時代に関するさまざまな地域での最先端の研究を知ることができた。とくに、インドの考古学のセッションで知り合った Nagaland University の研究スタッ

フとは、将来的な共同野外調査の可能性について話し合うことができた。

成果

今回発表した論文は、学術誌（Springerにより出版されている『The Journal Genetic Resources and Crop Evolution』など）で近く出版する予定である。

「国際研究集会 the 7th International Conference of the European Research Network On Philanthropy への派遣」——
2015年7月8日～7月12日 ESSEC Business School, Cergy Campus（フランス）
出口正之

The 7th International Conference of the European Research Network On Philanthropy (ERNOP) での研究発表論文 “Policy change making the biggest Corporate Philanthropy in Japan” がアクセプトされ、発表する。ERNOP は President: Theo Schuyt- VU University Amsterdam（オランダ）、Georg von Schnurbein- University of Basel（バーゼル大学）、Martha Rey Garcia- University of A Coruna（スペイン）など欧州の一流大学が理事を務める、フィランソロピー研究の開放・会費型研究連合である。日本からは申請者1人が論文発表をアクセプトされている。下記の論文発表による学術的貢献のほか、本館が今後「フォーラム型情報ミュージアムの構築」等を展開していくにあたって、国際的な開放・会費型研究連合に本館研究者が学術的に参加・発表していくことは大きな意義がある。

実施状況

European Research Network On Philanthropy (ERNOP) はヨーロッパの大学のフィランソロピー研究所のネットワーク組織で、学会と同様の大会を今回行った。120名程度の小規模の研究集会であったが、申請者は、政策人類学的観点から、今般の公益法人制度改革及び税制改革によって、日本の一企業の税引き前利益の40%相当額142億円が東日本大震災後の復興のための寄附として使用されたこと。また、この142億円の寄附が、全て税制上、非課税とされたことを報告。この間の、公益認定等委員会委員長、Yホールディングス社長、Y福祉財団理事長の役割を明らかにした。聴衆からは、①大陸法の伝統をひく日本に慣習法の英国制度が入り込んだことへの反応、②欧米では決して見られない事例に対する驚き、③shareholder philanthropy 研究からの研究上の意義の指摘等があった。従来日本のフィランソロピー研究が米国を中心に見ていた反省から、今回の発表に至ったが、公益認定制度という欧州（イギリス）発の制度を日本に導入したことによる研究上の領域が広がっていることが明らかになった。

成果

「政策」そのものが「フィールド」であるという、Cris Shore と Susan Write の「政策人類学」の方法論を採用し、2011年に公益財団法人ヤマト福祉財団がとった東日本大震災後の被災地支援プログラムを公益法人制度改革との関連から論じる論文を発表予定。同財団は制度改革前であれば、厚生労働省所管の福祉財団であったことから、漁港の再興支援などは行うことができなかった。ところが、新制度後の政府の呼びかけに呼応し、宅急便1個につき10円の寄附をヤマトホールディングスが決定、寄附を受けた同財団が新プログラムを作り上げ実行した。その際の政府や株主などステークホルダーの動きに着目した論文を発表予定。このことは「現代文明に焦点を当てる」という本館第三期中期目標に盛られた方針に沿うばかりではなく、政策人類学の新たな地平を拓くことになる。

「Screening of two Minpaku-produced films and research presentation
at the 43rd World Conference of the Interracial Council for Traditional Music (ICTM)」——
2015年7月13日～7月24日 カザフ国立芸術大学（カザフスタン）
寺田吉孝

2015年7月にカザフスタン共和国の首都アスタナ市で開催される国際伝統音楽評議会の第43回国際大会に参加し、民博製作映画の上映と研究発表を行う。同評議会は世界最大規模の音楽・芸能学会であり、隔年で世界大会を開催している。今大会では約400件の研究発表が予定されており、申請者は民博で制作した映像番組2本（Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalingas Wedding in the Northern Philippines および Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines）の上映と、その制作・利用に関する発表を行う。また、申請者は、同学会の理事を務めており、大会前後に開かれる理事会に合わせて出席する。さらに、2014年より、民族音

楽学における映像音響メディアの活用に関する研究グループを同学会内に設立する機運が高まっており、申請者を含む5名の研究者が共同で設立の提案を行った。この研究グループの設立は同学会の理事会によりすでに承認されており、本大会の期間中に第1回会合が予定されている。申請者はこの会合にも発起人の一人として参加し、映像音響資料の活用に関心のある多数の研究者と意見交換、交流を深める予定である。

実施状況

2015年7月16～22日にカザフスタン共和国の首都アスタナ市で開催された国際伝統音楽評議会の第43回世界会議に参加し、民博制作映画の上映と討論を行った。同評議会は世界最大規模の音楽芸能学会であり、隔年で世界会議を開催している。今大会の参加者は約600名で、約400件の研究発表が行われた。報告者は、民博で制作したフィリピン音楽に関する映像番組2本(Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines および Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines) を上映し、番組における文字情報(ナレーション、字幕)の位置づけ・役割に関して問題提起を行った。その後の討論では、現地とのラポール、現地上映会での反応などについて活発な質疑応答があった。また、民族音楽学における映像音響メディアの活用を議論する研究グループ(Study Group on Audiovisual Ethnomusicology)を同学会内に設立することが正式に承認されたことを受け、世界会議の開催期間中に第一回の総会が開催された。報告者も発起人の一人として参加し、グループの運営や研究方針、シンポジウム開催の日程などについての議論に参加した。会期中、映像音響資料の活用に関心のある多数の研究者と意見交換、交流を深めることができたのは大きな収穫だった。また、報告者は同学会の理事を務めており、大会前後に3日間開かれた理事会(7月14-15日と23日)にも合わせて出席した。

成果

今回の上映会・発表は、2014年度にフィリピンで開いた上映会(計6回)における質疑応答に基づいている。これに今回の発表時の議論を加味したエッセイを学会誌 Yearbook for Traditional Music に投稿する予定である。今回の発表の目的の一つは、解説ブックレットの形態、内容に関して具体的な映像番組に沿って議論することである。これまでの上映会におけるフィードバックを参考にしながらブックレットの目的・効果についてさらに検討を加え、2016年度に試作を行いたい。

「第11回国際狩猟採集社会会議での研究報告」

2015年9月5日～9月13日 ウィーン大学(オーストリア)

池谷和信

国際狩猟採集社会会議(CHAGS)は、世界の狩猟採集民研究者が一堂に集まる会議である。そこでは世界最先端の研究が報告されると同時に、最新の調査内容などの情報交換が行なわれる。このため、申請者がこの会議で研究報告することによって、世界のなかでの自分の研究の位置を確認することができる。

今回の第11回目の会議では、申請者は「現在のカラハリ狩猟採集民の研究と活動」というセッションでの報告を予定している。このセッションは、この分野の世界的な第一人者リチャード・リー教授ほかによって組織されており、欧米、アフリカ、日本などの研究者による報告が予定されている。申請者は、狩猟採集民と定住化という基本テーマをめぐって調査事例のみならず理論的枠組みを提示する予定である。

以上のように、世界の研究のなかで自らの研究を深めること、世界のなかで日本からの国際競争力の高さを示すことに意義があると考えている。

実施状況

この会議は、9月7日～11日の5日間にわたって研究発表が行われるが、過去と現在の世界の狩猟採集民を対象にして文化人類学のみならず考古学や言語学などの研究も予定されている。とりわけアフリカに焦点を当てると、遺伝学や考古学の研究によって新たな研究の展開が予測される。申請者は、この会議への参加によって、狩猟採集民に関する世界の研究がどの方向に進んでいるのか、どのような研究が行われていないのかなどを知ることによって、今後の研究の戦略を立てることができる。

またこの会議では、この分野に関して世界のセンターの一つであると思われる民博において、近年に刊行されたSES(Senri Ethnological Studies)を宣伝する絶好の機会にもなるであろう。民博は、すでに1998年に第8回の会議を開催しており、10冊近いSESの論集によって、この分野の研究者にとってはよく知られている。最近の民博ではどのような研究を国際的に発信しているのか、ニューズレターや英文HPなどによっても民博の国際的な研究広報

としての成果を期待することができる。

成果

今回の第11回目の会議では、「現在のカラハリ狩猟採集民の研究と活動」というセッションでの報告を行った。このセッションは、この分野の世界的な第一人者リチャード・リー教授ほかによって組織されており、欧米、アフリカ、日本などの研究者による報告がなされた。過去20年間におけるある村の社会変容を報告したが、その村が先住民運動の研究者に近年注目されている点、村の事例は従来のカラハリモデルに当てはまらないことなどから、新たな理論的枠組みを提示できるものと確信することができた。

以上のように、世界の研究のなかで自らの研究を深めること、世界のなかで日本からの国際競争力の高さを示すことができたと考えている。

「第8回ヨーロッパ・イラン学会 (Societas Iranologica Europaea) 大会での研究発表」

2015年9月13日～9月21日 サンクト・ペテルスブルグ (ロシア)

山中由里子

ヨーロッパ・イラン学会大会は4年ごとに開催されるイラン学の国際的な学術会議で、ヨーロッパのみならず、イラン、北米、日本からも最先端の研究を発表するために歴史・文学・人類学・美術など様々な分野の研究者が一堂に会す重要な会議である。8回目となる今回は、サンクト・ペテルスブルグ (ロシア) にて9月15日から9月19日まで開催される。14日については、会場下見及び発表打合せを行う。

ムハンマド・トゥースイーの『被造物の驚異』という12世紀のペルシア語百科全書に含まれる、アレクサンドロスに関する驚異譚について (“Alexander and the Wonders of the World in Ṭūsī’s ‘Ajā’ib al-makhlūqāt”) 発表する。世界中から集まった専門家と学術交流を行い、現在行っている驚異譚の研究との連携の可能性を探る。

実施状況

ヨーロッパ・イラン学会大会は4年ごとに開催されるイラン学の国際的な学術会議で、ヨーロッパのみならず、イラン、北米、日本からも最先端の研究を発表するために歴史・文学・人類学・美術など様々な分野の研究者が一堂に会す重要な会議である。初日の文学のセッションにおいて、ムハンマド・トゥースイーの『被造物の驚異』という12世紀のペルシア語百科全書に含まれる、アレクサンドロスに関する驚異譚について (“Alexander and the Wonders of the World in Ṭūsī’s ‘Ajā’ib al-makhlūqāt”) 発表した。発表後も、活発に質問があり、評価が得られたという手ごたえがあった。

エルミタージュ美術館では、イブン・バトゥータという14世紀のアラブの大旅行家の展覧会が開催されており、ロシア科学アカデミーの東洋写本研究所や国立図書館においても、ペルシア写本の展示が学会に合わせて開催されていた。これらの展示と、さらにクンストカメラ (ピョートル大帝人類学・民族学博物館) などへの研修エクスカージョンも企画されており、今後の研究にとって重要なコレクションを訪れる貴重な機会でもあった。

成果

今回の発表内容は、国際ジャーナルへの英文論文として寄稿する予定である。

これまで行ってきた驚異譚に関する研究の成果を、同じ専門性を共有する海外の研究者たちに公開することによって、共同の出版プロジェクトや、招へい事業に今後発展することが期待される。ロシアの研究者との連携は、これまでほとんど行ってこなかったもので、ネットワークをさらに広げることができる。

館長リーダーシップ経費による事業・調査

「イメージの力」展の巡回展用図録作成

2014年、民博創設40周年特別展として国立新美術館と民博で開催した「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」の巡回展が、郡山市立美術館 (福島県) で2015年6月27日～8月23日まで開催されたが、それに際し同美術館から、展示図録の買取分50冊、委託販売分450冊の計500部の作成の希望が出された。「イメージの力」展の図録は国立新美術館と民博での買い取り分・販売分として計850部を作成したが、既に保存用の部数を除いて残部はなく、今後の展示での配布・販売に当てることは不可能な状態であった。同展については、今後、さらに、2016年度以降、香川県立ミュージアムほかへの巡回も想定されていた。また、同図録は日英併記で、民博のコ

レクションのカタログとしての性格も有しており、とくに海外からの来訪者や海外の研究者からの配布の希望も強い。このため、今後の巡回展での買上・配布用ならびに本館における配布用として、同展図録2000部の追加作成を行った。

これによって、同展のメッセージと民博のコレクションの意義が各開催地においてさらに深く認識される機会を得た。また、民博のコレクションの概要とその特徴を今後も継続的に海外に発信していくことが可能となった。

みんなく映画会「インド映画特集」

本企画は、南アジア展示場の新構築に関連させて現代インドの文化や社会の多元性や多様性、またその変化のありさまを表現する映画4本を連続上映するものであった。4本の映画はインド文化の多様性を表すようにそれぞれ異なった言語で製作されており、このこと自体もインド文化の複雑さを反映している。多数の参加者に対し、映画の前後のレクチャーや上映時の解説シートなどを通じて専門的研究者が背景解説を行い、インドに関する理解を深めて貰うことができた。またこの機会に南アジアの新展示にも多数の観覧者が訪れ、新構築の広報としても大いに成果があがった。参加者数:入場者数合計1,493名、ミニレクチャー458名

なお、各回の詳細は以下の通り。

「ファンダリー」: 7月20日(月・祝)	入場者数 443名、ミニレクチャー 143名
「カーンチワラム サリーを織る人」: 7月25日(土)	入場者数 327名、ミニレクチャー 59名
「Mr. & Mrs. アイヤル」 8月2日(日)	入場者数 275名、ミニレクチャー 75名
「DDLJ 勇者は花嫁を奪う」: 8月8日(土)	入場者数 448名、ミニレクチャー 181名

各回とも 13:30開映。 8月8日のみ 13:00開映。

研究公演「ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤー」

関連ワークショップ「ネワール仏教舞踊チャルヤーへのいざない」

ネパールのカトマンズ盆地に暮らしてきたネワール人。その仏教僧侶カーストであるヴァジュラチャルヤは、修行のひとつとしてチャルヤーという舞踊を伝えてきた。動くヨーガともいわれるチャルヤーは、自己と宇宙(コスモス)を体感し、仏や神々に近づく手段であるが、見る者にはまるで動く仏像のように映る優美な舞である。

2015年4月18日(土)及び19日(日)、第5セミナー室において、新南アジア展示公開記念イベント「躍動する南アジア——春から秋のみんなくフォーラム2015」の一環として、研究公演「ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤー」(19日)及び関連ワークショップ「ネワール仏教舞踊チャルヤーへのいざない」(18日)を開催した。

ワークショップには40名が参加し、舞踊の神パドマナティイスワールへの儀礼後、出演者のプラジョワール・ラトナ・ヴァジュラチャルヤ氏によるチャルヤーの模範公演(演目アヴァロキテ・ロケスワール〈観世音菩薩〉)が披露された。その後岡本有子氏が加わり、参加者と一緒にチャルヤーの動き、ムドラ(手印)を学ぶワークショップがおこなわれた。

19日の研究公演は、吉田憲司副館長の挨拶ではじまり、プラジョワール氏による開始儀礼とチャルヤーの導入公演(演目 ヴァジュラ・サトワ〈金剛薩埵〉)の後、南真木人、立川武蔵本館名誉教授、岡本有子氏による講演がおこなわれた。休憩をはさみ、プラジョワール氏と岡本有子氏によるチャルヤーの公演を約一時間じっくりと鑑賞してもらった。公演は6演目から構成された。最後に行の終了を告げるジャフン・バホの儀礼をして終了した。参加者は120名で、ネワール研究の第一人者である石井溥先生(東京外大名誉教授)など研究者が東京や熊本から駆けつけてくれるなど、チャルヤーを鑑賞する機会の希少性が再認識させられた。

立川先生による解説、演目を詳述した配布資料、会場後ろに展示したプラジョワール氏の兄ガウタマ氏が描いたマンダラや神仏の絵画(標本資料)により、みんなくがネワール仏教研究のセンターとして資料を収集してきたこと、その一環として本研究公演があることを印象づけられた。また、南アジア新展示場のこけら落し的な意義と新展示の広報の目的も達成できた。寄せられた感想は概ね好評で、ネワール仏教研究の発展とその日本における紹介に寄与するという所期の目的を果たせた。

企画展「岩に刻まれた古代美術:アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」開幕式典の開催

企画展『岩に刻まれた古代美術:アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン』の開会式典を実施した。日時は2015年5月21日(木)13:30で、場所は1階エントランスホールと企画展示場入り口であった。内容は、館長あいさつ、来賓あいさつ(在大阪ロシア連邦総領事、シカチ・アリヤン村村長、シカチ・アリヤン村学校教員)、実行委員長による趣旨説明に続き、シカチ・アリヤン村から招待した学校の生徒たちによる伝統歌謡と伝統舞踊のパフォーマンスを披露し、最後に企画展示会場入り口でテブカットを行うというもので、一般来館者の観覧も可能とし

たことにより、企画展の広報に寄与し、村の現状と文化活動の実態を直接来館者にアピールできた。それはまた、本館の展示方針である「フォーラムとしての展示」と「同じ時代を生きる人々の展示」の実現に大きく貢献することにもなる。

モンゴル秋祭り「モンゴル・ナマリン・バイル」

モンゴル国はこれまで東京でモンゴル春祭りを実施し、2013年より、在大阪総領事が元モンゴル国文部副大臣であったことから、総領事の肝いりで、大阪でもモンゴル秋祭りを開催することとなり、会場として現代モンゴルの研究中心である本館に白羽の矢が立てられた。本館において実行委員会を組織したうえで、関西在住のモンゴル国および中国内モンゴルなどの留学生が集めるとともに、民間活動としてモンゴルとの交流を行っている諸NPO団体も積極的に企画参加し、一般来場者に広くよびかけておこなわれた。一昨年度の成果と反省をふまえて、2014年度も本館で実施することになっていたが、あいにくの台風のため中止を余儀なくされた。ただし、ビデオ撮影は実施し、現在、館内で視聴できるプログラムとして提供されている（邦訳入り）。またこのとき寄贈された資料は、中央アジア・北アジア展示新構築に用いられる。2015年度は改めて在大阪領事館より実施したい旨の申し出があり、10月31日に以下のとおり予定し実施した。

1) 講堂にて、開会式、現代モンゴルを代表する公演、2) エントランスにて、本館所蔵のゲルを立てて象徴展示とする、3) 講堂地下にて、NPO 諸団体の告知活動。

メイン会場である講堂では、公演と解説から成る所定のプログラムをおこなった。超満員の来観者をえて、モンゴルの文化についてより深く知ることが出来たというコメントをはじめ、想定していた以上の好評をえることが出来た。

エントランスホールでは、モンゴルと関わりのある日本の各種団体が、来館者へ活動報告するとともに、たがいに交流する場を設けた。こちらも、各ブースに列が出来るとの反響があった。また、講堂地下ではモンゴル伝統衣装の試着体験など、体験・交流型のイベントを開催した。家族連れで異文化体験が出来ると、来場者が楽しんでいた。

計画どおりに遂行できなかったのは、エントランスホールにおけるゲルの象徴展示である。これは、組み立てを担当することになっていた在日本国モンゴル大使館の事情により中止されたものであるが、その代わりにエントランスホールをより多くのモンゴル関係団体に使用してもらった。結果的には象徴展示によって期待されていた以上の評判をえることが出来たものと思われる。

新東南アジア展示フォーラムの開催

本企画は、「ゆったり東南アジア」と銘打った東南アジア展示新構築に関連するフォーラム事業のうち、①研究公演「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トペンと音楽」および関連ワークショップ「仮面を生かす踊り」、②講演・ワークショップシリーズ「東南アジアの仮面と人形」、③映画会シリーズ「映画で知る東南アジア」を実施するために企画されたものである。①では、バリ舞踊家を招聘し、演者が仮面に生命を与える様子や日本人舞踊家を交えた実際の舞踊の公演および研究者による解説を行なった。②では、それぞれの地域の芸能に詳しい専門家・研究者を招き、講演およびワークショップを実施した。③では、現代東南アジア社会を鮮やかに映し出す注目作を上映し、研究者による解説を加えた。これら芸能や映画に関連したイベントを通じて、芸能や映画作品に関する理解を深める機会を提供するとともに、東南アジアの文化や社会についての幅広い情報提供を行なうことができた。参加者の合計は1,270名であり、新構築の広報にも貢献した。

研究公演「時空を超える南インドの踊り——至宝ナルタキ・ナタラージ」の開催

南インドのヒンドゥー寺院で行われた奉納舞踊を起源とするバラタナーティヤムは、インドを代表する古典舞踊ジャンルの一つとして、インド国内はもとより、世界各地の南アジア系移民コミュニティでも盛んに実践されている。本公演では、現在最も注目を集めている舞踊家の一人であるナルタキ・ナタラージと伴奏を行う楽団を招聘し、11月22日に研究公演（講堂）、同23日にワークショップ（第5セミナー室）を行った。バラタナーティヤムは、数種類の楽曲ジャンル（ジャティスワラム、ヴァルナム、ティッラーナなど）を伴奏にして踊られ、公演ではそれらを一定の順序で演奏していく方式がとられる。本公演もこの方式に従って進行した。ナタラージはタミル語楽曲の舞踊を得意としており、これらの演目を中心にしてプログラムが構成された。

今回の公演の参加者は計434名で、会場はほぼ満席となり大盛況であった。館長挨拶、南インド舞踊の概要解説と前奏の器楽曲の後、舞踊曲6演目が披露された。日本では稀にしか見ることの出来ない、高レベルの演奏が繰り広げられ、特に中心曲となった「ヴァルナム」は、上演に40分を要する大曲であり、観客に強い印象をのこした。MC

と配布プログラムによる演目紹介が、観客の鑑賞の一助となったことは公演後のアンケート結果にも表れており、インド舞踊の歴史や多様性を紹介するという当初の目的を達成できた。また、本公演は南アジア展示新構築の関連イベントとして企画され、新構築の広報にも貢献した。

みんなく映画会「波伝谷に生きる人びと」

民博では、東日本大震災以降、被災地の有形・無形の民俗文化財への支援を継続している。これまで3年間にわたって無形の民俗文化財である芸能団体を招へいし、研究公演を実施してきた。現在、被災地では復興に向け日常生活に戻る動きもあり、芸能団体も被災地の日常生活のなかで活動が落ち着きつつある。一方で、日常が意識されるほど、震災に対する記憶の風化が懸念されるとともに、震災以前の地域文化の記憶をどのように伝えるのかという課題が浮かび上がってきた。

そこで、今年度の震災支援プロジェクトの中で実施する企画として映画会を開催した。具体的には民博研究者も文化財レスキューをおこなった宮城県南三陸町の波伝谷において、震災以前から波伝谷の生活文化を取り続けてきた我妻和樹監督作品の「波伝谷に生きる人びと」を上映した。また、本企画に合わせて、映画出演者との座談会をおこない、映画会当日のパネルディスカッションの材料とする研究会を開催した。

「東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究」

本研究は、連携研究「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究-大学共同利用機関の視点から」を引き継ぐものであり、「被災地における無形の文化遺産の保護活動」と「災害の記録・記憶の継承」を目的として開発中の「記憶をつなぐDB」の機能強化を図った。「被災地における無形の文化遺産の保護活動」では、これまで継続調査をおこなってきた岩手県三陸沿岸部の芸能の実態調査を引き続きおこなった。また、「記憶をつなぐDB」の機能強化では、三陸沿岸の津波碑をはじめとするモニュメントの情報収集をおこなうとともに、DBに掲載している情報のクリーニングと修正、情報収集の結果をアップロードするとともにWEB公開のためのシステム環境を整えた。あわせて、来年度以降展開する予定の人間文化研究機構基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる準備調査」のなかで、東北大学災害科学国際研究所や国立歴史民俗博物館との連携に関する意見交換会をおこなった。

(その他館の運営などに関するもの3件)

民博研究懇談会

第265回 2015年5月20日

チュ・スワン・ザオ 「ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成——東北地方のヌン・アン集団の事例から」

第266回 2015年6月17日

寺村裕史 「考古学・文化財科学における“情報”とは何か」

第267回 2015年7月8日

ギジェルモ・ウィルデ 「接触領域の時空間——植民地期の知覚体制への比較的アプローチ」

第268回 2015年10月28日

ママドゥ・シセ 「意味を刻む——西アフリカのアジャミ書法」

第269回 2015年11月18日

卯田宗平 「鵜飼——人間と動物の関係論再考」

第270回 2015年12月9日

サムアン・サム 「クメールの影絵芝居と伝統芸能の将来」

第271回 2016年1月20日

伊藤敦規 「民族学博物館資料の高度情報化とオンライン協働環境整備に向けた取り組み——フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの中間報告として」

2-2 外部資金による研究

科学研究費助成事業による研究プロジェクト

2015年度科学研究費助成事業 採択課題一覧

区分	種目	研究課題	研究代表者	研究年度
新	基盤研究 (A) 一般	ネットワーク型博物館学の創成	須藤健一	2015 ～2019
	基盤研究 (A) 一般	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	吉田憲司	2015 ～2019
	基盤研究 (A) 一般	アンデスにおける植民地的近代 ——副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤 晃	2015 ～2019
	基盤研究 (A) 海外	中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究	塚田誠之	2015 ～2017
	基盤研究 (A) 海外	グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究 ——伝統継承と反捕鯨運動の相克	岸上伸啓	2015 ～2018
	基盤研究 (B) 一般	セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用	園田直子	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究	日高真吾	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	映像人類学とアーカイブズ実践 ——活用と保存の新展開	大森康宏	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 海外	ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究	森 明子	2015 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考	菅瀬晶子	2015 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究	笹原亮二	2015 ～2019
	規	若手研究 (A)	北パキスタン諸言語の記述言語学的研究	吉岡 乾
若手研究 (A)		西アフリカにおける感染症対策と生権力の複数性に関する人類学的研究	浜田明範	2015 ～2018
若手研究 (B)		笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較	金田純平	2015 ～2017
若手研究 (B)		パナマ東部先住民エンベラにおける「共同体企業」の実践に関する人類学的研究	近藤 宏	2015 ～2017
若手研究 (B)		世界文化遺産バンチェン遺跡と地域社会： 住民の生活史の視点から	中村真里絵	2015 ～2017
若手研究 (B)		アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究	戸田美佳子	2015 ～2017
挑戦的萌芽研究		法・会計・文化融合型の公共政策国際比較研究 チャリティ制度を事例に	出口正之	2015 ～2016
挑戦的萌芽研究		コミュニティ通訳者を対象とした学術手話通訳者養成プログラムの開発	中野聡子	2015 ～2016
研究活動スタート 支援		モノを通してみる現代バレーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究	八木百合子	2015 ～2016
研究成果公開促進費 学術図書		バリ島仮面舞踏劇の人類学	吉田ゆか子	2015
特別研究員奨励費	近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義 ——商業集団マールワリーを事例として	田中铁也	2015	
特別研究員奨励費	花街の担い手コミュニティの日常の実践に関する歴史人類学的研究	松田有紀子	2015 ～2017	
特別研究員奨励費	バリ島の「障害」のある役者たちの演劇実践 ——遊戯性・あいだ性・日常との連続性	吉田ゆか子	2015 ～2017	

新規	特別研究員奨励費	シヨナ音楽文化と憑依儀礼の政治・宗教人類学的研究	松平勇二	2015 ～2017	
	新学術領域研究 (研究領域提案型)	植民地時代から現代の中南米の先住民文化	鈴木 紀	2014 ～2018	
継	基盤研究 (S)	権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築	關 雄二	2011 ～2015	
	基盤研究 (A) 一般	アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト ——エジプト系伝承形成の謎を解く	西尾哲夫	2012 ～2016	
	基盤研究 (A) 一般	世界の中のアフリカ史の再構築	竹沢尚一郎	2012 ～2015	
	基盤研究 (A) 海外	熱帯高地における環境開発の地域間比較研究 ——「高地文明」の発見に向けて	山本紀夫	2011 ～2015	
	基盤研究 (A) 海外	熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究	池谷和信	2014 ～2017	
	基盤研究 (B) 海外	経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究	杉本良男	2013 ～2015	
	基盤研究 (B) 一般	ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合	丸川雄三	2014 ～2016	
	基盤研究 (B) 海外	墳墓からみたインダス文明期の社会景観	寺村裕史	2014 ～2016	
	基盤研究 (B) 海外	台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究	野林厚志	2014 ～2017	
	基盤研究 (B) 海外	北方寒冷地域における織布技術と布の機能	佐々木史郎	2014 ～2016	
	基盤研究 (B) 特設分野研究	多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究	鈴木七美	2014 ～2016	
	基盤研究 (C) 一般	水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究	平井京之介	2013 ～2015	
	基盤研究 (C) 一般	トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学： オセアニア大国の移民を事例に	丹羽典生	2013 ～2016	
	基盤研究 (C) 一般	バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の 住民行動と地域構造の変容	飯田 卓	2013 ～2015	
	続	基盤研究 (C) 一般	スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に 関する文化人類学研究	鈴木七美	2013 ～2015
		基盤研究 (C) 一般	インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源と しての「手工芸」の意義	金谷美和	2014 ～2017
基盤研究 (C) 一般		現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術 学的研究	上羽陽子	2014 ～2017	
基盤研究 (C) 一般		現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的 研究	宇田川妙子	2014 ～2017	
若手研究 (A)		日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する 文化人類学的研究	伊藤敦規	2014 ～2017	
若手研究 (B)		現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践 に関する社会人類学的研究	相島葉月	2012 ～2015	
若手研究 (B)		言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形 成の研究	鈴木博之	2013 ～2016	
若手研究 (B)		漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編 ——中・越隣接エリアの調査研究	河合洋尚	2013 ～2015	
若手研究 (B)		アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用	川瀬 慈	2013 ～2016	
若手研究 (B)		高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学 的研究	加賀谷真梨	2013 ～2015	
若手研究 (B)	中国大興安嶺における生業環境の変化とトナカイ飼養民の適応 形態：1940-2010	卯田宗平	2013 ～2015		

	若手研究 (B)	博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明	太田心平	2013 ～2016
	若手研究 (B)	現代ブータンの多角的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究	宮本万里	2014 ～2018
	若手研究 (B)	『千一夜物語』 仏語訳者マルドリユス再考 ——<遺贈コレクション>の分析を中心に	岡本尚子	2014 ～2016
	若手研究 (B)	滞日ネパール人の生活実践と労働動態の研究	森田剛光	2014 ～2016
継	若手研究 (B)	植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究	豊山亜希	2014 ～2016
	挑戦的萌芽研究	人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求	岩谷洋史	2014 ～2015
統	研究活動スタート支援	中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考 ——麦積山石窟を事例として——	末森 薫	2014 ～2015
	研究成果公開促進費 学術図書	Oral Chronicles of the Boorana in Southern Ethiopia	大場千景	2014 ～2015
	研究成果公開促進費 データベース	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	久保正敏	2013 ～2016
	研究成果公開促進費 データベース	服装・身装文化デジタルアーカイブ	高橋晴子	2014 ～2018
	特別研究員奨励費	社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究： ポリネシアにおける贈与の全体性	比嘉夏子	2013 ～2015

研究
および
共同
利用

受託事業

「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催」

委託者：公益財団法人 日本財団

担当教員：菊澤律子

実施機関：2015年4月1日～2016年3月31日

目的と概要

1. 手話言語学についての国際シンポジウムを開催し、言語学の基礎概念や海外の研究動向に触れる機会を研究者・手話通訳者・一般社会に提供する。同時に、各国での日本財団の支援による手話言語学研究関連事業を広く紹介する。
2. 手話言語学の開講に関心を持つ大学や学会等に、集中講義や単独の講演のための講師や通訳者を派遣する。
3. 一般を対象とした「手話による言語学講義」、「楽しい言語学を学ぶ会」を開催する。
4. 西日本における学術手話通訳者養成事業を行う。スクリーニングにより選考した手話通訳者4～6名（うち2名は2014年度から継続）を対象とする。
5. 以上を遂行するために、昨年に引き続き、ろうのプロジェクト研究員を雇用して手話言語学に関する研究をすすめる機会を提供すると同時に、プロジェクト・コーディネーターの役割を担ってもらう。国内外の研究者との連携やネットワークづくりをすすめる。
6. セントラルランカシャー大学所蔵の世界の手話言語約30言語の映像のデータベース化に着手する。映像データの加工作業等のために、ろうの研究支援員を二名雇用する。

以上により、諸大学や社会における手話言語学に対する認識の向上に加え、申請機関においては、大学等での手話言語学の開講や研究者育成に関わる現状と問題点を把握する。1～2年目の事業の経験も踏まえ、国内外の高等教育機関におけるカリキュラムの特徴、対象が聴者またはろう者であるときの具体的な条件の違い、手話通訳者養成を視野にいれ、国内のニーズや現状により即した長期的な事業展開の計画をたてる。

実施状況

以下の通り、諸大学および研究機関に派遣した。東北大学では、全学教育枠での「手話言語学」の講義の開講二年度目として派遣済である。

1) 手話言語学の専門家の諸大学および諸機関への派遣

日程：2015年4月26日、6月28日（2日間、講義）

講師：森壮也（JETRO-IDE）

派遣先：豊田工業大学

内容：「手話学概論」「手話音韻論」

聴講者数：30名程度（学生、教員）

受け入れ研究者：原 大介

日本手話（手話通訳付き）

日程：2015年6月24-25日（2日間、講義）

講師：相良啓子（国立民族学博物館）

派遣先：関西学院大学

内容：「世界の手話～数のしくみを通して～」 「世界のろう事情」

聴講者数：30名程度（学生、教員）

受け入れ研究者：関西手話研究会（関西学院大学）

日本手話（手話通訳付き）

日程：2015年7月14日（1日間、講義）

講師：中野聡子（国立民族学博物館）

派遣先：大阪教育大学

内容：「障がい者支援入門I」

聴講者数：30名程度（学生、教員）

受け入れ研究者：池谷航介（大阪教育大学）

日本手話（手話通訳付き）

日 程：2015年8月6日～9日
講 師：松岡和美（慶応義塾大学）
紹介先：山口大学
内 容：「手話言語学概論」
※一般集中講義のための講師紹介。

日 程：2015年10月19日～25日
講 師：スーザン・フィッシャー（国立民族学博物館）
派遣先：台湾・清華大学、国立中正大学
内 容：手話言語学に関する講演および学術交流（学生および教員）
聴講者数：各20名程度
受け入れ研究者：James Tai, Jane S. Tsay（国立中正大学）
実施言語：英語

日 程：2015年10月27日（1日間、講義）
講 師：スーザン・フィッシャー（国立民族学博物館）
派遣先：東北大学
内 容：「日本手話と世界の手話」
聴講者数：35名
受け入れ研究者：小泉政利
実施言語：英語

日 程：2015年後期
講 師：全15名によるリレー講義（コーディネーター 菊澤律子）
派遣先：東北大学
内 容：全学教育授業「手話の世界と世界の手話言語☆入門」
聴講者数：20人
受け入れ研究者：小泉政利（東北大学大学院文学研究科・文学部言語学研究科）
実施言語：日本語、日本手話、英語。日本手話による講義については原則として通訳を派遣。

日 程：2015年通年講義のうち、半年間（15日間）
講 師：市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院、国立民族学博物館）
派遣先：東京大学
内 容：言語学概論（大学院および学部）
聴講者数：4人
受け入れ研究者：非該当
実施言語：日本語
※昨年に引き続き、本事業開始以前から開講されていた講義の継続。制度面での整備による協力。

日 程：2015年1月12日（1日間、講義）
講 師：中野聡子（国立民族学博物館）
派遣先：大阪教育大学
内 容：「障がい者支援入門II」
聴講者数：30名程度（学生、教員）
受け入れ研究者：池谷航介（大阪教育大学）
日本手話（手話通訳付き）

2) 国際シンポジウム等の開催

- 1 国際シンポジウムについては、以下の通り開催した。通訳士交流会については予定通り、ラウンドテーブル形式のワークショップとした。

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/corp/20150920-21>

時 期：① 2015年9月20～21日（シンポジウム）

② 2015年9月22日（通訳士交流会）

場 所：大阪・国立民族学博物館

対象者：① 国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般の聴講可）

② ①で通訳をした通訳者（通訳コーディネーター、日本手話、日英同時通訳、アメリカ手話）および菊澤。

内 容：① 日本財団および香港中文大学との共催によるシンポジウム「手話言語学研究の現在」、「文法の強制・許容・制約と回避」開催

② 通訳者間の反省および交流会

参加者数：① 363名、② 約20名

受け入れ研究者：非該当

使用言語：① 英語、アメリカ手話、香港手話、日本語、日本手話

② 英語、日本語（日英同時通訳付き）

- 2 みんなくセミナー「通訳学☆最前線」を以下の通り、開催した。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/104.html>

時 期：2016年1月9日（セミナー）

場 所：大阪・国立民族学博物館

対象者：国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般の聴講可）

内 容：通訳学に関する国内外の動向の報告

参加者数：約80名

受け入れ研究者：非該当

使用言語：① 日本語、日本手話

3) 民博学術通訳研究事業の開催

期 間：2015年5月～2016年1月

場 所：大阪・国立民族学博物館

対象者：関西在住の通訳者の中で一定の通訳技能を持つもの（スクリーニングにより選考）

内 容：関西における学術通訳チーム養成

参加者数：通訳者4名

受け入れ研究者：非該当

使用言語：日本語、日本手話、英語（日本手話通訳、必要に応じて日英同時通訳付き）

学術通訳に必要な知識を身につけ、技量を伸ばすことができるよう、月一回、通訳者養成の専門家を招待してのミーティングや評価等を行った。カリキュラム作成は主として飯泉菜穂子（世田谷福祉専門学校）が担当した。

通訳者 長浜栄昭、川鶴和子（以上、継続）

山崎晋、隅田伸子（今年度新規）

運営メンバー 飯泉菜穂子（世田谷福祉専門学校、国立民族学博物館）、市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院、国立民族学博物館）、岡森結子（通訳コーディネーター）、菊澤律子（国立民族学博物館）、中野聡子（国立民族学博物館）、高道由子（国立民族学博物館）

講 師 木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）、吉川あゆみ（世田谷福祉専門学校）、高木真知子（通訳コーディネーター）、森壮也（JETRO-IDE）、西村（日英通訳者）

オブザーバー 甲斐更紗（九州大学）、川上恵、相良啓子（国立民族学博物館）、馬場博史（関西学院大学）、前川和

美（関西学院大学）

4) ろう者や通訳者を対象とした言語学講座の開催

日 程：2015年4月より8月まで全6回

講 師：森壮也（JETRO-IDE）

場 所：国立民族学博物館

内 容：「手話による言語学入門」

聴講者数：35名程度（一般ろう・聴）

受け入れ研究者：非該当

使用言語：日本手話（手話通訳なし）

日 程：2015年4月より8月まで全6回

講 師：吉岡乾（国立民族学博物館）

場 所：国立民族学博物館

内 容：「たのしい言語学を学ぶ会」

聴講者数：35名程度（一般ろう・聴）

受け入れ研究者：非該当

使用言語：日本語（通訳研究事業OJTによる手話通訳あり）

5) 事業2.のインターネット配信

事業2.については、インターネット配信を行った。（アクセス数9月20日248名、9月21日225名）。

成果

1～2年目の事業の経験も踏まえ、また、3年目の事業を推進することにより、国内外のより広い研究者、一般参加者に事業内容に関心を持っていただくと同時に、参加していただくことができた。また、その結果、国内のニーズや現状をよりよく把握することができ、今後の計画につなげることができた。とくに、手話言語学のアウトリーチ活動と学術手話通訳養成については、その効果がみられるようになると同時に、継続して事業を展開する必要性が確認された。手話の言語としての特徴や手話話者の社会参加への推進に向けて、より発展した形でつなげてゆ�ために、今後は、諸大学や言語系学会等との連携等も視野にいれる必要性の確認、またその基盤づくりができた。

• 事業広報のためのウェブサイト

日本語のみで公開

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/>（プロジェクトウェブサイト）

• シンポジウムウェブサイト

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/corp/20150920-21>

• シンポジウム写真

<https://www.dropbox.com/sh/o86tn41qubta3ef/AABbghXD5ljypYj016RRORXra?dl=0>

• セミナーウェブサイト

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/104.html>

• セミナー写真

<https://www.dropbox.com/sh/ecw21sm50uwg81g/AADI4QjxS3PPcHeM6liBoBg3a?dl=0>

• シンポジウム内容のビデオ記録

DVDを添付

「台湾文化光点事業計画——台湾の客家」

委 託 者：The Ministry of culture, ROC (Taiwan) CHU WEN CHING

担当教員：河合洋尚

実施機関：2015年1月1日～2015年12月31日

目的と概要

本年度は、台湾文化のうち「客家文化」をテーマとし、講演会、映画祭、芸術祭など5つの関連イベントを開催した。そのうち最も多くの観客を動員した『一八九五』をはじめ、延べ人数1000名近くの来館者が台湾客家文化に

触れた。そのうちの大多数は研究者ではなく一般市民であり、日本における台湾客家文化の宣伝と普及に貢献できたと考えている。各イベントの質疑応答および終了後には、市民からの積極的な質問もあり、例えば11月29日に開催した最後のワークショップでは、終了後も質問が終わらず時間を延期したほどであった。映画祭と芸術イベントについてはアンケート調査も実施したが、概して満足度も高かったといえる。

実施状況

台湾客家文化について実施したイベントの内容は、以下の通りである。

① ウィークエンドサロン「台湾客家——日本、アメリカへの移住」（4月12日実施）

講演者は、本プロジェクトの企画者である河合洋尚であり、今年度開催する4つのイベントの基礎知識として、台湾の客家をめぐる基礎知識、及び台湾客家の特に日本、アメリカへの移住の状況について解説した。とりわけ日本とアメリカに移住した台湾客家の研究は世界的にもほとんど存在していない。それゆえ、本講演は、河合が近年実施している最新のデータでもって、台湾、日本、アメリカの客家について一般向けに解説をおこなった。

② 講演会「台湾客家文化を学ぶ」（7月11日実施）

この講演会では、本館の須藤健一館長が開幕の挨拶を、河合が趣旨説明をおこなったあと、3名の講演者により台湾客家文化の紹介をおこなった。3名の講演者は、いずれも台湾の客家地域で長年フィールドワークをおこなってきた研究者である。

1つ目の講演は、元日本文化人類学会会長である渡邊欣雄教授による「客家文化と台湾——70～80年代の調査経験から」である。渡邊教授は、1970年代後半から台湾南部の客家地域でフィールドワークをおこなってきており、当時の台湾客家の生活文化について多くの記録を残している。渡邊教授は、先行研究を批判的に検証しつつ、当時の台湾客家文化がどのようなものであったかを写真付きで説明した。1970年代から80年代にかけては、台湾の客家研究がそれほど多くない時期であり、しかも文化人類学の視野から当時の客家社会を記録する研究は一部のアメリカ人、日本人研究者に委ねられていた。渡邊教授の講演は、当時のデータを研究者や一般の人々に伝えるという意味でも貴重であった。

続く2つの講演は、21世紀に入り台湾客家地域でフィールドワークをおこなった若い研究者による報告であった。2つ目の講演は、横田祥子助教による「客家人国際結婚事情——台湾とインドネシアを結ぶ縁」である。この講演は、台湾で近年増加している東南アジアからの女性と台湾客家男性との結婚に注目したもので、台湾とインドネシアの両地の状況から国際結婚の現状を説明した。横田助教は、台湾客家社会においてはインドネシア女性を嫁にとる比率が高いことを指摘し、その要因として、台湾客家の男性がインドネシアの客家女性との結婚を望むという「客家性の強調」という側面を説明した。

3つ目の講演は、建築学者である長野真紀助教による「台湾客家の住まい——集落形態と居住文化」である。この講演は、台湾の村落空間構造に着目することで、台湾の客家文化を紹介するという趣旨で進められた。長野助教は、周囲の環境や民族関係により、台湾の客家集落はいくつかの類型に分かれることを説明した後、中部の客家村落の空間構造を詳細に説明することで、背後の文化的意味を説明した。特に興味深かったのは、台湾中部のある村落の空間構造が、中国大陸の客家地域である梅州に広がる伝統住宅・囲籠屋の空間構造と極めて似ているということである。客家文化というと、円形土楼や囲籠屋といった囲い込み型の住宅が有名であるが、同様の建築は台湾の客家社会には存在しないと言われてきた。しかし、家屋と家屋を比較するのではなく、家屋と村落構造を比較した場合、両者の背景には似通った思想的コンセプトがあるということが明らかになった。

③ 講演会「日本の客家——歴史と現在」（9月5日開催）

この講演会は、日本の客家研究者でなく、日本に在住する客家に日本の客家について語る目的で開催した。日本の客家団体に所属する成員は、98%以上が台湾に出自をもつ客家である。日本の客家団体である全日本崇正会連合総会会長、日本関西崇正会、日本関東崇正会には共催単位になってもらった。講演会では、まず本館館長の須藤健一、全日本崇正会連合総会会長の陳荊芳氏の挨拶の後、河合が趣旨説明をおこなった。続いて、日本関東崇正会の周子秋会長、元宝塚歌劇団女優である謝珠栄氏に講演をお願いした。

周子秋の発表題目は「日本客家の歩み——客家在日70年の歴史をたどる」であり、日本の客家の軌跡について語っていただいた。日本では、女優の余貴美子氏の祖父である余家麟氏が初代会長となり、1945年に初の客家団体である客家公会が成立した。その後、客家公会は自然消滅するが、丘逢甲の息子である丘念台の働きかけにより、東京崇正会が成立する。その後、日本で客家団体が次々と成立していくことになるが、周氏は、その歴史と現在の活動について紹介した。

他方で、謝珠栄氏は、日本生まれの客家二世としての立場から客家とのかかわりやアイデンティティについて

語った。謝氏は宝塚歌劇団を引退後、多くの歌劇のプロデュースに関わっており、いくつもの賞を受賞している。謝氏は、「私と客家」として題して、子供の頃は客家としてのアイデンティティを全くもたなかったのが、関西崇正会の会長である父の影響を受け、客家としての自覚に芽生えていたライフストーリーについて語った。謝氏は、歌劇『客家』に代表されるように、客家としての自己とパーソナリティをいかに作品に投影してきたかを話した。

日本において日本客家の研究はほとんどなく、この講演会は日本の客家を知り記録するうえでの学術的価値があった。さらに、それだけでなく、日本の一般市民に日本の客家の足跡を理解していただくいい機会となった。この講演会については新聞の報道もあり、雨天であったにもかかわらず、第5セミナーの定員を超える人々が集まった。

また、9月6日は第7セミナー室をまるごと展示場にし、日本の客家、および台湾の客家に関する展示会もおこなった。来館者は、この日しか見ることができない展示を手にとって真剣に見ており、概して盛況であった。

④ 映画祭『一八九五』（9月23日開催）

9月23日には台湾で初めて客家語を中心に製作された『一八九五』を上映した。司会を本館教授の野林厚志が務め、映画の内容とそれと関係する客家文化の意味について、河合洋尚が解説した。

この映画は本邦初公開であったこともあり、『産経新聞』『毎日新聞』『大阪日日新聞』『中日新聞』などのメディア媒体が事前に大々的に報道した。特に、『産経新聞』は、森嶋外役を演じた貴島功一朗氏へのインタビューを通して、添付資料にあるように大きくとりあげた。その縁で、貴島氏にはこの映画祭でサプライズ登場し、映画の紹介をしてもらうことができた。後述の通り、映画祭は主催者の予想をはるかに上回る盛況ぶりであった。

⑤ 学術公演「伝統と創意——台湾客家の工芸と音楽」（11月28日開催）、および国際ワークショップ「台湾の客家文化産業——音楽と工芸」（11月29日開催）

11月28日、29日の2日連続で、台湾客家の音楽と工芸を紹介するイベントをおこなった。このイベントでは、台湾から約10名の工芸家や音楽家を招へいし、台湾の芸術について紹介をおこなった。

まず、28日に開催した「伝統と創意——台湾客家の工芸と音楽」では、台湾南部の美濃から10名ほどのアーティストを招聘し、客家の工芸（紙傘、藍染）、音楽（八音、歌唱）などの紹介と実演をおこなった。紙傘は李明祥（美濃李家傘・美濃製傘工芸家）夫婦、客家藍染は洪静文（三文顔色布工房・植物染創作芸術家）、八音は、鐘彩祥（美濃竹頭背客家八音団、二弦）、鐘兆生（美濃竹頭背客家八音団、嗩吶）、黄沛文（美濃竹頭背客家八音団、胡弦）、呉佩玲（美濃竹頭背客家八音団、二弦）、鍾佳佑（美濃竹頭背客家八音団、銅鑼）、客家歌唱は、羅思蓉（羅思蓉与毛頭楽団、歌手）、黄宇燦（羅思蓉与毛頭楽団、ギター）を招待した。このイベントでは、台湾でも失われている伝統文化がいかに創作と刷新を通して継承されているかについて紹介した。

次に、29日には、前日に実演と紹介をおこなった芸術家たちと交流する目的でワークショップをおこなった。このワークショップでは、高雄師範大学の洪馨蘭が「台湾の客家文化産業——過去・現在・未来」と題する基調講演をおこない、現在の台湾における客家文化産業についての現状の紹介、および現在抱える課題について論じた。続いて、28日に出演した4名の工芸家と音楽家が各自のライフストーリーを話し、それに基づいて台湾の伝統客家文化についての現状や課題について議論をおこなった。また、美濃で客家文化を推進するNGO団体である美濃愛郷協進会のプロジェクト・マネージャーである李玄斌氏が異なる立場から台湾の客家文化産業について述べた。

6名の語りと議論を受け、総合討論では活発な議論がおこなわれた。

成果

開催した5つのイベントは、ともに台湾客家にテーマを絞り紹介・解説をおこなうというものであった。そのうち、先の3つは講演会の形式をとったが、いずれも多くの来館者が足を運んだ。

まず、4月12日の講演会では、約35名の聴衆が集まり、台湾客家とその移住についての理解を深めた。聴衆の大半は展示に来ていた来客であったが、日本やアメリカの移住に関する研究は上述の通りほとんどないので、数名の研究者も遠くから足を運んだ。

次に、7月11日の講演会では、国立民族学博物館で最も広いセミナー室を利用したが、満室に近い盛況であった。大半が台湾文化に関心をもつ一般聴衆であったが、一部には研究者や日本の客家もあり、多方面の方々に関心をもって参加していただくことができた。3つの講演に関しては聴衆からの反響も大きく、例えば、国際結婚により台湾客家社会でインドネシア人がどのようにみられるのか、中国の客家建築と台湾の村落構造は出身地でつながっていないのになぜ似ているのかなど、研究者や一般の参加者から多くの質問がでた。

広報は、国立民族学博物館のホームページやフェイスブックだけでなく、当館の台湾文化ファンの集まりにイン

ターネット上でおこなった。また、台湾学会、東アジア人類学研究会などの研究者ネットワークにおいても広く紹介された。

そして、9月6日に開催した日本客家の講演会では、雨天であったにもかかわらず、90名の人々が集まった。会場に入りきらなかったため、会場の後ろに椅子を準備するほどの盛況であった。参加者のうち研究者は1割にも満たず、大半は、日本の客家、宝塚歌劇団のファン、台湾文化愛好者など、日本の客家に関心をもつ市民であった。この講演会も同様に新聞で紹介された。

今年度のイベントで最も集客数が多かったのは、本邦初公開の『一八九五』であった。開催前から新聞など各メディアで大々的に報道され、会場の定員をはるかに上回る観客が集まった。その後も『一八九五』の再放映を望む声は多く、大変な盛況ぶりであった。映画の解説後は、その内容に興味をもつ来館者から約1時間に及ぶ質問があり、「客家（文化）とは何なのか」についての関心の高まりを実感することができた。

それに比べて、11月28日に開催した芸術イベントの参加者は約80名とそれほど多くはなかった。しかし、アンケートの結果では、約55%が「大変良かった」、約40%が「良かった」と内容に関する評価は非常に高かった。そのため、11月29日の国際ワークショップは学術会議の形式をとったにもかかわらず、第4セミナーがほぼ満室になるほど参加者が多かった。会議終了後は、閉館の時間が過ぎても話者との対話を希望する市民が多く、充実した内容の国際ワークショップとなった。

民間などの研究助成金などによる研究活動

・寄附金

椿原敦子外来研究員研究助成金（公益信託 澁澤民族学振興基金）	————	椿原敦子
山本文子外来研究員研究助成金（公益信託 澁澤民族学振興基金）	————	山本文子
順益台湾原住民博物館研究賛助金	————	順益台湾原住民博物館
菊澤律子准教授研究助成金	————	（株）エデュケーショナル・デザイン
2015年特別展「韓日食博」に係る助成金	————	公益財団法人 日韓文化交流基金
KOREA FOUNDATION 特別展助成金	————	韓国国際交流財団

2-3 研究成果の公開

刊行物

●国立民族学博物館研究報告

40巻1号（2015年6月12日発行）

・論文

大規模災害時における文化財レスキュー事業に関する一考察——東日本大震災の活動から振り返る

日高真吾

メディアをめぐる公共圏の検討——ベナンの視聴者参加番組の事例をとおして

田中正隆

・Special Issue

Introduction

Japan in Global Circulation: Transnational Migration and Multicultural Politics

Blai Guarné and Shinji Yamashita

Transnational Families in a Global Circulation Context: The Case of Cross-border Marriages between

Japanese Women and Pakistani Migrants ————— Masako Kudo

Micro-politics of Identity in a Multicultural Japan: The Use of Western Colonial Heritages among

Japanese Filipino Children (JFC) ————— Taichi Uchio

Transnational Labor Migration in Japan: The Case of Korean Nightclub Hostesses in Osaka

Haeng-ja Chung

A Ruptured Circuit: The Economic Crisis and the Breakdown of the *Dekassegui* Migration System

Koji Sasaki

Commentary

Japan in Global Circulation: Transnational Migration and Multicultural Politics ————— Glenda S. Roberts

40巻2号 (2015年11月27日発行)

特集：マダム・ブラヴァツキーのチベット

• 序論 杉本良男

入口としてのカルムイク草原——19世紀前半のカルムイク人とその信仰に関する知識と記憶 —— 井上岳彦
 ブッダの世界の小さな花——エレナ・ガンの『ウトバーラ』が描くカルムイク仏教の世界 —— 高橋沙奈美
 不可視の「チベット」、可視の「チベット」——欧米と日本におけるチベット・イメージ —— 高本康子
 闇戦争と隠秘主義——マダム・ブラヴァツキーと不可視の聖地チベット —— 杉本良男

• 論文

かたちを変えていく歌詞——チベット難民社会におけるチベタン・ポップの作詞実践を事例に —— 山本達也

• 研究ノート

Reinterpretation of the Ramayana in Indonesia: A Consideration of the Comic Works of R. A. Kosasih
 ————— MadokaFukuoka

40巻3号 (2016年1月27日発行)

• 論文

オーストラリア・アジア系専門職移民の文化・社会参加戦略——ある作家の自叙伝と文化・社会活動に注目して
 ————— 石井由香

• 書評論文

壮族の「民族英雄」儂智高に関する研究の動向と問題点 —— 塚田誠之

• 研究ノート

赤子と母のいのちを守るための江戸時代の民間療法 —— 沢山美果子
 The Role of Meals in the Well-being of American and Japanese Elderly: Meal Programs at Senior
 Centers and Senior Day-service Centers —— Mariko Fujita-Sano

40巻4号 (2016年3月31日発行)

• 論文

博物館におけるLED照明の現状——2015年夏 国立民族学博物館展示場での実験データから
 ————— 園田直子・日高真吾・末森 薫・奥村泰之・河村友佳子・橋本沙知・和高智美
 「アーティスト」として生きていく——ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アート」のあり方
 ————— 緒方しらべ

• 研究ノート

イスラエル・ガリラヤ地方のアラブ人市民にみられる豚肉食の現在——キリスト教徒とムスリム, ユダヤ
 教徒の相互的影響 —— 菅瀬晶子

● Senri Ethnological Studies

No.91 (2015年7月31日発行)

Kyonosuke Hirai (ed.) *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia*

No.92 (2016年3月31日発行)

Yuki Konagaya, Olga Shaglanova (eds.) *Northeast Asian Borders: History, Politics, and Local Societies*

● Senri Ethnological Reports (国立民族学博物館調査報告)

No.130 (2015年11月27日発行)

娜仁格日勒編 『梅棹忠夫の内モンゴル調査を検証する』

No.131 (2015年11月30日発行)

齋藤玲子編 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』

No.132 (2015年12月1日発行)

岸上伸啓編 『環北太平洋地域の先住民文化』

No.133 (2016年1月25日発行)

Terada Yoshitaka (ed.) *An Audiovisual Exploration of Philippine Music: The Historical Contribution of Robert Garfias*

No.134 (2016年3月7日発行)

中川 裕・遠藤志保編 『国立民族学博物館所蔵 鍋沢元蔵ノートの研究』

No.135 (2016年3月8日発行)

Шагланова Ольга А. и Сасаки Сиро (ред.) *Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях России и Японии методы сбора, учета, хранения и экспозиции*

No.136 (2016年3月22日発行)

河合洋尚・飯田 卓編 『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』

●民博通信

No.149 (2015年6月30日発行)

評論・展望「新たなサブスタンスとつながりの再配置——インドの生殖医療のフィールドから」 松尾瑞穂

No.150 (2015年9月30日発行)

評論・展望「帰納的アプローチと演繹的アプローチの統合——アンデス考古学からの視点」 関 雄二

No.151 (2015年12月24日発行)

評論・展望「世界の屋根の言語事情・研究事情——系統を越えた言語接触の現場」 吉岡 乾

No.152 (2016年3月30日発行)

評論・展望「ミュージアムの中の古代アメリカ文明」 鈴木 紀

●国立民族学博物館論集

No.4 (2016年3月31日発行)

佐々木史郎・渡邊日編 『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界——比較民族誌的研究』 東京：風響社

●研究年報2014 (2015年12月25日発行)

●外部出版

藤本透子編 『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』 横浜：春風社 (2015年5月31日刊行)

竹沢尚一郎編 『ミュージアムと負の記憶——戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』 東京：東信堂 (2015年10月20日刊行)

山中由里子編 『<驚異>の文化史——中東とヨーロッパを中心に』 名古屋：名古屋大学出版会 (2015年11月10日刊行)

中谷文美・宇田川妙子編 『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』 京都：世界思想社 (2016年3月17日刊行)

河合洋尚編 『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』 東京：時潮社 (2016年3月24日刊行)

丹羽典生編 『<紛争>の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』 横浜：春風社 (2016年3月30日刊行)

塚田誠之編 『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』 東京：風響社 (2016年3月30日刊行)

●共同研究の成果

広瀬浩二郎著 『身体でみる異文化——目に見えないアメリカを描く』 (臨川選書31) 京都：臨川書店 (2015年4月8日刊行)

* 共同研究「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」(2012~2014年度)

Crispin Bates & Minoru Mio (eds.) *Cities in South Asia* London: Routledge (2015年4月29日刊行)

* 共同研究「南アジアにおける都市の人類学的研究」(2006～2009年度)

藤本透子編『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』横浜：春風社(2015年5月31日刊行)

* 共同研究「内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」(2010～2012年度)

山中由里子編『＜驚異＞の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会(2015年11月10日刊行)

* 共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」(2010～2013年度)

浮ヶ谷幸代編『苦悩とケアの人類学——サファリングは創造性の源泉になりうるか?』京都：世界思想社(2015年12月17日刊行)

* 共同研究「サファリングとケアの人類学的研究」(2009～2012年度)

橋本裕之・林勲男編『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店(2016年2月29日刊行)

* 共同研究「災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承」(2012～2014年度)

中川裕・遠藤志保編『国立民族学博物館所蔵 鍋沢元蔵筆録ノート研究』(Senri Ethnological Reports No.134) 大阪：国立民族学博物館(2016年3月7日刊行)

* 共同研究「アイヌ語を中心とする国立民族学博物館所蔵北方諸言語音声資料の分析」(2007～2009年)

中谷文美・宇田川妙子編『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社(2016年3月17日刊行)

* 共同研究「ジェンダー視点による「仕事」の文化人類学的研究」(2008～2011年度)

河合洋尚編『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』東京：時潮社(2016年3月24日刊行)

* 共同研究「ランドスケープの人類学的研究——視覚化と身体化の視点から」(2012～2014年度)

丹羽典生編『＜紛争＞の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』横浜：春風社(2016年3月30日刊行)

* 共同研究「オセアニアにおける独立期以降の＜紛争＞に関する比較民族誌的研究」(2009～2012)

塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』東京：風響社(2016年3月30日刊行)

* 共同研究「中国における民族文化の資源化とポリティクス——南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究」(2009～2012年度)

佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界——比較民族誌的研究』(国立民族学博物館論集④) 東京：風響社(2016年3月30日刊行)

* 共同研究「ポスト社会主義以後の社会変容——比較民族誌的研究」(2008～2011年度)

桑山敬己編著『日本はどのように語られたか：海外の文化人類学的・民俗学的日本研究』京都：昭和堂(2016年3月31日刊行)

* 共同研究「海外における人類学的日本研究の総合的分析」(2010～2013年度)

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんなくりポジトリ」は、一般公開後6年が経過した。今年度も、恒常的な館内刊行物の登録を継続するとともに、『研究年報2013』の掲載業績を基に個人業績の抽出・許諾・登録作業を行った。今年度新たに登録したコンテンツは303件で、2016年3月末のコンテンツ登録数は4,807件となった。過去のコンテンツの公開許諾は、著者本人から許可が下りても出版社から取得しにくいのが問題ではあるが、今後も、年間200件以上の登録を目指している。

コンテンツのダウンロード数は、2015年度は年間750,000件に達している。前年度と比較して、月平均も10,000ダウンロード以上増加しており、「みんぱくりポジトリ」に対する認知度の高さが安定していることがうかがえる。

「みんぱくりポジトリ」は国際的にも評価は高く、スペイン高等科学研究院 CSIC がおこなっているリポジトリの定量的総合評価では、日本298機関中61位、世界2,297機関中839位にランキングされた。

また、今までの館内サーバーで運用していた「みんぱくりポジトリ」(DSpace) から NII (国立情報学研究所) の JAIRO Cloud (共用リポジトリサービス) を利用した人間文化研究機構の「機構リポジトリ」への移行が順調に完了し、2016年2月17日から正式に公開の運びとなった。

学術講演会

●みんぱく公開講演会

「育児の人類学、介護の民俗学——フィールドワークによる再発見」

実施日 2015年11月13日

場 所 日経ホール (東京)

共 催 日本経済新聞社

参加者 366人

講演1 「心に寄り添う子育てとは?——遊びと学びのすごろくワールド」

講 師 信田敏宏

内 容 「心に寄り添う」「共感する」をモットーに取り組んできた我が家の子育て。ダウン症のある娘の心が清らかに成長していくプロセスを語る。人類学者として、父親として、これからの社会はどうあるべきか、心豊かで幸せな人生を送るために必要なこととは何かを問いかけた。

講演2 「聞き書きで介護の世界が変わっていく——介護民俗学の実践から」

講 師 六車由実 (デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員、民俗学者)

内 容 民俗学の「聞き書き」の手法を介護現場で試みていくと、閉塞的だった介護の世界が少しずつ変化していった。それまで介護する／されるという非対称的な関係に固定されていた介護職員と利用者との関係が、教えられる／教えるという関係に逆転し、さらに利用者同士もそれぞれの人生に共感し、互いに思いやる関係に深まっていったのである。介護民俗学の実践を通して、人が最期まで人として生きられる、希望のある介護の在り方を探った。

パネルディスカッション

鈴木七美×信田敏宏×六車由実

司 会 南 真木人

内 容 ダウン症のある子どもを療育する人類学者と介護施設で働きながらお年寄りの話を聞き書きする民俗学者。そこには障がいのある子どもの家族や認知症、介護の現場などにつきまとう否定的なイメージを払拭するばかりか、多様な人びとが暮らしやすい社会を実現する新たな可能性が見えてきた。育児と介護の現場におけるフィールドワークから、少子高齢化をむかえた日本社会のゆくえを探った。

(講演と討論は、一部編集を経て2016「みんぱく公開講演会「育児の人類学、介護の民俗学」より」『季刊民族学』156号、61-81頁に掲載された。)

「ワールドアートの最前線——アイヌの文様とエチオピアの響き」

実施日 2016年3月25日

場 所 オーバルホール (大阪)

共 催 毎日新聞社

参加者 271人

講演1 「アイヌの衣服の素材と文様」

講 師 佐々木史郎

内 容 最近の研究では、北海道に暮らすアイヌの人々の間でも江戸時代初期から絹や木綿の衣服と布地が流入して、晴着やその文様にふんだんに使われていたことがわかってきた。しかも、時代を遡るほどよい素材が使われる傾向にある。この講演では、北海道とロシアの博物館に収蔵されているアイヌの古い衣服から、その素材と文様の歴史を追った。

講演2 「職能者からアーティストへ——世界に羽ばたくエチオピアの楽師たち」

講師 川瀬 慈

内容 古よりエチオピア北部の社会において音楽を担ってきた楽師アズマリは、近年ポピュラーミュージックの世界やエチオピア国外の音楽シーンにおいても活躍するようになった。地域社会の職能者から“表現者／アーティスト”まで姿を変えつつ、グローバルに活動する彼らを紹介した。

パネルディスカッション

上羽陽子×佐々木史郎×川瀬 慈

司会 丹羽典生

内容 ワールドアートとは、近年のアート（芸術）研究の流れのなかから生み出された言葉である。この言葉は、西洋中心の芸術概念に偏重する傾向のあった従来の研究を反省し、批判的にとらえて、アートという枠組み自体を考え直していこうとする人びとによって使われている。そこでは、従来ではとてもアートとは考えられてこなかったものまで積極的に取り扱われるようになってきている。たとえばこれまでは、むしろ人類学、考古学といった学問分野の対象となるようなものであったり、工芸、手芸など作品としての質の高さは認められながらも芸術品として扱われなかったようなさまざまな事物を旺盛に研究の対象に取り込んでいる。

現在のアート（芸術）の世界でどのような変化が起きているのか、その変化と現在の姿、さらには将来について、日本と海外のデザインや音楽を対象に、アートという概念自体やその境界を問い直す、ワールドアートの動向について、紹介した。

2-4 学会開催

学会開催

2015年5月29日 日本文化人類学会課題研究懇談会「医療人類学教育の検討」

開催場所：国立民族学博物館第六回研究会 第4セミナー室

2015年5月30日～31日 国立民族学博物館主催：日本文化人類学会第49回研究大会

開催場所：大阪国際交流センター

2015年9月20日～21日《機関研究成果公開》「みんなく手話言語学フェスタ2015」

開催場所：国立民族学博物館

2015年9月25日～9月27日 How Do Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape?

Venue: Conference Room 4, National Museum of Ethnology, Osaka

2015年11月22日 日本文化人類学会第四次世代育成セミナー

開催場所：国立民族学博物館 第3・第4セミナー室

2016年1月9日 「みんなくセミナー「通訳学☆最前線」」

開催場所：国立民族学博物館 第4セミナー室

2-5 研究員制度

外来研究員

BULIAN, Giovanni (ブリアン ジョヴァンニ) イタリア ヴェネツィア大学アジア・北アフリカ研究学部研究員

研究課題：日本の村落地域における在来気象知識の研究

CHOI, Hye Eun 崔 慧銀 (チェ ヘウン) 韓国 ウィスコンシン大学マディソン校歴史学科博士後期課程 (Ph.D.Candidate)

研究課題：日帝時代における韓国大衆音楽の形成：レコード産業を中心にした研究

COUCHONNAL CANCIO, Ana Ines (コウチョナル カンシオ アナ イネス) アルゼンチン 国立サンマルティン大学人文科学研究科非常勤講師

研究課題：植民地期パラグアイの宣教政策における先住民言語——17・18世紀のグアラニ語の適応と葛藤

DAHL SHAYNE (ドール シェーン) カナダ トロント大学大学院人類学部博士課程

研究課題：東日本大震災発生以降の山岳宗教と巡礼——山形県出羽三山信仰をめぐって

ERTL, John (アートル ジョン) 米国 金沢大学外国語教育研究センター／国際文化資源学センター准教授

研究課題：考古学の民族誌：考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究

GEOFFREY Frank Humble (ジェフリー フランク ハンブル) 英国 バーミンガム大学博士課程

研究課題：元史における民族アイデンティティの語り——オゴデイ・カアンへの治世

KIM, Wolduk 金 月徳 (キム ウォルドク) 韓国 全北大学校人文大学国語国文学科講師

研究課題：民俗文化の解釈と変容についての談論の検討

KURNIASIH Sukenti (クルニアシ スケンティ) インドネシア ブラウイジャヤ大学生物学科博士課程

研究課題：インドネシア西ヌサトゥンガラ諸島ロンボック島におけるササク族の伝統的食文化に関する民族植物学的研究

LEE, Young-Mi 李 英美 (イ ヨンミ) 韓国 国立アルティプラノ大学人類学科専任講師

研究課題：在日ペルー人の文化的アイデンティティの変化と社会的ネットワークの関係に関する研究

LIN, Liying 林 麗英 (リン レイエイ) 台湾

研究課題：グローバル化のなかの台湾の原住民族文化遺産の保存と継承についての考察

MARZEC AGNIESZKA (マジェッツ アグネシカ) ポーランド

研究課題：異文化接触場面におけるコミュニケーション・ストラテジー～在日外国人を中心に～

McGUIRE, Jennifer Mary (マグワイア ジェニファー メアリー) 米国 日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期)

研究課題：違いを受け入れる——日本の一般学校におけるろうおよび難聴の生徒と教育制度

NARAN 娜然 (ナラン) 中国

研究課題：環境政策実施後の内モンゴルにおける牧畜の変化と土地劣化

野中 アンジェラ 美雪 (ノナカ アンジェラ ミユキ) 米国 テキサス大学オースティン校社会福祉事業学部助教

研究課題：日本手話における敬語表現の研究

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante (サウセド セガミ ダニエル ダンテ) ベルー 同志社大学グローバル地域文化学部非常勤講師／摂南大学外国語学部非常勤講師

研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究

SCHROEDER, Anja (シュローダー アニヤ) ドイツ カイザースラウテルン大学戦略マネジメント学科ポスドク／日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期)

研究課題：巨大災害の経験を生かしたリスク管理における空間マネジメント

YAMADA, Naomi 山田 ナオミ (やまだ なおみ) 米国 中央大学総合政策学部非常勤講師

研究課題：中国の教育現場における民族起源の表象に関する教育人類学的研究

YOTOVA, Mariya Ivanova (ヨトヴァ マリア イヴァノヴァ) ブルガリア 総合研究大学院大学文化科学研究科
博士後期課程修了

研究課題：バルカン地域における社会経済変動と文化変容

ZHAO, Furong 趙 芙蓉 (ジャオ フーロン) 中国 京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻博士後期
課程修了

研究課題：北アジアにおけるシャマニズムの再活性化に関する人類学的比較研究

YIMIN 伊敏 (イミン) 中国 滋賀県立大学大学院人間文化科学研究科博士後期課程単位修得退学

研究課題：中国における少数民族言語地名の漢字表記にみる歴史と文化——内モンゴル地域におけるモンゴル語
と満洲語の地名を中心に

KIM, Satbyul 金 セッピーオル (キム セッピーオル) 韓国 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修
得退学

研究課題：韓国における国家主導型の自然葬の形成に関する人類学的研究

WU, Tianyue 吴 天躍 (ゴ テンヤク) 中国 中国中央美术学院人文学院博士生

研究課題：仏教的文化遺産保護に関する日中比較研究——景観人類学の視点から

TANG, SHAOLING 湯 紹玲 (トウ ショウレイ) 中国 滋賀県立大学大学院人間文化科学研究科博士後期課程単位
修得退学

研究課題：日本の盆行事と中国の中元節の比較研究

相島葉月 (あいしま はつき) 日本 英国マンチェスター大学人文学部中東研究学科講師

研究課題：現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

浅見恵理 (あざみ えり) 日本 明治大学校地内遺跡調査団短期嘱託職員

研究課題：地域社会の発展と独自性の形成過程——チャンカイ文化の世帯考古学的研究

荒田 恵 (あらた めぐみ) 日本

研究課題：アンデス形成期祭祀遺跡における工芸品製作

飯塚真弓 (いづか まゆみ) 日本 高崎経済大学助手／研究員

研究課題：南インドのヒンドゥー寺院からみるトランスナショナルリズムと宗教実践をめぐる人類学的研究

飯田淳子 (いいた じゅんこ) 日本 川崎医療福祉大学医療福祉学部准教授

研究課題：医療者向け医療人類学教育の検討：保健医療福祉専門職との協働

石森大知 (いしもり だいち) 日本 武蔵大学社会学部准教授

研究課題：宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究

市野澤潤平 (いちのざわ じゅんぺい) 日本 宮城学院女子大学学芸学部准教授

研究課題：確率的事象と不確実性の人類学：「リスク社会」化に抗する世界像の描出

猪股(松井)智子 (いのまた(まつい) ともこ) 日本

研究課題：女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明：タイを事例に

今中崇文 (いまなか たかふみ) 日本 摂南大学外国語学部、看護学部非常勤講師／大阪人間科学大学非常勤講師

研究課題：中国陝西省西安市における回族の宗教指導者をめぐる人類学的研究

岩谷洋史（いわたに ひろふみ） 日本 神戸大学国際文化学部非常勤講師／立命館大学理工学部非常勤講師／関西大学文学部非常勤講師

研究課題：人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求

内田修一（うちだ しゅういち） 日本 総合研究大学院大学博士課程単位修得退学

研究課題：都市的環境におけるソンガイの精霊憑依の実践

梅津綾子（うめつ あやこ） 日本 埼玉大学教養学部非常勤講師

研究課題：親子・家族概念の再考——ナイジェリアの里親養育と日本のセクシュアル・マイノリティの家族を事例に

太田好信（おおた よしのぶ） 日本 九州大学大学院比較社会文化研究院教授

研究課題：政治的分類——被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する

大場千景（おおば ちかげ） 日本 メケレ大学外国語学部非常勤講師

研究課題：エチオピア南部、ボラナにおける口頭年代史

岡田浩樹（おかだ ひろき） 日本 神戸大学大学院国際文化学研究科准教授

研究課題：宇宙開発に関する文化人類学からの接近

緒方(浜田)しらべ（おがた(はまだ) しらべ） 日本 大阪大学外国語学部非常勤講師

研究課題：「アート」の生産と受容に関する人類学的研究——ナイジェリア国内都市の事例から

岡本尚子（おかもと なおこ） 日本 国際基督教大学高等学校教務員

研究課題：『千一夜物語』仏語訳者マルドリユス再考——「〈遺贈コレクション〉」の分析を中心に

小野林太郎（おの りんたろう） 日本 東海大学海洋学部専任講師

研究課題：アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究：資源利用と物質文化の時空間比較

小尾 淳（おび じゅん） 日本 大東文化大学国際関係学部研究補助員

研究課題：インドの宗教歌謡「キールタン」の環流とソーシャルメディアの役割

鏡味治也（かがみ はるや） 日本 金沢大学人間社会研究域人間科学系教授

研究課題：生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究

加賀谷真梨（かがや まり） 日本

研究課題：高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究

登 久希子（のほり くきこ） 日本 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位修得退学

研究課題：現代美術の人類学：作品の一時性とアーカイヴをめぐる

金谷美和（かねたに みわ） 日本 京都大学地球環境学堂三才学林研究員／大阪芸術大学芸術学部非常勤講師

研究課題：インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義

川田牧人（かわだ まきと） 日本 成城大学文学部教授

研究課題：呪術的实践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して

神田每実（かんだ つねみ） 日本 愛知県立芸術大学美術学部教授

研究課題：造形美術様式と風土の関係

菊田 悠（きくた はるか） 日本 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員
研究課題：「中央アジア」セクションの更新とウズベキスタン独立後の社会変化

熊谷瑞恵（くまがい みずえ） 日本 ウイグル・アカデミー外国人研究員
研究課題：牧畜民と言語情報をめぐる人類学的研究——パキスタンのワヒを対象に

窪田幸子（くぼた さちこ） 日本 神戸大学大学院国際文化学研究科教授
研究課題：表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に

是澤博昭（これさわ ひろあき） 日本 大妻女子大学家政学部准教授
研究課題：モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に

小林貴徳（こばやし たかのり） 日本 愛知県立大学国際文化研究科多文化共生研究所客員共同研究員／大阪経済大学人間科学部非常勤講師／摂南大学外国語学部非常勤講師／同志社大学グローバル地域文化学部非常勤講師／神戸市外国語大学外国語学部非常勤講師／関西学院大学国際学部非常勤講師／神戸大学国際文化学部非常勤講師
研究課題：メキシコにおける無形／有形文化財の観光資源化に関する研究

呉屋淳子（ごや じゅんこ） 日本 山形大学教育開発連携支援センター講師
研究課題：高等教育機関における伝統芸能の教授に関する研究

近藤 宏（こんどう ひろし） 日本 立命館大学理工学部先端総合学術研究科非常勤講師
研究課題：パナマ東部先住民エンペラにおける「共同体企業」の実践に関する人類学的研究

齋藤 剛（さいとう つよし） 日本 神戸大学国際文化学研究科准教授
研究課題：個－世界論：中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム

澤野美智子（さわの みちこ） 日本 近大姫路大学看護学部非常勤講師／西宮市医師会看護専門学校非常勤講師
研究課題：フィード（ものを食べさせる行為）に関する人類学的研究

新本万里子（しんもと まりこ） 日本 広島女学院大学国際教養学部非常勤講師／福山大学人間文化部非常勤講師／広島大学大学院国際協力研究科契約一般職員
研究課題：女性の身体をめぐる言説と消費：パプアニューギニアにおける生理用品の受容を事例に

杉島敬志（すぎしま たかし） 日本 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
研究課題：エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望

鈴木博之（すずき ひろゆき） 日本 Laboratoire Parole et Langage (CNRS) PD 非常勤研究員
研究課題：言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究

瀬木志央（せぎ しおう） 日本 メルボルン大学メルボルン土地環境大学院資源管理・地理学部フェロー／ラトロープ大学フィリピン・オーストラリア研究センターリサーチ・アシリエイト／オーストラリア・カトリック大学人文・教育学部非常勤講師
研究課題：熱帯地域における海洋保護区の社会的持続性に関する研究

宗野ふもと（そうの ふもと） 日本 公益財団法人京都市景観・まちづくりセンター嘱託職員
研究課題：ウズベキスタンにおける社会変容と女性

添野 勉（そへの つとむ） 日本 成城大学社会イノベーション学部非常勤講師／城西国際大学メディア学部非常勤講師／淑徳大学国際コミュニケーション学部兼任講師

研究課題：社会集団の写真資料に対する分類・メタデータ付与手法の研究

藺田 郁（そのだ いく） 日本 大阪芸術大学音楽学科非常勤講師

研究課題：近代日本における大衆芸能の地方伝播に関する研究——人形芝居を中心に

高田絹代（たかだ きぬよ） 日本 アイヌ刺しゅう家

研究課題：アイヌ刺しゅうについて——着物の裏側の調査及び布製針刺しの調査

高橋晴子（たかはし はるこ） 日本 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター招へい教授

研究課題：服装・身装文化デジタルアーカイブ

高村美也子（たかむら みやこ） 日本

研究課題：スワヒリ地域におけるヤシ科植物の利用についての環境人類学的研究

田中鉄也（たなか てつや） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義——商業集団マールワリーを事例として

玉山ともよ（たまやま ともよ） 日本 近畿大学理工学部非常勤講師

研究課題：北米先住民聖地での地下資源開発をめぐる国際的な「協働」のありかたについての研究

辻 貴志（つじ たかし） 日本 園田学園女子大学人間健康学部非常勤講師／近畿大学経営学部非常勤講師／岡山理科大学総合情報学部非常勤講師／京都外国語大学外国語学部非常勤講師／神戸女子大学健康福祉学部特別講師

研究課題：フィリピン・パラワン島南部の焼畑農耕民の鳥の狩猟と保全に関する人類学的研究

辻 輝之（つじ てるゆき） 日本 The University of the West Indies Visiting Fellow

研究課題：宗教と移民の社会関係資本形成

辻本香子（つじもと きょうこ） 日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学

研究課題：東アジア地域におけるリズム楽器を使用したパフォーマンスの研究

椿原敦子（つばきはら あつこ） 日本 龍谷大学社会学部非常勤講師／和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師

研究課題：「言説的伝統」としてのイスラームのトランスローカリティをめぐる研究：十二イマーム・シーア派の哀悼儀礼を中心に

徳岡(七五三)泰輔（とくおか(しめ) たいすけ） 日本 株式会社タスクアソシエーツコンサルタント部コンサルタント

研究課題：参加を通じた政治実践の民族誌的研究：バングラデシュにおける参加型開発と開発援助を通じた参加型ガバナンスを事例として

土佐桂子（とさ けいこ） 日本 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

研究課題：「統制」と公共性的人类学的研究：ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ

中野(金澤)聡子（なかの(かなざわ) さとこ） 日本 東京福祉大学通信教育課程非常勤講師／日本社会事業大学社会福祉学部非常勤講師／広島大学アクセシビリティセンター特任講師

研究課題：言語知識の獲得と通訳作業過程に着目した学術手話通訳養成カリキュラムの開発

長坂康代（ながさか やすよ） 日本 岐阜県立多治見看護専門学校非常勤講師／愛知大学国際コミュニケーション学部非常勤講師／中部大学健康生命学部非常勤講師／金城学院大学生活環境学部非常勤講師

研究課題：ベトナムの首都ハノイにおけるストリート民衆の生活戦略に関する都市人類学的研究

長谷千代子（ながたに ちよこ） 日本 九州大学大学院比較社会文化研究院講師

研究課題：宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代社会

中原聖乃（なかはら さとえ） 日本 中京大学社会科学研究所准教授

研究課題：放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究

中村真里絵（なかむら まりえ） 日本 岡山理科大学非常勤講師／四條畷学園短期大学非常勤講師

研究課題：世界文化遺産バンチェン遺跡と地域社会：住民の生活史の視点から

奈良雅史（なら まさし） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：宗教と公共性をめぐる人類学的研究——現代中国におけるイスラーム復興運動の事例から

西本 太（にしもと ふとし） 日本 長崎大学大学院国際健康開発研究科助教

研究課題：ラオス農村社会の人口変化に関する人類学研究

長谷川 清（はせがわ きよし） 日本 文教大学文学部教授

研究課題：資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から

比嘉夏子（ひが なつこ） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究：ポリネシアにおける贈与の全体性

廣川昌嘉（ひろかわ まさかず） 日本 アイヌ彫刻家

研究課題：彫刻と刺しゅうのアイヌ文様の相違について

福岡まどか（ふくおか まどか） 日本 大阪大学大学院人間科学研究科准教授

研究課題：東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化

藤井龍彦（ふじい たつひこ） 日本 国立民族学博物館名誉教授／総合研究大学院大学学融合推進センター特任教授

研究課題：総研大文化科学研究科「学術資料マネジメント教育プログラム開発によるグローバルな人文研究者の養成機能強化」におけるプログラム開発事業

藤倉康子（ふじくら やすこ） 日本 The New School for Social Research (USA) Ph. D.

研究課題：ネパールにおける「家族」をめぐる政治と周縁性の人類学的研究

堀田あゆみ（ほった あゆみ） 日本 滋賀県立大学人間文化学部非常勤講師

研究課題：モンゴル遊牧民のモノをめぐる文化研究

前島訓子（まえじま のりこ） 日本 椋山女学園大学人間関係学部現代マネジメント学部非常勤講師／鈴鹿工業高等専門学校非常勤講師／岐阜大学地域科学部非常勤講師／愛知大学国際コミュニケーション学部非常勤講師

研究課題：インドにおける「聖地」の比較研究

松岡葉月（まつおか はつき） 日本

研究課題：博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究

松川孝祐（まつかわ こうすけ） 日本 青山学院大学経営学部非常勤講師
研究課題：ミシュテク語系トーン言語の比較研究

松嶋 健（まつしま たけし） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：社会的なるものの生態学——イタリアの社会協同組合を軸とした統治と連帯の人類学的研究

松田有紀子（まつだ ゆきこ） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：花街の担い手コミュニティの日常的実践に関する歴史人類学的研究

松平勇二（まつひら ゆうじ） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：シヨナ音楽文化と憑依儀礼の政治・宗教人類学的研究

宮本万里（みやもと まり） 日本 人間文化研究機構地域研究推進センター研究員／国立民族学博物館現代インド地域研究拠点拠点研究員／英国アカデミー Newton International Fellow
研究課題：現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究

森田剛光（もりた たけみつ） 日本 公益財団法人日本ネパール協会関西支部事務局長
研究課題：滞日ネパール人の生活実践と労働動態の研究

矢野原佑史（やのはら ゆうし） 日本 京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員
研究課題：知識・経験・想像の共有を目指す映像人類学

山崎浩平（やまざき こうへい） 日本
研究課題：インド・ヒジュラ社会における共同性と移動の人類学研究

山本文子（やまもと あやこ） 日本 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位修得退学
研究課題：現代のミャンマー・ヤンゴンにおける精霊信仰の民族誌的研究

藪中剛司（やぶなか たけし） 日本 新ひだか町教育委員会社会教育課文化財グループ主幹
研究課題：アイヌ民具の中にみられる特徴的な漆器資料の分析

吉江貴文（よしえ たかふみ） 日本 広島市立大学国際学部准教授
研究課題：近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開

吉田ゆか子（よしだ ゆかこ） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：バリ島の「障害」のある役者たちの演劇実践——遊戯性・あいだ性・日常との連続性

吉本康子（よしもと やすこ） 日本 神戸学院大学非常勤講師／園田学園女子大学非常勤講師／放送大学非常勤講師
研究課題：チャム系住民とイスラームとの関係に関する地域間比較研究

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

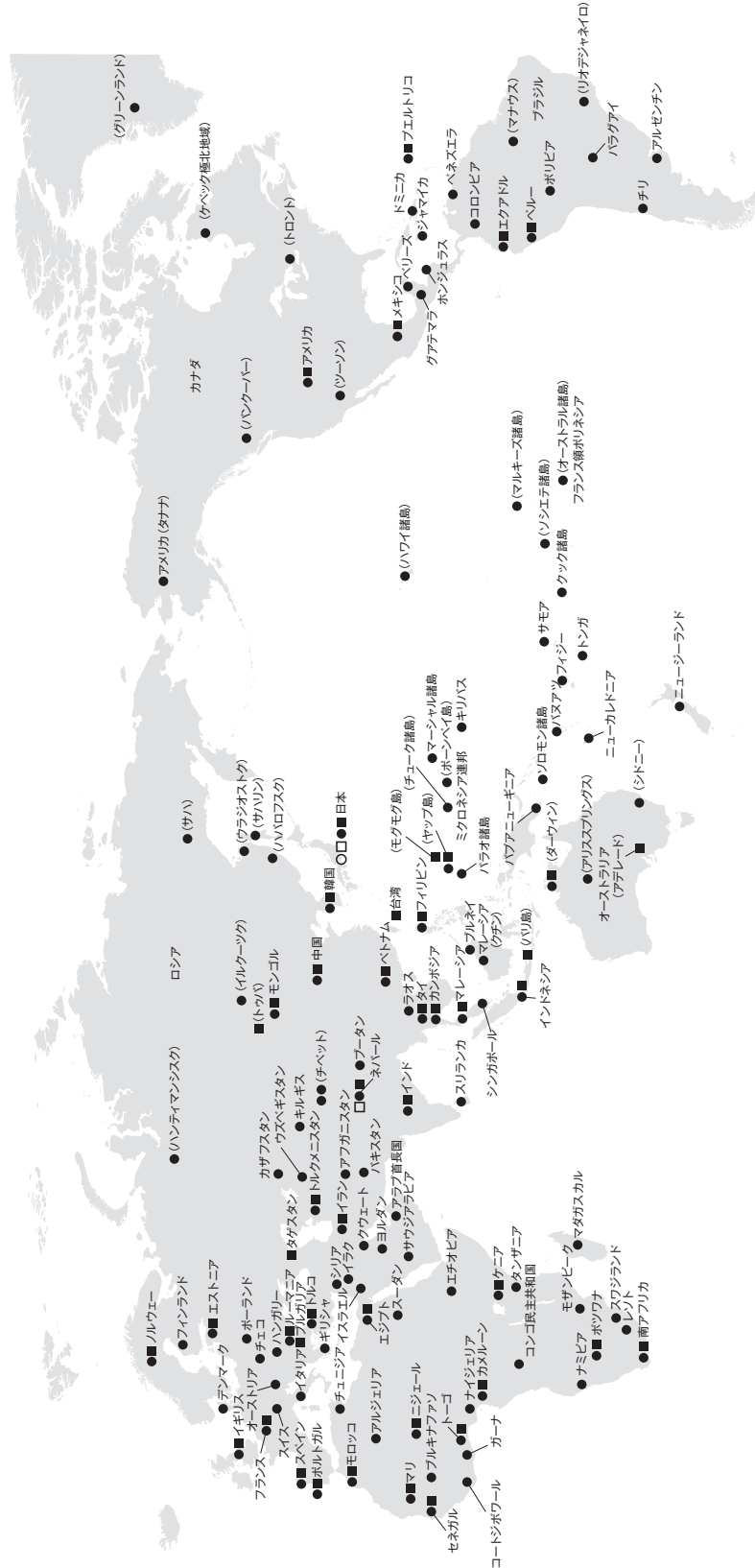
特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけでなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2015年度は、国立大学1人、公立大学4人、私立大学4人、計9人の大学院生を受け入れた。

2-6 データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

● 標本資料収集および映像取材地域



- 2015年度までの標本資料調査・収集地域
- 2016年度の標本資料調査・収集計画地域
- 2015年度までの映像取材地域
- 2016年度の映像取材計画地域

●標本資料の収集・利用状況

•2016年3月31日現在の収蔵資料数

海外資料／178,465点 (未登録資料含む) 国内資料／163,686点 (未登録資料含む) 総点数／342,151点 (未登録資料含む)

•大学・博物館等への貸し出し

総点数／1,075点

●映像音響資料の収集・利用状況

•取材

笹原亮二 愛媛県今治市、秋田県潟上市、千葉県香取郡・茨城県龍ヶ崎市、神奈川県川崎市、岩手県大船渡市
日本各地の軽業系民俗芸能

————— 2015年5月3日～5月5日、7月6日～7月8日、7月26日～7月28日、
10月4日～10月5日、10月30日～10月31日

寺田吉孝 大阪府大阪市・東京都葛飾区・荒川区、東京都小平市 在日コリアン音楽の現状

————— 2015年6月8日、6月21日、11月8日、12月25日～12月27日、
2016年1月31日、3月24日～3月25日

南 真木人 ネパール ネパール関連のビデオテーク番組制作

————— 2016年1月12日～1月25日

•2016年3月現在の収蔵資料数

映像資料／8,009点 音響資料／62,651点 総点数／70,660点

•資料の利用

利用総件数／135件 (内、大学32件) 資料利用総点数 678点 (内、大学172点)

館内利用など

利用件数／69件 資料利用点数／349点

特別利用 (館外での上映・試聴など)

利用件数／66件 資料利用点数／329点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2015年度図書室の活動

1. 利用者サービス

1) 4年ぶりに図書システムを更新しOPAC (蔵書検索) 等が新しく使いやすくなり、利用者が求める資料へより早くアクセスできるようになった。

2. 利用者講習会の開催——教育・研究支援

- 1) 総研大新入生ガイダンス
- 2) 博物館学コース (JICA) オリエンテーション
- 3) 若手研究者奨励セミナー 等
* 随時受付のツアーも、実施している。

3. 資料整備関係

- 1) 遡及入力を引き続き実施し、約10,000冊を登録した。
- 2) 研究業績棚の点検および整理業務は、207件の整理を行った。
- 3) 昨年度より5年計画で開始した蔵書実査 (3年目) として、書庫全体における不明資料の再調査に加えて、雑誌 (1層) 約6万冊に「カラーバーコード」を貼付し、総計6万2千冊の蔵書実査を行った。

4. 施設整備

- 1) マイクロリーダーを新たに1台整備した。
- 2) マイクロリーダー用27インチ縦型モニターを2台整備した。
- 3) マイクロリーダー用A3対応プリンターを整備した。

5. 広報、社会貢献その他

1) 「みんぱく図書室ニュース」を月に一度発行し、図書室の情報提供を行った。

2) 中学生の職場体験学習受入れ。

箕面市立第五中学校 (2015年10月28日 2年生女子3名)

吹田市立竹見台中学校 (2015年11月11日 2年生女子2名)

茨木市立豊川中学校 (2015年11月11日 2年生男子1名)

箕面市立第一中学校 (2015年11月18日 2年生男子2名)

●2015年度新規受入数

日本語図書	2,020点	外国語図書	2,883点		
AV資料他	100点	製本雑誌	692点	合計	5,695点

●2015年3月末現在の収蔵図書数

日本語図書	268,538点	外国語図書	396,892点	合計	665,430点
日本語雑誌	10,141種	外国語雑誌	6,874種	合計	17,015種
HRAF	385ファイル	HRAF原典(テキスト)	7,141冊		

●利用状況(2015年度)

入室者	全体	12,444人
	館外者	1,663人
時間外入室者		112人
うち日曜、祝日		27人
貸出	図書	11,437冊
	雑誌	497冊
うち館外貸出図書		3,500冊
HRAF利用受付		4件
		(カウンター受付件数)

文献複写	受付	国内(うち謝絶)	1,686 (218)件
		国外(うち謝絶)	65 (36)件
	来室*	4,580件	
依頼	国内	250 (18)件	
	国外	18 (3)件	
現物貸借	受付	国内	788 (34)件
		国内	267 (14)件
	依頼	国外	3 (0)件
事項調査	受付	51件	

*うち大学等の機関1,353件

民族学資料共同利用窓口

本館の所蔵する民族学資料は多岐に渡り、館内外における諸分野の研究や教育、他の博物館への貸し付けなどを通して社会に還元し利用されるためには、各種問い合わせに効率よく対応する必要があった。そうした観点から、2006年度から「民族学資料共同利用窓口」が設置された。

2015年度の問い合わせ利用件数は、290件であった。

問い合わせ者別	(件)
教員(大学)	40
大学院生	6
大学生	11
教員(小・中・高)	2
学生(小・中・高)	0
博物館・美術館関係	14
図書館	9
教育・研究機関	1
マスコミ関係	5
会社・団体	60
一般	68
民博教職員	74
計	290

問い合わせ者の所属機関別	(件)	
公的機関	大学・大学図書館	62
	博物館・美術館	23
	小・中・高	2
	その他教育機関	0
	研究機関	0
	公共図書館	5
	地方公共団体	18
	各種団体	1
	研究機関	0
民間	会社	40
	団体	7
	館外	69
個人	館内	63
	不明	0
	計	290

資料の利用目的

(件)

調査・研究	研究*1	69
	論文作成	6
	学習*2	0
	図書館から	8
	授業で利用	36
	その他	48
	小計	167
館内利用	刊行物作成	1
	館の事業	17
	参考資料	0
	資料の複製	5
	小計	23

業務用	展示用	38
	番組制作	9
	出版物作製	23
	参考資料	20
	入手方法	2
	その他	4
	小計	96
その他	寄贈申出	4
	その他	1
	小計	5
合計		291

*1 大学生以上の調査を「研究」とする

*2 高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築事業

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、大内青琥、桂米之助、鹿野忠雄、菊沢季生、篠田統、杉浦健一、土方久功、馬淵東一、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ、松尾三憲旧蔵絵葉書コレクションなどの資料リスト作成等を行い、その成果を順次公開している。

2015年度は、昨年度に引き続き既存アーカイブズの整理作業を行い、梅棹忠夫アーカイブの権利処理に関する覚書を作成するとともに、泉靖一アーカイブの紙資料リストおよび岩本公夫アーカイブの写真資料リストを一般公開した。また、沖守弘・インド民族文化資料の「紙資料」は一覧リストを、「写真資料」はデータベースを作成した。

現在、リストを公開し、利用に供しているアーカイブは13件である。2015年度の利用状況は閲覧5件、特別利用2件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

●標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2014年度までの作成件数 278,019

2015年度の作成件数 1,521

2015年度のアクセス件数 52,030

●標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2014年度までの作成件数 57,724

2015年度の作成件数 3,854

2015年度のアクセス件数 4,881

- 標本資料記事索引

本館関連出版物から所蔵標本資料の解説部分を抽出し、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。

2014年度までの作成件数	56,440
2015年度の作成件数	2,509
2015年度のアクセス件数	4,205

- 韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあつたすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。

2014年度までの作成件数	7,827
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	4,791

- ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）

宣教師であり神学博士でもあつたジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	2,992
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	2,258

- 映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD など映像資料の情報。

2014年度までの作成件数	7,966
2015年度の作成件数	43
2015年度のアクセス件数	4,473

- ビデオテーク

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。

2014年度までの作成件数	710
2015年度の作成件数	30
2015年度のアクセス件数	2,288

- 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2014年度までの作成件数	849
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	326

- ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	3,879
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	1,301

- 松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	170
2015年度の作成件数	1
2015年度のアクセス件数	1,124

- 音響資料目録

本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。

2014年度までの作成件数	62,651
2015年度の作成件数	0

2015年度のアクセス件数 976

• 音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。

2014年度までの作成件数 346,772

2015年度の作成件数 5,030

2015年度のアクセス件数 493

• 図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。

2014年度までの作成件数 640,781

2015年度の作成件数 4,882

2015年度のアクセス件数 226,577

• 梅棹忠夫著作目録（1934～）

梅棹忠夫本館初代館長の論文・著書から本の帯の推薦文まで、あらゆる著作を網羅した目録情報。

2014年度までの作成件数 6,504

2015年度の作成件数 90

2015年度のアクセス件数 2,643

• 中西コレクション——世界の文字資料——

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

2014年度までの作成件数 2,729

2015年度の作成件数 0

2015年度のアクセス件数 30,377

• 吉川「シュメール語辞書」

吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2014年度までの作成件数 33,450語（40,596頁）

2015年度の作成件数 0

2015年度のアクセス件数 310

• Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）

Lawrence A. Reid氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2014年度までの作成件数 7,637

2015年度の作成件数 0

2015年度のアクセス件数 498

• 日本昔話資料（稲田浩二コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。音声は館内限定公開。

2014年度までの作成件数 3,696

2015年度の作成件数 0

2015年度のアクセス件数 922

• rGyalrongic Languages（ギャロン系諸語）[英語、中国語]

長野泰彦本館名誉教授と Marielle Prins 博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース（音声あり）。81の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200文例を収録している。

2014年度までの作成件数 39,826語（文例：15,706件）

2015年度の作成件数 0

2015年度のアクセス件数 11,093

- 衣服・アクセサリ

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	23,733
2015年度の作成件数	1,504
2015年度のアクセス件数	241,27

- 身装文献

身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2) 服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。

2014年度までの作成件数	165,534
2015年度の作成件数	4,581
2015年度のアクセス件数	11,063

- 近代日本の身装電子年表

洋装がまだ日本に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2014年度までの作成件数	10,049
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	2,164

- 館内で利用できるデータベース

- 標本資料詳細情報（館内専用）

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2014年度までの作成件数	264,406
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	40,535

- カナダ先住民版画

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち——カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2014年度までの作成件数	158
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	80

- 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2014年度までの作成件数	849
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	306

- 朝枝利男コレクション

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	3,966
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	62

- タイ民族誌映像——精霊ダンス——

田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2014年度までの作成件数	10,082
---------------	--------

2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	31

● 東南アジア稲作民族文化総合調査団写真

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	4,393
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	28

● オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真

小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀式から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	7,999
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	224

● 西北ネパール及びマナスル写真

「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2014年度までの作成件数	620
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	95

● 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）と「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	33,690
2015年度の作成件数	8,370
2015年度のアクセス件数	5,471

● 梅棹忠夫写真コレクション

梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	35,420
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	6,218

● 日本昔話資料（稲田コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。

2014年度までの作成件数	3,696
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	55

● 国内資料調査報告集

日本国内における、1) 民具などの標本資料類の所在、2) 伝統技術伝承者の所在、3) 民族・民俗映像記録の所在、4) 民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。

2014年度までの作成件数	21,373
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	37

● 2015年度に館外公開されたデータベース

国立民族学博物館所蔵 京都大学学術調査隊写真コレクション（2016年3月28日公開）

● 2015年度に館内公開されたデータベース

身装画像データベース「近代日本の身装文化」（2016年1月7日公開）

沖守弘インド写真データベース（2016年3月14日公開）

2-7 みんなく施設の利用

博物館施設の利用状況

●国立民族学博物館（展示場）を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

愛知県立大学（16）、上田安子服飾専門学校（35）、桜花学園大学（11）、追手門学院大学（319）、大阪大学（78）、大阪市立大学（6）、大阪大谷大学（90）、大阪学院大学（64）、大阪教育大学（93）、大阪芸術大学（97）、大阪工業大学（14）、大阪国際大学（5）、大阪産業大学（58）、大阪樟蔭女子大学（44）、大阪成蹊大学（40）、大阪総合デザイン専門学校（166）、大阪ハイテクノロジー専門学校（49）、大阪美術専門学校（4）、大阪府立大学（15）、大阪文化国際学校（14）、大阪文化服装学院（23）、大阪モード学園（53）、大阪YWCA専門学校（71）、大阪YMCA学院（81）、岡山理科大学（9）、沖縄県立芸術大学（9）、神奈川大学（7）、金沢大学（8）、関西大学（48）、関西外語専門学校（40）、関西学院大学（23）、関東学院大学（11）、京都大学（26）、京都教育大学（10）、京都光華女子大学（7）、京都精華大学（114）、京都西山短期大学（146）、京都造形芸術大学（103）、京都橘大学（138）、京都ノートルダム女子大学（7）、京都府立大学（33）、京都市立芸術大学（44）、近畿大学（75）、慶應義塾大学（13）、甲南大学（107）、甲南女子大学（32）、神戸大学（86）、神戸大学大学院（31）、学校法人神戸学園専門学校アートカレッジ神戸（12）、神戸芸術工科大学（16）、神戸国際大学（13）、神戸女学院大学（84）、神戸松蔭女子学院大学（10）、神戸女子大学（52）、さくらサイエンスプラン（神戸大学大学院）（12）、札幌大谷大学（5）、滋賀大学大学院（6）、学校法人自由学園（10）、秀明大学（4）、上越教育大学（4）、杉野服飾大学（93）、駿台観光&外語ビジネス専門学校（4）、成安造形大学（56）、成蹊大学（5）、千里金蘭大学（60）、相愛大学（19）、園田学園女子大学（39）、宝塚大学（7）、中国学園大学（89）、日中文化芸術専門学校（16）、帝京大学（11）、帝塚山学院大学（33）、帝塚山大学（3）、東亜大学（30）、東京藝術大学（23）、東京農業大学（84）、同志社大学（8）、同志社女子大学（5）、東北学院大学（40）、東北生活文化大学（19）、学校法人東洋Fデザイン専門学校（4）、獨協大学（14）、富山大学人文学部（11）、豊中看護専門学校（41）、ドレスメーカー学院（70）、奈良大学（26）、奈良教育大学（22）、奈良女子大学（30）、日本メディカル福祉専門学校（17）、梅花女子大学（25）、阪南大学（16）、フェリス女学院大学（10）、福井大学（3）、佛教大学（6）、文化学園大学（25）、文化服装学院（51）、平安女学院大学（117）、北海学園大学（17）、武庫川女子大学（13）、桃山学院大学（3）、大和大学（60）、行岡医学技術専門学校（162）、立命館大学（50）、琉球大学（1）、龍谷大学（63）

*注 利用申請手続きを行った大学・研究機関等

●来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

- ・ 新入生歓迎研修行事「フレッシュマン・キャンプ」の企画として
- ・ 大学3年生の「児童学発展実習Ⅰ」の授業の一部
- ・ 社会言語学を対象にしたゼミで、言語展示を見学するため
- ・ ベトナム人留学生に日本における民族学の展示について学んでもらうため
- ・ 気候風土地域文化歴史等、広い視野で服飾を考える能力育成のきっかけになる事を目的として
- ・ 博物館教育論の講義
- ・ 博物館実習の一環として、民族衣装・染織品の展示方法を見るため
- ・ 博物館学芸員資格の取得を目指す学生に対し、民族学資料に触れることにより、知識を深め考察する力を磨くため
- ・ 情報メディアを展示に活用している例として、実際に展示に見て触れて体験する機会をもつため
- ・ 留学生に日本文化のセクションと日本の宗教文化に関するビデオトークを見せるため
- ・ 文化人類学の演習で日本の代表的な文化人類学館を紹介するため
- ・ 工芸基礎（1回生）の授業の一環
- ・ 世界の諸民族について知識を深めるため
- ・ 考古学、人類学のゼミでの学習を深めるため
- ・ 社会学部社会学科の学生に、人類学、民俗学、博物館学の世界にふれてもらうため
- ・ 異文化や東南アジアを学ぶ大学のセミナーで実物を見て学習するため
- ・ 学生の異文化理解のため
- ・ 文化資源マネージャー養成プログラムに所属する学生が文化資源の利活用に関心を寄せているため

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教学園大学・短期大学、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究所、千里金蘭大学、学校法人立命館（1,425）

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1) 授乳を必要とする来館者等への配慮についての取組状況

・1階ホールに授乳やオムツの取替が出来る個室（授乳室）を設置し、授乳ソファ、調乳キッチン、電気瞬間給湯器、オムツ替え台を完備し、利用者が安心して利用出来るように非常通報ボタン、扉の鍵も設置している。

2) 既存施設・設備の有効活用への取組状況

・施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を2015年度は5回開催した。

3) 施設の維持管理の取組状況

・常設展示場のうち、中央北アジア及びアイヌ文化の展示場を新構築展示施工に合わせて老朽化した床材の修繕を実施した。

・衛生的環境を確保するため、今年度も館内害虫駆除を行った。

・特別収蔵庫の環境を改善するために、壁面等を調湿出来る内装材に、また、収納容量を多く出来るよう固定棚から可動棚へ更新した。

・団体待合室の壁及び天井を更新し、利用者が気軽に利用出来る雰囲気改修した。

・セミナー室（一部）の絨毯を更新し、埃やカビの発生しにくいものに更新した。

・自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。

・安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の状況調査を行い、防災管理点検、安全巡視点検の結果と照合し、危険箇所の改善を行った。

4) 省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

・昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。

・展示場、ホール及び事務室等の点灯時間が長い場所の照明器具をLEDタイプに更新し、省エネルギー化に努めた。

・空調用冷却塔の熱交換コアを更新し、冷却効率の改善をはかり、省エネルギー化に努めた。

2-8 受賞・特許

受賞

●2015年度の職員受賞者

關 雄二 2015年8月4日 ペルー国文化功労賞

知的財産形成・特許出願など

●商標登録

商標の名称：みんぱく（ロゴ）

登録日：2015年8月7日

登録番号：第5784667号

商標の名称：ロゴマーク

登録日：2015年8月7日

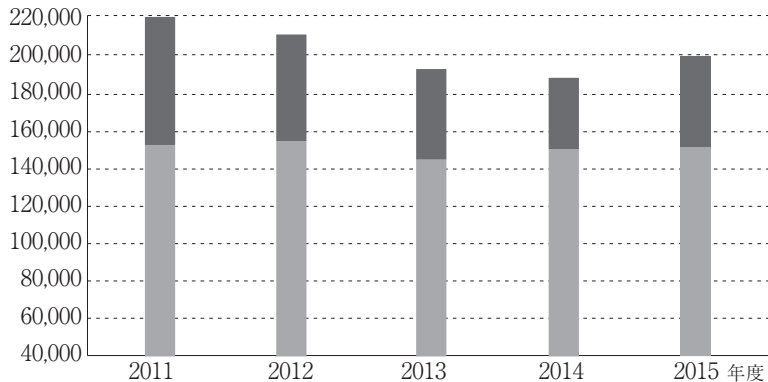
登録番号：第5784668号

3 展示

入館者数

●2015年度総観覧者数（共催展、巡回展含む） 897,352人

●入館者数（5年間。共催展、巡回展除く）



年度	個人	団体	合計
2011	152,024	67,856	219,880
2012	154,063	56,480	210,543
2013	144,263	47,978	192,241
2014	149,931	37,684	187,615
2015	153,100	46,176	199,276

本館展示

●展示専門部会

本館展示新構築にかかわる支援・連絡調整と本館展示の運営にかかわる連絡調整、ならびに特別展・企画展の企画内容の点検支援・連絡調整をおこなう組織として、文化資源運営会議のもとに展示専門部会を置く。同部会は本館展示新構築総括チームと特別展・企画展ワーキング・グループより構成する。なお、本館展示の運営・新構築にかかわる案件の全体での検討の場として、随時、本館展示プロジェクトリーダーからなる拡大展示専門部会を開催する。

●本館展示プロジェクトチーム

	リーダー	構成メンバー					(五十音順)
オセアニア展示	Peter J. Matthews	印東道子	菊澤律子	須藤健一	丹羽典生	林 勲男	
アメリカ展示	伊藤敦規	岸上伸啓 關 雄二	齋藤 晃 八木百合子*	齋藤玲子	鈴木七美	鈴木 紀	
ヨーロッパ展示	宇田川妙子	新免光比呂	森 明子				
アフリカ展示	三島禎子	飯田 卓	池谷和信	川瀬 慈	竹沢尚一郎	吉田憲司	
西アジア展示	山中由里子	上羽陽子	菅瀬晶子	西尾哲夫			
音楽展示	福岡正太	川瀬 慈	笹原亮二	寺田吉孝			
言語展示	菊澤律子	西尾哲夫	吉岡 乾	相良啓子*			
南アジア展示	三尾 稔	上羽陽子 吉岡 乾	杉本良男 竹村嘉晃*	寺田吉孝 豊山亜希*	松尾瑞穂	南 真木人	
東南アジア展示	信田敏宏	樫永真佐夫	佐藤浩司	平井京之介	福岡正太		
中央・北アジア展示	藤本透子	池谷和信	佐々木史郎	寺村裕史	小長谷有紀*		
東アジア展示（朝鮮半島の文化）	太田心平	朝倉敏夫	林 史樹*				
東アジア展示（中国地域の文化）	横山廣子	河合洋尚 陳 天璽*	韓 敏	塚田誠之	野林厚志	小長谷有紀*	
東アジア展示（アイヌの文化）	齋藤玲子	伊藤敦規	岸上伸啓	佐々木史郎	吉田憲司	北原次郎太*	
東アジア展示（日本の文化）	日高真吾	池谷和信 野林厚志	笹原亮二 廣瀬浩二郎	菅瀬晶子 南 真木人	出口正之	寺村裕史	
情報・インフォメーション	丸川雄三	飯田 卓 廣瀬浩二郎	伊藤敦規 福岡正太	金田純平*	寺村裕史	野林厚志	
イントロダクション展示	日高真吾	齋藤玲子	山中由里子	吉田憲司			

*併任教授、客員教員、特別客員教員、機関研究員等を示す

●特別展・企画展・ワーキンググループ、本館展示新構築総括チーム等

飯田 卓 上羽陽子 齋藤玲子 日高真吾 南 真木人 山中由里子 吉田憲司

●本館展示の新構築（展示チームは一般公開日現在）

アフリカ展示

一般公開 2009年 3月26日～

アフリカ展示チームリーダー 飯田 卓

アフリカ展示チームメンバー（館内）池谷和信 川瀬 慈 竹沢尚一郎 三島禎子 吉田憲司

内容

人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきた。私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中の、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかならない。新たに構築したアフリカ展示では、人びとの「歴史を掘り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを4つの「動詞」（憩う・働く・装う・祈る）のコーナーに分けて紹介する。

西アジア展示

一般公開 2009年 3月26日～

西アジア展示チームリーダー 山中由里子

西アジア展示チームメンバー（館内）上羽陽子 菅瀬晶子 西尾哲夫

内容

中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク（日出ずる地）とよび、マグリブ（日没する地）と呼ばれる北アフリカと深い関係を保ってきた。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきた。多くの住民はムスリムだが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもある。新たに構築した西アジア展示では、地域規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを紹介する。

音楽展示

一般公開 2010年 3月25日～

音楽展示チームリーダー 福岡正太

音楽展示チームメンバー（館内）川瀬 慈 笹原亮二 寺田吉孝

内容

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきた。また、神仏や精霊など見ることのできない存在と交わってきた。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の「太鼓」、「ゴング」、「チャルメラ」、「ギター」等の例を通して考える。

言語展示

一般公開 2010年 3月25日～

音楽展示チームリーダー 庄司博史

音楽展示チームメンバー（館内）菊澤律子 西尾哲夫 八杉佳穂

内容

音声や身ぶりを媒体とすることばは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を伝えることができる。文化の多様性を反映すると同時に、人間のもつ認知能力や創造性を生み出すことばは、人類のもつかけがえのない資産である。言語展示では、「言葉を構成する要素」、「言語の多様性」、「世界の文字」というテーマを中心に構成する。

オセアニア展示

一般公開 2011年 3月17日～

オセアニア展示チームリーダー Peter J. Matthews

オセアニア展示チームメンバー（館内）印東道子 菊澤律子 久保正敏 小林繁樹 須藤健一 丹羽典生
林 勲男

内容

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在している。そこには、発達した航海術をもち、根柢農耕を営む人々が暮らしてきた。「移動と拡散」、「海での暮らし」、「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示している。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介する。

アメリカ展示

一般公開 2011年3月17日～

アメリカ展示チームリーダー 鈴木 紀

アメリカ展示チームメンバー (館内) 伊藤敦規 岸上伸啓 齋藤玲子 鈴木七美 齋藤 晃 関 雄二
八杉佳穂

内容

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られる。人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできた。一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していった。ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の資源に現代的価値を見出そうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介する。

ヨーロッパ展示

一般公開 2012年3月15日～

ヨーロッパ展示チームリーダー 宇田川妙子

ヨーロッパ展示チームメンバー (館内) 庄司博史 新免光比呂 森 明子

内容

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植した。現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、彼らの文化も社会の一部となりつつある。ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示している。

情報・インフォメーション

一般公開 2012年3月15日～

情報・インフォメーションチームリーダー 野林厚志

情報・インフォメーションチームメンバー (館内) 飯田 卓 伊藤敦規 田村克己 廣瀬浩二郎 福岡正太

内容

展示資料の情報を検索して調べることのできる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の3つのコーナーを通して、みんなの研究や展示をより詳しく知ることができる。展示場で見た資料についてもっと知りたい、みんなの研究者って何を調査しているの、モノと身近に接してみたいという探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用いただきたい。

東アジア展示 (日本の文化)

一般公開 「祭りと芸能」「日々の暮らし」 2013年3月22日～

「沖縄の暮らし」「多みんぞくニホン」 2014年3月20日～

東アジア展示 (日本の文化) チームリーダー 日高真吾

東アジア展示 (日本の文化) チームメンバー (館内) 池谷和信 近藤雅樹 笹原亮二 庄司博史 菅瀬晶子
野林厚志 出口正之

内容

北海道から沖縄県まで、南北に細長い日本列島は、多様な自然に恵まれています。こうした環境のなかで、隣接する諸文化と影響しあいながら、さまざまな地域文化を展開してきた。また、近年では多くの外国人が私たちの隣人として生活をともにしている。ここでは、「祭りと芸能」、「日々の暮らし」、「沖縄の暮らし」、「多みんぞく

ニホン」という4つの角度から、日本文化の様相を展示している。

東アジア展示（朝鮮半島の文化）

一般公開 2014年3月20日～
東アジア展示（朝鮮半島の文化）チームリーダー 朝倉敏夫
東アジア展示（朝鮮半島の文化）チームメンバー （館内）太田心平

内容

朝鮮半島の人びとは、外部の民族から影響を受けつつも、独自の文化を育んできた。有史以前は東シベリアの諸民族から、その後は中国から取り入れた文化要素を、独自のものに再編し、世界に例を見ないほど高度に統合された文化を獲得してきた。近代には日本に植民地支配され、独立後にはふたつの分断国家として急速な近代化を進めた。そして現代には、積極的に世界に進出する韓国人や、コリア系の海外生活者の姿も見られる。こうした文化の歴史的な重なりや躍動性を、精神世界、衣食住、あそびと知をテーマに紹介する。

東アジア展示（中国地域の文化）

一般公開 2014年3月20日～
東アジア展示（中国地域の文化）チームリーダー 塚田誠之
東アジア展示（中国地域の文化）チームメンバー （館内）韓 敏 小長谷有紀* 田村克己 野林厚志
横山廣子

内容

中国地域では、広大な面積と高低差のある地形がうみだす多様な自然環境のもと、さまざまな民族文化が育まれてきた。漢族が人口の90%以上を占め、平野部を中心に全国に居住している。大陸の55の少数民族は、おもに西南、西北、東北地方の高地や草原に居住しており、台湾には漢族のほか先住のオーストロネシア系民族が居住している。また、世界各地に、中国を故郷とする華僑・華人がくらしている。多様な生活環境から生みだされたさまざまな民族の文化を、歴史や地域性をふまえ、生業、装い、楽器、住居、工芸、宗教と文字、漢族の婚礼や祖先祭祀、台湾の原住民族、華僑・華人をテーマに紹介する。

南アジア展示

一般公開 2015年3月19日～
南アジア展示チームリーダー 三尾 稔
南アジア展示チームメンバー （館内）上羽陽子 杉本良男 寺田吉孝 松尾瑞穂 南 真木人 吉岡 乾
竹村嘉晃* 豊山亜希*

内容

南アジア地域は、北部の山岳地帯から西はアラビア海沿岸、東はベンガル湾沿岸にいたるさまざまな自然環境のもと、多様な宗教や文化、生活様式をもつ人びとが共存しあう知恵を育んできた。経済発展が著しい現代においても、その知恵は保たれている。この展示では、宗教文化や生業・工芸の多様性、都市を中心とした活気あふれる大衆文化、またグローバル化のなかで花ひらく染織文化のすがたを紹介する。

東南アジア展示

一般公開 2015年3月19日～
東南アジア展示チームリーダー 信田敏宏
東南アジア展示チームメンバー （館内）樫永真佐夫 佐藤浩司 平井京之介 福岡正太 吉田ゆか子*

内容

森と海に囲まれた東南アジア。熱帯・亜熱帯の気候にくらす人びとは、早朝の涼しい時間から働きはじめ、40度近くに達する日中は屋内でなどをして暑さをしのぐ。夕方、スクールが通り過ぎた後は、少し暑さが和らぎ、人びとは買い物や農作業に出かける。日が落ちて涼しくなると、友人や家族と屋台に出かけたり、演劇を見たりして余暇を楽しむ。本展示場では、「東南アジアの1日」をテーマに、その多彩な民族文化を紹介する。

中央・北アジア展示

一般公開 2016年6月16日～
中央・北アジア展示チームリーダー 藤本透子

中央・北アジア展示チームメンバー (館内) 池谷和信 佐々木史郎 寺村裕史 小長谷有紀*

内容

中央・北アジアは、ユーラシア大陸の北東部を占める広大な地域である。古くから東西南北をむすぶ交渉路としての役割を担い、多様な民族が行き交っていた。20世紀に社会主義を経験した後、市場経済に移行し、グローバル化の波にさらされながら伝統を再評価する動きがみられる。「自然との共生」、「社会主義の時代」というふたつの共通テーマをふまえて、「中央アジア」、「モンゴル」、「シベリア・極北」の3つの地域に生きる人びとの今を紹介する。

アイヌの文化展示

一般公開 2016年6月16日～

アイヌの文化展示チームリーダー 齋藤玲子

アイヌの文化展示チームメンバー (館内) 伊藤敦規 岸上伸啓 佐々木史郎 吉田憲司 北原次郎太*

内容

アイヌは、北海道を中心に日本列島北部とその周辺に暮らし、寒冷な自然環境のもとで独自の文化をはぐくんできた先住民族である。江戸時代に幕府による支配が始まり、明治時代に同化がすすめられると、アイヌは差別を受け生活に困るようになった。しかし近年、日本政府はその歴史的事実を認め、アイヌ民族を尊重した政策に取り組みはじめた。ここでは、伝統を継承しつつ、あらたな文化を創造する人びとの姿を紹介する。

*併任教授、客員教員、特別客員教員、機関研究員等を示す。

特別展示・企画展示など

●特別展

日韓国交正常化50周年記念 特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」(国際連携展示)

会期 2015年8月27日～11月10日

会場 特別展示館

主催 国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

共催 大阪工業大学、京都造形芸術大学、韓国藝術総合大学

協力 大阪韓国文化院、一般財団法人千里文化財団

助成 韓国国際交流財団、日本万国博覧会記念基金(公益財団法人関西・大阪21世紀協会)、公益財団法人日韓文化交流基金

入場者 29,834人

実行委員長 朝倉敏夫

実行委員 (館内) 丸川雄三、金昌鎬(外国人研究員)、林 史樹(特別客員教員)

(館外) 守屋亜記子(女子栄養大学)、李 エリア(早稲田大学)、奇 亮(韓国国立民俗博物館)、金 永才(韓国国立民俗博物館)、安 廷允(韓国国立民俗博物館)

韓国展 韓日国交正常化50周年記念 共同展「飯膳の交わり」

会期 2015年12月9日～2016年3月6日

会場 韓国国立民俗博物館

主催 韓国国立民俗博物館、国立民族学博物館

内容

日韓国交正常化50周年を記念して、「韓国と日本の食文化と博物館」をテーマとした特別展を韓国国立民俗博物館と共同で開催した。韓国の「キムジャン(キムチ作りの文化)」と、日本の「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録され、両国において「食」に関する文化的な関心も高まっているなか、両国の50年間の「食」の変化と、「食」の背景にある文化の共通性と差異を探ることとし、モノだけでなく、最先端の情報技術、「食」のワークショップをとおして、観覧者が体感できる「食」の展示をおこなった。

●企画展示

企画展「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」

会期 2015年5月21日～7月21日

- 会場 企画展示場
 主催 国立民族学博物館
 共催 新潟県立歴史博物館 横浜ユーラシア文化館
 協力 NPO ユーラシアンクラブ、北方ユーラシア学会、NPO アンコール・ワット拓本保存会、ロシア連邦ハバロフスク地方シカチ・アリヤン村、NPO メデ・センター、ロシア北方先住民族協会ハバロフスク地方支部
 後援 在大阪ロシア連邦総領事館、在新潟ロシア連邦総領事館
 実行委員長 佐々木史郎
 実行委員 (館外) 浜田晋介(日本大学)、宮尾 亨(新潟県立歴史博物館)、畠山 禎(横浜ユーラシア文化館)、井出晃憲(京都大学)

内容

本企画展では、ロシア連邦ハバロフスク地方にくらす先住民族ナナイの村落であるシカチ・アリヤン村に現存する岩面画について拓本と写真を使って、地元の少数民族ナナイの人びとが岩面画と自分たちの文化とをどのように結びつけてきたのかを、村の伝承と民族資料から紹介した。また、以下のとおり、新潟県立歴史博物館、横浜ユーラシア文化館において巡回展をおこなった。

巡回展「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」

- 主催 国立民族学博物館、新潟県立歴史博物館、横浜ユーラシア文化館
 会期 2015年9月19日～10月25日 新潟県立歴史博物館 企画展示室
 2015年10月31日～2016年1月11日 横浜ユーラシア文化館 3階企画展示室ほか

●巡回展示

巡回展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

- 会期 2015年6月27日～8月23日
 会場 郡山市立美術館 企画展示室
 担当者 吉田憲司

内容

2014年2月～6月に国立新美術館にて、また、同年9月～12月に本館特別展として開催した「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」展が、福島県の郡山市立美術館へ巡回した。世界各地の神像や仮面をはじめ、民族衣装、墓標、玩具など約360点の資料が選出され、それらを地域や時代などに分類するのではなく、人びとが作り出したイメージに備わる造形性や効果、機能に着目して展示した。

巡回展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」(人間文化研究機構連携展示)

- 会期 2015年9月5日～11月8日
 会場 北海道博物館 特別展示室
 会期 2015年12月15日～2016年2月7日
 会場 国立歴史民俗博物館 総合展示第3展示室副室・第4展示室副室
 担当者 日高真吾

内容

極彩色の衣装に身を包み立ち並ぶ、12人のアイヌの有力者たち。松前藩家老を務めた画人、蠣崎波響が寛政2年(1790年)に描いた「夷酋列像」は、時の天皇や、諸藩の大名たちの賞賛を受け、多くの模写を生んだ。蠣崎波響筆のブザンソン美術考古博物館所蔵本と国内各地の諸本が、はじめて一堂に会した。絵をめぐる人、交叉する物、そして日本の内に胎動し始めた外の「世界」。18世紀から現在に続く、蝦夷地=北海道イメージを見渡した。なお、本展は、2016年2月25日～5月10日に本館で特別展として開催される。

巡回展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」(人間文化研究機構連携展示)

- 会期 2015年10月17日～11月23日
 会場 東京藝術大学大学美術館 本館展示室3
 担当者 吉田憲司
 主催 国立民族学博物館、東京藝術大学

内容

モザンビークでは、1975年の独立以来1992年まで続いた内戦のために外国から大量の武器が供給され、戦争終結後も住民のもとに残された。1995年、この武器を農具や自転車と交換し、武装解除を進める「銃を鋤に」というプロジェクトが開始される。人々の手元にあった武器は、鋤や犁、自転車、ミシンなどの生活用具と交換されて平和な生活の助けとなり、一方回収された武器は細断され、アーティストの手によって作品に生まれ変わるようになった。今、破壊の道具はモザンビークの人々のメッセージを伝える作品となって、モザンビーク国内のみならず、大英博物館をはじめとする多くの海外の美術館・博物館に収蔵され、平和への切なる願いを発信している。本展では、国立民族学博物館が収集した作品と、「銃を鋤に」のプロジェクトを支援してきたNPO法人えひめグローバルネットワークが所蔵する作品を展示し、アートに結実した平和構築の営みを紹介した。なお、本展は、2013年に本館で開催された企画展を展開したものであった。

展示関連出版物およびプログラム

●本館展示

「国立民族学博物館展示ガイド」(第3版)

発行日 2015年6月25日

●特別展

「韓国食文化読本」

発行日 2015年8月26日

著者 朝倉敏夫、林 史樹、守屋亜記子

発行 国立民族学博物館

「夷酋列像—蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」図録

発行日 2015年9月5日

編集 北海道博物館

発行 「夷酋列像」展実行委員会、北海道新聞社

●企画展

「岩に刻まれた古代美術—アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」展解説図録

発行日 2015年5月5日

企画編集 NPOユーラシアンクラブ会長(愛川サライ代表)大野 遼

発行 NPOユーラシアンクラブ

●ビデオテープ

「江原道のソバ料理」(番組番号2813)製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

江原道の人びとの、ソバと関連した人生にまつわる話が展開する。

「自動車告祀：交通安全を願う韓国人」(番組番号2814)製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

交通安全を願う人びとの考えと、自動車告祀(安全祈願儀式)を準備する過程をみる。

「2014 韓国の初誕生祝い」(番組番号2815)製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

最新の韓国のトル(初誕生祝い)文化。その形式は産業化しているが、子どもの健康と幸福を願う父母の心は時代を超えて続いている。

“한국의 신통속, 산후조리원 (韓国の「もう一つの」産後習俗の空間—産後調理院)”(番組番号8040)製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

본 영상은 한국의 신통속, 산후조리원을 한 산모의 시각을 중심으로 담아 내었다. 또한 현대 한국의 산후조리 문화에 대한 정보를 얻을 수 있을 것이다.

“한복, 현재를 입다 (韓服、今を着る)” (番組番号8041) 製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館
본 영상은 한국의 전통 복식인 ‘한복’이 현재 우리사회에 어떠한 모습으로 나타나고 있는가를 산후조리 문화에 대한 정보를 얻을 수 있을 것이다.

“상을 시작하는 새로운 공간, 장례식장 (喪を始める新しい空間、葬礼式場)” (番組番号8042) 製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館
본 영상은 전문 장례식장에서 3일간 치러지는 한국의 현대 장례문화를 소개하기 위해서 제작되었다.

「フィリピン北部バルバラサン村の音楽とくらし」(番組番号1740) 制作監修：米野みちよ、寺田吉孝
フィリピン・ルソン島の山間部にあるバルバラサン村。村の生活に耳を傾けると、いろいろな音が聞こえてきます。

“Music in the Life of a Balbalasang Village, Northern Philippines” (番組番号3740) 制作監修：米野みちよ、寺田吉孝
The film portrays the sound environment and music-making in a small Philippine village where gongs and bamboo instruments are particularly featured.

“Musika iti Biag ti Baryo Balbalasang: iti Amianan ti Pilipinas” (番組番号8034) 制作監修：米野みちよ、寺田吉孝
The film portrays the sound environment and music-making in a small Philippine village where gongs and bamboo instruments are particularly featured.

“Lifestyle and Views of a Landlord in a West Indian Village” [Hindi version] (番組番号8035) 制作監修：三尾 稔
A Rajput landlord of Rajasthan shows his lifestyle in the manor house and talks about his ancestors and his views on contemporary village life.

“Mother Goddess Festival in a Rajasthan Village, India” [Hindi version] (番組番号8036) 制作監修：三尾 稔
The festival is held just after the rainy season every year. Villagers sacrifice goats to Mother goddess and pray for good harvest and sound health.

“Sagas Bavji : Warrior Spirits of Rajasthan, India” [Hindi version] (番組番号8037) 制作監修：三尾 稔
Rajput warriors’ spirits possess mediums and grant people’s wishes in Mewar, Rajasthan. Researchers made an interview with such a spirit.

“A Marriage in Udaipur” [Hindi version] (番組番号8038) 制作監修：三尾 稔
The process of a marriage ceremony of urban middle class Hindu in Rajasthan, India. Short interviews with the couple and their family are included.

“Holi Festival in Udaipur” [Hindi version] (番組番号8039) 制作監修：三尾 稔
Holi is a major Hindu spring festival in northern India. After burning a big fire, people enjoy merrymaking with no distinction of caste, gender and age.

「ネパールの伝統音楽パンチャイ・バージャ」(番組番号1744) 制作監修：南 真木人、寺田吉孝
婚礼において仕立師・楽師カーストの人々によって演奏される、吉祥の音楽です。衰退しつつありますが、伝統文化として見直され始めています。

「周城村の本主節：雲南省ペー族の祭り」(番組番号1741) 制作監修：横山廣子
ペー族の地域の守護神は「本主」と総称される。この村の本主は大蛇退治の英雄で、毎年、旧暦の1月に本主の祭りがおこなわれる。

「雲南省ペー族の上棟式の今」(番組番号1742) 制作監修：横山廣子

日本との類似点もあるペー族の伝統的な上棟式。家屋の素材や構造の変化による儀式の改変を経ながら、今日まで継承されている。

「安龍謝土：雲南省ペー族の家屋完成後の儀礼」(番組番号1743) 制作監修：横山廣子

「安龍謝土」は家屋の完成後、土の神をなだめ、家内安全を祈るためにおこなわれる。ペー族が伝承する中国の道教由来の儀礼。

●研究用映像資料

“Transformation of the Mother Goddess Festival in the Mewar Region, Rajasthan, India” [Hindi version]
(番組番号7237) 制作監修：三尾 稔

The festival has changed against the background of economic growth of India, resulting in clear contrast in its mode of celebration between towns and villages.

“A Hindu Marriage in Rajasthan” [Hindi version] (番組番号7238) 制作監修：三尾 稔

Documentary film of a marriage of a Hindu couple in contemporary India where the traditional values are contending with the modern ways of life.

「ネパールの婚礼」(番組番号7229) 制作監修：南 真木人、寺田吉孝

富裕なヒンドゥー教徒(司祭カースト)の結婚式。吉祥の音楽が奏でられるなか、さまざまな儀式やゲームが執り行われます。

●マルチメディア番組

「手話の世界へようこそ!!」(番組番号6054) 制作監修：菊澤律子、相良啓子、池田ますみ、庄司博史、吉岡 乾

世界ではいろいろな手話が使われており、方言もある。基本単語やお話を通して世界の手話や日本各地の手話を見てみよう。

「アリラン峠を越えていく：在日コリアン音楽の今」(番組番号6056) 制作監修：寺田吉孝、高 正子

在日コリアンが演奏する音楽は、彼らの歴史と生活を反映しています。2014年の民博研究公演に出演した3グループの演奏記録。

「ラージャスターン州メーワール地方の暮らしと信仰」(番組番号6048) 制作監修：三尾 稔

急速な経済発展の影響で変わりつつある現代インド西部の町や村の暮らし。祭礼や婚礼の様子を中心に紹介する。

「雲南省ペー族の暮らしと文化」(番組番号6047) 制作監修：横山廣子

雲南省のペー族に関して、地域の歴史と周辺民族、生活と農作業、人生儀礼、年中行事、手工芸や音楽を紹介する総合的映像民族誌。

● 「みんなく電子ガイド」プログラム数（2016年3月31日現在）

展示プロジェクト地域	プログラム数			
	日本語版	中国語版	英語版	韓国語版
オセアニア	23	23	23	23
アメリカ	27	27	27	27
ヨーロッパ	12	12	12	12
アフリカ	17	17	17	17
西アジア	16	16	16	16
南アジア	40	40	40	40
東南アジア	32	32	32	32
中央・北アジア	23	23	23	23
東アジア				
朝鮮半島の文化	47	47	47	47
中国地域の文化	39	39	39	39
アイヌの文化	8	8	8	8
日本の文化	35	35	35	35
音楽	0	0	0	0
言語	0	0	0	0
総 計	各 319			

4 国際連携と研究協力

海外研究機関との研究協力協定

国(地域)名	ペルー
相手機関名	国立サン・マルコス大学
協定書等名	国立民族学博物館とペルー・国立サン・マルコス大学との間における考古学調査と学術交流に関する協定
締結日	2005年6月14日
協定終了予定日	2020年5月17日
目的	考古学分野における共同調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流を促進する。
協定内容	パコパンパ考古学プログラム

国(地域)名	台湾
相手機関名	順益台湾原住民博物館
協定書等名	国立民族学博物館と順益台湾原住民博物館との学術協力協定書
締結日	2006年7月1日
協定終了予定日	2016年3月31日
目的	台湾原住民に関する学術調査、研究を推進する。
協定内容	・台湾原住民族の現代的動態に関わる人類学的、言語学的、歴史学的調査 ・国立民族学博物館ならびに他の博物館に収蔵されている台湾原住民族関連の資料に係る調査 ・上記に係る報告書ならびに研究誌の発行

国(地域)名	韓国
相手機関名	国立民俗博物館
協定書等名	国立民族学博物館と大韓民国国立民俗博物館との文化交流協定
締結日	2007年7月11日
協定終了予定日	2017年6月14日
目的	学術、文化交流を通して友好関係を強化し、この関係を発展させる。
協定内容	国際共同展示に係る協定 ・教職員及び研究者の交流 ・共同研究及び研究集会の実施 ・博物館の展示及び教育活動に関する協力 ・学術的情報及び出版物の交換 ・両機関で合意されたその他の事業

国(地域)名	中国
相手機関名	内蒙古大学
協定書等名	国立民族学博物館と中華人民共和国内蒙古大学との学術協力の協定
締結日	2008年9月22日
協定終了予定日	2018年7月24日
目的	相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
協定内容	・双方の教職員・研究者の交流 ・研究プロジェクトの展開 ・博物館展示品の展覧及び教育分野における協力活動 ・学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開 ・その他両機関で合意された分野における協力

国(地域)名	台湾
相手機関名	国立台北芸術大学
協定書等名	国立民族学博物館と台湾国立台北芸術大学との学術協力の協定
締結日	2009年5月15日

協定終了予定日	2019年 5月14日
目的	相互の学術交流と両者の発展を目的とした学術協力関係を築く。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・双方の教職員・研究者の交流 ・研究プロジェクトの展開 ・博物館展示品及び教育分野における協力活動 ・学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の促進 ・その他両機関で合意された分野における協力
国(地域)名	中国
相手機関名	故宮博物院
協定書等名	国立民族学博物館と中華人民共和国・故宮博物院との研究交流協定
締結日	2009年10月16日
協定終了予定日	2015年 8月27日
目的	相互理解と互酬性の原則に則り、両機関の学術研究交流を強化し、発展させる。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究に関し、両機関が合意する事業の交流・協力
国(地域)名	英国
相手機関名	エジンバラ大学
協定書等名	国立民族学博物館と英国・エジンバラ大学との研究交流協定
締結日	2010年 5月17日
協定終了予定日	2020年 5月16日
目的	相互理解と互酬性の原則に則り、両機関の学術研究交流を強化し、発展させる。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究に関し、両機関が合意する事業の交流・協力
国(地域)名	マダガスカル
相手機関名	アンタナナリヴ大学
協定書等名	国立民族学博物館およびマダガスカル国アンタナナリヴ大学の学術協力に関する協定
締結日	2010年11月22日
協定終了予定日	2016年11月21日
目的	互恵性と平等の理念のもとに、学術分野で相互に利益ある協力活動を進める。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・研究者の交換 ・共同研究プロジェクトの実施運営 ・シンポジウムや講演の開催・学術情報や資料の交換 ・互いに同意したその他の学術協力の推進
国(地域)名	ペルー
相手機関名	教皇庁立ペルーカトリカ大学
協定書等名	国立民族学博物館と教皇庁立ペルーカトリカ大学との間の学術協力の一般協定
締結日	2010年12月 1日
協定終了予定日	2016年11月28日
目的	双方の利益になる協力活動を実現するためのガイドラインを定める。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・共同の研究活動とアウトリーチ活動 ・講演会とシンポジウムの共同策定 ・教員の交流 ・学術的または科学的資料、および双方の利益となる刊行物の交換 ・その他、両者が互いに合意し、双方にとって有益な活動
国(地域)名	ロシア
相手機関名	ロシア民族学博物館
協定書等名	国立民族学博物館とロシア民族学博物館との間の博物館学及び文化研究の分野における学術協力

	に関する協定
締結日	2010年12月3日
協定終了予定日	2015年12月2日
目的	博物館学、調査研究、文化財保護の各分野における協力・相互支援関係を樹立する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 両博物館が保有する歴史的、文化的財産の保存状態改善を目的としたプロジェクトの支援 ・ 両博物館の研究者交流 ・ ロシア民族学博物館が実施するシベリア、中央アジア、極東、北コーカサスでの民族学的フィールドワークへの民博の研究者の参加 ・ 両博物館が指名する経理、データベース構築、収集品の考証、資料の分類、保存科学などの諸分野の専門家の交流
国(地域)名	ロシア
相手機関名	ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所
協定書等名	国立民族学博物館とロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所との間の協定
締結日	2011年6月1日
協定終了予定日	2016年5月31日
目的	考古学、人類学、及び民族学の共同研究を目的とする。
協定内容	<p>2011年から2016年にわたって行われる考古学、人類学、及び民族学の共同研究を本協定の対象とし、下記の事項を実現させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 考古学、民族学の分野における共同調査 ・ ロシアと日本における共同の研究集会 ・ 研究成果の共同出版
国(地域)名	ロシア
相手機関名	ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）
協定書等名	国立民族学博物館とロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）との間の協力および文化交流に関する協定
締結日	2011年10月21日
協定終了予定日	2016年10月20日
目的	学術、文化の両分野において相互交流および協力関係を発展させる。
協定内容	<p>野外調査および学術・理論的研究、博物館関連活動の分野における交流を以下の項目について実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員の交流 ・ 野外調査、学術・理論的研究、学術集会の共同実施 ・ 展示および教育プロジェクトの共同実施 ・ 学術情報および刊行物の交換 ・ 両博物館の合意による、その他のあらゆる学術分野の活動
国(地域)名	ベトナム
相手機関名	生態学生物資源研究所
協定書等名	国立民族学博物館とベトナム生態学生物資源研究所の学術協力に関する協定
締結日	2012年3月22日
協定終了予定日	2017年3月21日
目的	相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術研究および交流の強化、発展のために本契約を締結する。
協定内容	共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進
国(地域)名	米国
相手機関名	アシウィ・アワン博物館・遺産センター

協定書等名	国立民族学博物館とアシウィ・アワン博物館・遺産センターの学術協力に関する協定
締結日	2012年6月3日
協定終了予定日	2017年6月2日
目的	相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・双方の教職員・研究者の交流 ・共同研究プロジェクトの展開 ・博物館資料の展覧および教育分野における協力活動 ・学術研究資料、学術情報および公開出版物についての交換と相互利用の展開 ・その他両機関で合意された分野における協力
国(地域)名	フィリピン
相手機関名	フィリピン国立博物館
協定書等名	国立民族学博物館とフィリピン国立博物館の学術協力に関する協定
締結日	2012年7月18日
協定終了予定日	2017年7月17日
目的	相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術協力および交流の強化、発展のために本契約を締結する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進
国(地域)名	中国
相手機関名	中国社会科学院民族学・人類学研究所
協定書等名	国立民族学博物館と中国社会科学院民族学・人類学研究所との学術交流協定
締結日	2012年8月28日
協定終了予定日	2015年8月27日
目的	両機関の学術交流を通して国際的な連携を進めるため、平等互惠と相互尊重の理念のもとに、この協定を締結する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・研究プロジェクトの展開 ・双方の教員・研究者交流 ・研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開 ・その他両機関で合意された分野における協力
国(地域)名	フランス
相手機関名	国立パリ・デカルト大学人口開発研究所
協定書等名	国立民族学博物館と国立パリ・デカルト大学・人口開発研究所との学術協力に関する協定
締結日	2012年11月30日
協定終了予定日	2015年11月29日
目的	これまでの建設的な共同研究を評価し、さらに強化すべく相互の理解と関心という行動指針に基づき、今後の学術的共同研究を発展させるため、本協定を締結する。
協定内容	両機関は共同研究事業において、学術的交流および協力を推進する。
国(地域)名	マリ
相手機関名	マリ文化省文化財保護局
協定書等名	国立民族学博物館とマリ文化省文化財保護局との学術協定書
締結日	2014年5月7日
協定終了予定日	2018年5月6日
目的	マリにおける文化財の研究、保護及び普及のためのプロジェクトに関する協力活動を推進する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・マリにおける考古遺跡の保存、保護、研究に関して指導的役割を共同して担う。 ・両機関が実施してきたこれらの考古遺跡に関する研究を継続して行う。

国(地域)名 米国
 相手機関名 北アリゾナ博物館
 協定書等名 国立民族学博物館（日本国 大阪）および北アリゾナ博物館（米国 アリゾナ州 フラッグスタッフ）との学術協力・協働協定書
 締結日 2014年7月4日
 協定終了予定日 2019年7月3日
 目的 学術交流・研究を強化・発展させる。
 協定内容 より一層の交流、情報共有、協力関係、良質な民族誌的記録向上を目的として、博物館やソースコミュニティと共に諸活動を研究・促進するプロジェクトの発展のために協働する。

国(地域)名 台湾
 相手機関名 国立台湾歴史博物館
 協定書等名 国立民族学博物館と国立台湾歴史博物館との間の学術研究交流に関する協定書
 締結日 2015年10月17日
 協定終了予定日 2021年10月16日
 目的 相互に理解と友好を深め、両機関における学術研究交流を促進する。
 協定内容 ・研究者の交流
 ・共同研究及び研究集会の実施
 ・博物館の展示や教育活動に関する協力
 ・学術情報及び出版物の交換
 ・その他両機関が合意した事項

国(地域)名 米国
 相手機関名 ヴァンダービルト大学
 協定書等名 国立民族学博物館（日本国）とヴァンダービルト大学（アメリカ合衆国）との協定合意書
 締結日 2016年1月15日
 協定終了予定日 2021年1月14日
 目的 両機関が友好と相互平等と利益互惠の原則に基づいて学術的に協力・協同する。
 協定内容 ・講演会やシンポジウム、研究会
 ・共同研究
 ・文化交流

MINPAKU Anthropology Newsletter

Newsletter 40 (June 2015)

Special theme: Core Research Project 'State, Community and Identity in the Modern Hispanic World: A Study of Resettlement Policy in Spanish America'

Resettlement Policy: A Success or Failure? ————— Akira Saito

Rebuilding Community in Colonial Peru: Investigating the *Reducción* of Santa Cruz de Tuti

————— Steven A. Wernke

The 'General Resettlement of the Indians' in Colonial Peru ————— Jeremy Ravi Mumford

Legal Battles over Indigenous Founded Towns in the Viceroyalty of Peru ————— S. Elizabeth Penry

Indigenous Agency and Written Culture in the Jesuit Missions of Paraguay ————— Guillermo Wilde

Newsletter 41 (December 2015)

Special theme I: Research on Korea at Minpaku

Minpaku's Joint Research Projects on Korean Society: History and Accomplishments ——— Toshio Asakura

Anthropology of Korea and Minpaku ————— Myung-Ki Yoo

On the Korean Collection of Minpaku ————— Mun-Woong Lee

Toshio Asakura, He is More Korean than the Native ————— Jingi Cheon

Special theme II: Research on India at Minpaku

- Twenty Years of Indian Films at Minpaku ————— Yoshio Sugimoto
 Location of Temples: Exploring the Ecology of Place and Space ————— Shanmugam Pillai Subbiah,
 The Exhibits on India in Minpaku ————— Madhavi Kolhatkar
 India-Japan, Sari-Kimono: Metaphors, Affinities and Aesthetic ————— Aarti Kawlra

みんぱくフェローズ

客員研究員等で国立民族学博物館に在籍した研究者で、帰国後も継続的な関係を維持するために MINPAKU *Anthropology Newsletter* を送付している研究者、および国立民族学博物館と関連の深い国内外の研究機関で、MINPAKU *Anthropology Newsletter* を送付している研究機関。

アジア・中東・オセアニア		ヨーロッパ		北米・中南米		アフリカ	
アラブ首長国連邦	2	アイスランド	2	アルゼンチン	1	エジプト	12
アルメニア	3	イタリア	2	米国	161	エチオピア	4
イスラエル	11	英国	48	エクアドル	3	エリトリア	5
インド	13	オーストリア	3	カナダ	18	ガーナ	3
インドネシア	17	オランダ	14	ガイアナ	2	カメルーン	1
オーストラリア	25	キプロス	1	グアテマラ	5	ケニア	3
韓国	42	ギリシャ	1	コロンビア	2	コートジボワール	2
カンボジア	0	スイス	5	ジャマイカ	3	ザンビア	11
サウジアラビア	4	スウェーデン	12	チリ	1	スーダン	1
サモア	2	スペイン	2	パラグアイ	1	スワジランド	2
シンガポール	5	スロベニア	1	ブラジル	5	タンザニア	2
スリランカ	3	チェコ	3	ペルー	14	ナイジェリア	3
ソロモン諸島	2	デンマーク	3	ボリビア	3	ナミビア	1
タイ	27	ドイツ	33	ホンジュラス	1	ボツワナ	2
台湾	31	ノルウェー	3	メキシコ	3	南アフリカ	5
中国	196	フィンランド	2			マダガスカル	2
トルコ	4	フランス	21			モーリタニア	1
ニュージーランド	7	ブルガリア	3			セーシェル	1
日本	214	ベルギー	3				
ネパール	8	ポーランド	5				
パキスタン	2	ポルトガル	2				
パプアニューギニア	1	マケドニア	1				
パレスチナ	5	ルーマニア	2				
フィジー	8	ロシア	14				
フィリピン	7						
ブータン	3						
ブルネイ	1						
ベトナム	7						
香港	4						
マレーシア	10						
ミャンマー	11						
モンゴル	8						
ヨルダン	5						
ラオス	3						
小 計	691	小 計	186	小 計	223	小 計	61
総 計							1,161

国際連携と
研究協力

国際研修博物館学コース

国際協力事業団（JICA）が主宰し、本館が中心となって1994年から10年間実施してきた「博物館技術（収集、保存、展示）コース」は、開発途上国における諸博物館の技術向上と、博物館間の国際的ネットワーク構築に大いに貢献してきた。また、その過程を通じて、本館ははじめわが国の博物館関係者も、研修参加者から多くのことを学ぶことができた。

研修コースの設置から10年の節目を迎えた2003年、国際協力事業団は独立行政法人国際協力機構に衣替えし、本館もまた、2004年4月より法人化し、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の1機関となった。この機に当たり、改めて過去10年の成果を点検し、いくつかの点でコースの改変を行い、2004年度からは「博物館学集中コース」として再出発した。

この新たな「博物館学集中コース」は、本館がJICAから全面的な事業委託を受け、滋賀県立琵琶湖博物館と協同で運営することとなった。もとより、研修の実施に際しては、国内の多くの博物館・美術館とその関係者から協力をあおぐことはいうまでもない。本館のもつ国際的ネットワークは、対象国の博物館事情を踏まえた研修実施に不可欠な要因であり、またその先進的な情報・資料管理や博物館運営は、研修に大きな効果をあげている。その一方で、研修員の多くにとって切実な問題である、自らの属するコミュニティの資料を収集・整理し、展示するという課題については、主として海外資料の収集・展示に関わる人文社会系の博物館である本館での研修に限界があることも事実である。そこで、2004年度からの新しいコースでは、自然科学系の博物館としてこの分野の活動で先進的な業績をあげている、琵琶湖博物館と密接に連携することで、より充実した研修を進めている。また、研修プログラムの設定にあたっては、各講義を講師による一方向の教育ではなく、講師と研修員とが自らの経験や知識を共有する議論の場として位置付け、相互に学び合うコースとなるように留意している。

その後、2009年度からは、JICA 集団研修全体の枠組みが大きく変更され、3年間を一区切りとして、その間は研修員受入れ割り当て国を変更しない、という基本原則が定められた。日本の国際協力事業全体を見直す動きの中で、同一国に継続的な協力を行ってその結果が現地に確実に還元される仕組みを作り、それを3年ごとに確認して当該コースを継続すべきかを外部評価の判断にゆだねる、というJICAの方針から、このような枠組みの変更が行われたものである。しかし、本館としては、この枠組みの変更に際し、博物館関係者を3年間にわたり継続して派遣することが困難な国も多いことを勘案して、「大きな需要を持ちながらも博物館人材の少ない国を切り捨てる結果に陥らないこと」を要望してきた。その結果、2012年度以降は、JICAが各国に向けて要望調査を行う際の、割り当て国の固定をやめ、全世界に要望調査を行うことになった。

2015年度からは、博物館が地域社会に果たす役割により重点を置いた「博物館とコミュニティ開発」コースへと改組をおこなった。されエジプト、パレスチナ自治政府、ミャンマー、アルメニア、フィジー、ペルー、セーシェル、ヨルダンの8か国・地域から10名の研修員を受け入れ、10月1日から12月18日まで研修を行った。本館と琵琶湖博物館での実施だけではなく、新潟県中越地震の被災地に設けられた中越メモリアル回廊、東京国立博物館や国立科学博物館、広島平和記念資料館などへの研修旅行も行った。また研修員全員が、自国の博物館の活動や課題を報告し、検討する「公開フォーラム世界の博物館2015」を2015年11月3日に国立民族学博物館で行った。89名の参加者があり、報告者と活発な意見交換を展開した。また、全期間にわたって日本のさまざまな博物館関係者と直接ふれあい、その一部の現場を訪ねることで、研修員が日本側の経験に学ぶと同時に、日本側も研修員の目を通して、日本の博物館の持っている可能性と課題に気づかされるなど、たがいに経験と知見を分かちあうことができたと考えられる。

●博物館とコミュニティ開発コース研修員

Ghukasyan Vahagn (グカシヤン ヴァハグン) アルメニア

————— マリアム&エラスヒ・アスラマジアン姉妹ギャラリー・館長

Abdelrahman Othman Masoud Elsayed (アブデルラハマン オスマン マスード エルサイエド) エジプト

————— 首相府考古庁 国立エジプト文明博物館 博物館教育部門・学芸員

Mohamed Emam Abdallah Emam (モハメド イمام アブダラ イمام) エジプト

————— 首相府考古庁 大エジプト博物館保存修復センター (GEM-CC)・無機工芸品ラボ長

Koro Vika Naiovi (コロ ヴィカ ナイオヴィ) フィジー

————— フィジー博物館・展示担当官

Tutani Jason (ツタニ ジェイソン) フィジー

————— フィジーナショナル・トラスト 国家遺産文化芸術局・公園管理官

- Aye Thidar Oo (エイ ティダ ウ) ミャンマー
 ————— 文化省 考古・国立博物館局 ヤンゴン国立博物館・アシスタント学芸員 2 級
- Carrion Alban Rosangela Yanina (カリオン アルバン ロサンジェラ ヤニナ) ペルー
 ————— パチャカマック遺跡博物館 登録・収集管理部・助手
- Barreau Nicole Sabrina (バルー ニコル サブリナ) セーシェル
 ————— 観光文化省 文化部/国立博物館・博物館上級助手
- Qais Tweissi (カイス トウェヌイ) ヨルダン
 ————— ペトラ開発観光局/ペトラ考古学公園 文化遺産管理部門・博物館担当技官
- Alama Elham Hussien (アラマ エルハム フセイン) パレスチナ自治政府
 ————— 観光遺跡庁 博物館局 ヒシャムパレス博物館・学芸員

国内研究機関等との研究連携、協力の推進

相手機関名	日本文化人類学会
協定名	人間文化研究機構国立民族学博物館と日本文化人類学会との連携に関する協定
締結日	(締結) 2008年 2月27日 (更新) 2011年 4月15日
概要	研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用を促進し、もって人類社会における学術の発展と普及に寄与する。
終了予定日	なし
相手機関名	日本国際理解教育学会
協定名	人間文化研究機構国立民族学博物館と日本国際理解教育学会との連携に関する協定
締結日	(締結) 2013年 3月28日
概要	研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用を促進し、もって人類社会における学術の発展と普及に寄与する。
終了予定日	なし
相手機関名	金沢大学
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人金沢大学との連携・協力に関する協定
締結日	2014年 3月23日
概要	金沢大学と国立民族学博物館とのこれまで長年にわたり培ってきた信頼関係と連携・協力の実績を基盤に、より緊密かつ組織的に行う体制強化を図る。
終了予定日	2017年 3月31日
相手機関名	立命館大学
協定名	国立民族学博物館と立命館大学との学術交流に関する協定書
締結日	2014年 4月10日
概要	食に関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力を行う。
終了予定日	2019年 4月 9日
相手機関名	大阪工業大学
協定名	国立民族学博物館と大阪工業大学との学術交流に関する協定書
締結日	2015年 3月23日
概要	情報メディア・デジタルコンテンツに関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力を行う。
終了予定日	2020年 3月22日

相手機関名	追手門学院大学
協定名	国立民族学博物館と追手門学院大学との学術交流に関する協定書
締結日	2015年4月22日
概要	地域文化の継承と創造に関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力を行う。
終了予定日	2018年4月21日
相手機関名	株式会社海遊館
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と株式会社海遊館との連携・協力に関する協定
締結日	(締結) 2015年11月19日
概要	産学連携の推進、学術研究の振興、研究成果による社会貢献、その他の諸活動の発展に向けた連携協力を行う。
終了予定日	2017年3月31日
相手機関名	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との連携・協力に関する協定
締結日	(締結) 2015年11月25日
概要	世界諸地域の言語と文化に関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力を行う。
終了予定日	2019年3月31日

概観

地域に根ざした広報活動

2015年11月に旧エキスポランド跡地に開業した大型複合施設エキスポシティ内の各施設と連携し、さまざまな広報活動を行った。

- (1) 「生きているミュージアム」ニフレルと連携協力協定を締結し、ニフレル館長を招いて開館記念トークイベント「みんなく×ニフレル——人と生き物をつなぐ」を開催した。
- (2) 無印良品ららぽーと EXPOCITY のオープニング記念グッズにデザインリソースを提供し、グッズ持参者に対して本館展示観覧料割引を実施した。また、店内のオープニングイベント「みんなくって？ウールって？」に協力し、パネル展示を行ったほか、ウールに関する本館展示ツアーを行った。店内には継続的に本館のチラシや関連書籍を設置していただき、無印良品店舗から本館への人の流れを作った。
- (3) 吹田市情報発信プラザ「Inforest すいた」及びエスニック雑貨店の「チャイハネ ららぽーと EXPOCITY」で本館のチラシを設置し、各利用者へ情報発信した。

さらに、新たに万博記念公園内の飲食店4店舗と協定を締結し、観覧料及び飲食料等の相互割引を実施し、公園内における利用者の回遊性を高め、集客を図った。

引き続き、北大阪8市3町の美術館・博物館計51館による文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」に参加及び会場提供した。また、吹田市主催の「ぐるっとすいた」事業に協力し、吹田市の小・中学生を対象としたスタンプラリーのポイントとなった。他にもミュージアムぐるっとパス・関西2015に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の活動における中心的役割を担い、注目度を増した千里を起点として発信する広報活動を展開した。

学校教育・社会教育活動

昨年度に続き、本館が長年培った研究成果を幅広い層に社会還元するため、博物館の外で積極的な講演活動を行った。主に社会人を対象とした生涯教育として、大阪梅田のグランフロント大阪において、連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル」を「世界の『民芸』」及び「世界の天然素材」をテーマにそれぞれ7回シリーズで開催した。各講座のうち1回は、本館展示ツアーとすることで、館外での催しを展示観覧につなげることを狙った。大阪阿倍野のあべのハルカス近鉄本店においては、連続講座「カレッジシアター地球探究紀行」（産経新聞主催。24回開催）に特別協力した。

また、園田学園女子大学総合生涯学習センターとの連携講座（6回開催）及び大阪府高齢者大学の講座（28回開催）において、引き続き本館教員が講座を担当した。

その他に、大学教育の発展に向けて、千里文化財団の協力のもと、「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」制度を継続実施し、高等教育への活用を推進した。2015年度は、継続申し込み5件（学校法人立命館〈立命館大学・立命館高等学校・立命館宇治高等学校・立命館守山高等学校・立命館慶祥高等学校〉、大阪大学、京都文教学園〈京都文教大学・京都文教短期大学〉、千里金蘭大学、同志社大学文化情報学部文化情報学研究科）、計1,306人の学生、教職員が来館した。また、本館を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学生・教員のためのみんなく活用」を本館ウェブサイトに掲載し、81件、2,530名の大学関係者が展示場を利用した。

初等・中等教育への貢献として、近隣の教育委員会と連携して、大阪北摂地域の中学校6校12名を職場体験として受け入れた。さらに、小・中学校の教諭を対象に、博物館を活用した遠足や校外学習のためのガイダンスを2回実施し、60団体170名の参加があった。

新たに、特別展「韓日食博」において、本館展示と特別展示の相互観覧による理解度の向上及び入館者数の増加を目的として、学校団体（小・中学校、高校、大学）の観覧料優待措置を実施し、本館展示観覧料で特別展を観覧できるようにした。実績として、団体観覧者数は例年の秋季特別展と比べて約6,000名増加した。

インターネットによる広報活動

ICTの進化及び国際化の進展を受けて、インターネットによるアクセシビリティを一段と向上させた。

ホームページに関しては、スマートフォンやタブレット端末によるユーザインタフェースを最適化したスマートフォン用サイトを一般公開した。また、引き続きペーパーレスのスマートフォン用観覧券を通年販売した。さらに、昨年度に作成したアラビア語、中国語（簡体字・繁体字）、フランス語、ロシア語、スペイン語、韓国語による本館紹介文に加えて、海外からの来館を想定し、観覧料やアクセス等の館内案内を掲載し、海外向けの情報発信を強化した。その他にもイベントカレンダーで1日毎のイベント情報を表示できるようにするなど利便性を高める各種改修を実施した。ホームページの利用者数は、訪問者数 640,586、ページビュー数 2,005,474であった。

メールマガジン（みんぱく e-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月1回継続して発信している（配信数は58,110件）。

ソーシャルメディアに関しては、若者層を中心として、ホームページを補完する気軽で双方向型メディアとして、一昨年度の開始以来順調に利用者が増加している（Facebook いいね！数 6,238、Twitter フォロワー数 14,120、YouTube 総再生回数 9,566回）。

マスメディアによる広報活動

特別展「韓日食博」の関連イベントとして、韓国観光名誉広報大使や大阪観光大使を務め、テレビ・ラジオでも活躍するファッションモデルのアンミカ氏と毎日放送（MBS）アナウンサーの山中真氏、朝倉敏夫（本館教授・特別展実行委員長）によるトークイベント「みんぱく×MBS ラジオ presents『韓日食博』を極める！」を開催した（参加者数354名）。本イベントは、ラジオ番組及びテレビ番組で紹介された他、関連してラジオ番組の生放送に教員が出演したり、特別展や関連イベントのラジオ CM を流したりして、マスメディアの発信力を利用し、社会に向けて広範に本館の活動をアピールする格好の機会となった。

新聞に関しては、新たに京都新聞朝刊で毎週水曜日に本館研究者によるコラム「考える舌 みんぱく食の民族誌」の連載が始まった。毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」や毎日小学生新聞の「みんぱく世界の旅」の連載も継続し、教員がそれぞれの研究内容を多様な年齢層、地域の読者向けにわかりやすく解説した。千里ニュータウン FM 放送番組「ごきげん千里837（やあ、みんな）」も継続している。

プレスリリースを随時発信し、マスメディアに情報提供した（年間25本）。報道関係者との懇談会も年11回（うち内覧会4回。参加者数128名）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。2015年度は、テレビ26件、ラジオ69件、新聞722件、雑誌76件、ミニコミ誌122件、その他171件の各媒体総数1,186件で、本館の活動が紹介された。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

研究成果の社会還元として、継続して「みんぱくゼミナール」を12回（参加者数2,627名）、「みんぱく映画会」（みんぱくワールドシネマ含む）を12回（参加者数3,971名）、「研究公演」を3回（参加者数973名）、「みんぱくウィークエンド・サロン——研究者と話そう」を41回実施した（参加者数2,093名）。

特に、展示関連では、新構築した南アジア展示・東南アジア展示を広く社会へ紹介するため「躍動する南アジア——春から秋のみんぱくフォーラム2015」及び「ゆったり東南アジア——春のみんぱくフォーラム2016」と題して、研究公演や展示場クイズ「みんぱQ」等を実施した。

機関研究関連では、「包摂と自律の人間学」のテーマに沿って、上映会「みんぱくワールドシネマ」を開催した。

これらの活動は、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友の会会員に配付したり、全国の研究機関、大学等に寄贈したりすること等によって、広く情報発信した。視覚障がい者向けの音訳版も並行して製作・配付した。

特に2015年度は、本館で開催された日本文化人類学会や郡山市立美術館における巡回展（「イメージの力」展。本館では2014年度に特別展として実施）でも月刊みんぱくを配付して、広報の拡大につとめた。また、教職員の希望者にバックナンバーを配付し、保管冊数の適正化を図るとともに、保管場所を一元化した。

その他の新しい広報活動

長年の懸案を解消するため、新たに下記の取り組みを実施した。

- (1) 最寄り駅から本館まで徒歩で15分かかるところを、高齢者や身体が不自由な方等多くの方が快適に来館できるよう、特別展「夷酋列像」会期中に大阪モノレール「万博記念公園駅」から本館まで無料のシャトルバスを運行した。来館者のわくわく感を高めるようにデフォルメした標本資料等のイラストでバスをラッピングした。今後、利用状況を検証し、以降の運行の是非を検討する予定である。
- (2) 従来、特別展等催し毎の広報印刷物はあったが、本館展示自体を広報する印刷物はなかった。エキスポシティが開業し、感性の高い若い世代にも好感を与えられるよう、新進気鋭の写真家やダンサーを起用してタブロイド判の本館展示紹介冊子を制作した。
- (3) 老朽化していた本館正門前の総合掲示板をアクセスデザインの観点からリニューアルし、フロアガイドやポスター掲示スペース等を設けた。
- (4) 海外からの観光客を念頭に、チラシ等の広報印刷物には原則としてすべて日英併記のロゴマークを掲載するようデザイン統一基準の改定をおこなうとともに、「館内案内」の中国語版、韓国語版を作成した。

今後の課題

全体の厳しい予算状況を反映し、広報予算は年々減少している。今後も広報事業を実施するためには、広報予算の抜本的な見直しも含めて検討しなければならない。支出を削減し、予算をかけない広報手段に注力するだけでなく、入館料等の収入の増大を図ることも課題として挙げられる。

国立民族学博物館要覧2015

- ・和文要覧 2015年6月発行
- ・英文要覧 2015年12月発行

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/> (2016年3月31日現在)

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

提供している主な情報は以下の通り。2015年度の訪問件数は640,586件。

・研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

・博物館展示・事業活動

本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・セミナー・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

・大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

・データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんぱく e-news」を発行し、毎月開催している「みんぱくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんぱく映画会」「特別展」などのお知らせを、月1回電子メールで配信している。2015年度の配信数は58,110部。

報道

●報道関係者との懇談会

2015年4月16日	9名(6社)	企画展「岩に刻まれた古代美術 アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」、新任紹介ほか
5月21日	9名(8社)	音楽の祭日2015 in みんぱく、連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——世界の『民芸』」、企画展「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」展示ツアーほか
6月18日	12名(9社)	特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」、みんぱく映画会インド映画特集(全4回)、台湾光点計画講座「台湾客家文化を学ぶ」ほか
7月23日	8名(6社)	特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」、台湾光点計画講座「日本の客家」、台湾光点計画みんぱく映画会「一八九五」、みんぱく秋の遠足・校外学習事前見学&ガイダンスほか
8月26日	22名(11社)	特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」報道・出版関係者向け内覧会
9月17日	10名(9社)	連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——世界の天然素材」、国際シンポジウム「みんぱく手話言語学フェスタ2015」、みんぱくワールドシネマ「マイノリティ・ボイス=少数派の声」、国際フォーラム「文化遺産レジ-

			ムを考える——レギーナ・ベンディクス教授を迎えて」、国際シンポジウム「生物医療はアフリカに何を作り出しているのか」ほか
10月15日	10名（7社）		年末年始展示イベント「さる」、公開講演会「育児の人類学、介護の民俗学—フィールドワークによる再発見」、研究公演「時を越える南インドの踊り」、公開フォーラム「世界の博物館2015」、「アイヌ文化に触れるカムイノミ／アイヌ工芸 in みんぱく」、北大阪ミュージアムメッセほか
11月19日	9名（6社）		春のみんぱくフォーラム 2016「ゆったり東南アジア」、展示イベント「国立民族学博物館×EXPOCITY」、講演会「伝統と創意——台湾客家の工芸と音楽（台湾文化光点計画）」、研究公演「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」ほか
12月17日	8名（5社）		公開シンポジウム「アンデス文明初期の神殿と権力生成」、みんぱくセミナー「通訳学☆最前線「通訳をする」ということは、どういうことなのか」、みんぱく映画会「映画で知る東南アジア」、みんぱくワールドシネマ「あの日の声を探して」、年末年始展示イベント「さる」展示ツアーほか
2016年1月21日	8名（8社）		特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」、中央・北アジア展示場リニューアル、アイヌの文化展示場リニューアル、ワークショップと講演「東南アジアの仮面と人形」、学術潮流サロン「公共人類学×公共社会学——学問と社会のつながりを考える」、国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」、国際シンポジウム「無形文化遺産の継承における『オーセンティックな変更・変容』」、みんぱく映画会「波伝谷に生きる人びと」、みんぱくワールドシネマ「サンドラの週末」ほか
2月24日	24名（16社）		特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」報道・出版関係者向け内覧会

●新聞等報道件数

2015年度は、テレビ26件、ラジオ69件、新聞722件、雑誌76件、ミニコミ122件、他171件、計1,186件の報道があった。

月刊みんぱく

4月号	（第451号）	2015年4月1日発行	特集「野次と喝采」
5月号	（第452号）	2015年5月1日発行	特集「モノから生まれたものがたり」
6月号	（第453号）	2015年6月1日発行	特集「躍動する南アジア」
7月号	（第454号）	2015年7月1日発行	特集「異種混濁の世界 東南アジア」
8月号	（第455号）	2015年8月1日発行	特集「テーマパーク」
9月号	（第456号）	2015年9月1日発行	特集「韓日食博」
10月号	（第457号）	2015年10月1日発行	特集「混住」
11月号	（第458号）	2015年11月1日発行	特集「ミステリーに挑む」
12月号	（第459号）	2015年12月1日発行	特集「市に集う」
1月号	（第460号）	2016年1月1日発行	特集「さる」
2月号	（第461号）	2016年2月1日発行	特集「『夷酋列像』を読み解く」
3月号	（第462号）	2016年3月1日発行	特集「アートの境界」

みんなくゼミナール

第443回 10世紀の西アフリカに伝わった中国製磁器——アフリカから世界史を考える

2015年4月18日

講師 竹沢尚一郎

受講者 197名

内容 西アフリカの10世紀の遺跡で、私たちは中国製磁器片を発掘した。海を越え、砂漠を越えて運ばれてきたこの白磁は、何を意味しているのか。アフリカの歴史を世界史の中に位置づけることで、私たちの理解はどう変わるのか。そんな問いを考えた。

第444回 先住民が守る古代遺跡——アムール河流域シカチ・アリヤン村の岩画面

【企画展「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」関連】

2015年5月16日

講師 佐々木史郎

受講者 205名

内容 極東ロシアのシカチ・アリヤン村の岩画面は、ロシア考古学の父と称されるA・P・オクラドニコフが調査したことで有名になった。そこに描かれた仮面や動物は、地元の先住民族ナーンイの人びとにとっても神話の世界を物語る聖なるものとされてきたが、今は観光資源としての活用が期待されている。古代遺跡、信仰対象、そして観光資源と3つの性格をもつこの岩画面の将来を考えた。

第445回 インド刺繍布がうみだす世界【新展示（南アジア展示）関連】

2015年6月20日

講師 上羽陽子

受講者 279名

内容 南アジアの染織品やファッションは、現代のグローバル化にともなって、新しい「南アジア」イメージの発信・流通を媒介する重要なメディアとなっている。インド刺繍布をうみだす風土や暮らし、担い手に焦点をあてながら、私たちの身近でみることのできる「エスニック雑貨」や「民族衣装」の存在についても考えた。

第446回 大陸中央の末端へ——パキスタンの山奥で言語を探す【新展示（南アジア展示）関連】

2015年7月18日

講師 吉岡 乾

受講者 217名

内容 ヒトの移動や暮らしの中心は平地である。生活世界の「端っこ」というのは何も、陸地の縁の海に面した部分ばかりではない。山奥もまた「端っこ」になる。そんな端っこの最たるひとつでもある、“世界の屋根”と呼ばれる地域では、どういった人びとがどのような言葉を話しているのか紹介した。

第447回 オセアニアの戦争の文化

2015年8月15日

講師 丹羽典生

受講者 206名

内容 平和な島国としての太平洋というイメージはいまでもあるが、かつては激しい武力衝突がおこなわれ、戦争にまつわる文化が存在していた。そうしたオセアニアの戦争文化と現在の影響についてお話した。

第448回 博物館は食をどう展示するか——特別展メイキング

【特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」関連】

2015年9月19日

講師 朝倉敏夫、大野木啓人（京都造形芸術大学教授）、佐野睦夫（大阪工業大学教授）、金晙均（韓国芸術総合学校教授）

受講者 231名

内 容 特別展「韓日食博」は、情報工学によるIT技術をもちいた体験型の展示、情報メディアによる楽しめる展示にチャレンジした。この展示ができあがるまでの過程を、一緒に展示を作りあげる研究者の仲間たちとともに語った。

第449回 言語の遺伝子をたどる——ことばの変化と人の移動

2015年10月17日

講 師 菊澤律子

受講者 205名

内 容 ことばの系統が近い、遠いとは、何を意味しているのか。人間の言語がどのように発達したのか、何をみればわかるのか。ことばの歴史を探る科学的な手法と、その結果が人間の移動や往来の歴史にどのように結びつくのか、太平洋を例にお話した。

第450回 シルクロードの古代都市遺跡と歴史空間

2015年11月21日

講 師 寺村裕史

受講者 191名

内 容 中央アジアは「シルクロード」を通じた「人と物」の活発な交流によって人類史・文明史における重要な舞台となってきた。ウズベキスタンのサマルカンド近郊に営まれたシルクロード古代都市の考古学的な発掘調査を題材に、デジタル技術を駆使した情報考古学という視点から、その調査結果についてお話した。

第451回 ベトナム、黒タイの台所【新展示（東南アジア展示）関連】

2015年12月19日

講 師 樫永真佐夫

受講者 181名

内 容 西北ベトナムの盆地にいらしている黒タイの高床の家には囲炉裏がある。囲炉裏こそ台所の中心と言えるだろう。しかし近年の急速な市場経済化の進展とインフラストラクチャーの整備により、各家庭の台所設備、家族生活における囲炉裏の位置づけは大きく変わりつつある。台所からくらしを見つめ直した。

第452回 東南アジアの人形芝居【新展示（東南アジア展示）関連】

2016年1月16日

講 師 福岡正太

受講者 230名

内 容 影絵人形から、あやつり人形、棒人形、そして水の中であやつる人形まで、東南アジアには多くの魅力的な人形芝居がみられる。みんぱく東南アジア展示場に展示された人形を中心に、人形をもちいた芸能の魅力を紹介した。

第453回 みんぱくにタイ寺院ができるまで【新展示（東南アジア展示）関連】

2016年2月20日

講 師 平井京之介

受講者 167名

内 容 新しくなったみんぱくの東南アジア展示場にタイの寺院ができた。外から見た壮麗さや色彩の豊かさは有名であるが、寺院の中でどんなことがおこなわれているのかまではあまり知られていない。みんぱくの展示を紹介しながら、タイの人びとにとっての仏教寺院の意味を考えてみた。

第454回 『夷酋列像』の首長たちがまとう衣装【特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」関連】

2016年3月19日

講 師 佐々木史郎

受講者 318名

内 容 クナシリ・メナシの戦いの終結に関係した12人のアイヌの首長たちを描いた『夷酋列像』。その首長たち

が身にまとう衣装は、ロシアの海軍士官の外套や蝦夷錦の朝服などアイヌの伝統的な衣服ではないといわれている。その衣装が語る当時の蝦夷地をめぐる日本、ロシア、そしてアイヌの人びとの葛藤を明らかにした。

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

第378回 2015年4月5日 徹底解説！トラジャの米倉

講師 佐藤浩司

参加人数 32人

内容 船のように反り返った奇妙な屋根をもつトラジャの米倉。それはいったいどのような文化のもとで生まれ、どのようにして民博の展示場を実現したのか？材料、構造、大工仕事、米倉など様々な視点から解説を行った。

第379回 2015年4月12日 台湾客家——日本、アメリカへの移住

講師 河合洋尚

参加人数 43人

内容 中国のエスニック集団である客家は、台湾に移住後、さらに日本やアメリカへと移動した。彼らは、団体を結成し、独自の文化を残すべく、多くの活動を実施している。日本とアメリカにおける台湾客家の歴史や諸活動を紹介した。

第380回 2015年4月26日 身体でみる異文化——琵琶を持たない琵琶法師のアメリカ聴き語り

講師 広瀬浩二郎

参加人数 47人

内容 2013年8月から2014年3月まで、僕はシカゴで在外研究を行った。その記録をまとめたのが拙著『身体でみる異文化——目に見えないアメリカを描く』（2015年3月）である。今回はこの新刊書の魅力を概説するとともに、アメリカ滞在時の「聴く＝受信」「語る＝発信」のエピソードを紹介した。

第381回 2015年5月3日 暮らしに息づく豊かな宗教伝統：南アジアの新展示から

講師 三尾 稔

参加人数 65人

内容 経済発展が続く南アジアでは、生活環境が目まぐるしく変わるなかでも多様な宗教伝統が日常生活に生き生きと根づいている。3月に展示内容を一新してオープンした南アジア展示場のみどころの解説とともに、豊かな宗教文化のありさまを紹介した。

第382回 2015年5月10日 染織の伝統と現代——新しくなった南アジア展示場

講師 上羽陽子

参加人数 66人

内容 南アジアの刺繍や染め、織りなどの染織文化は、多様な自然環境からうまれる繊維素材や染材などに支えられてきた。現代のグローバル化においてこれらの染織文化はどのように変容しているのか。新しくなった展示場で染織文化の伝統と現代について紹介した。

第383回 2015年5月17日 南アジアの結婚式と音楽

講師 寺田吉孝

参加人数 47人

内容 南アジアのヒンドゥー教徒の結婚式には音楽が欠かせない。様々な場面で音楽が演奏され、その内容は特定の式次第と結びついている。では、なぜ音楽が演奏されるのか。南インドとネパールを例として、結婚式における音楽の意味を考えた。

第384回 2015年5月24日 シカチ・アリヤンの岩面画とナナイの神話

講師 佐々木史郎

参加人数 62人

内容 極東ロシアのハバロフスクの近郊のシカチ・アリヤンという村には古代の人々が線刻画を彫り込んだ岩が近くの河原に数多く見られる。ここでは現在村に暮らすナナイという先住民族の人々がこの岩画にどのような物語をつけて守り続けてきたのかについて解説した。

第385回 2015年5月31日 なぜ「イスラムの語源は平和」という誤解が流布するのか？——マスコミと御用学者の功罪

講師 西尾哲夫

参加人数 51人

内容 私達のイスラム理解は常に現在の中東情勢に反応している。テロが蔓延する世界ではなく、人びとの等身大の姿を紹介しようとするあまり、偏った言説や意図的な曲解を生み出している。どうすればフランスのとれた他者理解が可能になるのかを考えた。

第386回 2015年6月7日 中国チワン族の棚田観光の現状

講師 塚田誠之

参加人数 36人

内容 中国では経済発展にともない各地で観光化が進展している。本報告では、広西の龍勝県龍脊地方における棚田を活用した観光化の歴史と現状、観光化にともなう地元のチワン族の人々の動向について、問題点をも踏まえながら、最新の調査にもとづき紹介した。

第387回 2015年6月14日 次週開催！「音楽の祭日」を10倍楽しむ法

講師 出口正之

参加人数 18人

内容 みんなくでは毎年「音楽の祭日」を開催して、多くの方々に楽しんでいただいている。「音楽の祭日」とはプロ・アマを問わない音楽家によるライブ・コンサートで、すべて入場無料で音楽を楽しむ日である。2015年6月21日に開催予定の「音楽の祭日」を楽しむすべを紹介した。

第388回 2015年6月28日 伝承される伝統中国の人生儀礼

講師 韓敏

参加人数 25人

内容 漢族は中国の農耕文明を担ってきた最大の民族集団である。人口の多い漢族の習慣は地域によって異なるが、人生儀礼とその裏をつけるものの考え方は共通しており、いまでも伝承されている。展示品をみながら、豊かな人生儀礼のありさまを紹介した。

第389回 2015年7月5日 シカチ・アリヤンの岩面画の成立年代と日本の縄文時代

講師 佐々木史郎

参加人数 75人

内容 シカチ・アリヤンの岩面画遺跡の近くにあるガーシャ遺跡と呼ばれる遺跡は、最も古い時代から土器片が出土し、年代測定で12000年～14000年前という結果が出ている。その時代の文化「オシポフカ文化」と日本の縄文文化との関係を探った。

第390回 2015年7月12日 インドの新しいファッション

講師 杉本良男

参加人数 45人

内容 南アジア展示場の新構築に伴い、インドの新しいファッションも展示している。21世紀に入って、有名デザイナーの活動が世界的にも定着し、中間層のファッションにも取り入れられる一方で、手織りのサリー産業が危機に陥っている現状について解説した。

第391回 2015年7月19日 インドのお手伝いさん——女性家事労働を考える

講師 松尾瑞穂

参加人数 60人

内容 インドの一般家庭に家事使用人は欠かすことのできない存在である。そこには、貧富の差だけでなく、カーストによる浄・不浄の観念も反映されている。女性の社会進出や電化製品の普及は、家事労働にどのような変化をもたらすのか考えた。

第392回 2015年7月26日 言語から歴史を読み解く——南アジアを例にして

講師 吉岡 乾

参加人数 62人

内容 遺跡、古文書、口伝など、歴史を解明する手立ては様々あるが、言語も一つの手掛かりとなる。それは言語が、長い時間の中で少しずつ変化しながらも、親から子へと継承されて来ているものだからである。南アジアの言語地図などを例に、歴史を読み解いた。

第393回 2015年8月9日 温故知新——ネパールの1982年と2013年の映像から

講師 南 真木人

参加人数 47人

内容 みんなくが過去に映像取材をしたネパールの仮面作り、タイコ作り、金物商、穀物商を訪ね、30年後の景観、生業、暮らしの変化を再び映像に収めた。新旧の映像で構成されるビデオテーク新番組「カトマンドゥ盆地の30年」をご覧いただき、ネパールの変化と現在を考えた。

第394回 2015年8月16日 南太平洋のハカ（民族舞踏）の広がり

講師 丹羽典生

参加人数 54人

内容 ニュージーランドの先住民のあいだには、ハカという戦争の前に敵を威嚇するために行われる舞踏がある。現在でもラグビーの試合前のパフォーマンスとして広く知られている。本サロンでは、ハカがオセアニア各地のパフォーマンスとして広がっているさまについて紹介した。

第395回 2015年8月23日 みんなくで世界一周！——世界のいきものたちに会いに行こう

講師 池谷和信

参加人数 42人

内容 みんなくの展示場は、ぐるっと回ると世界一周ができるようにつくられている。今回は、生き物と人とのかかわりあいをテーマに展示場をまわった。オセアニアやアマゾンの鳥の羽根、アフリカのダチョウの卵、西アジアのラクダなど、展示場をフィールドとみだてて、そこから見つけた新たな事実を紹介した。

第396回 2015年8月30日 日本の焼肉文化考

講師 朝倉敏夫

参加人数 88人

内容 日本の焼肉は、朝鮮半島をルーツとするものの、日本社会において育てられてきた。ことに外食における「無煙ロースター」と家庭食における「焼肉のタレ」は日本が生んだ発明品である。韓国の焼肉との比較を通して、日本の焼肉文化を考えた。

第397回 2015年9月20日 デジタル技術でモノ（文化資源）を測る

講師 寺村裕史

参加人数 27人

内容 デジタル技術の進歩によって、リアルな「モノ（文化資源）」をデジタル化するさまざまな方法が開発されてきている。なかでも3次元レーザースキャナを使った3D計測は、考古学や文化財科学の分野でも、よく利用されるようになってきた。本サロンでは、ウズベキスタンや日本の遺跡を中心に、文化資源の3D計測の調査事例を紹介した。

第398回 2015年9月27日 アフリカ史の謎を解く

講師 竹沢尚一郎

参加人数 56人

内容 西アフリカ、ナイジェリア南部にイグボ・ウクウ遺跡がある。700点以上の銅製品と、15万個以上のガラスビーズが出土したことで名高い遺跡である。しかし、それらの作品を誰が、どこで作ったかはいまだに謎に包まれている。発掘調査を踏まえて、1つ1つ解き明かした。

第399回 2015年10月4日 中央アジアの30年——展示リニューアルへ向けて

講師 藤本透子

参加人数 38人

内容 2015年度末、中央アジア展示は約30年ぶりにリニューアルを行う。ソ連時代から中央アジア諸国の独立を経て、現地の暮らしは大きく変化した。展示場で当時の民家や花嫁衣裳をじっくりご覧いただきながら、暮らしの変化と伝統の再評価について考えた。

第400回 2015年10月11日 カナダ先住民のアート——イヌイットと北西海岸先住民を中心に

講師 岸上伸啓

参加人数 26人

内容 カナダのイヌイットや北西海岸先住民が制作した彫刻品や版画は、先住民アートとして世界中に広まっている。彼らのアート制作の歴史、作品のモチーフや特徴について紹介し、先住民にとってのアート制作の意義について考えた。

第401回 2015年10月18日 作られたアフリカ的なもの

講師 三島禎子

参加人数 37人

内容 人びとが誇るアフリカ的なもののなかには、外から運び込まれて出来上がったものがある。とくに植民地時代には宗主国の経済的な戦略のもとに、さまざまな習慣やものがアフリカに導入された。それらの経緯や、そこにある矛盾について解説した。

第402回 2015年10月25日 博物館の中の文化遺産、博物館の外の文化遺産

講師 飯田 卓

参加人数 13人

内容 民族誌博物館は、暮らしに息づく有形の文化遺産を保存し展示する役割を担っている。いっぽう、伝統的建造物群保存地区や文化的景観、無形文化遺産など、暮らしの場で保存される遺産も少なくない。両者をふまえて、暮らしに関わる文化遺産の問題を考えた。

第403回 2015年11月1日 オセアニアの食文化——パンの実とタロイモの料理

講師 須藤健一

参加人数 62人

内容 オセアニアの主食は、タロやヤムなどの根菜類とパンの実やバナナなどである。焼き、煮る、蒸すなどが基本的な料理法だが、搗いて餅状にしてココヤシミルクをかけるのがごちそうである。パンの実の内部はでんぷん質で、その発酵食品は航海など長旅の携帯食として欠かせない。サンゴ礁の人びとの食文化を探究した。

第404回 2015年11月8日 石毛さんに聞く：日韓の食文化研究

講師 朝倉敏夫

参加人数 107人

内容 石毛さんは韓国の食文化研究者とも親しくつきあって来られた。李盛雨、黄慧性、尹瑞石、金尚寶、韓福眞はじめ、韓国の食文化研究者との交流をふりかえり、日韓の食文化研究の回顧と展望をおこなった。

第405回 2015年11月29日 聖者崇敬からみたシリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナ

講師 菅瀬晶子

参加人数 65人

内容 中東のムスリムとキリスト教徒、ユダヤ教徒は、古来より共通する聖者の祝祭を共有することで、共存に役立ってきた。しかし今日、紛争などの理由により、その共存は危機に瀕している。聖者崇敬の視点から、共存の歴史と今後の展望を解説した。

第406回 2015年12月6日 東南アジアの1日

講師 信田敏宏

参加人数 23人

内容 新しくなった東南アジア展示では、東南アジア独特の魅力をより感じ取っていただけるよう、朝、昼、夕方、夜という4つの空間に展示品を盛り込んだ。1日という短い時間のなかに凝縮した東南アジアの魅力や人びとの暮らしぶり、展示の見どころについて解説した。

第407回 2015年12月13日 ベトナム、タイの台所

講師 樫永真佐夫

参加人数 43人

内容 東南アジア展示場に、ベトナムのタイの高床式住居内にある台所が再現展示された。囲炉裏がある台所は、家族の生活、儀礼や信仰とどのような関わりを持っているのか。再現展示のための資料収集の裏話なども含めて解説した。

第408回 2015年12月20日 タイ・ラオス仏教寺院の歩き方

講師 平井京之介

参加人数 43人

内容 3月に新しくなった東南アジア展示場に、タイ・ラオスの仏教寺院を再現するコーナーができた。展示ができるまでの紹介と、仏像や仏具の見方などの解説を行い、修行僧にとって、村人にとって、寺院がどんな意味をもつかを考えた。

第409回 2016年1月10日 バリ島の仮面作りと職人——命をふきこむ技と祈り

講師 吉田ゆか子

参加人数 48人

内容 バリ島の仮面芸能では、仮面が生き生きとした表情をみせることで観客たちを魅了している。こうした仮面はどのように作られるのか。今回は、仮面職人たちの思いや、工夫、祈りに注目しながら、彼らが仮面に命を吹き込むプロセスを考えた。

第410回 2016年1月17日 画像データベースで見る・学ぶ「近代日本の身装文化」

講師 丸川雄三

参加人数 18人

内容 近代日本における身体と装い（身装）を研究するための学術データベース「近代日本の身装文化」を紹介した。これは、当時の人々の様子が活写された新聞挿絵や絵画、写真などの画像資料を、解説やエッセイとともに学び、楽しむことができるウェブサイトである。

第411回 2016年1月24日 東南アジアの人形芝居——撮影裏話

講師 福岡正太

参加人数 39人

内容 音楽展示や東南アジア展示の新構築を目指して、東南アジア各地の人形芝居の映像取材や資料収集を重ねてきた。人形師や音楽家、計画に協力してくださった方々など、人形芝居に情熱と愛情を注ぐ多くの人々との出会いや現地でのエピソードなどを紹介した。

第412回 2016年1月31日 チョコレート博物館

講師 鈴木 紀

参加人数 63人

内容 フランス・ドイツ・ベルギー等のヨーロッパの国々や、コスタリカ・グアテマラ等の中央アメリカの国々にあるチョコレート博物館を紹介した。そして、これらの博物館の展示をもとに、チョコレートの食文化やカカオの持続可能な生産について解説した。

第413回 2016年2月7日 一神教の宗教、多神教の宗教

講師 新免光比呂

参加人数 77人

内容 世界にはさまざまな宗教があり、それぞれ独自の教えと儀礼と組織をもっている。これらを理解することは難しいが、宗教は文化形成の大きな力なので、多様な文化を理解するためには宗教を理解することが必要となる。それぞれの宗教を比較しながら解説した。

第414回 2016年2月14日 窓から「見ることができる」収蔵庫

講師 園田直子

参加人数 46人

内容 みんなくには34万点以上の資料があり、展示、貸出、閲覧・調査などに活用されている。資料の活用をささえるのは、適切な保管と保存である。ここでは、現在進めている大型民族資料収蔵庫の改修と再配架について、収蔵庫の窓越しに内部の様子を見ながら説明した。

第415回 2016年2月21日 宗教の始原をさぐる——南部アフリカ聖霊教会の現在（いま）

講師 吉田憲司

参加人数 63人

内容 1990年を境に、ザンビア東部州一帯で、人びとのキリスト教への入信と聖霊（Holy Spirit）の憑依が爆発的に増加した。私は、過去二十数年間、南部アフリカ全体を踏査し、その淵源を探ってきた。奇しくも、その旅は、宗教の始原を追跡する旅となった。南部アフリカにおけるキリスト教聖霊教会の現在（いま）を報告した。

第416回 2016年2月28日 人魚のミイラ——驚異と怪異の接点

講師 山中由里子

参加人数 85人

内容 民間信仰、見世物文化、博物学、経済史など様々な観点から「人魚のミイラ」について考察し、そこに見えてくる近世の日本と世界のつながりについて解説した。

第417回 2016年3月6日 夷酋列像をめぐる、人、物、世界

講師 日高真吾

参加人数 122人

内容 夷酋列像は、蝦夷錦と称される中国から渡来した絹織物や、西洋の外套や靴など北東アジアの交流によってもたらされた品々を身につけて立ち並ぶ12人のアイヌの有力者たちが描かれている。今回のウィークエンドサロンでは夷酋列像に描かれた器物を中心に紹介した。

第418回 2016年3月27日 ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査

講師 伊藤敦規

参加人数 27人

内容 2014年6月から開始した民博のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトについて、特にソースコミュニティの人びとを民博に招聘して実施している資料熟覧調査に注目しながら、内容と意義を分かりやすく紹介した。

研究公演

「ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤー」

2015年4月19日

解説 南 真木人、立川武蔵（名誉教授）

出演 プラジヨワール・ラトナ・ヴァジュラチャルヤ、岡本有子

参加者 120名

内容 ネパールのカトマンドゥ盆地にいらしてきたネワール人。その仏教僧侶カーストであるヴァジュラチャルヤは、修行のひとつとしてチャルヤーという舞踊を伝えてきた。動くヨーガともいわれるチャルヤーは、自己と宇宙を体感し、仏に近づく手段であるが、見る者にはまるで動く仏像のようである。解説をまじえ、チャルヤーの奥義を紹介した。

「時を超える南インドの踊り」

2015年11月22日

解説 寺田吉孝

出演 ナルタキ・ナタラージ ほか5名

参加者 434名

内容 バラタナーティヤムは、南インドのヒンドゥー寺院でおこなわれた奉納舞踊を起源とし、1930年代に舞台芸術として再生した舞踊ジャンルである。現在、インドを代表する古典舞踊ジャンルの一つとして、インド国内はもとより世界各地の南アジア系移民コミュニティでも盛んに実践されている。本公演では、カラクシェトラ様式とは異なる舞踊伝統を継承してきた舞踊家の一人、ナルタキ・ナタラージの舞踊を通して、インド舞踊文化の重層性や多様性を紹介した。

「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」

2015年12月6日

解説 福岡正太、吉田ゆか子

出演 イ・クトゥット・コデイ、イ・マデ・マハルディカ、ギター・クンチャナ+α、佐味千珠子、中野愛子
ほか

参加者 419名

内容 バリ島から、第一線で活躍中の舞踊家2名を迎え、仮面舞踊劇トベンを上演した。青銅製の打楽器を中心とする合奏ガムランを伴奏に、仮面を次々とつけかえて、いろいろな役を演じ分けていく様子をお楽しみいただいた。ガムラン演奏と歓迎の舞踊を担当したのは、西日本を中心に活躍する日本人のグループである。

みんなく映画会

2015年7月20日

インド映画特集【新展示（南アジア展示）関連】

「ファンドリー」

司会 杉本良男

解説 松尾瑞穂

参加者 443名

内容 舞台は、西インド・マハーラーシュトラ州の農村。村はずれに住む、不可触民の少年ジャビヤーの家族は、差別され、貧しい暮らしを余儀なくされている。高カーストの少女シャルーに恋心を抱いているが、話しかけられず、ただ見ているだけ。ジャビヤーは、幸せをもたらすといわれる黒い雀を見つけようと、友人と一緒に探し回るが…。少年の淡い恋心をベースに、いまだに根強く残るカースト差別という社会問題に迫る本作は、国際映画祭で数々の賞を受賞するとともに、インド映画界の名誉と言われるナショナルフィルムアワードの最優秀監督デビュー賞と最優秀子ども俳優賞を受賞した。

2015年7月25日

インド映画特集【新展示（南アジア展示）関連】

「カーンチワラム サリーを織る人」

司会 杉本良男

解説 杉本星子（京都文教大学教授）

参加者 327名

内容 舞台は、シルク・サリー生産で有名な南インド・タミルナードゥ州カーンチープラム（カーンチワラム）である。インド独立直後の1948年、手織りシルク・サリー職人が、当時の悲惨な労働環境のもとで、新婚の妻にさえ高価なシルク・サリーを贈ってあげられないほどの貧困にあえぎ、権力にはげしく抵抗しながら生活を改善しようと奔走するすがたをリアルに、美しい画像で描いた佳品。2008年度ナショナルフィルムアワード最優秀作品賞に輝いたほか、海外でもいくつかの賞を受賞している。残念なことにこの映画が制作されたころから、手織りシルク・サリーは急速にその勢いを失い始めている。

2015年8月2日

インド映画特集【新展示（南アジア展示）関連】

「Mr. & Mrs. アイヤル」

司会・解説 杉本良男

参加者 275名

内容 タミル・ブラーマンの若い母親ミーナクシとベンガル・ムスリムの写真家の男性ラージャがたまたま乗り合わせていたコルカタ行きのバスを、ヒन्दウー過激派が襲い、ムスリムの乗客をあぶり出そうとしたとき、二人がとっさの機転でタミル・ブラーマンのアイヤル夫妻（Mr. & Mrs. Iyer）を名乗り、その窮地を脱するまでの心の交流を中心に、宗教や地域などの違いによって分断されるインド社会の複雑な現状を鋭く批判している。西ベンガル州コルカタ生まれで、女優、監督として多くの問題作を送り出してきたアパルナ・センの監督作品で、複雑な状況を反映して、英語、ベンガル語、タミル語が使用されている。

2015年8月8日

インド映画特集【新展示（南アジア展示）関連】

「DDLJ 勇者は花嫁を奪う」

司会 杉本良男

解説 三尾 稔

参加者 448名

内容 インド系イギリス移民を主人公にヨーロッパとインドで繰り広げられる青春恋愛ドラマ。ヨーロッパ卒業旅行中にヒロイン、シムランと恋に落ちたラージ。しかし、シムランには生後直後に父が決めた許婚がいた。許婚との結婚のため里帰りしてしまったシムランをラージは追い掛け、一世一代の勝負に出る。コメディ・タッチの筋の中に、伝統的な家族の価値と個人の感情との葛藤というインドの古くて新しい問題を投げかけてくるこの作品は本国だけでなくインド移民の間でも空前の大ヒットとなり、インド映画の歴史を塗り替える金字塔となった。

2015年9月23日

台湾映画鑑賞会——映画から台湾を知る

「一八九五」

司会 野林厚志

解説 河合洋尚

参加者 620名

内容 近年、台湾では、多文化主義運動の影響を受け、客家や原住民を意識した映画が増加している。本映画は、初めて客家語を主体として、日本が台湾を植民地とした1895年の、台湾住民が日本軍に抵抗した当時の状況を描き出したものである。抗日戦線のなかでの客家を中心に、閩南人、原住民との関係をも描き、映画を通して台湾の「多民族的状況」を見ることが出来る。また、当時日本軍とともに軍医として台湾に滞在していた若き日の文豪・森鷗外の視点で、状況が語られていくのも注目するところである。

本邦初公開となる台湾映画「一八九五」を解説付きでご覧いただき、台湾への理解を深めていただいた。

2015年10月12日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈包摂と自律〉

「長江哀歌」

司 会 鈴木 紀

解 説 河合洋尚

参加者 468名

内 容 本館では〈包摂と自律〉のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施している。第7期は〈マイノリティ・ボイス＝少数派の声〉をキーワードに映画上映を展開した。今回は中国映画「長江哀歌」を上映し、三峡ダム建設で沈みゆく古都を舞台に、国家の発展や変化によって、土地や家、伝統文化が失われていく現代に生きる市井の人びとの姿を通して、社会の在り方を参加者とともに考えた。

2015年12月12日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈包摂と自律〉

「イロイロ むくもりの記憶」

司 会 菅瀬晶子

解 説 永田貴聖

参加者 220名

内 容 本館では〈包摂と自律〉のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施している。第7期は〈マイノリティ・ボイス＝少数派の声〉をキーワードに映画上映を展開した。今回はシンガポール映画「イロイロ むくもりの記憶」を上映し、1997年、アジア経済危機で不況の追い風が吹くシンガポールを背景に、ある少年とフィリピンから来たメイドとの交流の物語を通して、異国で働く出稼ぎ労働者とその状況について参加者とともに理解を深めた。

2016年1月10日

映画で知る東南アジア【新展示（東南アジア展示）関連】

「虹の兵士たち」

司 会 福岡正太

解 説 福岡まどか（大阪大学准教授・国立民族学博物館共同研究員）

参加者 216名

内 容 「貧しい子どもにも学ぶ権利がある。」1974年、スマトラ島の東に浮かぶブリトゥン島で、廃校寸前のイスラム小学校に10人の生徒が入学した。校舎はオンボロで、立派な隣の小学校とは比べ物にならない。しかし、新任の女性教師に「虹の兵士たち」と名付けられた子どもたちは、豊かな個性を発揮し、成長していく。急速な経済発展の陰で現代の東南アジア社会がかかえる課題とそこで生きる人びとについて、映画を通じて理解を深めた。

2016年1月24日

映画で知る東南アジア【新展示（東南アジア展示）関連】

「消えた画 クメール・ルージュの真実」

司 会 福岡正太

解 説 サムアン・サム（国立民族学博物館外国人研究員）

参加者 205名

内 容 1990年、リティ・パン監督は、朽ちかけた大量の映画フィルムを発見した。そこには、ポル・ポト率いるクメール・ルージュの宣伝映画が多く含まれていた。映画の中のポル・ポトの笑顔の裏で、虐殺や飢えの犠牲となった人びと。歴史の大波に飲み込まれながらも生き残った監督は、犠牲者が葬られた地の土と水で人形を作り、映像には残されていない彼ら1人1人の存在や体験を表現し、伝えようと試みた。急速な経済発展の陰で現代の東南アジア社会がかかえる課題とそこで生きる人びとについて、映画を通じて理解を深めた。

2016年1月30日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈包摂と自律〉

「あの日の声を探して」

司会 鈴木 紀

解説 中村唯史（京都大学大学院教授）

参加者 266名

内容 本館では〈包摂と自律〉のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施している。第7期は〈マイノリティ・ボイス＝少数派の声〉をキーワードに映画上映を展開した。今回はフランス＝ジョージア映画「あの日の声を探して」を上映し、1999年、ロシアに侵攻されたチェチェンを舞台に、両親を殺害され声を失った少年、自分の無力さに悩むEU人権委員会の女性職員、強制的に徴兵されたロシア青年の3人の姿に描かれた、戦況の中を生き抜くそれぞれ立場の違う人間の苦悩について、参加者とともに考えた。

2016年2月6日

みんなく映画会

「波伝谷に生きる人びと」

司会 日高真吾

解説 政岡伸洋（東北学院大学教授）、我妻和樹（監督）

参加者 213名

内容 本館では、東日本大震災以降、被災地の生活文化への支援を継続して実施している。現在、震災の記憶の風化や、震災以前の生活の記憶が失われつつあることへの課題が浮かび上がっている。そこで今回、震災以前から宮城県南三陸町波伝谷の生活を撮り続けてきた我妻和樹監督作品の「波伝谷に生きる人びと」を上映し、我妻監督と波伝谷の方々をお招きし、震災以前の生活や震災時の記憶がなぜ大事なのか、参加者とともに被災地の将来について考えた。

2016年3月20日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈包摂と自律〉

「サンドラの週末」

司会 松尾瑞穂

解説 宮下隆二（作家）、鈴木 紀

参加者 270名

内容 本館では〈包摂と自律〉のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施している。第7期は〈マイノリティ・ボイス＝少数派の声〉をキーワードに映画上映を展開した。今回はベルギー・フランス・イタリア合作「サンドラの週末」を上映し、ヨーロッパの小都市の小さな会社から突然の解雇を告げられた女性が、最後の猶予に賭けて奔走する週末を通して、様々な立場に立つ労働者と人間同士の信頼について考えた。

博学連携

●学習キット「みんなく」

学校機関や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として学習キット「みんなく」の貸し出しを実施している。「みんなく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにバックしたもので、2016年3月現在で14種類23バックを用意している。

名称	個数	2015年度貸し出し回数
極北を生きる	2	15
アンデスの玉手箱	2	25
ジャワ島の装い	1	10
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	14
ブータンの学校生活	1	6

ソウルスタイル	2	25
ソウルのこども時間	2	16
インドのサリーとクルター	2	12
プリコラージュ	3	2
アラビアンナイトの世界	2	9
アイヌ文化にであう	1	14
アイヌ文化にであう2	1	12
モンゴル	2	35
あるく、ウメサオタダオ展	1	6

●みんなく春と秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス

春のガイダンス 2015年4月3日(金)、6日(月)

秋のガイダンス 2015年8月21日(金)、24日(月)

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には32団体91名、秋には28団体79名、計60団体170名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、見学に関するさまざまな相談も受けた。

●職場体験

2015年10月28日(水)～11月19日(木)

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2015年度は6校12名の参加があった。

その他の事業

●「ミュージアムぐるっとバス・関西2015」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話会の一員として参画した。

●「音楽の祭日2015 in みんなく」

実施日：2015年6月21日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、本館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く本館を解放して開催することとなった。当日は25のグループや個人の演奏があった。

●展示場クイズ「みんなQ」

クイズ「みんなQ」は、展示を観覧しながら知識や興味を広げてもらおうと、クイズ形式で本館展示を楽しんでもらう企画である。

本館展示の新構築に合わせ、2015年7月23日(木)～8月25日(火)に「みんなQ 南アジア編」、2015年12月10日(木)～2016年1月12日(火)に「みんなQ 東南アジア編」を実施した。

●「みんなく×MBS ラジオ presents『韓日食博』を極める！」

韓国観光名誉広報大使や大阪観光大使を務め、テレビ・ラジオでも活躍するファッションモデルのアンミカ氏と毎日放送(MBS)アナウンサーの山中真氏、朝倉敏夫(本館教授・特別展実行委員長)による特別展「韓日食博」のトークイベントを2015年9月13日(日)に実施した(参加者数354名)。

●カムイノミ

実施日：2015年11月12日

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌ標本資料の安

全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。従来は萱野 茂氏（故人、萱野茂二風谷アイヌ資料館前館長）によって非公開でおこなわれていた。2007年度からは、社団法人北海道ウタリ協会（現 公益社団法人北海道アイヌ協会）の会員がカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施し、2015年度は阿寒アイヌ協会の協力を受けた。

●北大阪ミュージアムメッセ

2015年11月14日(土)、11月15日(日)に、北大阪の8市3町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、楽器の演奏等がおこなわれた。

●連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」

一般社団法人ナレッジキャピタルとの間に取り交わした連携協力協定に基づき、グランフロント大阪において連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」を、上半期は「世界の民芸」をテーマに、下半期は「世界の天然素材」をテーマに合計14回（うち2回は展示ツアー）開講した。

●北海道アイヌ協会技術者研修

1990年より本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的として、社団法人北海道アイヌ協会が派遣した伝統工芸技術者を外来研究員として受け入れている。2015年度の受入実績は以下のとおりである。

受入期間：2016年2月16日～2月19日

受入人数：2名

ボランティア活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年9月に発足した団体である。

来館者からの要望に応じておこなう視覚障がい者に対する展示場案内や、学校団体に対する教育プログラム「わくわく体験 in みんぱく」、一般来館者向けのものづくりワークショップなど、多岐に広がる活動を本館との協働で進めている。また、館外でおこなわれるワークショップフェスやボランティア交流会にも積極的に参加し、他の博物館や施設との交流を広めている。

一般財団法人千里文化財団の事業

●国立民族学博物館友の会講演会（協力：国立民族学博物館）

◎大阪：国立民族学博物館 第5セミナー室等（毎月第1土曜日開催）

第441回 「つくられる地域の食——スローフード発祥の地、イタリアから考える」【世界の食文化を学ぶ①】

2015年4月4日 講師 宇田川妙子 参加人数 44名

均質化する食に疑問を投げ、食の在り方を見直す動きが高まるなか、現代社会の様相が複雑に関係するローカルな食の形成についてイタリアを例に考えた。

第442回 「躍動する南アジアの背景にせまる」【新南アジア展示関連】

2015年5月2日 講師 三尾 稔 参加人数 46名

政治・経済、そして文化的にも「躍動」の時代を迎えている南アジア。その基盤にある「多様性の共存」という南アジアの特性を、宗教、文化、生活様式等から考えた。

第443回 「聖なる遺跡は物語る——アムール河の少数民族ナナイの神話をさぐる」

【企画展「岩に刻まれた古代美術」関連】

2015年6月6日 講師 佐々木史郎 参加人数 51名

企画展の開催にあわせ、少数民族ナナイの聖地シカチ・アリヤンの岩面画をたよりに、アムール河流域に伝わる神話世界について考えた。

第444回 「ヨーガの隆盛をさぐる——現代インドにおける『伝統』の再評価」【新南アジア展示関連】

2015年7月4日 講師 竹村嘉晃(現代インド地域研究国立民族学博物館拠点拠点研究員) 参加人数 48名
インドを発祥とし、近年あらたなエクセサイズとして注目されているヨーガをとおして、変化の著しい現代インドの文化・社会的な動態について考えた。

第445回 「インドを彩る日本のタイル——インド近代化遺産のもうひとつの物語」【新南アジア展示関連】

2015年8月1日 講師 豊山亜希(現代インド地域研究国立民族学博物館拠点拠点研究員) 参加人数 22名
イギリス植民地時代に建てられた「印洋」折衷様式の建築に注目し、インドにおける文化遺産の在り方と、近代における日本とインドの交流の足跡をたどった。

第446回 「日韓の汁文化と発酵食品」【特別展「韓日食博」関連／世界の食文化を学ぶ②】

2015年9月5日 講師 福留奈美(お茶の水女子大学専門食育士) 参加人数 46名
両国の汁物、漬物、発酵調味料をとおして、食材やその組み合わせ、盛り付け方や食べ方など、日韓食文化の類似点と相違点について考えた。

第447回 「『医食同源』の思想——中国の食と漢方」【世界の食文化を学ぶ③】

2015年10月3日 講師 池谷幸信(立命館大学特任教授) 参加人数 45名
古代中国医学は「食べ物が体を養う最大の薬」であるとし、漢方薬を構成する生薬の多くが植物に由来する。中国の医食同源の思想から生まれた漢方薬について考えた。

第448回 「移住がつくる客家の食」【世界の食文化を学ぶ④】

2015年11月7日 講師 河合洋尚 参加人数 37名
広大な面積をほこる中国では食文化も一様ではない。漢族の一集団・客家に着目し、食のグローバル化とローカル化について考えた。

第449回 「カナダの魚食文化——日本人移民との関わりから」【世界の食文化を学ぶ⑤】

2015年12月5日 講師 河原典史(立命館大学教授) 参加人数 35名
カナダの魚食文化、とくに現地でアレンジされたBCロールとよばれる寿司を切り口に、カナダに移り住んだ日本人移民の歴史について考えた。

第450回 「イスラーム化と向き合う先住民——新東南アジア展示から読みとく」【新東南アジア展示関連】

2016年1月9日 講師 信田敏宏 参加人数 43名
1980年以降、本格化されたマレーシアのイスラーム化政策が、精霊信仰・アニミズムを保持する先住民オラン・アスリ社会に何をもたらしたのかを考えた。

第451回 「博物館で食文化を考える——みんぱく展示場をフィールドに見立てて」【世界の食文化を学ぶ⑥】

2016年2月6日 講師 池谷和信 参加人数 39名
「調理をする」「食糧を分かち合う」ことに、人類文化としての共通性を見出し、展示場をフィールドに見立てて、各地域の食文化の在り方と食文化研究の動向を展望した。

第452回 「祖先とともに住まう家——インドネシア、スンバ島で家屋を建てる」

2016年3月5日 講師 佐藤浩司 参加人数 35名
スンバ島の家屋を事例に、建築構造や空間構成、家屋にまつわる慣習等に注目し、「家」のもつ文化的な意味について考えた。

◎東京：モンベル渋谷店5Fサロン

第111回 「『氷の島』に生きる人びと——グリーンランド・イヌイットの文化と歴史」

2015年4月11日 講師 岸上伸啓 参加人数 42名
展覧会「スピリチュアル グリーンランド」の開催に併せ、グリーンランド・イヌイットの歴史・文化背景を知ると同時に、環境問題やグローバル化との関係について考えた。

◎東京：モンベル渋谷店 5F サロン

第112回「インナータライにネパール近代化の縮図をみる——チトワン国立公園の開発を例に」

2015年6月14日 講師 南 真木人 参加人数 31名

1951年の「開国」とマラリア撲滅運動を機に、人口が流入したインナータライに着目し、ネパール近代化における社会変化の一端をさぐった。

◎東京：JICA 地球ひろばセミナールーム600

第113回「食の歳時記——ベトナム、黒タイの村から」

2015年8月23日 講師 樫永真佐夫 参加人数 30名

ベトナムの少数民族・黒タイの食を歳時記風に紹介し、食をとおして習慣や信仰、近隣諸民族との関わりについて考えた。

◎東京：JICA 地球ひろばセミナールーム600

第114回「チョコレートの文化誌——カカオと人の4000年の物語」

2015年10月10日 講師 八杉佳穂 参加人数 43名

スペイン征服以前、薬効や貨幣的価値をもち、交易や貢納の品として珍重されたカカオに着目し、カカオと人の4000年に渡る関係を概観した。

●みんぱく見学会（協力：国立民族学博物館）

第58回 展覧会「スピリチュアル グリーンランド」（会場：代官山ヒルサイドフォーラム）

2015年4月11日 講師 岸上伸啓 参加人数 30名

第59回 新南アジア展示

2015年5月2日 講師 三尾 稔 参加人数 46名

第60回 企画展「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン」

2015年6月6日 講師 佐々木史郎 参加人数 51名

第61回 新東南アジア展示

2016年1月9日 講師 信田敏宏 参加人数 43名

第62回 本館展示（オセアニア～アフリカ展示場内の食文化展示）

2016年2月6日 講師 池谷和信 参加人数 39名

●体験セミナー（協力：国立民族学博物館）

第70回「日本の食文化——昆布に親しむ」【シリーズ「世界の食文化を学ぶ（体験編）」①】

実施日 2015年6月25日 [大阪府]

講師 土居純一（「こんぶ土居」4代目）、飯田 卓

参加者数 37名

食と食を下支えする生業の両面から「昆布を食す（出汁利用する）文化」を考えた。

第71回「九州のなかの朝鮮文化を歩く——菓子、工芸、史跡にさぐる関係史」

【シリーズ「世界の食文化を学ぶ（体験編）」②】

実施日 2015年12月2日～3日 [2日間・佐賀県]

講師 村岡安廣（村岡総本舗社長）、朝倉敏夫

参加者数 31名

朝鮮半島に縁のある焼物や染織、飲食文化をとおして、日本と朝鮮半島の相互関係について考えた。

●民族学研修の旅（協力：国立民族学博物館）

第86回「チョコレートのあるさとを訪ねて——カカオと人の4000年をメキシコにさぐる」

実施期間 2016年2月13日～22日（10日間・メキシコ）

講師 八杉佳穂（民博名誉教授）

参加者数 24名

古代メソアメリカにおいて、薬効や貨幣的価値をもち、高貴な人びとに珍重されたカカオは、味や姿を変えながら現在もメソアメリカの人びとに親しまれている。カカオに縁ある遺跡や農園、宗教施設を巡り、メソアメリカの歴史的・民族文化的背景をさぐった。

●午餐会（協力：国立民族学博物館）

第200回「イスラーム国の来歴と中東の未来」

2015年7月17日（金） 参加人数 23名

講師 池内 恵（東京大学准教授） コメンテーター 須藤健一（館長）

イスラーム国が生まれた背景を、宗教や歴史、社会背景から捉えなおし、中東世界の今後を展望した。

●『季刊民族学』（国立民族学博物館友の会 機関誌）

協力：国立民族学博物館

編集・発行：千里文化財団

152号：特集「西欧社会の多様性」ほか（2015年4月25日発行）

153号：「楽器学の再創造」ほか（2015年7月25日発行）

154号：特集「泉靖一が歩いた道」ほか（2015年10月25日発行）

155号：特集「カレー料理とインド研究交友録」ほか（2016年2月25日発行）

●みんなくりに集積された資料と情報を活用した出前授業プログラム

実施日	実施場所	プログラム内容	参加人数
2016年1月20日	長岡京市立長岡第六小学校（放課後教室）	風呂敷	3名
2016年3月3日	豊中市立南丘小学校	風呂敷	32名

●巡回展「イメージのカ——国立民族学博物館コレクションにさぐる」の開催

会期：2015年6月27日～8月23日（50日間）

会場：郡山市立美術館企画展示室

主催：郡山市立美術館、国立民族学博物館、千里文化財団

企画：国立民族学博物館 国立新美術館 日本文化人類学会

助成：日本万国博覧会記念基金（公益財団法人 関西・大阪21世紀協会）

入場者数：8,447人

<関連企画>

1) 講演会「光と色が放つイメージ」

日時：2015年7月4日

講師：上羽陽子

会場：郡山市立美術館多目的スタジオ

参加人数：62名

2) 講演会「イメージのカ——みんなくりにコレクションが語るもの」

日時：2015年8月8日

講師：吉田憲司

会場：郡山市立美術館多目的スタジオ

参加人数：78名

3) ギャラリー・トーク

日時：2015年8月22日

講師：永山多貴子（郡山市立美術館主任学芸員）

会場：郡山市立美術館企画展示室

参加人数：25名

4) ワークショップ「野外彫刻を作ろう」

日時：2015年7月18日

講師：関根秀樹（和光大学講師・民族文化史研究家）

会場：郡山市立美術館多目的スタジオ

参加人数：20名

5) ワークショップ「民族楽器とサウンドオブジェを作ろう」

日時：2015年8月9日

講師：関根秀樹（和光大学講師・民族文化史研究家）

会場：郡山市立美術館多目的スタジオ

参加人数：20名

6) 映画会 特集：映画で楽しむ「イメージの力」

会場：郡山市立美術館多目的スタジオ

① 上映作品「キリクと魔女」

日時：2015年6月28日 参加人数：32名

② 上映作品「アフリカ物語」

日時：2015年8月16日 参加人数：51名

●カレッジシアター「地球探究紀行」の開催協力

会場：あべのハルカス近鉄本店ウイング館9階「スペース9」

主催：産経新聞社、共催：近鉄文化サロン、スペース9

特別協力：国立民族学博物館、千里文化財団

2015年4月15日 「南アジア、大躍動。その『からくり』と、これから」

講師：三尾 稔 参加人数：34名

2015年4月22日 「異種混淆の世界・東南アジア——インド文明と中国文明のはざままで」

講師：信田敏宏 参加人数：37名

2015年5月13日 「星と風と波と——オセアニアの偉大な航海者」

講師：須藤健一 参加人数：43名

2015年5月27日 「アムール河の古代岩画と神話——少数民族の聖地シカチ・アリヤン」

講師：佐々木史郎 参加人数：43名

2015年6月10日 「商人と布の移動からみる西アフリカ経済の変遷」

講師：三島禎子 参加人数：26名

2015年6月24日 「漆をつかう——漆工技術の継承」

講師：日高真吾 参加人数：31名

2015年7月8日 「チョコレートのご郷——メキシコと中央アメリカ」

講師：鈴木 紀 参加人数：40名

2015年7月22日 「武器をアートに——アフリカ・モザンビークにおける平和構築の営み」

講師：吉田憲司 参加人数：29名

2015年8月26日 「タイ・ラオスの仏教寺院——その伝統と文化」

講師：平井京之介 参加人数：42名

2015年9月2日 「政府をフィールドワークする!? ——明治以来の110年ぶりの大改革と日本の官僚文化」

講師：出口正之 参加人数：43名

2015年9月16日 「『聴き語り』の芸能——平家物語、瞽女（ごぜ）唄からブルースまで」

講師：廣瀬浩二郎 参加人数：63名

2015年9月30日 「台湾のイノシシ猟——日本のイノシシ猟と比較しながら」

講師：野林厚志 参加人数：34名

2015年10月14日 「太平洋の島へことばの調査に行く」

講師：菊澤律子 参加人数：29名

2015年10月28日	「応援をめぐる旅——ニュージーランドのハカから日本の大学応援団まで」	
	講師：丹羽典生	参加人数：24名
2015年11月11日	「インド染織文化の今——村落から世界へ」	
	講師：上羽陽子	参加人数：24名
2015年11月25日	「みんぱくコレクションに見る世界のイスラーム」	
	講師：山中由里子	参加人数：28名
2015年12月9日	「カザフの食文化——草原の恵みと人生儀礼」	
	講師：藤本透子	参加人数：30名
2015年12月16日	「ユートピアの遺跡を訪ねて——ボリビア・パラグアイ・アルゼンチン」	
	講師：齋藤 晃	参加人数：33名
2016年1月13日	「インドの家族とのかたち、いま・むかし」	
	講師：松尾瑞穂	参加人数：31名
2016年1月27日	「中国の世界遺産建築——円形土楼と囲籠屋」	
	講師：河合洋尚	参加人数：35名
2016年2月3日	「パキスタンの山奥でことばを調べる」	
	講師：吉岡 乾	参加人数：29名
2016年2月24日	「南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き」	
	講師：印東道子	参加人数：32名
2016年3月9日	「中国鵜飼い探訪記——消えゆく前にみてもよう」	
	講師：卯田宗平	参加人数：34名
2016年3月23日	「ダンジリの系譜」	
	講師：笹原亮二	参加人数：31名

●その他、普及活動

- ① 国立民族学博物館オリジナルグッズの制作及び頒布
 仮面をモチーフにしたTシャツ、クッキー
 あいさつ&ありがとう スタンプ（アイヌ）
- ② 国立民族学博物館活用術ちらしの制作及び周辺施設への設置

6 研究戦略センター

研究戦略センターの設立の趣旨と経緯

研究戦略センター（英語名 Center for Research Development）は、2004年4月に行われた国立大学と大学共同利用機関の法人化に伴う、国立民族学博物館の改組の一環として生まれた組織である。本館が所属する大学共同利用機関法人人間文化研究機構の組織規程には、本センターの設立目的について、「文化人類学及び関連諸学に関する研究動向並びに社会的要請を把握し、研究戦略の策定を行うため、研究戦略センターを置く。」（『人間文化研究機構組織規程』第25条4項）と記されている。また、同機構の中期計画にも、「国内外の研究動向及び社会的要請を把握し研究戦略を策定するための「研究戦略センター」―後略」とある（人間文化研究機構第1期中期計画I-1-(2)-(カ)（2009年12月24日変更））。すなわち、本センターの主要な任務は、国立民族学博物館の中心的な研究分野である文化人類学、民族学とその関連諸分野の研究動向と社会的な要請を、国内だけでなく国際的にも調査、把握し、その上で、館の研究戦略を策定することにある。2015年度の主な活動は以下のとおりである。各事項の詳細は『研究戦略センター活動報告』に譲る。

2015年度の活動概要

1. 研究戦略の策定

- 1) 2015年度に実施されたりサーチ・アシスタント4名による「先住民による稀少な自然資源の利用の環境人類学」、「カナダにおける博物館とソースコミュニティの連携」、「中国の食——1949年以降の大陸を中心とする——」、「チャイナタウン（Chinatown）日本と欧米における再開発を中心に」に関する研究動向調査について成果公開として、2015年10月14日、11月11日、2016年3月9日に報告会を実施した。
- 2) 海外の特色のある研究所、あるいは先端的な研究を展開している拠点や機関について、その研究動向を調査した。イギリス、オランダに派遣された浜田（機関研究員）は、ヨーロッパにおけるグローバルヘルス、オランダにおける医療人類学研究の動向を調査した。オーストリア、フィリピンに派遣された永田（機関研究員）は、オーストリアにおける東アジア・東南アジア・日本研究、フィリピン首都圏主要大学における韓国研究に関する動向を調査した。スペインに派遣された八木（機関研究員）は、スペインにおけるラテンアメリカ地域に関する人類学的研究に関する動向を調査した。なお、浜田は現地で開催された研究大会に出席した。
- 3) 2009年度より開始した「みんぱく若手研究者奨励セミナー」について2015年度は「伝承と身体をめぐる文化人類学」をテーマとして設定し、参加者を公募した。全国から8名の若手研究者が参加し、施設見学と研究発表を合わせて、2日間のセミナーを行った。優秀発表者に対して「みんぱく若手セミナー賞」を授与し、セミナー後はアンケート調査を行った。
- 4) 2007年度より開始した「学術潮流サロン」について、2015年度は「公共人類学×公共社会学——学問と社会のつながりを考える」と題して、外部から研究者2名を講師として招聘し、公開セミナーを開催した（参加者80人）。

2. 研究プロジェクトの企画・立案・運営

- 1) 2009年度に、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（MINDAS）事務局が設置されるにあたって、研究戦略センターはその設立準備を支援してきた。2010年度より同拠点のプロジェクトが本格始動し、研究戦略センターは、2015年度もひきつづきその運営や研究活動を支援した。
- 2) 前年度にひきつづき、外部資金による研究助成に関する情報をメールにて随時、教員に通知するとともに、ウェブにて情報提供した。
- 3) 科学研究費補助金説明会として、外部から講師を招き、科研応募に関する説明会を行うとともに、研究協力課が科研費応募の手続きと使用のための説明会を催した。

3. 研究プロジェクト・研究体制の評価について

- 1) 2014年度人間文化研究機構業務実績報告書の本館分担当部分の作成を支援し、あわせて資料編を作成した。
- 2) 2006年度から行っているウェブサイトでのプロジェクトごとの研究活動の実績紹介を、引き続き行った。研究成果公開プログラムによる館の国際的なシンポジウムや研究フォーラム、ワークショップなどの活動実績についても明示し、『研究戦略センター活動報告2015』にも報告した。

4. 他の研究機関との連携、協力

- 1) 2011年度に締結された学術協定に基づき、日本文化人類学会と本館との連携として、民博が開催した国際ワークショップへの日本文化人類学会の後援、日本文化人類学会が主催した大会への民博の協力を行った。
- 2) 2006年よりメンバーとなっていた地域研究コンソーシアムに関して、2008年度からは幹事組織として研究戦略

- センター長を理事として、センター教員2名を運営委員として派遣している。この体制を本年度も継続した。
- 3) 2015年11月29日にアキバ・スクエアにおいて開催された大学共同利用機関シンポジウム2015に、本館は教員1名（講演題目「パキスタンの山奥で言語を調べる」）および研究戦略センターの教員1名を派遣し、展示ブースを開設し、本館の研究と活動を紹介した。
 - 4) 追手門学院大学、株式会社海遊館ニフレル、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所と協定を締結した。

5. 研究活動の情報収集と公開

- 1) 教員の個人業績の集積を引き続き行った。
- 2) 共同研究や機関研究の研究成果の集積を行い、評価のための基礎資料とした。
- 3) 『研究年報2014』を発行した。
- 4) 『研究戦略センター活動報告2014』を発行した。
- 5) 公開講演会を東京（2015年11月13日）と大阪（2016年3月25日）で開催した。
- 6) 2008年度に学術情報リポジトリ委員会が発足し、2009年度から公開しているリポジトリの、コンテンツの登録と許諾取得の作業を順次進めた。

7 文化資源研究センター

文化資源研究センターの設置目的

文化資源研究センター（英語名 Research Center for Cultural Resources）は、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて調査や研究開発をおこなうとともに、実際に事業を推進する際の企画・調整をおこなうことを目的として、2004年4月に設置された。

文化資源には、人間の文化にかかわるさまざまな有形のモノやそれについての情報のほか、身体化された知識・技法・ノウハウ、制度化された人的・組織的ネットワークや知的財産など、社会での活用が可能な資源とみなされるものが広く含まれる。こうした文化資源を人類共有の財産とすることで、グローバル化する世界で人びとが異なる文化への理解を深め、互いに共生していくための基盤を作り出そうというのが、文化資源研究センターのめざすところである。文化資源研究センターは、独自に研究事業を企画・運営するほか、文化資源関連事業として、館内、館外の研究者が参画して実施する多様な文化資源プロジェクト等の企画・調整を通して、文化資源の運用全般に寄与することを役割としている。

文化資源研究センターの研究事業

2015年度に文化資源研究センターが独自に実施した研究事業の概要は以下のとおりである。

- 文化資源研究センター会議を定期的実施し、文化資源プロジェクトの運営、進捗状況の確認、標本資料・映像音響資料等の管理・運用にかかわる協議をおこなった。
- 「情報統合型メディア展示の新構築」計画の策定に伴い、ビデオテークの更新案を作成するための情報をインフォメーションスタッフから収集するとともに、アンケートの設計をおこない、ビデオテークブースにて調査を開始した。また、ビデオテークについて直感的に理解してもらえるようなビデオ映像を制作した。
- 標本資料約34万点の資料管理名の重複を検証し、約5万件の標本資料名の英訳作業を実施し、標本資料データベースの多言語環境の整備のための準備をおこなった。
- 文化資源研究センターの研究員1名をカナダへ派遣し、博物館資料保存・管理に関する実践的研究活動の動向調査をおこなった。
- 文化資源研究センターの教員1名を台湾、フランス、イギリスへ派遣し、民族誌映画の製作・公開に関する国際的な状況を調査し、当該分野の専門家を対象にして情報交換をおこなった。
- 『文化資源研究センター活動報告2014』を発行した。
- イコム日本委員会 2015年度委員会・総会に出席した。

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。

また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、文化資源研究センターや情報管理施設の専門スタッフの支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2015年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1. 運営体制

1) 文化資源関連事業の体制整備

2009年度から再編を実施した文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」の3種類の 카테고리によって運用した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2) 本館展示新構築の体制整備

本館展示総括チーム及び各展示プロジェクトチームのリーダー等からなる拡大展示専門部会を開催し、新構築を円滑に進めた。

2015年度新構築分（中央・北アジア展示、アイヌの文化展示）について、実施設計に続いて展示施工をおこなった。

2. 文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクトは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の第2期中期目標・中期計画に沿って、本館の大学共同利用機関法人としての共同利用基盤を整備するとともに、本館あるいは関連する他機関が所有する学術資源の体系化を進め、共同利用を促進し、学術的価値を高めるための研究プロジェクトである。

プロジェクトは、5つの分野（調査・収集、資料管理、情報化、展示、社会連携）にかかわる研究開発、または研究成果の前記5分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

1) 調査・収集分野

ネパール関連のビデオテーク番組の制作

提 案 者：南 真木人

2013年度に撮影した素材を用いて、ネパール関連のビデオテーク番組1本および研究用映像（長編番組）1本を制作した。また、2016年1月に2週間ネパールにおいて映像取材をおこない、楽師カースト・ガンダルバの社会変化およびボカラ市のパイラヴ仮面舞踊に関する映像を撮影し収集した。

在日コリアン音楽の現状に関する映像取材

提 案 者：寺田吉孝

在日コリアンの音楽活動に関する映像取材を、彼らの集住地域（大阪市生野区、東京都豊島区）と活動地域（大阪府堺市、東京都小平市）において、計7回（11日間）実施した。

日本各地の軽業系民俗芸能に関する映像取材

提 案 者：笹原亮二

2016年9月開催の特別展「見世物大博覧会」における軽業のコーナーにおいて公開を予定している全国各地の軽業系民俗芸能のうち、継獅子（愛媛県今治市）・くも舞（秋田県湯上市・男鹿市）・つく舞（茨城県竜ヶ崎）・囃子曲持（神奈川県川崎市）梯子虎舞（岩手県大船渡市）に関する映像取材を実施した。

中国雲南省の少数民族の儀礼とキリスト教文化に関する映像番組の編集

提 案 者：横山廣子

本館の文資プロジェクトでこれまでに取材した映像素材を編集し、中国雲南省の少数民族に関するビデオテーク番組を製作する2ヵ年計画の2年目であり、今年度は、短編4本および長編1本を制作した。

言語展示場の部分改修に伴う手話言語に関するビデオテーク番組製作

提 案 者：菊澤律子

言語展示場の入口にあるイントロダクション・ビデオのうち、「手話のはなし」について、不正確な部分を修正し、内容のアップデートをおこなった。

ビデオテーク番組「フィリピン北部バルバラサン村の音楽とくらし」（仮題）の編集

提 案 者：寺田吉孝

2008年度のフィリピン・ルソン島山間地域に住むカリंगाの音楽に関する映像素材に基づき、ビデオテーク番組「フィリピン北部バルバラサン村の音楽とくらし」を制作した。

研究公演「アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」に基づいたマルチメディア番組の製作

提 案 者：寺田吉孝

2014年7月20日に民博講堂で開催した研究公演「アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」の映像記録素材を編集し、マルチメディア番組（日本語版、英語版）を制作した。

和太鼓の製作プロセスに関する長編番組の製作

提 案 者：寺田吉孝

2014年度に文資プロジェクトとして実施した和太鼓の製作に関する映像取材で収集した素材をもとに長編番組を編集した。

カンボジアの大型影絵芝居スバエク・トム全7夜の上演記録映像（英語字幕版）の制作

提 案 者：福岡正太

カンボジアの音楽研究の第一人者であるサムアン・サム教授（パンニャシャストラ大学）と共同で、大型影絵芝居スバエク・トム全7夜上演記録映像に英語字幕を付した番組を制作した。

「ラージャスターン州の生活・信仰・儀礼」に関する映像資料の編集と現地語版の作成

提 案 者：三尾 稔

ラージャスターン州の生活、信仰、儀礼に関する本館所蔵映像音響資料のヒンディー語版の製作をおこなった。また、既存のマルチメディア・コンテンツ番組「ラージャスターン州メーワール地方のくらしと信仰」の充実

を図り、その解説画面等の加筆をおこなった。

展示記録映像のあり方に関する実践的研究

提 案 者：日高真吾

昨年度までに確立した、展示記録パノラマ映像として必要な撮影ポイントの設定、及びコンピュータでの効率的な展示場再現が可能な画像の製作方法に習いパノラマムービーを製作した。展示資料の画像や詳細データを効率よく配置することにより Web 上で展示空間を違和感なく閲覧できるコンテンツとなった。

2) 資料管理分野

有形文化資源の保存・管理システム構築

提 案 者：園田直子

本プロジェクトでは、①有形文化資源の保存対策立案：総合的有害生物管理の考えに基づいた生物被害対策、②資料管理のための方法論策定：博物館環境の調査、収蔵庫の狭隘化対策、これら資料管理に関わる基礎研究・開発研究と事業を企画、実施、統括した。

東日本大震災で被災した文化財の保管環境に関する調査研究 4

提 案 者：日高真吾

新潟県村上市奥三面歴史交流館収蔵庫、宮城県気仙沼市旧月立中学校の文化財一時収蔵庫について、軽微な改修による効果を生物生息調査、塵埃調査、浮遊菌調査、有機酸等の空気環境調査の観点から検証し、その効果を明らかにした。

3) 情報化分野

京都大学学術調査隊写真コレクション・データベースの公開

提 案 者：吉田憲司

2011年度から館内公開をしていた「京都大学学術調査隊写真コレクション・データベース」について、テキスト情報の付与や写真資料追加等により内容を充実させた。更に、著作権処理の完了した22,316件の写真資料を「国立民族学博物館所蔵 京都大学学術調査隊写真コレクション・データベース」として2016年3月に一般公開した。

「大島襄コレクション」の整理とデータベース作成

提 案 者：飯田 卓

本プロジェクト予算では、写真資料用の包材の購入とデータベースの作成準備を進めた。また、5,272コマのデジタル化を別経費にて実施した。

「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成

提 案 者：三尾 稔

アーカイブ資料に含まれるスライド写真のうち、デジタル化が未完了分のデジタル化を完了させた。その後、受け入れたスライド写真を全て収納用に梱包し、スライド写真収蔵庫に収めた。一方、外部資金を活用してスライド写真に関するテキスト情報の作成を進めて完了させた。デジタル写真データとテキスト情報を統合し、データベースを完成させ館内公開をおこなった。

佐々木高明（名誉教授）による写真資料の学術情報化プロジェクト

提 案 者：池谷和信

本年度は、すでにネガのデータ化が終了しているので、昨年度と同様に日本の焼畑の専門家に来館していただき写真の分析をおこなった。また、申請者は、佐々木高明氏のフィールドワークの原点ともいえる熊本県五木村を訪問して、写真に登場している古老に会うことができた。そこでの情報を得ることから、佐々木氏の撮影した写真類の構成を把握することができた。これによって、公開のための基礎的準備が整備されたことになる。

食文化データベース構築のための事前調査：立命館大学との学術交流協定に基づく

提 案 者：朝倉敏夫

立命館大学の国際食文化研究センターに所属する教授と共同で、両機関において食文化研究を推進するための一事業として、食文化データベースを構築するための事前会議を実施した。

三次元 CG を利用した民族建築デジタルアーカイブの構築

提 案 者：佐藤浩司

これまで文化資源プロジェクトで作製されたインドネシア諸民族の木造民家の三次元 CG はおよそ50点にのぼる。これら資料のデータベースを公開するにあたって、実際の図面と齟齬がある CG の修正をおこなった。

アチックミュージアム旧蔵資料の体系的整理と資源化

提 案 者：朝倉敏夫

創設時に民博が文部省史料館から受け入れた資料のうち、情報がわからなかったため未登録だったものの素性を、資料台帳との照合などにより明らかにした。

4) 展示分野

中央・北アジア展示及びアイヌの文化展示の新構築

提 案 者：吉田憲司

2008年度より開始した本館展示の全面的な新構築の最終年次にあたる2015年度は、「中央・北アジア」展示および東アジアの「アイヌの文化」の展示の新構築を実施し、2016年3月17日に公開予定であった。

南アジア展示及び東南アジア展示用電子ガイドコンテンツの製作

提 案 者：福岡正太

「南アジア展示」「東南アジア展示」の新構築に伴い、新たに必要となった電子ガイド用コンテンツ（日本語、英語、中国語、韓国語）を制作した。また、番号プレートを展示場に設置し来館者へのサービスを開始した。

特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」

提 案 者：朝倉敏夫

2013年度には日本の「和食」と韓国の「キムジャン文化」がユネスコ無形文化遺産に登録され、日韓両国において、「食」文化への関心が高まっている。また、2015年は日韓外交正常化50周年にあたる年であった。そうした状況において、韓国国立民俗博物館と共同で「食」をテーマとした特別展を開催した。

会 期 2015年8月27日～11月10日

会 場 特別展示館

主 催 国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

共 催 大阪工業大学、京都造形芸術大学、韓国藝術総合大学

協 力 大阪韓国文化院、一般財団法人 千里文化財団

助 成 韓国国際交流財団、日本万国博覧会記念基金（公益財団法人 関西・大阪21世紀協会）、公益財団法人 日韓文化交流基金

入 場 者 29,834人

実行委員長 朝倉敏夫

実行委員 (館内) 丸川雄三、金昌鎬 (外国人研究員)、林 史樹 (特別客員教員)

(館外) 守屋重記子 (女子栄養大学)、李 エリア (早稲田大学)、奇 亮 (韓国国立民俗博物館)、金 永才 (韓国国立民俗博物館)、安 廷允 (韓国国立民俗博物館)

特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」

提 案 者：日高真吾

本展示は、蠣崎波響筆「夷酋列像」の実像を明らかにするとともに、この絵画が描かれた18世紀の蝦夷地とその国際性を広く紹介するものであった。

会 期 2016年2月25日～5月10日

会 場 特別展示館

主 催 国立民族学博物館、「夷酋列像」展実行委員会 (北海道博物館、一般財団法人北海道歴史文化財団、北海道新聞社)、国立歴史民俗博物館

協 力 ブザンソン市 (フランス)、松前町、一般財団法人千里文化財団

後 援 在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本、外務省、文化庁、北海道教育委員会、公益社団法人北海道アイヌ協会、NHK 大阪放送局

実行委員長 日高真吾

実行委員 (館内) 佐々木史郎、齋藤玲子、野林厚志、吉田憲司

(館外) 吉本 忍 (国立民族学博物館名誉教授)、内田順子 (国立歴史民俗博物館)、横山百合子 (国立歴史民俗博物館)、右代啓視 (北海道博物館)、山際晶子 (北海道博物館)

企画展「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」

提 案 者：佐々木史郎

ロシア連邦ハバロフスク地方のアムール河の河畔に残る古代の岩面画と、それを聖地、聖なるものとして今でも守り続ける先住民族ナーナイとのかかわりを、岩面画の拓本とナーナイの民族資料とともに紹介した。

会 期 2015年5月21日～7月21日

会場 企画展示場
主催 国立民族学博物館
共催 新潟県立歴史博物館 横浜ユーラシア文化館
協力 NPO ユーラシアンクラブ、北方ユーラシア学会、NPO アンコール・ワット拓本保存会、ロシア連邦ハバロフスク地方シカチ・アリヤン村、NPO メデ・センター、ロシア北方先住民協会ハバロフスク地方支部
後援 在大阪ロシア連邦総領事館、在新潟ロシア連邦総領事館
実行委員長 佐々木史郎
実行委員 (館外) 浜田晋介(日本大学)、宮尾 亨(新潟県立歴史博物館)、畠山 禎(横浜ユーラシア文化館)、井出晃憲(京都大学)

特別展「大見世物展——騙るカラダ 騙るモノ(仮題)」の準備

提 案 者: 笹原亮二

2016年9月開催の特別展「見世物大博覧会」の開催に向けて、展示内容の検討、展示資料の選定、各地の博物館・資料館との資料借用の交渉などをおこない、基本的な展示の内容と構成を確定した。

2017年度企画展「カナダにおける先住民文化の過去、現在、未来」(仮題)の準備

提 案 者: 岸上伸啓

2017年に建国150周年の節目を迎えるカナダにおける国家と先住民の関係の変遷を歴史的に検証し、カナダにおける先住民文化の過去、現状そして未来について紹介する2017年度企画展の準備を実施した。

ビデオテークと標本資料関連データベースの連携と活用

提 案 者: 福岡正太

本研究は、国立民族学博物館が収蔵する映像資料や標本資料の情報を館内外で手軽に閲覧できる「みんなくデジタルビューア」の実現に向けた技術的検討をおこなうものである。2015年度は、ビデオテークを組み込んだデジタルビューアを民博館内にて試験公開し、試作したコンテンツおよびインタフェースについて問題のないことを実証した。

みんなく電子ガイドのユニバーサル対応コンテンツの試作

提 案 者: 福岡正太

より多様な人々にみんなく電子ガイドによる情報提供をおこなうため、主に聴覚障がいをもつ利用者を想定して、既存のコンテンツに実験的に字幕を付与した。

屋内位置情報技術を用いた統合電子ガイドの研究と開発

提 案 者: 福岡正太

携帯端末で提供する次世代みんなく電子ガイドについて、携帯端末向け位置情報技術である iBeacon を用いた来館者の現在位置に応じて情報を提供できる環境を整え、実用レベルに準ずる環境の整備を目指した。

次世代ビデオテーク更新案の作成

提 案 者: 福岡正太

ビデオテークの更新に向けて、利用者アンケートを設計して実施を開始した。また、インフォメーションスタッフ等へのヒアリングに基づき、来館者によるビデオテーク利用への心理的抵抗を減らすため、利用をうながす映像を実験的に制作した。

次世代ユニバーサルミュージアム展示空間における多様な来館者の知覚鑑賞開発と評価研究

提 案 者: 吉田憲司

次世代ユニバーサルミュージアムにむけ、国の法律等からの外部評価、有識者や市民からの第三者評価、自己評価を統合する評価システムを構築した。また、この作業と連動するかたちで、多様な来館者に対応する展示空間内の動線誘導(モビリティ)手法の開発を進めた。

特別展「東日本大震災の展示(仮題)」の準備

提 案 者: 竹沢尚一郎

特別展「東日本大震災の展示」の実施に向けて、民俗資料の選び出しと、展示紹介用パンフレットの作成をおこなった。

企画展『One Road——オーストラリアの砂漠が生んだアボリジニ・アート(仮)』準備

提 案 者: 丹羽典生

本展示は、オーストラリア先住民のアボリジニ・アートを通じてオーストラリア史を問い直すとともに、オーストラリアにおける先住民社会の過去から現在までの変化を視野に入れつつ、絵画に映像資料を交えて紹介す

るものである。

言語展示場の部分改修

提案者：菊澤律子

手話言語による語りやお話の映像、世界12手話言語の単語が比較できるデータをビデオテープの番組として製作し、公開した。言語展示場には日本手話三方言による「ももたろう」の出だしの部分を展示してあるが、それぞれの全編、および他の語りについては、時間をかけてゆっくり観覧してもらえるように、ビデオテープの番組として作成した。

5) 社会連携分野

カムイノミ及び重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」演舞の実施

提案者：齋藤玲子

当館所蔵のアイヌの標本資料の保管と伝承を祈るカムイノミをおこない、併せてアイヌ古式舞踊の演舞を実施する。また、工芸品製作の実演と解説をする「アイヌ工芸 in みんなく」を開催し、より深くアイヌ文化に親しむ機会を提供した。

みんなく改訂版制作

提案者：上羽陽子

学校機関や各種社会教育施設を対象に貸出をおこなう学習キット「みんなく」は、パック制作後10年を耐用年数とし、また、時代に即した内容にするためにも改訂をおこなう必要がある。2015年度は「アンデスの玉手箱（2002年度制作）」「インドのサリーとクルター（2002年度制作）」を改訂した。

3. 文化資源計画事業

「文化資源計画事業」は、研究成果を普及することを目的とした事業で、2つの分野（資料関連、展示・社会連携）に分けられる。

1) 資料関連分野

「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と制作：韓国国立民俗博物館との交流事業

2015年度は、4年計画の3年次として、本館「朝鮮半島の文化」に関する映像資料収集の新たなシステムを構築するため、韓国国立民俗博物館との交流協定に基づき協議をおこない、韓国学中央研究院大学、中央大学、ソウル芸術大学で映像人類学を専攻する学生たち3チームに研修を受けさせ、2016年3月までに作品を制作、提出させた。今後、本館においてビデオテープ番組として編集する予定である。

標本資料の寄贈受入

- ・中国青海省西寧市互助土族自治县に居住するトゥー（土）族の女性の衣装と付属品の寄贈を受け入れた。
- ・中国青海省のチベット仏教信者が持仏入れ容器に入れる小型のカード状仏像写真と「カタ（礼布）」と呼ばれる白い布の寄贈を受け入れた。
- ・中国地域少数民族生活資料の寄贈を受け入れた。そのうち、「ヤオ族（「盤瑤」）女性用衣服」は故竹村卓二本館名誉教授が、広東省乳源瑶族自治县を訪問した際に現地の政府から寄贈を受けたものである。
- ・日本では、現物がほとんど知られていないクロテンという動物の毛皮を展示場で広く公開することで、極東地域の文化理解を促進することに意義があるため、ロシアクロテン毛皮資料の寄贈を受け入れた。
- ・チェンマイ国立博物館のニタヤー・カノックモンコン館長がタイ国チェンマイで入手したタイ祭祀用人形を、本館への標本資料として寄贈され受け入れた。
- ・アメリカ南西部先住民ホビ製木彫人形資料の寄贈を受け入れた。アメリカ南西部先住民ホビが制作した2体の木彫人形が寄贈されたことにより、既存の約280体の同様の資料との比較研究の対象となった。
- ・国立民族学博物館所蔵資料として「北海道アイヌの儀礼具等資料」の寄贈を受け入れた。
- ・2014年度の秋季企画展「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」を開催するために国立グリーンランド博物館文書館が展示に使用したカラーヒット民族（グリーンランド・イヌイット）制作のドラムとバチの寄贈を受け入れた。
- ・国立民族学博物館所蔵資料として「インド撥弦楽器（シタール）、土人形、コイン等」の寄贈を受け入れた。
- ・国立民族学博物館所蔵資料としてフィンランドの民族楽器カンテレ（ツィター属の撥弦楽器）1点の寄贈を受け入れた。
- ・国立民族学博物館所蔵資料として、モンゴルの社会主義時代に、子供をたくさん産んだ母に与えられるメダルと、トゥバ共和国のメダル習慣を踏襲した近年のメダルの寄贈を受け入れた。
- ・国立民族学博物館所蔵資料として「北海道アイヌの刺しゅう入り袋物資料」の寄贈を受け入れた。

- 国立民族学博物館所蔵資料として「ロシア・アイコンとチェコ・復活祭用卵、とうきび人形、ルーマニア・バグパイプ」の寄贈を受け入れた。
- 国立民族学博物館所蔵資料として「標交紀所蔵 世界のコーヒー器具コレクション」の寄贈を受け入れた。
- 故江口教授の収集した貴重なマリ共和国の土器（靈魂受入用）の寄贈を受け入れ、国立民族学博物館のアフリカ資料の充実を進めた。
- 中央・北アジア展示新構築へ向けて、贈答用の布やスカーフ、装身具などを受け入れた。これらの資料は、「中央アジア」セクションの「カザフ草原のくらし」「イスラームと人生儀礼」で活用される。
- 中央アジアとその近隣地域に関わる資料を充実させるため、手刺繍が施されたアフガニスタンの衣装の寄贈を受け入れた。民族は特定できていないが、アフガニスタンから中央アジアにかけて居住するトルクメンの衣装と類似性が高い。緻密な手刺繍をおこなう人は現在では少なくなっており、現地の生活文化を伝える貴重な資料である。
- 2015年5月21日に開催された企画展『岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン』の開幕式にて、シカチ・アリヤン村のヴィクトリア・ドンカン氏から寄贈されたロシアシカチ・アリヤン村ナーナイ民族関連資料5種類12点を受け入れた。
- 収蔵点数の少ないロシア・極北の資料を充実させ、より効果的な展示をおこなうため入手の難しい極北毛皮資料の寄贈を受け入れた。
- 収蔵点数の少ないロシア・極北の資料を充実させ、より効果的な展示をおこなうためロシア極北のチュクチの毛皮等資料の寄贈を受け入れた。
- 中央・北アジア展示新構築へ向けて、ウズベキスタンの長衣や帽子などの衣装を受け入れた。ウズベク、トルクメン、キルギス（クルグズ）など多様な民族の帽子が含まれており、各民族の暮らしの特徴を伝える資料である。新展示公開後のワークショップなどで活用を予定している。
- 中央・北アジア展示新構築へ向けて、ソ連時代のウズベキスタン観光絵葉書を受け入れた。1980年代のタシケント市の様子が分かる貴重な資料で、日本人抑留者が建設に携わったナヴォイ劇場などの建物の絵葉書も含まれている。
- 中央・北アジア展示新構築へ向けて、モンゴル国で現在使われている仏具などを受け入れた。「モンゴル」セクションの「仏教とシャマニズム」サブセクションで、仏教の現在を示す資料として活用される。
- 国立民族学博物館所蔵資料として、カムイノミ関連の儀礼具等資料の寄贈を受け入れた。
- 端信行氏が1960～90年代にかけてアフリカ各地で調査した際に撮影した民族誌写真6,974枚と映像記録2作品の寄贈を受け入れた。
- 本館のモンゴル地域の資料の充実、特にモンゴルの都市生活に関する日用品を補うことを図る目的でモンゴル生活道具資料を受け入れた。とくに、チンギス・ハーンの商標を用いたモノは、現代におけるチンギス・ハーンの文化表象について明示する貴重な学術資料である。
- 国立民族学博物館所蔵資料として「マダガスカル生活道具資料」の寄贈を受け入れた。変化の著しいマダガスカルの生活文化を知るうえで貴重であり、2008年から2009年にかけておこなわれた標本資料収集を補完した。
- 中央・北アジア資料を充実させるため、ウズベキスタンの刀剣の寄贈を受け入れた。この刀剣は、過去に寄贈を受け入れたウズベキスタンの衣装とセットで、祝典で用いられたものである。中央アジアで刀剣が男性の装身具として重要であることを示す、貴重な資料である。
- 国立民族学博物館所蔵資料として、日本トカラ列島（口之島）編組品（かごなど）の資料を受け入れた。すでに民博所蔵となっている、1934年に洪沢敬三らアチックミュージアムが同じ口之島で収集したものと比較することで、80年近くもの時間的経過が生活などに与えた影響を知ることができる。
- 竹製和竿であるヤマメ釣り用の釣竿を標本資料として受け入れた。もはやほとんど製作されていない様式であり、多くの釣竿が振り出し式になってしまったこんにち、本資料のような継ぎ竿はめずらしく、手づくりの道具で川漁をおこなっていたようすを語る資料として貴重である。
- 公益社団法人北海道アイヌ協会（旧・社団法人北海道ウタリ協会）の活動の記録をまとめた『アイヌ史 活動編』をはじめ、機関誌『先駆者の集い』や「国際先住民の日」ポスターなど、活動の節目となったイベントに関する印刷物の寄贈を受け入れた。
- 「アイヌの文化」展示の新構築で、現代のアイヌ民族の文化復興の運動について紹介するため、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が編集・発行しているさまざまなアイヌ語学習教材の寄贈を受け入れた。
- 「アイヌの文化」展示新構築で、現代のアイヌ民族の権利回復や文化復興の運動について紹介するため、そ

の先駆者として活躍した人物の著作と、文化継承にも寄与した観光に関する書籍やみやげ品を展示するために受け入れた。

- 日韓外交正常化50周年を記念して開催した特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」において、日清食品ホールディングズより借用し展示した、日本の食文化を代表するラーメンの屋台の寄贈を受け入れた。
- 国立民族学博物館所蔵資料として、韓国における民族衣装である「韓服」、ことに男児、女児用の子ども儀礼にかかわる衣裳を受け入れた。
- 東日本大震災で被災した斎藤報恩会博物館の閉館にともない、斎藤報恩会が戦前に学術助成をした南洋学術調査隊がヤップ島で収集した石貨3点の寄贈を受け入れた。
- 本館常設展「朝鮮半島の文化」を新構築するに際し、「韓国 トル儀礼用品」の寄贈を受け入れた。伝統的なものと現代的なものが混在していることが韓国人の観覧者から問題視されていた点を解消するために寄贈されたものである。
- 中央・北アジア展示新構築に向けて、「中央アジア」セクションの「カザフ草原の暮らし」の定住家屋の内部再現のため、枕カバーを受け入れた。枕はクッションとしても用いられ、カバーには多様なパッチワークが施される。天幕内でも定住家屋内でも使われており、現地の暮らしの変化と連続性を示す資料の一部として展示場で活用される。
- 新構築にふさわしい、新規資料の展示となるため「モンゴル 馬乳酒用の壺」の寄贈を受け入れた。
- 京都の彫金師である園幸雄氏が使用していた彫金用具一式について、2014年度の映像番組制作、2015年度の聞き取り調査の整理の完了をもって、標本資料として受け入れた。
- 東北地方の神楽を中心に研究してきたドイツ人研究者ギュンター・ツォーベル氏がこれまでの東北地方の神楽調査で収集された神楽面等の寄贈を受け入れた。本館で収蔵することにより、現在注目度が高まっている東北地方の芸能研究の一助をなすことができる。
- 国立民族学博物館所蔵資料として、中牧弘允本館名誉教授が在職中に収集した世界各地のカレンダーの寄贈を受け入れた。

2) 展示・社会連携分野

巡回展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

2014年2月～6月に国立新美術館にて、また同年9月～12月に本館特別展として実施した「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」展の巡回展を、福島県の郡山市立美術館にて開催した。

館外企画展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」

2013年度7月から11月にかけて民博企画展として開催し、大きな社会的反響を呼んだ「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」展を、2015年10月17日から11月23日まで、東京藝術大学大学美術館にて開催した。

新構築した中国地域の文化展示場の部分改修

2013年度末に新構築した中国地域の文化の展示場に関して、その後の点検を経て、修正が必要と判断された諸点につき部分改修をおこない、展示内容の改善をはかった。

新構築した「朝鮮半島の文化」展示の部分改修

2013年度に新構築した本館展示「朝鮮半島の文化」展示の構成およびデザインの一部を、観覧者アンケートおよび館外の専門家から寄せられた意見にもとづき、より効果的なものに改めた。具体的には、「住の文化」セクションと「知の文化」セクションを、より親しみやすいものにした。かつ全体で、解説パネルを計5枚、写真パネルを6枚、案内パネルを4枚追加した。表記に問題があった解説パネルも、4枚修正した。また、来館者からの要望に応え、展示内のモニターで提供している展示解説映像について、英語版と中国語版を作成し、利用できるようにした。

日本の文化展示「沖縄の暮らし」、「多みんぞくニホン」の部分改修

日本の文化展示場のなかで、「沖縄の暮らし」、「多みんぞくニホン」セクションの部分の改修について、写真パネルの修正、来館者がふれることによる損傷事故を防ぐための演示方法の修正をはじめとする作業をおこなった。

ワークショップの実施ならびにワークシートの運用

民博でおこなわれている各種研究活動ならびに展示の内容を、来館者を中心とした利用者に、より効果的、効率的に理解してもらうと同時に、一般利用者からの様々な意見や情報を民博内にフィードバックさせることを目的としたワークショップの実施、ならびに展示新構築にともなうワークシートの更新作業やワークシート新

規作成に向けた調査などを実施した。

ボランティア活動支援

国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体である MMP（みんなくミュージアムパートナーズ）の活動支援をおこなった。

3) その他

年末年始展示イベント「さる」

年末年始期において干支を題材にした展示ならびに関連催事をおこない、来館者に季節感を伝えるとともに、世界各地の「さる」と人びとのかかわりを示し、民博の教職員を対象にした、展示目的・構成の設定から展示資料の選定、および展示に至る活動の研修をおこなった。

4. 情報管理施設のプロジェクト的な業務

「情報管理施設のプロジェクト的な業務」は、情報管理施設が実施する文化資源に関する研究支援業務である。

みんなく映像民族誌の作成及び配付

民博製作のビデオトーク番組や研究映像から11本を選び、みんなく映像民族誌第18集～第21集として4枚のDVDにまとめた。これを800セット製作し、図書館や研究機関などに配布したほか、テーマに応じ個別のDVDを学会等684カ所に配布した。

標本資料の撮影等業務

標本資料を研究、展示、情報提供等に有効利用するために、4,715件の撮影、計測、画像の利用及びそれらに付随する業務をおこなった。

〈実施内容〉フォーラム型情報ミュージアム関連資料、新構築に係る東南アジア、南アジア展示場撤去資料、アイヌの文化、中央・北アジア展示場の撤去資料及び新規展示資料、2015年度新規受け入れ資料等常設展示場新構築撤去資料の点検・クリーニング・再配架及びデータ整理作業

2014年度の新構築（東南アジア展示、南アジア展示）にともない撤去された約1,850点の資料の状態のチェック（点検）、長期間展示されていた資料に関する情報のデータ作成および適切なクリーニングをおこない、収蔵庫に再配架した。

第3収蔵庫収蔵資料の配架見直し及び再配架作業

当初2015年度の実施を予定していたが、より緊急性の高い第1収蔵庫再配架作業に注力するため、2016年度に改めて実施することとなった。

標本資料の補修・保存処理

現在、常設展示場で展示されている資料の点検や、資料の他館への貸出等での資料点検の際に発見される資料の破損、汚損などの異常に対して、適切な処理を随時おこなった。また、新構築あるいは特別展・企画展に選定された資料、緊急に補修する必要がある資料などの補修をおこない、資料を展示可能な状態に復した。

みんなくく運用・保守

147の学校や社会教育施設に、延べ201回の貸出をおこなった。また、貸出先での紛失や破損にともなう補修、老朽化した資料の交換等をおこなった。

8 国際学術交流室

設置目的

国際学術交流室（英語名 Center for International Academic Exchange）は、組織的な国際交流を円滑に進めることを目的として、2010年4月に設立された。

本館は、創設以来グローバルな視野をもち、積極的に海外の研究機関や研究者と連携、協力しながら研究活動と博物館活動を行ってきた。国際学術交流という点では大学共同利用機関の中でも先駆的な役割を果たしてきたといえるであろう。

20世紀末に始まった情報通信技術革命は、国際的な情報交換のスピードと量を飛躍的に増大させた。その結果、本館の国際的な活動はもはや個人の努力や関係では処理しきれない状態となり、組織的、戦略的な国際交流が求められている。国際学術交流室は、これまで蓄積されてきた海外の研究機関、研究者との関係を活かしつつ、本館がより戦略的、より組織的に国際的な研究連携や共同研究を推進するために、以下のような活動を行っている。

機能

国際的な学術交流の戦略策定

- ・学術交流のガイドライン策定
- ・海外の研究機関との研究連携、研究協力の推進についての検討

学術協定の締結および協定に基づく研究交流事業の推進

- ・学術協定の締結の準備支援、協定書の翻訳・校閲
- ・学術協定内容についての審議
- ・協定に基づく研究交流事業の支援
- ・協定に基づく事業の年度計画書、年度報告書の受付と検討
- ・国際シンポジウム・国際共同研究・国際連携展示などの支援
- ・海外からの協定締結の申し出、問い合わせに対する対応

外国人研究者に対する支援

- ・外国人客員教員、機関研究の外国人共同研究員、海外からの外来研究員などの受け入れの支援
- ・外国人研究者向けみんぱく利用マニュアル *Guide for Visitors* の作成・改訂

その他国際学術交流に関すること

- ・広報・展示関連の翻訳・校閲
- ・英文要覧、英語版HP、*MINPAKU Anthropology Newsletter* の発行
- ・みんぱくフェローズの名簿のデータ管理、*MINPAKU Anthropology Newsletter* のフェローズへの発送
- ・みんぱくが発行する刊行物等において使用する英語表記の検討

国際学術交流事業の評価資料のとりまとめ

- ・国際学術交流事業の業務実績報告書、自己点検報告書等の資料とりまとめ

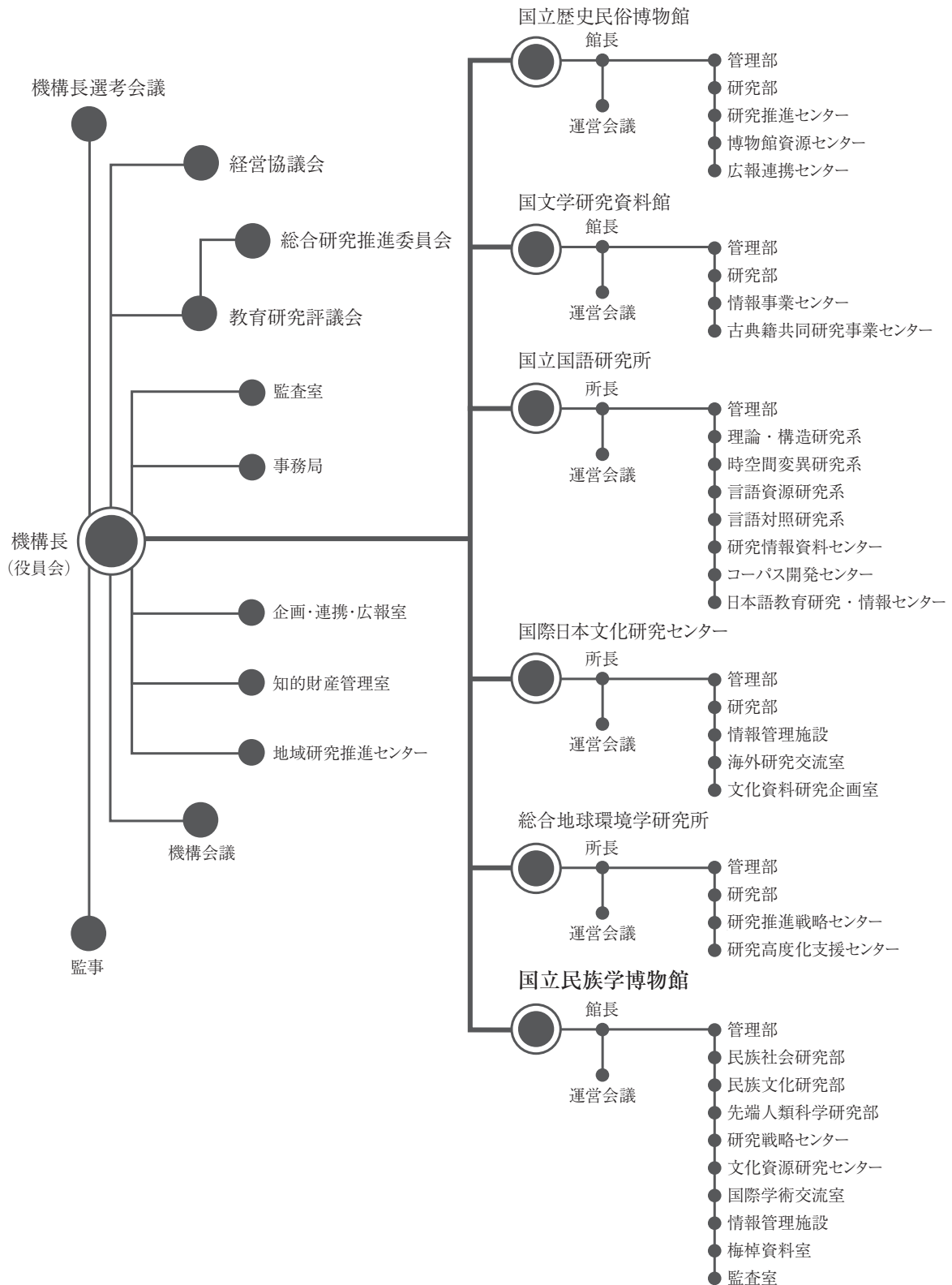
2015年度活動内容

- 1) 学術協定に基づく活動2014年度報告書ならびに2015年度計画書の確認。
- 2) 研究連携や研究協力のために、海外の研究機関との協定について、調査・準備を進めた。2015年度は、10月に台湾・国立台湾歴史博物館、1月に米国・ヴァンダービルト大学との協定を新規に締結した。
- 3) 2015年度に国際学術交流室を通して行った翻訳校閲件数は以下の通り。
翻訳 2件 校閲 67件
- 4) 外国人研究員8名の受け入れ手続きを行った。
- 5) 英語版ホームページを改訂した
- 6) 本館組織の英語名称の作成・変更の検討を行った。
- 7) *MINPAKU Anthropology Newsletter* を2回発行し、みんぱくフェローズへ発送した。

9 人間文化研究機構

人間文化研究機構は、本館を含む 6つの大学共同利用機関を設置し、各機関において人間の文化活動並びに人間と社会および自然との関係に関する基盤的研究を進めるとともに、各機関の連携協力を通して、人間文化に関する総合的で多様な研究を展開させ、学術文化の進展に寄与することを目指す。

組織構成図 (2016年3月31日現在)



運営組織 (2016年3月31日現在)

●役員

機構長	立本成文
理事	平川 南
理事	小長谷有紀
理事	今西祐一郎
理事	榎原雅治
監事	広渡清吾
監事	駒形圭信

●経営協議会

立本成文	人間文化研究機構長
平川 南	人間文化研究機構理事
小長谷有紀	人間文化研究機構理事
今西祐一郎	人間文化研究機構理事(併)国文学研究資料館長
榎原雅治	人間文化研究機構理事
久留島 浩	国立歴史民俗博物館長
影山太郎	国立国語研究所長
小松和彦	国際日本文化研究センター所長
安成哲三	総合地球環境学研究所長
須藤健一	国立民族学博物館長
稲盛豊実	稲盛財団専務理事
岩男壽美子	慶應義塾大学名誉教授
大原謙一郎	大原美術館理事長
佐村知子	内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局地方創生 総括官補
高村直助	東京大学名誉教授
武田佐知子	追手門学院大学教授
永井多恵子	ジャーナリスト
藤井宏昭	国際交流基金顧問
藤岡一郎	京都産業大学名誉教授
宮崎恒二	東京外国語大学理事
望月規夫	讀賣テレビ放送株式会社代表取締役社長
小池良高	事務局長

●教育研究評議会

立本成文	人間文化研究機構長
平川 南	人間文化研究機構理事
小長谷有紀	人間文化研究機構理事
今西祐一郎	人間文化研究機構理事(併)国文学研究資料館長
久留島 浩	国立歴史民俗博物館長
影山太郎	国立国語研究所長
小松和彦	国際日本文化研究センター所長
安成哲三	総合地球環境学研究所長
須藤健一	国立民族学博物館長
藤尾慎一郎	国立歴史民俗博物館副館長
寺島恒世	国文学研究資料館副館長
木部暢子	国立国語研究所副所長
井上章一	国際日本文化研究センター副所長
佐藤 哲	総合地球環境学研究所副所長
岸上伸啓	国立民族学博物館副館長
大塚柳太郎	自然環境研究センター理事長
窪田幸子	神戸大学大学院国際文化学研究所教授
酒井啓子	千葉大学法政経学部教授
佐藤宗諄	奈良女子大学名誉教授
佐藤友美子	追手門学院大学特別任用教授
野家啓一	東北大学教養教育院総長特命教授
森 正人	熊本大学名誉教授
吉田和彦	京都大学大学院文学研究科教授

国立民族学博物館（民博）には、総合研究大学院大学（総研大）の文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）が設置されている。総研大は、学部を持たない大学院博士課程だけの国立大学法人で、大学共同利用機関の人材と研究環境を基礎とし、各機関の行っている高度の研究活動に密着した教育・研究を行っている。民博に基盤をおく2専攻は、長期のフィールドワークで得られた資料に基づき博士論文を作成することを目的とし、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールを通して、広い視野を持った人間性豊かな研究者の養成をめざしている。

本年度の文化科学研究科長は、日本歴史研究専攻（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館に設置）の小島道裕がその任にあたり、地域文化学専攻長は横山廣子、比較文化学専攻長は笹原亮二が務めた。

●葉山キャンパス・文化科学研究科の動き

2015年度は、総研大も国立大学法人化12年目を迎えた。

葉山本部において、入学式に続いて合宿によって行う全学総合教養教育プログラム（フレッシュマン・コース）は、本年度は、4泊5日にわたって実施されたが、地域文化学専攻ならびに比較文化学専攻からは新入生3名が参加した。

文化科学研究科においては、かねてより連携強化が図られ、2005年度から文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアティブ」事業として専攻を横断して「総合日本文化研究実践教育プログラム」が2ヵ年実施された後、2007年度より「文化科学研究科連携事業」が始まり、民博物に基盤を置く2専攻もこれに参加してきた。本年度の連携事業としては、査読付き学術雑誌『総研大文化科学研究』第12号が刊行され、地域文化学専攻在籍生の研究ノート3点が掲載された。また、「学術交流フォーラム 2015 文学際——『文化科学』を発見する」が2015年11月21、22日に日本文学専攻の基盤機関である国文学研究資料館で開催され、地域文化学専攻、比較文化学専攻の1年次生各1名が学生企画委員として、その企画・準備・運営に携わった。さらに「学術資料マネジメントコース」として、文化科学研究科の各基盤機関が所蔵する学術資料を活用し、高度な知識と技術の習得ができる授業が開講されており、本年度は比較文化学専攻の岸上伸啓教授による「学術映像の基礎 むる・つくる2015——映像による科学の展望」、園田直子教授による「文化資源研究特講」が開講された。

第60回教授会（2015年9月18日）において地域文化学専攻から1名の課程博士、1名の論文博士、第61回教授会（2016年2月26日）において地域文化学専攻から2名の課程博士の課程博士の学位授与が承認された。

●教員の異動

2016年4月1日付で、伊藤敦規准教授が地域文化学専攻担当に、卯田宗平准教授が比較文化学専攻担当になった。

朝倉敏夫教授と杉本良男教授は民博の定年退職に伴って2016年3月31日付で総研大の併任解除となった。

佐々木史郎教授は民博の退職に伴って総研大の併任解除となった。

●学位の授与

【課程博士】

金 桂淵（地域）『韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民族誌的研究——韓国華僑ビジネスと華僑協会を中心に』[文学]

〔審査委員〕横山廣子、朝倉敏夫、太田心平、林 史樹（神田外国語大学教授）、陳 天璽（早稲田大学准教授）

〔予備審査委員〕韓 敏、横山廣子、太田心平

金 セツピョル（地域）『日本社会の自然葬に関する民族誌的研究

——NPO法人「葬送の自由をすすめる会」を中心に」[文学]

〔審査委員〕新免光比呂、出口正之、山田慎也（歴博）、村上興匡（大正大学教授）、中牧弘允（国立民族学博物館名誉教授）

〔予備審査委員〕朝倉敏夫、鈴木七美、山田慎也（歴博）

今中崇文（地域）『都市回族コミュニティの維持と宗教実践

——中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究』[文学]

〔審査委員〕塚田誠之、横山廣子、山中由里子、西澤治彦（武蔵大学教授）、松本ますみ（室蘭工業大学教授）

〔予備審査委員〕塚田誠之、韓 敏、山中由里子

【論文博士】

CHU XUAN GIAO (地域) 『ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成
——東北地方のヌン・アン集団の事例から』 [文学]

〔審査委員〕 檜永真佐夫、塚田誠之、横山廣子、中西裕二（日本女子大学教授）、末成道男（東洋大学客員研究員）、田村克己（総合研究大学院大学理事）

〔予備審査委員〕 塚田誠之、韓 敏、檜永真佐夫

なお、これまでに学位論文を単行本として、『研究年報2014』掲載以降に刊行したものは、以下のとおりである。
小河久志（2012年〔平成24年〕3月課程博士）

2016年 『「正しい」イスラームをめぐるダイナミズム タイ南部ムスリム村落の宗教民族誌』 大阪大学出版会

●学生の就職状況

学生の受入を開始した1989年以来、2016年3月末日までに地域文化学専攻・比較文化学専攻を巣立った123名の修了生および退学生のうち、合計64名が常勤の教育研究職に就いた。内訳は、国立大学20名、公立大学7名、私立大学29名、海外等その他の機関5名、歴博1名、民博2名である。

●入学者選抜試験

2016年度入学者の選抜試験には、地域文化学専攻2名、比較文化学専攻4名、計6名の志願者があり、地域文化学専攻2名、比較文化学専攻3名、計5名の合格者を第61回教授会において決定し、3名が入学手続きをとった。入学定員（各専攻3名）に対する出願者の倍率は累計平均より低めの1.2倍であった。合格者、「志望研究題目」、（主任指導教員、副指導教員）は以下の通りである。

【比較文化学専攻】

八木風輝

「中央アジアにおけるカザフ民族音楽の越境的な形成と実践に関する文化人類学的研究」（寺田吉孝、福岡正太）
既立

「コスプレの仕組みと文化的意味に関する人類学的アプローチ——名古屋における世界コスプレサミットの事例から」（韓 敏、竹沢尚一郎）

SAKUMA SIARHEI

「中国人留学生と元留学生の文化変容——関西地域を中心に」（韓 敏、太田心平）

2016年度入学者も、ここ数年と同様、研究対象である現地での経験を持つ者が多い。出身大学院の内訳は、国立1名、海外2名で出身大学院の地方別では、近畿、海外となっている。

2016年3月現在、地域文化学専攻と比較文化学専攻それぞれに11名と16名、あわせて27名が在籍しているが、このうち3年次以上には両専攻あわせて13名がいる。これは、教育研究の柱としてある長期のフィールドワークにそれぞれの学生が出かけているためである。

2015年度は、館内でのオープンキャンパス（大学説明会／2000年度から開催）は、10月12日にセミナー室や大学院院生室等で開催し、総研大および民博の概要説明、施設見学、在学生・修了生・教員との懇談等が行われた。2015年度の参加者は14名で、近畿、関東、東北、海外からの参加と多岐にわたった。

●日本学術振興会特別研究員（DC2）への採用

2015年度は地域文化学専攻の今井彬暁、白 福英が日本学術振興会の特別研究員（DC2）に採用された。また、2015年に申請した2016年度特別研究員採用者として比較文化学専攻の荘司一歩、松岡とも子の計2名が内定を獲得した。

●地域文化学専攻・比較文化学専攻教員数（2016年3月現在）

専攻	専攻長	担当教員数
地域文化学専攻	1	23（基盤機関の長である民博館長を含む）
比較文化学専攻	1	22

●地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生（2016年3月現在）

専攻	入学定員	現員			計
		1年次	2年次	3年次	
地域文化学専攻	3	2	3	6	11
比較文化学専攻	3	4	5	7	16

●年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
1991（平成3）年度			1		1
1992（平成4）年度					0
1993（平成5）年度			1	1	2
1994（平成6）年度	2		1		3
1995（平成7）年度	2		1		3
1996（平成8）年度		3			3
1997（平成9）年度	3		4		7
1998（平成10）年度	4	2			6
1999（平成11）年度					0
2000（平成12）年度	2		2	1	5
2001（平成13）年度	1	1	2	1	5
2002（平成14）年度	1	1		2	4
2003（平成15）年度					0
2004（平成16）年度	2	3			5
2005（平成17）年度	4	2		2	8
2006（平成18）年度	2		3		5
2007（平成19）年度	2	1	3		6
2008（平成20）年度	1		1		2
2009（平成21）年度		1	1	1	3
2010（平成22）年度	2		2	3	7
2011（平成23）年度	3		1	1	5
2012（平成24）年度	1	1	1	1	4
2013（平成25）年度			1	1	2
2014（平成26）年度	2	1	2		5
2015（平成27）年度	3	1			4
計	37	17	27	14	95

●研究部の人事異動

• 2015年4月1日

民族社会研究部教授	庄司博史	2015年3月31日	定年退職
民族文化研究部教授	八杉佳穂	2015年3月31日	定年退職
文化資源研究センター教授	久保正敏	2015年3月31日	定年退職
文化資源研究センター教授	久保正敏	2015年3月31日	副館長(企画調整担当)・情報管理施設長・梅棹資料室長併任解除
民族社会研究部教授	韓 敏	2015年3月31日	民族社会研究部長併任解除
研究戦略センター教授	塚田誠之	2015年3月31日	研究戦略センター長併任解除
文化資源研究センター助教	寺村裕史	2015年4月1日	新規採用
民族社会研究部教授	關 雄二	2015年4月1日	研究戦略センターより配置換
研究戦略センター准教授	南真木人	2015年4月1日	文化資源研究センターより配置換
文化資源研究センター教授	吉田憲司	2015年4月1日	副館長(企画調整担当)・情報管理施設長・梅棹資料室長併任
民族社会研究部教授	西尾哲夫	2015年4月1日	民族社会研究部長併任
研究戦略センター教授	鈴木七美	2015年4月1日	研究戦略センター長併任

• 2015年10月1日

先端人類科学研究部准教授	卯田宗平	2015年10月1日	新規採用
--------------	------	------------	------

• 2016年1月1日

研究戦略センター教授	樫永真佐夫	2016年1月1日	研究戦略センター准教授より昇任
研究戦略センター准教授	伊藤敦規	2016年1月1日	研究戦略センター助教より昇任

●来館者抄 (役職名・肩書きについては来館当時のもの)

2015年

4月3日	Roderick Ewins (オーストラリア、タスマニア大学アート&ビジュアルコミュニケーション准教授)
4月8日	河野泰之 (京都大学東南アジア研究所所長・教授)、原正一郎 (京都大学域研究統合情報センター高次情報処理研究部門センター長・教授)
4月9日	Ramson Lomatewama (アメリカ、ガラス作家・カチーナ人形作家)、Bendrew Atokuku (アメリカ、カチーナ人形作家)、Merle Namoki (アメリカ、宝飾品作家)
4月22日	坂井東洋男 (追手門学院大学学院長・学長)、河合博司 (同 教授・機構長)、橋本裕之 (同 教授)、有田裕貴 (同 大学事務課係長)、塩田純一 (同 広報課)、立石正彦 (同 総務部)
5月2日	金井政明 (株式会社良品計画代表取締役社長)、松枝展弘 (株式会社良品計画無印良品グランフロント大阪店長)、森本直樹 (株式会社イデア企画デザイン室マネージャー・アートディレクター)
5月8日	北迫 晃 (公益財団法人大同生命国際文化基金専務理事)、市村秀史 (同 事務局長) 喜味家たまご (カレッジシアター「地球探究紀行」MC)、津田慎一 (和光プロダクション)
5月18日	片山 啓 (特定非営利活動法人 アジア経済知識交流会常務理事)
5月21日	ステパノフ・ユーリー・ポリソヴィッチ (ロシア、在大阪ロシア連邦総領事館領事)、加藤九祐 (本館名誉教授)、大野 遼 (NPOユーラシアンクラブ会長)、井出晃憲 (同 事務局長)、宮尾 亨 (新潟県立歴史博物館学芸員)、畠山 禎 (横浜ユーラシア文化館学芸員)、ドゥルジニナ・ニーナ・イグナチエヴナ (ロシア、シカチアリヤン村村長)、ドンカン・ヴィクトリヤ・レオンチエヴナ (同 中学校教諭)、アクタンカ・ナターリヤ・アレクサンドロヴナ (同 生徒 (パフォーマー))、オネンコ・アナスタシヤ・ミハイロヴナ (同 生徒 (パフォーマー))、チェルノバ・ニーナ・セルゲエヴナ (同 生徒 (パフォーマー))、ドンカン・チモフェイ・ペトロヴィチ (同 生徒 (パフォーマー))、パッサール・ヴラジスラフ・アレクセエヴィチ (同 生徒 (パフォーマー))
5月22日	横尾能範 (有限会社シニアケア代表取締役・神戸大学名誉教授)、Michael O'Loughlin (オーストラリア) 川嶋太津夫 (大阪大学未来戦略機構教授) 小山 寛 (内閣官房アイヌ総合政策室参事官)、阿部禎辰 (同 参事官補佐)、斎藤裕紀 (同 主査)
6月1日	西田清徳 (株式会社海遊館取締役・海遊館館長)、小畑 洋 (株式会社海遊館ニフレル事業部ニフレル事業部長・ニフレル館長)、土井啓行 (株式会社海遊館ニフレル事業部展示企画チームマネージャー)
6月1日	金 相文 (公益財団法人とよなか国際交流協会事務局長)、山本 愛 (同 総括主任)

- 6月9日 Rithy PANH (カンボジア、ポバナセンター代表)、Kazumi ARAI (カンボジア、同 コミュニケーション・ディベロップメントオフィサー)
- 6月23日 Gabriel J. K. Dusava CBE (パプアニューギニア、パプアニューギニア大使館駐日特命全権大使)、Benjamin Kamil (パプアニューギニア、同 二等書記官)、佐藤真由美 (大阪芸術大学教員)
- 7月1日 岡松卓也 (日本経済新聞社大阪本社編集局社会部文化グループ編集委員)、竹内義治 (同 文化担当部長)
矢追 武 (大阪府府民文化部万博記念公園担当理事)、石田幸祐 (同 万博記念公園担当副理事)、田中一人 (同 府民文化総務課参事)
- 7月2日 Kim Kyongkyun (韓国、Korea National University of Arts、School of Visual Arts Design Department 教授)、Kang Byung In (韓国、Kang Byung In Calligraphy Institute Sooltong 書道家)
- 7月7日 Charles Cointreau (フランス、ル・コルドン・ブルー・インターナショナル アジア代表)、Olivier Gaetan Voisin (フランス、ル・コルドン・ブルー・ジャパン代表取締役)、Lindsey Bridges (フランス、同 ビジネスディベロップメントマネージャー)、浅野由佳理 (同 ビジネスディベロップメント アシスタントマネージャー)、栗山和子 (ル・コルドン・ブルー・ジャパン神戸校 PR・コミュニケーション&イベント)、井澤裕司 (立命館大学総合企画室副室長・経済学部教授)、森本康太郎 (同 総合企画部総合企画課長)
- 7月9日 Catherine Kingfisher (カナダ、レスブリッジ大学人類学部教授)
Patporn Phoothong (タイ、サイアム国立博物館研究員)
- 7月13日 Francis B. Nyamnjoh (南アフリカ、ケープタウン大学社会人類学部教授)
- 7月14日 敷田信之 (関西テレビ社長室 経営戦略部)、喜多 隆 (関西テレビ事業局局長)、西垣美紀 (同 事業推進部長)、染井英希 (同 事業部長)
- 7月16日 仁井裕幸 (公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団専務理事)
- 7月17日 田村克己 (国立大学法人 総合研究大学院大学理事)
- 7月21日 中村かれん (アメリカ、イェール大学人類学部准教授)
- 7月30日 顧 群 (中国、中国民族博物館館長)、唐 啓山 (中国、株式会社 日中交流中心代表取締役社長)、張 学軍 (中国、中国民族博物館項目建設弁公室副主任)、唐 蘭冬 (中国、同 研究展覧一部副主任)、邱 先鵬 (中国、同 収蔵部館員)、岳 小莉 (中国、同 信息中心副主任)
- 7月31日 阮 雲星 (中国、浙江大学公共管理学院政治学系教授・浙江大学人類学所常務副所長)
- 8月3日 宮崎広和 (アメリカ、コーネル大学東アジアプログラム・人類学科所長・教授)
山内富美子 (特定非営利活動法人 モデイス・ムジカインターナショナル理事長)
- 8月5日 周 紅雲 (中国、中央編訳局世界発展戦略研究部副部長・研究員)、龍 寧麗 (中国、同 世界発展戦略研究部社会発展研究科副科長・副研究員)、顧 海燕 (中国、同 世界発展戦略研究部社会発展研究科副研究員)、馬 瑞 (中国、同 世界発展戦略研究部社会発展研究科助理研究員)、俞 祖成 (中国、同志社大学大学院総合政策科学研究科助手)
- 8月6日 Joe A. Springer (アメリカ、ゴシェン大学メノナイト歴史図書館館長)、Jo-Ann A. Brant (アメリカ、ゴシェン大学宗教学科教授)
- 8月26日 千 鎮基 (韓国、韓国国立民俗博物館館長)、尹 端石 (韓国、韓国食生活文化学会顧問)、安 明秀 (韓国、サンシン女子大学名誉教授)、趙 厚鍾 (韓国、ミョンジ大学校)、守屋亜記子 (女子栄養大学栄養学部食文化栄養学科准教授)、河 泰允 (韓国、駐大阪大韓民国総領事館総領事)、朴 英恵 (韓国、大韓民国総領事館文化院長)、小泉潤二 (大阪大学未来戦略機構第一部門特任教授)、稲葉 修 (株式会社 広栄社つまようじ資料室会長)、岩崎雅明 (株式会社 いわさき代表取締役社長)、小西池透 (大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所所長)、齋藤文秀 (キッコーマン国際食文化研究センターセンター長)、長島宏行 (キッコーマンもの知りしょうゆ館館長)、平尾豊徳 (公益財団法人 味の素の文化センター副理事長)、村岡由隆 (株式会社 村岡総本舗取締役副社長)、正籬 聡 (NHK 大阪放送局長)
- 9月11日 Carlos Fernando ALMADA LÓPEZ (メキシコ、メキシコ大使館駐日特命全権大使)、Alejandro Basáñez (メキシコ、同 一等書記官文化担当官)、三好 勝 (同 翻訳官)、鈴木貞二 (積水ハウス梅田オペレーション株式会社 代表取締役社長)、Mara Madero de Almada (メキシコ)、程野和美 (日本)
- 9月16日 脇村伸太郎 (株式会社 良品計画販売部近畿西エリア1ブロック ブロック店長・無印良品アクタ西宮店長・無印良品ららぽーと EXPOCITY 店長)、松枝展弘 (株式会社 良品計画無印良品グランフロン

ト大阪店長)

- 9月24日 永田 靖 (大阪大学総合学術博物館館長・大学院文学研究科演劇学研究室教授)、藤原 強 (大阪大学
広報・社会学連携オフィス 社会学連携課長)
- 10月13日 Regina F. Bendix (ドイツ、ゲオルク・アウグスト大学ゲッティンゲン文化人類学・ヨーロッパ民族
学研究所教授)
- 10月14日 縄田浩志 (一般財団法人片倉もところ記念沙漠文化財団理事・秋田大学国際資源学部教授)
- 10月30日 西川圭輔 (株式会社 日本経済研究所国際本部国際第二部主任研究員)
- 11月6日 狭間恵三子 (堺市副市長)、溝口勝美 (堺市博物館副館長)
- 11月10日 武内良樹 (近畿財務局長)、稲見寿夫 (財務省近畿財務局管財部次長)、池田 靖 (同 統括国有財産管
理官)
- 11月13日 立川敏章 (財務省理財局管理課国有財産情報室室長)
- 12月17日 高野 誠 (大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室URA チーム シニア・リサーチ・マネージャ
ー・特任教授)、伊藤京子 (大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室URA チーム リサーチ・アド
ミニストレーター・特任講師)

2016年

- 1月21日 清水侯二 (国土交通省北海道開発局営繕部長)、塚野和臣 (同 営繕整備課課長)
- 1月22日 Batbold Enkhtuvshin (モンゴル、モンゴル科学アカデミー総裁)、田畑伸一郎 (北海道大学スラブ・
ユーラシア研究センター長)、岡 洋樹 (東北大学東北アジア研究センター長)、今村弘子 (富山大学
極東地域研究センター長・教授)、Carol N. Gluck (アメリカ、コロンビア大学東アジア研究所教授)、
R. B. SINGH (インド、国際地理学連合副会長)、BATBAYAR Doljid (モンゴル、MONGORILA
MUSEUM OF ART 創設者)、Ramesh Chand (インド、National Institution for Transforming
India)、S. フレルバータル (モンゴル、駐日モンゴル国大使特命全権大使)、Nikolay N. KRADIN (ロ
シア、ロシア科学アカデミー極東支部上級研究員)
- 2月9日 Bancha Saenghira, F. S. G. (タイ、アサンブション大学学長・学院長)、Glen Chatelier (タイ、同 国
際部長)
- 2月16日 Bea Krenn (オランダ、アムステルダム大学研究費シニアアドバイザー)、Olga Gritsai (オランダ、同
研究費アドバイザー)
- 2月29日 Francois POUILLON (フランス、社会科学高等研究院アフリカ世界研究所研究指導名誉教授)
- 3月14日 Richard L. Burger (アメリカ、イェール大学人類学教授)
- 3月23日 石崎庸一 (三井不動産商業マネジメント株式会社 EXPOCITY オペレーションセンター所長)

索引

あ

アートル ジョン	241
相島葉月	264
朝倉敏夫	18、208
飯泉菜穂子	168
飯高伸五	182
飯田淳子	243
飯田 卓	82、204、264
池谷和信	44、258、264
石森大知	226
市田泰弘	175
伊藤敦規	102、206、219、264
岩谷洋史	265
市野澤潤平	245
印東道子	20、145
ウィルデ ギジェルモ	197
上羽陽子	126、228、264
宇田川妙子	34、264
卯田宗平	84、264
大杉 豊	183
太田心平	36、256、265
太田好信	232
大場千景	265
大森康宏	263
岡田浩樹	242
岡本尚子	265
小野林太郎	216
オルペイアン ゲヴォルグ	195

か

鏡味治也	233
加賀谷真梨	264
樫永真佐夫	97
金谷美和	264
金田純平	145、263
河合洋尚	113、264、269
川瀬 慈	139、217、264
川田牧人	234
菊澤律子	86、145、202、266
岸上伸啓	10、98、145、213、263
北原次郎太	173
金 昌鎬 (キム チャンホ)	192
窪田幸子	221
久保正敏	265
クマワット シヤーム スンデル	194
小長谷有紀	24
呉屋淳子	246
是澤博昭	235
近藤 宏	263

さ

齋藤 晃	77、145、229、263
齋藤 剛	244
齋藤玲子	69、215
相良啓子	158
佐々木史郎	78、253、264
笹原亮二	49、263
佐藤浩司	39
サム サムアン	196
シセ ママドウ	190
清水郁郎	176
新免光比呂	59
末成道男	170
末森 薫	147、265
菅瀬晶子	116、263
杉島敬志	222
杉本良男	51、218、264
鈴木七美	94、264
鈴木博之	264
鈴木 紀	61、264
須藤健一	8、263
関本照夫	178
關 雄二	26、264
園田直子	121、263

た

高城 玲	185
高野明彦	179
高橋晴子	265
竹沢尚一郎	53、264
竹村嘉晃	162
田中鉄也	263
陳 天璽 (チェン テイエンシ)	174
チュ スワン ザオ	189
塚田誠之	98、263
出口正之	55、257、263
寺田吉孝	74、257
寺村裕史	142、264
土佐桂子	217
戸田美佳子	150、263
豊山亜希	164、265

な

中生勝美	171
永田貴聖	153
長谷千代子	223
中野聡子	161、263
長野泰彦	237
中原聖乃	242
中村真里絵	263

西尾哲夫	16、264
丹羽典生	105、240、264
ネルム ポール	167
野林厚志	118、210、264
信田敏宏	124

は

長谷川 清	235
浜田明範	155、227、253、263
林 勲男	130、209
林 史樹	180
韓 敏 (ハン ミン)	22、145
比嘉夏子	265
日高真吾	132、263
平井京之介	100、264
廣瀬浩二郎	64、254
フィッシャー スーザン ドンナ	191
福岡正太	135、209
福岡まどか	224
藤本透子	72

ま

前川啓治	187
マシウス ピーター ジョセフ	29、145、256
松尾瑞穂	89、238、253
松平勇二	264
松田有紀子	263
丸川雄三	91、264
三尾 稔	107
三島禎子	39
南 真木人	111
宮本万里	265
森 明子	57、230、263
森田剛光	265

や

八木百合子	157、263
山田孝子	172
山中由里子	67、145、239、247、259
山本紀夫	264
山本泰則	138
横山廣子	32
吉江貴文	225
吉岡 乾	41、255、263
吉田憲司	13、126、145、263
吉田ゆか子	237、263

利用案内

・開館時間——10:00~17:00 [入館は16:30まで]

・休館日——水曜日 [水曜日が祝日の場合は、翌日が休館]
年末年始 [12月28日~1月4日]

・観覧料

区分	個人	団体 (20名以上) および割引※
一般	420円	350円
高校・大学生	250円	200円
小・中学生	110円	90円

特別展は、その都度別に定めます。

毎週土曜日は、小・中・高校生は無料で観覧できます。

(ただし、自然文化園 (有料区域) を通行する場合は、同園の入園料が必要です。)

障がい者手帳をお持ちの方は、付添者1名とともに無料で観覧できます。

日本文化人類学会会員及びICOM (国際博物館会議) 会員・日本博物館協会会員の方は、無料で観覧できます。(要会員証)

※以下の方々は、割引料金で観覧できます。

20名以上の団体、大学等*の授業でご利用の方、授業レポート等の作成を目的とする高校生、3か月以内のリピーター、満65歳以上の方 (要証明書等)

*大学等は、短大、大学、大学院、専修学校の専門課程

*なお、短大生・大学生・大学院生の方は、教員が同行し、当館の展示場で授業を行う場合は、事前にお申し込みいただくと、観覧料が無料になります。詳しくはお問い合わせください。自然文化園各ゲートで当館の観覧券をお買い求めの場合は、当館窓口で差額を返却いたします。

・お問い合わせ先——電話 (06) 6876-2151 (代表)

国立民族学博物館

みんぱくホームページ——<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱく facebook——<http://www.facebook.com/MINPAKU.official>

・交通案内

■大阪モノレールで「万博記念公園駅」または「公園東口駅」から徒歩約15分。

自然文化園 (有料区域) を通ってこられる場合、自然文化園各ゲート脇の券売機で当館の観覧券をお買い求めください。

同園内を無料で通行できます。また、「公園東口駅」からは、自然文化園 (有料区域) を通行せずに来館できます。

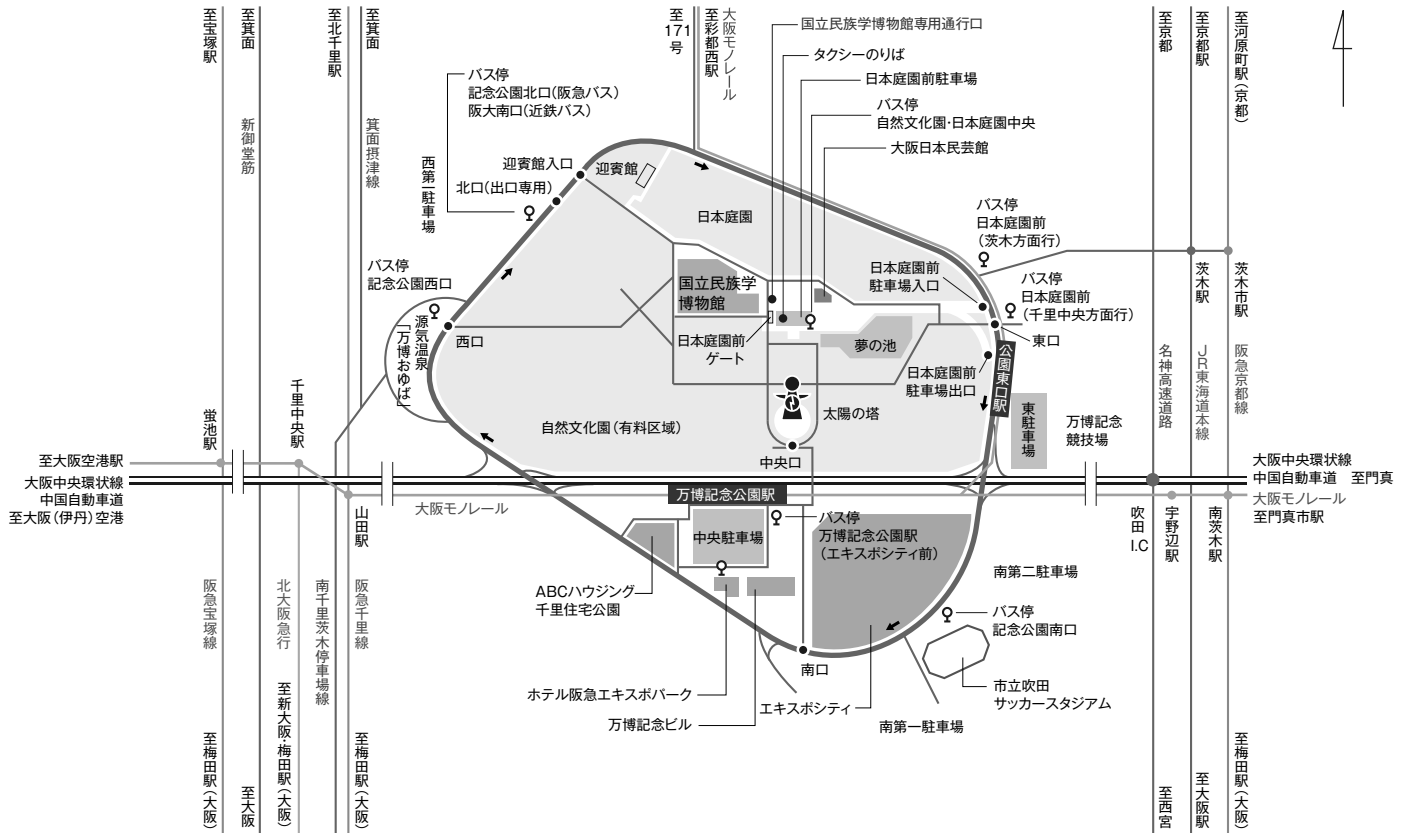
■バスで阪急茨木市駅・JR 茨木駅から、「日本庭園前」・「万博記念公園駅 (エキスポシティ前)」下車徒歩約13分。

■乗用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料) から徒歩約5分。

■タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

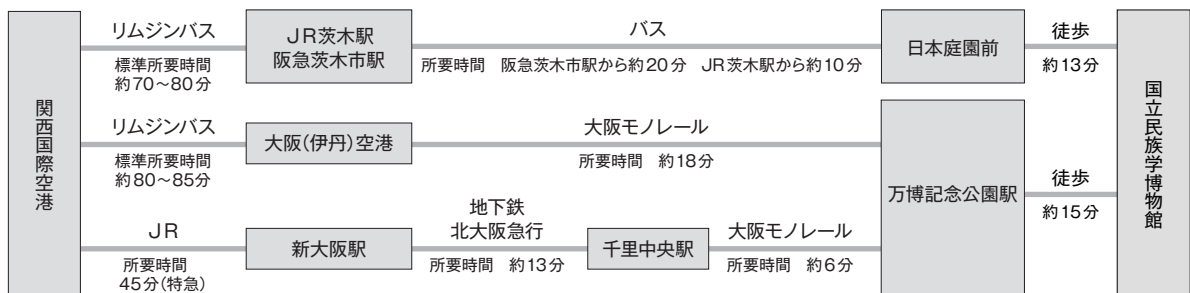
「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。

・周辺図



・主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段はいくつか方法がありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



[研究年報 2015]

編集———国立民族学博物館 研究戦略センター

発行———大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立民族学博物館

印刷———株式会社 遊文舎

発行日———2017年 2月15日
〈非売品〉